茨城県教育財団文化財調査報告第454集

つくば市

島名本田遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XXVⅡ

下　巻

令 和 3 年 1 月

茨　　城　　県
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第454集
島名本田遺跡　下　巻
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第454集

つくば市

島名本田遺跡

島名･福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XXⅧ

下　巻

令 和 ３ 年 １ 月

茨　　城　　県
公益財団法人茨城県教育財団

目　　次 － 下　巻 －

第３章第３節
３　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 279
(2) 掘立柱建物跡 …… 280
(3) 鍛冶工房跡 …… 308
(4) 鍛冶工房跡出土鉄滓の化学分析 …… 334
(5) 焼成遺構 …… 358
(6) 土　坑 …… 364
(7) 柱穴列 …… 377
(8) ピット群 …… 381
(9) 遺構外出土遺物 …… 383
４　室町・江戸時代の遺構と遺物 …… 385
(1) 方形竪穴遺構 …… 385
(2) 地下式坑 …… 385
(3) 井戸跡 …… 387
(4) 墓　坑 …… 389
(5) 土　坑 …… 391
(6) 段切状遺構 …… 406
(7) 柱穴列 …… 409
(8) 溝　跡 …… 410
(9) 道路跡 …… 427
(10) 遺構外出土遺物 …… 430
第４節　総　括 …… 432
写真図版 …… PL 1 ～ PL58
抄　録
付　図

挿 図 目 次 － 下　巻 －

第 237 図　奈良・平安時代の遺構配置図 …… 279
第 238 図　第３・４号掘立柱建物跡実測図 …… 281
第 239 図　第４号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 282
第 240 図　第５号掘立柱建物跡・出土遺物実測図 …… 283
第 241 図　第６号掘立柱建物跡実測図 …… 285
第 242 図　第６号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 286
第 243 図　第７号掘立柱建物跡実測図(1) …… 286
第 244 図　第７号掘立柱建物跡実測図(2) …… 287
第 245 図　第７号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 288
第 246 図　第８号掘立柱建物跡実測図 …… 289
第 247 図　第８号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 290
第 248 図　第９号掘立柱建物跡実測図 …… 291
第 249 図　第９号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 292
第 250 図　第 11 号掘立柱建物跡・第 194 ～ 196 号土坑実測図 …… 293
第 251 図　第 11 号掘立柱建物跡実測図 …… 294
第 252 図　第 11 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 295
第 253 図　第 12 号掘立柱建物跡実測図 …… 296
第 254 図　第 12 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 297
第 255 図　第 13 号掘立柱建物跡実測図 …… 298
第 256 図　第 13 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図 …… 299
第 257 図　第 14 号掘立柱建物跡実測図(1) …… 300
第 258 図　第 14 号掘立柱建物跡実測図(2) …… 301
第 259 図　第 14 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 302
第 260 図　第 15 号掘立柱建物跡実測図 …… 303
第 261 図　第 15 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 304
第 262 図　第 16 号掘立柱建物跡実測図 …… 305
第 263 図　第 16 号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …… 306
第 264 図　第 17 号掘立柱建物跡実測図 …… 307
第 265 図　第１号鍛冶工房跡実測図 …… 309
第 266 図　第１号鍛冶工房跡・出土遺物実測図 …… 310
第 267 図　第１号鍛冶工房跡出土遺物実測図 …… 311
第 268 図　第２号鍛冶工房跡実測図(1) …… 314
第 269 図　第２号鍛冶工房跡実測図(2) …… 315
第 270 図　第２号鍛冶工房跡出土遺物実測図 …… 316
第 271 図　第３号鍛冶工房跡・出土遺物実測図 …… 318
第 272 図　第３号鍛冶工房跡出土遺物実測図 …… 319
第 273 図　第４号鍛冶工房跡実測図 …… 320
第 274 図　第４号鍛冶工房跡出土遺物実測図 …… 321
第 275 図　第５号鍛冶工房跡実測図(1) …… 323
第 276 図　第５号鍛冶工房跡実測図(2) …… 324
第 277 図　第５号鍛冶工房跡実測図(3) …… 325
第 278 図　第５号鍛冶工房跡出土遺物実測図(1) …… 326
第 279 図　第５号鍛冶工房跡出土遺物実測図(2) …… 327
第 280 図　第６号鍛冶工房跡実測図 …… 328
第 281 図　第６号鍛冶工房跡出土遺物実測図 …… 329
第 282 図　第７号鍛冶工房跡・出土遺物実測図 …… 331
第 283 図　第８号鍛冶工房跡・出土遺物実測図 …… 332

第 284 図　第 8 号鍛冶工房跡出土遺物実測図 …… 333
第 285 図　第 138・139 号土坑実測図 …… 358
第 286 図　第 138 号土坑出土遺物実測図 …… 359
第 287 図　第 339 号土坑実測図 …… 359
第 288 図　第 339 号土坑出土遺物実測図 …… 360
第 289 図　第 356 号土坑・出土遺物実測図 …… 361
第 290 図　第 471 ～ 480 号土坑実測図 …… 362
第 291 図　炉 1 実測図 …… 363
第 292 図　奈良・平安時代の土坑実測図(1) …… 364
第 293 図　奈良・平安時代の土坑実測図(2) …… 365
第 294 図　奈良・平安時代の土坑実測図(3) …… 366
第 295 図　奈良・平安時代の土坑実測図(4) …… 367
第 296 図　奈良・平安時代の土坑実測図(5) …… 368
第 297 図　奈良・平安時代の土坑実測図(6) …… 369
第 298 図　奈良・平安時代の土坑実測図(7) …… 370
第 299 図　奈良・平安時代の土坑実測図(8) …… 371
第 300 図　奈良・平安時代の土坑実測図(9) …… 372
第 301 図　奈良・平安時代の土坑出土遺物実測図 …… 373
第 302 図　第 1 号柱穴列，第 128・143・207 ～ 212 号土坑実測図 …… 378
第 303 図　第 1 号柱穴列出土遺物実測図 …… 379
第 304 図　第 2 号柱穴列実測図 …… 379
第 305 図　第 5 号柱穴列実測図 …… 380
第 306 図　第 8 号柱穴列，第 265・273 号土坑実測図 … 381
第 307 図　第 7 号ピット群実測図 …… 382
第 308 図　第 7 号ピット群出土遺物実測図 …… 382
第 309 図　第 9 号ピット群実測図 …… 383
第 310 図　遺構外出土遺物実測図 …… 383
第 311 図　室町・江戸時代の遺構配置図 …… 384
第 312 図　第 31 号方形竪穴遺構実測図 …… 385
第 313 図　第 2 号地下式坑・出土遺物実測図 …… 386
第 314 図　第 8 号井戸跡実測図 …… 387
第 315 図　第 8 号井戸跡出土遺物実測図 …… 388
第 316 図　第 9 号井戸跡・出土遺物実測図 …… 388
第 317 図　第 245 号土坑実測図 …… 389
第 318 図　第 255 号土坑実測図 …… 389
第 319 図　第 264 号土坑・出土遺物実測図 …… 390
第 320 図　第 362 号土坑・出土遺物実測図 …… 391
第 321 図　第 367 号土坑・出土遺物実測図 …… 392
第 322 図　第 368 号土坑・出土遺物実測図 …… 393
第 323 図　室町・江戸時代の土坑実測図(1) …… 393
第 324 図　室町・江戸時代の土坑実測図(2) …… 394
第 325 図　室町・江戸時代の土坑実測図(3) …… 395
第 326 図　室町・江戸時代の土坑実測図(4) …… 396
第 327 図　室町・江戸時代の土坑実測図(5) …… 397
第 328 図　室町・江戸時代の土坑実測図(6) …… 398
第 329 図　室町・江戸時代の土坑実測図(7) …… 399
第 330 図　室町・江戸時代の土坑実測図(8) …… 400
第 331 図　室町・江戸時代の土坑実測図(9) …… 401
第 332 図　室町・江戸時代の土坑実測図(10) …… 402
第 333 図　室町・江戸時代の土坑出土遺物実測図 …… 403
第 334 図　第 1 号段切状遺構実測図 …… 406
第 335 図　第 1 号段切状遺構・出土遺物実測図 …… 407
第 336 図　第 3 号柱穴列実測図 …… 409
第 337 図　第 4 号柱穴列実測図 …… 410
第 338 図　第 32 号溝跡実測図 …… 411
第 339 図　第 30 ～ 48 号溝跡，第 5 ・ 6 号道路跡，第 1 号段切状遺構実測図(1) …… 412
第 340 図　第 30 ～ 48 号溝跡，第 5 ・ 6 号道路跡，第 1 号段切状遺構実測図(2) …… 413
第 341 図　第 30 ～ 48 号溝跡，第 5 ・ 6 号道路跡，第 1 号段切状遺構実測図(3) …… 414
第 342 図　第 30 ～ 48 号溝跡，第 5 ・ 6 号道路跡，第 1 号段切状遺構実測図(4) …… 415
第 343 図　第 32・33・37・41 ～ 48 号溝跡実測図 …… 416
第 344 図　第 30・31・34 ～ 36・38 ～ 40 号溝跡実測図 ‥ 417
第 345 図　第 24・25 号溝跡実測図 …… 419
第 346 図　第 26・27 号溝跡実測図 …… 420
第 347 図　第 28・29 号溝跡実測図 …… 420
第 348 図　室町・江戸時代の溝跡出土遺物実測図(1) …… 421
第 349 図　室町・江戸時代の溝跡出土遺物実測図(2) …… 422
第 350 図　室町・江戸時代の溝跡出土遺物実測図(3) …… 423
第 351 図　室町・江戸時代の溝跡出土遺物実測図(4) …… 424
第 352 図　第 3 号道路跡実測図 …… 427
第 353 図　第 6 号道路跡実測図 …… 428
第 354 図　第 6 号道路跡出土遺物実測図 …… 429
第 355 図　遺構外出土遺物実測図 …… 430
第 356 図　当遺跡と島名熊の山遺跡の位置関係 …… 432
第 357 図　竪穴建物跡の時間的変遷（5 世紀代） …… 434
第 358 図　竪穴建物跡の時間的変遷（6 ・ 7 世紀代） … 434
第 359 図　竪穴建物跡の時間的変遷（8 世紀代） …… 437
第 360 図　竪穴建物跡の時間的変遷（9 ・10 世紀代） … 437
第 361 図　第 1 号鍛冶工房跡鍛造剝片・粒状滓出土量グラフ …… 442
第 362 図　第 3 号鍛冶工房跡鍛造剝片・粒状滓出土量グラフ …… 442
第 363 図　第 5 号鍛冶工房跡鍛造剝片・粒状滓出土量グラフ …… 443

挿表目次 － 下　巻 －

表 160　第 4 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 282
表 161　第 5 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 284
表 162　第 6 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 284
表 163　第 7 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 288
表 164　第 8 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 290
表 165　第 9 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 292
表 166　第 11 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 295
表 167　第 12 号掘立柱建物跡出土遺物観察表(1) …… 296
表 168　第 12 号掘立柱建物跡出土遺物観察表(2) …… 297
表 169　第 13 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 300
表 170　第 14 号掘立柱建物跡出土遺物観察表(1) …… 302
表 171　第 14 号掘立柱建物跡出土遺物観察表(2) …… 303
表 172　第 15 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 304
表 173　第 16 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 306
表 174　奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表 …… 307
表 175　第 1 号鍛冶工房跡出土遺物観察表 …… 312
表 176　第 1 号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表 …… 312
表 177　第 2 号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表 …… 313
表 178　第 2 号鍛冶工房跡出土遺物観察表 …… 315
表 179　第 3 号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表 …… 317
表 180　第 3 号鍛冶工房跡出土遺物観察表 …… 319
表 181　第 4 号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表 …… 320
表 182　第 4 号鍛冶工房跡出土遺物観察表 …… 321
表 183　第 5 号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表 …… 322

表 184　第５号鍛冶工房跡出土遺物観察表(1)…… 324
表 185　第５号鍛冶工房跡出土遺物観察表(2)…… 327
表 186　第６号鍛冶工房跡出土遺物観察表(1)…… 329
表 187　第６号鍛冶工房跡出土遺物観察表(2)…… 330
表 188　第６号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表…… 330
表 189　第７号鍛冶工房跡出土遺物観察表…… 331
表 190　第７号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表…… 331
表 191　第８号鍛冶工房跡出土遺物観察表…… 333
表 192　第８号鍛冶工房跡出土鉄滓集計表…… 333
表 193　鍛冶工房跡一覧表…… 333
表 194　第 138 号土坑出土遺物観察表…… 359
表 195　第 339 号土坑出土遺物観察表(1)…… 360
表 196　第 339 号土坑出土遺物観察表(2)…… 361
表 197　第 356 号土坑出土遺物観察表(1)…… 361
表 198　第 356 号土坑出土遺物観察表(2)…… 362
表 199　焼成遺構一覧表…… 363
表 200　奈良・平安時代の土坑出土遺物観察表(1)…… 373
表 201　奈良・平安時代の土坑出土遺物観察表(2)…… 374
表 202　奈良・平安時代の土坑一覧表(1)…… 374
表 203　奈良・平安時代の土坑一覧表(2)…… 375
表 204　奈良・平安時代の土坑一覧表(3)…… 376
表 205　奈良・平安時代の土坑一覧表(4)…… 377
表 206　第１号柱穴列出土遺物観察表…… 379
表 207　奈良・平安時代の柱穴列一覧表…… 381
表 208　第７号ピット群ピット一覧表…… 382
表 209　第７号ピット群出土遺物観察表…… 382
表 210　第９号ピット群ピット一覧表…… 382
表 211　奈良・平安時代の遺構外出土遺物観察表…… 383
表 212　第２号地下式坑出土遺物観察表…… 387
表 213　第８号井戸跡出土遺物観察表…… 388
表 214　第９号井戸跡出土遺物観察表…… 388
表 215　室町・江戸時代の井戸跡一覧表…… 389
表 216　第 246 号土坑出土遺物観察表…… 391
表 217　第 362 号土坑出土遺物観察表…… 392
表 218　第 367 号土坑出土遺物観察表…… 392
表 219　第 368 号土坑出土遺物観察表…… 393
表 220　室町・江戸時代の土坑出土遺物観察表…… 403
表 221　室町・江戸時代の土坑一覧表(1)…… 403
表 222　室町・江戸時代の土坑一覧表(2)…… 404
表 223　室町・江戸時代の土坑一覧表(3)…… 405
表 224　第１号段切状遺構出土遺物観察表…… 408
表 225　第３号柱穴列ピット一覧表…… 409
表 226　第４号柱穴列ピット一覧表…… 410
表 227　室町・江戸時代の溝跡出土遺物観察表(1)…… 424
表 228　室町・江戸時代の溝跡出土遺物観察表(2)…… 425
表 229　室町・江戸時代の溝跡出土遺物観察表(3)…… 426
表 230　室町・江戸時代の溝跡一覧表(1)…… 426
表 231　室町・江戸時代の溝跡一覧表(2)…… 427
表 232　第６号道路跡出土遺物観察表…… 429
表 233　室町・江戸時代の道路跡一覧表(1)…… 429
表 234　室町・江戸時代の道路跡一覧表(2)…… 430
表 235　室町・江戸時代の遺構外出土遺物観察表(1)…… 430
表 236　室町・江戸時代の遺構外出土遺物観察表(2)…… 431
表 237　竪穴建物跡の遺物保有状況（古墳時代）…… 435
表 238　竪穴建物跡の遺物保有状況（奈良・平安時代）… 439

写 真 図 版 目 次

ＰＬ１　平成 27 年度調査区全景　平成 28 年度調査区全景
ＰＬ２　調査区全景（平成 27 年度・28 年度合成）
ＰＬ３　第７号竪穴建物跡，第 144・164 号土坑　第８号竪穴建物跡遺物出土状況　第８号竪穴建物跡　第９号竪穴建物跡　第 10 号竪穴建物跡　第 10 号竪穴建物跡竈　第 11 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 11 号竪穴建物跡
ＰＬ４　第 12 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 12 号竪穴建物跡竈遺物出土状況　第 12 号竪穴建物跡　第 14 号竪穴建物跡　第 14 号竪穴建物跡掘方　第 15 号竪穴建物跡Ｐ２遺物出土状況　第 15 号竪穴建物跡　第 17 号竪穴建物跡竈遺物出土状況
ＰＬ５　第 17 号竪穴建物跡　第 18 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 18 号竪穴建物跡　第 18 号竪穴建物跡竈　第 19 号竪穴建物跡　第 20 号竪穴建物跡Ｐ１遺物出土状況　第 20 号竪穴建物跡竈　第 21 号竪穴建物跡
ＰＬ６　第 21 号竪穴建物跡竈　第 22 号竪穴建物跡　第 22 号竪穴建物跡竈　第 23 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 23 号竪穴建物跡　第 23 号竪穴建物跡竈　第 24 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 24 号竪穴建物跡竈遺物出土状況
ＰＬ７　第 24 号竪穴建物跡　第 25 号竪穴建物跡遺物出土状況(1)　第 25 号竪穴建物跡遺物出土状況(2)　第 25 号竪穴建物跡　第 25 号竪穴建物跡竈　第 26 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 27 号竪穴建物跡遺物出土状況(1)　第 27 号竪穴建物跡遺物出土状況(2)
ＰＬ８　第 27 号竪穴建物跡　第 27 号竪穴建物跡竈　第 28 号竪穴建物跡竈遺物出土状況　第 28 号竪穴建物跡竈掘方遺物出土状況　第 29 号竪穴建物跡　第 29 号竪穴建物跡竈　第 30 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 30 号竪穴建物跡竈袖部断ち割り状況
ＰＬ９　第 31 号竪穴建物跡　第 32 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 32 号竪穴建物跡　第 33 号竪穴建物跡　第 33 号竪穴建物跡竈　第 34 号竪穴建物跡遺物出土状況(1)　第 34 号竪穴建物跡遺物出土状況(2)　第 34 号竪穴建物跡
ＰＬ 10　第 35 号竪穴建物跡　第 37 号竪穴建物跡　第 39 号竪穴建物跡　第 40 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 40 号竪穴建物跡竈遺物出土状況(1)　第 40 号竪穴建物跡竈遺物出土状況(2)　第 40 号竪穴建物跡　第 41 号竪穴建物跡
ＰＬ 11　第 41 号竪穴建物跡竈　第 42 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 42 号竪穴建物跡　第 43 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 43 号竪穴建物跡　第 44 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 44 号竪穴建物跡　第 44 号竪穴建物跡竈
ＰＬ 12　第 45 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 47 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 47 号竪穴建物跡　第 51 号竪穴建物跡　第 52 号竪穴建物跡　第 53 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 53 号竪穴建物跡　第 54 号竪穴建物跡遺物出土状況
ＰＬ 13　第 54 号竪穴建物跡　第 54 号竪穴建物跡炉　第 56 号竪穴建物跡　第 56 号竪穴建物跡竈　第 57 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 57 号竪穴建物跡　第 58 号竪穴建物跡　第 58 号竪穴建物跡竈
ＰＬ 14　第 59・60 号竪穴建物跡　第 61 号竪穴建物跡　第 62 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 62 号竪穴建物跡　第 62 号竪穴建物跡竈　第 63 号竪穴建物跡　第 63 号竪穴建物跡竈　第 64 号竪穴建物跡
ＰＬ 15　第 64 号竪穴建物跡竈　第 66 号竪穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況　第 66 号竪穴建物跡　第 67 号竪穴建物跡遺物出土状況　第 67 号竪穴建物跡　第 67 号竪穴建物跡竈　第 70 号竪穴建物跡　第 72 号竪穴建物跡
ＰＬ 16　第 73 号竪穴建物跡竈遺物出土状況　第 73 号竪穴建物

跡　第74号竪穴建物跡遺物出土状況　第74号竪穴建物跡　第74号竪穴建物跡竈　第74号竪穴建物跡竈掘方遺物出土状況　第75号竪穴建物跡　第77号竪穴建物跡竈遺物出土状況
ＰＬ17　第77号竪穴建物跡　第77号竪穴建物跡竈　第78号竪穴建物跡　第79号竪穴建物跡　第80号竪穴建物跡　第80号竪穴建物跡竈　第81号竪穴建物跡遺物出土状況　第81号竪穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況
ＰＬ18　第82号竪穴建物跡　第82号竪穴建物跡竈　第83号竪穴建物跡遺物出土状況　第83号竪穴建物跡　第83号竪穴建物跡竈　第85号竪穴建物跡遺物出土状況　第85号竪穴建物跡　第86号竪穴建物跡遺物出土状況
ＰＬ19　第86号竪穴建物跡　第87号竪穴建物跡竈遺物出土状況　第87号竪穴建物跡　第87号竪穴建物跡竈　第88号竪穴建物跡竈遺物出土状況　第88号竪穴建物跡　第89号竪穴建物跡　第89号竪穴建物跡竈
ＰＬ20　第90号竪穴建物跡遺物出土状況　第90号竪穴建物跡　第90号竪穴建物跡竈　第91号竪穴建物跡　第92号竪穴建物跡遺物出土状況　第92号竪穴建物跡竈遺物出土状況　第92号竪穴建物跡　第93号竪穴建物跡
ＰＬ21　第93号竪穴建物跡竈　第94号竪穴建物跡遺物出土状況　第94号竪穴建物跡　第94号竪穴建物跡竈　第95号竪穴建物跡遺物出土状況　第95号竪穴建物跡　第96号竪穴建物跡遺物出土状況(1)　第96号竪穴建物跡遺物出土状況(2)
ＰＬ22　第96号竪穴建物跡竈遺物出土状況　第96号竪穴建物跡　第96号竪穴建物跡竈　第97号竪穴建物跡　第98号竪穴建物跡　第99号竪穴建物跡　第99号竪穴建物跡竈　第101号竪穴建物跡
ＰＬ23　第102号竪穴建物跡遺物出土状況(1)　第102号竪穴建物跡遺物出土状況(2)　第102号竪穴建物跡遺物出土状況(3)　第102号竪穴建物跡竈遺物出土状況　第102号竪穴建物跡　第103号竪穴建物跡遺物出土状況(1)　第103号竪穴建物跡遺物出土状況(2)　第103号竪穴建物跡竈遺物出土状況
ＰＬ24　第103号竪穴建物跡　第106号竪穴建物跡　第106号竪穴建物跡竈　第３・４号掘立柱建物跡　第５号掘立柱建物跡　第６号掘立柱建物跡Ｐ１遺物出土状況　第６・12号掘立柱建物跡　第７号掘立柱建物跡
ＰＬ25　第８号掘立柱建物跡　第９号掘立柱建物跡　第11号掘立柱建物跡　第13号掘立柱建物跡Ｐ１遺物出土状況　第13号掘立柱建物跡　第14号掘立柱建物跡　第15号掘立柱建物跡　第16号掘立柱建物跡
ＰＬ26　第１号鍛冶工房跡　第１号鍛冶工房跡炉　第２号鍛冶工房跡遺物出土状況　第２号鍛冶工房跡　第３号鍛冶工房跡土坑１・２遺物出土状況　第３号鍛冶工房跡　第３号鍛冶工房跡炉　第４号鍛冶工房跡遺物出土状況
ＰＬ27　第４号鍛冶工房跡　第４号鍛冶工房跡炉１　第５号鍛冶工房跡遺物出土状況　第５号鍛冶工房跡土坑内遺物出土状況　第５号鍛冶工房跡炉２遺物出土状況　第５号鍛冶工房跡　第６号鍛冶工房跡遺物出土状況　第６号鍛冶工房跡
ＰＬ28　第７号鍛冶工房跡炉１　第７号鍛冶工房跡炉２　第138号土坑（焼成遺構）遺物出土状況　第138号土坑（焼成遺構）　焼土範囲　第399号土坑（焼成遺構）遺物出土状況　第356号土坑（焼成遺構）遺物出土状況　第60号土坑（陥し穴）　第90号土坑遺物出土状況
ＰＬ29　第118号土坑遺物出土状況　第133号土坑遺物出土状況　第453号土坑遺物出土状況　第５号柱穴列　第２号地下式坑　第８号井戸跡　第９号井戸跡　第255号土坑（墓坑）人骨出土状況
ＰＬ30　第264号土坑（墓坑）遺物出土状況　第264号土坑（墓坑）人骨出土状況　第367号土坑遺物出土状況　第368号土坑遺物出土状況　第１号段切状遺構遺物出土状況　第１号段切状遺構　第27号溝跡遺物出土状況　第28号溝跡
ＰＬ31　第29号溝跡　第32・33・37号溝跡　第34号溝跡　第36号溝跡　第39号溝跡遺物出土状況　第39号溝跡　第５号道路跡　第６号道路跡
ＰＬ32　第８・10～13号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ33　第13～15・18・20・22号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ34　第20・23・24号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ35　第24～27号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ36　第28～30・32～34・36・37・39号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ37　第39～45号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ38　第45・47～49・54～60・62・64・66号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ39　第66・67・71～75号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ40　第77～81・83号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ41　第83・85～95号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ42　第95～98・100号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ43　第100～103・106・108号竪穴建物跡，第５・６号掘立柱建物跡出土土器
ＰＬ44　第６・11～13号掘立柱建物跡，第１～６号鍛冶工房跡，第90号土坑出土土器
ＰＬ45　第90・118・133・138・308号土坑出土土器
ＰＬ46　第339・356・358・362・367・368号土坑，第27・31・32号溝跡出土土器，第287号土坑出土鉄滓
ＰＬ47　第32・33・39号溝跡出土土器，第８号井戸跡出土鋳型，第12・13・44・67・77号竪穴建物跡，第１・２号鍛冶工房跡出土土製品，第39・40号溝跡，第１号段切状遺構出土石器，第１・３号鍛冶工房跡出土鉄滓
ＰＬ48　第８～10・13・14・20・21・23号竪穴建物跡出土土器，第５・６号鍛冶工房跡出土土製品，第13・18・22・83・99号竪穴建物跡出土石器，第５・６・８号鍛冶工房跡出土鉄滓
ＰＬ49　第24・25・29・33・39・41・44・47・52・59～62号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ50　第64～66・68・73～75・79・89・90号竪穴建物跡出土土器
ＰＬ51　第90・91・95・98・100号竪穴建物跡，第５・７号掘立柱建物跡，第５号鍛冶工房跡，第453号土坑，第27・32号溝跡出土土器
ＰＬ52　第24・32・35・37・42～44・71・77・102号竪穴建物跡，第74号土坑，第39号溝跡，遺構外出土石製品
ＰＬ53　第33号竪穴建物跡出土土製品　第33・34・44・83号竪穴建物跡，第５号鍛冶工房跡出土石製品，第８・11・13・14・18・21・24・25・29・30・33・39号竪穴建物跡出土金属製品
ＰＬ54　第40～42・44・52・53・56・61・62・71・74・75・78・80号竪穴建物跡出土金属製品
ＰＬ55　第83・92・94・95・97・98・101～103・106号竪穴建物跡，第４・８号掘立柱建物跡出土金属製品
ＰＬ56　第１～８号鍛冶工房跡，第264号土坑出土金属製品・鉄滓・銭貨
ＰＬ57　第39・60・81・83号竪穴建物跡，第264・339・369号土坑，第31・39・40・44号溝跡，第６号道路跡，遺構外出土金属製品
ＰＬ58　旧石器，縄文時代出土遺物

第 237 図　奈良・平安時代の遺構配置図（S= 1 ：800）

⑵ 掘立柱建物跡

当時代の掘立柱建物跡は，14 棟を確認した。当遺跡は古墳時代から近世までの遺構が複合して同一面で確認されており，また何れも遺物は少量で混入が多く，時期判断が困難である。ここでは位置や主軸方向，出土遺物などから時期判断を行った。確認したすべてを奈良・平安時代に帰属するものとして報告するが，間尺が不規則な第３号掘立柱建物跡や第９号掘立柱建物跡などは，より時期が下がる可能性もある。

第３号掘立柱建物跡（第 238 図　PL24）

位置　調査Ⅱ区南東部のＯ４f4 ～Ｏ４f5 区，標高 22 ｍの台地斜面部に位置している。

重複関係　第 143 号土坑を掘り込んでいる。本跡の範囲内に第４号掘立柱建物跡，第 212 号土坑が位置しているが，重複関係は不明である。

規模と形状　桁行２間，梁行１間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－ 82゜－Ｗの東西棟である。規模は桁行 3.25 ｍ，梁行 2.65 ｍで，面積は 8.61㎡である。柱間寸法は，桁行がＰ２－Ｐ３間が 2.00 ｍ（７尺），Ｐ３－Ｐ４間が 1.25 ｍ（４尺），Ｐ５－Ｐ６間が 2.00 ｍ（７尺），Ｐ６－Ｐ１間が 1.15 ｍ（４尺）である。梁行は，Ｐ１－Ｐ２間が 2.65 ｍ（９尺），Ｐ４－Ｐ５間が 2.55 ｍ（８尺）で，桁行・梁行ともばらつきがある。また北平のＰ６は，柱筋が揃っておらず，妻側のＰ３・Ｐ６も不揃いである。

柱穴　６か所。平面形は円形または楕円形で，長径 50 ～ 71cm，短径 42 ～ 71cm である。深さは 11 ～ 25cm と浅く，掘方の壁は外傾している。いずれもローム粒子が微量に含まれる暗褐色土が堆積しており，抜き取り後の堆積土と考えられる。

遺物出土状況　土師器片３点（甕類），須恵器片５点（坏３，鉢・甕・甑類２），鉄塊系遺物 1.4 ｇが出土しているが，何れも小片のため，図示できなかった。

所見　時期は，出土土器から当期に比定できるが，詳細な時期までは判断し得ない。また柱穴の径が小さく，柱間隔が不規則であることなど，後代に下がる可能性もある。

第４号掘立柱建物跡（第 238・239 図　PL24）

位置　調査Ⅱ区南東部のＯ４e4 ～Ｏ４f5 区，標高 22 ｍの台地斜面部に位置している。

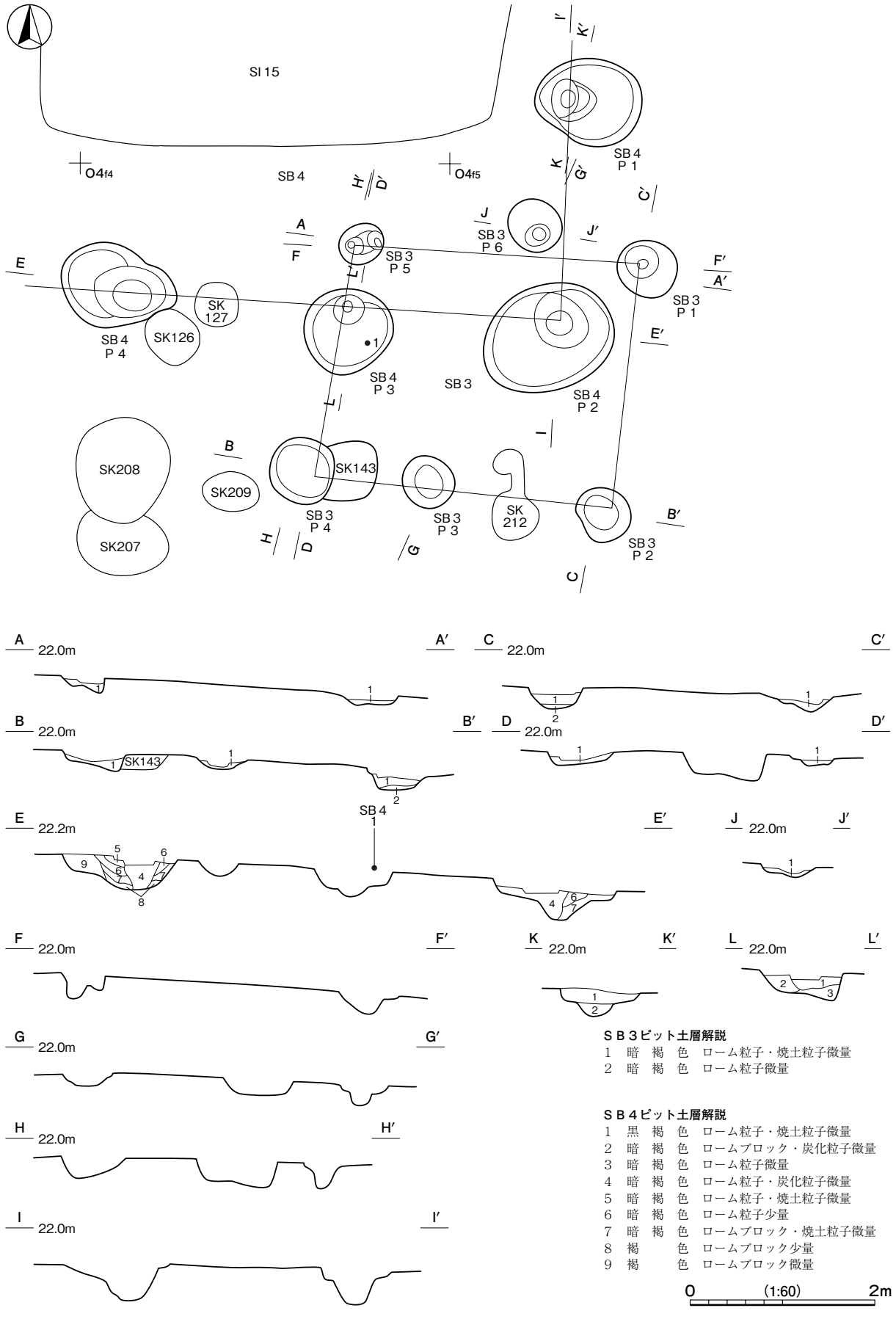
重複関係　Ｐ４が第 126 号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。本跡の範囲内に第 14・15 号竪穴建物跡，第３号掘立柱建物跡，第 127 号土坑が位置しているが，重複関係は不明である。

規模と形状　重複のため，東西２間，南北１間しか確認できない。側柱建物跡で，東西軸方向はＮ－ 83゜－Ｗである。規模は東西 4.80 m，南北 2.40 ｍで，面積は 11.52㎡である。柱間寸法はいずれも 2.40（８尺）ｍである。

柱穴　４か所。平面形は円形または楕円形で，長径 96 ～ 148cm，短径 89 ～ 116cm，深さは 30 ～ 38cm である。大形の掘方で，底面がピット状に一段窪んでいる。掘方の壁は外傾している。Ｐ１・Ｐ３の第１層から第３層は，柱抜き取り後の堆積層である。Ｐ２・Ｐ４の第４層は柱痕で，第６～８層は埋土である。

遺物出土状況　土師器片 19 点（坏１，甕類 18），須恵器片９点（坏５，鉢・甕・甑類４），金属製品１点（不明），鍛冶関連遺物（鉄塊系遺物 24.3 ｇ，鉄滓 25.7 ｇ）のほか，剥片２点（黒曜石）が出土している。１はＰ３の覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀から９世紀代に比定できるが，いずれも小片のため詳細な時期までは判断し得ない。本跡の南部には，本跡と南北軸方向をほぼ同じくする第１号柱穴列とそれに組む可能性がある土坑群が位置し，３×２間の掘立柱建物となる可能性もある（後述）。これらは８世紀前葉の第 13 号竪穴建物跡を



SB3ピット土層解説

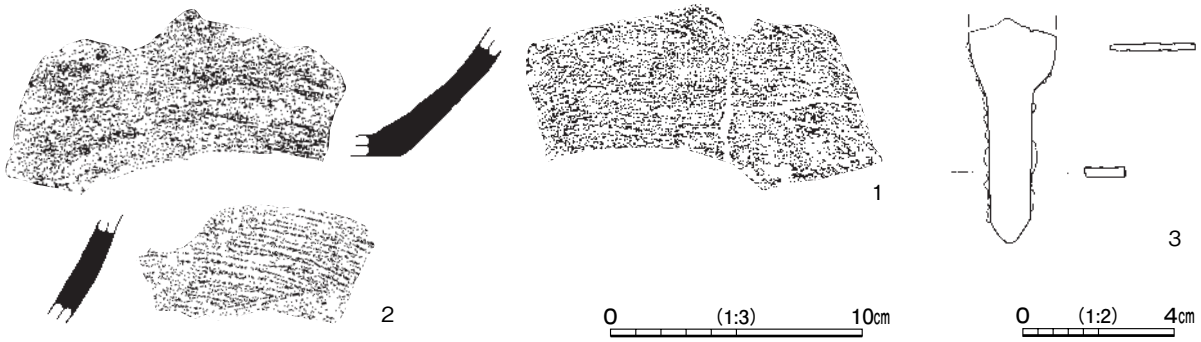
1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子微量

SB4ピット土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
3 暗 褐 色 ローム粒子微量
4 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
5 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
6 暗 褐 色 ローム粒子少量
7 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子微量
8 褐 色 ロームブロック少量
9 褐 色 ロームブロック微量

第 238 図　第３・４号掘立柱建物跡実測図

掘り込んでいること，また本跡は８世紀後葉の第 14 号竪穴建物跡と重複しており，これを掘り込んでいる可能性があることなどから，８世紀後葉以降と考えられる。



第 239 図　第４号掘立柱建物跡出土遺物実測図

表 160　第４号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 239 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	鉢	－	5.0	－	長石・石英・雲母・細礫	暗灰黄	普通	外面斜位の平行叩き　下端部ヘラ削り　内面ヘラナデ	Ｐ３上層	10%新治窯
2	須恵器	甕ヵ	－	4.2	－	長石・石英・雲母・細礫	黄灰	普通	外面斜位の平行叩き　下端部ヘラ削り　内面ナデ	Ｐ１	５%新治窯

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
3	不明	(6.0)	(2.3)	0.2 ～ 0.3	13.59	鉄	錆化著しく形状不明　断面長方形	Ｐ４	PL55

第５号掘立柱建物跡（第 240 図　PL24）

位置　調査Ⅱ区南東部のＯ４h1 区，標高 23 ｍの台地平坦部に位置している。

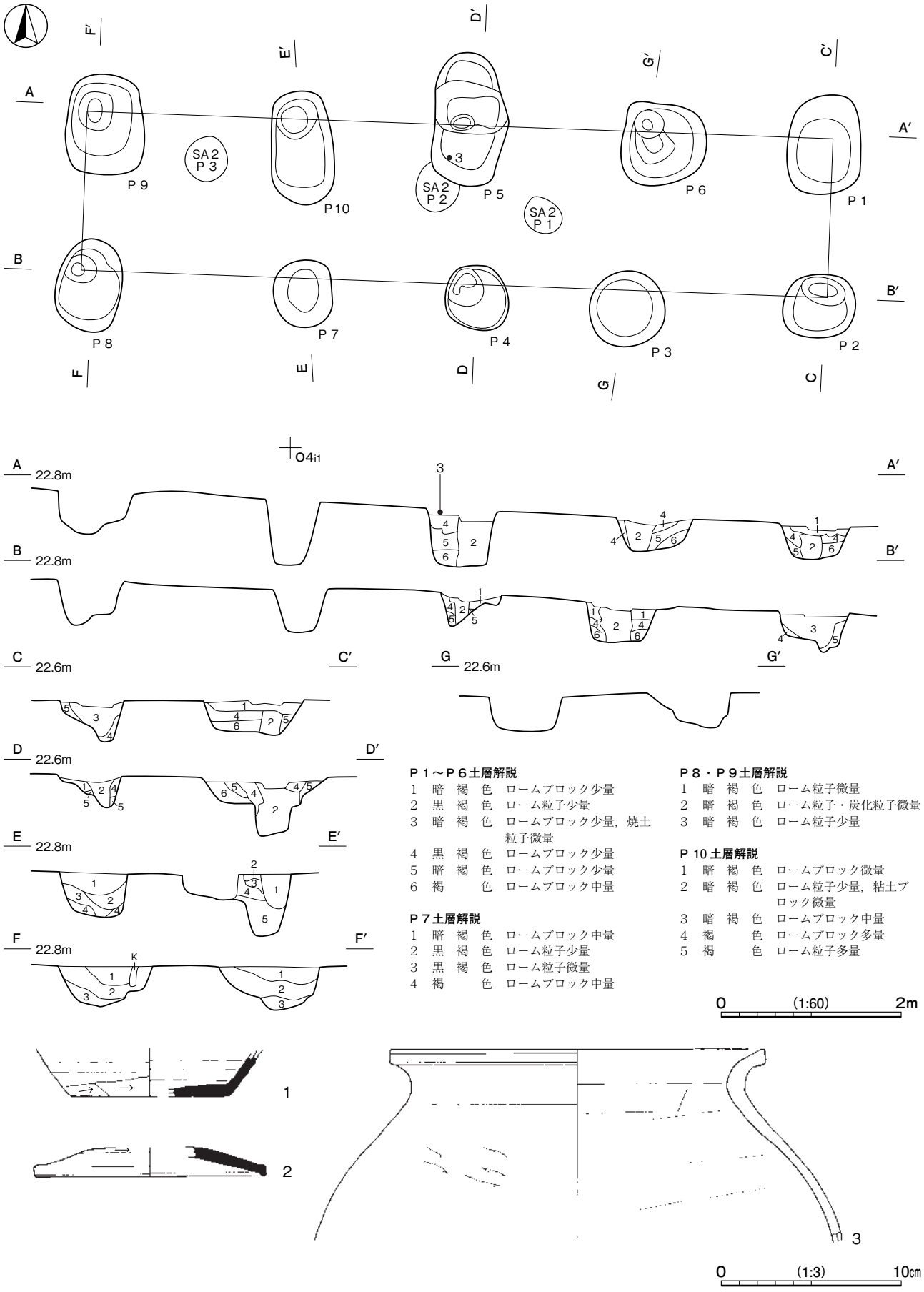
重複関係　Ｐ５が第２号柱穴列のＰ２と重複している。新旧関係は不明であるが，おそらく本跡が新しい。南部に第 24 号竪穴建物跡，第６号道路跡が位置しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　南側が調査区域境になっており，本跡を含む北側が平成 27 年度，南側が平成 28 年度の調査である。柱間などから，南側に延びる総柱の建物跡が想定されたが，平成 28 年度の調査では確認できなかった。本跡の北側にも柱穴らしき遺構は存在しないので，桁行４間，梁行１間の側柱建物跡と想定される。桁行方向がＮ－ 87 °－Ｗの東西棟で，規模は桁行 8.30 ｍ，梁行 1.75 ｍ，面積は 14.52㎡である。柱間寸法は，桁行がＰ２－Ｐ３間が 2.20 ｍ（７尺），Ｐ３－Ｐ４間が 1.65 ｍ（６尺），Ｐ４－Ｐ７間が 1.95 ｍ（６尺），Ｐ７－Ｐ８間が 2.50 ｍ（８尺），Ｐ９－Ｐ 10 間が 2.30 ｍ（８尺），Ｐ 10 －Ｐ５間が 1.85 ｍ（７尺），Ｐ５－Ｐ６間が 2.25 ｍ（７尺），Ｐ６－Ｐ１間が 1.85 ｍ（６尺）とややばらつきがあるが，梁行はほぼ 1.75 ｍ（６尺）と等間隔である。柱筋はほぼ通っている。

柱穴　10 か所。掘方の平面形は円形または楕円形で，規模は長径 77 ～ 148cm，短径 70 ～ 98cm である。深さは 32 ～ 69cm で，Ｐ２・Ｐ４～Ｐ６・Ｐ８～Ｐ 10 は柱当たりの部分がピット状に下がっている。Ｐ１～Ｐ６の第２層は柱痕である。Ｐ７～Ｐ 10 は抜き取り後の堆積土と考えられる。

遺物出土状況　土師器片 71 点（坏３，甕類 65，不明３），須恵器片７点（坏５，蓋１，鉢・甕・甑類１），鍛冶関連遺物（鉄塊系遺物 22.7 ｇ），焼成粘土塊 4.5 ｇが出土している。３はＰ５の埋土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉に比定できる。本跡は梁行が１間で，北桁と南桁で柱穴の形状に違いがある点など，建物跡とするのに疑問な点もある。本跡の北４ｍの位置に，長径が１ｍほどの第 139・201・129 号土坑が，本跡と柱筋を合わせるように約２ｍ間隔で東西方向に並んでいる。中間に柱穴が確認できなかったことから本跡と合わせて掘立柱建物跡とは捉えなかったが，あるいはこれらの土坑群と第８号掘立柱建物



第 240 図　第５号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

跡のピットのうち，径の大きなＰ３・Ｐ４などとともに，３×３間の建物跡になる可能性もある。

表 161　第５号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 240 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	坏	－	1.6	［8.7］	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	Ｐ５柱痕	10％新治窯
2	須恵器	蓋	［12.8］	1.6	－	長石・石英・細礫	灰	良好	天井部回転ヘラ削り	Ｐ１柱痕	10％新治窯 PL43
3	土師器	甕	20.4	10.8	－	長石・石英・雲母・細礫	橙	普通	口縁部外・内面横位のナデ　体部外・内面ナデ	Ｐ５上層	10％ PL51

第６号掘立柱建物跡（第 241・242 図　PL24）

位置　調査Ⅱ区南部のＯ３g8 ～Ｏ３i9 区，標高 23 ｍの台地平坦部に位置している。

重複関係　第 21 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。第 12 号掘立柱建物とも重複しているが，新旧関係は不明確である。Ｐ４が第 12 号掘立柱建物のＰ４と重複しているが，堆積状況での確認はできなかった。調査の状況等から，第 12 号掘立柱建物が新しいと考えられる。

規模と形状　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－22°－Ｅの南北棟である。規模は桁行 6.45 ｍ，梁行 4.35 ｍで，面積は 28.05㎡である。柱間寸法は，桁行がＰ８－Ｐ２間が 2.20 ｍ（７尺），Ｐ２－Ｐ 11 間が 2.40 ｍ（８尺），Ｐ 11 －Ｐ 13 間が 1.80 ｍ（６尺），Ｐ４－Ｐ 10 間が 1.90 ｍ（６尺），Ｐ４－Ｐ５間が 2.15 ｍ（７尺），Ｐ５－Ｐ６間が 2.40 ｍ（８尺），梁行がＰ６－Ｐ７間が 2.10 ｍ（７尺），Ｐ７－Ｐ８間が 2.10 ｍ（７尺），Ｐ９－Ｐ 10 間が 1.95 ｍ（６尺），Ｐ９－Ｐ 13 間が 2.40 ｍ（８尺）である。桁行方向にややばらつきがあるが，梁行はほぼ等間隔で，柱筋もほぼ通っている。

柱穴　15 か所。掘方の平面形は円形または楕円形で，長径 48 ～ 124cm，短径 39 ～ 110cm である。深さは 20 ～ 36cm とやや浅く，いずれも抜き取り後の堆積土と考えられる。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ 14・Ｐ 15 は柱の抜き取り時に掘られたピットと考えられる。

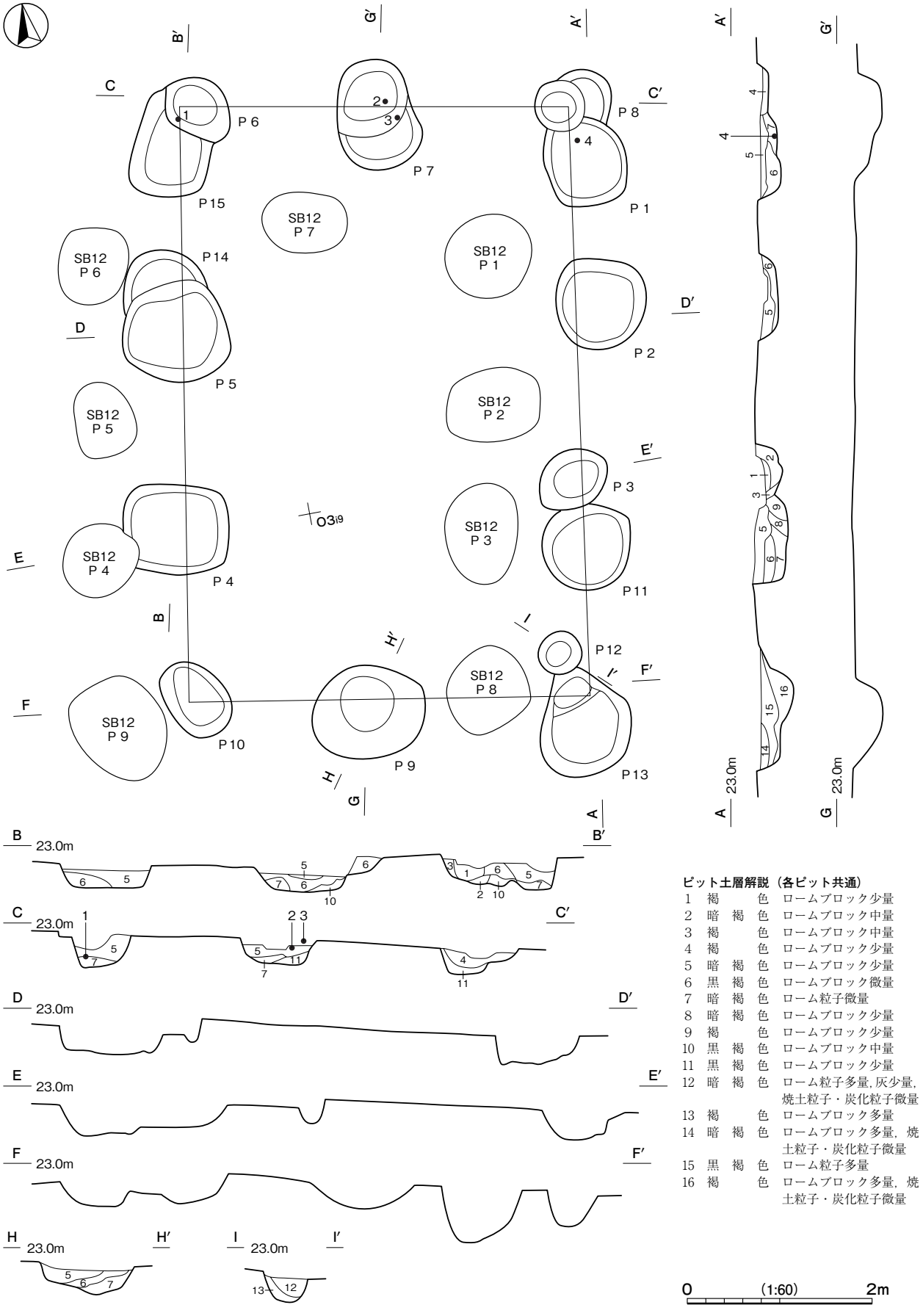
遺物出土状況　土師器片 52 点（坏３，甕類 49），須恵器片 28 点（坏 19，高台付坏２，鉢・甕・甑類７），土製品１点（管状土錘），鍛冶関連遺物（鉄塊系遺物 6.1 ｇ，鉄滓 41.0 ｇ）のほか，縄文土器片１点，剥片１点（瑪瑙）が出土している。遺物はＰ１・Ｐ４からやや多く出土している。２・３はＰ７覆土上層から，１はＰ６の覆土中層から，４はＰ１の底面から，それぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉に比定できる。８世紀前葉に比定できる第 21 号竪穴建物跡を掘り込んでいること，また前述した第４号掘立柱建物跡等と主軸方向がほぼ揃っていることなどとも矛盾しない。

表 162　第６号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 242 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	高台付坏	［13.8］	4.8	9.4	長石・石英	暗灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼付	Ｐ６	40％堀之内窯ヵ
2	須恵器	坏	［13.4］	3.6	［8.0］	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	Ｐ７	20％新治窯 PL44
3	須恵器	坏	［14.0］	4.1	8.0	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部多方向のヘラ削り　墨書「淡水」	Ｐ７	40％新治窯 PL43
4	須恵器	鉢	－	（19.5）	－	長石・石英・雲母	灰白	普通	外面横位の平行叩き　下端部ヘラ削り　内面ナデ	Ｐ１	10％新治窯

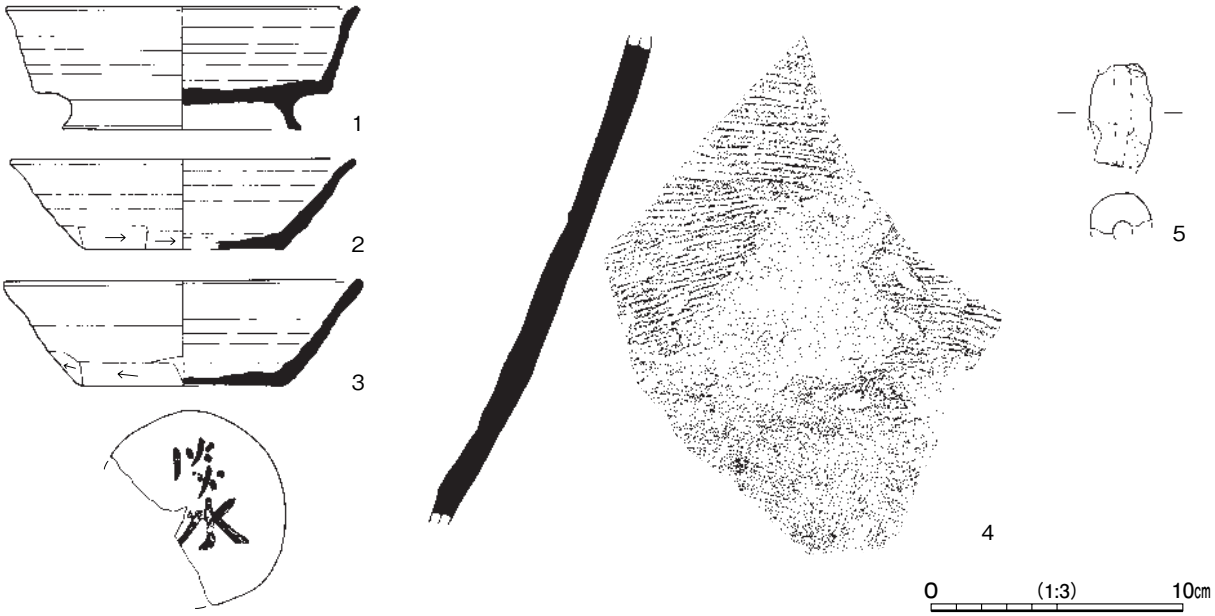
番号	器　種	径	長さ	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
5	土錘	（2.6）	（4.2）	（1.7）	14.18	長石・石英・雲母	橙	管状土錘　外面ナデ整形	Ｐ１	



ピット土層解説（各ピット共通）

1	褐		色	ロームブロック少量
2	暗	褐	色	ロームブロック中量
3	褐		色	ロームブロック中量
4	褐		色	ロームブロック少量
5	暗	褐	色	ロームブロック少量
6	黒	褐	色	ロームブロック微量
7	暗	褐	色	ローム粒子微量
8	暗	褐	色	ロームブロック少量
9	褐		色	ロームブロック少量
10	黒	褐	色	ロームブロック中量
11	黒	褐	色	ロームブロック少量
12	暗	褐	色	ローム粒子多量，灰少量，焼土粒子・炭化粒子微量
13	褐		色	ロームブロック多量
14	暗	褐	色	ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
15	黒	褐	色	ローム粒子多量
16	褐		色	ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

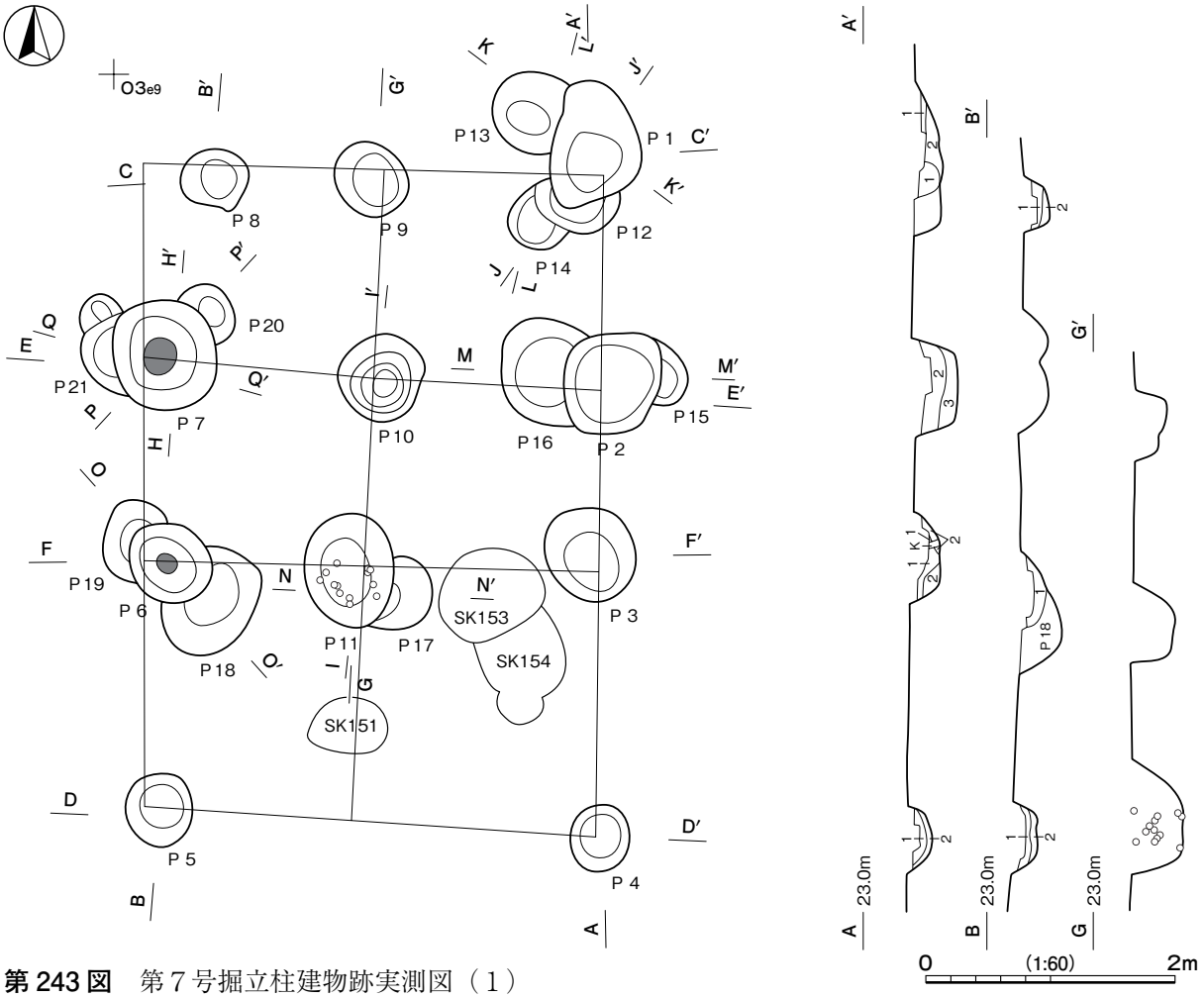
第 241 図　第６号掘立柱建物跡実測図



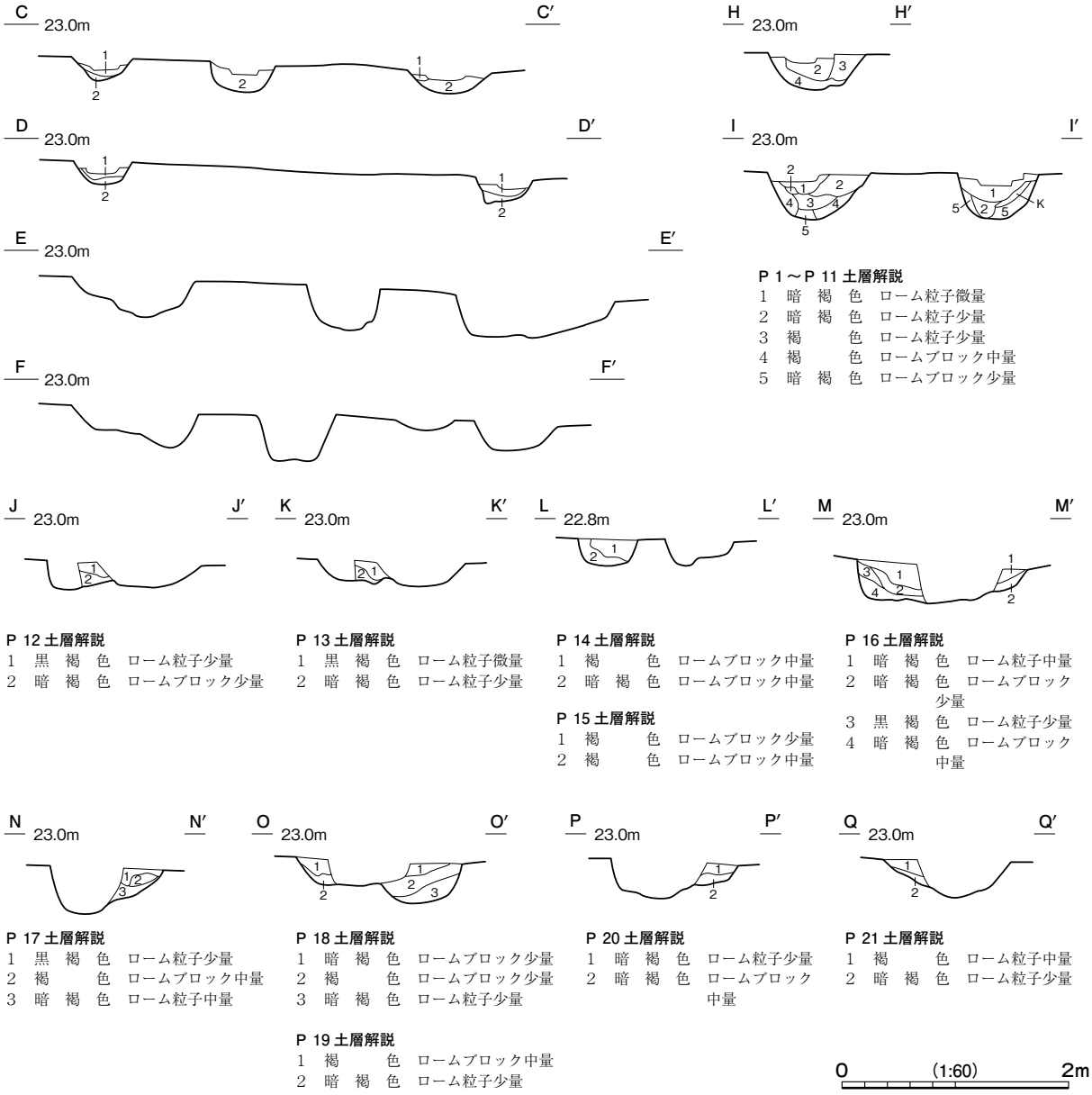
第 242 図　第６号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第７号掘立柱建物跡（第 243 ～ 245 図　PL24）

位置　調査Ⅱ区南東部のＯ３e9 ～Ｏ３f9 区，標高 23 ｍの台地平坦部に位置している。



第 243 図　第７号掘立柱建物跡実測図（１）



第 244 図　第７号掘立柱建物跡実測図（２）

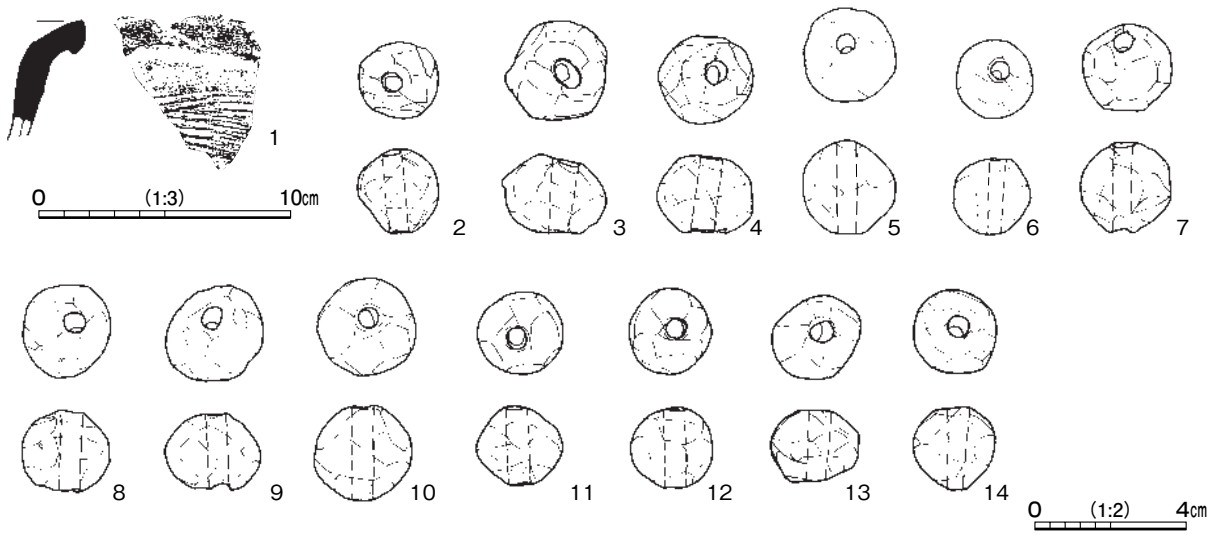
重複関係　本跡の範囲内に第 151・153・154 号土坑が位置しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　桁行３間，梁行２間の総柱建物跡で，桁行方向がＮ－１°－Ｅの南北棟である。規模は桁行 5.30 ｍ，梁行 3.60 ｍで，面積は 19.08㎡である。柱間寸法は，桁行がＰ１－Ｐ２間が 1.75 ｍ（６尺），Ｐ２－Ｐ３間が 1.45 ｍ（５尺），Ｐ３－Ｐ４間が 2.10 ｍ（７尺），Ｐ５－Ｐ６間が 1.95 ｍ（６尺），Ｐ６－Ｐ７間が 1.65 ｍ（６尺），Ｐ７－Ｐ８間が 1.55 ｍ（５尺），梁行がＰ８－Ｐ９間が 1.40 ｍ（５尺），Ｐ９－Ｐ１間が 1.75 ｍ（６尺）で，南妻側はＰ４とＰ５の間の柱穴が確認できなかったため，Ｐ４－Ｐ５間が 3.60 ｍ（12 尺）である。桁行・梁行方向ともばらつきがあり，柱筋はＰ８がやや東側に寄っているものの，それ以外は概ね揃っている。

柱穴　21 か所。Ｐ１とＰ 12 ～Ｐ 14，Ｐ２とＰ 15・Ｐ 16，Ｐ６とＰ 18・Ｐ 19，Ｐ７とＰ 20・Ｐ 21，Ｐ 11 とＰ 17 が重複しており，柱の立て替えや柱の抜き取り穴の可能性がある。掘方の平面形は円形または楕円形で，長径 45 ～ 96cm，短径 18 ～ 84cm である。深さは 14 ～ 36cm とやや浅く，いずれも抜き取り後の堆積土と考えられる。Ｐ６・Ｐ７の底面には，柱のあたりが確認できる。

遺物出土状況　土師器片 49 点（坏３，高坏１，甕類 45），須恵器片９点（坏２，鉢・甕・甑類７），土製品 13 点（土玉）が出土している。土玉は 14 を除く 12 点がＰ 11 の覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀から９世紀代に比定できるが，いずれも小片のため詳細な時期までは判断し得ない。隣接する第８号掘立柱建物跡や第 13・15・18 号竪穴建物跡など８世紀前葉の竪穴建物跡や第 14 号竪穴建物跡など８世紀後葉段階の竪穴建物跡と主軸方向がほぼ同じであることから，これに近い時期のものと考えらえれる。



第 245 図　第７号掘立柱建物跡出土遺物実測図

表 163　第７号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 245 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	鉢	－	4.7	－	長石・石英・細礫	褐灰	普通	外面横位の平行叩き　内面ナデ	Ｐ 10	５％新治窯 PL51

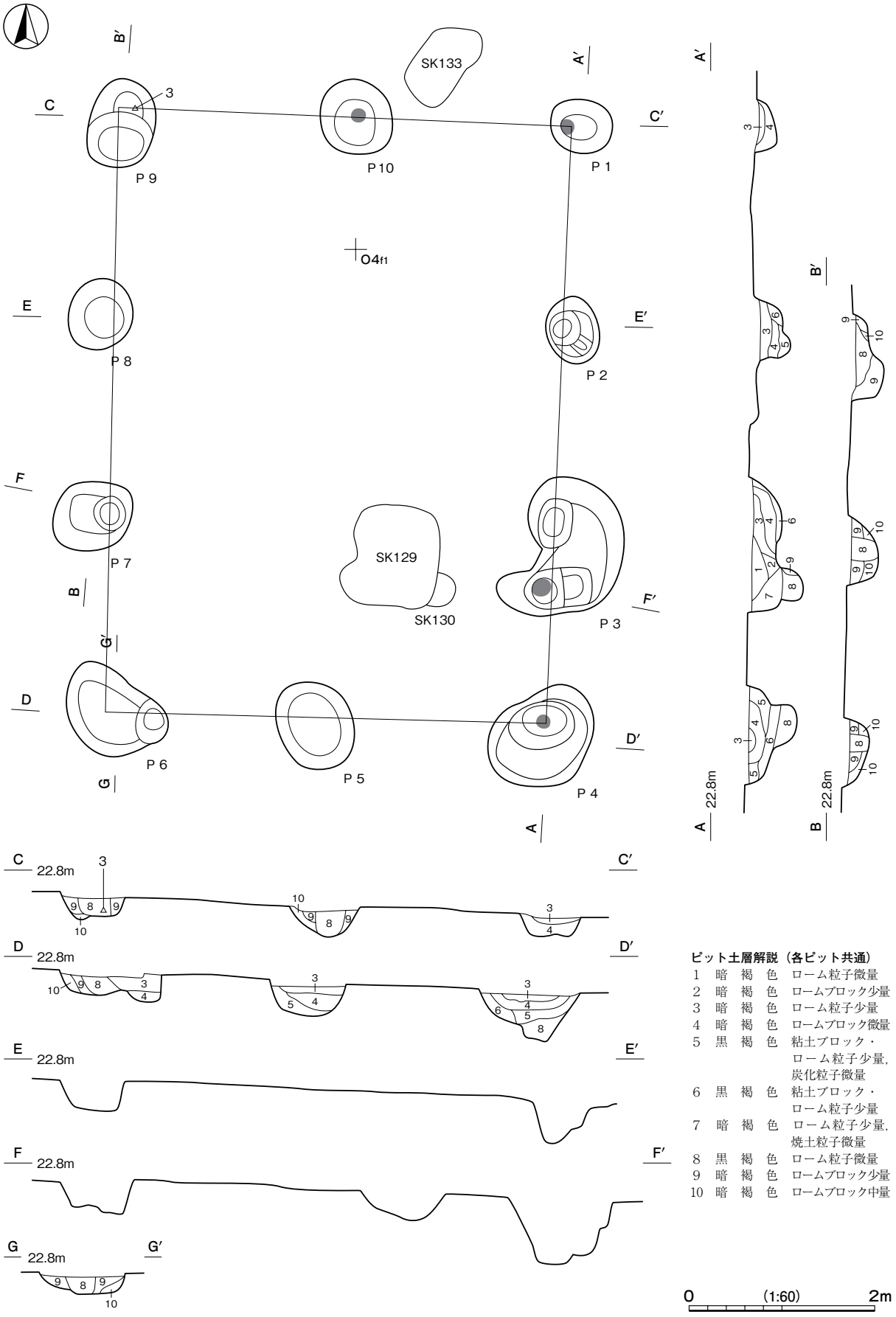
番号	器　種	径	高さ	孔径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
2	土玉	2.0 ～ 2.1	2.2	0.5	7.95	長石・石英	にぶい橙	外面ナデ整形　煤付着	Ｐ 11	
3	土玉	2.5 ～ 2.6	2.1	0.5 ～ 0.7	14.35	長石・石英	にぶい橙	外面ナデ整形	Ｐ 11	
4	土玉	2.5	2.0	0.5 ～ 0.6	11.49	長石・石英	にぶい橙	外面ナデ整形　煤付着	Ｐ 11	
5	土玉	2.4 ～ 2.5	2.4	0.5	13.49	長石	にぶい黄橙	外面ナデ整形　煤付着	Ｐ 11	
6	土玉	2.0 ～ 2.1	2.0	0.4	7.29	長石	にぶい橙	外面ナデ整形	Ｐ 11	
7	土玉	2.3 ～ 2.4	2.3	0.5	10.53	長石・細礫	浅黄橙	外面ナデ整形	Ｐ 11	
8	土玉	2.3 ～ 2.4	2.1	0.5	10.98	長石	にぶい橙	外面ナデ整形	Ｐ 11	
9	土玉	2.4 ～ 2.6	2.0	0.5	8.61	長石	にぶい橙	外面ナデ整形	Ｐ 11	
10	土玉	2.6	2.5	0.5	13.55	長石・石英・雲母	にぶい橙	外面ナデ整形	Ｐ 11	
11	土玉	2.2 ～ 2.3	2.1	0.5	8.75	長石・石英・雲母	にぶい橙	外面ナデ整形	Ｐ 11	
12	土玉	2.1 ～ 2.3	2.1	0.5	8.55	長石・石英・雲母	にぶい橙	外面ナデ整形　煤付着	Ｐ 11	
13	土玉	2.2 ～ 2.3	2.4	0.6	8.15	長石・石英	にぶい黄橙	外面ナデ整形　煤付着	Ｐ 11	
14	土玉	2.1 ～ 2.2	2.3	0.5	9.38	長石・石英	にぶい橙	外面ナデ整形　煤付着	Ｐ 6	

第８号掘立柱建物跡（第 246・247 図　PL25）

位置　調査Ⅱ区南東部のＯ３e0 ～Ｏ４g1 区，標高 23 ｍの台地平坦部に位置している。

重複関係　本跡の範囲内に第 129・130・133 号土坑が位置しているが，堆積状況での新旧関係は不明である。

規模と形状　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－３°－Ｅの南北棟である。規模は桁行 6.50 ｍ，



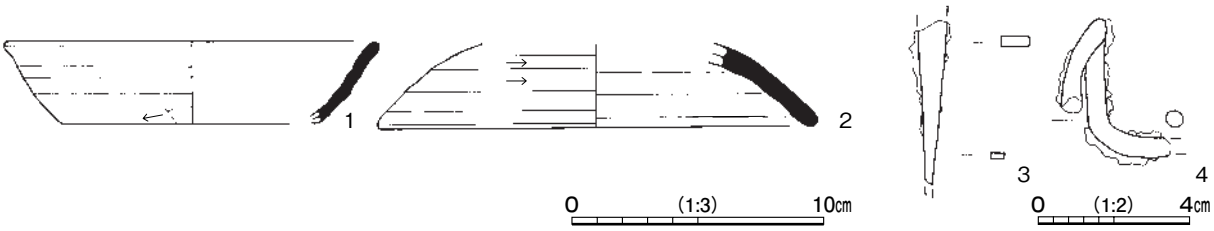
第 246 図　第８号掘立柱建物跡実測図

梁行 4.85 mで，面積は 31.52㎡である。柱間寸法は，桁行がＰ１－Ｐ２間が 2.20 m（７尺），Ｐ２－Ｐ３間が 2.85 m（９尺），Ｐ３－Ｐ４間が 1.40 m（５尺），Ｐ６－Ｐ７間が 2.15 m（７尺），Ｐ７－Ｐ８間が 2.10 m（７尺），Ｐ８－Ｐ９間が 2.25 m（７尺），梁行がＰ４－Ｐ５間が 2.50 m（８尺），Ｐ５－Ｐ６間が 2.25 m（７尺）で，Ｐ９とＰ 10 間が 2.55 m（８尺），Ｐ 10 －Ｐ１間が 2.30 m（８尺）である。桁行・梁行方向ともややばらつきがあるが，柱筋は揃っている。

柱穴　10 か所。掘方の平面形は円形または楕円形で，Ｐ３・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ９は柱の抜き取りのため，楕円形に大きく掘り込まれている。長径 72 ～ 145cm，短径 58 ～ 102cm，深さは 18 ～ 72cm とややばらつきがある。第８層が柱痕，第９・10 層が埋土，それ以外は抜き取り後の堆積土である。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ 10 の底面には，柱の当たりが確認できる。重複している第 129 号土坑にも，底面に柱の当たりが確認でき，柱穴の可能性がある。

遺物出土状況　土師器片 140 点（坏３，坩３，高坏２，甕類 132），須恵器片 38 点（坏 23，高台付坏１，蓋５，鉢・甕・甑類９），金属製品２点（鉄鏃$_{カ}$，不明），鍛冶関連遺物（鉄滓 23.4 ｇ）が出土している。遺物は特にＰ３から多く出土している。出土した土器のうち，明らかに時期が遡る土師器の坩や高杯は，隣接する第６号竪穴建物跡からの混入の可能性が高い。１はＰ９，２はＰ６の覆土中からそれぞれ出土している。３はＰ９の底面近くから出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀中葉に比定できる。隣接する同期の建物跡の主軸方向ともほぼ一致している。



第 247 図　第８号掘立柱建物跡出土遺物実測図

表 164　第８号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 247 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	坏	［14.9］	3.2	［10.3］	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ９	５％新治窯
2	須恵器	蓋	［17.3］	3.3	－	長石・雲母・細礫	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	Ｐ６	10％新治窯

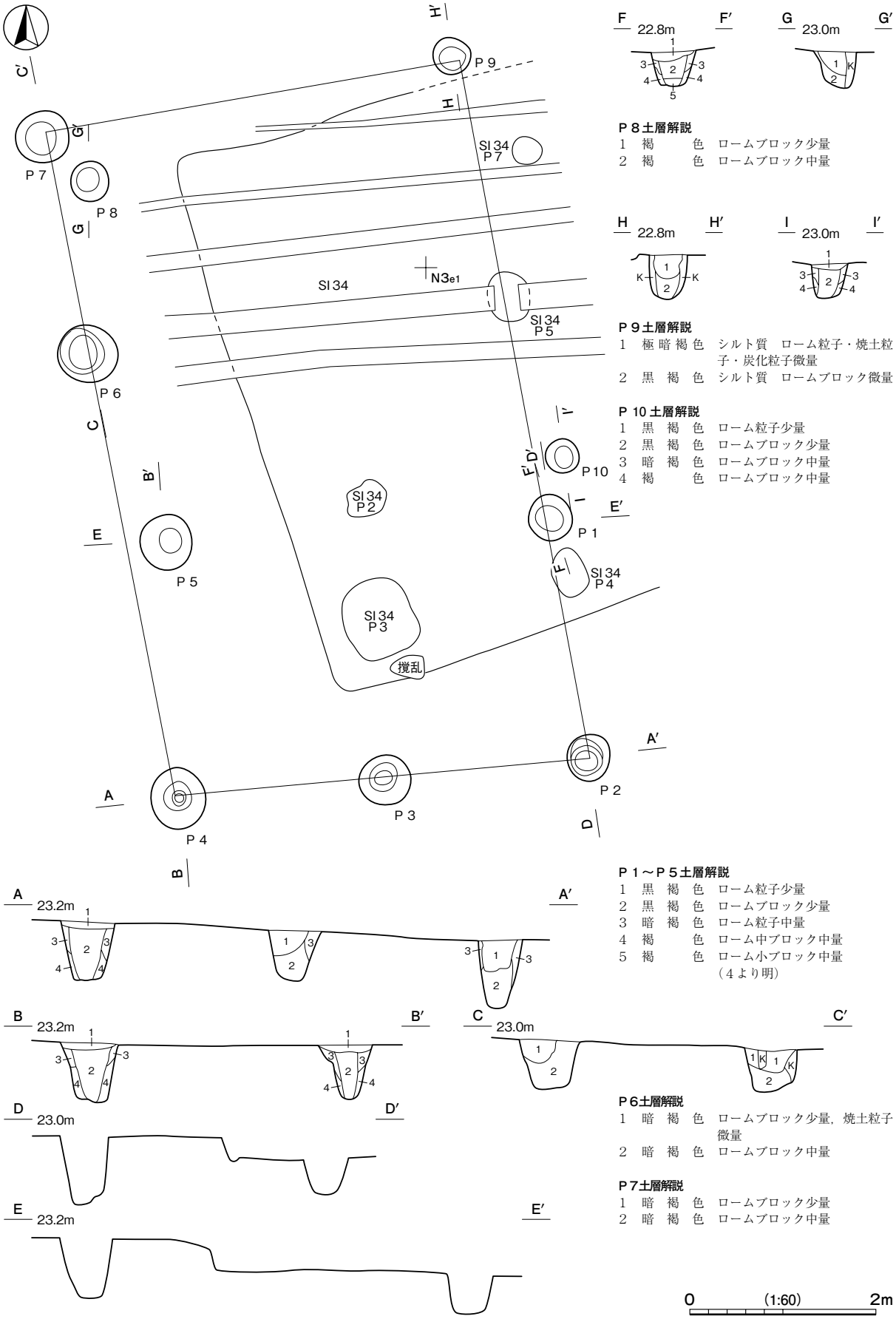
番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
3	鉄鏃$_{カ}$	(4.3)	0.7	0.2 ～ 0.3	2.22	鉄	茎部分　断面長方形　刀子の可能性もあり	Ｐ９柱痕	PL55
4	不明	3.7	(2.8)	0.5	8.91	鉄	屈曲している　断面丸　後代のものか	Ｐ４	PL55

第９号掘立柱建物跡（第 248・249 図　PL25）

位置　調査Ⅱ区北西部のＮ２d9 ～Ｎ３f1 区，標高 23 mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第 34 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。本跡の範囲内に第 252 号土坑が位置しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－ 13 °－Ｗの南北棟である。規模は桁行 7.60 m，梁行 4.50 mで，面積は 34.20㎡である。柱間寸法は，桁行がＰ１－Ｐ２間が 2.60 m（９尺），Ｐ４－Ｐ５



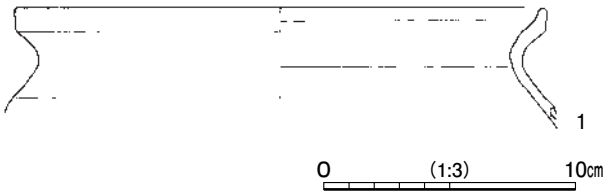
第 248 図　第９号掘立柱建物跡実測図

間が 2.70 m（９尺），Ｐ５－Ｐ６間が 2.20 m（７尺），Ｐ６－Ｐ７間が 2.40 m（８尺）で，梁行方向がＰ２－Ｐ３間が 2.20 m（７尺），Ｐ３－Ｐ４間が 2.25 m（７尺）である。Ｐ５は柱筋がずれている。Ｐ１－Ｐ９間とＰ７－Ｐ９間のピットは確認できなかった。Ｐ１－Ｐ９間に，深さ 40cm の第 34 号竪穴建物跡のＰ５が位置しており，これを本跡に帰属するものとすると，桁行・梁行とも柱筋がほぼ揃っている。Ｐ１との間尺は 2.40 m（８尺），Ｐ９との間尺は 2.60 m（８尺）である。

柱穴　10 か所。掘方の平面形は円形で，長径 36 ～ 66cm，短径 35 ～ 62cm，深さは 37 ～ 72cm とややばらつきがある。Ｐ６・Ｐ７以外には柱痕が確認できる。Ｐ８とＰ 10 は小屋組みに直接関与していないが，Ｐ１・Ｐ７に隣接していることから，立て替え，あるいは補助的な柱穴と考えることができる。

遺物出土状況　土師器片 41 点（坏４，高坏３，甕類 28，不明６），須恵器片４点（坏２，蓋２）が出土している。遺物は少量で，小片のものが多い。時期が遡る土師器の高坏は，重複する第 34 号竪穴建物跡からの混入と考えられる。

所見　時期は，出土土器から８世紀から９世紀代に比定できるが，いずれも小片のため詳細な時期までは判断し得ない。今回の調査区では，掘立柱建物跡が調査区中央部でまとまって確認されているが，本跡のみ北西部に位置すること，また主軸方向も他と異なること，柱穴の径が小さめであることなどから，より後代のものの可能性もあるが，周辺に明らかに後出する時期の遺構はなく，判断し得ない。よってここでは出土土器から当期のものと考えておきたい。



第 249 図　第９号掘立柱建物跡出土遺物実測図

表 165　第９号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 249 図）

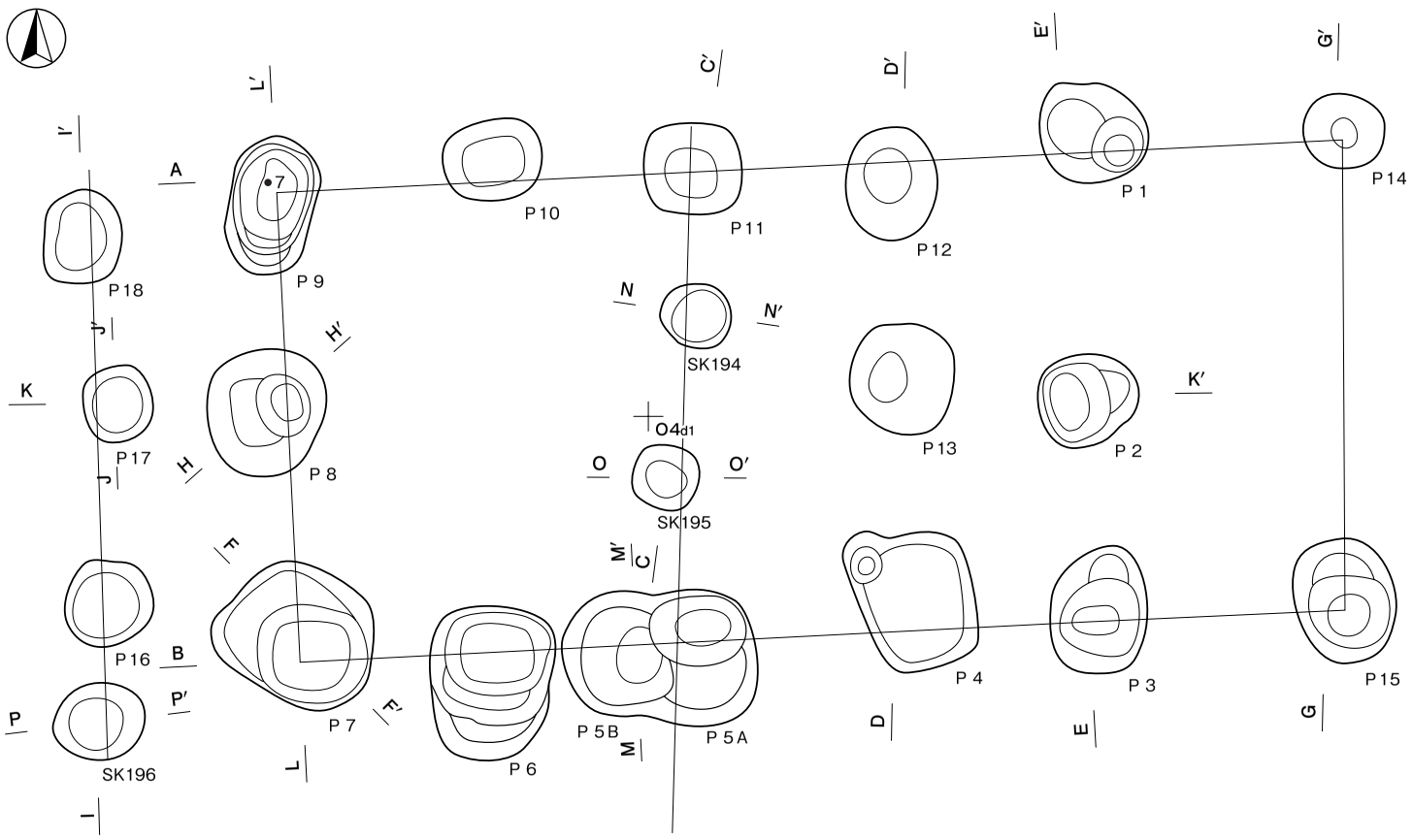
番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師器	甕	［21.0］	（4.8）	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横位のナデ　体部外・内面ナデ	Ｐ５	５％

第 11 号掘立柱建物跡（第 250 ～ 252 図　PL25）

位置　調査Ⅱ区南東部のＯ３c9 ～Ｏ４d2 区，標高 23 mの台地平坦部に位置している。

重複関係　第６号竪穴建物跡を掘り込んでいる。本跡の範囲内に第 194 ～ 196 号土坑が位置しているが，堆積状況での新旧関係は不明である。

規模と形状　間尺とＰ１からＰ 12・Ｐ 14・Ｐ 15 の柱穴の配置から，桁行５間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－ 85 °－Ｅの東西棟と想定される。規模は桁行 8.75 m，梁行 3.85 mで，面積は 33.69㎡である。柱間寸法は桁行がＰ９－Ｐ 10 間が 1.80 m（５尺），Ｐ 10 －Ｐ 11 間が 1.60 m（５尺），Ｐ 11 －Ｐ 12 間が 1.70 m（６尺），Ｐ 12 －Ｐ１間が 1.65 m（５尺），Ｐ１－Ｐ 14 間が 2.00 m（７尺），Ｐ７－Ｐ６間が 1.55 m（５尺），Ｐ６－Ｐ５Ａ間が 1.55 m（５尺），Ｐ５Ａ－Ｐ４間が 2.00 m（７尺），Ｐ４－Ｐ３間が 1.55 m（５尺），Ｐ３－Ｐ 15 間が 2.00 m（７尺）で，ばらつきがある。また梁行方向はＰ１－Ｐ２間が 2.00 m（７尺），Ｐ２－Ｐ３間が 1.85 m（６尺），Ｐ７－Ｐ８間が 2.10 m（７尺），Ｐ８－Ｐ９間が 1.75 m（６尺）とばらつきがあり，Ｐ 14 とＰ 15 の間にはピットが確認できなかった。柱筋は概ね揃っていると言えるが，Ｐ６・Ｐ 10 はやや外側に，Ｐ４・Ｐ 12 はやや内側に位置している。これら以外に，南北軸をほぼ同じくしてＰ 16 －Ｐ 17 －Ｐ 18 が位置しているが，他に比べて間尺が狭く，柱筋も通っていないことなどから，庇などの可能性はあるものの，小屋



第 250 図　第 11 号掘立柱建物跡・第 194 ～ 196 号土坑実測図

P 1 ～ P 4・P 12 ～ P 15 土層解説

1	暗	褐	色	ローム粒子中量
2	暗	褐	色	ローム粒子中量（1 より暗）
3	暗	褐	色	ローム粒子中量，ロームブロック少量
4	褐		色	ロームブロック中量
5	暗	褐	色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
6	暗	褐	色	ロームブロック少量，炭化粒子微量
7	暗	褐	色	ローム粒子少量
8	褐		色	ロームブロック中量
9	黒	褐	色	ローム粒子少量

P 9 ～ P 11・P 16 ～ P 18・S K 194 ～ 196 土層解説

1	黒	褐	色	ロームブロック少量
2	暗	褐	色	ロームブロック中量
3	暗	褐	色	ロームブロック少量
4	褐		色	ロームブロック中量
5	暗	褐	色	ローム粒子中量，焼土粒子微量
6	暗	褐	色	ローム粒子中量
7	暗	褐	色	ロームブロック中量
8	褐		色	ロームブロック中量
9	暗	褐	色	ロームブロック少量
10	黒	褐	色	ローム粒子微量

P 5 土層解説

1	黒	褐	色	ロームブロック微量
2	黒	褐	色	ロームブロック少量
3	暗	褐	色	ロームブロック中量
4	暗	褐	色	ローム粒子微量
5	暗	褐	色	ロームブロック中量
6	暗	褐	色	ローム粒子微量
7	褐		色	ロームブロック中量

P 6 土層解説

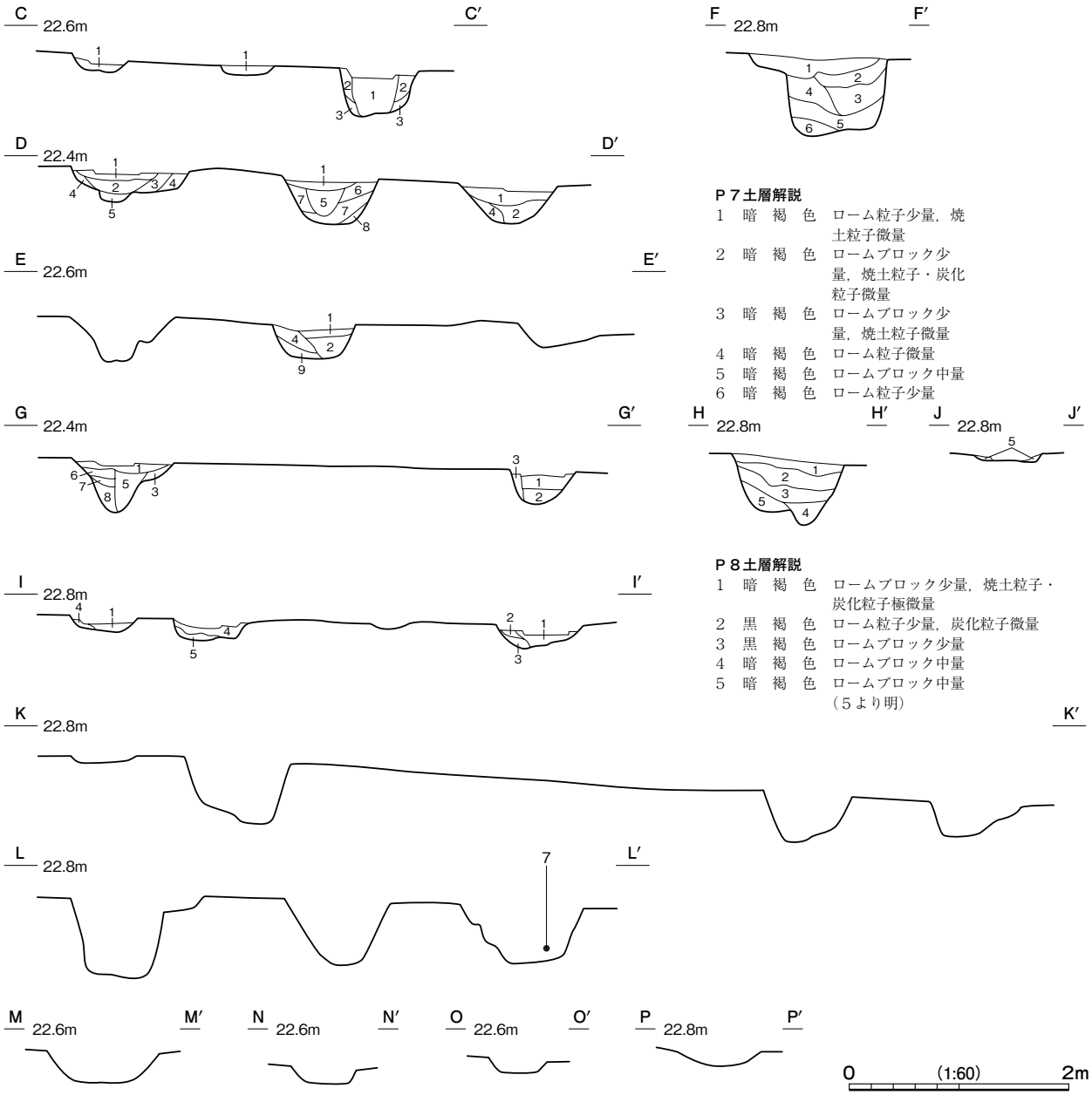
1	暗	褐	色	ロームブロック微量
2	暗	褐	色	ロームブロック少量
3	黒	褐	色	ロームブロック微量
4	褐		色	ロームブロック多量
5	暗	褐	色	ロームブロック中量

0　(1:60)　2m

組みの一部とはしなかった。Ｐ 16 ～Ｐ 18 はやや小形の円形の掘方で，別棟の重複の可能性もあるが，組み合うピットを確認することはできない。本跡付近にある第 194 ～ 196 号土坑は，径が 50 ～ 70cm で，掘方の形状がピット状である。第 196 号土坑はＰ 16 ～Ｐ 18 の，第 194・195 号土坑はＰ５Ａ～Ｐ 11 の柱筋上にあり，庇や間仕切りなど本跡に関連するピット，あるいは本跡と重複する別棟の存在も考えられる。

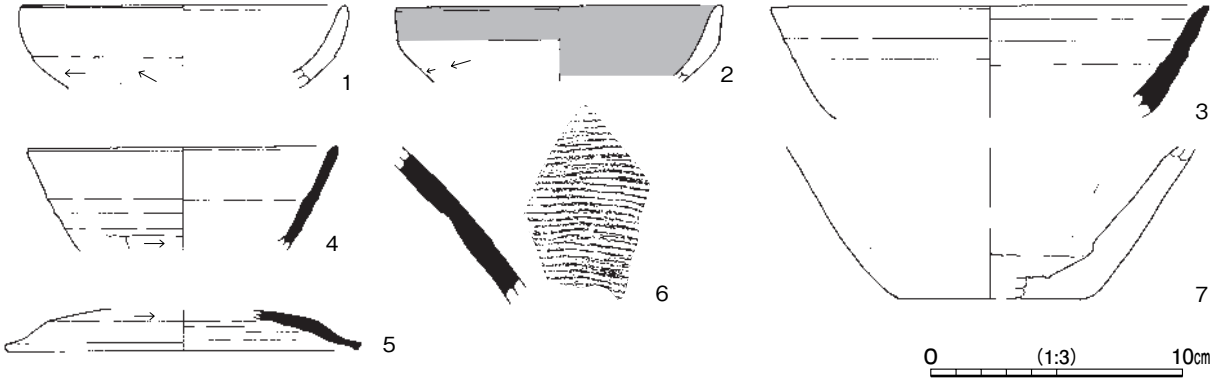
柱穴　18 か所。小屋組みに関連する柱穴の掘方の平面形は楕円形または隅丸方形で，長径 67 ～ 127cm，短径 61 ～ 109cm，深さ 14 ～ 72cm とばらつきがある。Ｐ 16 ～Ｐ 18 は深さが６～ 13cm と浅い。Ｐ 11・Ｐ 15 に柱痕が残るが，ほかは抜き取り後の堆積である。

遺物出土状況　土師器片 323 点（坏８，椀６，高坏７，壺･甕類 302），須恵器片 53 点（坏 25，蓋９，瓶類２，鉢･甕･甑類 17），鍛冶関連遺物（鉄塊系遺物 4.2 ｇ）のほか，縄文土器片１点，陶器片１点（鉢）が出土している。遺物はＰ６～Ｐ９の覆土中から多く出土している。７はＰ９の覆土下層から出土している。



第 251 図　第 11 号掘立柱建物跡実測図

所見　出土土器は７世紀後葉から９世紀代まで確認でき，いずれの時期とも判断しがたい。桁行方向が第７・８号掘立柱建物跡などとほぼ直交することから，本跡の時期もこれらに近い８世紀代と考えたい。



第 252 図　第 11 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

表 166　第 11 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 252 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師器	坏	[12.8]	(3.3)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横位のナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	Ｐ 13	５％
2	土師器	坏	[12.8]	(3.0)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横位のナデ　黒色処理　体部外面ヘラ削り内面ナデ　黒色処理	Ｐ４	20%
3	須恵器	坏	[17.2]	(4.4)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	ロクロナデ	Ｐ６	10%新治窯
4	須恵器	坏	[12.2]	(4.1)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ５	５%新治窯
5	須恵器	蓋	[13.7]	(1.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	天井部回転ヘラ削り　酸化焔焼成	Ｐ８	10%新治窯
6	須恵器	甕	－	(6.2)	－	長石・石英・雲母	黄灰	普通	外面横位の平行叩き　内面ナデ	Ｐ 18 掘方	５%新治窯
7	土師器	甕	－	(6.0)	[7.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ磨き　内面ヘラナデ　底部木葉痕	Ｐ９下層	20% PL44

第 12 号掘立柱建物跡（第 253・254 図　PL24）

位置　調査Ⅱ区南部のＯ３h8 ～Ｏ３i9 区，標高 23 ｍの台地平坦部に位置している。

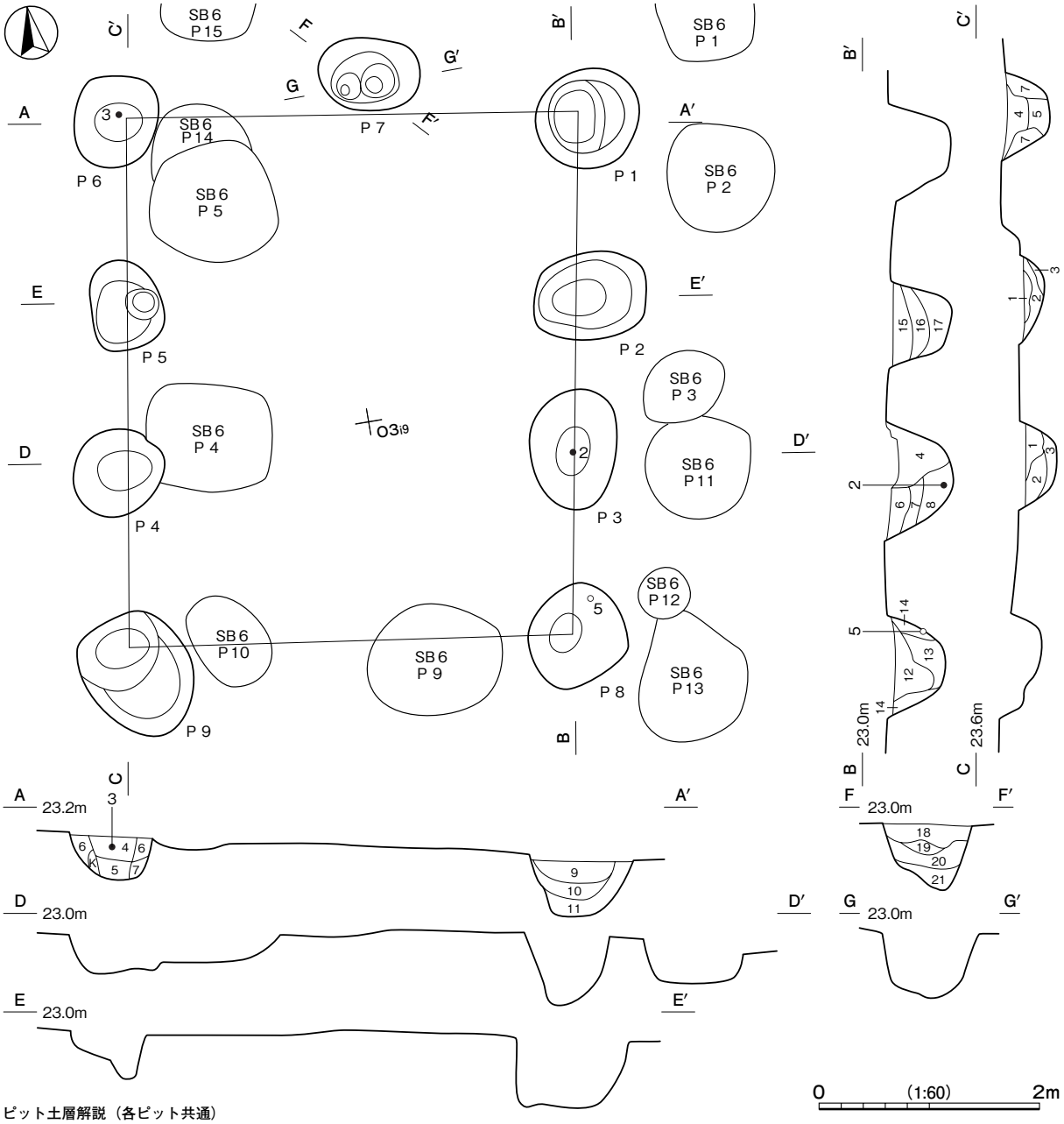
重複関係　第 21 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。第６号掘立柱建物跡と重複しているが，新旧関係は不明である。調査の手順等から本跡が新しいと考えられる。

規模と形状　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－ 18 °－Ｅの南北棟である。規模は桁行 4.80 ｍ，梁行 4.10 ｍで，面積は 19.68㎡である。柱間寸法は桁行がＰ１－Ｐ２間が 1.70 ｍ（６尺），Ｐ２－Ｐ３間が 1.35 ｍ（５尺），Ｐ３－Ｐ８間が 1.65 ｍ（６尺），Ｐ９－Ｐ４間が 1.60 ｍ（５尺），Ｐ４－Ｐ５間が 1.55 ｍ（５尺），Ｐ５－Ｐ６間が 1.75 ｍ（６尺）で，ほぼ揃っている。梁行はＰ６－Ｐ７間が 2.15 ｍ（７尺），Ｐ７－Ｐ１間が 1.95 ｍ（６尺）とばらつきがあり，Ｐ８とＰ９の間のピットは確認できなかった。第６号掘立柱建物跡のＰ９がこの間にあり，これを南妻の柱穴とすると，間尺が西から 2.7 ｍ（９尺），1.30 ｍ（５尺）となり，ばらつきが大きい。柱筋はおおむね揃っているが，妻側のＰ７は北にずれている。

柱穴　９か所。掘方の平面形は円形または楕円形で，規模は長径 82 ～ 116cm，短径 65 ～ 95cm，深さ 20 ～ 63cm とややばらつきがある。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ６に柱痕が残るが，ほかは抜き取り後の堆積である。

遺物出土状況　土師器片 14 点（坏１，甕類 13），須恵器片 51 点（坏 31，高台付坏１，蓋３，鉢・甕・甑類 16），土製品２点（支脚），金属製品１点（刀子$_{カ}$）のほか，剥片２点（黒曜石）が出土している。遺物は少量で，小片が多い。２はＰ３の埋土下層から，３はＰ６の柱痕上層から，それぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から９世紀中葉に比定できる。



ピット土層解説（各ピット共通）

1　暗　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ローム中ブロック少量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子微量
6　暗　褐　色　ロームブロック中量
7　暗　褐　色　ローム粒子多量
8　暗　褐　色　ロームブロック多量
9　暗　褐　色　ロームブロック少量
10　黒　褐　色　ローム粒子中量
11　暗　褐　色　ロームブロック中量
12　褐　　色　ロームブロック少量
13　暗　褐　色　ロームブロック中量
14　褐　　色　ロームブロック中量
15　黒　褐　色　ローム粒子微量
16　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
17　暗　褐　色　ロームブロック少量
18　黒　褐　色　ロームブロック少量
19　暗　褐　色　ロームブロック中量
20　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
21　暗　褐　色　ロームブロック中量

第 253 図　第 12 号掘立柱建物跡実測図

表 167　第 12 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（1）（第 254 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	坏	−	(3.3)	[7.0]	長石・石英・細礫	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	P 7	40％新治窯 PL44
2	須恵器	高台付坏	−	(2.4)	6.2	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼付	P 3	30％新治窯
3	須恵器	甕	−	(6.6)	−	長石・石英	黄灰	普通	外面斜位の平行叩き　下端部ヘラ削り　内面ナデ　下端部ヘラ削り	P 6	5％新治窯
4	須恵器	甕	−	(8.1)	−	長石・石英	黄灰	普通	外面縦位の平行叩き　内面ナデ	P 3	5％新治窯

第 254 図　第 12 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

表 168　第 12 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（２）（第 254 図）

番号	器　種	径	厚さ	高さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
5	支脚	(7.6)	(3.8)	(8.8)	194.25	長石・石英・雲母	にぶい橙	ナデ整形	Ｐ８	
6	支脚	[8.2]	(1.7)	(4.7)	42.20	長石・赤色粒子	橙	下端部　ナデ整形	Ｐ４	観察表のみ

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
7	刀子ヵ	(3.7)	(0.9)	0.2 ～ 0.4	2.91	鉄	茎部分ヵ　断面長方形	Ｐ１	観察表のみ

第 13 号掘立柱建物跡（第 255・256 図　PL25）

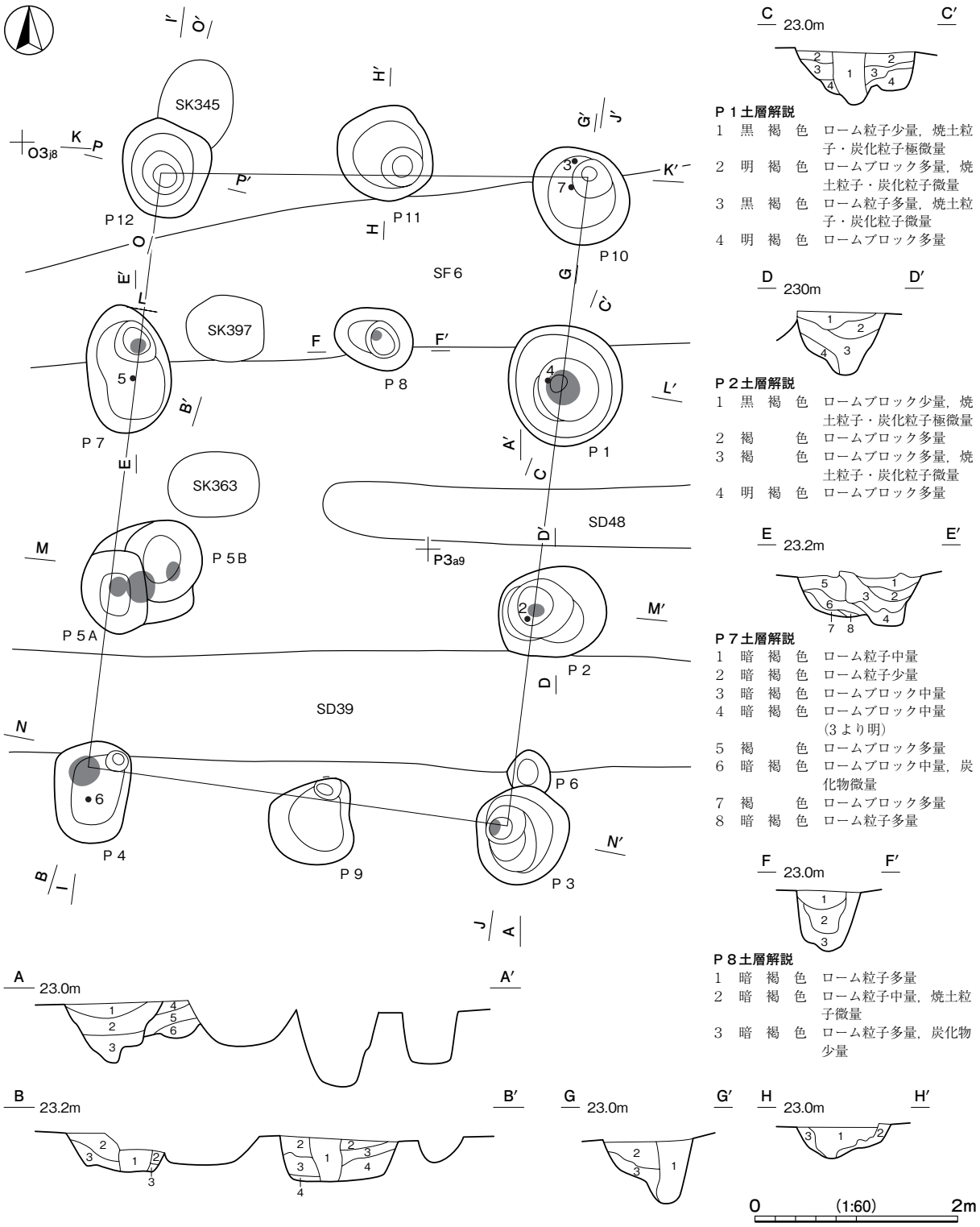
位置　調査Ｉ区北西部のＯ３j8 ～Ｐ３a9 区，標高 23 ｍの台地平坦部に位置している。

重複関係　第 81 号竪穴建物跡を掘り込み，第 39 号溝，第６号道路に掘り込まれている。Ｐ 12 が第 345 号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。本跡の範囲内に第 363・397 号土坑，第 48 号溝が位置しているが，本跡との堆積状況からの新旧関係は不明である。

規模と形状　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－４°－Ｅの南北棟である。規模は桁行 6.45 ｍ，梁行 4.20 ｍで，面積は 27.09㎡である。柱間寸法は，桁行がＰ 10 －Ｐ１間が 2.10 ｍ（７尺），Ｐ１－Ｐ２間が 2.25 ｍ（７尺），Ｐ２－Ｐ３間が 2.10 ｍ（７尺），Ｐ４－Ｐ５Ａ間が 1.80 ｍ（６尺），Ｐ５Ａ－Ｐ７間が 2.40 ｍ（８尺），Ｐ７－Ｐ 12 間が 1.70 ｍ（６尺）で，柱筋は揃っているものの，間尺はばらつきがある。梁行はＰ３－Ｐ９間が 1.85 ｍ（６尺），Ｐ９－Ｐ４間が 2.30 ｍ（８尺），Ｐ 12 －Ｐ 11 間が 2.40 ｍ（８尺），Ｐ 11 －Ｐ 10 間が 1.80 ｍ（６尺）で，柱筋は揃っており，対応する北妻・南妻の間尺は等しい。Ｐ８はＰ９－Ｐ 11 の棟筋上に位置している。

柱穴　12 か所。掘方の平面形は円形または楕円形で，Ｐ６を除き柱穴の規模は長径 78 ～ 125cm，短径 59 ～ 112cm，深さ 36 ～ 83cm である。全体的に径は大きく，深さはややばらつきがある。Ｐ１・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ 10 に柱痕が見られ，Ｐ１～Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８の底面に柱の当たりが確認できた。ほかは抜き取り後の堆積である。Ｐ６は柱の抜き取りに伴うピットと考えられ，Ｐ７の断面にも抜き取りの痕跡が明瞭に残されている。第 397 号土坑にも柱痕と底面に柱の当たりが確認でき，柱穴の可能性が高いが，本跡に伴うかどうかは不明である。

遺物出土状況　土師器片 141 点（坏６，椀２，坩１，高坏４，甕類 113，不明 15），須恵器片 43 点（坏 17，高台付坏１，蓋４，盤１，鉢・甕・甑類 20），鍛冶関連遺物（羽口１，椀状滓 232.6 ｇ，鉄塊系遺物 214.9 ｇ，



P１土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
2 明 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒 褐 色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 明 褐 色 ロームブロック多量

P２土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
2 褐 色 ロームブロック多量
3 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 明 褐 色 ロームブロック多量

P７土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子中量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量
3 暗 褐 色 ロームブロック中量
4 暗 褐 色 ロームブロック中量(3より明)
5 褐 色 ロームブロック多量
6 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化物微量
7 褐 色 ロームブロック多量
8 暗 褐 色 ローム粒子多量

P８土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子多量
2 暗 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子微量
3 暗 褐 色 ローム粒子多量，炭化物少量

P３・P６土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック多量，炭化物少量，焼土粒子微量
2 黒 褐 色 ロームブロック多量，炭化物・焼土粒子微量
3 明 褐 色 ロームブロック多量
4 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
6 暗 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

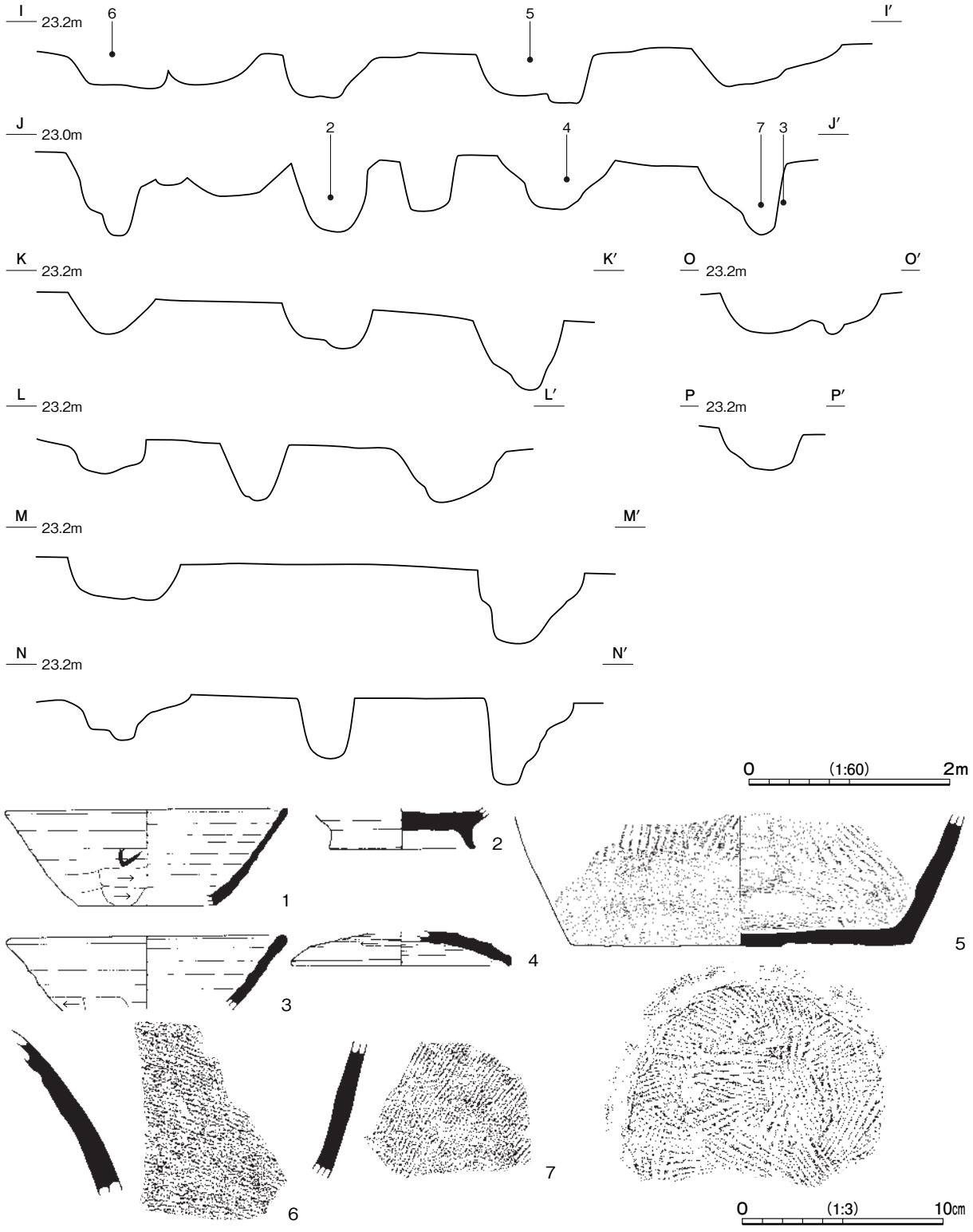
P４土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 明 褐 色 ロームブロック多量，炭化粒子微量
3 褐 色 ロームブロック少量

P５・P 10・P 11 土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐 色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 黄 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 255 図　第 13 号掘立柱建物跡実測図



第 256 図　第 13 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

鉄滓 29.5 ｇ）のほか，剥片２点（チャート，瑪瑙）が出土している。１はＰ３の覆土中から，２はＰ２の覆土中から，３・７はＰ 10 の埋土下層から，４はＰ１の柱痕から，５はＰ７の覆土上層から，６はＰ４の埋土上層から，それぞれ出土している。

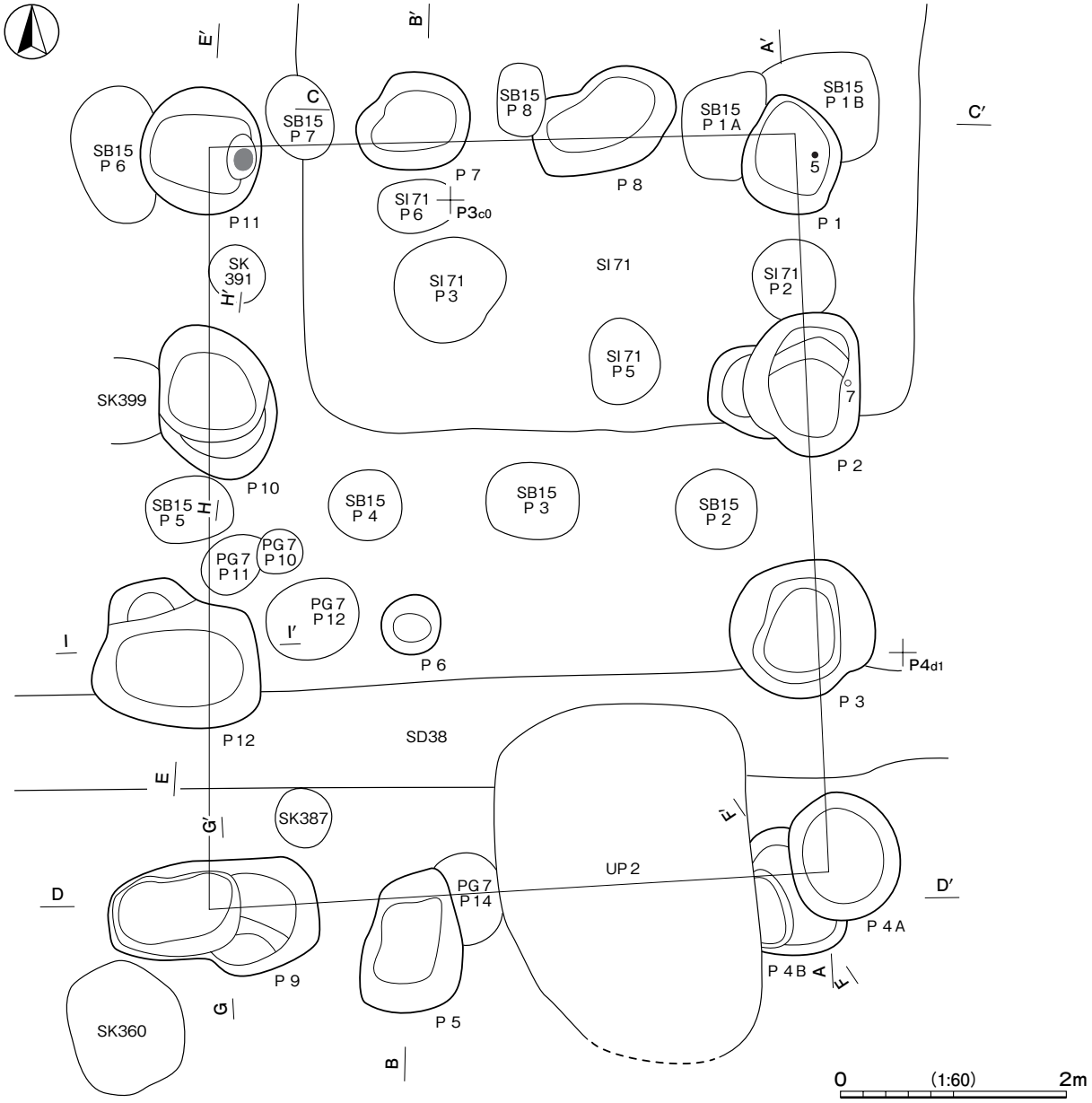
所見　時期は，出土土器から９世紀中葉に比定できる。主軸方向をほぼ同じくする第 12 号掘立柱建物跡の時期とも矛盾しない。

表 169　第 13 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 256 図）

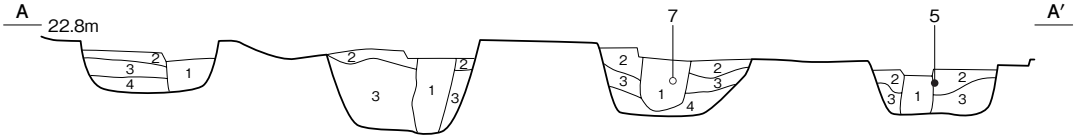
番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	坏	［14.0］	(4.7)	［6.8］	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り　体部に墨書「□」	P 3	20%新治窯
2	須恵器	高台付坏	－	(2.0)	7.2	長石・石英・雲母	灰白	普通	ロクロナデ	P 2	40%新治窯
3	須恵器	坏	［13.4］	(3.6)	－	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り	P 10	10%新治窯
4	須恵器	蓋	10.6	(1.3)	－	長石・石英・雲母	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り　ツマミ欠損	P 1	90%新治窯 PL44
5	須恵器	鉢	－	(6.5)	17.0	長石・石英・雲母・針状鉱物	にぶい黄橙	普通	外面縦位の平行叩き　下端部ヘラ削り　内面当て具痕　底部内面当て具痕　外面剥離	P 7	20%新治窯 PL44
6	須恵器	甕	－	(8.3)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	外面平行叩き　内面ナデ	P 4	5 %新治窯
7	須恵器	甕	－	(8.1)	－	長石・石英・雲母	黄灰	普通	外面斜位の平行叩き　内面当て具痕　ナデ	P 10	5 %新治窯

番号	器　種	最小径	最大径	高さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
8	羽口	－	［7.0］	(4.4)	41.39	長石	橙	中央孔確認　外面一部還元	P 9	観察表のみ

第 14 号掘立柱建物跡（第 257 ～ 259 図　PL25）



第 257 図　第 14 号掘立柱建物跡実測図（1）



P４A土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
2 褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 明褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

P３土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
2 黒褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 明褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

P２土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック多量
4 明褐色 ロームブロック多量

P１土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

P５土層解説

1 暗褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 明褐色 ロームブロック多量
4 褐色 ロームブロック多量

P６土層解説

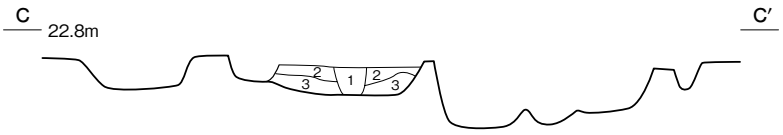
1 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

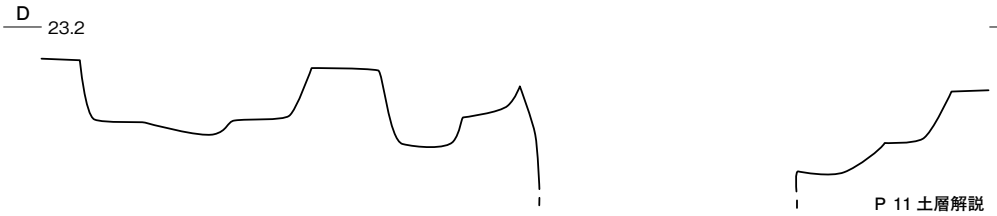
P７土層解説

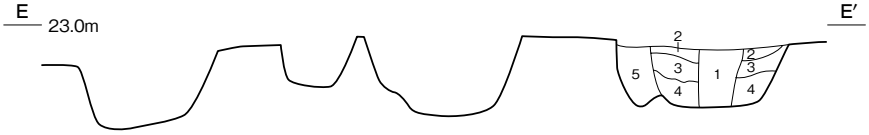
1 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子極微量
2 明褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

P８土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 明褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

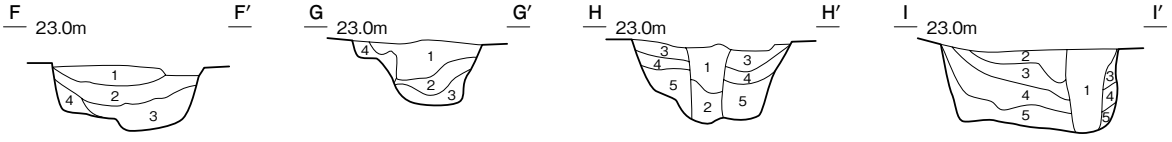






P 11 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 明褐色 ロームブロック多量
3 褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色 ロームブロック多量
5 明褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量



P４B土層解説

1 黒褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子多量，焼土粒子微量
4 黒褐色 ローム粒子多量

P９土層解説

1 暗褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック多量
3 褐色 ロームブロック多量
4 明褐色 ロームブロック多量

P 10 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量，炭化物少量
2 にぶい黄褐色 ローム粒子多量
3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量
4 暗褐色 ロームブロック中量，炭化物少量
5 にぶい黄褐色 ローム粒子多量

P 12 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 明褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
5 明褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

0 (1:60) 2m

第 258 図 第 14 号掘立柱建物跡実測図（２）

位置　調査Ⅰ区北西部のＰ３b9～Ｐ３d0区，標高23ｍの台地平坦部に位置している。

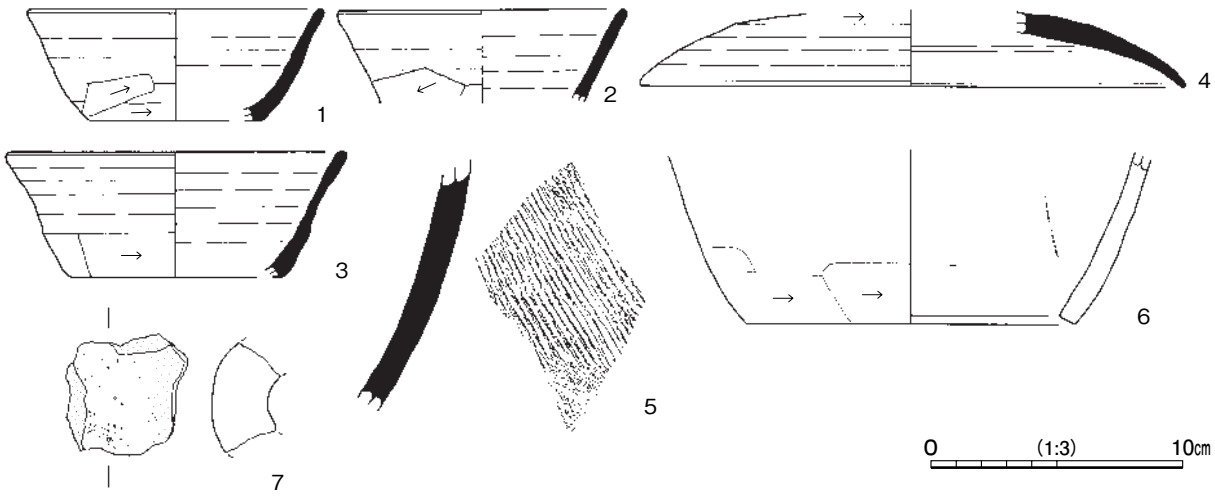
重複関係　第71号竪穴建物跡，第15号掘立柱建物跡，第399号土坑を掘り込み，第２号地下式坑，第38号溝に掘り込まれている。Ｐ５が第７号ピット群のＰ14を掘り込んでいる。それ以外の第７号ピット群との新旧関係は不明である。

規模と形状　桁行３間，梁行３間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－３°－Ｗの南北棟である。規模は桁行6.70ｍ，梁行5.50ｍで，面積は36.85㎡である。柱間寸法は，桁行がＰ１－Ｐ２間が2.25ｍ（７尺），Ｐ２－Ｐ３間が2.10ｍ（７尺），Ｐ３－Ｐ４間が2.15ｍ（７尺），Ｐ９－Ｐ12間が2.15ｍ（７尺），Ｐ12－Ｐ10間が2.35ｍ（８尺），Ｐ10－Ｐ11間が2.20ｍ（７尺）で，東桁・西桁のそれぞれの間尺はほぼ揃っているものの，東西の間尺でややばらつきがある。梁行はＰ４－Ｐ５間が第２号地下式坑に掘り込まれているため不明であるが，Ｐ５－Ｐ９間は1.85ｍ（６尺），Ｐ11－Ｐ７間が1.75ｍ（６尺），Ｐ７－Ｐ８間が1.65ｍ（５尺），Ｐ８－Ｐ１間が1.75ｍ（６尺）とばらつきがある。柱筋はほぼ揃っている。Ｐ６はＰ５－Ｐ７間の棟筋上に位置している。

柱穴　12か所。掘方の平面形は円形または隅丸方形に近い楕円形で，Ｐ６を除き柱穴は長径103～183cm，短径74～128cm，深さ20～65cmである。全体的に径は大きく，深さはややばらつきがある。Ｐ４Ｂ・Ｐ９以外は，柱痕が明瞭で，埋土は締まりが強い褐色土が主体である。Ｐ11の底面には，柱の当たりが確認できた。

遺物出土状況　土師器片159点（坏18，椀２，高坏５，壺･甕類134），須恵器片37点（坏23，蓋８，鉢･甕･甑類６），灰釉陶器１点（蓋），鍛冶関連遺物（羽口１，鉄塊系遺物95.9ｇ，鉄滓44.0ｇ），焼成粘土塊8.4ｇが出土している。５はＰ１の埋土上層から出土している。１～３もＰ１・Ｐ８・Ｐ10の埋土中からそれぞれ出土している。また，灰釉陶器の蓋は，第15号竪穴建物跡出土の８と接合している。

所見　時期は，出土土器から９世紀前葉に比定できる。



第259図　第14号掘立柱建物跡出土遺物実測図

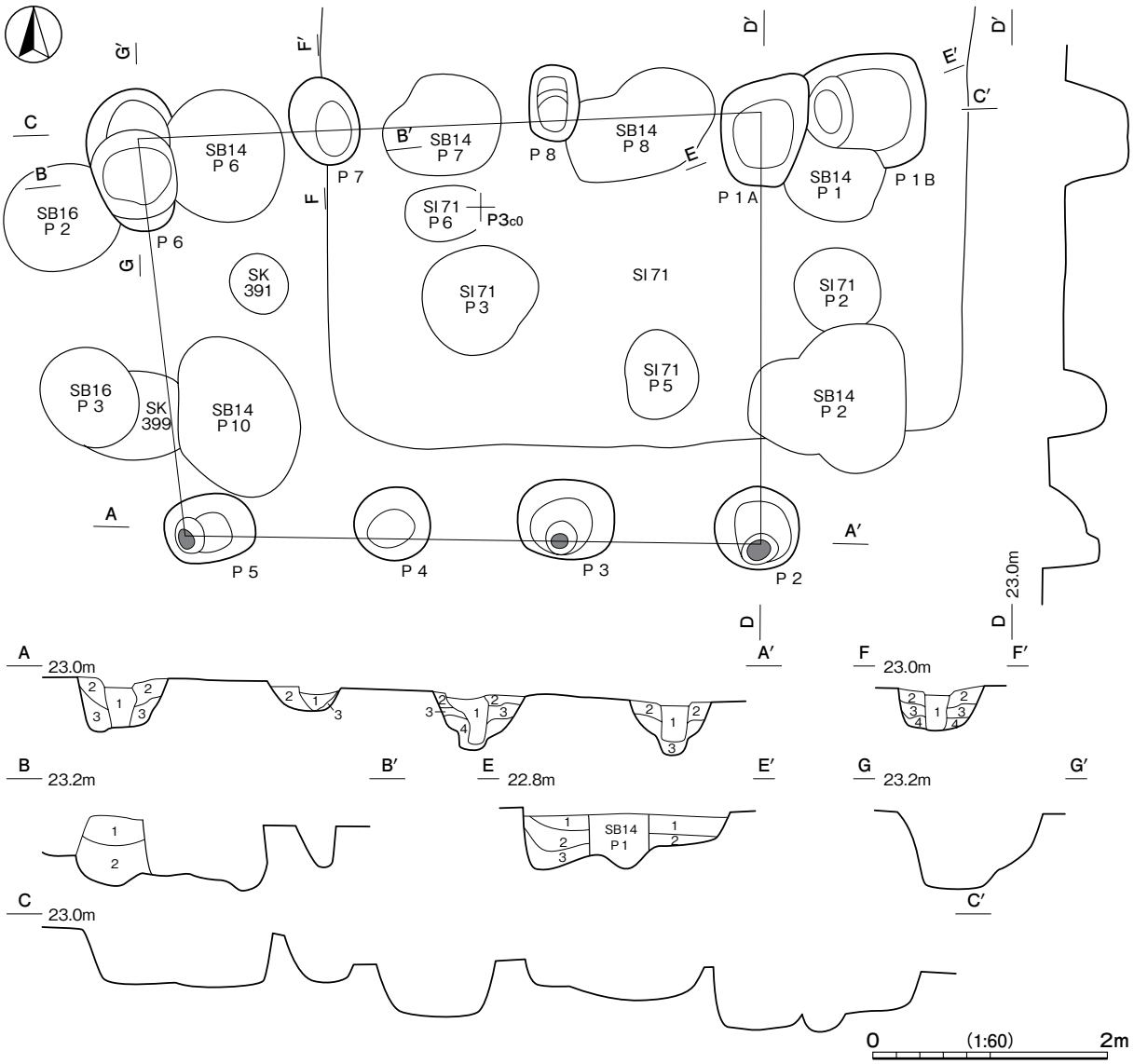
表170　第14号掘立柱建物跡出土遺物観察表（１）（第259図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	［11.6］	4.4	［6.8］	長石・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ１	10%新治窯
2	須恵器	坏	［11.4］	(3.6)	－	長石・石英	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ８	10%新治窯
3	須恵器	坏	［13.4］	4.9	［8.4］	長石・石英・雲母・細礫	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ10	５%新治窯
4	須恵器	蓋	［21.4］	(2.9)	－	長石・石英・雲母・細礫	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	Ｐ６	20%新治窯
5	須恵器	鉢	－	(10.0)	－	長石・石英・雲母	暗黄灰	普通	外面斜位の平行叩き　内面ナデ	Ｐ１	５%新治窯
6	土師器	甑	－	(6.8)	［12.9］	長石・石英・雲母・細礫	にぶい褐	普通	外・内面ヘラナデ　体部外面下端ヘラ削り	Ｐ２	５%

表 171　第 14 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（２）（第 259 図）

番号	器　種	径	幅	長さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
7	羽口	－	(4.8)	(4.7)	48.74	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	先端部一部ガラス化　発泡	Ｐ２	

第 15 号掘立柱建物跡（第 260・261 図　PL25）



Ｐ１土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック･炭化物･粘土ブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量

Ｐ２土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　明　褐　色　ロームブロック多量

Ｐ３土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　褐　　色　ロームブロック多量
3　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

Ｐ４土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　明　褐　色　ロームブロック多量
3　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

Ｐ５土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック多量
2　明　褐　色　ロームブロック多量
3　褐　　色　ロームブロック多量

Ｐ６土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

Ｐ７土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック多量
4　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 260 図　第 15 号掘立柱建物跡実測図

位置　調査Ｉ区北西部のＰ３b9～Ｐ３c0区，標高23ｍの台地平坦部に位置している。

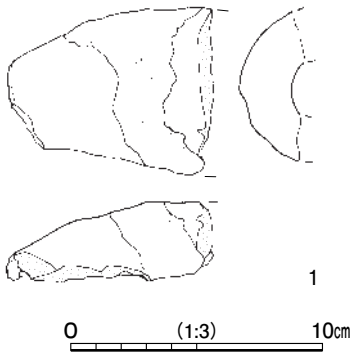
重複関係　第71号竪穴建物跡・第16号掘立柱建物跡を掘り込み，第14号掘立柱建物に掘り込まれている。本跡の範囲内に第391・399号土坑があるが，新旧関係は不明である。

規模と形状　第14号掘立柱建物跡とほぼ同位置で，小形のピットの配置を捉えて本跡とした。桁行３間，梁行１間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－88°－Ｅの東西棟である。規模は桁行5.30ｍ，梁行3.70ｍで，面積は19.61㎡である。柱間寸法は桁行がＰ２－Ｐ３間が1.75ｍ（６尺），Ｐ３－Ｐ４間が1.40ｍ（５尺），Ｐ４－Ｐ５間が1.75ｍ（６尺），Ｐ６－Ｐ７間が1.60ｍ（５尺），Ｐ７－Ｐ８間が1.90ｍ（６尺），Ｐ８－Ｐ１Ａ間が1.80ｍ（６尺）でややばらつきがある。梁行はＰ１Ａ－Ｐ２間が3.70ｍ（12尺），Ｐ５－Ｐ６間が3.40ｍ（12尺）で，間尺はほぼ揃っているが，約3.60ｍと幅が広く，間にピットを確認することができなかった。

柱穴　８か所。掘方の平面形は円形または楕円形で，長径63～122cm，短径40～75cm，深さ20～65cmである。Ｐ２～Ｐ５・Ｐ７柱痕が明瞭で，埋土は締まりが強い褐色土が主体である。Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５の底面には，柱の当たりが確認できた。

遺物出土状況　土師器片53点（坏４，甕類48，不明１），須恵器片19点（坏16，鉢・甕・甑類３），鍛冶関連遺物１点（羽口），石器１点（砥石）が出土している。遺物は少量で小片が多い。１はＰ１の埋土中から出土している。

所見　時期は，出土土器からは判断し得ないが，遺構の重複関係から，８世紀中葉から９世紀中葉に比定できる。



第261図　第15号掘立柱建物跡出土遺物実測図

表172　第15号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第261図）

番号	器　種	径	幅	長さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
1	羽口	－	(6.7)	(8.2)	117.13	長石	にぶい橙	先端部ガラス化　発泡	Ｐ１	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
2	砥石	(3.7)	(2.5)	(2.2)	18.67	凝灰岩	砥面一面のみ	Ｐ４	観察表のみ

第16号掘立柱建物跡（第262・263図　PL25）

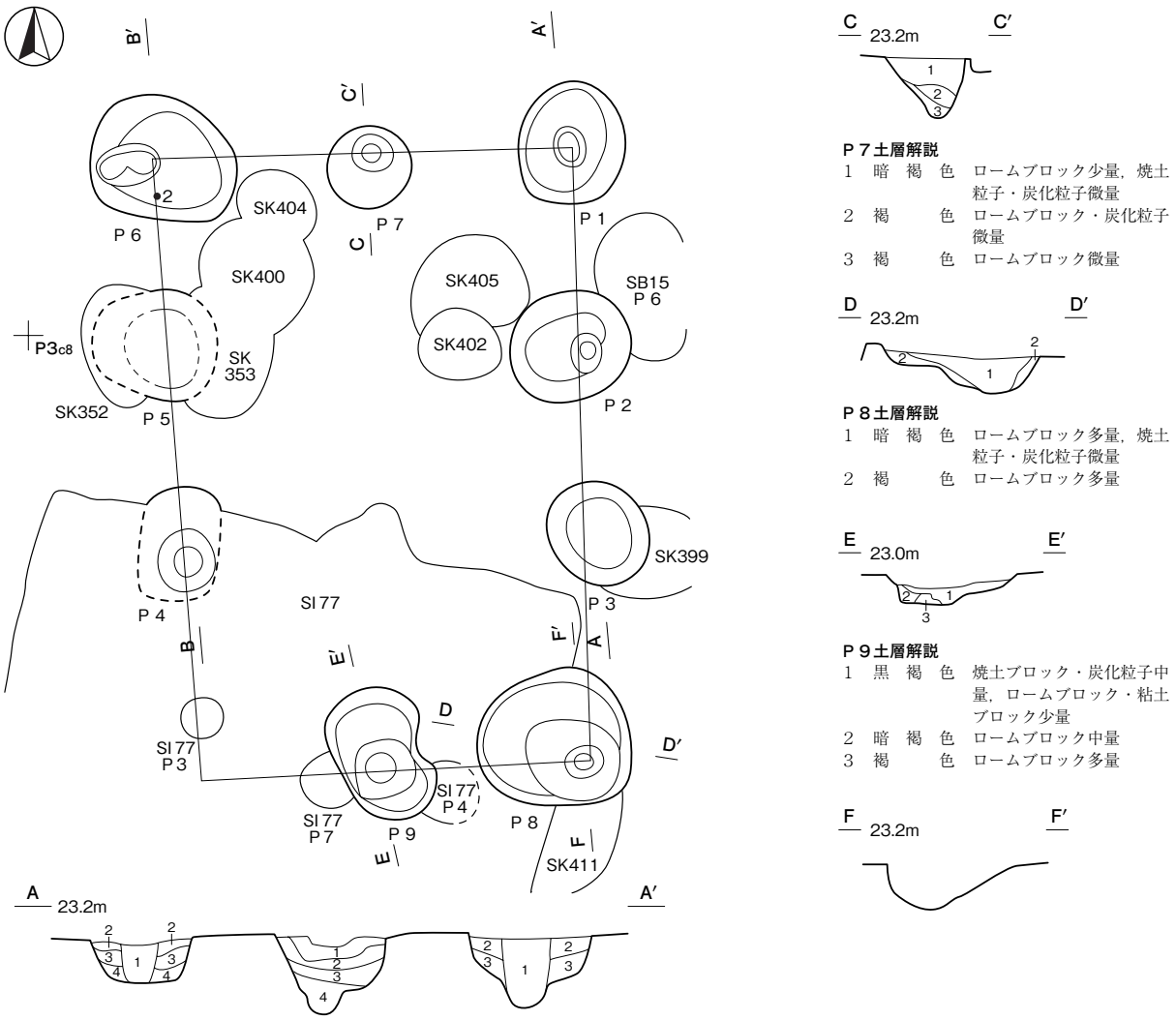
位置　調査Ｉ区北西部のＰ３b8～Ｐ３c9区，標高23ｍの台地平坦部に位置している。

重複関係　第77号竪穴建物跡・第352・353・399号土坑を掘り込んでいる。第15号掘立柱建物跡のＰ６，及び第411号土坑とも重複しているが，土層堆積からの新旧関係は不明である。調査の手順等から判断すると，第411号土坑を掘り込み，第15号掘立柱建物跡のＰ６に掘り込まれていると判断される。本跡の範囲内に第400・402・404・405号土坑があるが，堆積状況での新旧関係は不明である。

規模と形状　第14・15号掘立柱建物跡とほぼ同位置にあり，円形及び楕円形のやや大形のピットを本跡に帰属するピットとしたが，南西隅の１か所が確認できなかった。桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－４°－Ｗの南北棟である。規模は桁行5.10ｍ，梁行3.45ｍで，面積は17.59㎡である。柱間寸法は桁行がＰ１－Ｐ２間が1.60ｍ（５尺），Ｐ２－Ｐ３間が1.55ｍ（５尺），Ｐ３－Ｐ８間が1.90ｍ（６尺），Ｐ４－Ｐ５間が1.80ｍ（６尺），Ｐ５－Ｐ６間が1.50ｍ（５尺），梁行がＰ８－Ｐ９間が1.75ｍ（６尺），Ｐ６－Ｐ

７間が1.80ｍ（６尺），Ｐ７－Ｐ１間が1.65ｍ（５尺）である。桁行・梁行とも，柱筋は通っているものの，間尺はややばらつきがある。

柱穴　９か所。掘方の平面形は円形または楕円形で，長径52～123cm，短径46～123cm，深さ15～61cmである。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ６が柱痕が明瞭で，埋土は締まりの強い褐色土が主体である。Ｐ５と重複する第353号土坑は柱痕が確認できる楕円形の土坑で，規模や覆土が類似する部分があり，あるいは本跡に関連する可能性もある。



Ｐ７土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック微量

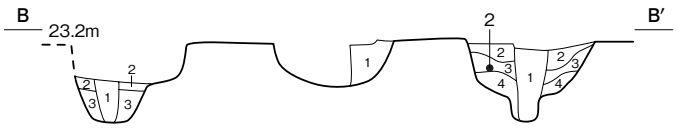
Ｐ８土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック多量

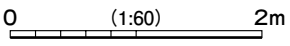
Ｐ９土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ロームブロック・粘土ブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック多量

Ｐ１土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック多量
3　明　褐　色　ロームブロック多量

Ｐ２土層解説
1　褐　　色　ロームブロック多量
2　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子炭化粒子微量
3　黄　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　明　褐　色　ロームブロック多量

Ｐ３土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子多量
2　明　褐　色　ロームブロック多量
3　暗　褐　色　ローム粒子多量
4　明　褐　色　ロームブロック多量





Ｐ４土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック多量
3　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

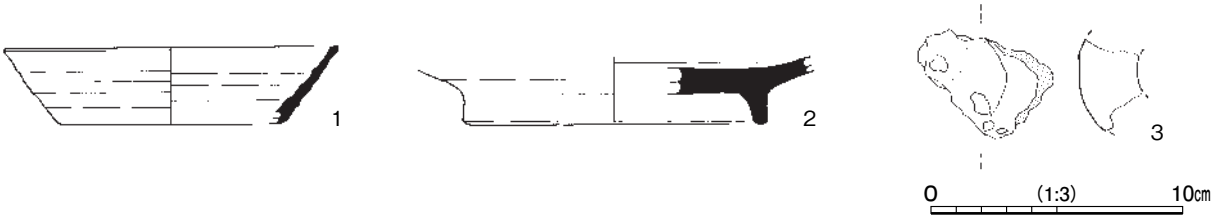
Ｐ５土層解説
1　褐　　色　ロームブロック多量

Ｐ６土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子多量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4　明　褐　色　ロームブロック多量

第262図　第16号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況　土師器片 49 点（坏４，甕類 43，不明２），須恵器片８点（坏５，高台付坏１，蓋１，鉢･甕類１），灰釉陶器片１点（瓶類），鍛冶関連遺物（羽口１，椀状滓 72.9 ｇ，鉄塊系遺物 147.8 ｇ，鉄滓 130.2 ｇ）のほか，縄文土器片１点が出土している。２はＰ６の埋土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀中葉に比定できる。第 14 号掘立柱建物跡と主軸方向や時期をほぼ同じくすることから，有機的な関係性が示唆される。



第 263 図　第 16 号掘立柱建物跡出土遺物実測図

表 173　第 16 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 263 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	坏	［13.0］	3.0	［9.0］	長石・石英	黄灰	普通	ロクロナデ　底部一方向のヘラ削り	Ｐ４	10%新治窯
2	須恵器	盤	－	(2.6)	［11.9］	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼付	Ｐ６	20%新治窯

番号	器　種	径	幅	長さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
3	羽口	－	(4.3)	(5.4)	37.35	長石・石英	にぶい橙	外面還元　発泡　鉄分付着	Ｐ２	

第 17 号掘立柱建物跡（第 264 図）

位置　調査Ｉ区北部のＰ４c2 ～Ｐ４d3 区，標高 22.5 ｍの台地平坦部に位置している。

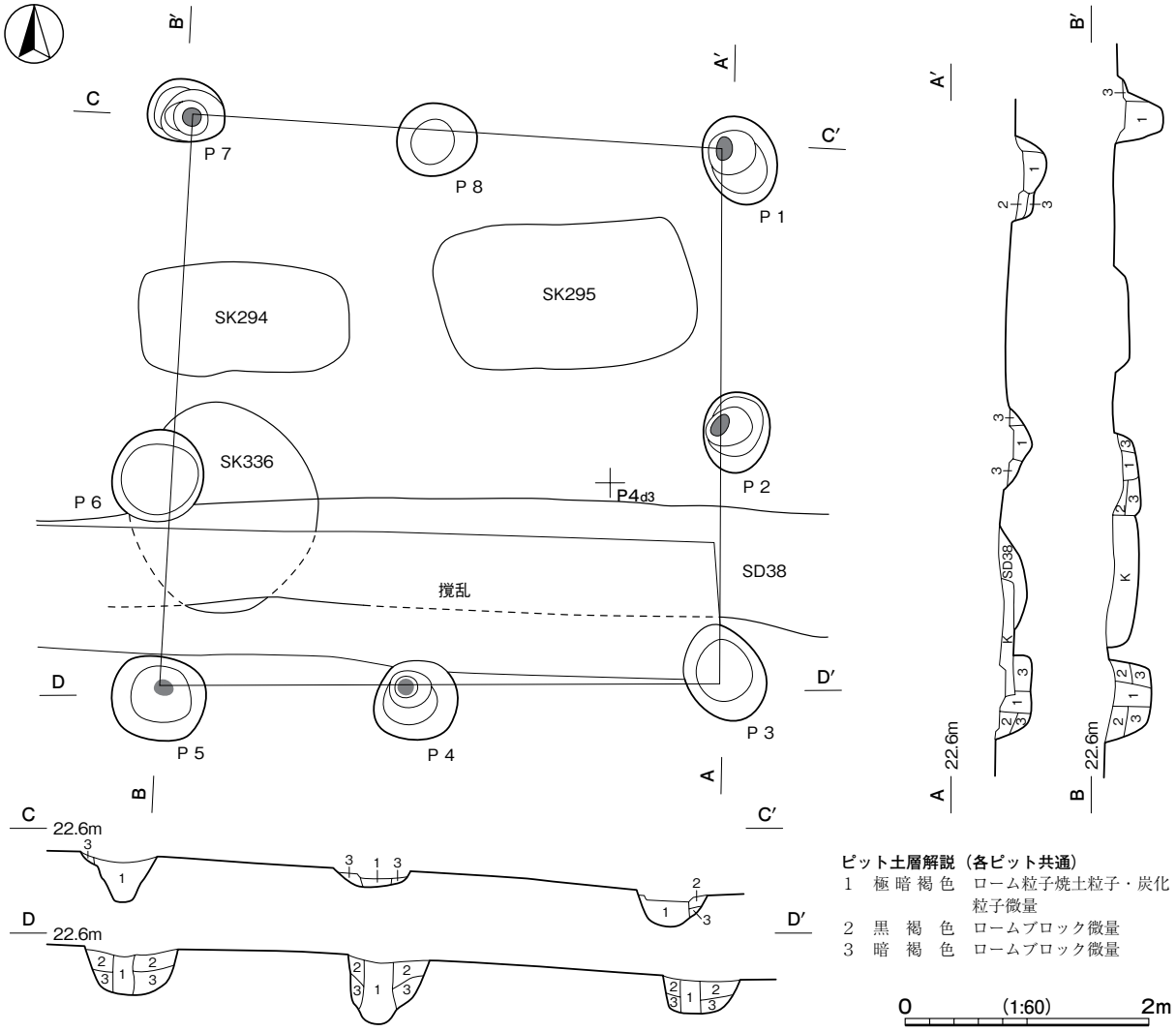
重複関係　第 336 号土坑を掘り込み，第 38 号溝に掘り込まれている。本跡の範囲内に第 294・295 号土坑があるが，堆積状況での新旧関係は不明である。

規模と形状　桁行２間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－３°－Ｅの南北棟である。規模は桁行 4.70 ｍ，梁行 4.60 ｍで，面積は 21.62㎡である。柱間寸法は，桁行がＰ１－Ｐ２間が 2.25 ｍ（７尺），Ｐ２－Ｐ３間が 2.15 ｍ（７尺），Ｐ５－Ｐ６間が 1.70 ｍ（５尺），Ｐ６－Ｐ７間が 3.00 ｍ（10 尺），梁行がＰ３－Ｐ４間が 2.60 ｍ（８尺），Ｐ４－Ｐ５間が 2.00 ｍ（７尺），Ｐ７－Ｐ８間が 2.00 ｍ（７尺），Ｐ８－Ｐ１間が 2.35 ｍ（８尺）である。桁行・梁行とも，柱筋は通っているものの，間尺はややばらつきがある。

柱穴　８か所。掘方の平面形は円形または楕円形で，長径 64 ～ 76cm，短径 51 ～ 75cm，深さ 20 ～ 56cm である。やや浅いピットもあるものの，Ｐ８を除き柱痕が明瞭で，埋土は締まりの強い黒褐色土と暗褐色土である。Ｐ３・Ｐ６・Ｐ８以外の底面には，柱の当たりが確認できる。

遺物出土状況　土師器片 25 点（坏１，高坏１，甕類 22，不明１），須恵器片６点（坏５，蓋１）が出土している。遺物は少量で，いずれも小片のため図示できなかった。

所見　時期は，出土土器からは判断し得ない。17 世紀以降の第 38 号溝に掘り込まれていること，主軸方向が第 14 ～ 16 号掘立柱建物跡とほぼ同じくすることなどから，９世紀代と考えたい。



第 264 図　第 17 号掘立柱建物跡実測図

表 174　奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模	面積	柱間寸法		柱穴				時期	備考 (旧→新)
			桁×梁(間)	桁 × 梁(m)	(㎡)	桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形	深さ (cm)		
3	O 4 f4	N − 82° − W	2 × 1	3.25 × 2.65	8.61	1.15 ～ 2.00	2.55 ～ 2.65	側柱	6	円・楕円形	11 ～ 25	8 ～ 9 世紀	SK143 →本跡　SB4，SK212 重複
4	O 4 e4	−	2 × 1	(4.80) × (2.40)	(11.52)	2.40	2.40	側柱	4	円・楕円形	30 ～ 38	8 世紀後葉以降	SI14・15・SB3，SK126・127 重複
5	O 4 h1	N − 87° − W	4 × 1	8.30 × 1.75	14.52	1.65 ～ 2.50	1.75	側柱	10	円・楕円形	32 ～ 69	8 世紀後葉	SI24，SA2，SF6 重複
6	O 3 g8	N − 22° − E	3 × 2	6.45 × 4.35	28.05	1.80 ～ 2.40	1.95 ～ 2.40	側柱	15	円・楕円形	39 ～ 110	8 世紀後葉	SI21 →本跡→ SB12
7	O 3 e9	N − 1° − E	3 × 2	5.30 × 3.60	19.08	1.45 ～ 2.10	1.40 ～ 3.60	総柱	21	円・楕円形	14 ～ 36	8 世紀代	SK151・153・154 重複
8	O 3 e0	N − 3° − E	3 × 2	6.50 × 4.85	31.52	1.40 ～ 2.85	2.30 ～ 2.55	側柱	10	円・楕円形	18 ～ 72	8 世紀中葉	SK129・130・133 重複
9	N 2 d9	N − 13° − W	3 × 2	7.60 × 4.50	34.20	2.20 ～ 2.70	2.20 ～ 2.25	側柱	10	円形	37 ～ 72	8 ～ 9 世紀	SI34 →本跡　SK252 重複
11	O 3 c9	N − 85° − E	5 × 2	8.75 × 3.85	33.69	1.55 ～ 2.00	1.75 ～ 2.10	側柱	18	楕円・隅丸方形	14 ～ 72	8 世紀代	SI6 →本跡　SK194 ～ 196 重複
12	O 3 h8	N − 18° − E	3 × 2	4.80 × 4.10	19.68	1.35 ～ 1.75	1.95 ～ 2.15	側柱	9	円・楕円形	20 ～ 63	9 世紀中葉	SI21，SB 6 →本跡
13	O 3 j8	N − 4° − E	3 × 2	6.45 × 4.20	27.09	1.70 ～ 2.40	1.80 ～ 2.40	側柱	12	円・楕円形	36 ～ 83	9 世紀中葉	SI81 →本跡→ SD39，SF6 SK345・363・397，SD48 重複
14	P 3 b9	N − 3° − W	3 × 3	6.70 × 5.50	36.85	2.10 ～ 2.35	1.65 ～ 1.85	側柱	12	円・楕円形	20 ～ 65	9 世紀前葉	SI71，SB15，SK399 →本跡 → UP2，SD38　PG7 重複
15	P 3 b9	N − 88° − E	3 × 1	5.30 × 3.70	19.61	1.40 ～ 1.90	3.40 ～ 3.70	側柱	8	円・楕円形	20 ～ 65	8 世紀中葉～ 9 世紀中葉	SI71，SB16 →本跡→ SB14 SK391・399 重複
16	P 3 b8	N − 4° − W	3 × 2	5.10 × 3.45	17.59	1.50 ～ 1.90	1.65 ～ 1.80	側柱	9	円・楕円形	15 ～ 61	8 世紀中葉	SI77，SK352・353・399 →本跡 SB15，SK400・402・404・405・411 重複
17	P 4 c2	N − 3° − E	2 × 2	4.70 × 4.60	21.62	1.70 ～ 3.00	2.00 ～ 2.60	側柱	8	円・楕円形	20 ～ 56	9 世紀代	SK336 →本跡→ SD38　SK294・295 重複

(3) 鍛冶工房跡

鍛冶工房跡８棟を確認した。そのうち第１～３・５・６号鍛冶工房跡の調査方法については，微細な鍛冶関連遺物の採取を目的として，床面に50㎝のグリッドを設定し，グリッドごとに土壌を採取した。炉跡や土坑は，半截して堆積状況を確認したのち，層別で土壌を採取した。土壌は，５㎜，３㎜，１㎜の篩を用い，水洗作業を行い，微細遺物を採集した。篩作業で採取された微細遺物については，鍛冶工房跡のうち第１・３・４・５号鍛冶工房跡について鍛冶関連微細遺物の抽出分類・集計作業を委託した。また，滓の成分分析も実施している。これらの結果については，分析報告を参照していただきたい。これとは別に，各遺構の覆土中から出土している滓については，整理作業で，肉眼観察から鉄と銅に分け，形態を椀形滓と不定形滓に分類した。さらに不定形滓については，市販の磁石（吸着力 49N〔５kgf〕）を用いて，磁着するものを含鉄鉄滓を含めて鉄塊系遺物として抽出した。分類結果は，出土位置別に個数と重量を一覧表にして出土量を示した。以下，遺構と遺物について記述する。

第１号鍛冶工房跡（SX １）（第 265 ～ 267 図　PL26）

位置　調査区東部のＯ ４g0 区，標高 20 ｍほどの緩斜面に位置している。

規模と形状　長軸 3.91 ｍ，短軸 3.80 ｍの方形で，主軸方向はＮ－３°－Ｗである。壁は高さは 14 ～ 45㎝で，外傾して立ち上がっている。東壁側南壁寄りに床面から 10㎝高いテラス状の張り出し部を設けている。張り出し部は，幅 2.5 ｍ，奥行 0.7 ｍで，壁は高さ５～７㎝，で緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　硬化面は認められない。

覆土　４層に分層できる。覆土には，焼土・炭化物が含まれ，鉄滓などの鍛冶関連遺物も第１・２層に多く含まれていることから，埋め戻されている。

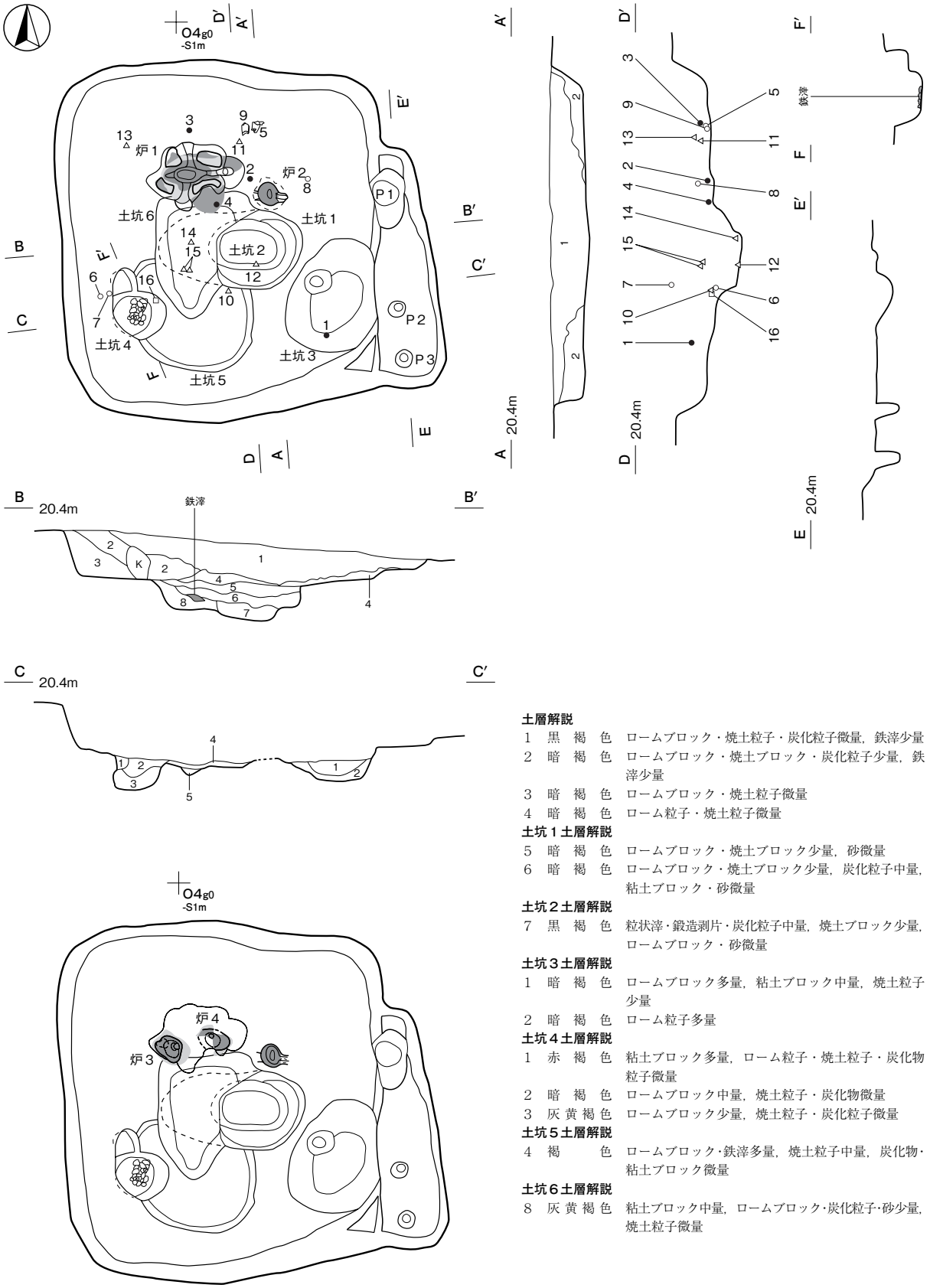
炉　４か所。炉１の戴ち割り調査で，下部から２か所の炉を確認し，それぞれ炉３・４とした。炉１～４は，内部が，還元焼成により青黒く変色しガラス化した部分がある。炉３の床からは，椀形滓が出土している。

土坑　６基。土坑１～６は，覆土に焼土・炭化物が多く含まれ，鉄滓が出土していることから，作業用の土坑と考えられる。土坑５は，深さ６～ 10㎝と浅い。土坑１は，炉１と土坑６を掘り込んでいる。土坑２は，土坑１に掘り込まれ土坑６を掘り込んでいる。土坑１・２は，重複関係と炉の配置からみて，炉２と関連して構築されたと考えられる。なお，土坑１・２が重複していることから，炉２の操業中に掘り替えた可能性もある。土坑３・４は，炉と離れて構築されている。土坑３は，底面にピットが設けられている。土坑４は，底面から鉄滓が出土していることから，排滓土坑と考えられる。

ピット　３か所。Ｐ１～Ｐ３は，東側テラス状張り出し部にある。深さ 16 ～ 27㎝で，柱穴とは断定できない。

遺物出土状況　土師器片 144 点（坏１，甕 143），須恵器片 49 点（坏 27，高台付坏１，蓋４，盤３，瓶２，鉢１，甕 11），石製品１点（金床石），土製品８点（支脚１，羽口７），金属製品２点（刀子，鉄鏃），被熱礫片２点が出土している。鍛冶関連遺物は，椀形滓７点 3,135.30 ｇ，不定形滓 137 点 1,894.04 ｇ，含鉄鉄滓・鉄塊系遺物 224 点 5,806.23 ｇ，炉内滓１点 1,642.00g が出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀中葉に比定できる。出土鉄滓のうち，炉１・２付近出土の２点，土坑４底面出土の１点，炉３床出土の１点，計４点の成分分析をした。その結果，構成鉱物および平均化学組成からみて，高炭素濃度の鉄原料を鋼にする過程の精錬で生成した産物であることが推定された。なかでも，炉３の炉床から出土している椀形滓は，湯玉を内包していることも明らかにされている。このことから，本跡は，精錬鍛冶を操業した鍛冶工房跡である。



掘方

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量，鉄滓少量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量，鉄滓少量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量

土坑１土層解説

5　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，砂微量
6　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子中量，粘土ブロック・砂微量

土坑２土層解説

7　黒　褐　色　粒状滓･鍛造剥片･炭化粒子中量，焼土ブロック少量，ロームブロック・砂微量

土坑３土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック多量，粘土ブロック中量，焼土粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量

土坑４土層解説

1　赤　褐　色　粘土ブロック多量，ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
3　灰 黄 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

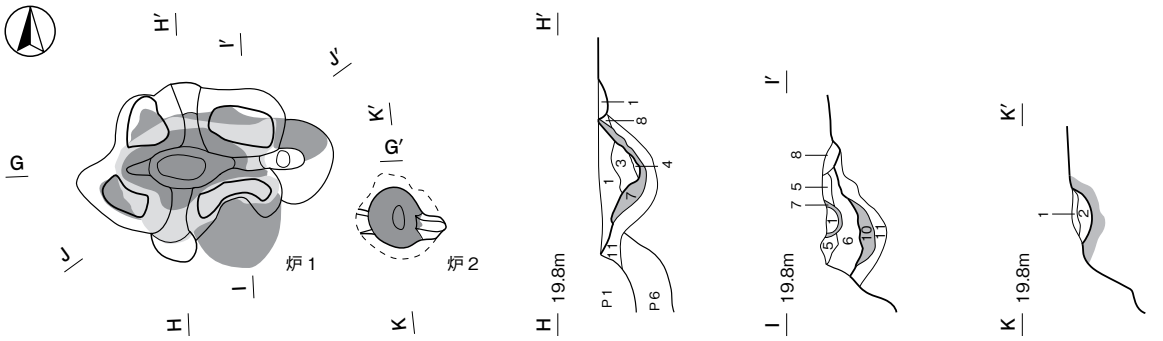
土坑５土層解説

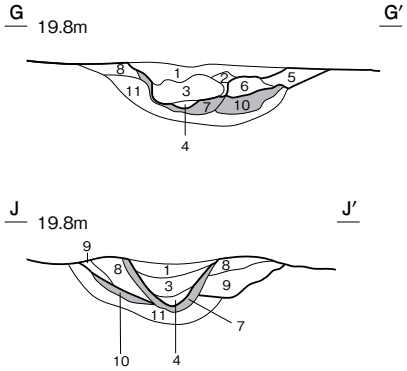
4　褐　　色　ロームブロック･鉄滓多量，焼土粒子中量，炭化物･粘土ブロック微量

土坑６土層解説

8　灰 黄 褐 色　粘土ブロック中量，ロームブロック･炭化粒子･砂少量，焼土粒子微量

第 265 図　第１号鍛冶工房跡（SX 1）実測図



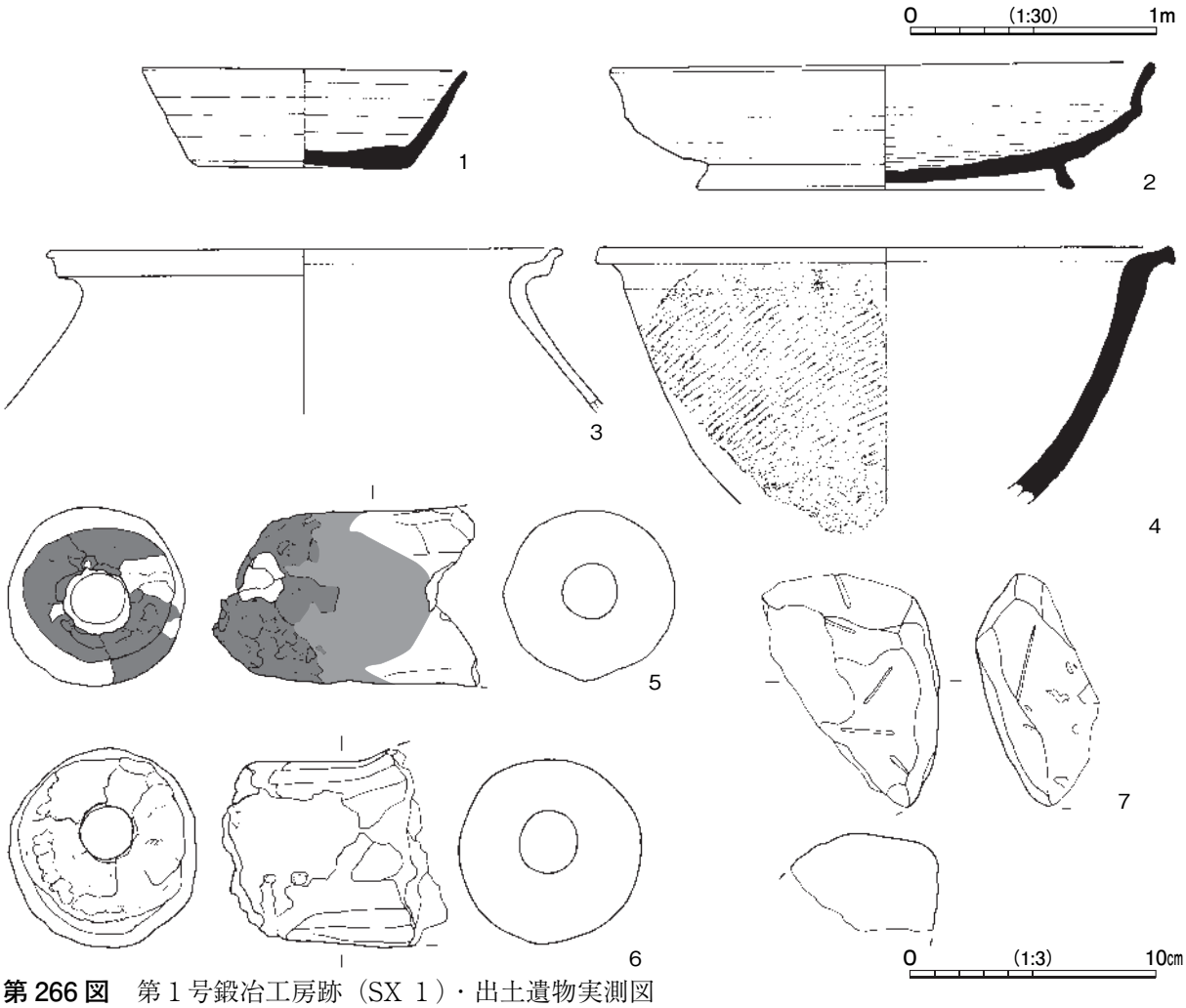


炉１・３・４土層解説

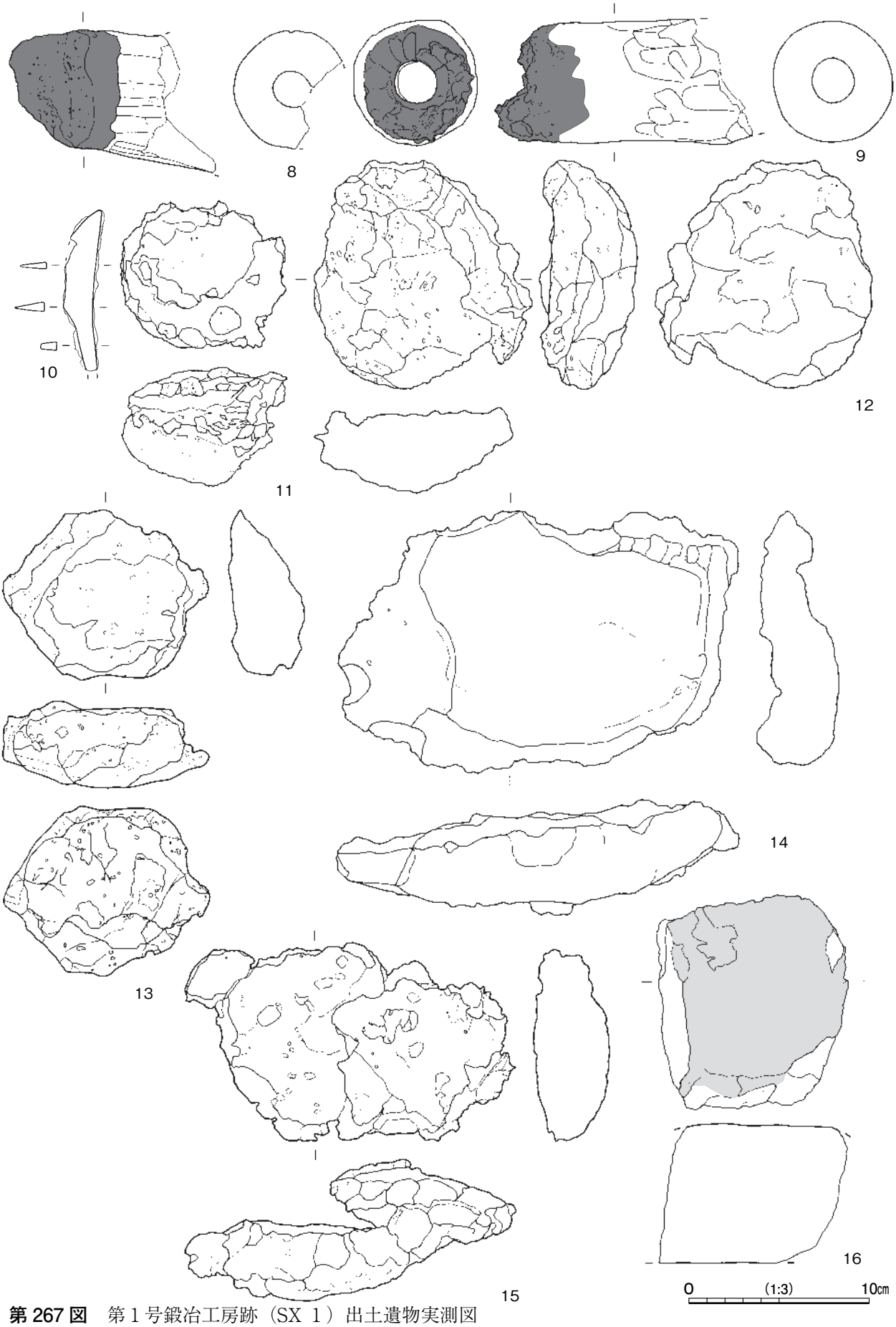
1　暗　褐　色　炭化物・焼土粒子中量，ロームブロック・砂微量
2　暗 赤 褐 色　焼土粒子・砂多量，炭化粒子中量，ロームブロック微量
3　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化物中量，砂少量，ロームブロック微量
4　灰 黄 褐 色　砂多量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
5　暗　褐　色　砂多量，焼土粒子・炭化粒子中量，ロームブロック微量
6　赤　褐　色　焼土ブロック多量，砂中量
7　黄　灰　色　焼土粒子多量，砂少量，炭化物・ローム粒子微量
8　赤　褐　色　砂多量，焼土ブロック・粘土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量
9　赤　褐　色　焼土ブロック多量，砂中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量
10　黄　灰　色　焼土粒子多量，砂少量，炭化物・ローム粒子微量
11　赤　褐　色　焼土ブロック多量

炉２土層解説

1　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，粘土ブロック少量
2　極暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子微量



第 266 図　第１号鍛冶工房跡（SX 1）・出土遺物実測図



第 267 図　第 1 号鍛冶工房跡（SX 1）出土遺物実測図

表 175　第 1 号鍛冶工房跡（SX 1）出土遺物観察表（第 266・267 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	［13.0］	3.9	8.4	長石・石英・細礫	黄灰	良好	体部下端ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後２方向のヘラ削り	２区　x	80%新治産 PL44
2	須恵器	盤	［21.8］	5.2	15.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り後高台部貼付	１区　x	60%新治産
3	土師器	甕	［20.4］	(6.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	４区　x	5 %
4	須恵器	鉢	［23.0］	(10.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部ロクロナデ　体部外面斜位の平行叩き　体部下半斜方向のケズリ　内面ナデ	土坑６　x	10%新治産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
5	羽口	(10.8)	7.2	7.2	(419.3)	長石・石英	にぶい褐	径 7.2　孔径 2.8　先端溶解角度 51°　ヘラナデ	４区　x	
6	羽口	(9.2)	7.6	8.0	(356.9)	長石・石英	にぶい黄橙	径 8.0　孔径 2.4　　ヘラナデ	３区　x	
7	羽口ヵ	(9.4)	(6.9)	(4.0)	(180.2)	長石・石英・雲母・スサ	橙	表面剥落顕著	３区　x	
8	羽口	(11.4)	7.9	6.5	(238.5)	長石・石英・細礫	褐灰～灰白	径 6.5　孔径 2.5　ヘラナデ	１区　x	
9	羽口	(14.1)	6.8	6.9	(433.4)	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	径 6.9　孔径 2.5　先端溶解角度 51°　ヘラナデ	４区　x	PL47

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
16	金床石	(11.9)	(10.4)	7.7	(1216.1)	硬砂岩	片面溶解部分あり	土坑４　x	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
10	刀子ヵ	(8.8)	2.2	0.5	(14.1)	鉄	平造り　背側にやや反り　刃部彎曲　ナデ関	土坑５　x	PL56
11	椀形滓	8.0	9.1	6.6	527.1	鉄	破面ナシ　椀形滓が上下に溶着ヵ	４区　x	
12	椀形滓	12.0	12.6	5.4	799.5	鉄	破面ナシ　底面砂付着（還元して灰色）	土坑２　x	PL47
13	椀形滓	9.4	11.4	4.8	599.6	鉄	破面ナシ　砂付着	４区　x	
14	炉内滓	22.1	14.4	6.3	1642.0	鉄	破面ナシ　粒状滓・鍛造剥片付着	土坑６　x	PL47
15	炉壁ヵ	10.9	18.3	7.8	735.4	－	溶解し発泡ガラス化	３区　x	PL47

表 176　第 1 号鍛冶工房跡（SX 1）出土鉄滓集計表

区・遺構 / 層	合計 / 個数				合計 / 重量 g				全体合計 / 個数	全体合計 / 重量 g
	鉄塊系遺物	不定形滓	炉内滓	椀形滓	鉄塊系遺物	不定形滓	炉内滓	椀形滓		
１区	7	10			59.13	52.55			17	111.68
1 x	5	10			27.43	52.55			15	79.98
x	2				31.7				2	31.7
２区	71	75			710.76	361.18			146	1071.94
1 x	51	37			380.96	206.08			88	587.04
2 x	20	37			329.8	149.8			57	479.6
x		1				5.3			1	5.3
３区	64	18			1253.83	374.43			82	1628.26
1 x	4	2			26.69	35.27			6	61.96
2 x	56	15			719.5	154.06			71	873.56
x	4	1			507.64	185.1			5	692.74
４区	17	8		2	1285.23	139.34		1126.7	27	2551.27
1 x	14	8			722.45	139.34			22	861.79
x	3			2	562.78			1126.7	5	1689.48
土坑１		2				50.9			2	50.9
５層		1				34.7			1	34.7
x		1				16.2			1	16.2
土坑２	6	2		2	531.09	103.76		1296	10	1930.85
土坑３	2			2	100.72			461.5	4	562.22
土坑４	53	20			1201.58	686.43			73	1888.01
土坑５	2				331.97				2	331.97
土坑６	2	1	1	1	331.92	49.95	1642	251.1	5	2274.97
炉１		1				75.5			1	75.5
５層		1				75.5			1	75.5
総計	224	137	1	7	5806.23	1894.04	1642.00	3135.30	369	12477.57

第２号鍛冶工房跡（SX 2）（第 268 ～ 270 図　PL26）

位置　調査区東部の O 4i0 区，標高 20 mの緩斜面に位置し，北へ 4 mほどには，第 1 号鍛冶工房跡がある。

重複関係　第 26 号溝，第６号道路，第 101・346 号土坑に掘り込まれている。第 26 号溝，第６号道路が，本跡の中央部を東から西方向へ床面まで掘り込んで貫通しており，緩斜面下方に当たる東側の大半は壊されている。

規模と形状　長軸 5.57 m，短軸 3.85 mの隅丸長方形で，主軸方向はＮ－３°－Ｅである。壁は高さ 15 ～ 35cmで，外傾して立ち上がっている。

床　硬化面は認められない。

覆土　覆土は２層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

炉　４か所。炉１・２・４は，ほぼ同じ位置で重複している。重複関係は，炉２が新，炉１が古である。炉４は，炉１との切り合い部が土坑５により壊されており，新旧関係は不明である。炉１の戴ち割り調査で，炉２の炉床面が炉１を掘り込んでいることが判明したため，遺構番号と新旧関係は一致していない。炉３は，第 26 号溝，第６号道路に壊されているため，炉床下部の焼土部分のみ残存したものと推定される。炉４も同じ状況である。

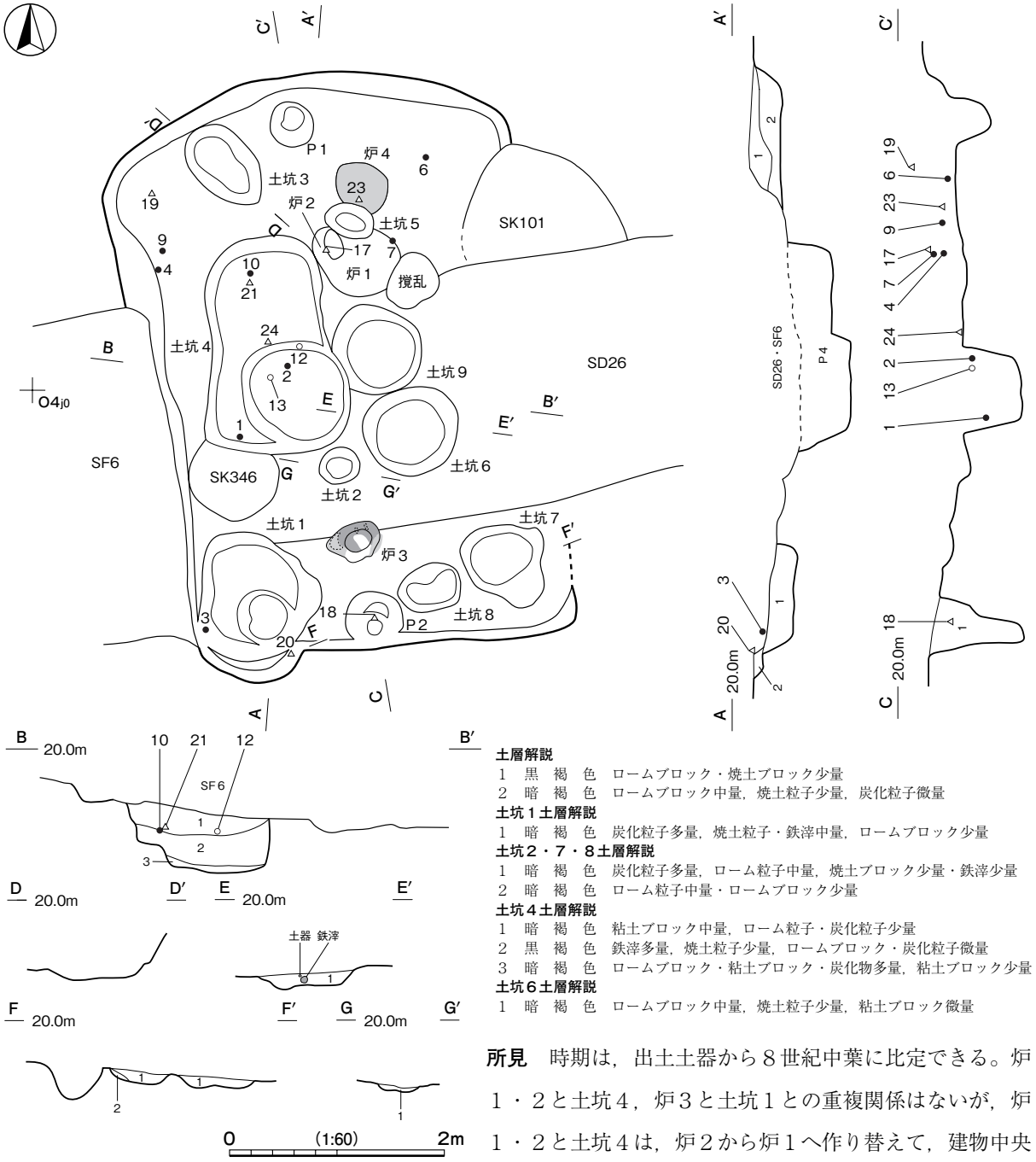
土坑　９基。土坑４は，位置関係から炉１・２に伴う作業用土坑である。覆土は３層に分層できる。第１層は粘土ブロック中量を多量に含み，第２層は鉄滓，第３層はロームと粘土のブロックが多量に含まれていることから，排滓後埋め戻されている。土坑１は，炉３が近接していることから，炉３の作業用土坑である。覆土は，炭化物が多量で，鉄滓も中量含まれる。南西隅の円形ピット底面からは，多量の鉄滓が出土していることから，排滓後埋め戻されている。土坑１・４は，平面形が隅丸長方形で，壁隅を一段掘り下げて構築されており，炉との位置関係も共通する。土坑６・９は，共に径 80cmほどの円形で，深さ６～ 14cmと浅い。

ピット　２か所。Ｐ１・Ｐ２は主柱穴である。Ｐ１は北壁際中央に位置し，深さ 30cm，Ｐ２は南壁際中央に位置し，深さ 80cmである。

遺物出土状況　土師器片 208 点（坏 18，蓋１，高坏２，鉢１，甕 186），須恵器 129 点（坏 69，高台付坏１，蓋５，盤３，高坏１，鉢１，甕 48，甑１），土製品１点（不明），金属製品 20 点（刀子２，鉄鏃１，釘ヵ１，不明 16）が出土している。鍛冶関連遺物は，鞴羽口 62 点，椀形滓 19 点 2,329.2 ｇ，不定形滓 196 点 3,356.4 ｇ，含鉄鉄滓・鉄塊系遺物 324 点 9,262.3 ｇが出土している。

表 177　第２号鍛冶工房跡（SX １）出土鉄滓集計表

区・遺構 / 層	合計 / 個数			合計 / 重量ｇ			全体合計 / 個数	全体合計 / 重量ｇ
	鉄塊系遺物	不定形滓	椀形滓	鉄塊系遺物	不定形滓	椀形滓		
０区	26	18	6	989.1	415.5	414.4	50	1819
１区	20	14	1	154.3	34.4	114.9	35	303.6
１ｘ	12	3		77.6	12.2		15	89.8
２ｘ	8	6		76.7	17		14	93.7
ｘ		5	1		5.2	114.9	6	120.1
２区	11	4		92.9	73.7		15	166.6
１ｘ	3	3		13.1	52.2		6	65.3
２ｘ	8			79.8			8	79.8
ｘ		1			21.5		1	21.5
３区	8	11	1	106.5	218.8	234	20	559.3
４区	44	5		1149.6	268.7		49	1418.3
土坑４	50	7		927.9	117.9		57	1045.8
土坑４Ｐ１	53	22	4	1405.9	265.2	373.3	79	2044.4
第１層	28	7	1	856.4	228.3	67.5	36	1152.2
第２層	18	1	3	449.7	4.3	305.8	22	759.8
ｘ	7	14		99.8	32.6		21	132.4
土坑６	14	5		449.3	306.1		19	755.4
土坑７	4	16		409.3	293.9		20	703.2
土坑 10	2		1	42.7		59.1	3	101.8
土坑 12	90	94	5	3464.3	1362.2	1004.6	189	5831.1
炉２	2		1	70.5		128.9	3	199.4
総計	324	196	19	9262.3	3356.4	2329.2	539	14947.9



土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

土坑１土層解説
1　暗　褐　色　炭化粒子多量，焼土粒子・鉄滓中量，ロームブロック少量

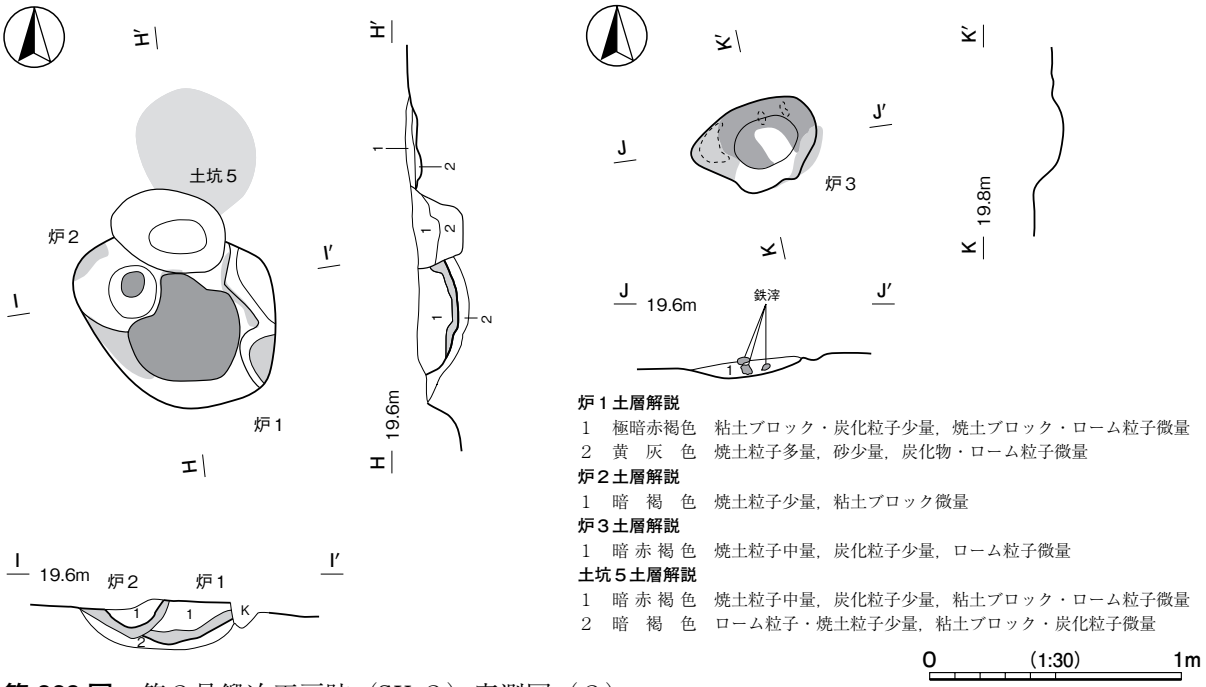
土坑２・７・８土層解説
1　暗　褐　色　炭化粒子多量，ローム粒子中量，焼土ブロック少量・鉄滓少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量・ロームブロック少量

土坑４土層解説
1　暗　褐　色　粘土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　鉄滓多量，焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック・炭化物多量，粘土ブロック少量

土坑６土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，粘土ブロック微量

第 268 図　第２号鍛冶工房跡（SX ２）実測図（１）

所見　時期は，出土土器から８世紀中葉に比定できる。炉１・２と土坑４，炉３と土坑１との重複関係はないが，炉１・２と土坑４は，炉２から炉１へ作り替えて，建物中央で操業していることから，これが当初の鍛冶炉として操業され，その後，炉３と土坑１の構築に伴う掘削で排出されたローム主体の排土で，土坑４の作業土坑が埋め戻されたものと推定され，また，土坑１と土坑４の共通する作業空間を持つ構造から，操業時の作業方法にも共通性を持つと考えられる。出土鉄滓のうち，炉２覆土中，土坑４第２層から出土している椀形滓２点について成分分析を実施した。炉２の椀形滓は，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の鉄チタン化合物が確認されていることから，鍛冶原料に固着した不純物の除去作業で生じた精錬鍛冶滓と推定された。また，土坑４の椀形滓は，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）に由来する鉄チタン酸化物の影響がほとんどないことから，鉄素材加熱時の吹き減りで生じた鍛錬鍛冶滓と推定された。この分析結果から，土坑４の底面に掘り込まれているピットは，精錬鍛冶に加え鍛錬鍛冶を行うための装置として構築されていると仮定すれば，出土した鉄滓の成分分析をしていない炉３と土坑１でも，遺構の構造から精錬・鍛錬鍛冶が行われたものと推測される。



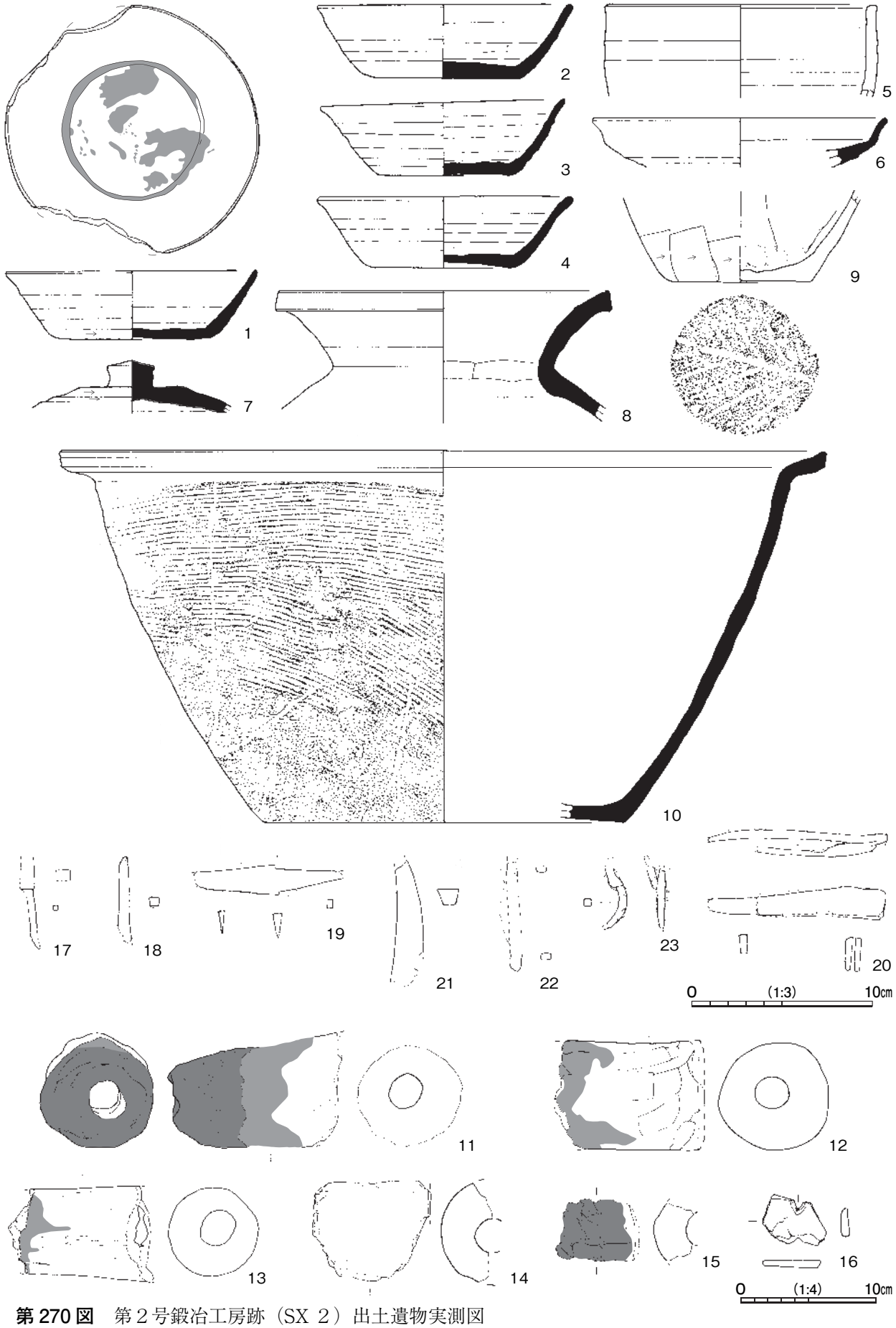
第 269 図　第２号鍛冶工房跡（SX ２）実測図（２）

表 178　第２号鍛冶工房跡（SX ２）出土遺物観察表（第 270 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	坏	13.7	3.8	8.6	長石・石英・雲母	黄灰	良好	体部下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り　内底面鉄分付着　取鍋カ	土坑４ Ｐ１　x	80%新治産 PL44
2	須恵器	坏	13.7	4.1	8.6	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り　鉄分付着	土坑４ Ｐ１　x	70%新治産 PL44
3	須恵器	坏	13.8	4.1	7.4	長石・石英・雲母	灰	良好	底部回転ヘラ切り　鉄分付着	３区　x	80%新治産 PL44
4	須恵器	坏	［13.8］	3.9	7.4	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後ヘラ削り　鉄分付着	４区　x	70%新治産 PL44
5	土師器	鉢	［15.0］	(5.1)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部面取り　口縁部ナデ	土坑１　x	15%
6	須恵器	盤	［16.0］	(2.7)	－	長石・石英・雲母・細礫	黒褐	良好	高台部貼付痕アリ	１区　x	５%新治産
7	須恵器	蓋	－	(2.8)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	頂部回転ヘラ削り後摘み部貼付　酸化焔焼成	１区　２x	25%新治産
8	須恵器	甕	［18.0］	(7.3)	－	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	口唇部折返し整形　頸部叩き後ナデ消し　内面頸部ヘラナデ	土坑１　x	５%新治産
9	土師器	甕	－	(5.0)	8.0	長石・石英・雲母・細礫	灰黄褐	普通	外面ヘラ削り　内面指押さえ後ヘラナデ	４区　x	20%
10	須恵器	鉢	［42.0］	20.5	［19.8］	長石・石英・雲母・細礫・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部横ナデ　体部外面斜位の平行叩き　体部下半斜方向のケズリ　内面ナデ	土坑４　x	40%新治産 PL44

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　徴	出土位置	備　考
11	羽口	(12.7)	(8.3)	8.3	(505.3)	長石・石英・細礫・スサ	灰	径 8.3　孔径 2.5　先端部から５㎝辺りから幅３～５㎝の器面剥落（炉壁固定部剥れカ）	土坑４ Ｐ１　x	PL47
12	羽口	(10.9)	7.9	8.0	(602.8)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	径 8.0　孔径 2.3 ～ 4.0　先端部欠損　輪側端部残存　器面剥落範囲あり（炉壁固定部剥れカ）	土坑４ Ｐ１　x	
13	羽口	(10.5)	6.5	6.5	(420.2)	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	径 6.5　孔径 2.6	土坑４ Ｐ１　x	
14	羽口	(8.3)	(7.3)	(3.7)	(152.1)	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	径［7.6］　孔径［2.6］	土坑４ Ｐ１　x	
15	羽口	(6.1)	(4.5)	(2.9)	(70.7)	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄橙	径［6.2］　孔径［2.3］	土坑４ Ｐ１　x	
16	不明土製品	(3.6)	(4.6)	0.6	(9.5)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	土師器片再加工の破片　抉りアリ	x	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
17	鉄鏃	(4.8)	0.8	0.7	(5.1)	鉄	長頸鏃　頸部～茎部破片	１区　x	PL56
18	釘カ	(4.4)	0.8	0.5	(8.6)	鉄	または鏃頸部片	Ｐ２　x	PL56
19	刀子	8.2	1.7	0.3 ～ 0.5	14.4	鉄	平造り　両関	４区　x	PL56
20	刀子	9.9	1.9	1.5	46.5	鉄	平造り　刀身が折り曲げられている	土坑 12　x	PL56
21	不明	(6.4)	1.9	0.8	(32.6)	鉄	断面台形状　未製品カ	土坑４　x	PL56
22	不明	(6.0)	0.7	0.4	(13.6)	鉄	鉄鏃頸部破片カ	２区　２x	PL56
23	不明	(4.1)	0.6	0.5	(4.8)	鉄	環の破片カ	１区　x	PL56
24	不定形滓	(2.3)	0.4	0.3	0.6	鉄	破片　流動滓カ	４区　x	観察表のみ



第 270 図　第２号鍛冶工房跡（SX ２）出土遺物実測図

第３号鍛冶工房跡（SX ３）（第 271・272 図　PL26）

位置　調査区北西部Ｎ ３f2 区の標高 23 ｍの緩斜面に位置する。

重複関係　第 230 号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　東側は削平され，長軸 3.09 ｍ，短軸 2.71 ｍ以上の方形と推定される。主軸方向はＮ － 7° － Ｗである。壁は西側で高さ８～ 15㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　硬化面は認められない。

覆土　単一層である。ロームブロックが中量含まれていることから，埋め戻されている。

炉　中心となる炉床部の形状は，径 30㎝の円形で，深さ 20㎝である。炉の外周は，幅 15 ～ 20㎝，深さ 10 ～ 15㎝に掘り込まれたテラス状で，炉の西側のみ 30㎝とやや広く張り出している。

土坑　２基。土坑１・２の覆土は，第１層で土坑１の上部，土坑２が埋め戻されている。土坑１の第２層には，鍛造剥片が中量含まれている。 土坑　１・２は，同時期に埋め戻されたとも考えられるが，平面形状と覆土堆積状況から，土坑２が新しく，土坑１が古いと推定できる。土坑１・２とも炉の脇に付設された作業用土坑と推定される。

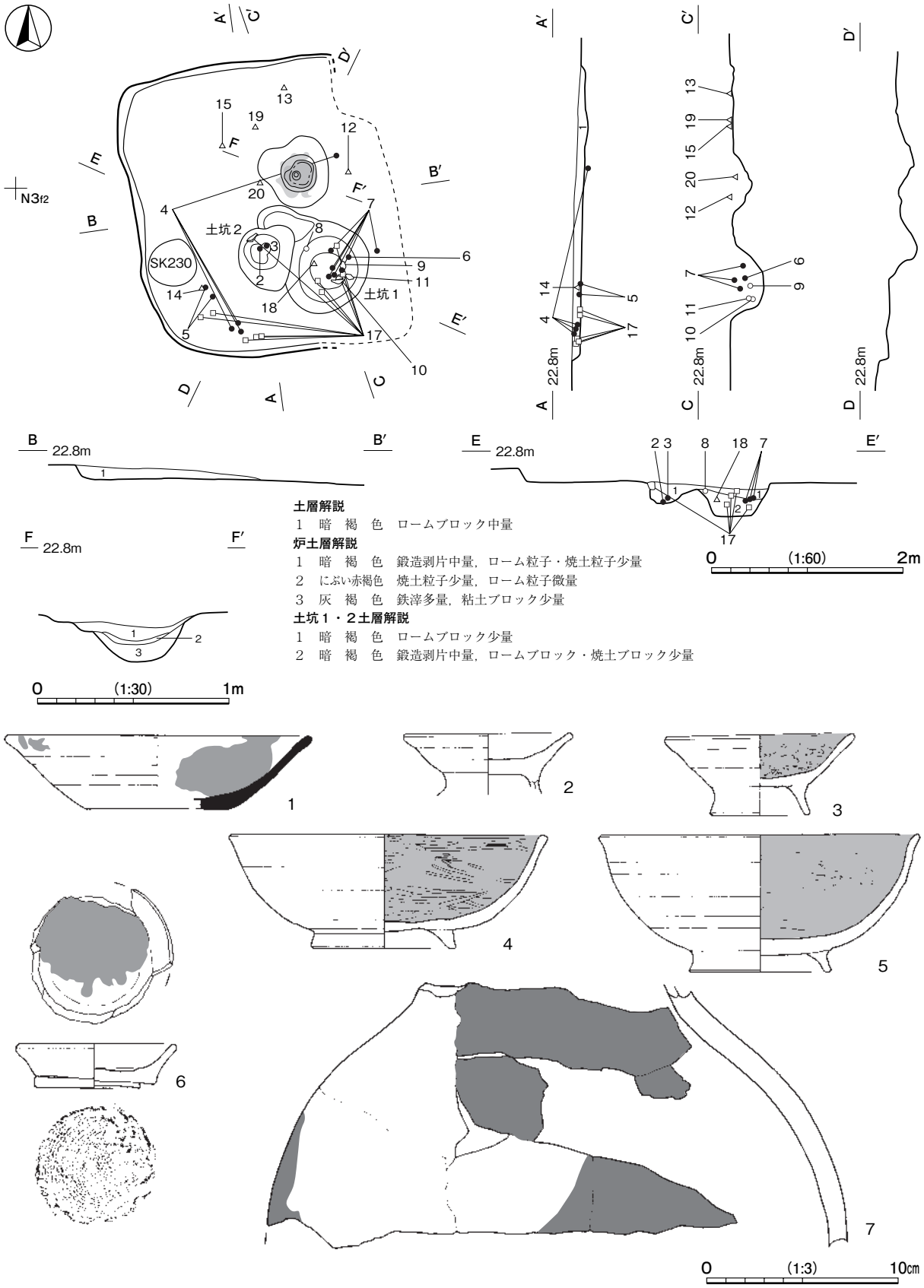
遺物出土状況　土師器片 36 点（坏 19，高台付坏６，蓋１，皿１，甕９），須恵器片 12 点（坏５，高台付坏１，甕６），金属製品７点（刀子１，鉄鏃１，釘ヵ２，不明３）が出土している。鍛冶関連遺物は，金床石砕片 92 点，鞴羽口８点，椀形滓３点 281.0 ｇ，不定形滓 140 点 765.7 ｇ，含鉄鉄滓・鉄塊系遺物 121 点 681.4 ｇ，銅滓１点 3.1 ｇが出土している。剥片を含む同一母岩の花崗岩の砕片が，建物跡南西床面と土坑１の第２層中から出土している。一部に熱を受けた痕跡や鉄の付着がある。鍛造剥片も出土していることから，金床石等に使用されたものが，工房廃絶時に破砕・廃棄したと考えられる。

所見　時期は，出土土器から 10 世紀中葉に比定できる。鍛冶関連遺物のうち，炉覆土上層から出土している滓と土坑１下層出土滓について成分分析を実施した。炉覆土上層から出土している滓は，銑鉄の特徴あるレーデブライト組織を呈する銑鉄であったことが判り，平均化学組成も全鉄 54%，酸化第二鉄 69%と高いことから，銑鉄から鋼にするために酸化･脱炭操業をした時の反応途中の産物であることが推定された。土坑１出土滓は，平均化学組成で全鉄が８%台と低く酸化珪素が 62%と多く，鉄滓成分が低いことから，比較的上部の炉材であることが推定された。以上の成分分析結果から，精錬鍛冶を操業した鍛冶工房跡と考えられる。土坑１は操業した炉を壊した際に排出された炉壁等を廃棄して埋め戻されたと推定される。土坑２の埋土である第１層の層理面を土坑２のテラス部と推測すれば，土坑２の構築段階で，土坑１を埋め戻し，作業面としてテラスを有

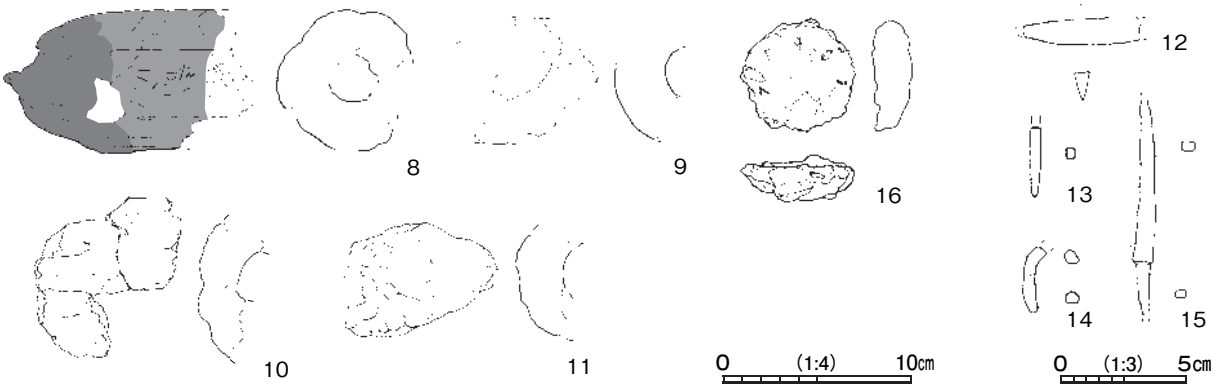
表 179　第３号鍛冶工房跡（SX ３）出土鉄滓集計表

区・遺構 / 層	合計 / 個数				合計 / 重量 g				全体合計 / 個数	全体合計 / 重量 g
	鉄塊系遺物	不定形滓	椀形滓	銅滓	鉄塊系遺物	不定形滓	椀形滓	銅滓		
確認面	2	5			1	39.1			7	40.1
０区			1				115.3		1	115.3
１区	16	29			56.9	76.1			45	133
1 x	16	29			56.9	76.1			45	133
２区	20	20	1		106.2	41.3	89.3		41	236.8
1 x	17	20			37.2	41.3			37	78.5
x	3		1		69		89.3		4	158.3
３区	14	7	1	1	69.2	8.7	76.4	3.1	23	157.4
1 x	12	7			29.5	8.7			19	38.2
x	2		1	1	39.7		76.4	3.1	4	119.2
土坑１	41	51			324.7	410.3			92	735
土坑２	7	17			31.2	97.7			24	128.9
炉	21	11			92.2	92.5			32	184.7
総計	121	140	3	1	681.4	765.7	281	3.1	265	1731.2

する作業用土坑とも考えられる。この場合，土坑内で小土坑を掘り替えていたことが考えられる。



第 271 図　第３号鍛冶工房跡（SX ３）・出土遺物実測図



第 272 図　第３号鍛冶工房跡（SX ３）出土遺物実測図

表 180　第３号鍛冶工房跡（SX ３）出土遺物観察表（第 271・272 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
1	須恵器	坏	［16.0］	3.7	［8.1］	長石・石英	灰	普通	底部糸切り　二次被熱　鉄付着	４区１ｘ 炉ｘ　Ｐ１ｘ	20%新治産
2	土師器	高台付坏	8.6	(3.2)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　高台貼付	土坑２　ｘ	80%
3	土師器	高台付坏	9.5	4.3	5.3	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　高台貼付　内面横位のヘラ磨き　内面黒色処理	土坑２　ｘ	70% PL44
4	土師器	高台付坏	［16.1］	5.9	7.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　高台貼付　内面横位のヘラ磨き　内面黒色処理	１区　３区 ２区　１ｘ	60% PL44
5	土師器	高台付坏	［16.4］	(7.1)	［7.2］	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ　高台貼付　内面横位のヘラ磨き　内面黒色処理	3区1区1ｘ2区 1ｘP2X	40%
6	土師器	小皿	［8.1］	2.3	6.2	長石・石英・黒色粒子	灰黄	普通	底部糸切り　二次的な受熱による変形　銅付着　取鍋として使用ヵ	土坑１ Ｐ１ｘ	60%
7	土師器	甕	－	(13.9)	－	長石・石英	灰	普通	破片別に受熱度が異なる発砲・変形・滓付着破片あり	土坑１　ｘ	20%

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
8	羽口	(15.1)	(8.5)	(8.0)	(410.5)	長石・石英・細礫・スサ	内　橙 外　にぶい橙	先端溶解　外面棒状圧痕アリ　成型に籠状工具使用ヵ	土坑１　ｘ	
9	羽口	(8.6)	(7.4)	(3.8)	(139.0)	長石・石英・スサ	にぶい橙～褐灰	先端付近破片　外面棒状圧痕アリ　成型に籠状工具使用ヵ	土坑１　ｘ	
10	羽口	(8.6)	(9.4)	(3.9)	(138.8)	長石・石英・赤色粒子・スサ	にぶい橙	先端付近破片　外面棒状圧痕アリ　成型に籠状工具使用ヵ	土坑１　ｘ	
11	羽口	(9.2)	(6.7)	(3.4)	(131.7)	長石・石英・細礫・赤色粒子・スサ	にぶい黄橙	径［8.4］　孔径［4.0］　先端付近破片	土坑１　ｘ	

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
17	金床石	28.0	18.9	11.0	4,900	花崗閃緑岩	長 11.0 幅 7.8 厚 5.8 重量 0.370，長 12.9 幅 10.2 厚 4.3 重量 0.645， 長 19.3 幅 8.1 厚 5.5 重量 1,195，長 14.1 幅 13.8 厚 7.0 重量 1.275	土坑１・２ 覆土中	３点接合３個体 ２点接合２個体 観察表のみ

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
12	刀子	(4.6)	1.0	0.7	(8.1)	鉄	平造り	１区　ｘ	PL56
13	釘ヵ	(2.7)	0.3	0.4	(1.0)	鉄	長頸鏃茎部破片の可能性もある	１区　ｘ	PL56
14	銅滓	(2.6)	0.5	0.5	(3.1)	銅	棒状　断面蒲鉾状　流動滓ヵ	３区　ｘ	PL56
15	鉄鏃	(8.6)	0.9	0.9	(11.9)	鉄	長頸鏃頸部～茎部片	４区　ｘ	PL56
16	椀形滓	6.7	6.8	2.8	115.3	鉄	炭痕アリ	０区　ｘ	PL57
18	不明	(3.9)	0.9	0.4	5.0	鉄	錆化顕著でボロボロ　釘ヵ	土坑１　ｘ	観察表のみ
19	不明	(3.2)	(1.4)	0.5	5.8	鉄	錆化顕著でボロボロ　刀子茎部ヵ	１区　ｘ	観察表のみ
20	不明	(3.4)	(0.5)	0.4	3.3	鉄	錆化顕著でボロボロ　釘ヵ	１区　ｘ	観察表のみ

第４号鍛冶工房跡（SX ５）（第 273・274 図　PL26・27）

位置　調査区南部のＰ４g2 区，標高 19 ｍほどの緩斜面に位置している。炉跡と，それに近接して，鉄滓が出土している土坑を鍛冶工房跡として報告する。

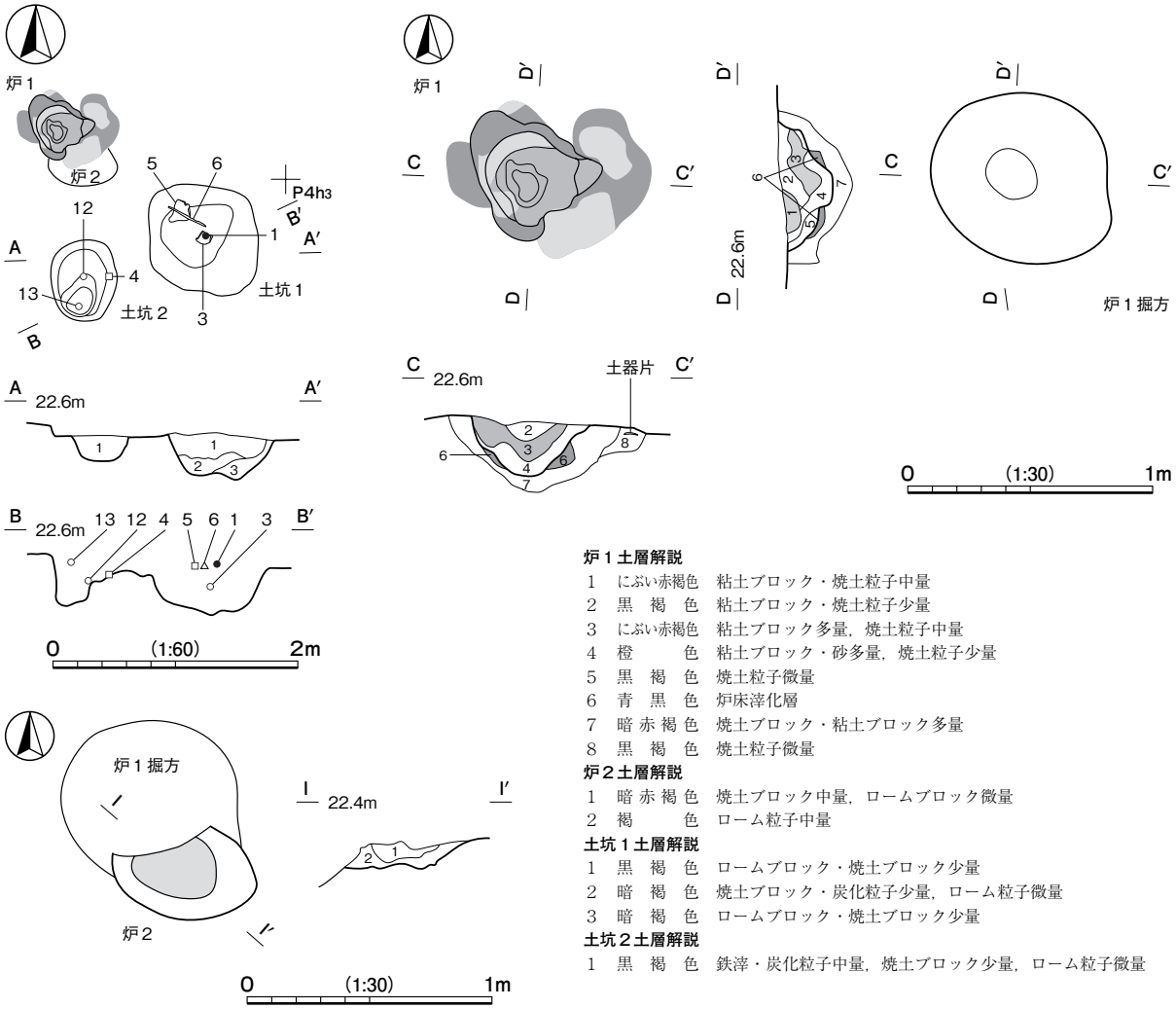
重複関係　古墳時代中期の第 68 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

炉　２か所。重複している。炉１が新しい。炉１は，炉床部が残存している。径 30㎝の円形で，底面は椀状で，深さ 20㎝である。炉２は炉１に壊されているため，炉床下部の焼土のみ残存している。

土坑　２基。土坑１・２の覆土は，焼土・炭化物が含まれていることから，埋め戻されている。

遺物出土状況　土師器片 44 点（坏 10，甕類 34），須恵器片４点（坏２，蓋１，甕１）が出土している。鍛冶関連遺物は，金属製品１点（鉄鉗），金床石片３点，羽口９点，炉壁材ヵ７点，椀形滓６点 603.3 ｇ，不定形滓 75 点 685.4 ｇ，含鉄鉄滓・鉄塊系遺物 440 点 5,302.9 ｇ，炉壁片７点が出土している。

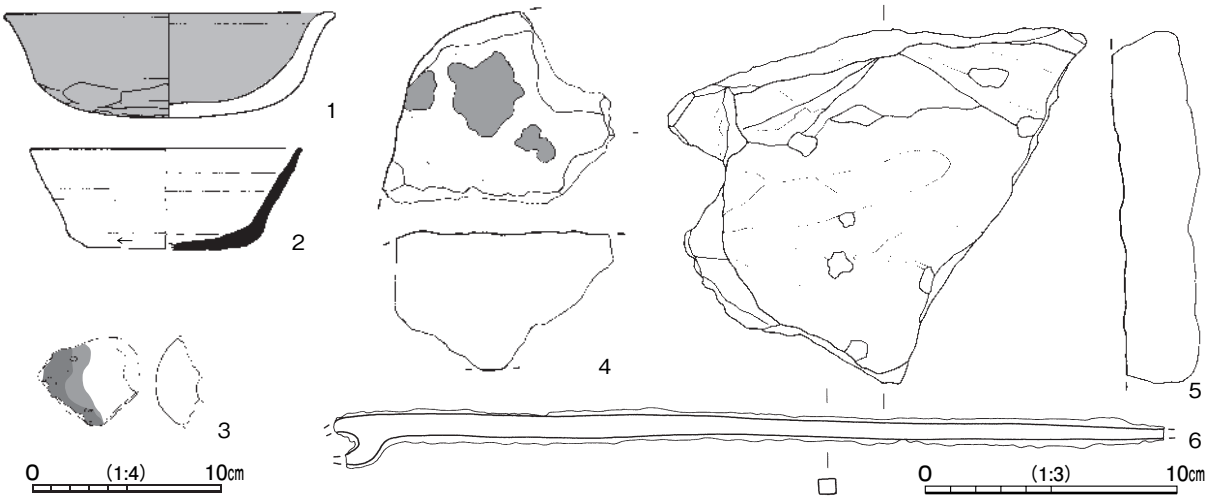
所見　時期は，出土土器から８世紀前葉に比定できる。鍛冶関連遺物のうち，炉２の覆土中層から出土している椀形滓と土坑１下層から出土している椀形滓について成分分析を実施した。土坑１の椀形滓は，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分である二酸化チタンと五酸化バナジウムの割合が高いことから，鍛冶原料である製錬鉄塊系遺物に固着した不純物である砂鉄製錬滓の除去作業で生じた精錬鍛冶滓と推定された。炉２から出土している椀形滓も同様で，製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分の影響が残る特徴から，精錬鍛冶滓と推定された。この結果から，精錬鍛冶を操業した工房跡と推定できる。



第 273 図　第４号鍛冶工房跡（SX ５）実測図

表 181　第４号鍛冶工房跡（SX ５）出土鉄滓集計表

区・遺構 / 層	合計 / 個数			合計 / 重量 g			全体合計 / 個数	全体合計 / 重量 g
	鉄塊系遺物	不定形滓	椀形滓	鉄塊系遺物	不定形滓	椀形滓		
確認面	250	46	1	3103.0	296.8	320.8	297	3720.6
土坑１	116	22	5	1668.7	309.0	282.5	143	2260.2
土坑２	73	7		519.5	79.6		80	599.1
炉２	1			11.7			1	11.7
総計	440	75	6	5302.9	685.4	603.3	521	6591.6



第 274 図　第４号鍛冶工房跡（SX ５）出土遺物実測図

表 182　第４号鍛冶工房跡（SX ５）出土遺物観察表（第 274 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
1	土師器	坏	[12.8]	4.1	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ　体部下半ヘラ削り　外・内面黒色処理	SX ５　x	50%　PL44 ７世紀中葉
2	須恵器	坏	[10.5]	(4.0)	[6.3]	長石・石英・雲母	灰	良好	体部下端ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	覆土中 ２区　x	40%新治産 PL44

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
3	羽口	(6.0)	(5.2)	(2.6)	(55.5)	長石・石英	にぶい黄橙～灰褐	先端側の破片	土坑１　x	
7	炉壁材カ	(5.6)	(4.4)	(4.1)	90.4	長石・石英	にぶい黄橙	表面の剥落顕著　鋳型の可能性もある	覆土中　x	観察表のみ
8	炉壁材カ	(6.5)	(6.3)	(5.1)	144.2	長石・石英	にぶい黄橙	表面の剥落顕著　鋳型の可能性もある	覆土中　x	観察表のみ
9	炉壁材カ	(8.8)	(7.8)	(4.3)	199.4	長石・石英	にぶい黄橙	表面の剥落顕著　鋳型の可能性もある	覆土中　x	観察表のみ
10	炉壁材カ	(10.2)	(6.0)	(5.6)	210.2	長石・石英	にぶい黄橙	表面の剥落顕著　鋳型の可能性もある	覆土中　x	観察表のみ
11	炉壁材カ	(12.2)	(6.3)	(5.7)	325.0	長石・石英	にぶい黄橙	表面の剥落顕著　鋳型の可能性もある	覆土中　x	観察表のみ
12	炉壁材カ	(8.5)	(6.6)	(5.1)	154.1	長石・石英	にぶい黄橙	表面の剥落顕著　鋳型の可能性もある	土坑２　x	観察表のみ
13	炉壁材カ	(8.3)	(6.9)	(4.4)	198.4	長石・石英	にぶい黄橙	表面の剥落顕著　鋳型の可能性もある	土坑２　x	観察表のみ

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
4	金床石	(7.6)	9.1	5.5	(520.7)	花崗閃緑岩	砕片　溶解付着物アリ	土坑２　x	
5	金床石カ	(16.5)	(14.0)	(3.5)	(979.6)	片岩	板状砕片	土坑１　x	

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
6	鉄鉗	(32.9)	(0.4～2.0)	0.7	(144.61)	鉄	柄部分のみ	SX ５　x	PL56

第５号鍛冶工房跡（SX ６）（第 275 ～ 279 図　PL27）

位置　調査区南東部のＰ５b2 区，標高 20 ｍほどの緩斜面に位置している。

規模と形状　長軸 5.23 ｍ，短軸 4.87 ｍの長方形で，主軸方向はＮ－９°－Ｗである。壁は高さ 12 ～ 20㎝で，外傾して立ち上がっている。西壁には，スロープを設けている。

床　中央から西側が硬化している。

覆土　３層に分層できる。第１・２層ともローム・焼土・炭化物が含まれていることから，埋め戻されている。

炉　６か所。いずれも中央部から西側の空間に構築されている。炉は，炉１・３が単独，炉２・４～６は重複している。新旧関係は，炉２，炉４，炉５，炉６の順で古い。炉とピットとの重複関係は，炉１が土坑４を掘り込んでいる。炉２・４が土坑３を掘り込んでいる。

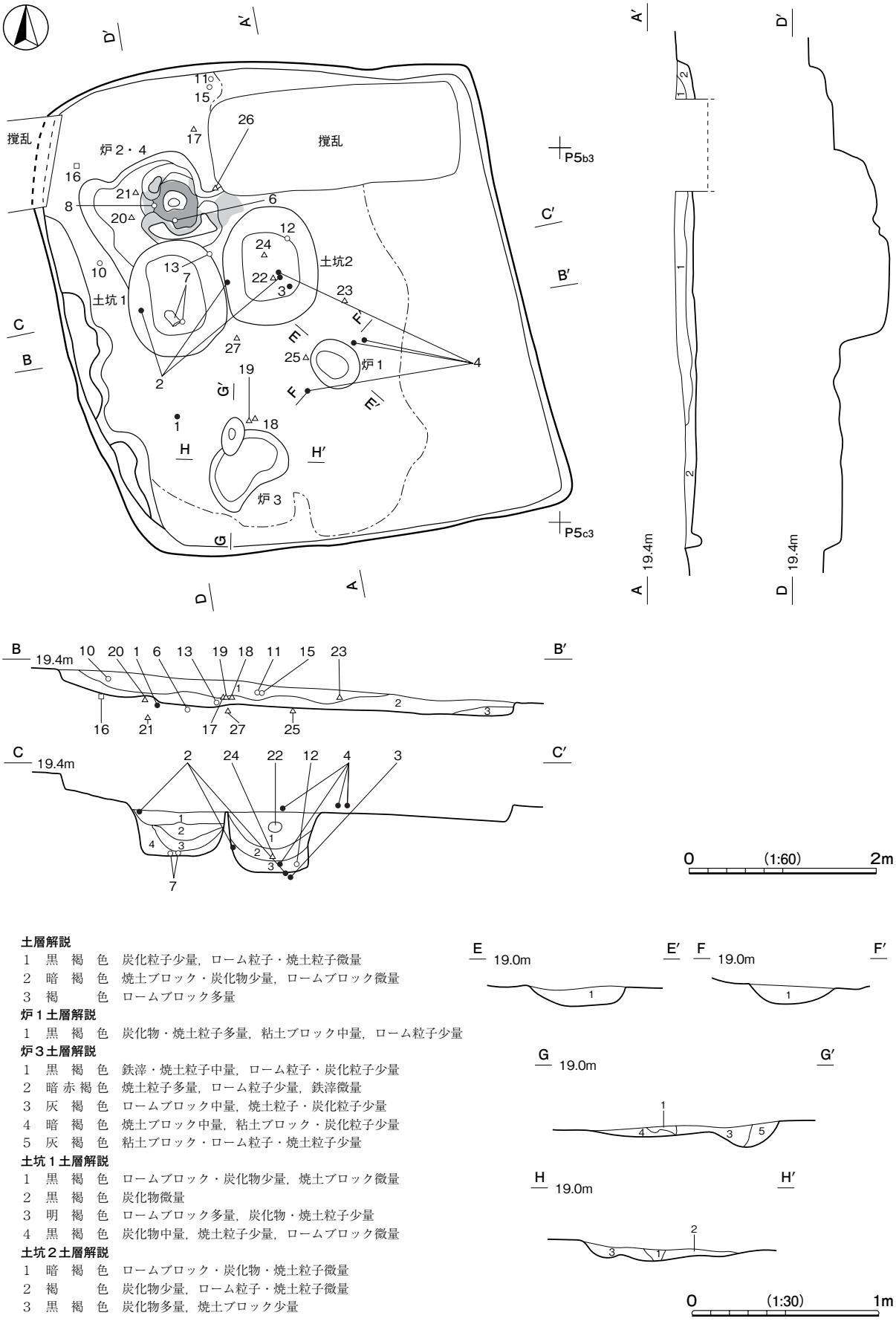
土坑　５基。土坑１は，土坑３を掘り込んでいる。近接している炉４が，同じく土坑３を掘り込んでいることから，炉４の作業用土坑と考えられる。第４層は，部材とも考えられるような大形のものを含む炭化物が多量に含まれている。これをロームブロック主体とする第３層で埋め戻されている。土坑２は，土坑４を掘り込んでいる。覆土第３層には炭化物が多量に含まれている。炉６に近接していることから，炉６の作業用土坑と推定できる。重複はしていないが，土坑１・３より古いと推測できる。土坑３は，炉２と炉４に掘り込まれている。炉４に掘り込まれている炉５がすぐ東側に位置していることから，炉５の作業用土坑と推定できる。土坑４は，炉１・土坑２に掘り込まれている。他の土坑と形状が同じことから作業用土坑と推定できる。これに伴う炉は，土坑２の構築時に壊されたものと推測できる。

遺物出土状況　土師器片 191 点（坏 17，甕 174），須恵器片 173 点（坏 58，高台付坏６，蓋 21，鉢１，瓶３，甕 83，甑１），土製品４点（不明），石製品１点（臼玉），金属製品９点（刀子１，釘３，釘$_{カ}$１，不明４）が出土している。鍛冶関連遺物は，鞴羽口 81 点，椀形滓 60 点 11.233.1 ｇ，不定形滓 216 点 3,709.5 ｇ，含鉄鉄滓･鉄塊系遺物 561 点 11,354.3 ｇ，銅滓１点 0.94 ｇが出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉に比定できる。出土した鉄滓のうち，炉５の炉底から出土した椀形滓と土坑１の下層から出土した椀形滓について成分分析を実施した。その結果，炉５の椀形滓は，下面に耐火性を高めるために鍛冶炉床粘土に石英･長石類などの砂が混和された炉床土が付着した精錬鍛冶滓と推定された。土坑１の椀形滓は，第２・４号鍛冶工房跡出土滓の分析と同じく，精錬鍛冶滓と推定された。よって，精錬鍛冶を操業した鍛冶工房跡と推定できる。工房内の精錬鍛冶炉と作業用土坑のセット関係は，炉４と土坑１，炉５と土坑３，炉６と土坑２の３基が推定できる。これを基に，重複関係から推定できる工房内での鍛冶炉操業の変遷は，炉はないが土坑４の作業用土坑が最も古く，次いで炉６・土坑２，これを作り替えて炉５・土坑３，最終的に炉４・土坑１で操業したのち，竪穴建物を含めた工房を廃絶したものと考えられる。土坑を伴わない２か所の炉のうち，炉１は，一番古いと推定できる土坑４を掘り込んでいることから，炉６以降に構築された炉と推定できる。炉３は，重複関係がないため，工房内での新旧関係は不明である。この２基の炉は，土坑を伴わない点で共通していることから，精錬鍛冶炉操業の作業方法の違いや，鍛冶炉操業自体が別の工程を行った鍛冶炉の可能性も推測できる。

表 183　第５号鍛冶工房跡（SX ６）出土鉄滓集計表

区・遺構 / 層	合計 / 個数				合計 / 重量 g				全体合計 / 個数	全体合計 / 重量 g
	鉄塊系遺物	不定形滓	椀形滓	銅滓	鉄塊系遺物	不定形滓	椀形滓	銅滓		
０区	16		9		355.8		1528.1		25	1883.9
１区	10	17			220.5	320.8			27	541.3
1 x	10	17			220.5	320.8			27	541.3
２区	85	52	2		1671.9	696.2	443.1		139	2811.2
1 x	85	52	1		1671.9	696.2	343.5		138	2711.6
x			1				99.6		1	99.6
３区	114	77	26		2015.5	1373.6	2588.1		217	5977.2
1 x	49	32	3		975.7	602.1	252.4		84	1830.2
2 x	64	45	7		938.2	771.5	483.6		116	2193.3
x	1		16		101.6		1852.1		17	1953.7
４区	79	45	4		1464.2	866.8	583.6		128	2914.6
1 x	31	27			721.7	603.6			58	1325.3
2 x	46	17	1		545	220.5	35		64	800.5
x	2	1	3		197.5	42.7	548.6		6	788.8
土坑１	26	12	7		2107.1	258.4	1175.9		45	3541.4
土坑２	229	12	5		3462.6	174.1	1803.5		246	5440.2
土坑４	1				8.7				1	8.7
炉１		1		1		19.6		0.94	2	20.54
炉２			7				3110.8		7	3110.8
炉２付近	1				48				1	48
総計	561	216	60	1	11354.3	3709.5	11233.1	0.94	838	26297.84



土層解説

1　黒　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗　褐　色　焼土ブロック・炭化物少量，ロームブロック微量
3　褐　　色　ロームブロック多量

炉１土層解説

1　黒　褐　色　炭化物・焼土粒子多量，粘土ブロック中量，ローム粒子少量

炉３土層解説

1　黒　褐　色　鉄滓・焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
2　暗 赤 褐 色　焼土粒子多量，ローム粒子少量，鉄滓微量
3　灰　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　焼土ブロック中量，粘土ブロック・炭化粒子少量
5　灰　褐　色　粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量

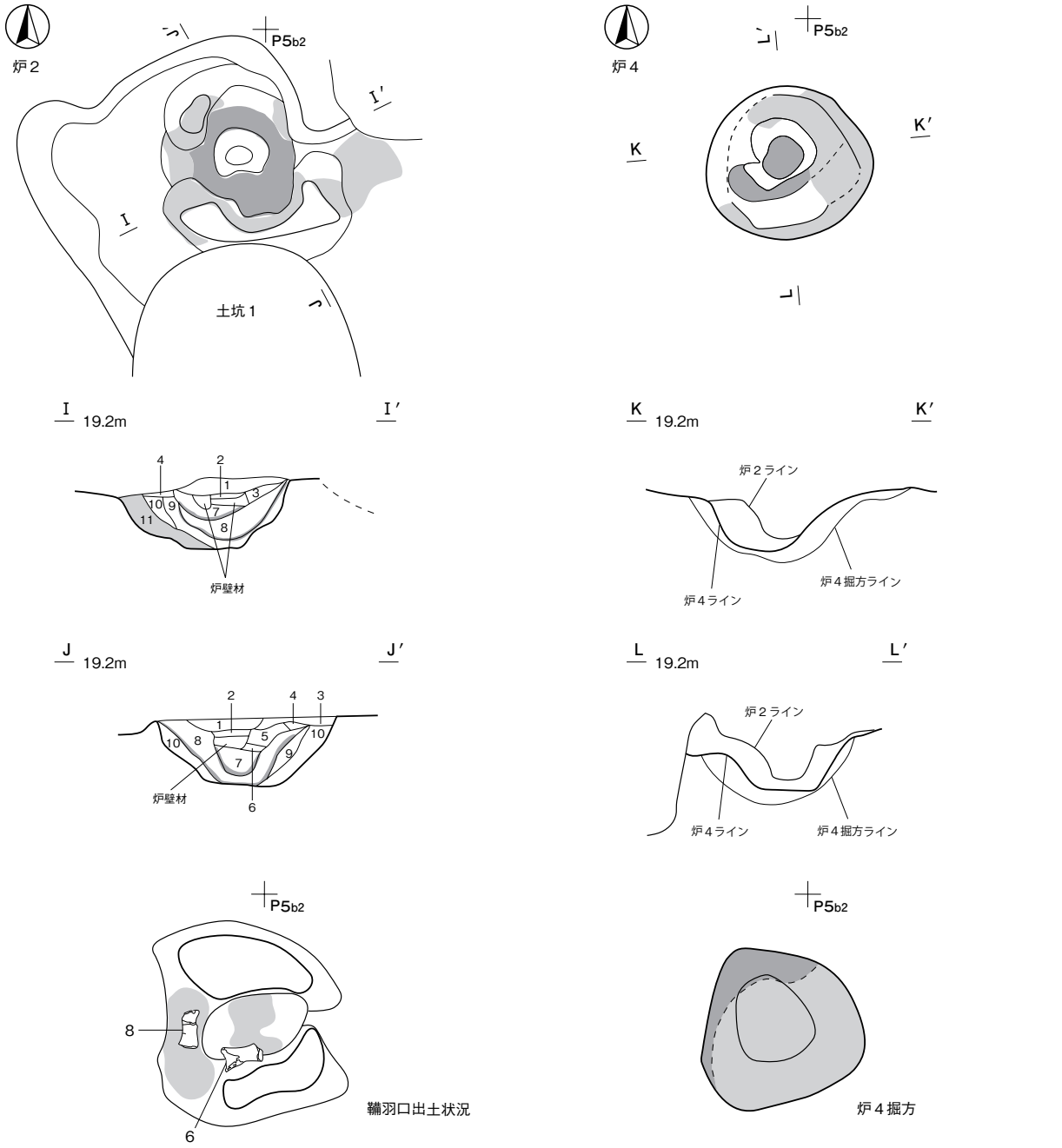
土坑１土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
2　黒　褐　色　炭化物微量
3　明　褐　色　ロームブロック多量，炭化物・焼土粒子少量
4　黒　褐　色　炭化物中量，焼土粒子少量，ロームブロック微量

土坑２土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
2　褐　　色　炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子微量
3　黒　褐　色　炭化物多量，焼土ブロック少量

第 275 図　第５号鍛冶工房跡（SX 6）実測図（１）



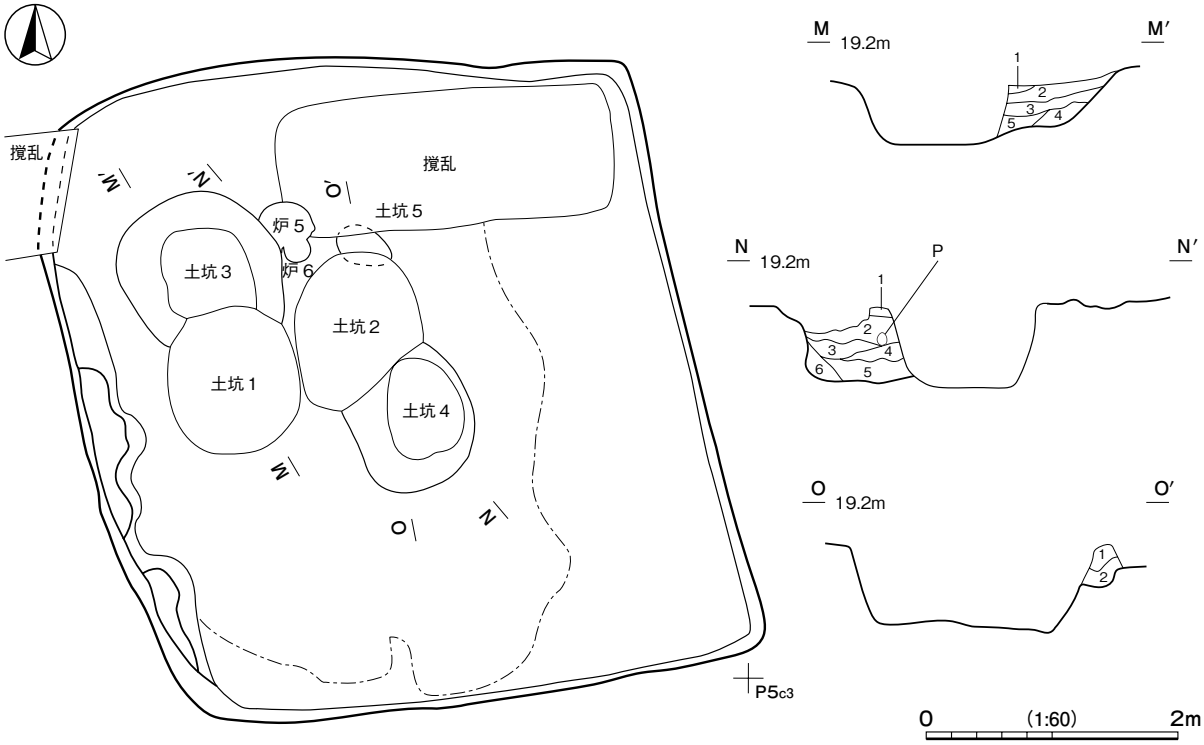
炉2・4土層解説

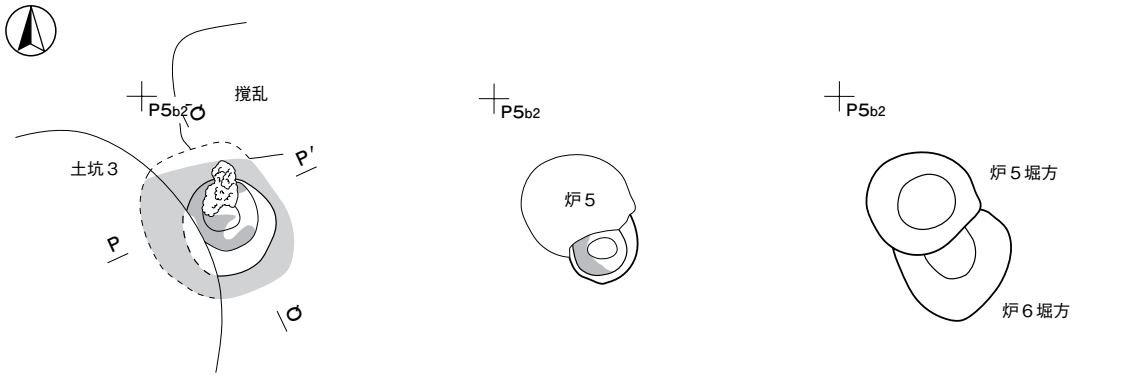
1 褐 灰 色 粘土粒子多量，焼土粒子中量
2 褐 灰 色 粘土粒子多量，焼土粒子少量
3 灰 褐 色 粘土粒子多量，焼土粒子少量，炭化物微量
4 にぶい赤褐色 焼土粒子多量，粘土粒子中量
5 暗 赤 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子中量，粘土粒子少量
6 暗 赤 褐 色 焼土粒子多量
7 極暗赤褐色 炭化粒子多量
8 灰 褐 色 粘土ブロック多量
9 褐 灰 色 粘土ブロック多量
10 にぶい赤褐色 ローム粒子多量
11 暗 赤 褐 色 粘土ブロック多量

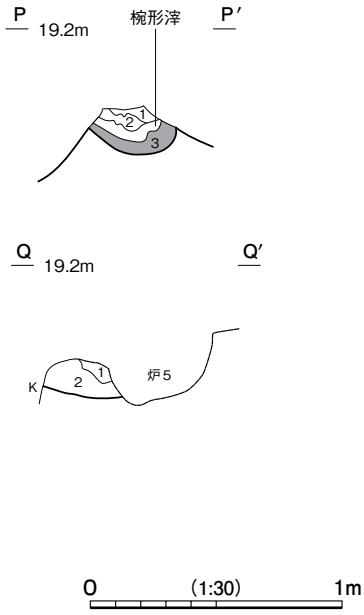
第 276 図 第５号鍛冶工房跡（SX ６）実測図（２）

表 184 第５号鍛冶工房跡（SX ６）出土遺物観察表(1)（第 278 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
1	須恵器	坏	［14.2］	4.2	8.6	長石・石英・細礫	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	３区覆土 x ３区 ２ x	40% PL44
2	須恵器	高台付坏	［16.7］	7.5	［11.0］	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台部貼付	土坑１覆土土坑１ x 土坑２土坑２ x	50% PL44
3	須恵器	高台付坏	13.6	2.8	8.9	長石・石英・雲母	灰	良好	体部稜で打ち欠き調整 蓋転用$_{カ}$ 稜部径 13.6	土坑２ x	50%
4	須恵器	鉢	［32.0］	(23.7)	(8.5)	長石・石英・細礫	内 灰黄 外 黄灰	良好	口縁部横ナデ 体部外面横位・斜位の平行叩き 体部下半斜方向のケズリ，内面ナデ 指頭痕 鉄付着	覆土２区１ x 土坑２ x 土坑２	25% PL51
5	土師器	甕	［18.3］	(3.5)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部ナデ	土坑２ x	10%







炉５土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
2　暗　褐　色　鉄滓中量，炭化物少量，ローム粒子微量
3　褐　灰　色　粘土ブロック多量

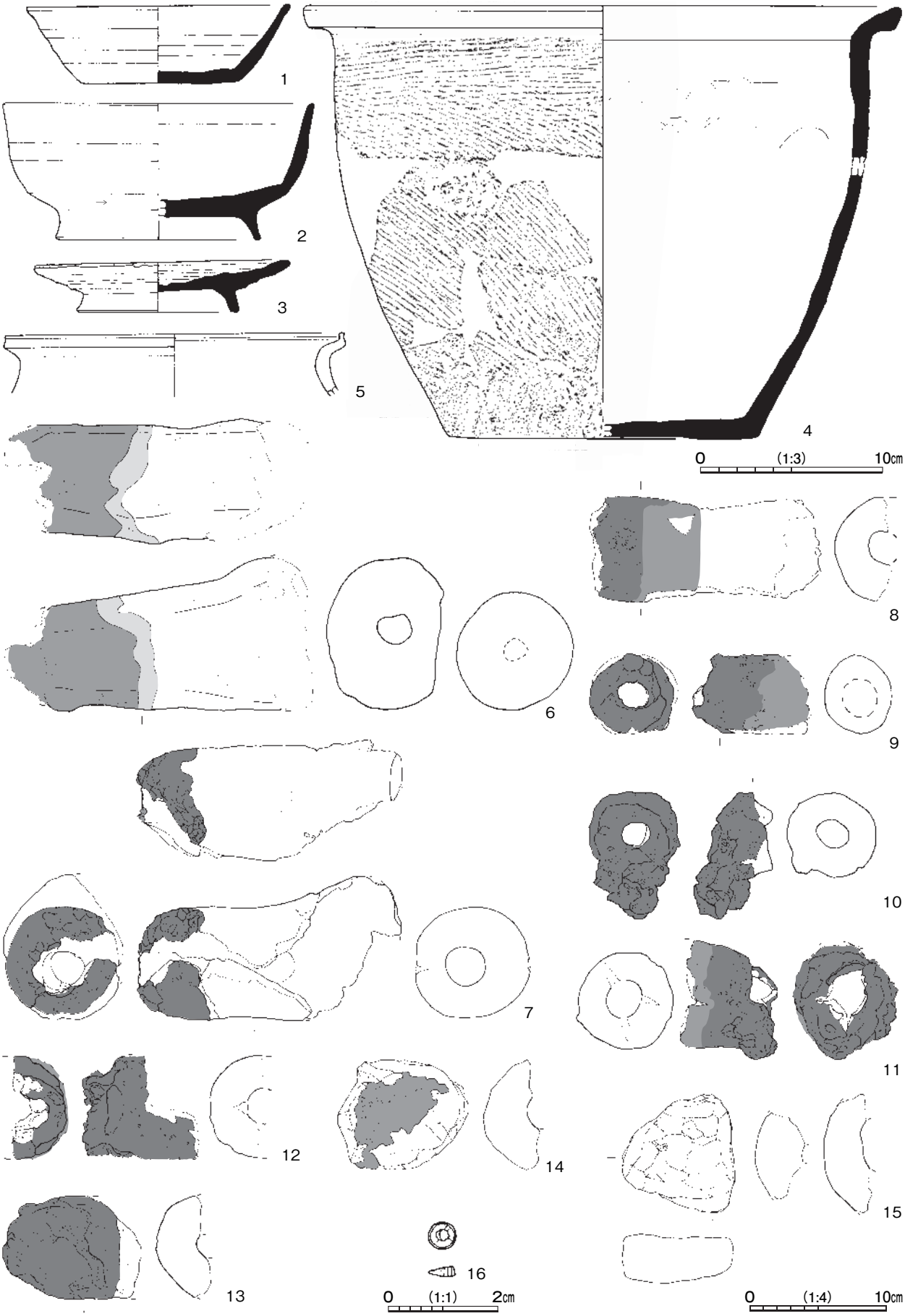
炉６土層解説
1　黒　褐　色　鉄滓少量，焼土粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量

土坑３土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化物・焼土粒子微量
3　暗　褐　色　炭化粒子少量，ロームブロック微量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量
5　暗　褐　色　ロームブロック多量，粘土ブロック少量

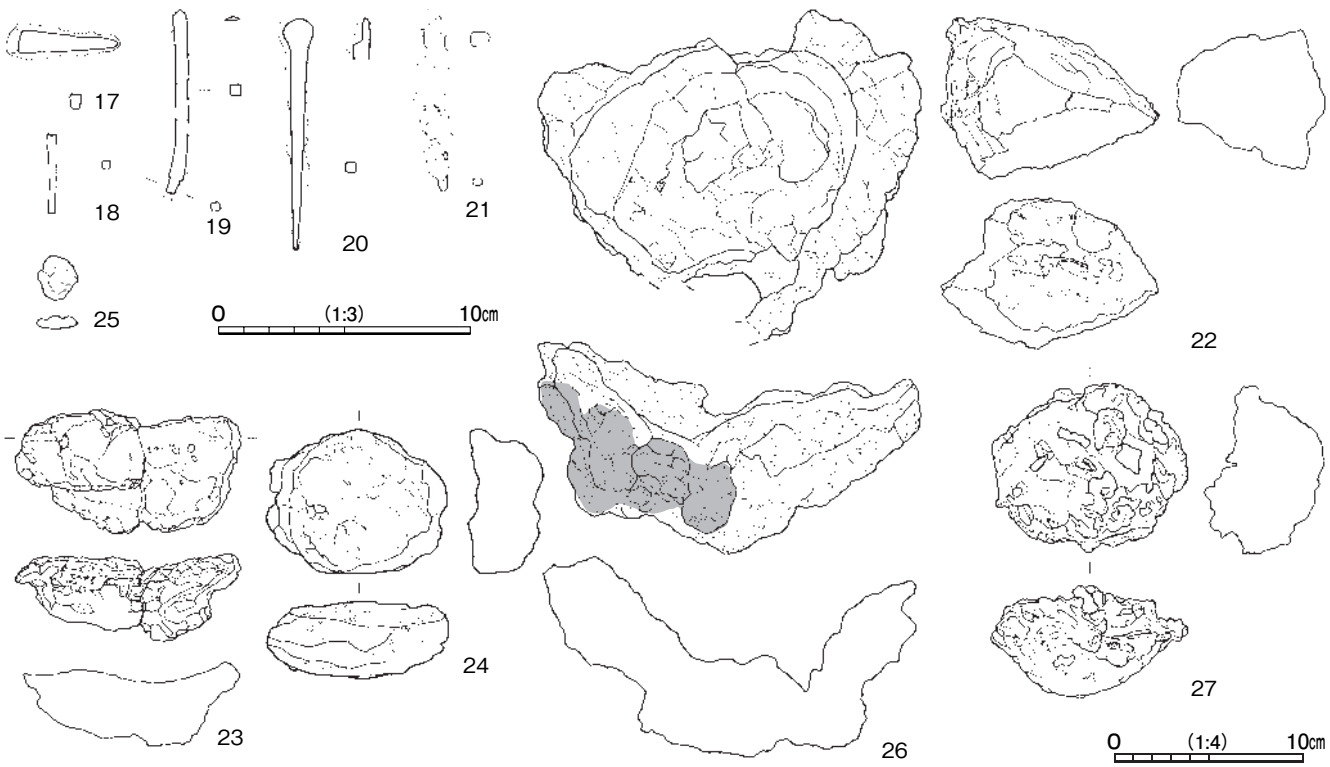
土坑４土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，粘土ブロック・炭化粒子少量，鉄滓少量
2　にぶい褐色　鉄滓中量，粘土ブロック微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子・鉄滓少量，焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量，粘土ブロック少量
5　暗　褐　色　鉄滓・炭化粒子中量，ロームブロック少量，焼土ブロック微量
6　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子中量，焼土粒子微量

土坑５土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化物少量，
2　暗　褐　色　鉄滓中量，炭化物少量，ローム粒子微量

第 277 図　第５号鍛冶工房跡（SX ６）実測図（３）



第 278 図　第５号鍛冶工房跡（SX ６）出土遺物実測図（１）



第 279 図　第５号鍛冶工房跡（SX ６）出土遺物実測図（２）

表 185　第５号鍛冶工房跡（SX ６）出土遺物観察表）（２）（第 278・279 図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
6	羽口	(22.2)	(11.1)	8.4	(1567.4)	長石・石英・細礫・赤色粒子	にぶい赤褐	径 8.4　孔径 2.1 ～ 2.5　帯状の器面剥離（炉固定部剥れか）	炉２　x	PL48
7	羽口	19.1	10.4	8.8	(795.6)	長石・石英	にぶい橙	径 7.9　孔径 3.0　先端溶解角度上 37°　下 38°	土坑　1 x 土坑　x	PL48
8	羽口	(16.6)	7.6	(4.1)	(420.5)	長石・石英・細礫・赤色粒子	にぶい黄橙	径［7.6］　孔径［2.2］	炉２　x	
9	羽口	(8.7)	6.4	5.7	(190.7)	長石・石英・雲母・細礫	にぶい橙	径 6.4　孔径 2.3 ～ 2.9　先端部溶解ガラス化　先端溶解角度 68°	土坑２　x	
10	羽口	(4.7)	6.6	［5.5］	(146.2)	長石・石英・細礫	内　橙 外　黄灰	径 6.6　孔径 1.8 ～ 2.4	覆土　x	
11	羽口	(7.0)	7.6	8.5	(221.0)	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	径 7.6　孔径 1.9 ～ 2.8　先端部溶解ガラス化　先端溶解角度 37°	覆土 炉２　x	
12	羽口	(8.5)	(4.0)	7.5	(151.4)	長石・石英・細礫	灰	径［7.6］　孔径［2.5］	土坑　２x	
13	羽口	(10.0)	(7.3)	4.0	(185.3)	長石・石英・赤色粒子	内　にぶい橙 外　にぶい黄褐	径［7.6］　孔径［2.0］	土坑１　x	
14	羽口	(9.4)	(7.9)	4.1	(215.4)	長石・石英・細礫	内　橙 外　にぶい赤褐	径［8.2］　孔径［2.6］	土坑２　x	
15	羽口	(8.1)	(8.5)	3.6	(195.2)	長石・石英・細礫・赤色粒子	内　橙 外　にぶい橙	径［9.4］　孔径［2.4］	覆土　x	

番号	器　種	径	孔径	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
16	臼玉	0.5	0.2	0.2	0.05	滑石	研磨	覆土　x	PL53

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
17	刀子	(3.9)	0.9	0.5	(7.42)	鉄	茎部片	覆土　x	PL56
18	釘カ	(3.1)	0.3	0.3	(1.93)	鉄	長頸鏃頸部片の可能性もある	覆土　x	PL56
19	鉄鏃	(7.3)	0.4 ～ 0.5	0.2 ～ 0.6	(7.97)	鉄	両刃式長頸鏃	覆土　x	PL56
20	釘	9.2	1.5	0.4	11.93	鉄	頭打出し	炉２　x	PL56
21	釘カ	(7.2)	0.8	0.6	(13.6)	鉄	木質付着	土坑３　x	PL56
22	椀形滓	(8.4)	(11.3)	(7.8)	(686.0)	鉄	破面アリ　底面砂付着（還元して灰色）	土坑２　x	PL56
23	椀形滓	(6.5)	11.7	4.7	(337.9)	鉄	破面アリ　２点接合　破面に金属光沢がみえる	覆土　x	
24	椀形滓	(7.5)	(9.4)	4.0	(395.3)	鉄	破面ナシ　完形	土坑２　x	
25	滓	(1.7)	(1.6)	0.5	(0.94)	銅	細かな気泡アリ	炉１　x	
26	椀形滓	(17.1)	(20.0)	11.1	2204.1	鉄	炭・粒状滓・鍛造剥片付着　炉床部	炉２　x	PL48
27	椀形滓	8.8	10.3	6.0	405.2	鉄	炭付着　溶解飴状	覆土　x	

第６号鍛冶工房跡（SX ８）（第 280・281 図　PL27）

位置　調査区南東部のＰ５e2 区，調査区北西部の標高 19 ｍの緩斜面に位置している。

重複関係　中央部分は，７世紀後葉の第 86 号竪穴建物と重複している。堆積状況からの新旧関係は捉えられなかった。第 86 号竪穴建物跡には竈がなく，主軸も一致した入れ子状になることから，本跡と一体の遺構であった可能性もある。

規模と形状　長軸 6.05 m，短軸 3.72 ｍの長方形で，主軸方向はＮ－３°－Ｅである。壁は，西側で高さ 16 ～ 30㎝で，外傾して立ち上がっている。

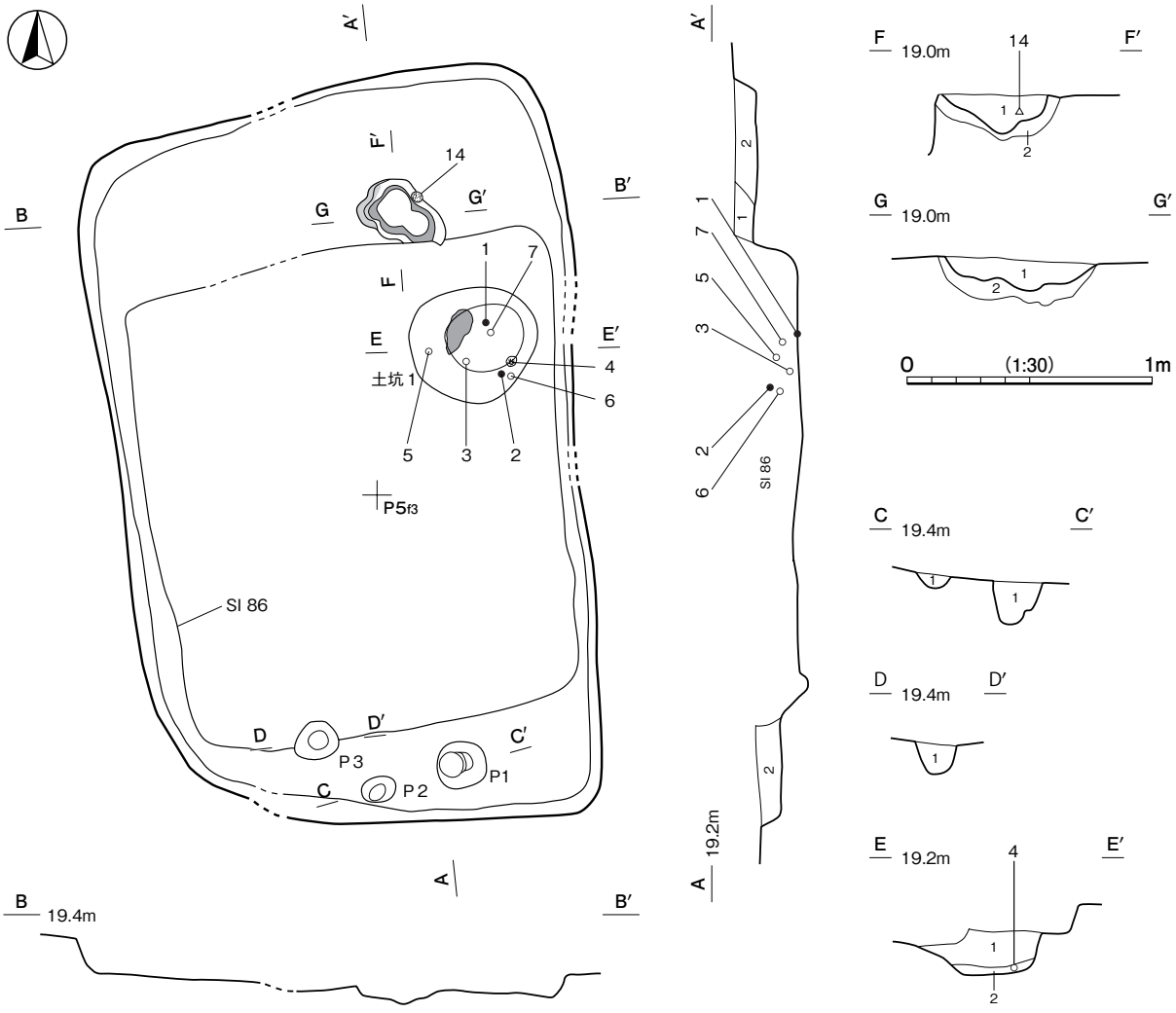
床　硬化面はない。

覆土　２層に分層できる。ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が含まれていることから，埋め戻されている。

炉　規模は，長軸 45㎝，短軸 30㎝の不定形で，深さ 15㎝である。

土坑　炉に近く，鉄滓など鍛冶関連遺物が出土していることから，炉と関連して構築されたと推定できる。

ピット　３か所。Ｐ１～Ｐ３は，竪穴建物跡の南壁側に位置している。出入り口ピットを想定される位置だが，



土層解説
1　黒　褐　色　粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量

炉土層解説
1　暗 赤 褐 色　焼土粒子多量，粘土ブロック中量
2　灰　褐　色　炉床滓化層

Ｐ１～３土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，粘土ブロック・炭化粒子微量

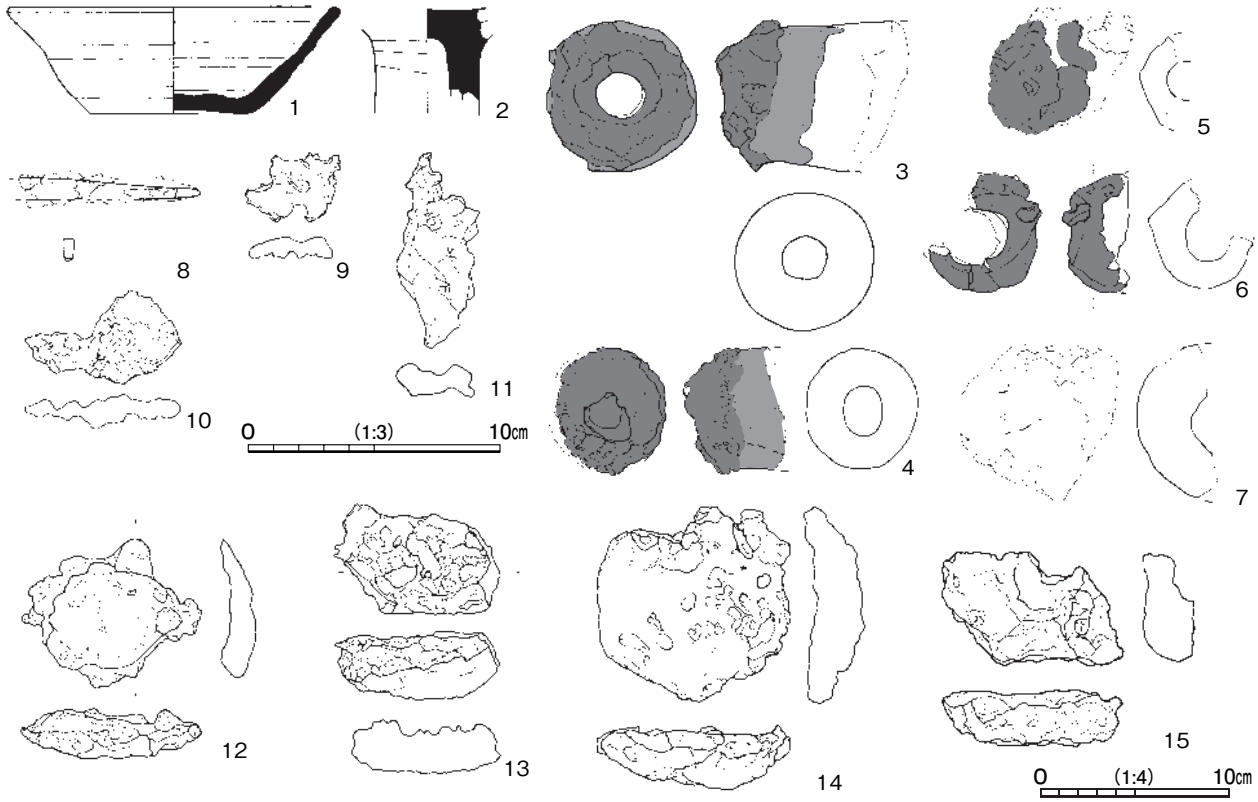
土坑１土層解説
1　黒　褐　色　粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　粘土ブロック・鉄滓・粒状滓・鍛造剥片多量，炭化粒子少量

第 280 図　第６号鍛冶工房跡（SX ８）実測図

主柱穴もなく，他の鍛冶工房跡でも見られないことから，機能は不明である。

遺物出土状況　土師器片 111 点（坏 13，甕 98），須恵器片 35 点（坏 24，高台付坏 1，高盤 1，甕 9），土製品 1 点（粘土塊），金属製品 1 点（不明）が出土している。鍛冶関連遺物は，鞴羽口 40 点，椀形滓 8 点 1,602.3 g，不定形滓 277 点 3,746.7 g，含鉄鉄滓・鉄塊系遺物 290 点 4,312.7 g，粒状滓 1 点 1.1 g が出土している。土坑 1 の土坑底面からは，鞴羽口の破片や鉄滓・鍛造剥片など鍛冶関連遺物がまとまって出土している。

所見　時期は，出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。鍛冶関連遺物のうち，炉の覆土から出土した椀形滓と土坑 1 中層から出土した滓について成分分析を実施した。その結果，炉の椀形滓は，製鉄原料の砂鉄起源の鉄チタン酸化物の結晶はないことから，鍛錬鍛冶滓と推定された。土坑 1 出土滓は，鉄滓は付着しているが，熱影響を受けてガラス質滓化した鍛冶炉の内面表層部破片と推定された。これに付着した鍛冶滓には，炉内出土の椀形滓と同様に鉄チタン酸化物が確認されないことから，鍛錬鍛冶滓であると推定された。よって，本跡は，鍛錬鍛冶を操業した工房跡と推定できる。



第 281 図　第 6 号鍛冶工房跡（SX 8）出土遺物実測図

表 186　第 6 号鍛冶工房跡（SX 8）出土遺物観察表（1）（第 281 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[12.9]	(4.2)	6.3	長石・石英・雲母・細礫	内 にぶい黄褐 外 灰	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	土坑 1　x	40％新治窯
2	須恵器	高盤	−	(4.2)	−	長石・石英・赤色粒子	灰	良好	ロクロナデ	土坑 1　x	5％新治窯

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
3	羽口	(10.1)	(7.8)	7.8	(451.4)	長石・石英・赤色粒子	内 明赤褐 外 にぶい黄褐	孔径 2.3　先端部溶解ガラス化	土坑 1　x	PL48
4	羽口	(5.3)	6.2	6.5	(131.9)	長石・石英・雲母・細礫	内 黄灰 外 にぶい橙	孔径 2.0 ～ 2.7　先端部溶解ガラス化　先端溶解角度 45°	土坑 1　x	
5	羽口	(7.7)	(6.7)	(2.9)	(166.5)	長石・石英・雲母・赤色斑点	にぶい褐	孔径［2.0］　先端部溶解ガラス化	土坑 1　x	
6	羽口	(3.5)	6.2	5.8	(70.9)	長石・石英	にぶい褐	径［5.8］　孔径［2.6］　先端部溶解ガラス化	土坑 1　x	
7	羽口	(8.3)	(8.1)	(2.8)	(391.0)	長石・石英・細礫	内 橙 外 にぶい黄褐	径［8.1］　孔径［3.2］　外面ナデ	土坑 1　x	

表 187　第６号鍛冶工房跡（SX ８）出土遺物観察表（２）（第 281 図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
8	刀子	(7.8)	0.8	0.5	(13.4)	鉄	茎部片	覆土　x	
9	不定形滓	2.7	3.8	0.9	5.9	鉄	磁着する　流動滓ヵ	２区　１x	PL56
10	不定形滓	3.7	6.3	1.3	21.2	鉄	砂付着　磁着する	２区　１x	PL56
11	不定形滓	7.7	3.3	1.3	38.3	鉄	砂付着　磁着する　流動滓ヵ	２区　１x	PL56
12	椀形滓	7.8	9.4	2.6	166.6	鉄	破面ナシ　完形	１区　１x	
13	椀形滓	5.8	8.6	3.6	265.2	鉄	炭付着　破面アリ	１区　１x	
14	椀形滓	10.2	10.0	3.4	446.3	鉄	炭付着　破面アリ　気泡部分アリ	３区　１x	PL48
15	炉壁ヵ	9.4	5.9	3.0	90.3	不明	発砲ガラス化	２区　１x	

表 188　第６号鍛冶工房跡（SX ８）出土鉄滓集計表

区・遺構 / 層	合計 / 個数				合計 / 重量 g				全体合計 / 個数	全体合計 / 重量 g
	鉄塊系遺物	不定形滓	粒状滓	椀形滓	鉄塊系遺物	不定形滓	粒状滓	椀形滓		
０区	96	66	1		703	555.4	1.1		163	1259.5
１区	126	145		3	2721.7	2268.6		534.5	274	5524.8
1 x	35	36		2	486.9	285.7		431.8	73	1204.4
2 x	43	47			1335.9	996.2			90	2332.1
3 x	28	41			431	629			69	1060
4 x	18	15		1	405	238.5		102.7	34	746.2
x	2	6			62.9	119.2			8	182.1
４区	4	3			27.5	183.9			7	211.4
1 x	1	1			10.7	7.4			2	18.1
2 x		1				117.1			1	117.1
4 x	3	1			16.8	59.4			4	76.2
土坑１	1			1	50.1			66.7	2	116.8
炉	3	3		1	48.7	11.1		470.9	7	530.7
第１層				1				470.9	1	470.9
４区　x	3	3			48.7	11.1			6	59.8
SI-86　１区	10	1			48.1	120.3			11	168.4
SI-86　２区	50	59		3	713.6	607.4		530.2	112	1851.2
1 x	25	39		1	442.2	425		111	65	978.2
2 x	16	13		1	111.1	163.3		269.6	30	544
x	9	7		1	160.3	19.1		149.6	17	329
総計	290	277	1	8	4312.7	3746.7	1.1	1602.3	576	9662.8

第７号鍛冶工房跡（SX ９）（第 282 図　PL28）

位置　調査区北部のＭ３i4 区，標高 23 ｍの緩斜面に位置している。削平されているため，炉跡とそれに近接した土坑を鍛冶工房跡に伴う遺構として報告する。

重複関係　９世紀前葉の第 89 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

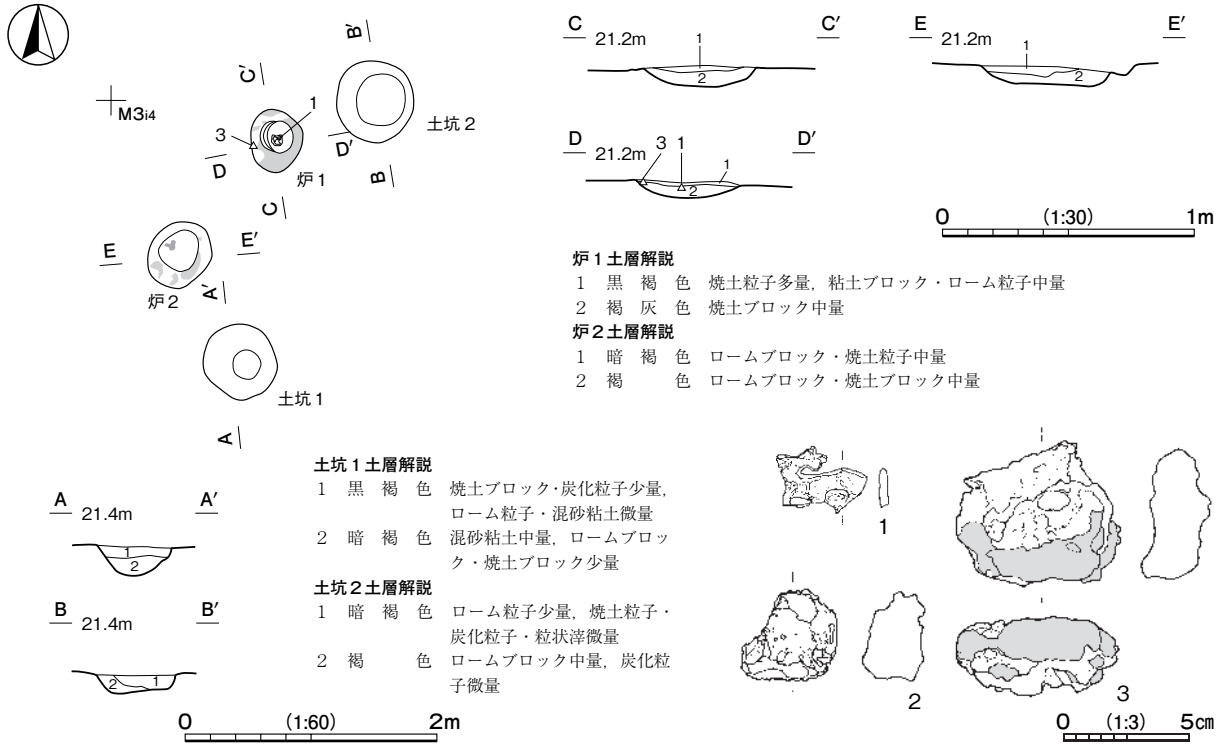
規模と形状　竪穴構造は不明である。

炉　２か所。炉１と炉２は，２ｍほど離れて構築されている。いずれも削平により，炉床下部の焼土化した部分のみ残存している。

土坑　２基。土坑１は，炉２に近接していることから，これに伴う土坑と考えられる。覆土は，砂質粘土が含まれていることから，炉壁が壊されたものが混入していると考えられる。土坑２は，炉１に近接していることからこれに伴う土坑と考えられる。覆土の第１層には，粒状滓が微量含まれている。

遺物出土状況　土器は出土していない。鍛冶関連遺物は，不定形滓２点 66.6 ｇ，含鉄鉄滓・鉄塊系遺物６点 175.2 ｇが出土している。

所見　時期は，重複関係から９世紀前葉以降と考えられる。周辺にある第３号鍛冶工房跡が 10 世紀中葉であることから，９世紀中葉から 10 世紀代に構築されたものと推測できる。



第 282 図　第７号鍛冶工房跡（SX ９）・出土遺物実測図

表 189　第７号鍛冶工房跡（SX ９）出土遺物観察表（第 282 図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
1	不定形滓	2.7	3.6	0.4	21.3	鉄	破面アリ　流動滓ヵ	炉１　x	PL56
2	不定形滓	3.7	3.8	2.1	45.3	鉄	破面アリ	炉２　２区 x	PL56
3	鉄塊系遺物	6.0	6.7	3.3	117.6	鉄	破面アリ　砂・石付着	炉１　x	PL56

表 190　第７号鍛冶工房跡（SX ９）出土鉄滓集計表

区・遺構 / 層	合計 / 個数		合計 / 重量 g		全体合計 / 個数	全体合計 / 重量 g
	鉄塊系遺物	不定形滓	鉄塊系遺物	不定形滓		
炉1	1	1	117.6	21.3	2	138.9
炉2	5	1	57.6	45.3	6	102.9
総計	6	2	175.2	66.6	8	241.8

第８号鍛冶工房跡（SX11）（第 283・284 図）

位置　調査区南東部のＰ５d3 区，標高 19 ｍの緩斜面に位置している。炉跡とそれに近接した鍛冶関連遺物が出土している土坑を鍛冶工房跡に伴う遺構と判断して報告する。

重複関係　７世紀前～中葉の第 107 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

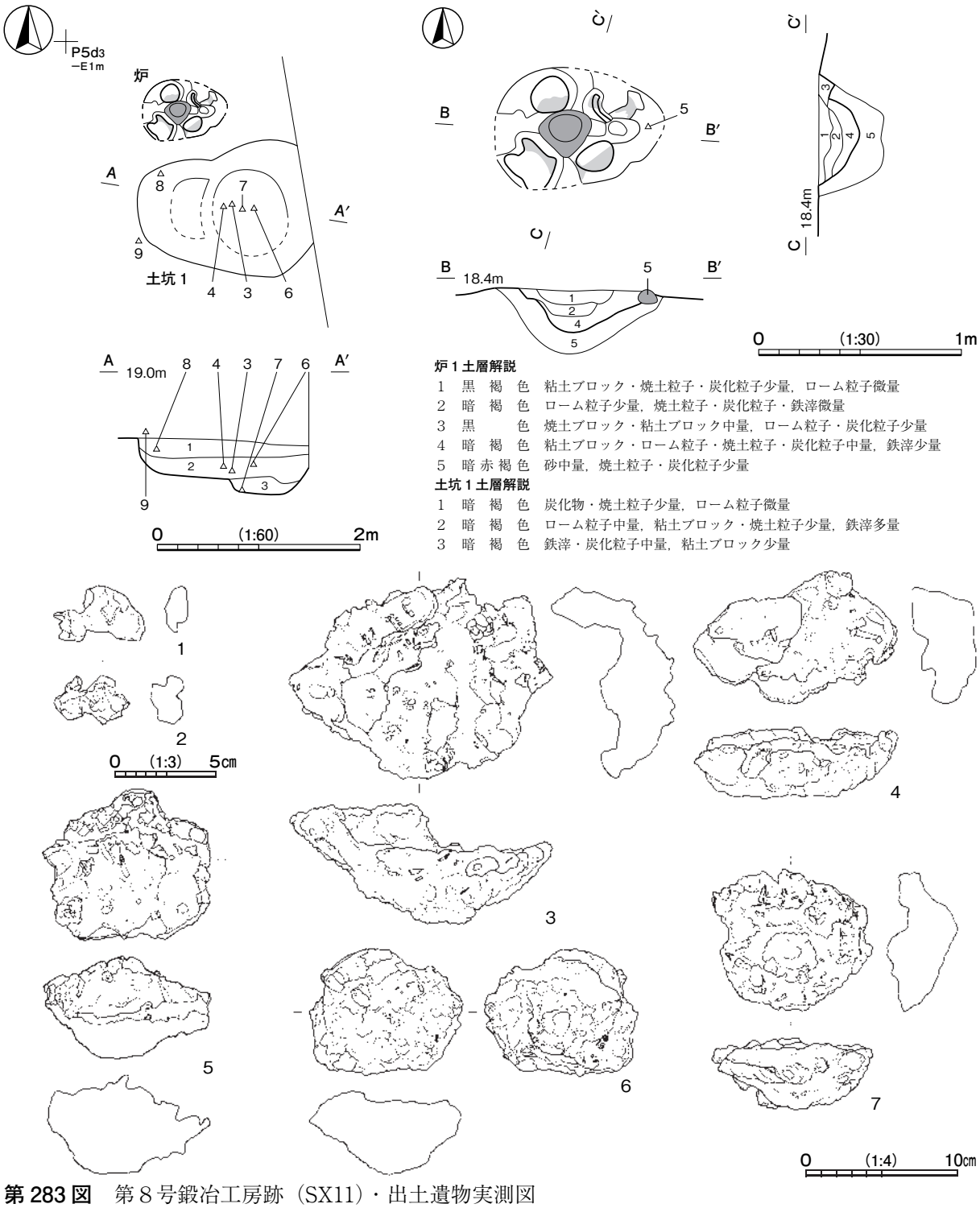
規模と形状　竪穴構造は不明である。

炉　径 30㎝ほどの椀状の炉床部が残っている。これに東・西・南・北の各方向へ幅 10㎝で深さ 10㎝の溝状の掘り込みを有する。そのうち南側の１条は作業用土坑と推定される土坑１の方向を向いているため，排出口と推定される。その他の３条の溝状の掘り込みは，輔羽口を設置したものと推定できる。うち東側からは，底面に接して鉄滓が出土している。

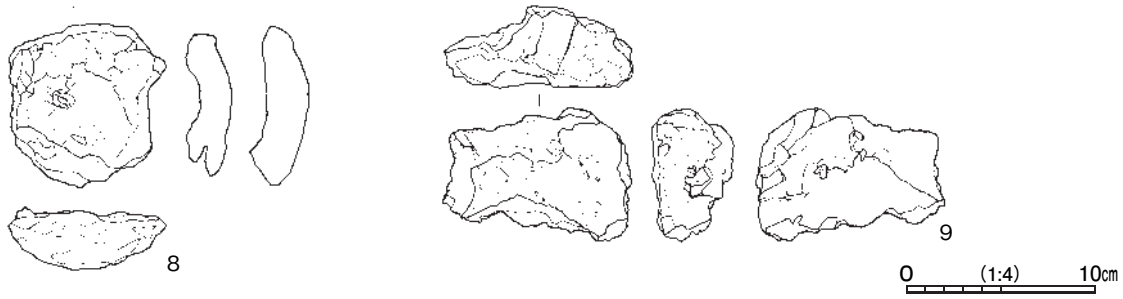
土坑　炉に近接していることから，これに伴う作業用土坑と考えられる。形状は，東側が深く掘り込まれ，西側が一段高くなっている。覆土は３層に分層される。第２層に鉄滓が多量に含まれる。

遺物出土状況　土師器片 71 点（坏 7，甕 64），須恵器片 27 点（坏 4，鉢 2，甕 21），金属製品 1 点（不明）が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。鍛冶関連遺物は，鞴羽口 39 点，椀形滓 6 点 2,944.0 g，不定形滓 117 点 1,977.5 g，含鉄鉄滓・鉄塊系遺物 232 点 4,630.7 g が出土している。

所見　時期は，重複関係から 7 世紀後葉以降と考えられる。近接している第 5 号鍛冶工房跡は 8 世紀後葉，第 6 号鍛冶工房跡は 9 世紀中葉である。特に第 6 号鍛冶工房跡が近接していることから同時並存は考えにくい。9 世紀中葉以降に構築されたとも考えられるが，土坑 1 の形状が，今回調査した奈良時代の鍛冶工房跡の炉に伴う土坑底面にピットを設ける特徴が共通していることから，奈良時代の鍛冶工房跡と推測される。



第 283 図　第 8 号鍛冶工房跡（SX11）・出土遺物実測図



第 284 図　第８号鍛冶工房跡（SX11）出土遺物実測図

表 191　第８号鍛冶工房跡（SX11）出土遺物観察表（第 283・284 図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
1	不定形滓	4.5	2.7	1.1	14.0	鉄	流動滓カ	１区　１x	
2	不定形滓	3.8	2.4	1.6	11.5	鉄	流動滓カ	１区　１x	
3	椀形滓	13.0	17.0	7.8	753.8	鉄	底面砂付着　炭付着	土坑１ 第２層	PL48
4	椀形滓	8.7	13.2	4.7	507.9	鉄	破面アリ　底面側がメタル度高い	土坑１ 第２層	
5	椀形滓	9.7	10.9	6.6	572.9	鉄	破面ナシ　気泡多数	炉１ 第４層	
6	椀形滓	8.2	10.0	5.4	495.8	鉄	破面ナシ　底面砂付着	土坑１ 第２層	
7	椀形滓	9.2	10.4	4.6	379.6	鉄	破面ナシ　炭・鍛造剥片付着	土坑１ 第３層	
8	椀形滓	8.6	8.2	3.2	234.0	鉄	破面アリ　底面砂付着（還元して灰色）	土坑１ 第１層	
9	不定形滓	6.9	9.9	4.3	233.7	鉄	破面ナシ　椀形滓カ	０区　x	

表 192　第８号鍛冶工房跡（SX11）出土鉄滓集計表

区・遺構／層	合計／個数			合計／重量 g			全体合計／個数	全体合計／重量 g
	鉄塊系遺物	不定形滓	椀形滓	鉄塊系遺物	不定形滓	椀形滓		
１区		2			25.5		2	25.5
確認面	89	64		1556.5	999.1		153	2555.6
0 x	1	1		9.1	233.7		2	242.8
1 x	88	63		1547.4	765.4		151	2312.8
土坑１	131	48	5	3019.6	760.4	2371.1	184	6151.1
第１層			1			234	1	234
第２層	14	4	3	648.3	86.7	1757.5	21	2492.5
第３層			1			379.6	1	379.6
x	117	44		2371.3	673.7		161	3045
炉１	12			54.6			12	54.6
炉２		3			192.5		3	192.5
炉			1			572.9	1	572.9
第４層			1			572.9	1	572.9
総計	232	117	6	4630.7	1977.5	2944	355	9552.2

表 193　鍛冶工房跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考（旧→新）
				長軸×短軸（m）	（cm）			主柱穴	出入口	ピット	炉	土坑				
1	O4g0	N－3°－W	方　形	3.91 × 3.80	14 ～ 45	平坦	－	－	－	3	4	6	人為	土師器，須恵器，金属製品，鍛冶関連遺物	８世紀中葉	
2	O4i0	N－3°－E	隅丸長方形	5.57 ×（3.85）	15 ～ 35	平坦	－	2	－	－	4	9	人為	土師器，須恵器，金属製品，鍛冶関連遺物	８世紀中葉	本跡→ SD26，SK101，346，SF 6
3	N3f2	N－7°－E	方　形	3.09 ×（2.71）	8 ～ 15	平坦	－	－	－	－	1	2	人為	土師器，須恵器，金属製品，鍛冶関連遺物	10 世紀中葉	SK230 新旧不明
4	P4g2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	2	人為	土師器，須恵器，金属製品，鍛冶関連遺物	８世紀前葉	SI68 →本跡
5	P5b2	N－9°－W	長方形	5.23 × 4.87	12 ～ 20	平坦	－	－	－	－	6	5	人為	土師器，須恵器，金属製品，鍛冶関連遺物	８世紀後葉	
6	P5e2	N－3°－E	長方形	6.05 × 3.72	16 ～ 30	平坦	－	－	－	3	1	1	人為	土師器，須恵器，金属製品，鍛冶関連遺物	９世紀中葉カ	SI86 →本跡
7	M3i4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	2	人為	鍛冶関連遺物	９世紀中葉以降カ	SI89 →本跡
8	P5d3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	人為	土師器，須恵器，金属製品，鍛冶関連遺物	８世紀カ	SI107 →本跡

⑷ 鍛冶工房跡出土鉄滓の化学分析

ア　第１・３号鍛冶工房跡出土鉄滓の化学分析

はじめに

本分析調査では，奈良・平安時代の鍛冶工房跡とされる遺構から出土した鉄滓を対象に金属学的調査を実施し，島名本田遺跡で行われていた鍛冶工程および使用原料について検討する。

１　試料

分析対象試料は，本遺跡から出土した鉄滓６点である。試料の詳細を表１に示し，これらについて外観観察，断面マクロ・ミクロ組織観察，成分分析を実施する。

表１　分析試料一覧

遺物番号	出土遺構	出土位置	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重量（g）
17	SX 1	炉１　第５層	77.5	54	18.8	75.5
18	SX 1	土坑１　第５層	50	34.6	20.4	34.7
19	SX 1	土坑４　x	57.9	52	33.1	77.9
20	SX 1	３区　x	84.4	74.8	29.9	185.1
21	SX 3	炉覆土上層	21	17.1	8.2	5.3
22	SX 3	土坑１　第２層	31.6	30.1	16.2	10

２　分析方法

ア　外観観察

試料は肉眼およびデジタルカメラ・実体顕微鏡により表面の特徴を観察・記録する。使用装置は以下の通りである。

・デジタルカメラ　　G10 型（キャノン製）　・実体顕微鏡　VHX500 型（キーエンス製）

イ　断面マクロ・ミクロ組織観察

外観観察後，代表的な箇所をダイヤモンドカッターにて約 20 × 20mm に切取り，半分は組織観察用残りの半分は成分分析用に分割し洗浄・乾燥後，組織観察用は真空下でエポキシ系樹脂にて埋め込み組織を固定した。固化後，鏡面まで研磨して光学顕微鏡にて断面組織を観察記録した。装置は以下の通りである。

・光学顕微鏡　　BX51M 型（オリンパス製）

ウ　成分分析

前記の残りの試料は，メノウ乳鉢にて微粉砕（約 60 メッシュ以下）し，以下の方法にて構成成分を求める。

分析成分・・・T・Fe，M・Fe，FeO，Fe_2O_3，SiO_2，Al_2O_3，CaO，MgO，TiO_2，V_2O_5

分析方法・・・T・Fe，M・Fe，FeO は JIS　全鉄容量法による

Fe_2O_3 は計算により算出

SiO_2，Al_2O_3，CaO，MgO，TiO_2，V_2O_5 は蛍光 X 線法による

表２　各試料の平均化学組成（重量％）

出土遺構	遺物番号	T・Fe	M・Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	TiO_2	V_2O_5
SX 1	17	48.66	0.78	44.46	19.02	19	7.87	3.95	0.87	1.46	0.13
	18	56.29	0.61	44.94	29.66	15.6	6.25	2.53	0.58	1.67	0.27
	19	54.22	0.67	58.25	11.83	22.1	9.05	1.17	1.01	2.88	0.23
	20	47.8	0.86	45.15	16.93	20.7	4.49	4.49	8.72	1.45	0.14
SX 3	21	54.04	0.45	6.4	69.5	9.9	4.05	0.55	0.19	0.16	0.12
	22	8.32	0.82	1.58	9.05	62.4	16	3.45	0.72	0.63	－

３　結果

⑴　試料 SX 1-17 鉄滓

第１図に試料の外観と断面マクロ・ミクロ組織を，表２に平均化学組成を示す。SX 1 の炉１第５層付近から出土したもので，大きさは 77.5 × 54 × 18.8mm，重さ 75.5g を測る。表面は茶褐色および黄褐色を呈し，凹凸の激しい表面形状の鉄滓である。断面マクロ組織をみると，大小の丸みを帯びた空孔を有し，大きな空孔内壁には薄く鉄錆が存在する。A 部のミクロ組織は平均的な組織で，微細なウスタイト（理論化学組成；FeO），葉片状のファヤライト（理論化学組成；$2FeO \cdot SiO_2$）および非晶質珪酸塩と若干の金属鉄粒子で構成され，チタン化合物は存在しない。一方，B 部の組織は，元は溶融あるいは半溶融した金属鉄が錆化した組織である。平均組成をみると，全鉄は 48%，FeO は 44%，チタン分は 1.4% 程度である。中性あるいは還元性雰囲気にて生成したことが推測される。チタン分は 1.4% と少ない。構成鉱物および平均化学組成からみて，本試料は高炭素濃度の鉄原料（銑鉄）を鋼にする過程（精錬）にて生成した産物と考えられる。

⑵　試料 SX 1-18 鉄滓

第２図に試料の外観と断面マクロ・ミクロ組織を，表２に平均化学組成を示す。SX 1 の土坑１第５層から出土したもので，大きさは 50 × 34.6 × 20.4mm，重さ 34.7g を測る。表面は茶褐色や黄褐色で前記の SX 1-17 と表面状況は類似している。断面マクロ組織を見ると，大小の空孔が多く存在し大きな空孔内壁には SX 1-17 と同様に薄く鉄錆が存在する。平均的な A 部組織をみると，構成鉱物はウスタイトおよびファヤライトと非晶質珪酸塩，僅かの金属鉄粒子からなりチタン化合物は存在しない。各鉱物結晶の大きさと形状から，SX 1-17 に比べ緩やかに冷却･固化したものと思われる。一方，B 部のミクロ組織は，溶融あるいは半溶融した金属鉄が周囲の鉄滓と反応して固化した組織である。平均化学組成をみると，全鉄は 56% と高く FeO は 45%，Fe_2O_3 も 30% と高い。また，チタン分は 1.7% 程度である。構成鉱物および平均化学組成からみて，本試料も前記の SX 1-17 鉄滓と同様に，精錬過程における産物と考えられる。

⑶　試料 SX 1-19 鉄滓

第３図に試料の外観と断面マクロ・ミクロ組織を，表２に平均化学組成を示す。SX 1 の土坑４覆土中から出土したもので，大きさは 57.9 × 52 × 33.1mm，重さ 77.9g を測る。黄褐色を呈し一部に炉材が固着している。表面の凹凸は激しいが緻密な鉄滓である。断面マクロ組織を見ると，比較的丸みを帯びた空孔が存在し緻密な組織を呈する。平均的な組織である A 部の構成鉱物は，若干の金属鉄粒子，丸みを帯びたウスタイト，長柱状のファヤライトおよび非晶質珪酸塩からなる。一方，固着している炉材近傍の B 部組織は，丸みを帯びたウスタイト，スピネル鉱物であるハーシナイト（$FeO \cdot Al_2O_3$），短冊状のファヤライトおよび非晶質珪酸塩からなるがチタン化合物はみられない。平均化学組成をみると，全鉄は 54%，

FeO が 58% と高く，チタン分は 2.88% と本調査試料中で最も高い濃度である。鉱物組織の結晶粒子の大きさやハーシナイトの生成が見られることから，本試料は中性あるいは還元性雰囲気で緩やかに冷却・固化したものと考えられる。

⑷ 試料 SX 1-20 鉄滓

第 4 図に試料の外観と断面マクロ・ミクロ組織を，表 2 に平均化学組成を示す。SX 1 の 3 区覆土中から出土したもので，大きさは 84.8 × 74.8 × 29.9mm，重さ 185.1g を測る。茶褐色でやや板状に近い椀形形状を呈し底部と思われる箇所には球状滓（湯玉状）が点在する。断面マクロ組織をみると，小さな空孔が多く存在するが比較的緻密な組織を呈する。構成鉱物は，葉片状のウスタイト，微細なファヤライト，非晶質珪酸塩からなる。A 部ミクロ組織に示すように，組織中には 0.1mm 以下の球状粒子の存在が認められる。これは，細かな湯玉（粒状滓）で溶融・半溶融の鉄浴と炉材との反応で生じたガスに伴って生成したものである。B 部の組織はこの鉄滓の中央部分の組織を示したものである。平均化学組成をみると，全鉄 47%，FeO が 45%，チタン分は 1.45% 程度である。鉄分が高いのは，鉄滓中に湯玉（鉄錆）が多く存在することに因るものと思われる。本試料は湯玉が内包していることなどから，精錬過程における比較的鍛冶炉上部に近い箇所にて生成した鉄滓と考えられる。

⑸ 試料 SX 3-21 鉄滓

第 5 図に試料の外観と断面マクロ・ミクロ組織を，表 2 に平均化学組成を示す。SX 3 の炉覆土上層より出土したもので，大きさは 21 × 17.1 × 8.2mm，重さ 5.3g を測る。茶褐色で板状のものを噛み込んだ鉄滓である。断面マクロ・ミクロ組織をみると，殆どが鉄錆で構成されており，鉄滓成分は僅かである。この鉄錆領域（図版中の A・C 部）は，一部金属鉄が残存しており，銑鉄の特徴あるレーデブライト組織を呈することから元は銑鉄であったことが判る。また，周囲は錆びているものの鋼組織が確認できる。平均化学組成をみると，全鉄が 54%，Fe_2O_3 が 69% と高く本試料は酸化鉄主体のものといえる。したがって，本試料は銑鉄から鋼にするために酸化・脱炭操作をした時の産物（反応途中）と考えられる。

⑹ 試料 SX 3-22 鉄滓

第 6 図に試料の外観と断面マクロ・ミクロ組織を，表 2 に平均化学組成を示す。SX 3 の土坑 1 第 2 層より出土したもので，大きさは 31.6 × 30.1 × 16.2mm，重さ 10g を測る。褐色から黒灰色を呈し，炉材が変質した一部とみられる。断面組織をみると，表層領域は炉材の未反応の領域（C 部），炉材成分が溶融した領域（B 部）である。この塊の中央部分には，緻密な酸化鉄組織（恐らく，反応に関与した鉄成分の残渣が固着）が存在する。平均化学組成をみると，全鉄は 8% 台と少なく，酸化珪素（SiO_2）が 62% と多いことから炉材成分の一部と見ることができる。したがって，この試料は鉄滓成分が少ないことから，比較的炉の上部に存在したものとみられる。

4 考察

島名本田遺跡出土鉄滓類 6 点の金属学的調査を行った結果は以下の通りである。

SX 1 から出土した鉄滓類である 4 点は，いずれも溶融・半溶融した金属鉄が錆化した領域が多く含む組織であった。特に，SX 1-20 は鉄滓中に湯玉（溶融・半溶融金属鉄が錆化したもの）を多く内包していた。これらは精錬過程において生成した産物と考えられ，SX 1 では精錬鍛冶が行われていた可能性が考えられる。

SX 3 の炉覆土上層から出土した№21 は，銑鉄片を脱炭して鋼を得る操作段階の反応途中のものであっ

たことから，SX ３においても精錬鍛冶が行われていた可能性が考えられる。№22 は，酸化珪素が多い化学組成から考えると，鍛冶炉の比較的上部にあった炉材片である可能性が考えられる。

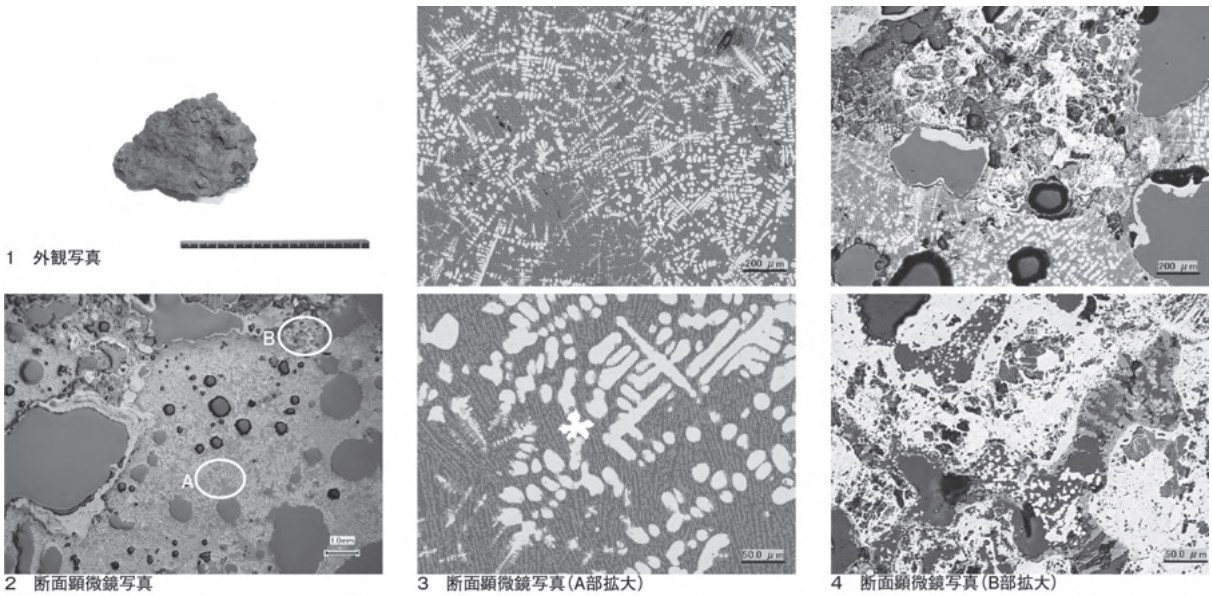
鉄滓類中のチタン分は１～３% 程度含まれていたが，チタン化合物として鉱物相を形成していることは認められなかった。恐らく，チタン分はウスタイト（FeO）結晶中に含有されているものと考えられた。そのため，今回の分析結果から，本遺跡で出土した鉄滓の原料が砂鉄か否かは言及できないが，チタンがある程度含まれていることから考え，砂鉄を原材料としている可能性は高いものと思われる。

本遺跡の周辺に所在する島名八幡前遺跡や島名熊の山遺跡では製鉄関連遺構が検出されており，鉄滓や羽口等の製鉄に関連する遺物や金属製品も出土している。これらの成果から，古代の本地域は製鉄の拠点となっていた可能性も考えられるため，今後，本遺跡の周辺に所在する製鉄関連遺跡も含めた金属学的分析を実施し，古代における本地域の製鉄についての資料を蓄積し，製鉄工程，鉄の流通などを復元することが望まれる。

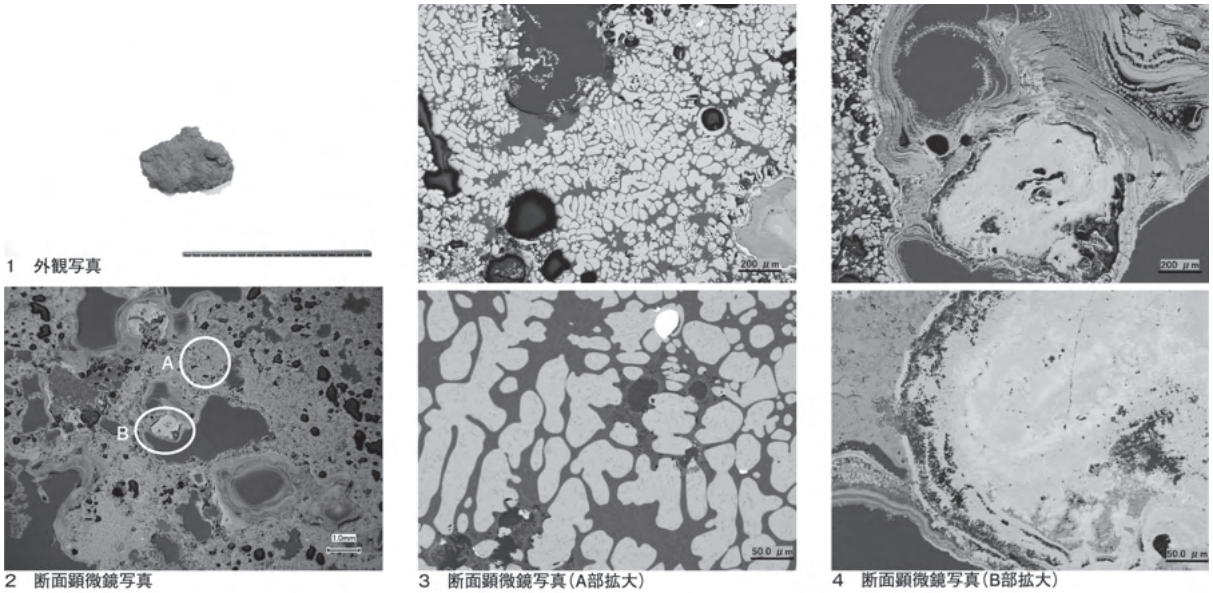
引用文献

菊池直哉『島名八幡前遺跡　都市計画道路島名上河原崎線道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告』茨城県教育財団文化財調査報告第 283 集　2007 年３月

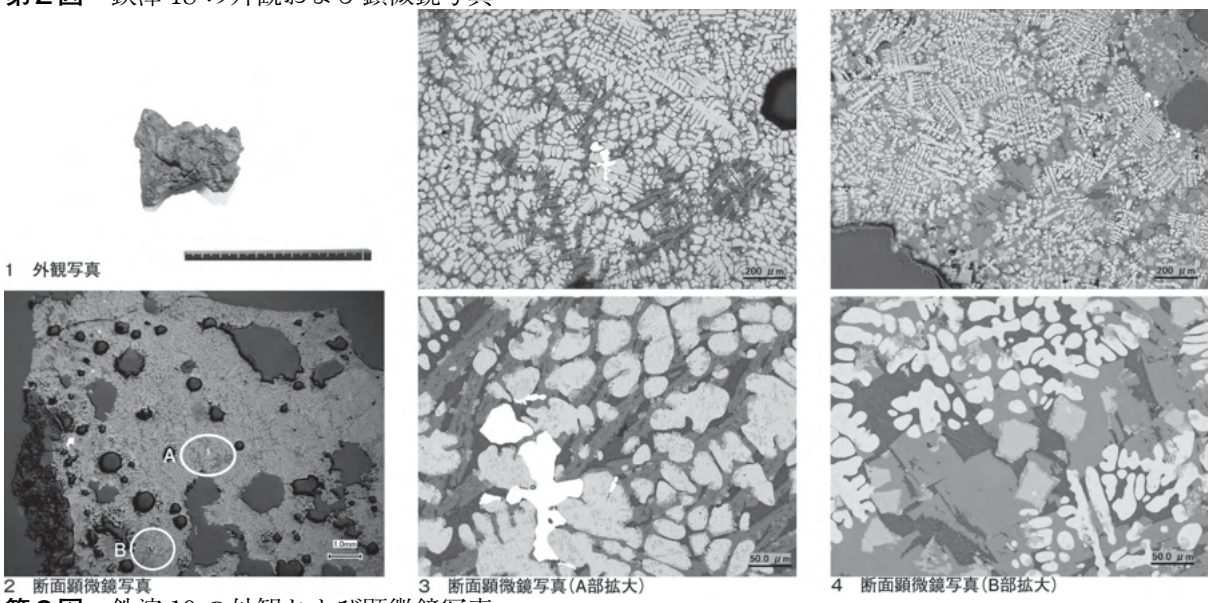
田中幸夫ほか『島名熊の山遺跡　島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告ⅩⅡ』茨城県教育財団文化財調査報告第 264 集　2006 年３月



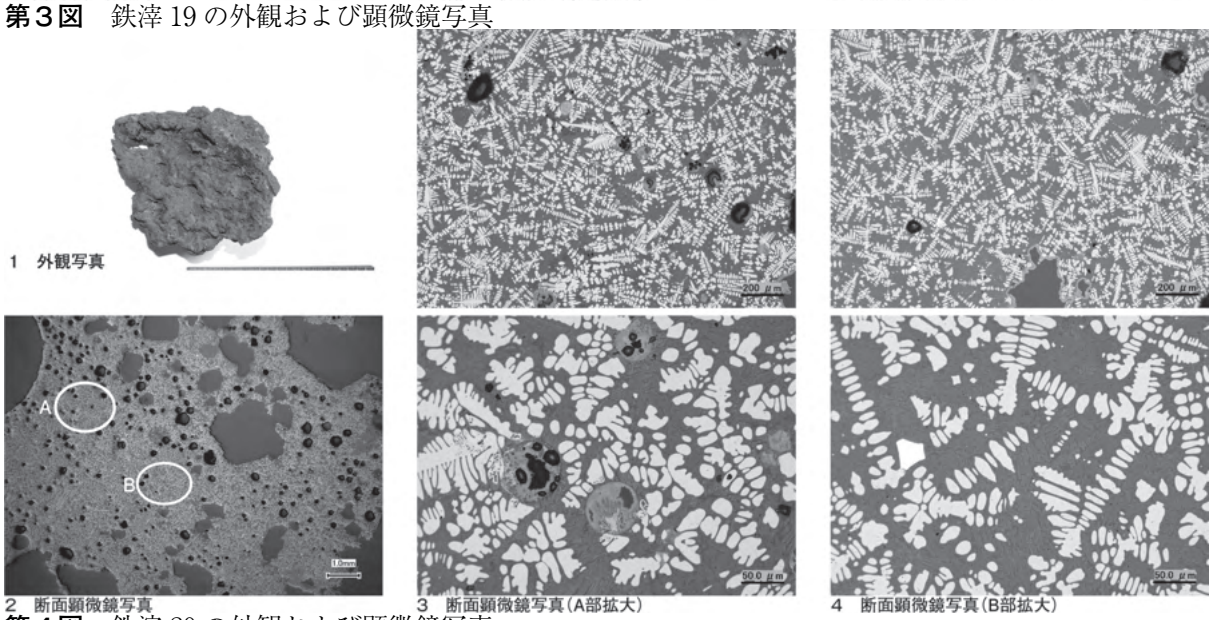
第１図　鉄滓 17 の外観および顕微鏡写真



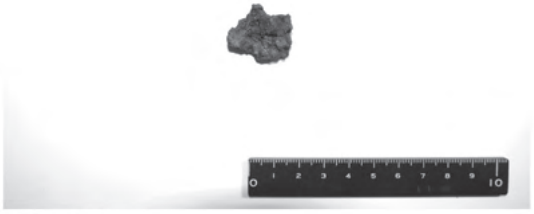
第２図　鉄滓 18 の外観および顕微鏡写真



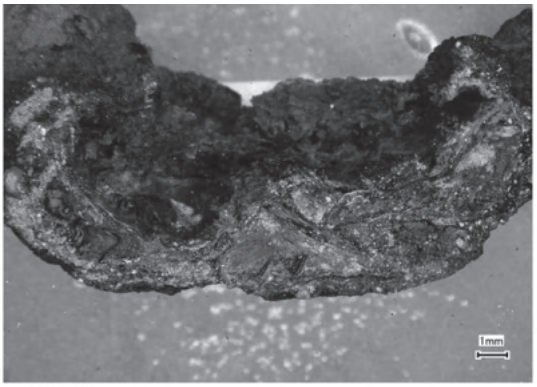
第３図　鉄滓 19 の外観および顕微鏡写真



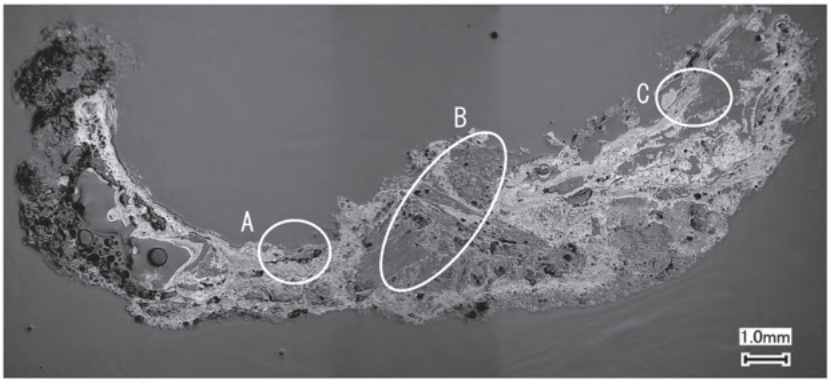
第４図　鉄滓 20 の外観および顕微鏡写真



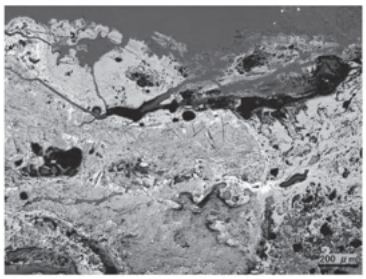
1　外観写真



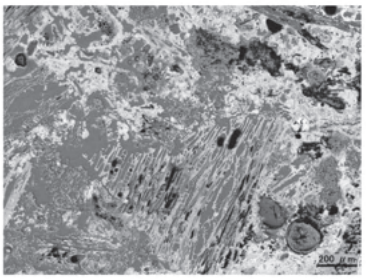
2　断面接写



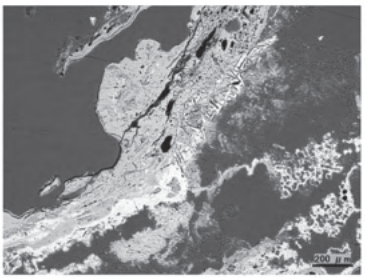
3　断面顕微鏡写真



4　断面顕微鏡写真
（A部拡大）

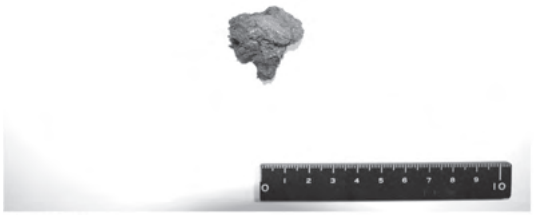


5　断面顕微鏡写真
（B部拡大）

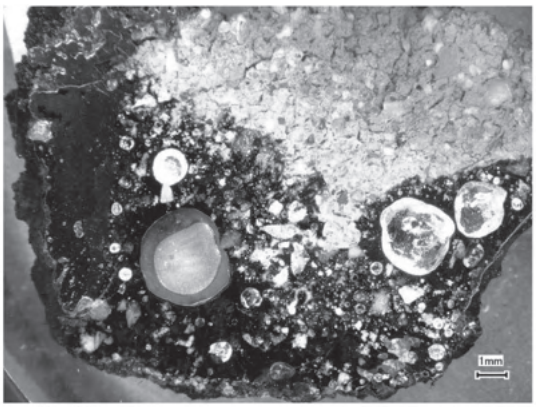


6　断面顕微鏡写真
（C部拡大）

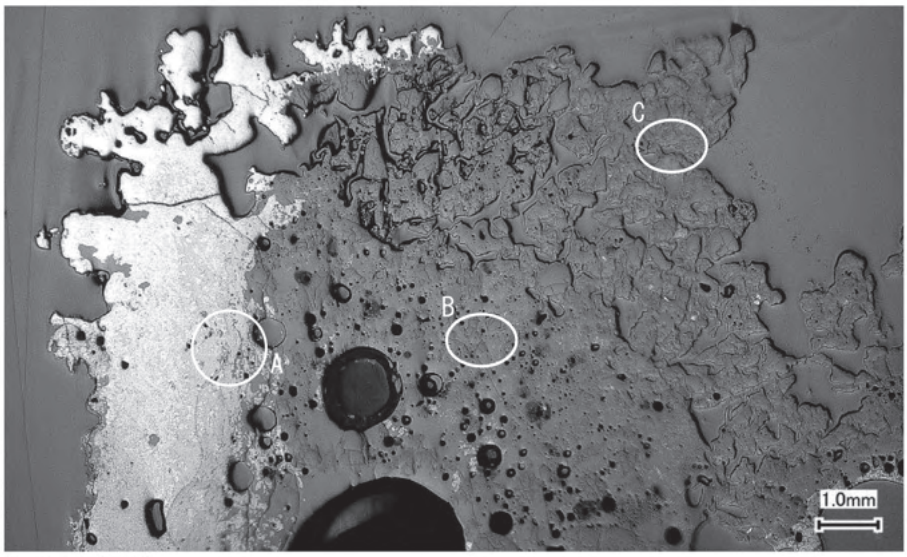
第５図　鉄滓 21 の外観および顕微鏡写真



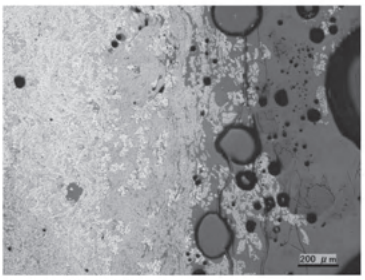
1　外観写真



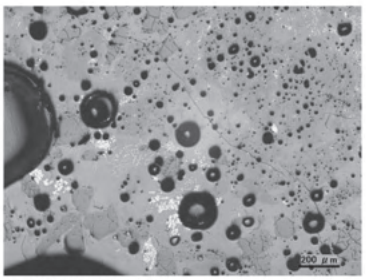
2　断面接写



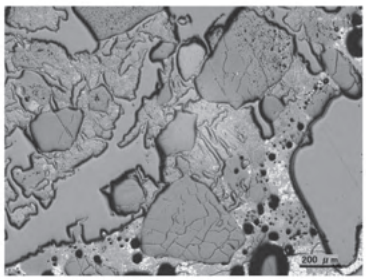
3　断面顕微鏡写真



4　断面顕微鏡写真
（A部拡大）



5　断面顕微鏡写真
（B部拡大）



6　断面顕微鏡写真
（C部拡大）

第６図　鉄滓 22 の外観および顕微鏡写真

イ　第２・４～６号鍛冶工房跡出土鉄滓の化学分析

はじめに

鉄器生産の実態を検討するため，出土鉄滓を調査した。

１　供試材

表１に示す。出土鉄滓８点を調査した。

表１　試料の履歴と調査項目

符号	遺構名	出土位置	遺物 No.	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器反応	調査項目	
						大きさ（mm）	重量（g）		顕微鏡組織	化学分析
SIH-1	SX 2	土坑４ P１　第２層	25	椀形鍛冶滓	古代	71.4 × 60.6 × 29.4	122.2	なし	○	○
SIH-2		炉２　第１層	26	椀形鍛冶滓	古代	121.6 × 63.1 × 36.0	128.9	なし	○	○
SIH-3	SX 5	土坑１　第４層	14	椀形鍛冶滓	古代	70.0 × 53.7 × 43.8	139.2	なし	○	○
SIH-4		炉　x	15	椀形鍛冶滓	古代	59.4 × 51.3 × 55.8	147.2	なし	○	○
SIH-5	SX 6	土坑１　第４層	28	椀形鍛冶滓	古代	63.9 × 54.9 × 54.9	183.7	なし	○	○
SIH-6		炉　２x	29	椀形鍛冶滓	古代	84.2 × 44.6 × 34.6	105.9	なし	○	○
SIH-7	SX 8	炉　第１層	14	椀形鍛冶滓	古代	114.2 × 103.6 × 34.9	470.9	なし	○	○
SIH-8		P４　第２層	16	炉壁（鍛冶滓付着）	古代	60.0 × 55.8 × 21.6	54.5	なし	○	○

２　調査項目

(1)　外観観察　鉄滓の外観的な特徴，着磁性や金属探知器反応の有無を記載した。

(2)　顕微鏡組織　光学顕微鏡（オリンパス光学工業㈱製 BX61）を用いて，鉄滓断面の鉱物組成（結晶）を調査した。供試材を切り出した後，断面をエメリー研磨紙の #150，#240，#320，#600，#1000，及びダイヤモンド粒子の３μｍと１μｍで順を追って研磨した。また滓中の微細な金属鉄の腐食(Etching)には，３％ナイタル（硝酸アルコール液）を用いた。

(3)　化学組成分析　供試材の分析は次の方法で実施した。全鉄分（Total Fe），金属鉄（Metallic Fe），酸化第一鉄（FeO）:容量法。酸化第二鉄（Fe_2O_3）:計算値。二酸化硅素（SiO_2），酸化アルミニウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），二酸化チタン（TiO_2），五酸化二バナジウム（V_2O_5）:ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

表２　供試材の化学組成

符号	遺構名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分	金属鉄	酸化第１鉄	酸化第２鉄	二酸化珪素	酸化アルミニウム	酸化カルシウム	酸化マグネシウム	二酸化チタン	五酸化二バナジウム	造滓成分
					(Total Fe)	(Metallic Fe)	(FeO)	(Fe_2O_3)	(SiO_2)	(Al_2O_3)	(CaO)	(MgO)	(TiO_2)	(V_2O_5)	
SIH- 1	SX 2	土坑4P1第2層	椀形鍛冶滓	古代	65.98	0.05	67.30	19.46	5.95	1.50	1.72	0.92	0.87	0.09	10.09
SIH- 2		炉2第1層	椀形鍛冶滓		36.44	0.10	36.14	11.79	29.79	9.84	0.80	1.25	3.68	0.27	41.68
SIH- 3	SX 5	土坑1第4層	椀形鍛冶滓		48.90	0.63	38.39	26.33	9.23	5.04	0.93	2.30	8.91	0.68	17.50
SIH- 4		炉x	椀形鍛冶滓		57.04	0.08	47.65	28.47	8.84	4.04	0.62	0.98	3.71	0.29	14.48
SIH- 5	SX 6	土坑1	椀形鍛冶滓		52.66	0.10	31.27	40.38	12.45	3.96	1.21	0.99	2.36	0.21	18.61
SIH- 6		炉2x	椀形鍛冶滓		35.23	0.10	35.09	11.22	32.59	9.86	1.39	0.96	2.21	0.09	44.80
SIH- 7	SX 8	炉第1層	椀形鍛冶滓		52.03	0.13	55.03	13.03	19.04	5.35	1.30	0.59	0.28	<0.02	26.28
SIH- 8		P4第2層	炉壁（鍛冶滓付着）		14.91	0.21	13.20	6.35	53.18	14.29	2.45	1.26	0.67	0.02	71.18

3　調査結果

⑴　SIH － 1：椀形鍛冶滓

外観観察：やや歪な椀形鍛冶滓の破片（122.2g）と推定される。滓の地の色調は暗灰色で弱い着磁性がある。上面側は弱い流動状で，微細な気孔が少量点在する。下面側は木炭痕による細かい凹凸が著しく，広い範囲で黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆が付着する。また側面は本来の端部と破面 4 面からなる。破面にも微細な気孔が点在するが，緻密で重量感のある滓である。

顕微鏡組織：第 1 図①～③に示す。①の表面の不定形青灰～明灰色部は錆化鉄（水酸化鉄）である。②は錆化鉄部の拡大で，上側の微細明白色粒は金属鉄である。3％ナイタルで腐食したところ，フェライト（Ferrite：α鉄）の結晶粒界が確認された。ほとんど炭素を含まない軟鉄と推定される。また②の左下の微細な薄板状の明灰色部は鍛造剥片[1)]であった。熱間加工時に鉄素材の表面に生じた酸化膜（鉄酸化物）が，鍛打で飛散したものである。一方，③は鍛冶滓部分の拡大である。滓中には白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO），淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の鉄チタン酸化物の結晶はなく，鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

化学組成分析：表 2 に示す。全鉄分（Total Fe）は 65.98% と高い割合であった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は 0.05% とごく低値で，酸化第 1 鉄（FeO）が 67.30%，酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）は 19.46% であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO）の割合は 10.09% と低めで，塩基性成分（CaO + MgO）も 2.64% と低値であった。また砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.87%，五酸化二バナジウム（V_2O_5）も 0.09% と低値であった。

当鉄滓は鉄酸化物主体で，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）に由来する鉄チタン酸化物の影響がほとんどみられない。以上の特徴から，当鉄滓は主に鉄素材を加熱した時の吹き減り（酸化に伴う損失）で生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。

⑵　SIH － 2：椀形鍛冶滓

外観観察：やや薄手で楕円状の椀形鍛冶滓の破片（128.9g）である。滓の地の色調は暗灰色で，弱い着磁性がある。上面は中央がやや窪む皿状で，小形の木炭痕が散在する。下面には全体に粗い砂質の鍛冶炉床土が付着する。

顕微鏡組織：第 1 図④～⑥に示す。④の上側には，微細な木炭の破片や粒状滓[2)]が付着する。⑤は粒状滓の拡大で，微細な淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$），淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。一方⑥は鍛冶滓部分の拡大である。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。付着した粒状滓と鍛冶滓の双方に製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の鉄チタン酸化物（ウルボスピネル）が確認された。精錬鍛冶滓の晶癖といえる。また④下側の暗灰色部はガラス質滓である。鍛冶炉床粘土の溶融物と推定される。

化学組成分析：表 2 に示す。全鉄分（Total Fe）36.44% に対して，金属鉄（Metallic Fe）は 0.10%，酸化第 1 鉄（FeO）が 36.14%，酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）は 11.79% の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO）の割合は 41.68% と高いが，塩基性成分（CaO + MgO）は 2.05% と低値であった。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 3.68%，五酸化二バナジウム（V_2O_5）が 0.27% であった。

当鉄滓は，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2，V_2O_5）の影響がみられる。この特徴から，鍛冶原料（製煉鉄塊系遺物）に固着した不純物（砂鉄製錬滓）の除去作業で生じた精錬鍛冶滓と推定される。

⑶　SIH － 3：椀形鍛冶滓

外観観察：やや厚手の椀形鍛冶滓の破片（139.2g）である。上下面とも全体が黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆で覆われる。着磁性もやや強いが金属探知器反応はなく，滓中にまとまった鉄部が存在する可能性は低いと考えられる。側面はほぼ全面が破面で，下面は細かい木炭痕による凹凸が顕著である。また下面表層には１箇所鍛造剥片が付着する。

顕微鏡組織：第２図①～③に示す。滓中には発達した淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，微細な白色樹枝状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。椀形鍛冶滓（SIH － 2）と同様，精錬鍛冶滓の晶癖といえる。また③右下の微細な明白色粒は金属鉄である。3% ナイタルで腐食したところ，フェライト（Ferrite：α 鉄）の結晶粒界が確認された。ほとんど炭素を含まない軟鉄と推定される。

化学組成分析：Table2 に示す。全鉄分（Total Fe）48.90% に対して，金属鉄（Metallic Fe）は 0.63%，酸化第１鉄（FeO）が 38.39%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）26.33% の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO）は 17.50% とやや低めで，塩基性成分（CaO + MgO）も 3.23% と低値であった。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 8.91%，五酸化バナジウム（V_2O_5）0.68% と高値傾向が顕著であった。

当鉄滓は，鍛冶原料（製煉鉄塊系遺物）に固着した不純物（砂鉄製錬滓）の除去作業で生じた精錬鍛冶滓と推定される。また今回調査を実施した鉄滓８点のなかで，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2，V_2O_5）割合が最も高い。製錬滓と金属鉄の分離が不十分な鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）の不純物除去に伴う滓と推定される。

⑷　SIH － 4：椀形鍛冶滓

外観観察：厚手の椀形鍛冶滓の端部破片（147.2g）である。上下面，破面とも全体に薄く茶褐色の鉄錆が付着する。着磁性も強いが，金属探知器反応はなく，まとまった鉄部はみられない。また上面は比較的平坦で，下面は木炭痕による凹凸が目立つ。側面２面は破面で，細かい気孔が多数点在する。また側面には１箇所鍛造剥片が付着する。

顕微鏡組織：第２図④～⑥に示す。④表層側の微細な不定形青灰色部は錆化鉄である。また⑤⑥は滓部の拡大で，淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖である。

化学組成分析：表２に示す。全鉄分（Total Fe）57.04% に対して，金属鉄（Metallic Fe）は 0.08%，酸化第１鉄（FeO）が 47.65%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）28.47% の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO）は 14.48% と低めで，塩基性成分（CaO + MgO）も 1.60% と低値であった。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 3.71%，五酸化バナジウム（V_2O_5）は 0.29% であった。

当鉄滓も椀形鍛冶滓（SIH －２・３）と同様に，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2，V_2O_5）の影響が残る。この特徴から，精錬鍛冶滓と推定される。

⑸　SIH － 5：椀形鍛冶滓

外観観察：厚手の椀形鍛冶滓の側面破片（183.7g）である。上下面，破面とも全体に黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆が付着する。着磁性も強いが，金属探知器反応はなく，まとまった鉄部はみられない。また土砂中には多数の木炭破片が混在している。側面２面は破面で，微細な気孔が点在するが緻密である。

顕微鏡組織：第３図①～③に示す。滓中には，淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖である。

化学組成分析：表２に示す。全鉄分（Total Fe）52.66% に対して，金属鉄（Metallic Fe）は 0.10%，酸化第１鉄（FeO）が 31.27%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）40.38% の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO）は 18.61% で，このうち塩基性成分（CaO + MgO）の割合は 2.20% と低い。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 2.36%，五酸化バナジウム（V_2O_5）0.21% であった。

当鉄滓も椀形鍛冶滓（SIH －２～４）と同様，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2，V_2O_5）の影響が残る。この特徴から，精錬鍛冶滓と推定される。

⑹ SIH －６：椀形鍛冶滓

外観観察：椀形鍛冶滓の側面破片（105.9g）である。滓の地の色調は暗灰色で，着磁性がある。全体にやや軽い質感の滓である。上面は比較的平坦で，下面には砂質の鍛冶炉床土が付着する。側面１面は直線状の破面で，中小の気孔が点在する。

顕微鏡組織：第３図④～⑥に示す。④の左上の明灰色部は鍛冶滓で，⑤の左上および⑥はその拡大である。滓中には，淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖である。これに対して，④右下の暗灰色部はガラス質滓で，鍛冶炉床粘土の溶融物と推定される。

⑤右下はその拡大で，内部には石英・長石類などの砂粒が混在する。これらは耐火性を高めるために鍛冶炉床粘土に混和されたものと考えられる。

化学組成分析：表２に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は 35. 23% と低めであった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は 0.10%，酸化第１鉄（FeO）が 35.09%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）11.22% であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO）の割合は 44.80% と高いが，塩基性成分（CaO + MgO）は 2.35% と低値であった。鍛冶炉床粘土部分を反映した値と推測される。また砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 2.21%，五酸化バナジウム（V_2O_5）0.09% であった。

当鉄滓は鍛冶炉床土部分の影響の大きい滓であった。その一方で，鍛冶滓部分は椀形鍛冶滓（SIH －２～５）と同様，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2，V_2O_5）の影響があり，精錬鍛冶滓と推定される。

⑺ SIH －７：椀形鍛冶滓

外観観察：平面不整円形の椀形鍛冶滓（470.9g）である。側面端部の約 1/3 は破面であるが，完形に近い形状である。滓の色調は暗灰色で着磁性がある。上面は細かい木炭痕が浅く点在するが，比較的平坦である。下面は細かい木炭痕による凹凸がみられる箇所と，破面がみられる。破面は鍛冶炉から滓をはぎ取った時に表面が浅く剥離したものと考えられる。また破面の気孔は少なく，緻密で重量感のある滓である。

顕微鏡組織：第４図①～③に示す。①の表面には，微細な金属鉄粒と粒状滓が付着する。②上側の明白色粒は金属鉄である。３% ナイタルで腐食したところ，フェライトの結晶粒界が確認された。ほとんど炭素を含まない軟鉄と推定される。また②の下側は粒状滓で，滓中には微細な白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。鉄素材の表面が溶融・酸化して生じた，微細な鍛冶関連遺物と推定される。また滓中には白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の鉄チタン酸化物の結晶はなく，鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

化学組成分析：表２に示す。全鉄分（Total Fe）52.03% に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.13%，酸化第１鉄（FeO）55.03%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）13.03% の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO）26.28% で，このうち塩基性成分（CaO + MgO）の割合は 1.89% と低値であった。また砂鉄（含

チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）0.28%，五酸化二バナジウム（V_2O_5）も＜0.02% と低値であった。

当鉄滓は，椀形鍛冶滓（SIH －1）と同じく，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）に由来する鉄チタン酸化物の影響が無く，鍛錬鍛冶滓と推定される。

⑻ SIH －8：炉壁（滓付着）

外観観察：片側端部に不定形の鍛冶滓が付着した，やや薄手の炉壁破片（54.5g）と推定される。鍛冶滓の色調は黒灰色で，弱い着磁性がある。滓の表面は弱い流動状で，細かい凹凸がある。気孔はほとんどなく緻密である。炉壁部分は熱影響が強く，黒色ガラス質化しているが，裏面片側に若干砂質土が残存する。

顕微鏡組織：第４図④～⑥に示す。④右上の明灰色部は付着滓部分で，⑤⑥はその拡大である。滓中には白色粒状結晶ウスタイト，淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の鉄チタン酸化物の結晶はなく，鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。また滓中の青白色粒は錆化鉄である。断面には，針状セメンタイト（Cementite：Fe_3C）が残存しており，高炭素（過共析）鋼であったと推測される。一方，④左下の暗灰色部はガラス質滓で，内部には石英・長石類などの砂粒が多数混在する。鍛冶炉床粘土の溶融物と推定される。

化学組成分析：表２に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は 14.91% と低値であった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は 0.21%，酸化第１鉄（FeO）が 13.20%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）6.35% であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO）の割合は 71.18% と高いが，塩基性成分（CaO + MgO）は 3.71% と低値であった。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.67%，五酸化二バナジウム（V_2O_5）も 0.02% と低値であった。

当遺物は熱影響を受けてガラス質滓化した，鍛冶炉の内面表層部破片と推定される。また端部に鍛冶滓が付着している。この滓中には鉄酸化物は確認されず，椀形鍛冶滓（SIH －１・７）と同様，鍛錬鍛冶滓と判断される。

４　まとめ

島名本田遺跡から出土した鉄滓を調査した結果，砂鉄を製錬してつくられた鉄塊（製錬鉄塊系遺物）が鍛冶原料として搬入されており，遺跡内で精錬鍛冶から鍛錬鍛冶作業が行われたことが明らかとなった。詳細は以下の通りである。

今回調査を実施した鉄滓のうち，５点（SIH －２～６）は，精錬鍛冶滓と推定される。これらの滓中には，製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）に由来する，チタニア（TiO_2）の影響が確認された（2.21 ～ 8.91%）。

茨城県の製鉄遺跡から出土した砂鉄および製錬滓の分析調査事例（TiO_2 含有率）をみると，後谷津遺跡では砂鉄が 12.4%，製錬滓は 17.5%，19.5%[3)]，かじや久保遺跡の砂鉄焼結塊が 18.5%，製錬滓が 18.0%，20.1%[4)] と報告されている。地域周辺ではチタニアの割合が高い砂鉄を製鉄原料としている。このため，生産された鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）も製錬滓との分離が不十分な状態であれば，それを分離する工程（精錬鍛冶）で，チタニアの割合の高い鍛冶滓が生じる。精錬鍛冶滓は鍛冶原料として未加工の鉄塊（製錬鉄塊系遺物）が，相当量流通していたことを示す遺物といえる。

なお北関東（群馬・栃木・茨城県）の 27 遺跡の出土鍛冶滓のうち，チタニアの割合が１% 以上の鍛冶滓は 187 点中 129 点と高い割合（約 69%）を占めている[5)]。島名本田遺跡でも同様の特徴が確認されたことから，ここでも主な鍛冶原料は未加工の鉄塊（製錬鉄塊系遺物）であったと判断される。

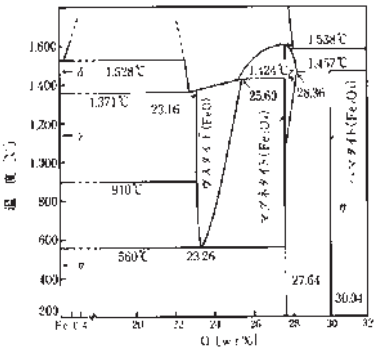
また鉄滓２点（SIH －１・７）と炉壁（SIH －８）に付着した鍛冶滓は，鍛錬鍛冶滓と推定される。滓中

にはチタニア（TiO_2）の影響がほとんどなく，これは鉄素材を熱間加工した時の反応副生物の特徴といえる。さらに鉄滓表面の付着物中には，粒状滓（SIH －２・７）や鍛造剥片（SIH －１）といった，熱間での鍛打加工に伴う微細遺物が確認された。これらの遺物から，鍛造鉄器の製作まで行われた可能性が考えられる。

（調査担当：日鉄住金テクノロジー（株）八幡事業所 TAC センター　鈴木瑞穂）

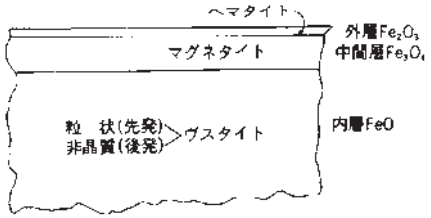
註

1）鍛造剥片は，加熱された鉄素材の表面に生じた鉄酸化膜が，鍛打によって剥離･飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛造剥片の酸化膜相は，外層は微厚のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3），中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4），大部分は内層ウスタト（Wustite：FeO）の３層から構成される。このうちのヘマタイト相は 1,450℃を越えると存在しなく，ウスタイト相は 570℃以上で生成されるのは Fe － O 系平衡状態図から説明される。



Fe-O系平衡状態図

鍛造剥片３層分離型模式図



2）粒状滓は鍛錬鍛冶作業の際，鍛冶原料（鉄塊）表面に鉄酸化物や，さらに吹き減り（鍛冶原料鉄の酸化に伴う損失）を防ぐため塗布された粘土汁と鉄酸化物が反応して生じた滓が，表面張力の関係から球状化した遺物である。

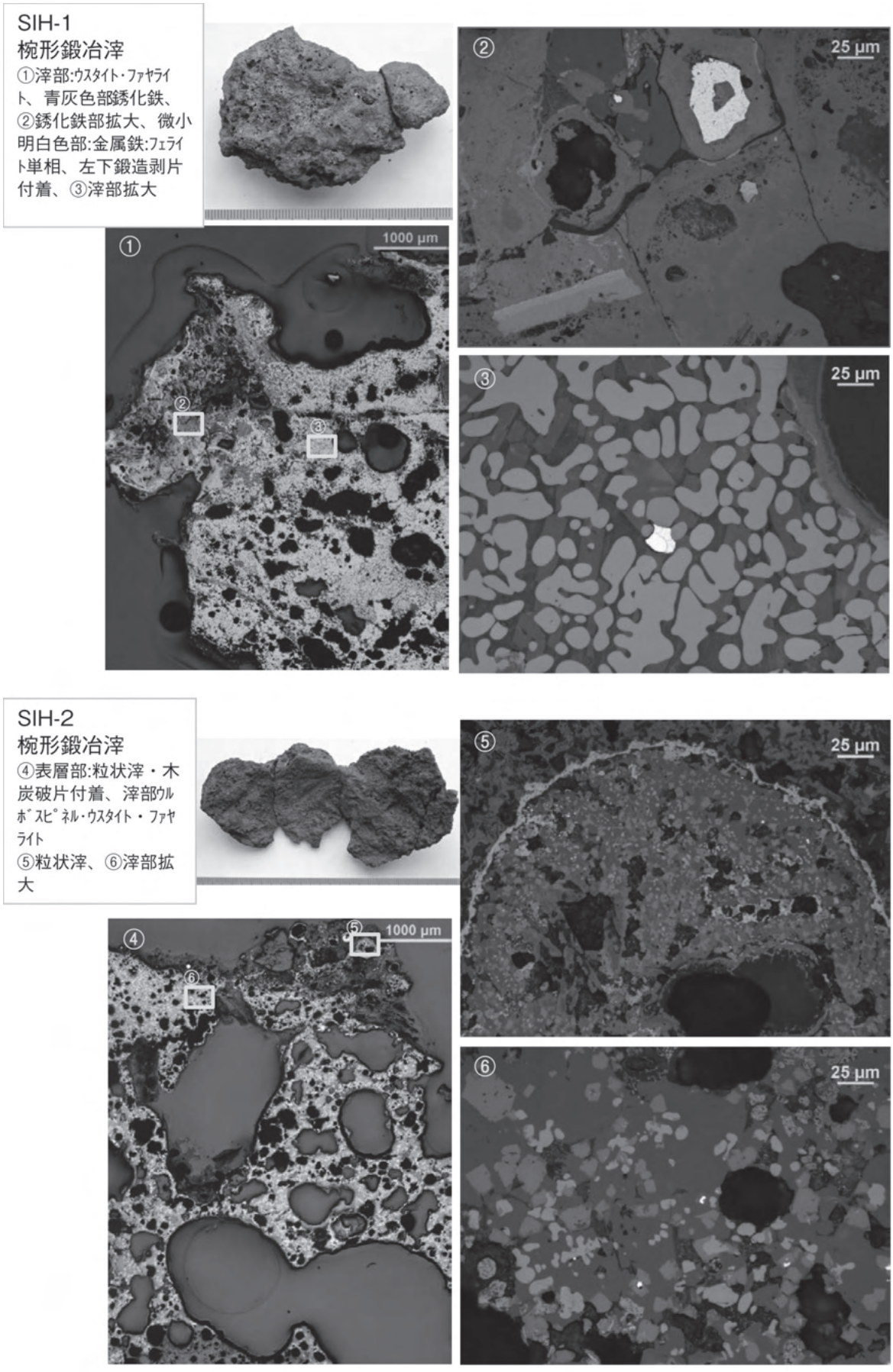
3）ひたちなか市教育委員会 編 1996『後谷津製鉄遺跡　第二次調査報告書』ひたちなか市教育委員会

4）井上琢哉『かじや久保遺跡　一般県道百里飛行場線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告』茨城県教育財団文化財調査報告第 259 集　2006 年３月

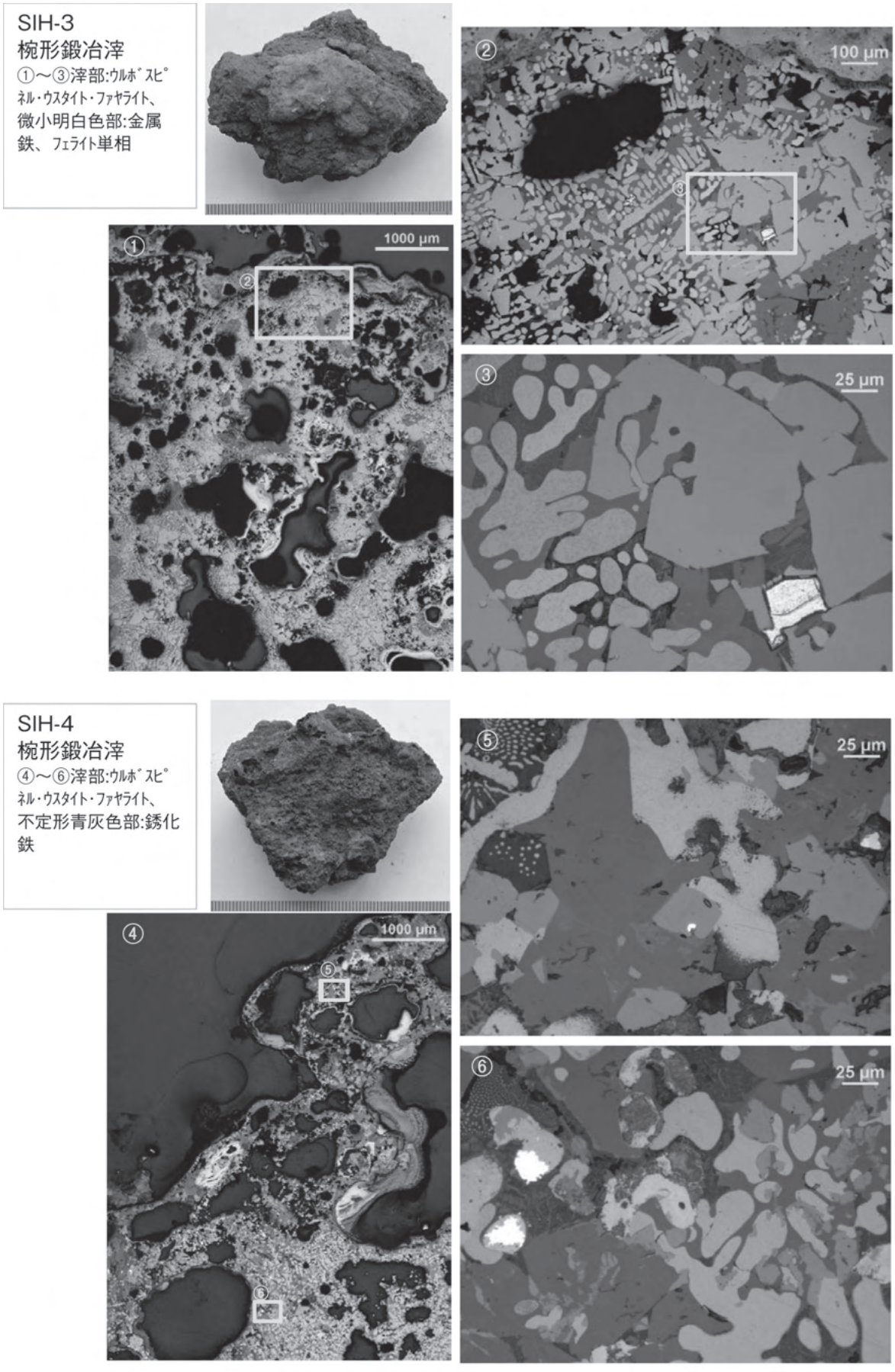
5）鈴木瑞穂「鍛冶関連遺物の理化学的な調査結果からみた古代の鉄素材と鍛冶技術」『たたら研究』53 号　たたら研究会　2014 年８月

表３　出土遺物の調査結果のまとめ

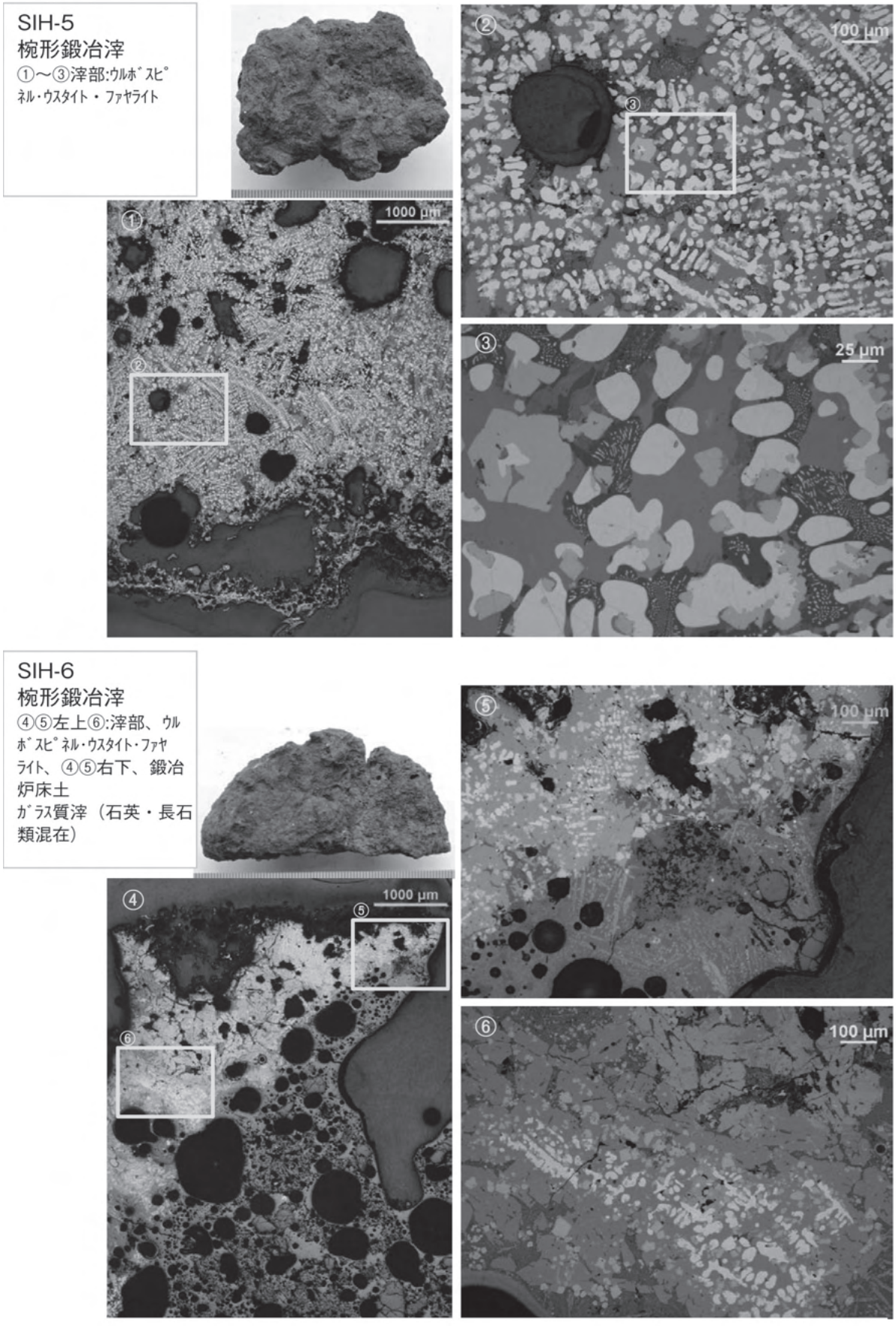
符号	遺構名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）						所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V_2O_5	造滓成分	
SIH- 1	SX 2	土坑４　P１第２層	椀形鍛冶滓	古代	滓部：W+F，微小金属鉄粒：ﾌｪﾗｲﾄ単相，鍛造剥片付着	65.98	19.46	2.64	0.87	0.09	10.09	鍛錬鍛冶滓
SIH- 2		炉２　第１層	椀形鍛冶滓		木炭破片･粒状滓（U+F）付着，滓部：U+W+F，下面側：ｶﾞﾗｽ質滓（鍛冶炉床粘土の溶融物）	36.44	11.79	2.05	3.68	0.27	41.68	精錬鍛冶滓（始発原料：砂鉄）
SIH- 3	SX 5	土坑１第４層	椀形鍛冶滓		滓部：U+W+F	48.90	26.33	3.23	8.91	0.68	17.50	精錬鍛冶滓（始発原料：砂鉄）
SIH- 4		炉ｘ	椀形鍛冶滓		滓部：U+W+F	57.04	28.47	1.60	3.71	0.29	14.48	精錬鍛冶滓（始発原料：砂鉄）
SIH- 5	SX 6	土坑１第４層	椀形鍛冶滓		滓部：U+W+F	52.66	40.38	2.20	2.36	0.21	18.61	精錬鍛冶滓（始発原料：砂鉄）
SIH- 6		炉２ｘ	椀形鍛冶滓		滓部：U+W+F，下面側：ｶﾞﾗｽ質滓（鍛冶炉床粘土の溶融物）	35.23	11.22	2.35	2.21	0.09	44.80	精錬鍛冶滓（始発原料：砂鉄）
SIH- 7	SX 8	炉　第１層	椀形鍛冶滓		滓部：W+F，微小金属鉄粒：ﾌｪﾗｲﾄ単相，粒状滓：W	52.03	13.03	1.89	0.28	<0.02	26.28	鍛錬鍛冶滓
SIH- 8		P４　第２層	炉壁（鍛冶滓付着）		滓部：W+F，下面側：ｶﾞﾗｽ質滓（鍛冶炉床粘土の溶融物）	14.91	6.35	3.71	0.67	0.02	71.18	鍛冶炉表面の剥離片（ｶﾞﾗｽ質滓）付着滓：鍛錬鍛冶滓



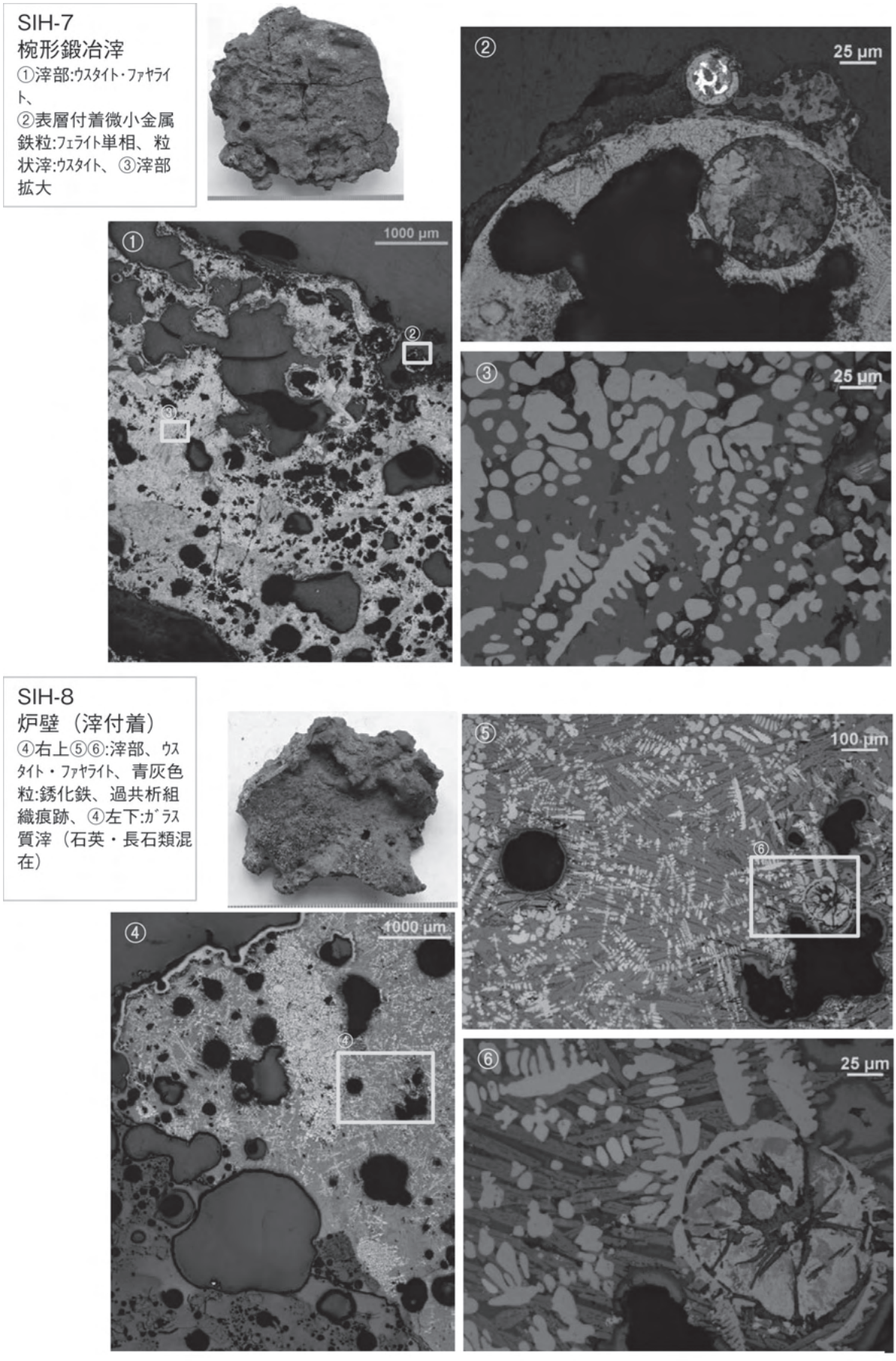
第１図　椀型鍛冶滓の顕微鏡組織写真（SIH －１・２）



第２図　椀型鍛冶滓の顕微鏡組織写真（SIH －３・４）



第３図　椀型鍛冶滓の顕微鏡組織写真（SIH－５・６）



第４図　椀型鍛冶滓の顕微鏡組織写真（SIH －７・８）

ウ　島名本田遺跡鉄関連微細遺物の分類・集計

はじめに

発掘・整理調査では鍛冶工房跡覆土について，洗浄・篩分が実施され，微細な粒状滓，鍛造剥片が多数確認されている。本分析調査では，確認された微細物について分類を実施し，各遺構の平面的な微細物の分布を示す。

1　試料

試料は，第１・３～５号鍛冶工房跡から採取されている。各試料の篩分は５㎜，３㎜，１㎜で実施されており，それぞれについて分類・計量を実施した。試料の詳細は分類結果を示した表１に併記する。また，第１・３～５号鍛冶工房跡については小グリッドを設定して覆土が採取されている。この小グリッドに基づいた平面的な微細物分布を図１～６に示す。

2　分析方法

各試料からは粒状滓，鍛造剥片，残滓などの他に，礫，土塊，炭化材等が混在する。これらについてはその他とし，計量を行った。磁石で分離された試料について肉眼および顕微鏡による観察を行い，粒状滓，鍛造剥片，鉄滓に分類し，各重量を計測した。なお，５㎜，３㎜の試料から得られた粒状滓，鍛造剥片については計数を実施した。

各試料の計量・計数結果は結果表（表１）に記載した。また，表２には遺構別の重量を，表３には各遺構の試料のうち，小グリッドで採取されたものを抜粋し，粒状滓，鍛造剥片の重量を示す。これに基づき，公益財団法人茨城県教育財団より提供された第１号鍛冶工房跡，第３号鍛冶工房跡，第５号鍛冶工房跡の平面図に，粒状滓，鍛造剥片の計量結果を小グリッドごとにトーンで表現した（図１～６）

3　結果と考察

分類結果をもとに，遺構別の微細物重量を（表１）に示す。また，グリッドで取り上げられた試料の一覧を表２に示し，第１・３・５号鍛冶工房跡の平面図に粒状滓，鍛造剥片それぞれの重量をトーンで示したものを図１～６に示す。

本分析調査で対象とした全資料の結果は，粒状滓が 458.42g，鍛造剥片が 3432.94g，鉄滓が 145060.09g，その他が 13638.51g であった。遺構別では，第１号鍛冶工房跡は粒状滓が 136.48g，鍛造剥片が 1963.48g，鉄滓が 66304.34g，その他が 5741.66g，第３号鍛冶工房跡は粒状滓が 9.41g，鍛造剥片が 196.60g，鉄滓が 5730.51g，その他が 956.74g，第４号鍛冶工房跡は粒状滓が 30.49g，鍛造剥片が 699.81g，鉄滓が 27583.89g，その他が 1661.37g，第５号鍛冶工房跡は粒状滓が 282.04g，鍛造剥片が 573.05g，鉄滓が 45441.35 g，その他が 5278.74g であった。

これらの結果を元に以下に遺構別出土状況について検討する。

第１号鍛冶工房跡（第１・２図）

付属施設の内，土坑１・３・６で粒状滓および鍛造剥片が多い。また，土坑５を除く土坑からは鉄滓が多量に出土している。炉跡では番号が判明している炉１・２については，土坑と比較すると非常に少ない。土坑内に多く鍛冶関連微細物が含まれていることから，廃棄された可能性も考える必要がある。

グリッド別の分布を見ると，粒状滓，鍛造剥片ともに北側で薄く，南側で濃く検出されている。炉跡周辺で

は特に目立った検出状況は確認されない。

第３号鍛冶工房跡（第３・４図）

付属施設の内，土坑１で粒状滓，鍛造剥片，鉄滓ともに多い。土坑２，炉跡は少なく，特に炉跡は1g以下であった。第１号鍛冶工房跡の土坑と同様，土坑１内に廃棄された可能性も考える必要がある。

グリッド別の分布を見ると，粒状滓，鍛造剥片ともにほぼ均等に検出されているが，やや北側に濃い箇所が確認される。

第４号鍛冶工房跡

付属施設の内，土坑１で粒状滓，鍛造剥片，鉄滓ともに多く，土坑２でも鉄滓が多く検出されている。これらについても廃棄された可能性が考えられる。本遺構ではグリッド取り上げはされていない。

第５号鍛冶工房跡（第５・６図）

付属施設の内，土坑２で粒状滓，鍛造剥片，鉄滓ともに多く，土坑１では鉄滓が非常に多く検出された。また，鉄滓の量を見ると，土坑３・４も多い。それに比して，土坑５・６では検出量は少ない。炉１・２は粒状滓，鍛造剥片，鉄滓ともにやや多いが，炉３・５は少なく対照的である。土坑１・２は鉄滓が非常に多いことから，廃棄されたものである可能性もある。

グリッド別の分布を見ると，建物中央部に粒状滓，鍛造剥片ともにやや集中する。また，炉２の北側でも同じく集中が見られる。

以上各工房跡の分類結果を概観した。本遺跡において過去に当社で実施した鉄滓の分析調査では，砂鉄を原料とした精錬鍛冶が行われていたことを報告している。本分類結果から，鍛造剥片が多く見つかっていることから，鍛錬鍛冶も合わせて実施されていたことが想定される。

表１　遺構別微細遺物重量（１）

遺構名	内部施設名	粒状滓［g］	鍛造剥片［g］	鉄滓［g］	その他［g］
第１号鍛冶工房跡	土坑	6.09	108.93	4475.23	616.85
	土坑１	12.00	212.18	9205.91	474.27
	土坑２	4.58	5.78	1536.12	105.46
	土坑３	16.05	23.03	4225.02	342.87
	土坑４	3.17	4.92	3390.06	177.12
	土坑５	0.44	0.33	180.31	44.35
	土坑６	4.81	12.00	4401.68	399.40
	炉	14.61	77.78	14588.96	627.53
	炉１	0.25	0.72	52.17	30.73
	炉２	0.21	0.71	109.85	23.85
	グリッド	24.99	1236.18	4155.81	260.17
	その他	49.28	280.92	19983.22	2639.06
第１号鍛冶工房跡　合計		136.48	1963.48	66304.34	5741.66
第３号鍛冶工房跡	土坑１	3.35	113.20	4054.38	540.83
	土坑１・土坑２	0.25	2.43	209.87	33.68
	土坑２	0.26	6.19	147.17	19.72
	グリッド	5.31	71.76	1045.44	314.68
	その他	0.04	2.66	109.97	41.43
	炉	0.20	0.36	163.68	6.40
第３号鍛冶工房跡　合計		9.41	196.60	5730.51	956.74
第４号鍛冶工房跡	土坑１	14.22	352.20	11811.47	227.67
	土坑２	2.22	5.96	4074.55	214.13
	その他	10.30	260.48	8312.65	458.36
	炉	0.84	4.44	430.00	571.44
第４号鍛冶工房跡　合計		30.49	699.81	27583.89	1661.37

表２　遺構別微細遺物重量（２）

遺構名	内部施設名	粒状滓［g］	鍛造剥片［g］	鉄滓［g］	その他［g］
第５号鍛冶工房跡	土坑１	17.34	35.17	10112.46	978.41
	土坑１・２	1.59	31.97	980.17	48.17
	土坑２	41.17	345.07	13310.96	1034.34
	土坑３	9.50	31.59	2658.86	250.10
	土坑４	11.63	38.35	4228.40	545.93
	土坑５	2.74	1.82	586.06	7.07
	土坑６	0.44	2.14	99.11	2.66
	炉１	161.67	3.20	982.50	20.84
	炉２	8.60	6.06	1496.99	672.61
	炉３	0.60	1.90	104.10	47.85
	炉５	0.86	1.45	82.52	6.16
	グリッド	9.90	38.09	3915.64	383.80
	その他	16.00	36.24	6883.58	1280.80
第５号鍛冶工房跡　合計		282.04	573.05	45441.35	5278.74

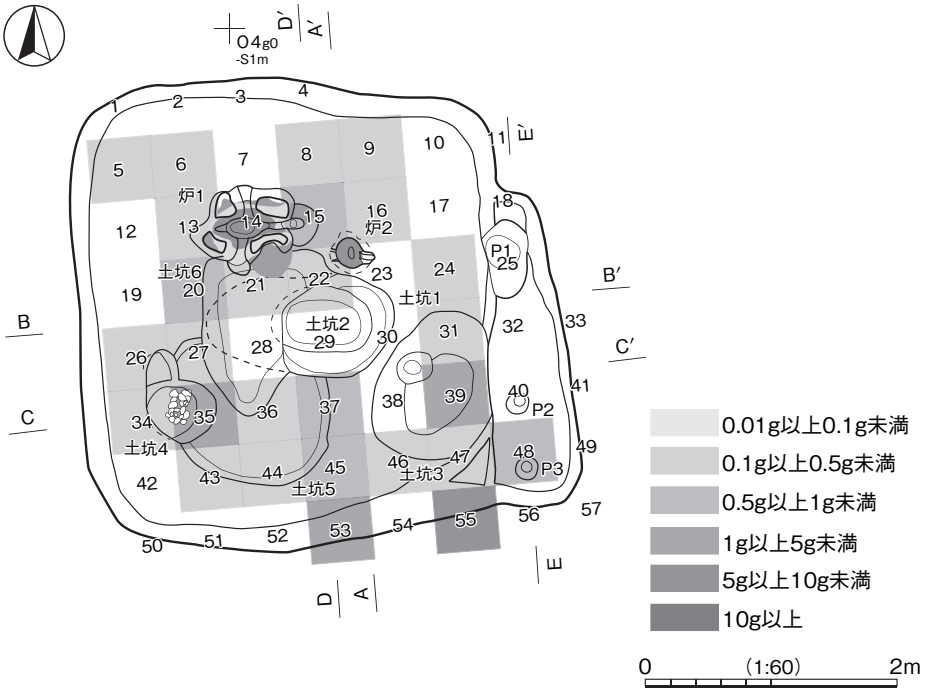
表３　各遺構グリッド別微細遺物集計表（１）

遺構名	グリッドNo.	粒状滓［g］	鍛造剥片［g］	鉄滓［g］	その他［g］
第１号鍛冶工房跡	1	0.00	0.00	0.10	0.00
第１号鍛冶工房跡	2	0.00	0.37	1.15	0.00
第１号鍛冶工房跡	3	0.00	0.00	0.75	0.00
第１号鍛冶工房跡	4	0.00	0.00	0.00	0.00
第１号鍛冶工房跡	5	0.19	4.09	205.24	1.81
第１号鍛冶工房跡	6	0.20	0.43	21.81	1.70
第１号鍛冶工房跡	7	0.00	0.00	21.15	0.00
第１号鍛冶工房跡	8	0.30	0.10	14.79	0.00
第１号鍛冶工房跡	9	0.14	0.11	3.53	1.59
第１号鍛冶工房跡	10	0.00	0.10	4.23	0.00
第１号鍛冶工房跡	11	0.00	0.00	0.20	0.00
第１号鍛冶工房跡	12	0.00	0.00	1.50	0.00
第１号鍛冶工房跡	13	0.10	0.15	25.53	12.20
第１号鍛冶工房跡	14	0.00	0.00	13.40	0.00
第１号鍛冶工房跡	15	0.60	0.16	231.50	4.09
第１号鍛冶工房跡	16	0.29	0.27	48.63	2.60
第１号鍛冶工房跡	17	0.00	0.00	2.15	0.00
第１号鍛冶工房跡	18	0.00	0.15	0.60	0.00
第１号鍛冶工房跡	19	0.00	1.49	38.69	0.91
第１号鍛冶工房跡	20	0.50	0.78	110.14	1.50
第１号鍛冶工房跡	21	0.20	0.51	61.23	6.68
第１号鍛冶工房跡	22	0.12	0.51	78.80	5.93
第１号鍛冶工房跡	23	0.00	0.13	14.21	0.00
第１号鍛冶工房跡	24	0.10	0.67	14.88	6.67
第１号鍛冶工房跡	25	0.00	0.00	3.65	0.00
第１号鍛冶工房跡	26	0.10	0.83	17.23	11.16
第１号鍛冶工房跡	27	0.49	5.36	205.89	1.86
第１号鍛冶工房跡	30	0.00	0.22	37.40	0.00
第１号鍛冶工房跡	31	0.16	7.88	171.27	19.10
第１号鍛冶工房跡	32	0.00	0.00	1.90	0.00
第１号鍛冶工房跡	33	0.00	0.00	2.93	0.00
第１号鍛冶工房跡	34	0.14	2.80	53.57	14.45
第１号鍛冶工房跡	35	2.27	11.78	635.98	14.35
第１号鍛冶工房跡	36	0.30	1.47	129.83	1.58
第１号鍛冶工房跡	37	0.90	3.45	242.54	0.00
第１号鍛冶工房跡	38	0.00	0.00	18.90	0.00
第１号鍛冶工房跡	39	1.30	20.98	646.67	16.56
第１号鍛冶工房跡	40	0.00	0.00	4.15	0.00
第１号鍛冶工房跡	41	0.00	0.00	1.00	0.00
第１号鍛冶工房跡	42	0.00	0.00	4.18	0.00

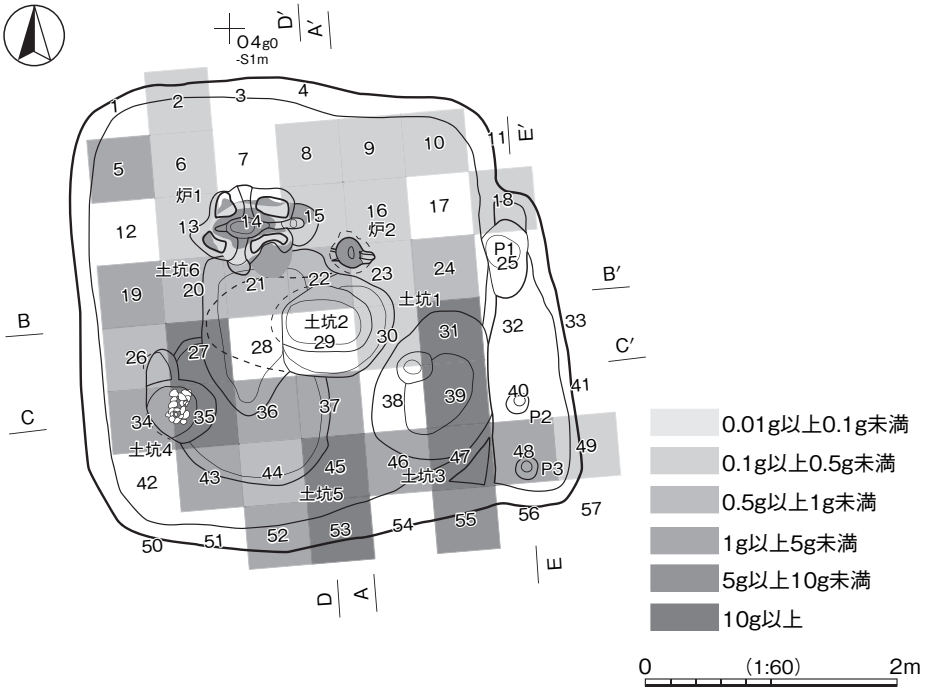
遺構名	グリッドNo.	粒状滓［g］	鍛造剥片［g］	鉄滓［g］	その他［g］
第１号鍛冶工房跡	43	0.40	1.99	210.53	33.23
第１号鍛冶工房跡	44	0.10	0.88	91.35	7.59
第１号鍛冶工房跡	45	0.93	7.29	322.50	11.73
第１号鍛冶工房跡	46	0.12	1.68	55.95	17.06
第１号鍛冶工房跡	47	0.48	7.58	199.64	12.55
第１号鍛冶工房跡	48	0.66	2.27	52.64	14.48
第１号鍛冶工房跡	49	0.00	0.25	0.87	8.19
第１号鍛冶工房跡	50	0.00	0.00	1.50	0.00
第１号鍛冶工房跡	51	0.00	0.00	1.67	1.05
第１号鍛冶工房跡	52	0.00	2.16	19.45	8.70
第１号鍛冶工房跡	53	4.18	11.07	46.81	9.11
第１号鍛冶工房跡	54	0.00	0.00	0.00	0.00
第１号鍛冶工房跡	55	3.04	8.09	27.97	2.09
第１号鍛冶工房跡	56	0.00	0.00	0.00	0.45
第１号鍛冶工房跡	57	0.00	0.00	0.00	0.52
第３号鍛冶工房跡	1-1	0.00	0.88	28.03	0.93
第３号鍛冶工房跡	1-2	0.12	1.74	121.13	6.84
第３号鍛冶工房跡	1-3	0.02	11.15	39.62	45.47
第３号鍛冶工房跡	1-5	1.92	3.12	45.73	4.80
第３号鍛冶工房跡	1-6	0.00	0.48	22.42	16.67
第３号鍛冶工房跡	1-7	0.00	0.00	0.51	0.00
第３号鍛冶工房跡	1-8	0.00	0.00	0.26	0.32
第３号鍛冶工房跡	1-9	0.00	0.30	13.37	14.41
第３号鍛冶工房跡	2-1	0.53	25.90	229.12	43.17
第３号鍛冶工房跡	2-2	0.11	2.79	60.06	4.74
第３号鍛冶工房跡	2-3	0.00	0.74	32.05	4.56
第３号鍛冶工房跡	2-5	0.00	3.14	37.55	11.72
第３号鍛冶工房跡	2-6	0.00	0.00	2.07	0.00
第３号鍛冶工房跡	2-7	0.00	0.00	4.30	2.25
第３号鍛冶工房跡	2-9	0.00	0.00	1.28	6.36
第３号鍛冶工房跡	3-1	0.00	0.67	7.26	4.89
第３号鍛冶工房跡	3-2	0.00	0.47	15.53	9.68
第３号鍛冶工房跡	3-3	0.00	0.44	17.58	0.78
第３号鍛冶工房跡	3-4	0.00	0.21	5.77	13.00
第３号鍛冶工房跡	3-5	0.10	3.58	39.73	21.45
第３号鍛冶工房跡	3-6	0.15	2.65	62.87	9.91
第３号鍛冶工房跡	3-7	0.00	0.00	1.36	0.00
第３号鍛冶工房跡	3-8	0.00	0.32	2.51	8.49
第３号鍛冶工房跡	3-9	0.12	1.57	13.06	7.90
第３号鍛冶工房跡	4-1	0.98	4.18	1.92	3.57

表４　各遺構グリッド別微細遺物集計表（２）

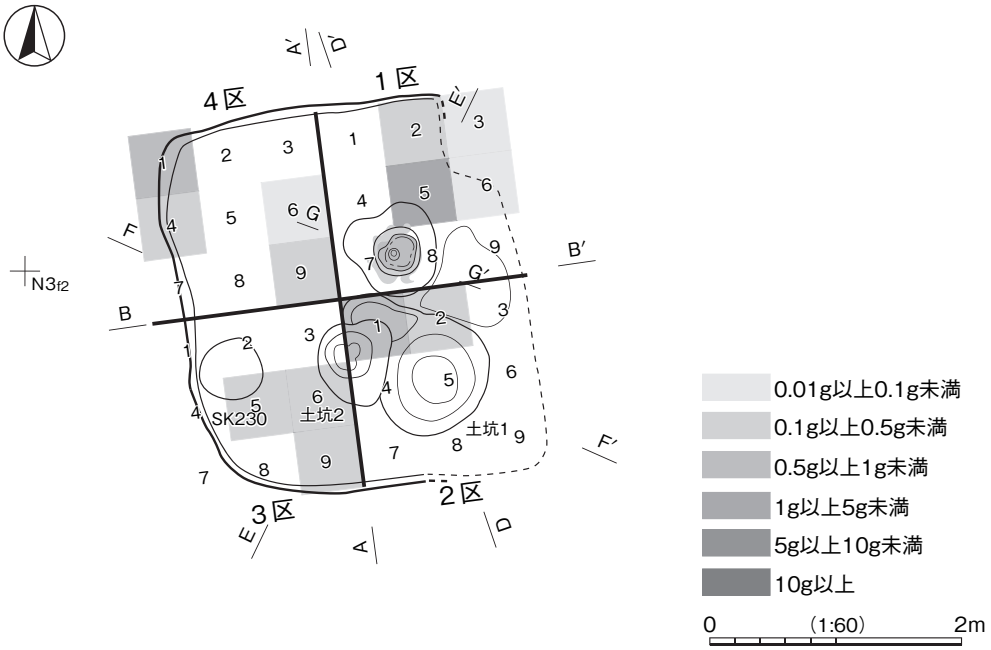
遺構名	グリッドNo.	粒状滓［g］	鍛造剥片［g］	鉄滓［g］	その他［g］
第３号鍛冶工房跡	4-3	0.00	0.00	0.00	0.00
第３号鍛冶工房跡	4-4	0.24	0.28	6.04	3.08
第３号鍛冶工房跡	4-5	0.00	0.00	8.20	1.74
第３号鍛冶工房跡	4-6	0.09	0.13	31.65	12.14
第３号鍛冶工房跡	4-7	0.00	0.15	6.25	0.50
第３号鍛冶工房跡	4-8	0.00	0.29	2.23	0.00
第３号鍛冶工房跡	4-9	0.11	1.50	14.72	8.26
第５号鍛冶工房跡	1	0.00	0.12	0.95	0.00
第５号鍛冶工房跡	2	0.00	0.62	2.80	0.00
第５号鍛冶工房跡	3	0.00	0.09	13.90	0.00
第５号鍛冶工房跡	4	0.00	0.00	7.21	0.00
第５号鍛冶工房跡	5	0.00	0.00	0.99	0.00
第５号鍛冶工房跡	6	0.00	0.00	0.76	0.00
第５号鍛冶工房跡	7	0.00	0.03	6.70	0.00
第５号鍛冶工房跡	8	0.00	0.00	1.92	0.00
第５号鍛冶工房跡	9	0.00	0.13	0.99	0.00
第５号鍛冶工房跡	10	0.00	0.12	3.80	0.00
第５号鍛冶工房跡	11	0.12	0.22	6.50	4.64
第５号鍛冶工房跡	12	0.23	0.75	86.54	0.56
第５号鍛冶工房跡	13	0.51	0.89	73.37	12.09
第５号鍛冶工房跡	18	0.00	0.01	9.51	0.00
第５号鍛冶工房跡	19	0.00	0.02	0.63	0.00
第５号鍛冶工房跡	20	0.00	0.00	1.48	0.00
第５号鍛冶工房跡	21	0.19	0.21	20.78	38.04
第５号鍛冶工房跡	22	0.32	0.88	66.50	13.13
第５号鍛冶工房跡	23	0.38	0.73	90.68	9.88
第５号鍛冶工房跡	24	0.99	0.74	116.89	14.04
第５号鍛冶工房跡	25	0.01	0.01	2.51	0.00
第５号鍛冶工房跡	26	0.04	9.02	11.01	0.00
第５号鍛冶工房跡	29	0.20	0.04	9.08	0.00
第５号鍛冶工房跡	31	0.01	0.13	1.47	0.00
第５号鍛冶工房跡	32	0.10	0.68	51.77	1.73
第５号鍛冶工房跡	33	0.61	0.45	45.57	0.11
第５号鍛冶工房跡	34	0.73	0.51	94.34	16.04
第５号鍛冶工房跡	35	0.26	1.01	115.32	2.74
第５号鍛冶工房跡	36	0.00	0.49	48.87	4.14
第５号鍛冶工房跡	37	0.00	0.04	2.51	0.00
第５号鍛冶工房跡	38	0.08	0.06	9.55	0.00
第５号鍛冶工房跡	39	0.00	0.11	0.89	0.00
第５号鍛冶工房跡	40	0.00	0.04	1.68	0.00
第５号鍛冶工房跡	42	0.00	0.06	0.34	0.00
第５号鍛冶工房跡	43	0.35	0.90	56.77	0.00
第５号鍛冶工房跡	44	0.08	0.14	43.51	1.45
第５号鍛冶工房跡	45	0.34	0.34	72.83	3.93
第５号鍛冶工房跡	46	0.18	0.36	38.85	9.24
第５号鍛冶工房跡	47	0.46	0.99	70.80	6.23
第５号鍛冶工房跡	48	0.13	0.44	27.46	4.62
第５号鍛冶工房跡	49	0.00	0.04	3.61	0.00
第５号鍛冶工房跡	50	0.02	0.11	2.78	0.00
第５号鍛冶工房跡	51	0.00	0.06	4.31	0.00
第５号鍛冶工房跡	52	0.00	0.02	0.57	0.00
第５号鍛冶工房跡	53	0.00	0.09	2.89	0.00
第５号鍛冶工房跡	54	0.22	0.65	66.86	2.92
第５号鍛冶工房跡	55	0.00	0.75	90.34	17.25
第５号鍛冶工房跡	56	0.42	0.43	79.09	0.00
第５号鍛冶工房跡	57	0.11	0.85	52.94	0.35
第５号鍛冶工房跡	58	0.68	1.12	307.66	9.23
第５号鍛冶工房跡	59	0.35	0.77	125.78	66.59
第５号鍛冶工房跡	60	0.00	0.10	4.33	0.13
第５号鍛冶工房跡	61	0.00	0.00	1.91	0.00
第５号鍛冶工房跡	62	0.00	0.00	7.62	0.00
第５号鍛冶工房跡	63	0.00	0.00	5.53	0.00
第５号鍛冶工房跡	64	0.00	0.18	2.62	0.00
第５号鍛冶工房跡	65	0.00	0.00	5.04	0.00
第５号鍛冶工房跡	66	0.13	2.07	74.54	15.05
第５号鍛冶工房跡	67	0.13	0.67	849.55	26.17
第５号鍛冶工房跡	68	0.14	0.56	152.67	0.23
第５号鍛冶工房跡	69	0.49	3.59	326.23	19.65
第５号鍛冶工房跡	70	0.00	0.50	64.90	3.58
第５号鍛冶工房跡	71	0.00	0.15	12.49	0.00
第５号鍛冶工房跡	72	0.00	0.12	1.03	0.00
第５号鍛冶工房跡	73	0.00	0.00	15.26	0.00
第５号鍛冶工房跡	74	0.00	0.00	0.90	0.00
第５号鍛冶工房跡	75	0.00	0.00	0.57	0.00
第５号鍛冶工房跡	76	0.15	0.00	17.16	0.00
第５号鍛冶工房跡	77	0.00	0.11	11.78	0.00
第５号鍛冶工房跡	78	0.25	0.18	35.76	0.00
第５号鍛冶工房跡	79	0.00	0.13	52.81	0.00
第５号鍛冶工房跡	80	0.18	0.45	56.32	0.00
第５号鍛冶工房跡	81	0.00	0.11	11.25	0.00
第５号鍛冶工房跡	82	0.00	0.00	10.20	0.00
第５号鍛冶工房跡	83	0.16	0.17	23.85	24.04
第５号鍛冶工房跡	84	0.00	0.00	6.02	0.00
第５号鍛冶工房跡	85	0.00	0.12	5.98	0.00
第５号鍛冶工房跡	86	0.00	0.11	5.11	0.15
第５号鍛冶工房跡	87	0.00	0.96	4.96	0.00
第５号鍛冶工房跡	88	0.00	0.11	9.79	0.00
第５号鍛冶工房跡	89	0.00	0.35	13.42	2.90
第５号鍛冶工房跡	90	0.00	0.11	19.20	12.45
第５号鍛冶工房跡	91	0.15	0.18	7.85	5.18
第５号鍛冶工房跡	92	0.00	0.10	6.24	0.00
第５号鍛冶工房跡	93	0.00	0.08	0.87	0.00
第５号鍛冶工房跡	94	0.00	0.00	2.44	0.00
第５号鍛冶工房跡	95	0.00	0.12	0.29	0.00
第５号鍛冶工房跡	96	0.00	0.00	1.41	0.00
第５号鍛冶工房跡	97	0.00	0.00	1.03	0.00
第５号鍛冶工房跡	98	0.00	0.15	19.01	0.00
第５号鍛冶工房跡	99	0.00	0.17	12.42	9.08
第５号鍛冶工房跡	100	0.00	0.00	4.01	0.00
第５号鍛冶工房跡	101	0.00	0.03	13.55	3.73
第５号鍛冶工房跡	102	0.00	0.07	27.59	1.85
第５号鍛冶工房跡	103	0.00	0.02	6.70	0.00
第５号鍛冶工房跡	104	0.00	0.00	2.09	0.00
第５号鍛冶工房跡	105	0.00	0.00	1.73	0.00
第５号鍛冶工房跡	106	0.00	0.00	5.21	0.00
第５号鍛冶工房跡	107	0.00	0.00	0.42	0.33
第５号鍛冶工房跡	108	0.00	0.02	2.20	10.91
第５号鍛冶工房跡	109	0.00	0.01	5.54	0.00
第５号鍛冶工房跡	110	0.00	0.00	20.93	9.42
第５号鍛冶工房跡	111	0.00	0.02	4.01	0.00
第５号鍛冶工房跡	112	0.00	0.00	4.37	0.00
第５号鍛冶工房跡	113	0.00	0.00	2.07	0.00



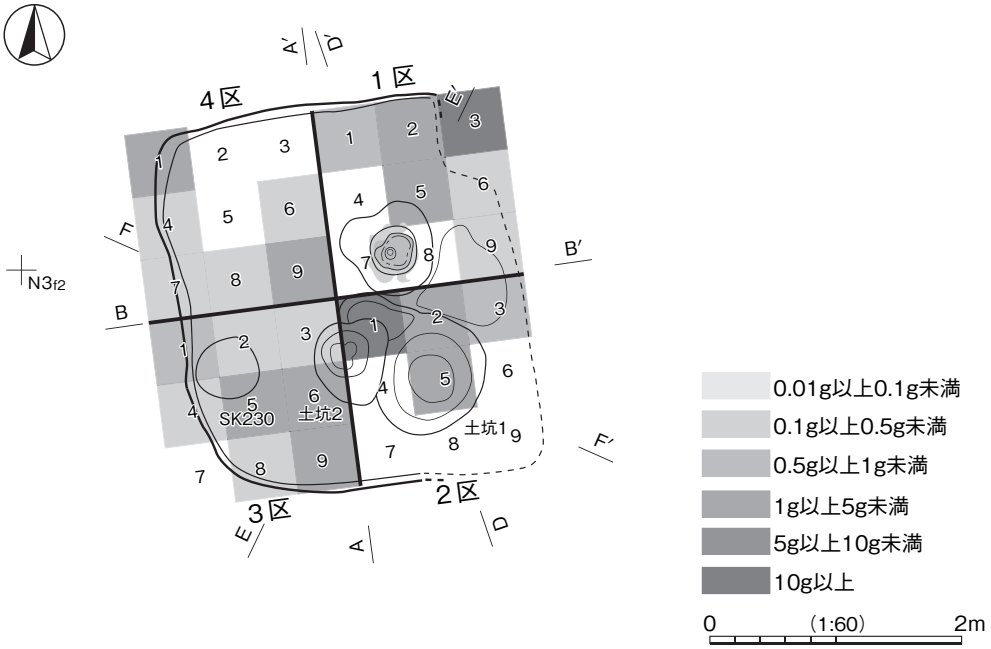
第１図　第１号鍛冶工房跡　粒状滓出土状況



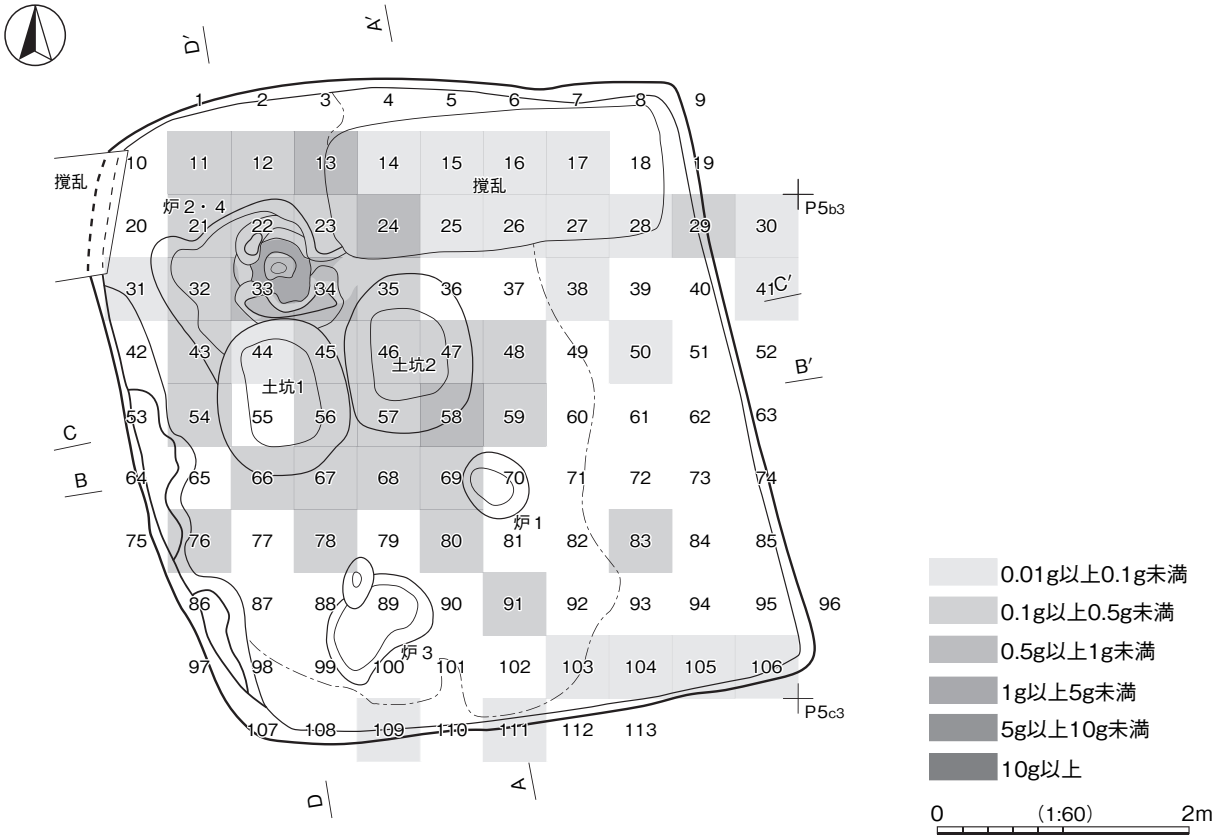
第２図　第１号鍛冶工房跡　鍛造剥片出土状況



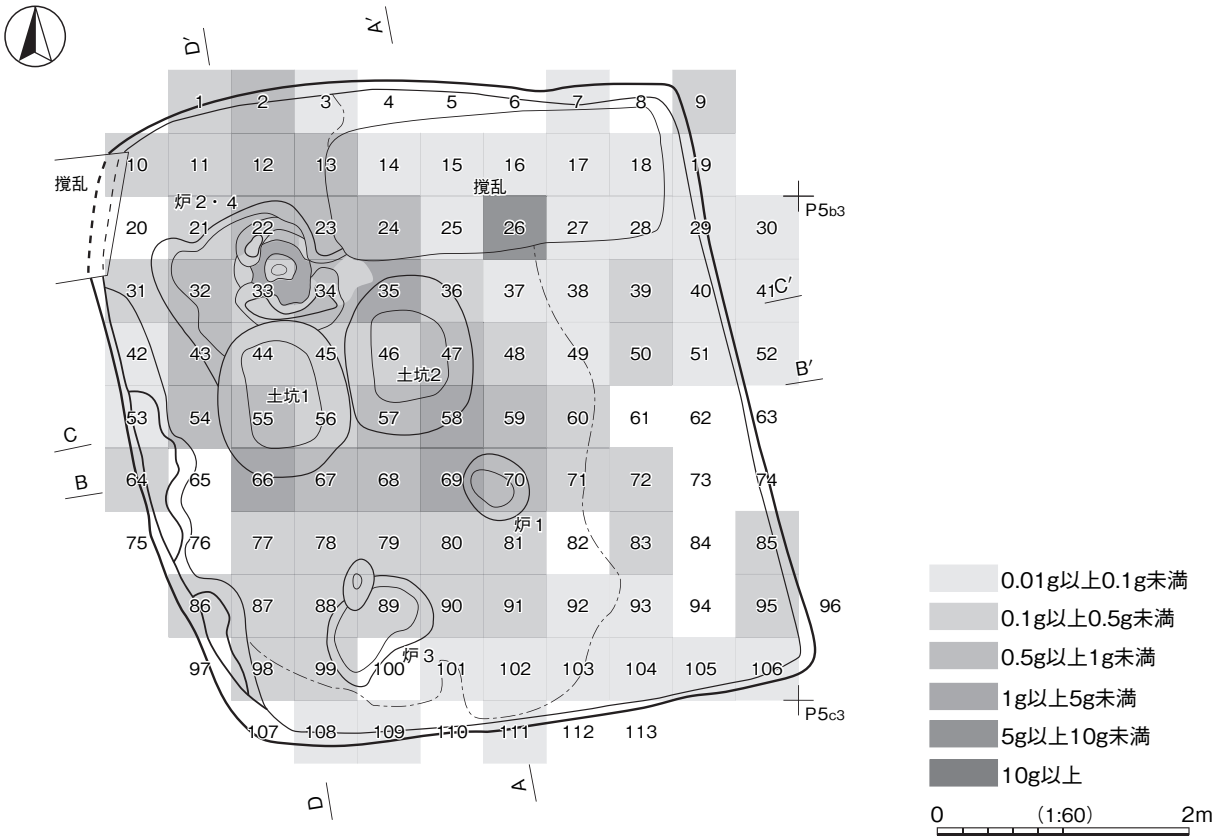
第３図　第３号鍛冶工房跡　粒状滓出土状況



第４図　第３号鍛冶工房跡　鍛造剥片出土状況



第５図　第５号鍛冶工房跡　粒状滓出土状況



第６図　第５号鍛冶工房跡　鍛造剥片出土状況

(5) 焼成遺構

ここでは，土坑の底面や覆土中に焼土を伴う土坑について，焼成遺構として報告する。当遺跡では，焼成遺構が８基確認されている。このうち炉１については竪穴建物跡の炉跡になる可能性があるが，周辺の遺構からは竪穴建物跡を想定し得なかったことから，ここで扱うこととする。以下でそれぞれについて説明する。

第 138 号土坑（第 285・286 図　PL28）

位置　調査Ⅱ区南東部のＯ４f2 区，標高 22.5 ｍの台地平坦部に位置している。

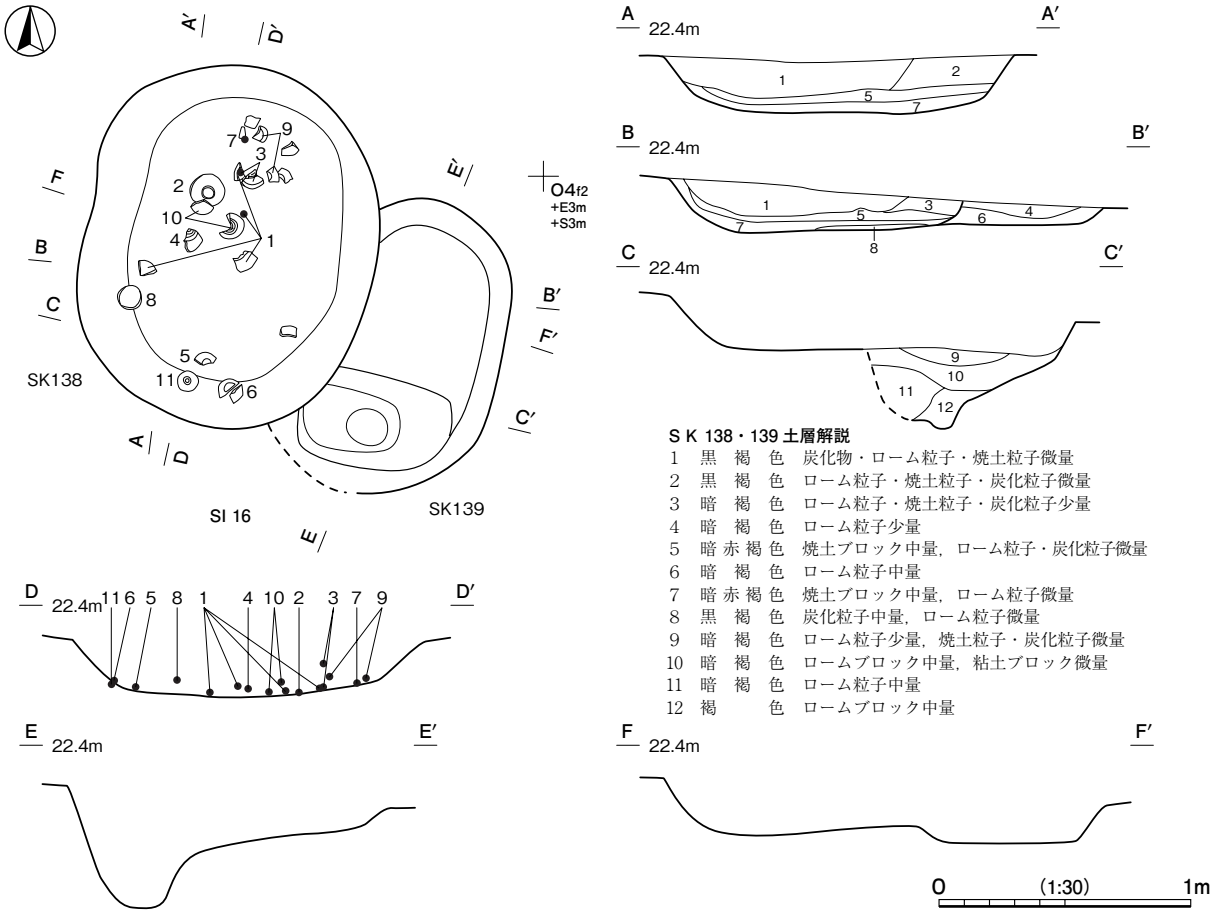
重複関係　第 16 号竪穴建物跡，第 139 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　長径 1.42 ｍ，短径 1.15 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 15 °－Ｅである。深さは 23cm で，壁は緩やかに外傾しており，被熱による硬化等は見られない。底面はほぼ平坦で，被熱して赤変している。

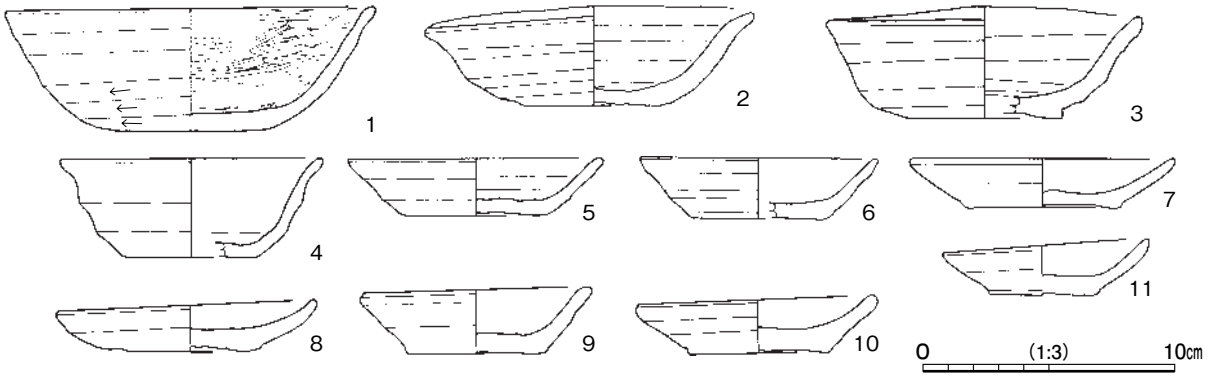
覆土　６層に分層できる。第５・７層に焼土ブロックが多く含まれ，第８層は炭化粒子がやや多く含まれる黒褐色土である。

遺物出土状況　第７層中から底面付近にかけて多量の土師器が出土している。復元可能な個体は，土師器坏４点，小皿７点，それ以外では土師器坏及び小皿の口縁部 27 点，体部８点，底部８点，甕の口縁部４点，体部 16 点，焼成粘土塊 4.6 ｇである。また時期が遡る土師器の椀１点，壺１点も出土している。出土した土器は，２・３のように大きく焼き歪んでいるものが多い。

所見　時期は，出土土器から 11 世紀前葉に比定できる。遺構の形状や焼き歪んだ土器の出土などから，土器焼成遺構の可能性がある。



第 285 図　第 138・139 号土坑実測図



第 286 図　第 138 号土坑出土遺物実測図

表 194　第 138 号土坑出土遺物観察表（第 286 図）

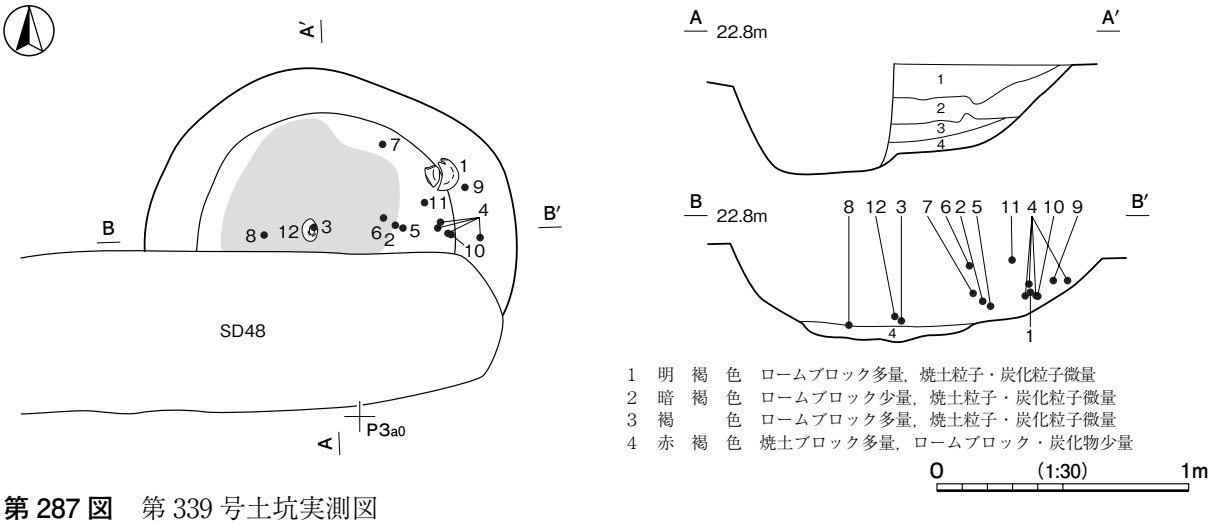
番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
1	土師器	坏	14.5	4.9	6.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面下半回転ヘラ削り　内面ヘラ磨き　底部一方向のヘラ削り	中央部７層	60% PL45
2	土師器	坏	12.8	3.9	5.8	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪み　火襷あり	中央部７層	100%
3	土師器	坏	12.2	4.3	6.0	長石・石英	浅黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪み	北部７層	90% PL45
4	土師器	坏	［10.4］	3.9	［5.2］	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪み	中央部７層	20%
5	土師器	小皿	［10.0］	2.2	［5.6］	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	南部７層	40%
6	土師器	小皿	［9.4］	2.4	［5.0］	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	南部７層	50%
7	土師器	小皿	［10.4］	1.9	［6.0］	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	北部７層	30%
8	土師器	小皿	10.2	2.0	5.2	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪み	南部７層	100% PL45
9	土師器	小皿	8.7	2.6	5.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪みによる破損　火襷	北部７層	90% PL45
10	土師器	小皿	9.1	2.2	5.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪みによる破損	中央部７層	100% PL45
11	土師器	小皿	8.2	2.2	4.2	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	南部７層	100% PL45

第 339 号土坑（第 287・288 図　PL28）

位置　調査Ⅰ区北西部のＯ３j9 区，標高 23.0 ｍの台地平坦部に位置している。

重複関係　第 48 号溝に掘り込まれている。

規模と形状　重複のため，東西径は 1.47 ｍで，南北径は 0.72 ｍしか確認できなかった。円形と推定され，深さは 35cm である。壁は緩やかに外傾してしており，被熱による硬化等は見られない。底面は中央付近がくぼんでおり，被熱して赤変している。

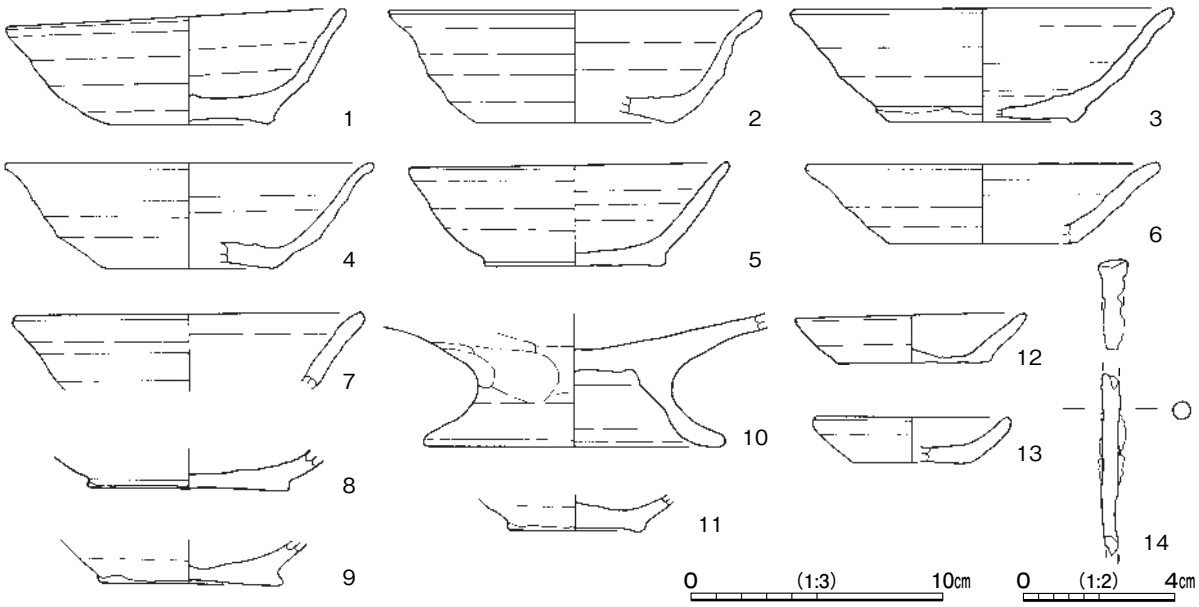


第 287 図　第 339 号土坑実測図

覆土　４層に分層できる。第４層は焼土ブロックが多量に含まれる赤褐色土で，火床面と考えられる。第３層にはロームブロックが多量に含まれており，埋め戻されている。

遺物出土状況　覆土上層から底面付近にかけて，多量の土師器が出土している。特に第２層中及び第３層上面からが多いが，特にまとまるような出土状況ではない。遺物は，土師器片 196 点（坏 112，高台付坏１，高台付椀２，小皿２，甕類 66，不明 13），須恵器片 10 点（坏２，蓋１，鉢･甕類５，不明２），金属製品１点（釘），鍛冶関連遺物（羽口１，椀状滓 31.8 ｇ，鉄塊系遺物 31.1 ｇ，鉄滓 26.3 ｇ），焼成粘土塊 34.2 ｇ，陶器片３点（碗２，擂鉢１），磁器片２点(碗)が出土している。遺物は赤彩の残る５世紀代の土師器片や陶磁器等も含まれているが，多くが 11 世紀代の土師器片で，当代の土師器の最小個体数は，坏 29 点，高台付椀３点，小皿２点である。出土した土器は，被熱して焼き歪んでいるものが多い。

所見　時期は，出土土器から 11 世紀後葉に比定できる。遺構の形状や焼き歪んだ土器の出土などから，土器焼成遺構の可能性がある。



第 288 図　第 339 号土坑出土遺物実測図

表 195　第 339 号土坑出土遺物観察表（１）（第 288 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師器	坏	13.1	4.5	6.0	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪み	東部壁際	90% PL46
2	土師器	坏	[14.8]	4.4	[7.8]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪み	東部中層	40% PL46
3	土師器	坏	[14.7]	4.4	[7.2]	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪み	中央部下層	40% PL46
4	土師器	坏	[14.4]	4.1	6.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪み	東部壁際	50% PL46
5	土師器	坏	12.4	4.0	[7.0]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	東部中層	50% PL46
6	土師器	坏	[13.5]	(3.1)	[7.4]	長石・石英	明黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	上層	10%
7	土師器	坏	[13.5]	(3.0)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　焼き歪み	東部中層	10%
8	土師器	坏	－	(1.5)	[7.8]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	中央部下層	20%
9	土師器	坏	－	(1.8)	7.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	東部壁際	30%
10	土師器	高台付椀	－	(5.3)	11.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ	東部壁際	30% PL46
11	土師器	坏	－	(1.4)	5.2	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	上層	30%
12	土師器	小皿	9.0	1.9	6.0	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り　焼き歪み	中央部下層	100% PL46
13	土師器	小皿	[7.6]	1.8	[4.2]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	覆土中	30%

表 196　第 339 号土坑出土遺物観察表（２）（第 287 図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
14	釘	[7.0]	(0.75)	0.5	5.30	鉄	断面丸型	覆土中	混入品カ PL57

番号	器　種	最小径	最大径	高さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
15	羽口	－	－	－	26.91	長石・石英・雲母	外　灰色 内　にぶい橙	表面還元	覆土中	観察表のみ

第 356 号土坑（第 289 図　PL28）

位置　調査Ｉ区北東部のＰ４b8 区，標高 20.5 ｍの台地斜面部に位置している。

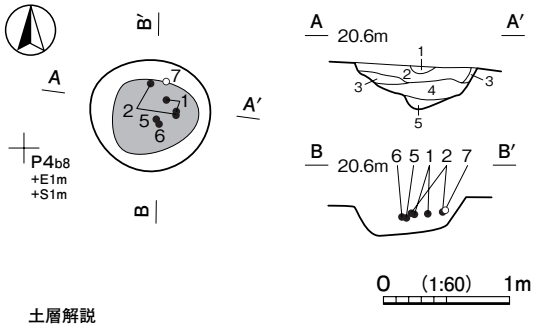
重複関係　第 78 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長径 0.95 ｍ，短径 0.93 ｍの円形である。深さは 34cm で，壁は緩やかに外傾している。底面は皿状で中央部がピット状にくぼみ，被熱して赤変している。

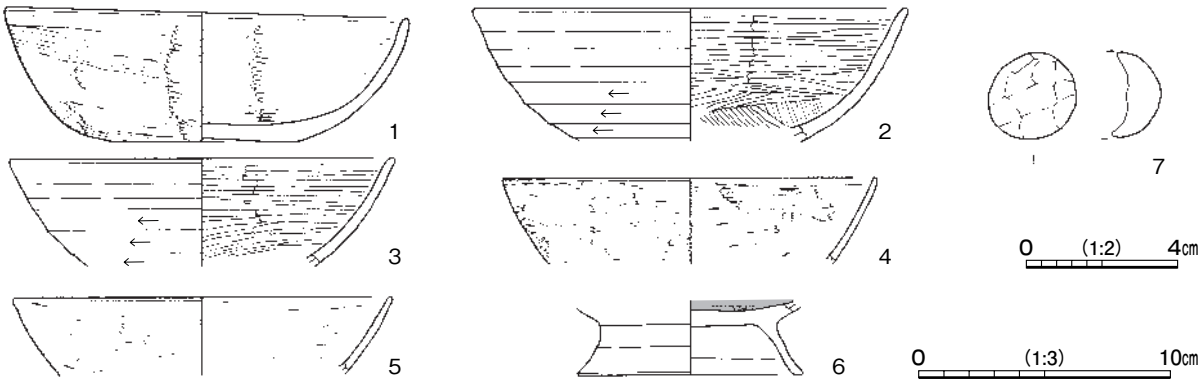
覆土　５層に分層できる。第３層は焼土ブロックや炭化材が多く含まれる黒褐色土，第４層が焼土ブロックや炭化材が多量に含まれる赤褐色土で，燃焼部の堆積土である。

遺物出土状況　第４層中から多量の土師器が出土しているが，特にまとまるような出土状況ではない。遺物は，土師器片 57 点（坏・椀 44，高台部３，甕６，不明４），須恵器片３点（坏２，甕類１）土製品１点（土玉），焼成粘土塊 157.8 ｇが出土している。土師器坏は，外・内面に磨き調整を施しているものが多い。最小個体数は，坏あるいは椀が 21 点である。

所見　時期は，出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。遺構の形状等から土器焼成遺構の可能性がある。



土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化材多量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化材多量
4　赤　褐　色　焼土ブロック・炭化物多量
5　褐　　色　ローム粒子少量



第 289 図　第 356 号土坑・出土遺物実測図

表 197　第 356 号土坑出土遺物観察表（１）（第 289 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師器	坏	15.7	5.3	7.3	長石・石英	黒	普通	外・内・底面ヘラ磨き　一部黒色処理	第４層	100% PL46
2	土師器	坏	[17.0]	(5.2)	－	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ　外面下端部回転ヘラ削り　内面ヘラ磨き	第４層	40% PL46
3	土師器	坏	[15.2]	(4.2)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ　外面下端部回転ヘラ削り　内面ヘラ磨き	覆土中	20%

表 198　第 356 号土坑出土遺物観察表（２）（第 289 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
4	土師器	坏	［14.6］	(3.4)	－	長石・石英	明赤褐	普通	外・内面ヘラ磨き	覆土中	5％
5	土師器	坏	［14.8］	(3.1)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	外・内面ヘラ磨き　一部黒色処理	第４層	20%
6	土師器	高台付椀	－	(2.9)	8.8	長石・石英	褐灰	普通	内面磨き　黒色処理	第４層	30%

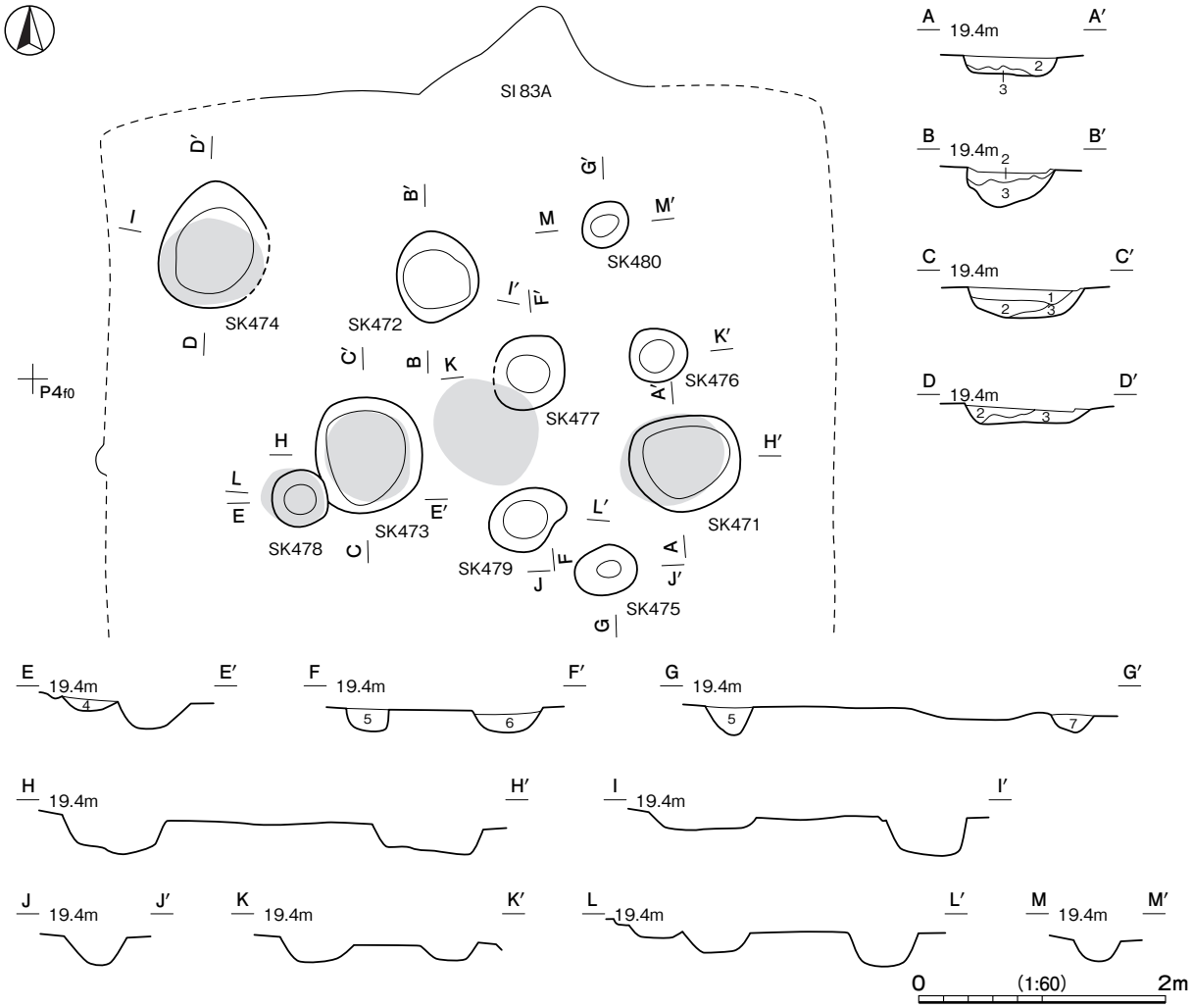
番号	器　種	径	長さ	孔径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
7	土玉	2.3	2.3	－	5.73	長石・雲母	にぶい橙	約１／２残存　指頭によるナデ調整	第４層	

第 471・473・474・478 号土坑（第 290 図）

位置　調査Ｉ区東部のＰ４e0 ～ Ｐ５f1 区，標高 19.5 ｍの台地斜面部に位置している。

重複関係　第 83 号竪穴建物跡と重複している。

規模と形状　第 83 号竪穴建物跡の床面で，火床面を５か所確認した。第 471 号土坑は長径 0.88 ｍ，短径 0.77 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 76 °－Ｅである。深さは 20cm で，外傾している。底面はほぼ平坦である。第 473 号土坑は長径 0.93 ｍ，短径 0.85 ｍの円形である。深さは 30cm で，壁は外傾している。底面はほぼ平坦で



ＳＫ 471 ～ 480 土層解説

1　暗　褐　色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
2　暗 赤 褐 色　焼土ブロック多量，ロームブロック中量，粘土ブロック少量
3　暗　褐　色　粘土ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子微量
4　黒　褐　色　粘土ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量
6　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック・粘土ブロック中量
7　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量

第 290 図　第 471 ～ 480 号土坑実測図

ある。第474号土坑は長径1.03ｍ，短径0.87ｍの楕円形で，長径方向はＮ－７°－Ｅである。深さは12cmで，外傾している。底面はほぼ平坦である。第478号土坑は径0.46ｍの円形である。深さは７cmで，外傾している。底面は皿状である。そのほかにも第473号土坑の東部に，径0.9ｍの火床面がある。

覆土　それぞれ２～３層に分層できる。第２層は焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色土で，その下位に焼土ブロックをわずかに含む暗褐色土が堆積している。いずれも壁や底面の被熱による硬化等は確認できない。

遺物出土状況　第471号土坑から土師器片２点(坏，甕)，第473号土坑から土師器片１点(甕)が出土しているが，いずれも小片で図示できない。

所見　遺物がほとんどないため，出土土器からの時期判断は困難である。７世紀後葉から８世紀前葉の第83号竪穴建物跡の床面で確認したことから，これより時期が下ることはないと考えられる。周囲に鍛冶工房跡が位置していることなどから，本跡も第83号竪穴建物跡に帰属して鍛冶工房跡になる可能性も考えられるが，鍛冶炉とは形状に違いがあること，本跡の覆土中から鉄滓等の鍛冶関連遺物の出土が見られないことなどから，可能性はあるものの断定できない。第83号竪穴建物跡との関係も含め，性格は不明としておきたい。

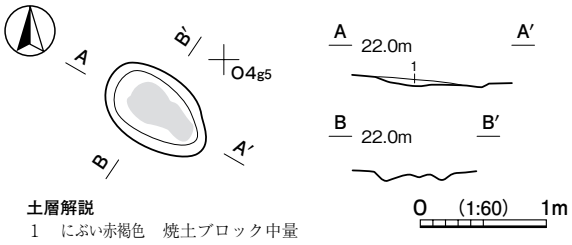
炉１（第291図）

位置　調査Ⅱ区南東部のＯ４g4区，標高20.5ｍの台地斜面部に位置している。

規模と形状　長径1.04ｍ，短径0.58ｍの楕円形で，長径方向はＮ－50°－Ｗである。深さは20cmで，壁は緩やかに立ち上がっている。底面は皿状で，被熱して赤変している。

覆土　単一層。焼土ブロックがやや多く含まれる層で，その下面が火床面である。

所見　遺物が出土していないため，時期の比定は困難である。形状から建物跡の炉跡と考えられるが，これに組み合うピットや掘方は確認できなかった。隣接する第３号掘立柱建物跡や第１号柱穴列に伴う炉跡の可能性もあるが，断定はできなかった。



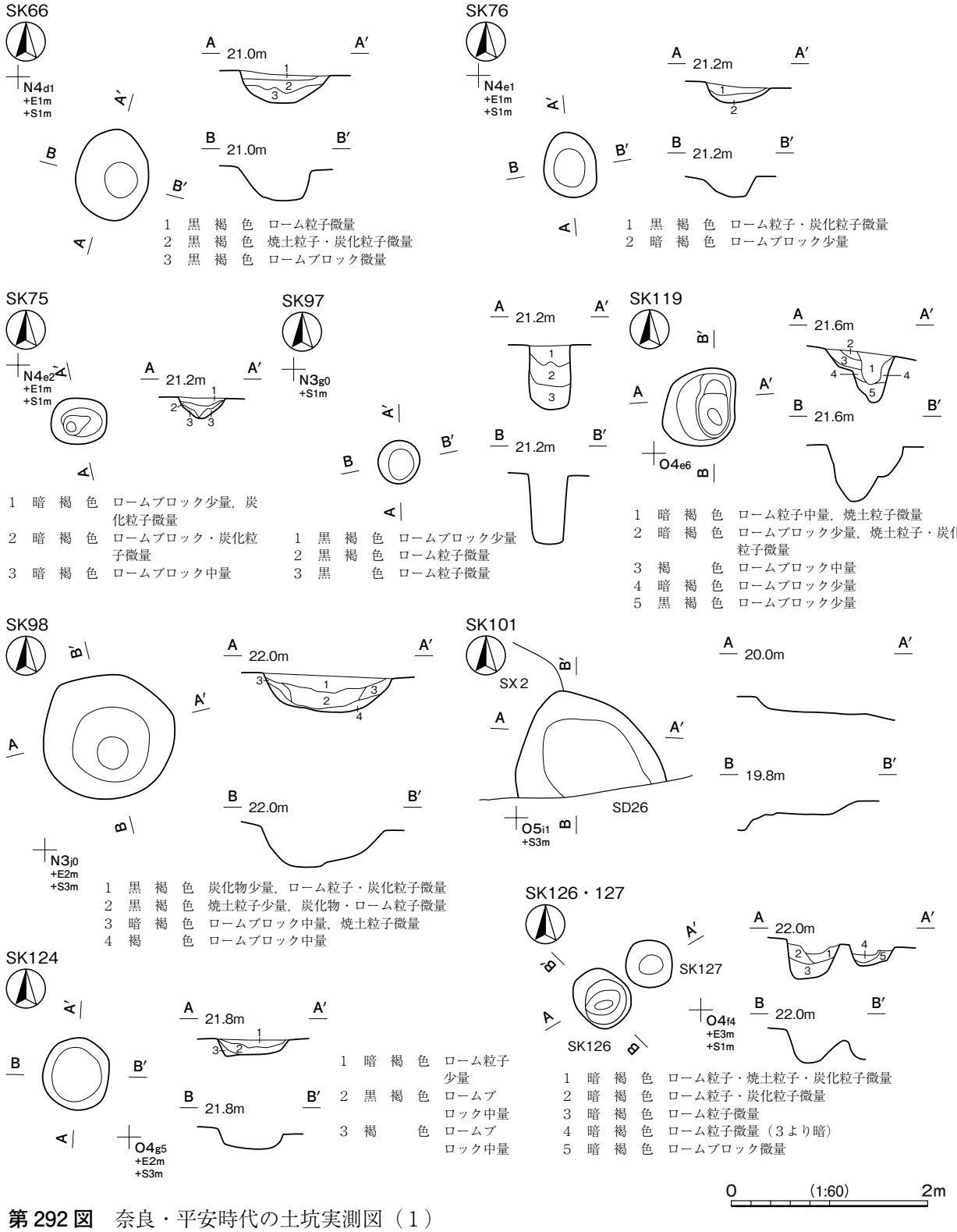
第291図　炉１実測図

表199　焼成遺構一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考（旧→新）
138	Ｏ４f2	Ｎ－15°－Ｅ	楕円形	1.42 × 1.15	23	平坦	外傾	人為	土師器76，焼成粘土塊	SI16・SK139→本跡 11世紀前葉
339	Ｏ３j9	－	［円形］	1.47 ×（0.72）	35	皿状	外傾	人為	土師器196，須恵器10，羽口１，釘１，椀状滓，鉄塊系遺物，鉄滓	本跡→SD48 11世紀後葉
356	Ｐ４b8	－	円形	0.95 × 0.93	34	皿状	外傾	人為	土師器53，須恵器３，土玉１，焼成粘土塊	SI78→本跡 10世紀前葉
471	Ｐ５f1	Ｎ－76°－Ｅ	楕円形	0.88 × 0.77	20	平坦	外傾	人為	土師器２	SI83重複
473	Ｐ４f0	－	円形	0.93 × 0.85	30	平坦	外傾	人為	土師器１	SI83重複
474	Ｐ４e0	Ｎ－７°－Ｅ	楕円形	1.03 × 0.87	12	平坦	外傾	人為	－	SI83重複
478	Ｐ４f0	－	円形	0.46 × 0.46	7	皿状	外傾	人為	－	SI83重複
炉１	Ｏ４g4	Ｎ－50°－Ｗ	楕円形	1.04 × 0.58	20	皿状	緩斜	人為	－	SB3，SA1重複

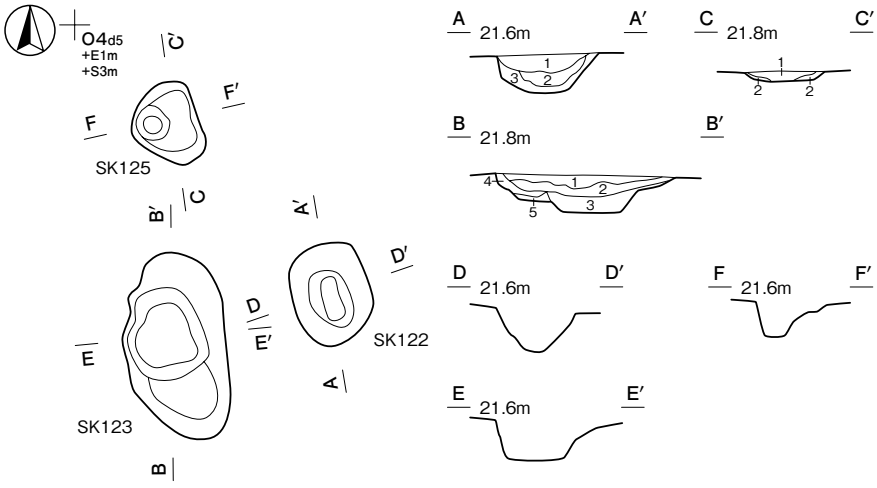
(6) 土坑

当期の土坑は158基を確認した。ただし，当遺跡は多時期が複合する遺跡であることから，遺物が混在した状態で出土するものが多く，また全てにおいて時期判断が可能な遺物が出土しているわけでもないため，遺物のみからの時期判断は困難である。また同一面での確認のため，確認面での判断も不可能である。よって，出土遺物と土坑の形状や堆積状況，重複関係，遺構の位置などから時期判断を行った。特筆すべきものとして，多量の鍛冶関連遺物が出土した第287号土坑などがある。以下，実測図と計測表を掲載する。



第292図 奈良・平安時代の土坑実測図（1）

SK122・123・125

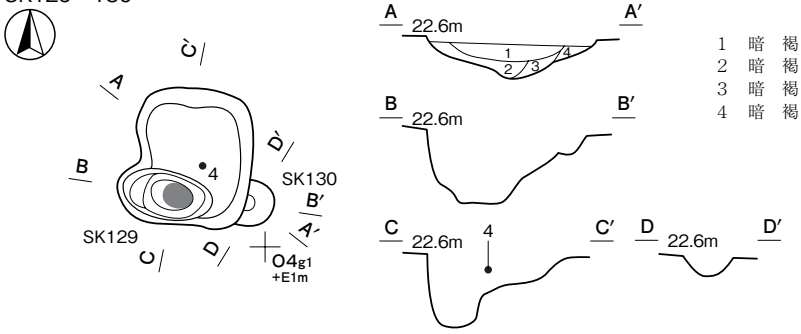


SK122
1 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量，焼土粒子微量
3 黒 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量

SK123
1 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子微量（1より暗）
3 褐 色 ローム粒子中量
4 黒 褐 色 ロームブロック少量
5 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子微量

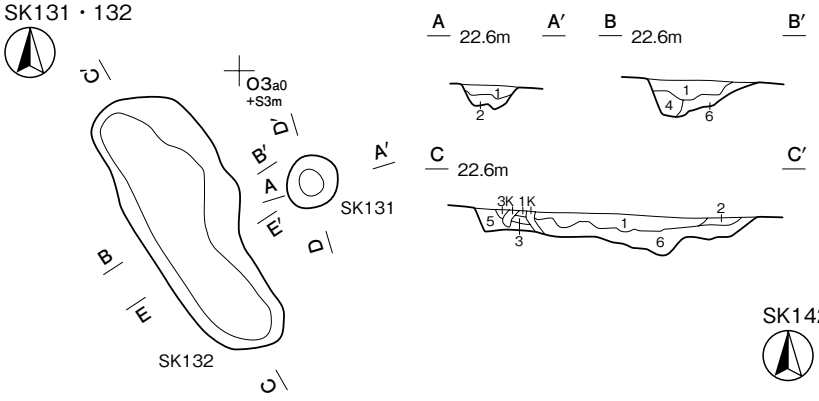
SK125
1 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐 色 ロームブロック中量

SK129・130



1 暗 褐 色 ローム粒子少量，炭化物・焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
3 暗 褐 色 ロームブロック中量
4 暗 褐 色 ローム粒子中量

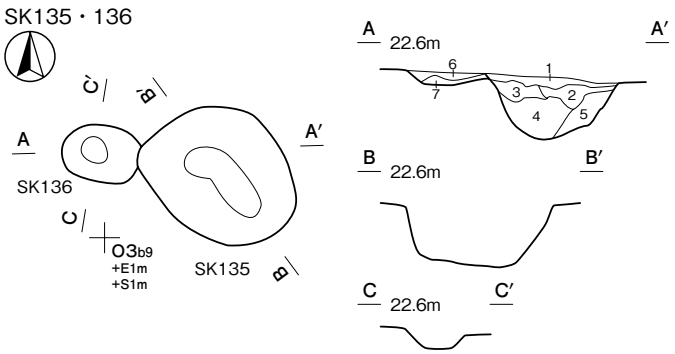
SK131・132



SK131
1 暗 褐 色 ロームブロック中量
2 褐 色 ロームブロック中量

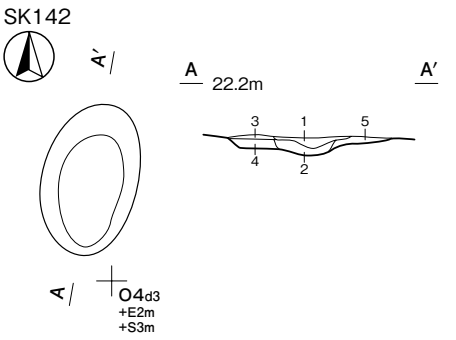
SK132
1 黒 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量
3 褐 色 ロームブロック中量
4 黒 褐 色 ロームブロック少量
5 暗 褐 色 ロームブロック中量
6 褐 色 ロームブロック中量

SK135・136



1 黒 褐 色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化粒子微量
3 暗 褐 色 ロームブロック中量
4 黒 褐 色 ロームブロック中量
5 褐 色 ロームブロック中量
6 褐 色 ロームブロック中量
7 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK142

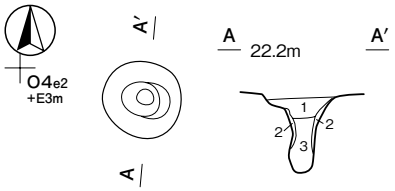


1 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子少量，砂質粘土ブロック・ローム粒子微量
2 暗 褐 色 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
3 黒 褐 色 砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒 褐 色 焼土粒子少量,砂質粘土ブロック･ローム粒子微量
5 暗 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子少量，砂質粘土ブロック・ローム粒子微量

0 (1:60) 2m

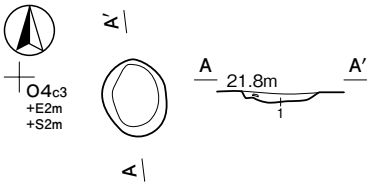
第 293 図　奈良・平安時代の土坑実測図（2）

SK141



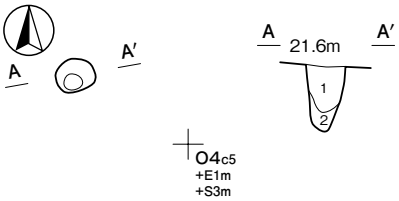
1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
3 褐 色 ロームブロック少量

SK145



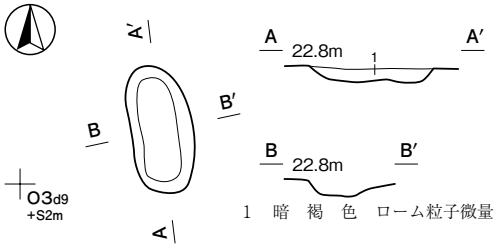
1 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK146



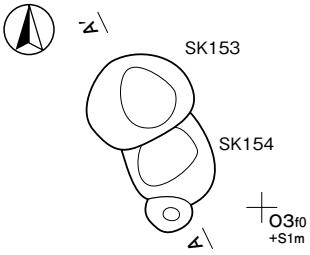
1 暗 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK144



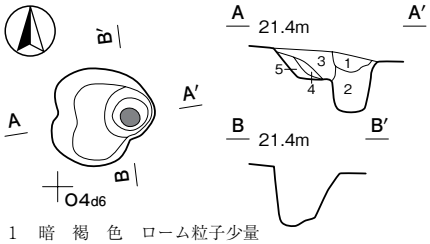
1 暗 褐 色 ローム粒子微量

SK153・154



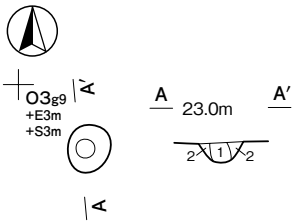
1 黒 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量
3 褐 色 ロームブロック少量
4 褐 色 ロームブロック中量
5 褐 色 ローム粒子中量
6 黒 褐 色 ローム粒子微量
7 暗 褐 色 ロームブロック少量

SK156



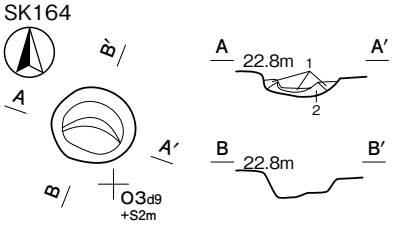
1 暗 褐 色 ローム粒子少量
2 暗 褐 色 ロームブロック微量
3 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
4 暗 褐 色 ローム粒子微量
5 褐 色 ロームブロック中量

SK161



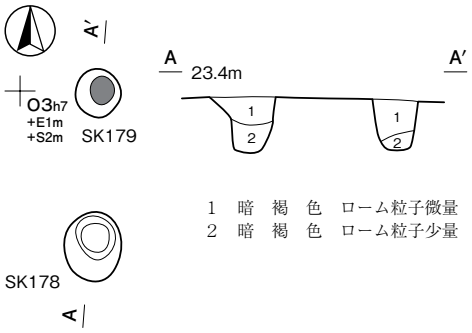
1 黒 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量

SK164



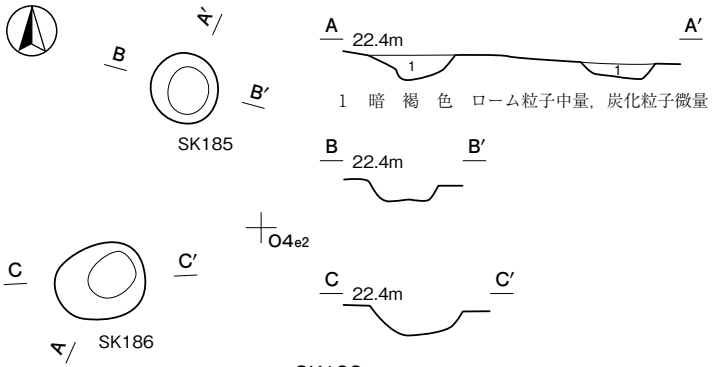
1 黒 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量

SK178・179



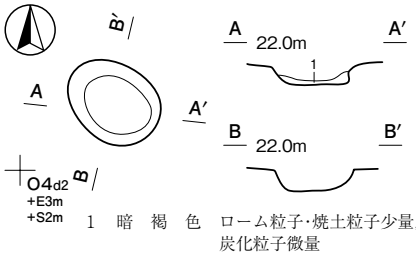
1 暗 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK185・186



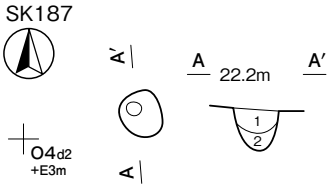
1 暗 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子微量

SK184



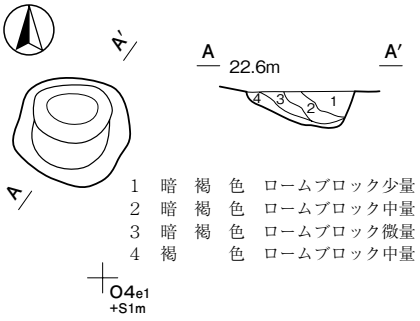
1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量

SK187



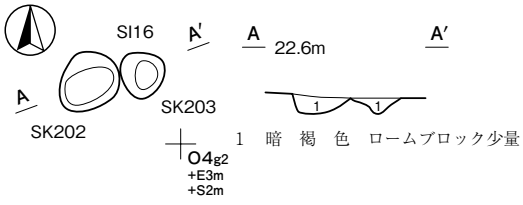
1 暗 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK192



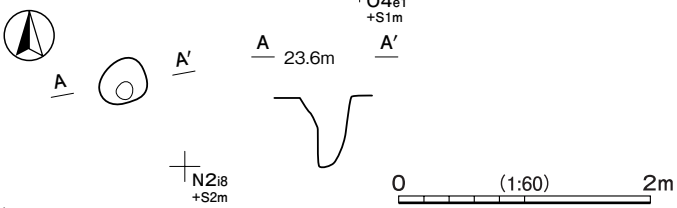
1 暗 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量
3 暗 褐 色 ロームブロック微量
4 褐 色 ロームブロック中量

SK202・203



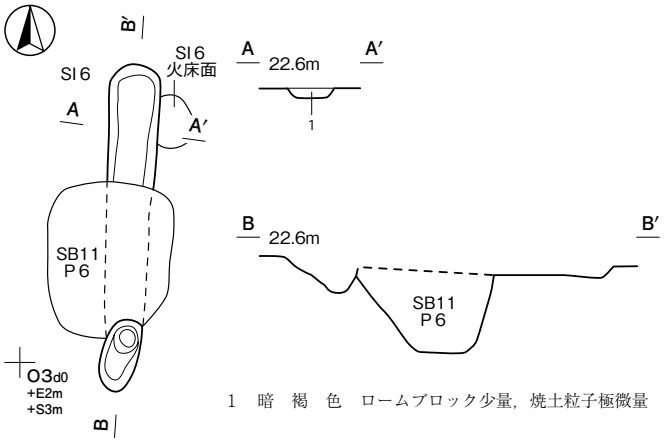
1 暗 褐 色 ロームブロック少量

SK217



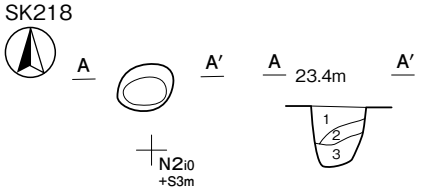
第 294 図 奈良・平安時代の土坑実測図（3）

SK197

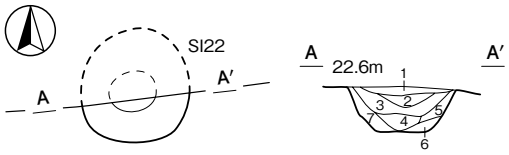


1 暗 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK218

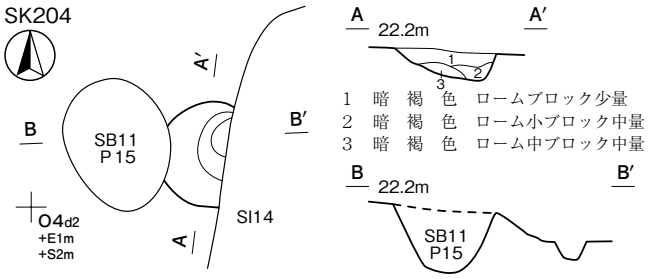


SK222



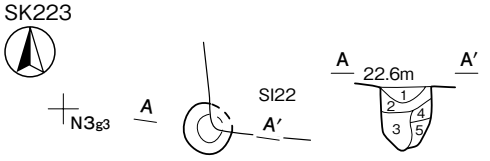
1 黒 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ロームブロック少量
3 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
4 黒 褐 色 ローム粒子中量
5 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK204



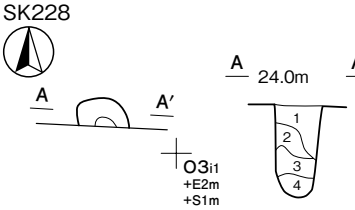
1 暗 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ローム小ブロック中量
3 暗 褐 色 ローム中ブロック中量

SK223



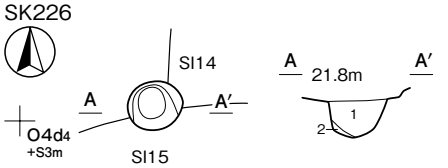
1 黒 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ロームブロック少量
3 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
4 黒 褐 色 ローム粒子中量
5 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK228



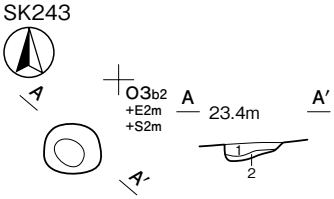
1 黒 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量
3 暗 褐 色 ロームブロック中量
4 黒 褐 色 ロームブロック微量

SK226



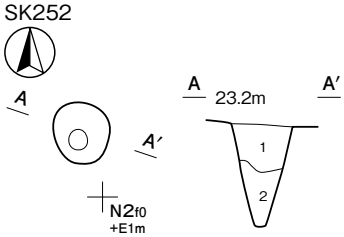
1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量

SK243



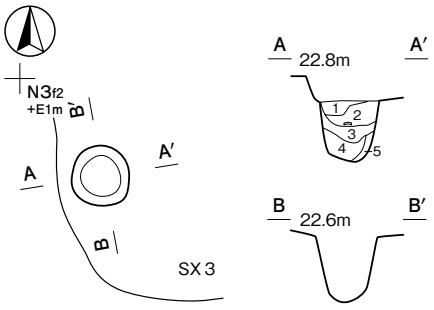
1 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK252



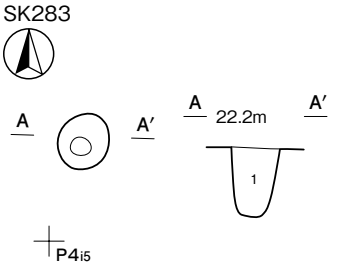
1 暗 褐 色 ローム粒子中量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK230



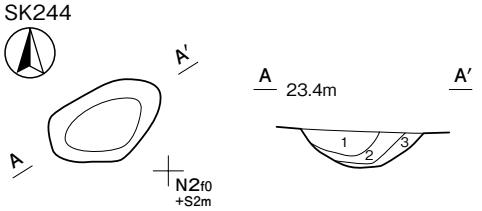
1 暗 褐 色 ローム小ブロック中量
2 暗 褐 色 ローム中ブロック中量
3 暗 褐 色 ローム粒子少量
4 暗 褐 色 ローム粒子中量
5 暗 褐 色 ローム粒子多量

SK283



1 黒 褐 色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

SK244

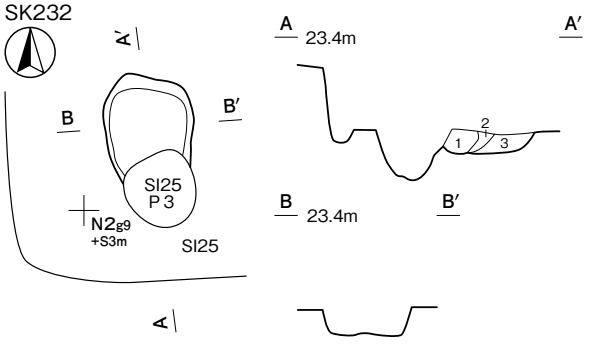


1 暗 褐 色 ローム粒子少量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
3 褐 色 ローム粒子少量，炭化粒子微量

0 (1:60) 2m

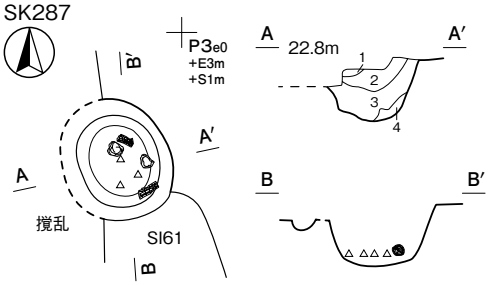
第 295 図 奈良・平安時代の土坑実測図（4）

SK232



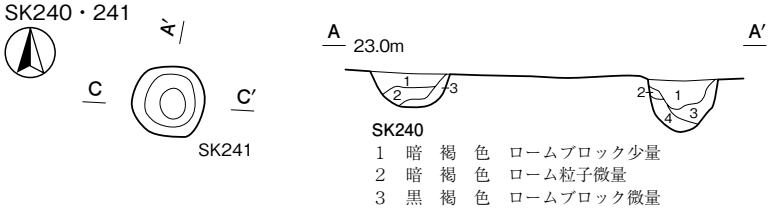
1 褐　　色　ローム粒子少量　3 暗 褐 色　ローム粒子少量
2 暗 褐 色　ローム粒子中量

SK287



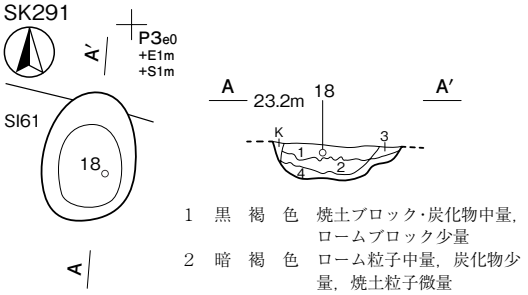
1 灰黄褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2 暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
3 黒　　色　炭化粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量
4 灰黄褐色　ローム粒子多量，炭化粒子中量

SK240・241



SK240
1 暗 褐 色　ロームブロック少量
2 暗 褐 色　ローム粒子微量
3 黒 褐 色　ロームブロック微量

SK291

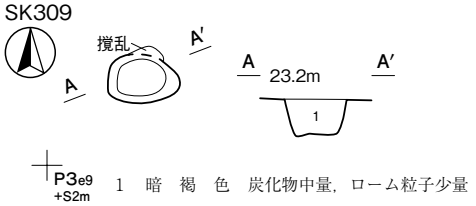


1 黒 褐 色　焼土ブロック･炭化物中量，ロームブロック少量
2 暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化物少量，焼土粒子微量
3 暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化物・粘土ブロック少量，焼土ブロック微量
4 暗 褐 色　焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量

SI47

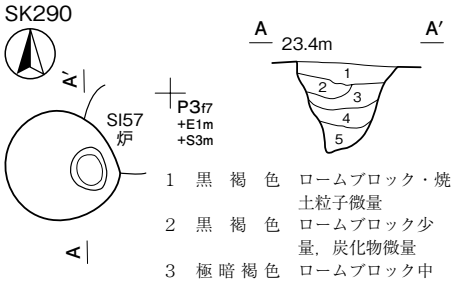
SK241
1 暗 褐 色　ローム粒子中量
2 褐　　色　ロームブロック少量
3 暗 褐 色　ロームブロック中量
4 黒 褐 色　ロームブロック中量

SK309



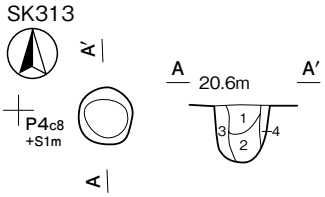
1 暗 褐 色　炭化物中量，ローム粒子少量

SK290



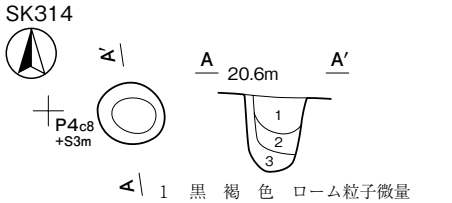
1 黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子微量
2 黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
3 極暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4 黒 褐 色　ロームブロック少量
5 灰 褐 色　ローム粒子多量

SK313



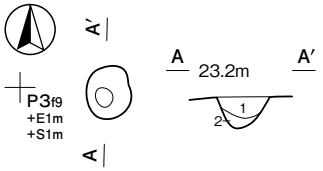
1 黒 褐 色　粘土ブロック中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
2 黒 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子微量
3 黒 褐 色　ローム粒子微量
4 黒 褐 色　ローム粒子少量

SK314



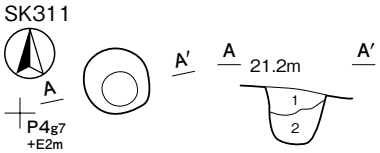
1 黒 褐 色　ローム粒子微量
2 黒 褐 色　ローム粒子少量
3 黒 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量

SK306



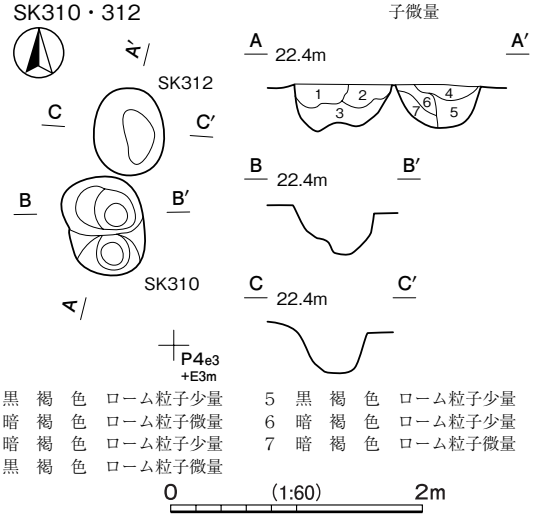
1 暗 褐 色　ローム粒子少量，炭化物微量
2 褐　　色　炭化物・ローム粒子少量，焼土粒子微量

SK311



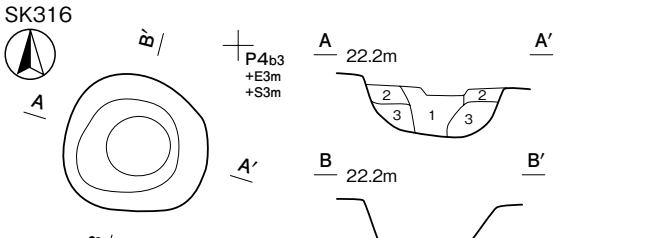
1 暗 褐 色　ローム粒子少量
2 暗 褐 色　ロームブロック少量

SK310・312



1 黒 褐 色　ローム粒子少量
2 暗 褐 色　ローム粒子微量
3 暗 褐 色　ローム粒子少量
4 黒 褐 色　ローム粒子微量
5 黒 褐 色　ローム粒子少量
6 暗 褐 色　ローム粒子少量
7 暗 褐 色　ローム粒子微量

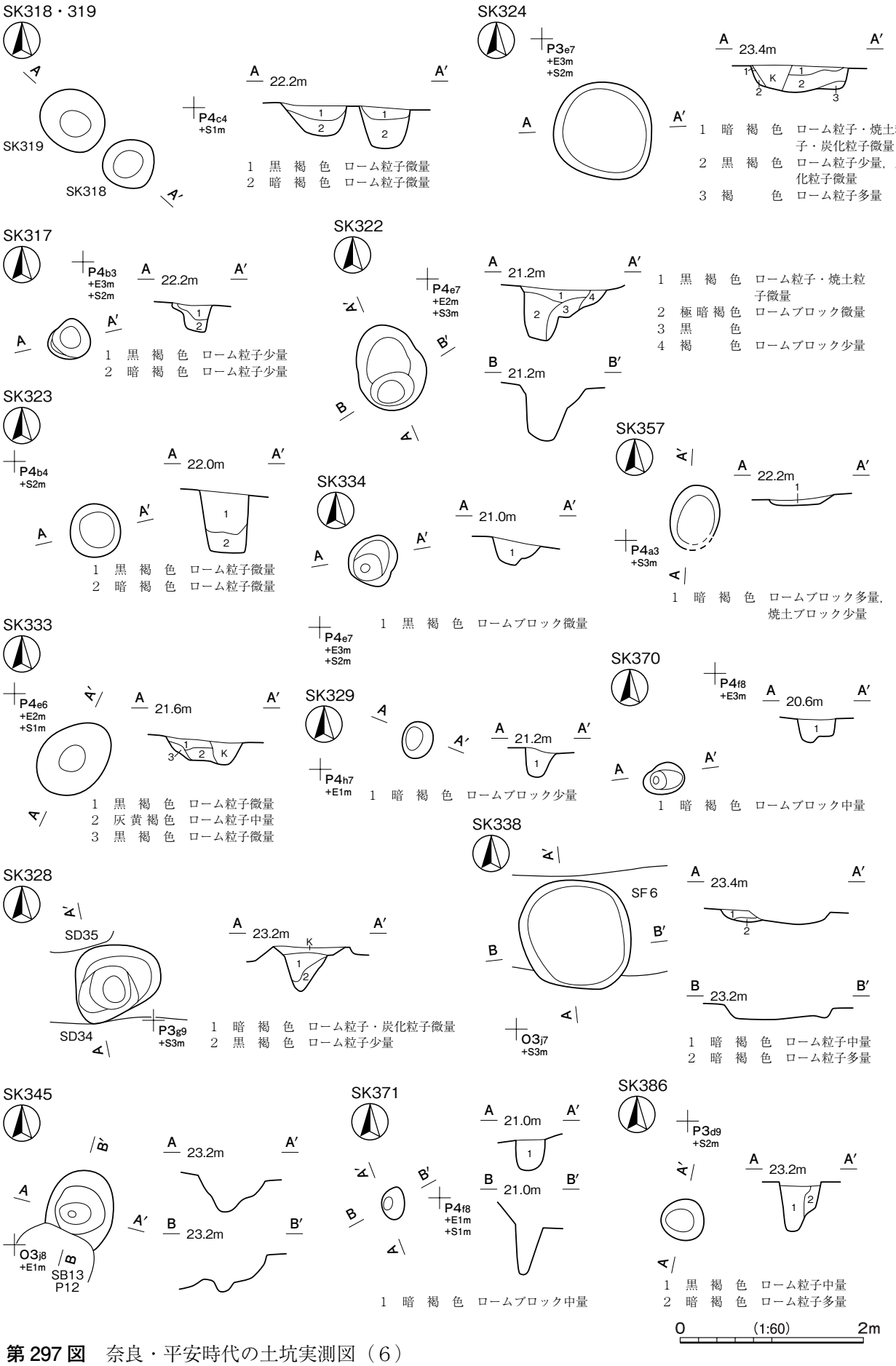
SK316



1 黒 褐 色　ロームブロック少量
2 黒 褐 色　ロームブロック微量
3 暗 褐 色　ロームブロック少量

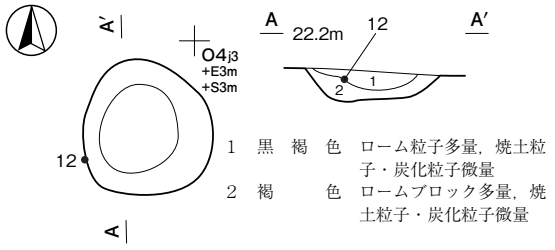
0 (1:60) 2m

第 296 図　奈良・平安時代の土坑実測図（5）



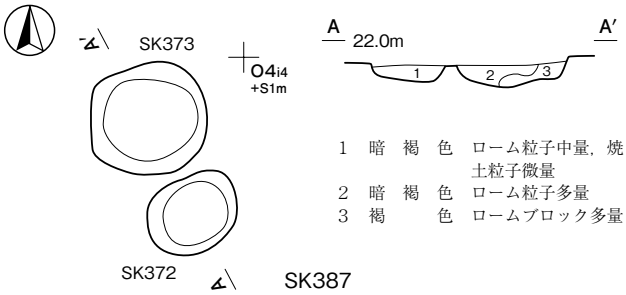
第 297 図　奈良・平安時代の土坑実測図（6）

SK351



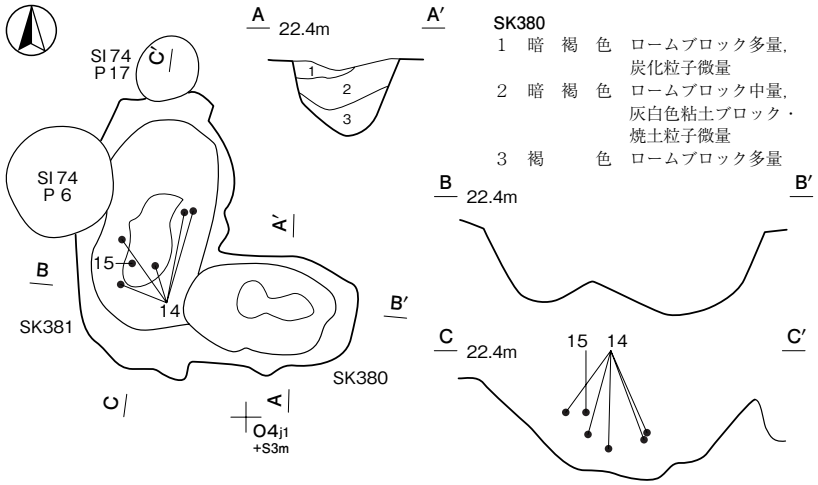
1 黒 褐 色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

SK372・373



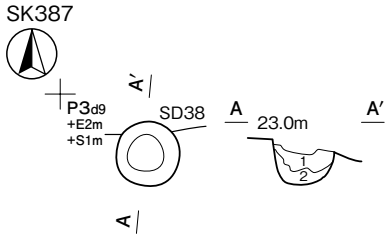
1 暗 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子多量
3 褐 色 ロームブロック多量

SK380・381



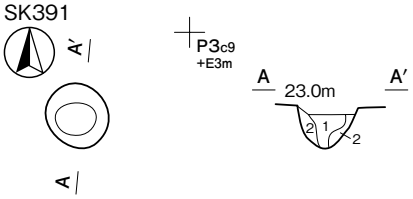
SK380
1 暗 褐 色 ロームブロック多量，炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量，灰白色粘土ブロック・焼土粒子微量
3 褐 色 ロームブロック多量

SK387



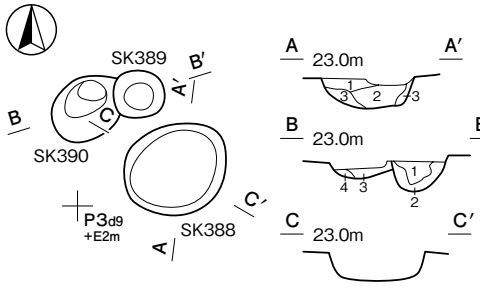
1 暗 褐 色 ローム粒子多量，焼土ブロック・炭化物少量
2 にぶい黄褐色 ローム粒子多量，焼土ブロック少量

SK391



1 暗 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子中量

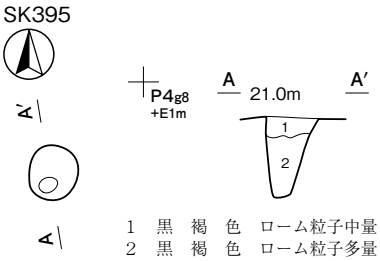
SK388・389・390



SK388
1 暗 褐 色 ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量
2 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 にぶい黄褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量

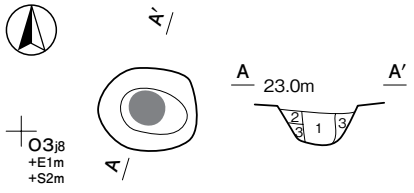
SK389・390
1 暗 褐 色 炭化物中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗 褐 色 焼土粒子中量，ロームブロック・炭化物少量
4 にぶい黄褐色 ローム粒子中量

SK395



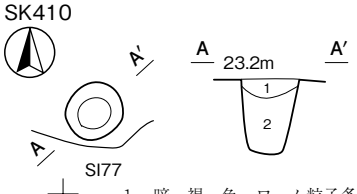
1 黒 褐 色 ローム粒子中量
2 黒 褐 色 ローム粒子多量

SK397



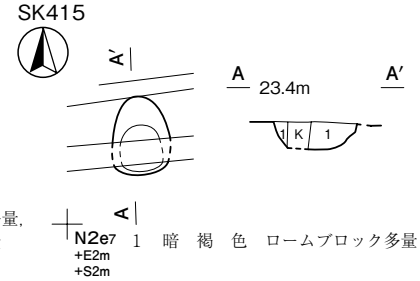
1 黒 褐 色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 黄 褐 色 ロームブロック多量
3 褐 色 ロームブロック多量

SK410



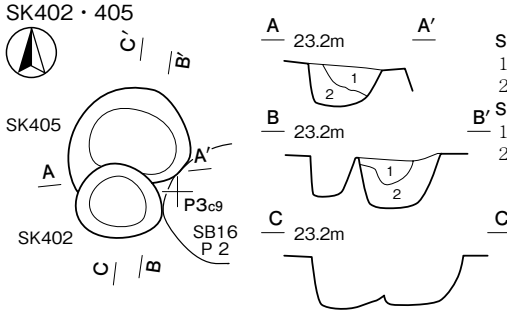
1 暗 褐 色 ローム粒子多量
2 褐 色 ロームブロック多量，焼土ブロック微量

SK415



1 暗 褐 色 ロームブロック多量

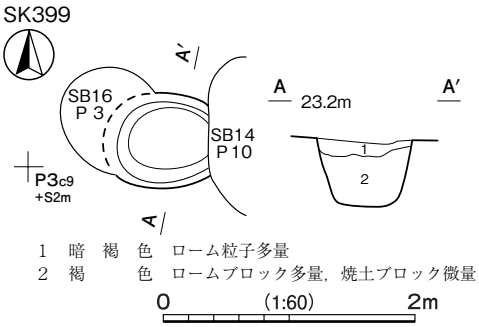
SK402・405



SK402
1 暗 褐 色 ローム粒子中量
2 暗 褐 色 ローム粒子多量

SK405
1 暗 褐 色 ローム粒子多量
2 暗 褐 色 ローム粒子多量（1より明）

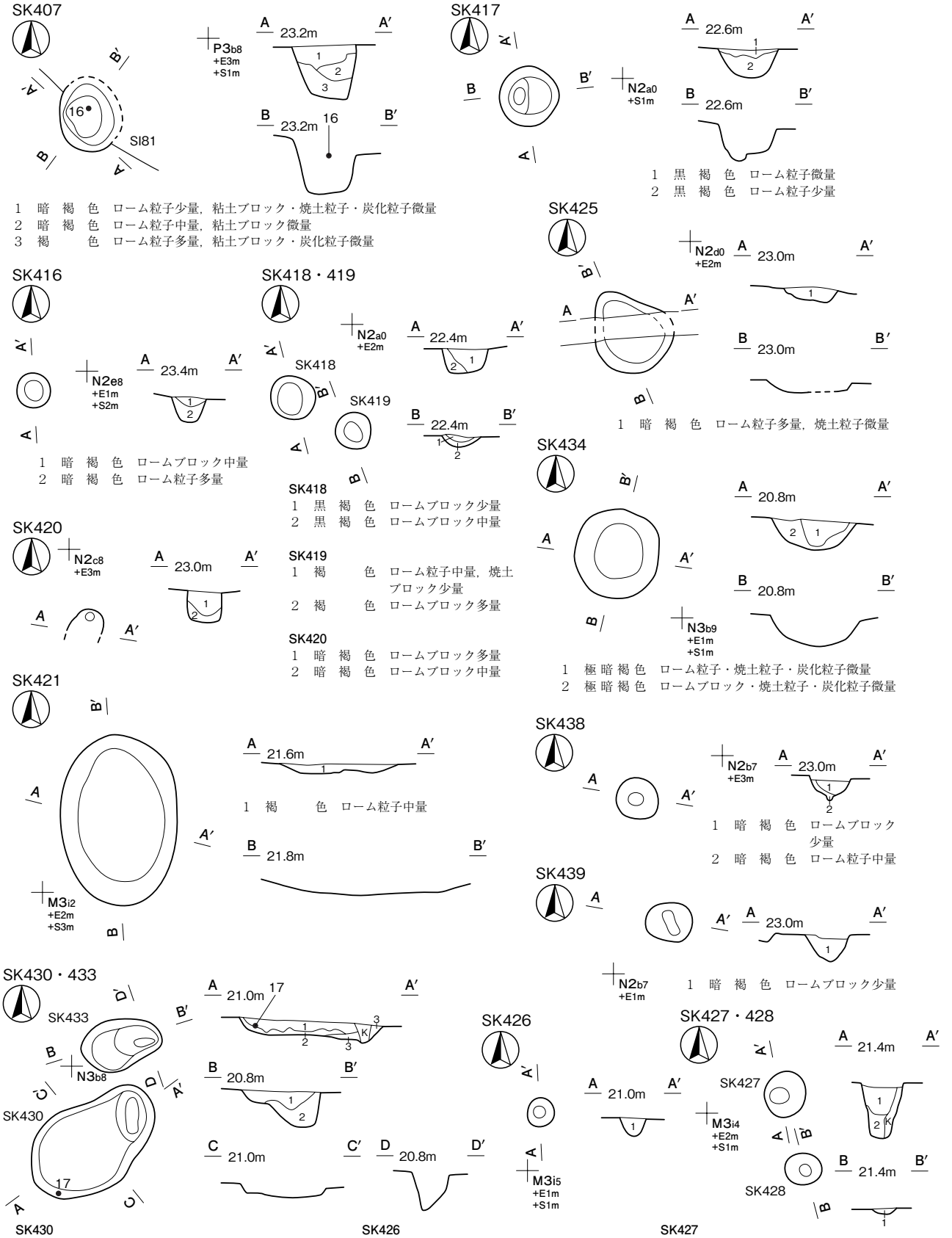
SK399



1 暗 褐 色 ローム粒子多量
2 褐 色 ロームブロック多量，焼土ブロック微量

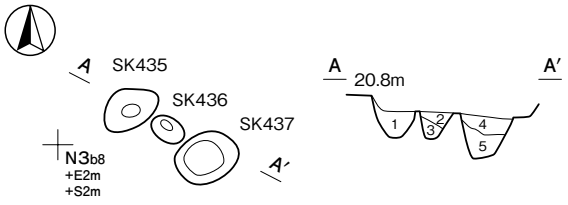
0 (1:60) 2m

第298図 奈良・平安時代の土坑実測図（7）



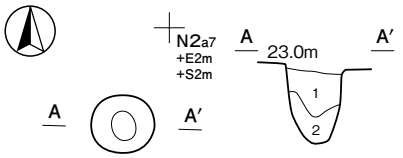
第 299 図　奈良・平安時代の土坑実測図（8）

SK435・436・437



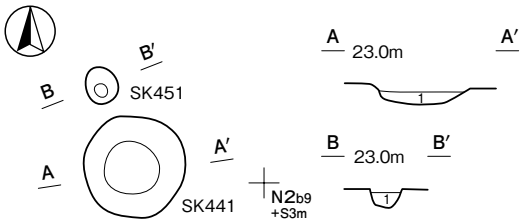
1 極暗褐色 ローム粒子少量
2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
3 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
4 極暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
5 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK440

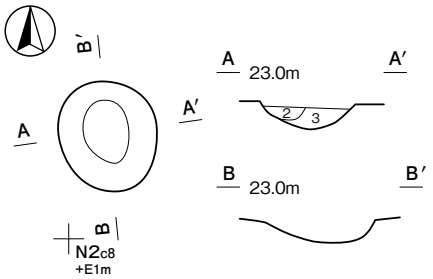


1 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK441・451



SK442

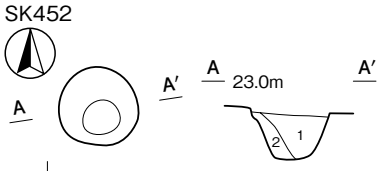


SK441・442・443
1 極暗褐色 ロームブロック中量
2 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
3 暗 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

SK444
1 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
2 褐 色 ロームブロック多量

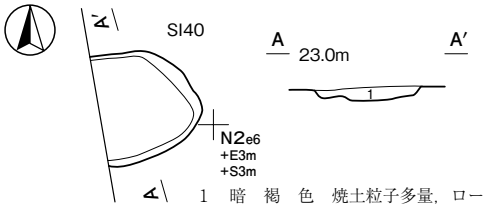
SK451
1 暗 褐 色 ロームブロック中量，焼土粒子微量

SK452



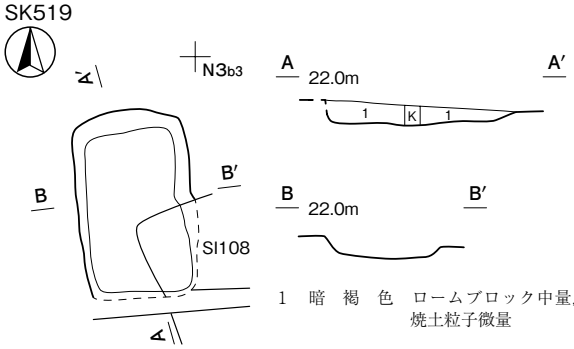
1 暗 褐 色 ロームブロック中量
2 褐 色 ローム粒子多量，炭化粒子微量

SK499



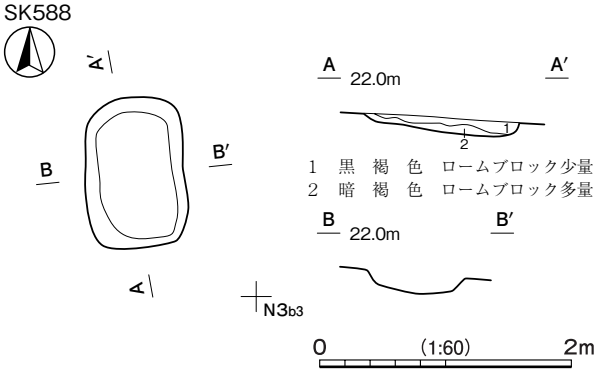
1 暗 褐 色 焼土粒子多量，ロームブロック中量

SK519



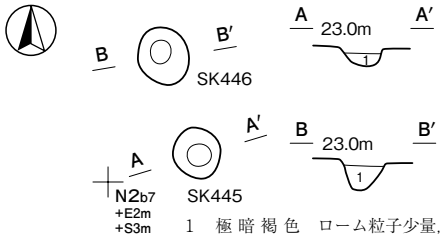
1 暗 褐 色 ロームブロック中量，焼土粒子微量

SK588



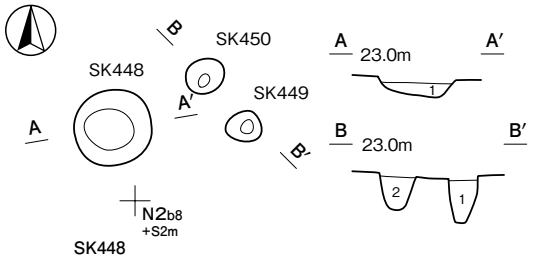
1 黒 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ロームブロック多量

SK445・446



1 極暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量

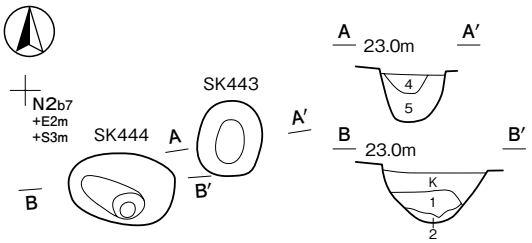
SK448・449・450



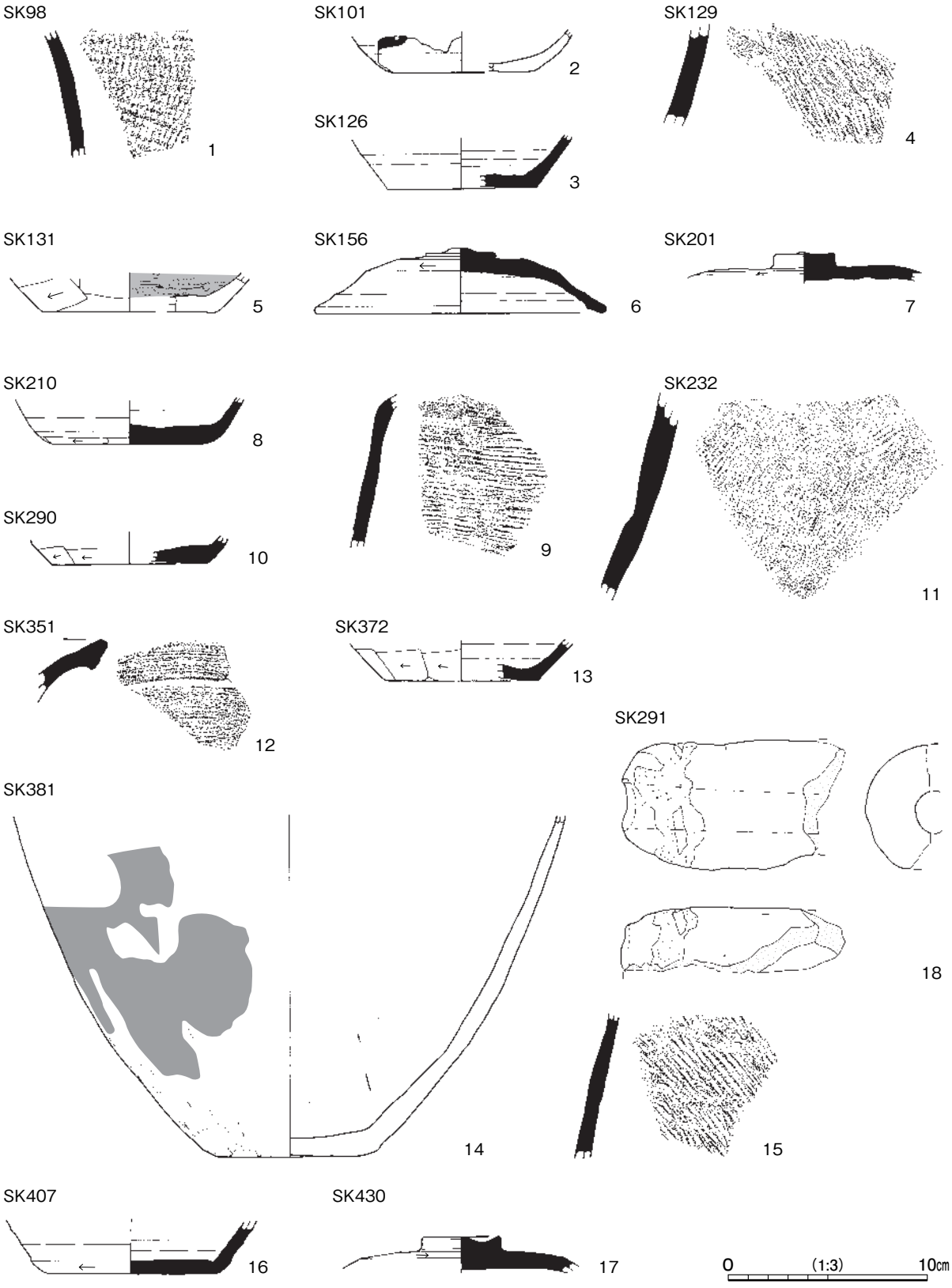
SK448
1 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

SK449・450
1 黒 褐 色 ロームブロック中量
2 黒 褐 色 ロームブロック微量

SK443・444



第 300 図 奈良・平安時代の土坑実測図（9）



第 301 図　奈良・平安時代の土坑出土遺物実測図

表 200　奈良・平安時代の土坑出土遺物観察表（1）（第 301 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	甕	－	(6.3)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	外面格子目文叩き　内面ナデ	SK98	5％新治窯

表 201　奈良・平安時代の土坑出土遺物観察表（２）（第 301 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
2	土師器	坏	－	(2.1)	[7.0]	長石・石英	明褐	普通	ロクロナデ　底部一方向のヘラ削り　体部外面に墨書	SK101	10%
3	須恵器	坏	－	(2.5)	[7.4]	長石・石英	にぶい黄	普通	ロクロナデ　底部一方向のヘラ削り	SK126	５％新治窯
4	須恵器	甕又は鉢	－	(5.1)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面斜位の平行叩き　内面ナデ	SK129	５％新治窯
5	土師器	坏	－	(2.0)	[8.5]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面体部下端手持ちヘラ削り　底部一方向のヘラ削り内面磨き　黒色処理	SK131	10%
6	須恵器	蓋	[14.2]	3.3	－	長石・石英・雲母	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	SK156	40%新治窯
7	須恵器	蓋	－	(1.6)	－	長石・石英	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	SK201	30%新治窯
8	須恵器	坏	－	(2.2)	[7.8]	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ削り　酸化焔焼成	SK210	10%新治窯
9	須恵器	鉢	－	(7.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面横位の平行叩き　内面ナデ	SK210	５％新治窯
10	須恵器	坏	－	(1.3)	[7.8]	長石・石英・雲母・黒色湧出物	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ削り	SK290	20％堀之内窯ヵ
11	須恵器	鉢	－	(10.4)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	外面斜位の平行叩き　内面ナデ	SK232	５％新治窯
12	須恵器	甕	－	(3.2)	－	長石・石英・雲母	灰黄	普通	ロクロナデ	SK351	５％新治窯
13	須恵器	坏	－	(2.0)	[7.6]	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	SK372	20%新治窯
14	土師器	甕	－	(17.0)	7.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き　粘土付着　内面ヘラナデ　底部木葉痕	SK381	30%
15	須恵器	甕	－	(7.2)	－	長石・石英・雲母	灰黄	普通	外面斜位の平行叩き　内面ナデ	SK381	５％新治窯
16	須恵器	坏	－	(2.7)	[8.4]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	SK407	30%新治窯
17	須恵器	蓋	－	(1.8)	－	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	SK430	30%新治窯

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
18	羽口	(11.2)	(6.2)	(3.3)	172.52	長石・石英	にぶい褐	先端部ガラス化　発泡化	SK291	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
22	不明	(3.6)	(2.1)	0.8	10.61	鉄	２つに分割　錆化著しい　断面長方形	SK144	観察表のみ
23	刀子ヵ	(3.1)	1.9	0.1 ～ 0.3	4.44	鉄	断面二等辺三角形状	SK381	観察表のみ
24	不明	(3.3)	(1.8)	0.2 ～ 0.3	3.81	鉄	断面長方形　錆化著しい	SK425	観察表のみ

表 202　奈良・平安時代の土坑一覧表（１）

番号	位　置	長径方向	平 面 形	規　　模		底　面	壁　面	覆　土	主 な 出 土 遺 物	備　考 （旧→新）
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
66	Ｎ４ｄ1	Ｎ－８°－Ｅ	楕円形	0.93 × 0.73	32	平坦	緩斜 ほぼ直立	自然	－	
75	Ｎ４ｅ2	Ｎ－85°－Ｅ	楕円形	0.58 × 0.48	20	皿状	緩斜	自然	－	
76	Ｎ４ｅ1	Ｎ－９°－Ｗ	楕円形	0.68 × 0.53	18	皿状	外傾	自然	－	
97	Ｎ３ｇ0	－	円形	0.43 × 0.42	71	皿状	直立	自然	－	
98	Ｎ３ｊ0	－	円形	1.38 × 1.25	40	皿状	緩斜	自然	土師器８，須恵器５，縄文土器１	
101	Ｏ５ｉ1	－	[楕円形]	1.53 ×（1.06）	14	平坦	緩斜	－	土師器４，鉄塊系遺物 7.9 ｇ	本跡→ＳＸ ２，ＳＤ26
119	Ｏ４ｄ6	Ｎ－13°－Ｅ	楕円形	0.81 × 0.70	57	皿状	外傾	人為	－	
122	Ｏ４ｅ5	Ｎ－19°－Ｗ	楕円形	0.80 × 0.63	32	皿状	外傾	自然	土師器８，須恵器３	
123	Ｏ４ｅ5	Ｎ－14°－Ｗ	不整楕円形	1.51 × 0.79	31	平坦	外傾 ほぼ直立	自然	土師器６，須恵器５，剥片１	
124	Ｏ４ｇ5	－	円形	0.73 × 0.67	17	平坦	外傾	人為	土師器１，須恵器２	
125	Ｏ４ｄ5	Ｎ－28°－Ｗ	不整楕円形	0.65 × 0.53	26	平坦	外傾 ほぼ直立	自然	土師器１	
126	Ｏ４ｆ4	Ｎ－38°－Ｗ	楕円形	0.60 × 0.53	33	皿状	外傾 緩斜	自然	土師器５，須恵器４	
127	Ｏ４ｆ4	－	円形	0.48 × 0.47	21	平坦	外傾	自然	－	
128	Ｏ４ｈ3	Ｎ－１°－Ｗ	楕円形	0.79 × 0.65	30	平坦	外傾	自然	土師器 11，須恵器４	本跡→ＳＩ13 第 302 図
129	Ｏ４ｆ1	Ｎ－６°－Ｅ	不整楕円形	1.07 × 0.90	22 ～ 58	平坦	ほぼ直立 緩斜	人為	土師器 15，須恵器１，鉄滓 3.2 ｇ	ＳＫ130 →本跡 ＳＢ ８重複
130	Ｏ４ｆ1	－	[方形･楕円形]	0.37 ×（0.23）	18	平坦	緩斜	自然	土師器２	本跡→ＳＫ129 ＳＢ8 重複
131	Ｏ３ａ0	－	円形	0.44 × 0.40	13	皿状	緩斜 外傾	人為	土師器６	
132	Ｏ３ａ9	Ｎ－36°－Ｗ	不整楕円形	2.28 × 0.89	18	皿状	緩斜 外傾	人為	土師器６，須恵器６	
135	Ｏ３ｂ9	Ｎ－39°－Ｗ	方形	1.19 × 1.01	48	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器 11，須恵器５，鉄滓 4.8 ｇ	ＳＫ136 →本跡
136	Ｏ３ｂ9	Ｎ－74°－Ｗ	[方形]	(6.01) × 0.46	13	平坦	緩斜	人為	須恵器２	本跡→ＳＫ135
139	Ｏ４ｆ2	Ｎ－19°－Ｅ	[楕円形]	1.18 × [0.83]	50	凹凸	緩斜	人為	土師器８	ＳＩ 16 →本跡→ＳＫ138
141	Ｏ４ｅ2	－	円形	0.63 × 0.61	57	皿状	ほぼ直立	人為	－	本跡→ＳＩ14

表 203　奈良・平安時代の土坑一覧表（２）

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考（旧→新）
142	O 4 d3	N－14°－E	楕円形	1.23 × 0.75	18	凹凸	緩斜	人為	－	本跡→ SI14
143	O 4 f4	N－88°－E	［長方形］	0.64 ×（0.55）	16	平坦	緩斜	人為	土師器１	本跡→ SB ３-P4 第 302 図
144	O 3 d9	N－9°－W	楕円形	1.01 × 0.48	12	皿状	緩斜	自然	土師器２，金属製品１，瓦１	SI ７→本跡
145	O 4 c3	N－9°－W	楕円形	0.61 × 0.50	9	皿状	緩斜	人為	土師器６	
146	O 4 c5	N－75°－E	楕円形	0.30 × 0.26	52	皿状	直立	人為	－	
153	O 3 f9	N－72°－E	［楕円形］	0.86 ×（0.36）	32	平坦	外傾	人為	土師器 10	SK154 →本跡 SB ７重複
154	O 3 f9	N－25°－W	［楕円形］	0.67 ×（0.59）	17	平坦	緩斜	人為	土師器７，須恵器１	本跡→ SK153 SB ７重複
156	O 4 c6	－	不定形	0.78 × 0.77	44	皿状	直立 外傾	人為	土師器７，須恵器４	
161	O 3 g9	N－41°－E	楕円形	0.52 × 0.47	15	皿状	外傾	人為	－	
164	O 3 d8	－	円形	0.66 × 0.62	19	皿状	外傾 緩斜	自然	－	SI ７→本跡
178	O 3 h7	N－8°－E	楕円形	0.54 × 0.46	44	ほぼ直立	直立	自然	－	
179	O 3 h7	－	円形	0.36 × 0.35	37	外傾 ほぼ直立	直立	自然	－	
184	O 4 d2	N－53°－W	楕円形	0.77 × 0.62	17	平坦	外傾	自然	土師器２	本跡→ SI14
185	O 4 d1	－	円形	0.56 × 0.54	15	平坦	緩斜 外傾	自然	土師器２	
186	O 4 e1	－	円形	0.74 × 0.62	22	皿状	緩斜	自然	土師器２，須恵器１	
187	O 4 c2	－	円形	0.36 × 0.36	32	皿状	ほぼ直立	自然	－	
192	O 3 d0	－	円形	0.90 × 0.85	38	平坦	外傾	自然	土師器４	SI ６-P6 →本跡
193	O 4 g4	N－46°－W	楕円形	0.87 × 0.71	23	皿状	緩斜	－	－	本跡→ SI13　第 302 図
194	O 4 c1	－	円形	0.59 × 0.53	12	平坦	緩斜	自然	－	SB11 重複　第 249 図
196	O 3 d9	N－57°－E	楕円形	0.74 × 0.65	11	皿状	緩斜	自然	－	SB11 重複　第 249 図
197	O 3 d0	N－4°－E	楕円形	2.61 × 0.40	27	皿状	緩斜	自然	土師器１	SI ６→本跡→ SB11-P6
200	O 4 g1	N－86°－W	楕円形	0.62 × 0.47	13	皿状	外傾	自然	土師器２	本跡→ SI16　第 94 図
201	O 4 f2	N－12°－E	不定形	1.12 × 0.96	57	凹凸	外傾 ほぼ直立	自然	土師器 49，須恵器４	本跡→ SI16　第 94 図
202	O 4 g2	－	円形	0.48 × 0.47	15	皿状	緩斜 ほぼ直立	自然	－	本跡→ SI16
203	O 4 g2	－	円形	0.36 × 0.36	12	皿状	緩斜	自然	－	本跡→ SI16
204	O 4 d2	－	［楕円形］	0.83 ×（0.50）	21	皿状	緩斜 ほぼ直立	人為	土師器３，須恵器２	本跡→ SI14，SB11-P15
207	O 4 g4	N－81°－W	［楕円形］	1.00 ×（0.63）	10	平坦	外傾 緩斜	自然	－	SB ３範囲内 第 302 図
208	O 4 f4	N－10°－W	楕円形	1.14 × 1.03	34	平坦	外傾	自然	土師器３，須恵器３	SB ３範囲内 第 302 図
209	O 4 f4	N－84°－W	楕円形	0.63 × 0.42	13	平坦	外傾	人為	－	SB ３範囲内 第 302 図
210	O 4 g5	N－8°－E	長方形	1.02 × 0.85	35	凹凸	直立 ほぼ直立	人為	土師器５，須恵器４，椀状滓 61.1 g，鉄滓 85.7 g	第 302 図
211	O 4 g5	－	方形	0.78 × 0.71	20・23	凹凸	外傾 ほぼ直立	人為	土師器３	第 302 図
212	O 4 f5	N－2°－E	不定形	1.00 × 0.49	12・23	凹凸	外傾	自然	土師器２，須恵器１，陶器１，鉄塊系遺物 14.3 g	SB3 範囲内 第 302 図
217	N 2 i7	－	円形	0.40 × 0.37	55	皿状	直立 ほぼ直立	－	－	
218	N 2 i9	N－57°－E	楕円形	0.48 × 0.35	48	皿状	ほぼ直立	自然	－	
221	N 2 f7	N－9°－W	楕円形	0.44 × 0.36	29	皿状	外傾	自然	－	第 148 図
222	N 3 g4	－	円形	［0.89］× 0.82	35	平坦	外傾	自然	土師器１，須恵器２	本跡→ SI22
223	N 3 g3	－	円形	0.41 × 0.39	51	皿状	ほぼ直立	人為	土師器２	SI22 重複
226	O 4 d4	N－84°－E	楕円形	0.46 × 0.39	28	皿状	外傾 ほぼ直立	自然	－	SI14・15 重複
228	O 3 i1	N－67°－W	［長方形］	0.43 ×（0.23）	73	皿状	ほぼ直立		－	SI42 →本跡
230	N 3 f2	－	円形	0.48 × 0.47	48	皿状	直立	人為	土師器８，須恵器１	SX ３重複
232	N 2 g9	N－16°－W	［楕円形］	0.71 ×（0.67）	20	平坦	外傾	自然	須恵器１	本跡→ SI25-P3
240	O 3 f1	N－21°－E	楕円形	0.65 × 0.58	37	皿状	外傾	自然	－	本跡→ SI47
241	O 3 e1	－	円形	0.58 × 0.58	40	皿状	外傾	人為	－	本跡→ SI47
243	O 3 b2	N－65°－W	楕円形	0.47 × 0.42	14	皿状	外傾	自然	－	
244	N 2 f9	N－28°－W	楕円形	0.96 × 0.58	28	皿状	緩斜	自然	－	
252	N 2 f0	N－39°－W	楕円形	0.50 × 0.45	82	平坦	ほぼ直立	人為	土師器５，須恵器３	SB ９重複
283	P 4 h5	N－19°－E	楕円形	0.44 × 0.39	53	皿状	ほぼ直立	自然	土師器６	
287	P 3 e0	N－20°－W	［楕円形］	（0.86）×（0.72）	45	皿状	外傾	人為	土師器５，須恵器１，椀状滓 1804.6 g 鉄塊系遺物 14.8 g，鉄滓 91.8 g	SI61 →本跡
290	P 3 f7	－	円形	0.88 × 0.84	54	皿状	ほぼ直立 外傾	人為	土師器 21，須恵器２	SI57 →本跡
291	P 3 e0	N－12°－E	楕円形	1.30 × 0.76	28	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器 13，須恵器２，羽口１	SI61 →本跡
306	P 3 f9	N－16°－E	楕円形	0.43 × 0.35	25	皿状	外傾	自然	－	
309	P 3 e9	N－84°－W	［楕円形］	0.56 ×［0.48］	27	平坦	外傾	人為	－	

表 204　奈良・平安時代の土坑一覧表（３）

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）		壁面	覆土	主な出土遺物	備考（旧→新）
310	Ｐ４ｄ3	Ｎ－４°－Ｗ	楕円形	0.69 × 0.57	35	皿状	緩斜	自然	土師器５，須恵器１，鉄滓 4.5 ｇ	
311	Ｐ４ｆ7	－	円形	0.55 × 0.52	45	平坦	直立ほぼ直立	自然	－	
312	Ｐ４ｄ3	Ｎ－13°－Ｗ	楕円形	0.78 × 0.60	34	皿状	外傾	自然	－	
313	Ｐ４ｃ8	－	円形	0.46 × 0.43	47	皿状	直立	人為	－	
314	Ｐ４ｃ8	－	円形	0.51 × 0.48	52	皿状	直立	自然	－	
316	Ｐ４ｂ3	－	円形	1.18 × 1.15	43	平坦	外傾	人為	土師器 13	
317	Ｐ４ｂ3	－	円形	0.44 × 0.43	31	皿状	外傾	自然	土師器３，須恵器３	
318	Ｐ４ｃ3	－	円形	0.56 × 0.55	51	平坦	ほぼ直立	自然	－	
319	Ｐ４ｃ3	Ｎ－54°－Ｗ	楕円形	0.72 × 0.64	52	皿状	ほぼ直立	自然	土師器４，須恵器３	
322	Ｐ４ｅ7	Ｎ－20°－Ｗ	楕円形	0.94 × 0.75	60	皿状	ほぼ直立外傾	自然	土師器５	
323	Ｐ４ｂ4	－	円形	0.57 × 0.56	70	平坦	直立	自然	－	
324	Ｐ３ｅ7	－	円形	1.12 × 1.05	32	平坦	外傾	自然	土師器 20，須恵器１，椀状滓 72.8 ｇ，鉄塊系遺物 35.3 ｇ	
328	Ｐ３ｇ8	Ｎ－58°－Ｅ	楕円形	1.00 × 0.78	47	凹凸	ほぼ直立外傾	自然	土師器１	
329	Ｐ４ｇ7	Ｎ－19°－Ｅ	楕円形	0.41 × 0.33	30	皿状	直立	自然	－	
333	Ｐ４ｅ6	Ｎ－46°－Ｅ	楕円形	0.90 × 0.69	28	皿状	外傾	人為	－	
334	Ｐ４ｅ7	Ｎ－28°－Ｅ	楕円形	0.55 × 0.49	30	皿状	外傾	自然	－	
338	Ｏ３ｊ7	－	円形	1.28 × 1.21	14	平坦	外傾	人為	土師器６	本跡→ SF ６
345	Ｏ３ｊ8	－	［円形］	(0.72) × 0.72	37	皿状	緩斜外傾	－	土師器３，須恵器４	SB13-P12 重複
351	Ｏ４ｊ3	－	円形	1.10 × 1.03	25	平坦	緩斜	自然	土師器 10，須恵器２	SI76 →本跡
353	Ｐ３ｃ8	Ｎ－３°－Ｅ	［楕円形］	[1.12 × 0.81]	36	平坦	外傾	人為	土師器 14，須恵器３	本跡→ SB16-P5 第 96 図
357	Ｐ４ａ3	Ｎ－11°－Ｅ	楕円形	0.70 × 0.53	7	平坦	緩斜	人為	－	SI72 →本跡→ SI73
370	Ｐ４ｆ8	Ｎ－73°－Ｅ	楕円形	0.45 × 0.34	25	平坦	ほぼ直立	人為	須恵器１	SI85 重複
371	Ｐ４ｆ8	Ｎ－２°－Ｅ	楕円形	0.35 × 0.26	53	平坦	ほぼ直立	人為	土師器１	SI85 重複
372	Ｏ４ｉ3	Ｎ－56°－Ｅ	楕円形	0.75 × 0.60	17	皿状	緩斜	人為	土師器３，須恵器１	
373	Ｏ４ｉ3	－	円形	0.96 × 0.96	20	皿状	外傾	人為	土師器２	
380	Ｏ３ｊ0	Ｎ－87°－Ｗ	楕円形	1.36 × 0.88	68	皿状	緩斜	人為	土師器 13，須恵器２	本跡→ SI74・SF ６ SK381 重複
381	Ｏ３ｊ0	Ｎ－11°－Ｅ	不整楕円形	2.24 × 1.02	77	皿状	外傾緩斜	－	土師器７，須恵器２，金属製品１	本跡→ SI74・SF ６ SK380 重複
386	Ｐ３ｄ8	－	円形	0.47 × 0.45	53	平坦	ほぼ直立	人為	－	
387	Ｐ３ｄ9	－	円形	0.52 × 0.50	35	平坦	ほぼ直立	人為	土師器１	
388	Ｐ３ｃ9	Ｎ－57°－Ｅ	楕円形	0.86 × 0.71	22	平坦	外傾緩斜	人為	土師器８	
389	Ｐ３ｃ9	－	円形	0.41 × 0.39	23	平坦	外傾	人為	－	SK390 →本跡
390	Ｐ３ｃ9	Ｎ－46°－Ｅ	楕円形	0.62 × 0.48	13	平坦	緩斜	人為	土師器３	本跡→ SK389
391	Ｐ３ｃ9	－	円形	0.51 × 0.48	33	皿状	ほぼ直立	人為	－	SB15 重複
395	Ｐ４ｇ8	－	円形	0.43 × 0.46	62	皿状	ほぼ直立	人為	須恵器１	
397	Ｏ３ｊ8	Ｎ－83°－Ｗ	楕円形	0.77 × 0.64	31	皿状	外傾	人為	－	本跡→ SF ６ SB13 重複
399	Ｐ３ｃ9	－	［円形］	(0.75) × 0.75	49	平坦	ほぼ直立	人為	椀状滓 28.4 ｇ，鉄滓 17.6 ｇ	SB15 →本跡→ SB14 P10，SB16-P3
402	Ｐ３ｃ8	Ｎ－77°－Ｗ	楕円形	0.69 × 0.57	35	平坦	直立	人為	土師器１，椀状滓 14.0 ｇ，縄文土器１	SB16，SK405 重複
404	Ｐ３ｂ8	Ｎ－52°－Ｗ	楕円形	0.70 ×[0.55]	39	皿状	外傾	－	－	SK400・SB16 重複 第 96 図
405	Ｐ３ｂ8	Ｎ－73°－Ｗ	不整楕円形	0.95 ×(0.63)	44	平坦	直立	人為	土師器１	SB16，SK402 重複
407	Ｐ３ｂ8	Ｎ－12°－Ｗ	［楕円形］	[0.80 × 0.69]	60	平坦	直立	人為	土師器 11，須恵器１	本跡→ SI81
410	Ｐ３ｃ8	Ｎ－32°－Ｅ	楕円形	0.48 × 0.41	58	平坦	直立	人為	土師器４，須恵器２	SI77 重複
415	Ｎ２ｅ7	Ｎ－５°－Ｗ	楕円形	0.62 × 0.45	28	平坦	外傾	人為	土師器４，須恵器１	
416	Ｎ２ｅ8	－	円形	0.35 × 0.35	32	皿状	外傾	人為	－	
417	Ｎ２ａ9	－	円形	0.65 × 0.64	37	凹凸	外傾	自然	土師器３	
418	Ｎ２ａ0	－	円形	0.54 × 0.54	29	平坦	直立	自然	土師器１	
419	Ｎ２ａ0	－	円形	0.40 × 0.39	13	平坦	緩斜	自然	－	
420	Ｎ２ｃ8	Ｎ－18°－Ｅ	［楕円形］	(0.35) × (0.25)	34	平坦	直立	人為	土師器３	本跡→ SI90
421	Ｍ３ｉ2	Ｎ－２°－Ｗ	楕円形	1.85 × 1.27	10	皿状	緩斜	自然	－	
425	Ｎ２ｄ0	Ｎ－26°－Ｗ	不整楕円形	0.93 × 0.80	14	平坦	緩斜	自然	土師器２，須恵器１，金属製品１	
426	Ｍ３ｉ5	－	円形	0.33 × 0.32	30	皿状	直立	自然	－	
427	Ｍ３ｉ4	－	円形	0.48 × 0.44	60	皿状	直立	自然	鉄塊系遺物 11.8 ｇ	
428	Ｍ３ｉ4	Ｎ－18°－Ｅ	楕円形	0.40 × 0.35	20	皿状	外傾	人為	－	
430	Ｎ３ｂ8	Ｎ－51°－Ｅ	不整楕円形	1.53 × 0.93	13	皿状	緩斜	自然	土師器５，須恵器１，鉄滓 12.7 ｇ	
433	Ｎ３ａ8	Ｎ－82°－Ｅ	不整楕円形	0.87 × 0.57	41	皿状	外傾直立	自然	土師器３，鉄塊系遺物 21.2 ｇ	

表 205　奈良・平安時代の土坑一覧表（４）

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）		壁面	覆土	主な出土遺物	備考（旧→新）
434	Ｎ３ b9	－	円形	0.96 × 0.92	30	皿状	緩斜	自然	土師器８，須恵器２，羽口３	
435	Ｎ３ b8	Ｎ－60°－Ｅ	楕円形	0.47 × 0.31	25	皿状	外傾	自然	－	
436	Ｎ３ b8	Ｎ－47°－Ｗ	楕円形	0.28 × 0.20	27	皿状	外傾	自然	土師器４	
437	Ｎ３ b8	Ｎ－67°－Ｅ	楕円形	0.51 × 0.39	42	皿状	直立	自然	土師器８，須恵器２，土師質１，鉄塊系遺物 36.6 ｇ	
438	Ｎ２ b7	－	円形	0.49 × 0.45	20	皿状	外傾	自然	土師器１	
439	Ｎ２ a7	Ｎ－79°－Ｗ	楕円形	0.50 × 0.42	28	平坦	ほぼ直立	自然	土師器１，須恵器１	
440	Ｎ２ a7	－	円形	0.50 × 0.48	59	皿状	ほぼ直立	人為	土師器１	
441	Ｎ２ b8	－	円形	0.80 × 0.79	14	皿状	緩斜	人為	土師器１	
442	Ｎ２ b8	Ｎ－16°－Ｗ	楕円形	0.88 × 0.78	16	皿状	緩斜	自然	土師器５	
443	Ｎ２ b7	Ｎ－６°－Ｅ	楕円形	0.60 × 0.51	42	皿状	ほぼ直立	自然	土師器５，須恵器２	
444	Ｎ２ b7	Ｎ－82°－Ｗ	楕円形	0.84 × 0.57	57	凹凸	直立	自然	土師器１	
445	Ｎ２ b7	Ｎ－９°－Ｗ	楕円形	0.42 × 0.37	9	皿状	緩斜	自然	－	
446	Ｎ２ b7	Ｎ－12°－Ｗ	楕円形	0.46 × 0.40	20	皿状	外傾	自然	－	
448	Ｎ２ b7	－	円形	0.62 × 0.58	13	皿状	緩斜	自然	－	
449	Ｎ２ b8	Ｎ－70°－Ｅ	楕円形	0.38 × 0.25	35	皿状	ほぼ直立	人為	－	
450	Ｎ２ b8	Ｎ－69°－Ｅ	楕円形	0.33 × 0.27	25	皿状	ほぼ直立	自然	－	
451	Ｎ２ b8	Ｎ－14°－Ｗ	楕円形	0.30 × 0.25	41	皿状	直立	人為	土師器２	
452	Ｎ２ a8	－	円形	0.63 × 0.62	37	平坦	直立	人為	土師器１，灰釉陶器１	
454	Ｎ２ b8	Ｎ－58°－Ｅ	楕円形	0.29 × 0.20	26	皿状	直立	自然	須恵器１	第 93 図
455	Ｎ３ b8	Ｎ－22°－Ｗ	［楕円形］	0.90 ×（0.30）	22	平坦	外傾	自然	土師器３，鉄塊系遺物 5.5 ｇ，縄文土器２	SK456 →本跡 第６図
472	Ｐ４ e0	－	円形	0.73 × 0.67	48	凹凸	外傾	人為	土師器２	SI83 重複　第 289 図
475	Ｐ５ f1	Ｎ－76°－Ｅ	楕円形	0.51 × 0.39	23	皿状	緩斜	人為	－	SI83 重複　第 289 図
476	Ｐ５ e1	－	円形	0.47 × 0.46	12	平坦	緩斜	－	－	SI83 重複　第 289 図
477	Ｐ５ e1	Ｎ－34°－Ｅ	楕円形	0.65 × 0.57	18	平坦	皿状	人為	－	SI83 重複　第 289 図
479	Ｐ４ f0	Ｎ－64°－Ｅ	楕円形	0.65 × 0.48	27	平坦	外傾	人為	土師器１，金属製品１	SI83 重複　第 289 図
480	Ｐ５ e1	Ｎ－32°－Ｅ	楕円形	0.42 × 0.36	17	皿状	外傾	人為	－	SI83 重複　第 289 図
499	Ｎ２ e6	－	不定形	0.89 ×（0.83）	11	凹凸	外傾	人為	－	本跡→ SI40
501	Ｎ３ b4	－	円形	0.78 × 0.72	33	皿状	外傾	人為	土師器５，須恵器１	SI106 →本跡 第 234 図
519	Ｎ３ b2	Ｎ－６°－Ｗ	［長方形］	（1.50）× 0.90	13	平坦	外傾	人為	土師器４，須恵器２	SI108 重複
588	Ｎ３ a2	Ｎ－４°－Ｗ	長方形	1.18 × 0.79	13	平坦	外傾	人為	－	

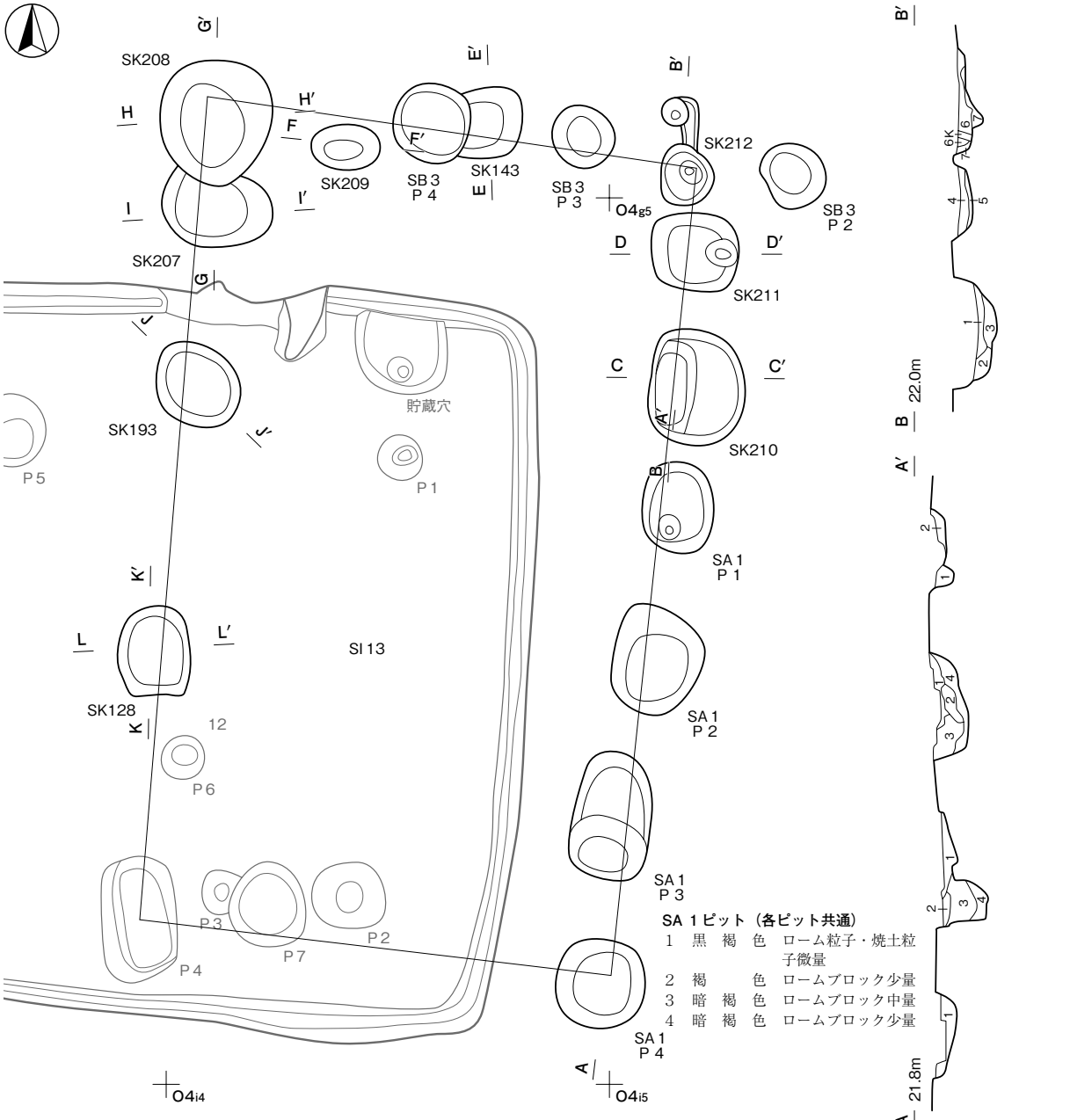
(7)　柱穴列

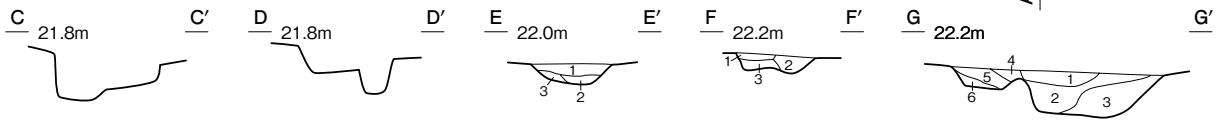
当期の柱穴列は４か所を確認した。ただし，当遺跡は多時期が複合する遺跡であることから，遺物が混在した状態で出土するものが多く，また全てにおいて時期判断が可能な遺物が出土しているわけでもないため，遺物のみからの時期判断は困難である。また同一面での確認のため，確認面での判断も不可能である。よって，遺構の位置や重複関係などから時期判断を行った。

第１号柱穴列（第 302・303 図）

位置　中央部のＯ４g4 ～ h5 区，標高 22 ｍの台地平坦部に位置している。

規模と形状　第 13 号竪穴建物跡の東部に，列状に並ぶピット４か所が確認でき，これを第１号柱穴列とした。本跡の北側にも，同じような規模と形状の第 210・211・212 号土坑が，同軸上に位置している。またこれと並列するように，第 128・193・207・208 号土坑と，第 13 号竪穴建物跡のＰ４が位置している。北側では第３号掘立柱建物跡と重複する第 143 号土坑が，第 208 号土坑と第 212 号土坑のほぼ中間に位置している。柱間寸法に幅があり，南妻側の柱穴が確認できなかったこと，柱穴とするにはやや浅いこと，柱痕や柱の当たりなども確認できなかったことから掘立柱建物跡として扱わなかったが，形状から３×２間の側柱建物跡を想定することも可能である。その場合の主軸方向はＮ－９°－Ｅで，隣接する第６・12 号掘立柱建物跡とほぼ同軸となる。

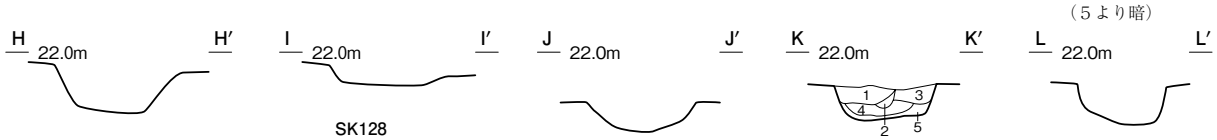




SK210・211・212
1 黒 褐 色 ローム粒子少量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量
3 褐 色 ロームブロック中量
4 暗 褐 色 ロームブロック中量
5 褐 色 ロームブロック中量
6 暗 褐 色 ローム粒子微量
7 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK143
1 黒 褐 色 ローム粒子少量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量
3 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK207 ～ 209
1 黒 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量
3 暗 褐 色 ロームブロック少量
4 暗 褐 色 ロームブロック少量
5 暗 褐 色 ロームブロック中量
6 暗 褐 色 ロームブロック中量（5より暗）



SK128
1 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
3 暗 褐 色 ローム粒子微量
4 黒 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
5 褐 色 ロームブロック中量

0 (1:60) 2m

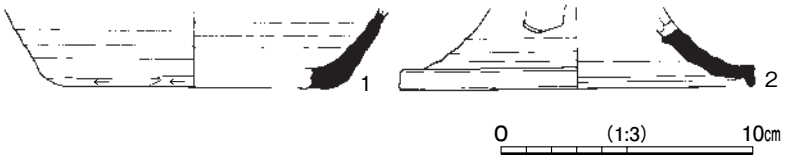
第 302 図　第 1 号柱穴列，第 128・143・207 ～ 212 号土坑実測図

規模は桁行 7.6 m，梁行 4.6 mで，面積は 34.96㎡である。

柱穴　第１号柱穴列に帰属するものは４か所。長径 81 ～ 114cm，短径 64 ～ 80cm の円形または楕円形で，深さは 26 ～ 47cm である。いずれも抜き取り後の堆積土である。これ以外の土坑も規模や形状，深さが類似している。

遺物出土状況　ピット内から土師器片 29 点（坏３，椀２，高坏１，壺･甕類 23），須恵器片７点（坏２，蓋３，高盤１，鉢・甕類１），鍛冶関連遺物（鉄塊系遺物 25.6 ｇ，鉄滓 34.7 ｇ）が出土している。１はＰ３の覆土中から，２はＰ２とＰ４の覆土中から出土した破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から８世紀前葉に比定できる。



第 303 図　第１号柱穴列出土遺物実測図

表 206　第１号柱穴列出土遺物観察表（第 303 図）

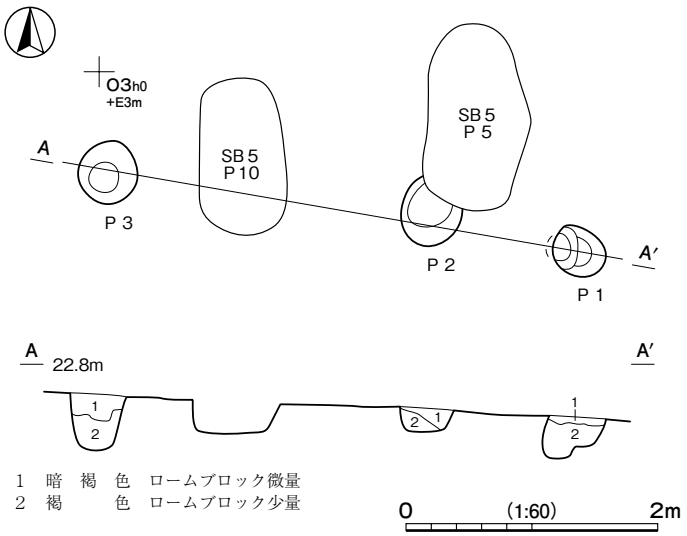
番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	須恵器	坏	－	(3.2)	[10.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部一方向のヘラ削り　酸化焔焼成	Ｐ３	30％新治窯
2	須恵器	高盤	－	(3.2)	[14.0]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	ロクロナデ	Ｐ２・Ｐ４	30％新治窯

第２号柱穴列（第 304 図）

位置　中央部のＯ３h0 区，標高 23 mの台地平坦部に位置している。

重複関係　Ｐ２が第５号掘立柱建物跡のＰ５と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　第５号掘立柱建物跡の範囲内に，小形のピットが並列している様子が確認できた。第５号掘立柱建物跡とは軸方向がやや異なり，またこれらと組み合うようなピットが確認できなかったことから，柱穴列とした。Ｐ１からＰ３までの距離は 3.78 mで，主軸方向はＮ－ 81° －Ｗである。柱間寸法は，Ｐ１－Ｐ２間が 1.3 m，Ｐ２－Ｐ３間が 2.6 mである。



第 304 図　第２号柱穴列実測図

柱穴　３か所。長径 44 ～ 49cm，短径 36 ～ 49cm の円形または楕円形で，深さは 20 ～ 44cm である。いずれも抜き取り後の堆積である。

遺物出土状況　Ｐ３の覆土中から，鉄塊系遺物 5.2 ｇが出土している。

所見　遺物が出土していないことから，時期の判断が困難である。出土位置や，主軸方向が第６・12 号掘立柱建物跡とほぼ同じであることなどから，８～９世紀代の建物跡の一部と考えられる。

第５号柱穴列（第 305 図　PL29）

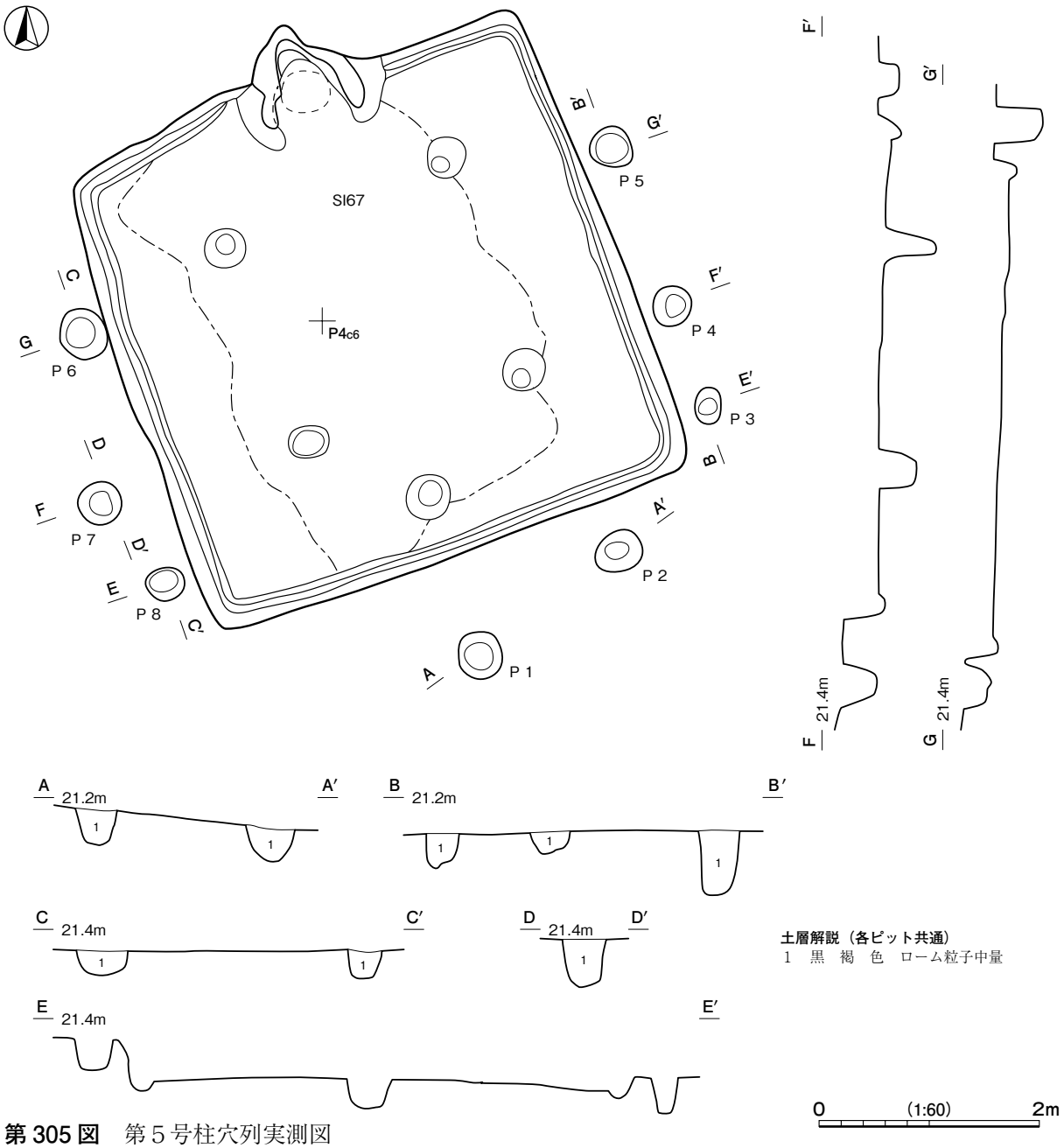
位置　南部のＰ４b5 ～Ｐ４c6 区，標高 21 ｍの台地斜面部に位置している。

重複関係　第 67 号竪穴建物跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　小形のピット８か所が第 67 号竪穴建物跡の周囲を巡るように位置している。柱間寸法は，Ｐ１－Ｐ２間が 1.6 ｍ，Ｐ２－Ｐ３間が 1.55 ｍ，Ｐ３－Ｐ４間が 0.96 ｍ，Ｐ４－Ｐ５間が 1.54 ｍ，Ｐ６－Ｐ７間が 1.54 ｍ，Ｐ７－Ｐ８間が 0.95 ｍで，規則性はない。

柱穴　８か所。長径 33 ～ 47cm，短径 25 ～ 43cm の円形または楕円形で，深さは 18 ～ 44cm である。いずれも抜き取り後の堆積である。

所見　遺物が出土していないことから，時期の判断が困難である。第 67 号竪穴建物跡との位置関係などから，第 67 号建物跡の上屋構造の一部，例えば垂木穴の可能性もあるが，断定はできない。とりあえずここで扱っておくが，第 67 号竪穴建物跡の一部とすると，６世紀後葉に遡る可能性がある。



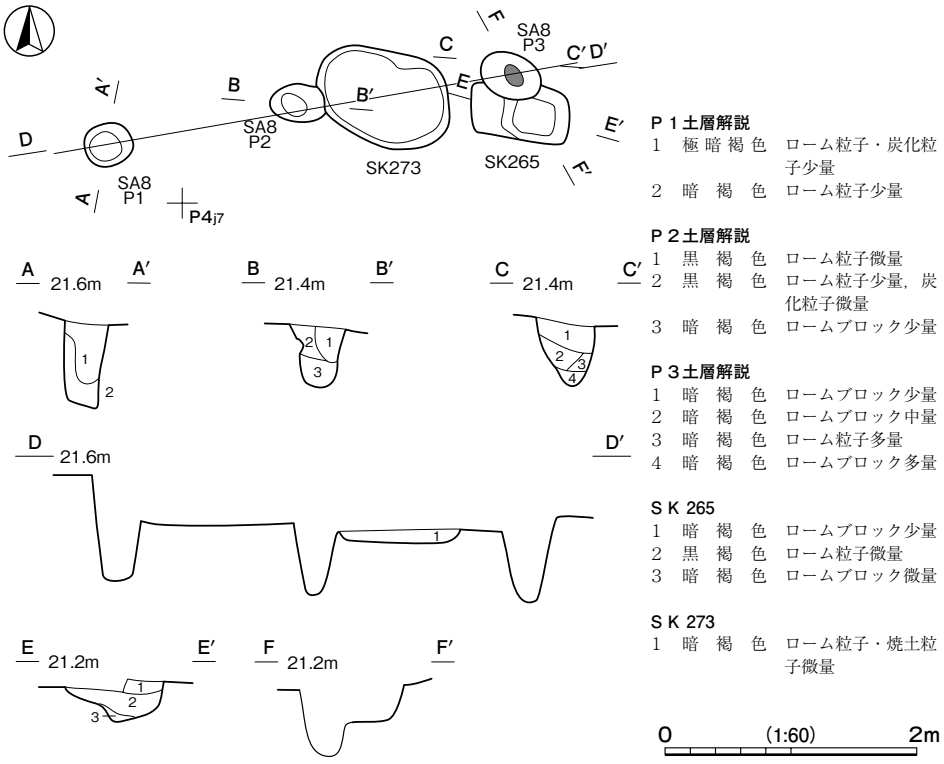
第 305 図　第５号柱穴列実測図

第８号柱穴列（第 306 図）

位置　南部のＰ４i7 区，標高 21 ｍの台地斜面部に位置している。

重複関係　第 56 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。Ｐ２が第 273 号土坑と隣接し，Ｐ３が第 265 号土坑と重複しているが，いずれも新旧関係は不明である。

規模と形状　小形のピットが並列し，これらと組み合うピットが確認できなかったことから柱穴列とした。軸方向はＮ－ 82°－Ｅで，柱間寸法はＰ１－Ｐ２間が 1.55 ｍ，Ｐ２－Ｐ３間が 1.70 ｍである。



第 306 図　第８号柱穴列，第 265・273 号土坑実測図

柱穴　３か所。長径 38 ～ 51cm，短径 29 ～ 36cm の円形または楕円形で，深さは 50 ～ 71cm である。Ｐ１とＰ２には柱痕が残り，Ｐ３の底面では柱の当たりが確認できた。Ｐ３は抜き取り後の堆積である。

所見　遺物が出土していないことから，時期の判断が困難である。第 14 ～ 16 号掘立柱建物跡と軸方向がほぼ同じであると推定されることから，当期の建物跡の一部と考えたい。

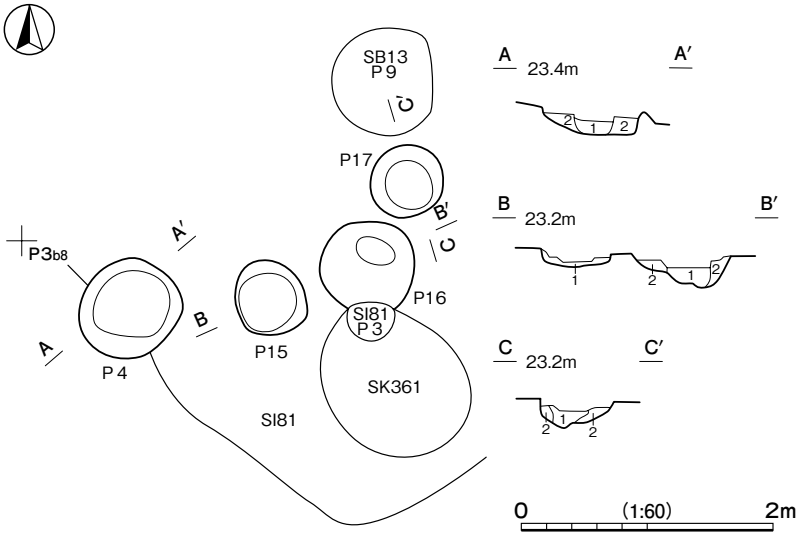
表 207　奈良・平安時代の柱穴列一覧表

番号	位置	主軸方向	長さ（m）	柱間（m）	柱穴					主な出土遺物	備考（旧→新）
					柱穴本数	平面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）		
1	Ｏ４g4	Ｎ－９°－Ｅ	4.35	1.4 ～ 1.5	4	円・楕円形	81 ～ 114	64 ～ 80	26 ～ 47	土師器 29，須恵器７，鉄塊系遺物 25.6 ｇ，鉄滓 34.7 ｇ	８世紀前葉ヵ
2	Ｏ３h0	Ｎ－81°－Ｗ	3.78	1.3 ～ 2.6	3	円・楕円形	44 ～ 49	36 ～ 49	20 ～ 44	土師器８，須恵器２，鉄塊系遺物 5.2 ｇ	SB5-P5 と重複
5	Ｐ４b5	－	6.0 × 4.0	0.95 ～ 1.6	8	円・楕円形	33 ～ 47	25 ～ 43	18 ～ 44	土師器１	SI67 重複
8	Ｐ４i6	Ｎ－82°－Ｅ	3.25	1.55 ～ 1.70	3	円・楕円形	38 ～ 51	29 ～ 36	50 ～ 71	－	SI56 →本跡　SK273・265 重複

(8)　ピット群

当期のピット群は２か所を確認した。ただし，当遺跡は多時期が複合する遺跡であることから，遺物が混在した状態で出土するものが多く，また全てにおいて時期判断が可能な遺物が出土しているわけでもないため，遺物のみからの時期判断は困難である。また同一面での確認のため，確認面での判断も不可能である。よって，後代に下がる可能性もあるが，遺構の位置や重複関係などから，当代で扱うこととする。以下に図と計測表を提示する。第７号ピット群からは，土師器片 54 点（坏１，高坏７，甕類 43，不明３），須恵器片７点（坏４，蓋２，鉢・甕類１点），鍛冶関連遺物（椀状滓 64.6 ｇ，鉄塊系遺物 68.1 ｇ，鉄滓 127.3 ｇ）が出土している。

第７号ピット群（第 307・308 図）

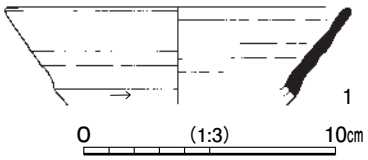


Ｐ４土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック多量

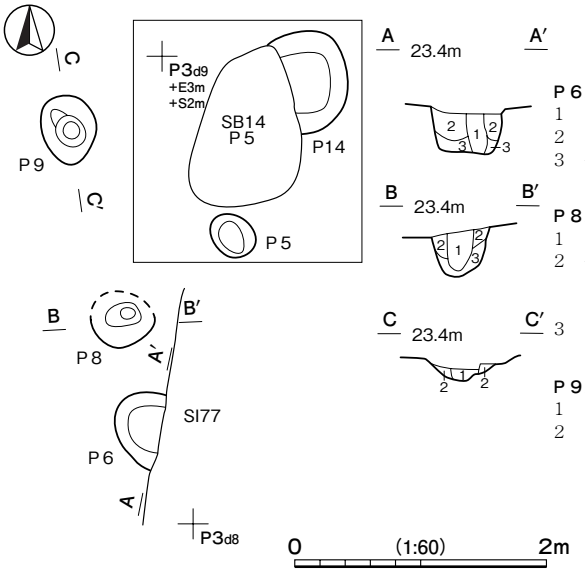
Ｐ 15 土層解説
1　褐　　色　ロームブロック多量，炭化物少量，焼土粒子微量

Ｐ 16 土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

Ｐ 17 土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　明　褐　色　ロームブロック多量



第 308 図　第７号ピット群出土遺物実測図



Ｐ６土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック多量
2　明　褐　色　ロームブロック多量
3　褐　　色　ロームブロック多量

Ｐ８土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　明　褐　色　ロームブロック多量

Ｐ９土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量
2　明　褐　色　ロームブロック多量

表 208　第７号ピット群ピット一覧表

番号	位置	形状	規模 長軸×短軸（m）	深さ（cm）
4	Ｐ３b8	円　形	0.8 × 0.75	16
5	Ｐ３d9	楕円形	0.39 × 0.32	16
6	Ｐ３c7	［円形］	(0.38) × 0.59	31
8	Ｐ３c7	［円形］	0.50 × ［0.45］	38
9	Ｐ３c7	楕円形	0.55 × 0.43	15
14	Ｐ３d9	長方形	0.80 × (0.46)	24
15	Ｐ３b8	楕円形	0.62 × 0.55	12
16	Ｐ３b8	円　形	0.77 × 0.75	24
17	Ｐ３a8	円　形	0.60 × 0.58	19

第 307 図　第７号ピット群実測図

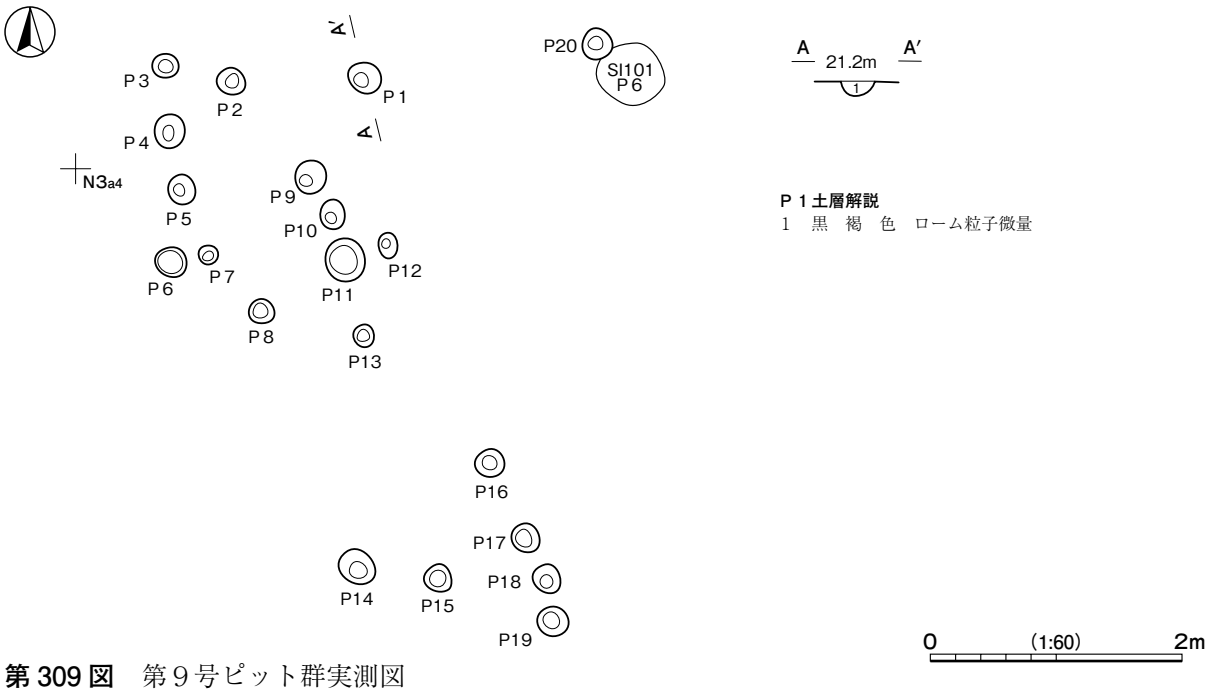
表 209　第７号ピット群出土遺物観察表（第 308 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	［13.6］	(3.2)	－	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り	Ｐ４	10% 新治窯

第９号ピット群（第 309 図）

表 210　第９号ピット群ピット一覧表

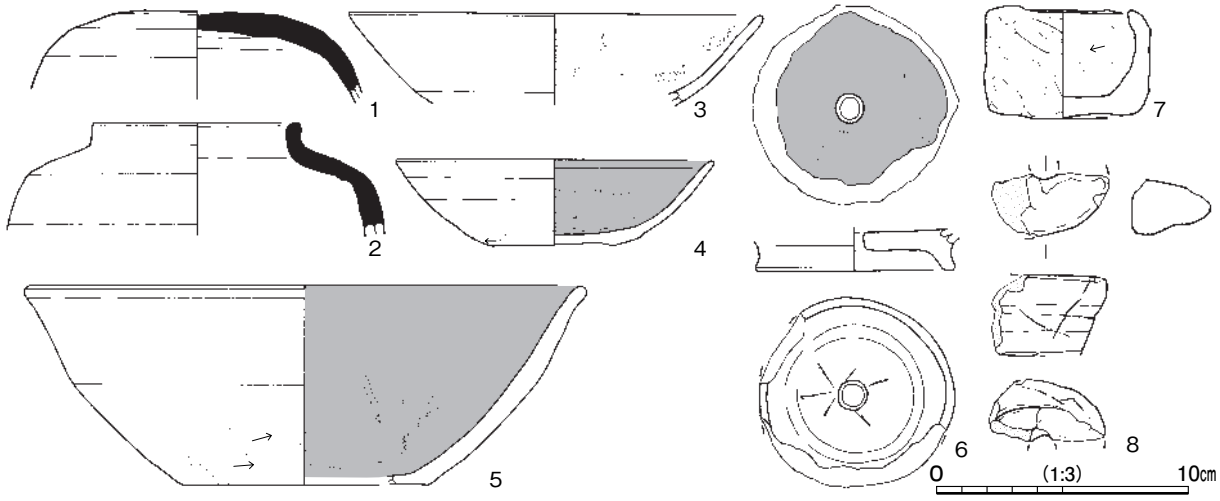
番号	位置	形状	規模 長軸×短軸（m）	深さ（cm）
1	Ｍ３j4	円　形	0.25 × 025	11
2	Ｍ３j4	円　形	0.23 × 0.22	12
3	Ｍ３j4	円　形	0.21 × 0.20	6
4	Ｍ３j4	楕円形	0.26 × 0.23	22
5	Ｎ３a4	円　形	0.23 × 0.22	21
6	Ｎ３a4	円　形	0.24 × 0.23	4
7	Ｎ３a4	円　形	0.17 × 0.16	7
8	Ｎ３a4	円　形	0.20 × 0.19	11
9	Ｎ３a4	円　形	0.26 × 0.24	24
10	Ｎ３a4	円　形	0.23 × 0.21	10
11	Ｎ３a4	楕円形	0.35 × 0.31	7
12	Ｎ３a4	楕円形	0.20 × 0.16	16
13	Ｎ３a4	円　形	0.17 × 0.17	11
14	Ｎ３a4	楕円形	0.30 × 0.26	2
15	Ｎ３a4	円　形	0.25 × 0.23	4
16	Ｎ３a4	円　形	0.24 × 0.22	15
17	Ｎ３a4	円　形	0.24 × 0.23	5
18	Ｎ３a4	円　形	0.23 × 0.22	6
19	Ｎ３a4	円　形	0.24 × 0.23	9
20	Ｍ３j5	円　形	0.26 × 0.25	12



第 309 図　第９号ピット群実測図

(9) 遺構外出土遺物

当期の遺構外から出土した遺物について，実測図と観察表で提示する（一部古墳時代の遺物を含む）。

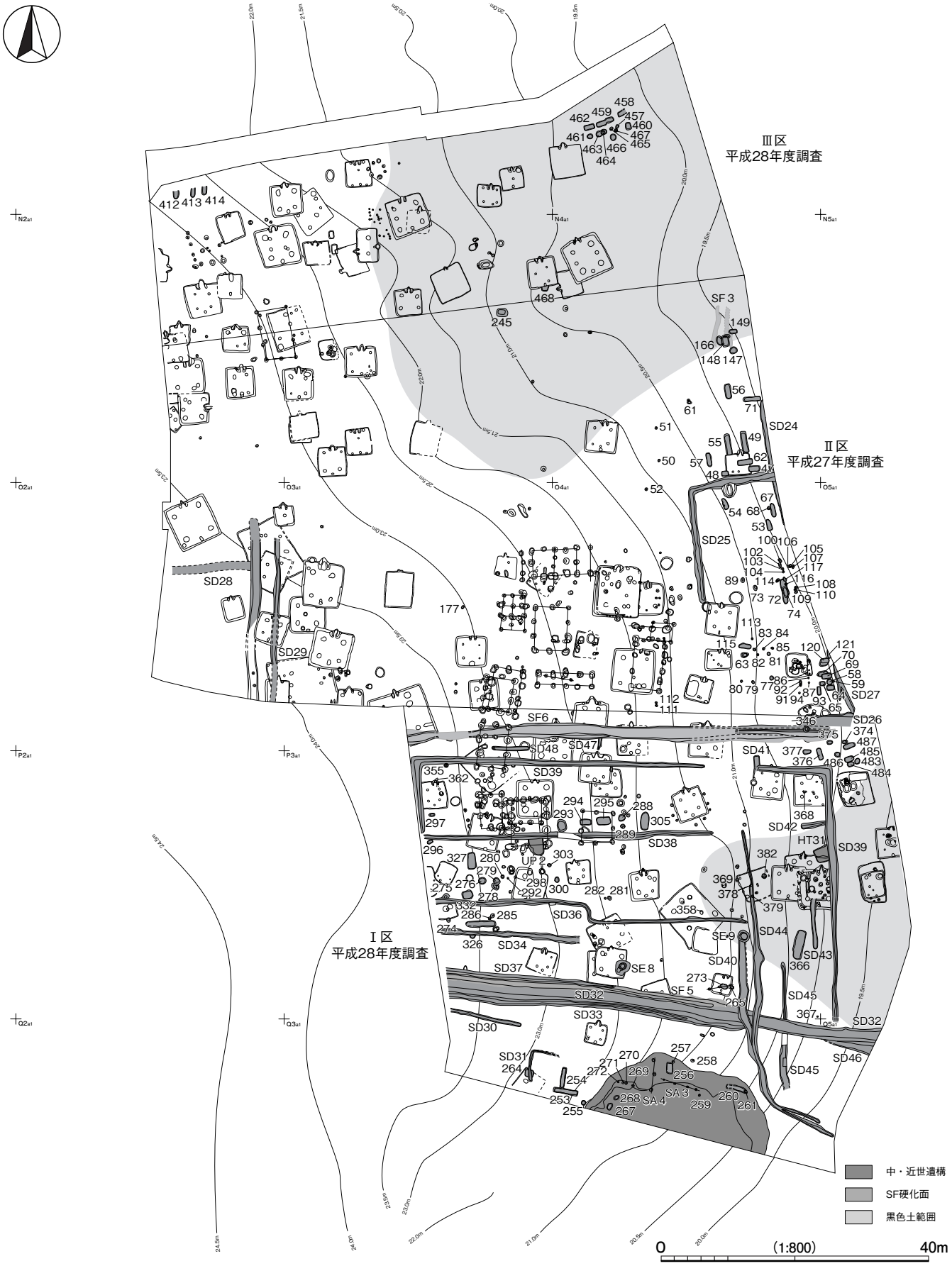


第 310 図　遺構外出土遺物実測図

表 211　奈良・平安時代の遺構外出土遺物観察表（第 310 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
1	須恵器	蓋	−	(3.4)	−	長石・石英・赤色粒子	黄灰	良好	天井部回転ヘラ削り　ツマミ欠損	表土	30% 非在地産
2	須恵器	短頸壺	[8.2]	(4.4)	−	長石・石英・雲母	褐灰	普通	ロクロナデ	表土	５% 非在地？
3	土師器	坏	[16.1]	(3.6)	−	長石・石英	にぶい褐	普通	ロクロナデ　内面ヘラ磨き	表土	20%
4	土師器	坏	[12.4]	3.4	[4.6]	長石・石英	にぶい黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り　内面磨き　黒色処理　底部一方向のヘラ削り	表土	40%
5	土師器	椀	[21.7]	7.9	9.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　内面磨き　黒色処理　底部一方向のヘラ削り	表土	20%
6	土師器	紡錘車転用	−	(1.7)	7.6	長石・石英	にぶい黄褐	普通	高台付坏の高台部を転用　内面ヘラ磨き　黒色処理 底部回転糸切り後高台貼付　刻書	表土	20%
7	土師器	手捏ね	5.5	4.5	5.5	長石・石英	明赤褐	普通	外面指頭ナデ　一部磨き状　内面ヘラ削り　底部ナデ	表土	100%

番号	器 種	最小径	最大径	厚さ	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
8	紡錘車	(3.3)	(4.5)	3.1	31.21	長石・石英	にぶい橙	側面が凹線状にくぼむ　刻書あり	表土	



第 311 図　室町・江戸時代の遺構配置図（S = 1 ：800）

4　室町・江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，方形竪穴遺構１基，地下式坑１基，井戸跡２基，墓坑３基，土坑 141 基，段切状遺構１か所，溝跡 25 条，道路跡３条，柱穴列２か所を確認した。溝や土坑に関しては，遺物が出土しておらず，時期が明確にできない遺構が多数あるが，地点と重複関係からみて，この時代で報告する。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1)　方形竪穴遺構

第 31 号方形竪穴遺構（第 312 図）

位置　調査区南部のＰ５d1 区，標高 19.8 ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第 82 号竪穴建物跡を掘り込み，第 39 号溝に掘り込まれている。

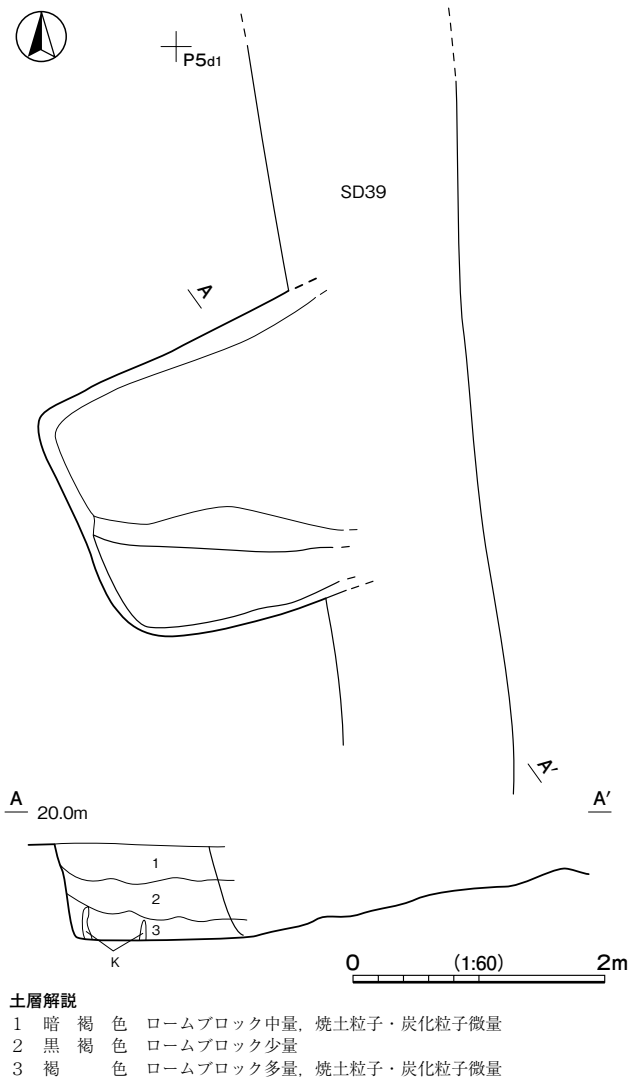
規模と形状　北東側を第 39 号溝跡に掘り込まれているため，東西軸は 2.25 ｍしか確認できなかった。南北軸 1.10 ｍの長方形で，主軸方向はＮ－ 66°－Ｅである。壁は高さ 78㎝で，ほぼ直立している。

床　南側はテラス状になっており，北側に向かって約 30 ～ 40㎝掘り下げられている。どちらも平坦であるが硬化面は認められない。

覆土　３層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

遺物出土状況　縄文土器片２点（深鉢），土師器片４点（坏１，甕類３），須恵器片２点（坏），土師質土器片１点（内耳鍋），鉄滓 22.7 ｇが出土している。縄文土器片と土師器片，須恵器片は遺構廃絶時の流れ込みと考えられる。いずれも細片のため，図示できない。

所見　時期は，出土土器と重複関係から 16 世紀前葉と考えられる。



第 312 図　第 31 号方形竪穴遺構実測図

(2)　地下式坑

第２号地下式坑（第 313 図　PL29）

位置　調査区南部のＰ３d0 区，標高 22.8 ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第 14 号掘立柱建物跡を掘り込み，第 38 号溝に掘り込まれている。

軸長・軸方向　軸長は 3.10 ｍで，軸方向はＮ－８°－Ｗである。

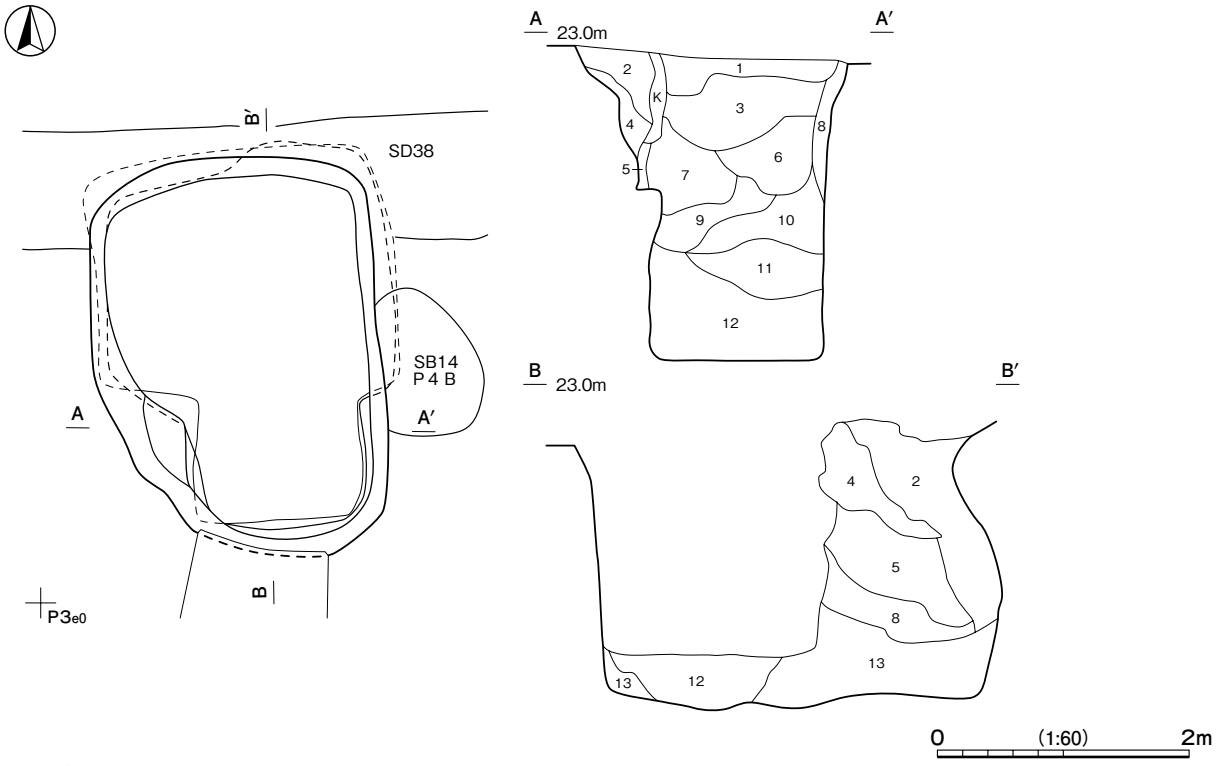
竪坑　主室の南壁中央部に位置し，奥行き 1.25 ｍ，横幅 1.98 ｍの長方形である。確認面からの深さは 235㎝

である。底面は平坦で，主室に至っている。東側壁は直立し，西側壁はやや外傾している。

主室　奥行き 1.97 m，横幅 2.35 mの長方形である。天井部は崩落している。確認面からの深さは 235㎝である。底面は平坦で，硬化面は認められない。南壁は直立だが，北壁は内傾している。

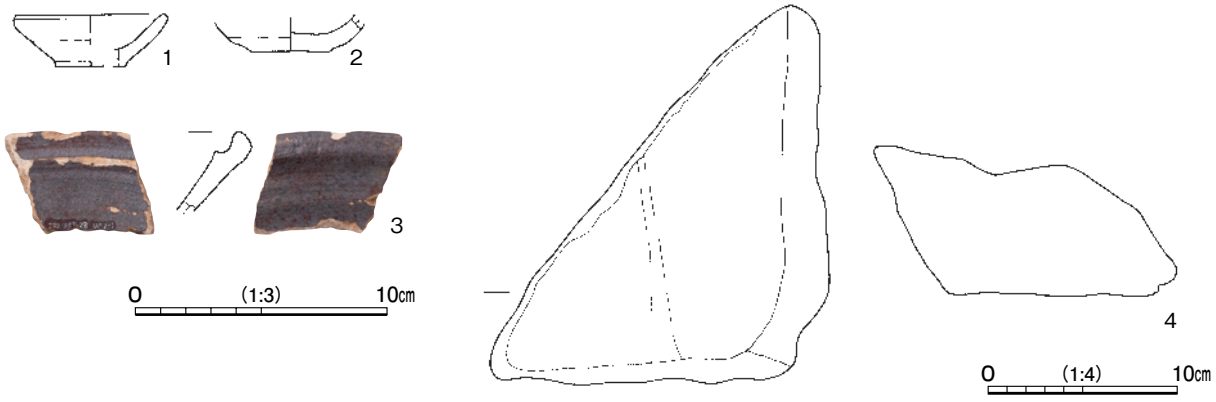
覆土　13 層に分層できる。第８・12 層は，天井部や壁の崩落土である。第１～７・９～ 11・13 層はロームブロック，粘土ブロックを含み，不規則な堆積状況を示していることから，天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。

遺物出土状況　土師器片 51 点，須恵器片 19 点，土師質土器片６点（小皿５，内耳鍋１），陶器片２点（皿，擂鉢），礫石$_{カ}$１点（器種不明），椀状滓 52.4 ｇ，鉄塊系遺物 56.3 ｇ，鉄滓 216.4 ｇが出土している。１～４は，覆土



土層解説

1　灰　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　灰　褐　色　ローム粒子中量
5　黒　褐　色　ロームブロック微量
6　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物・焼土粒子微量
7　極暗褐色　焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
8　褐　　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物微量
9　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量
10　にぶい褐色　ロームブロック・炭化物少量，灰色粘土ブロック・焼土粒子微量
11　灰　褐　色　灰色粘土ブロック・ローム粒子少量，炭化物・赤色粒子微量
12　明　褐　色　ロームブロック多量
13　黒　褐　色　灰色粘土ブロック・ローム粒子・赤色粒子少量，炭化粒子微量



第 313 図　第２号地下式坑・出土遺物実測図

中からそれぞれ出土している。土師器片と須恵器片は，遺構廃絶時の流れ込み，３は本跡を掘り込む第 38 号溝に伴う遺物と考えられる。

所見　時期は，出土土器と重複関係から 16 世紀前葉から中葉と考えられる。

表 212　第２号地下式坑出土遺物観察表（第 313 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師質土器	小皿	[6.0]	2.0	[2.8]	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	覆土中	20%
2	土師質土器	小皿	－	(1.3)	3.1	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	覆土中	30%

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文　様・特　徴	釉薬	産　地	出土位置	備　考
3	陶器	擂鉢	－	(3.2)	－	長石　赤灰	ロクロ成形　口縁折縁形・口縁内凸帯小	錆釉	瀬戸・美濃系	覆土中	20% 17 世紀前葉

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
4	礎石〃	20.2	18.0	7.9	3087.5	雲母片岩	上面が溝状に凹む　煤付着	覆土中	

(3)　井戸跡

第８号井戸跡（第 314・315 図　PL29）

位置　調査区南部のＰ４i3 区，標高 22.0 ｍほどの台地平坦部に位置している。

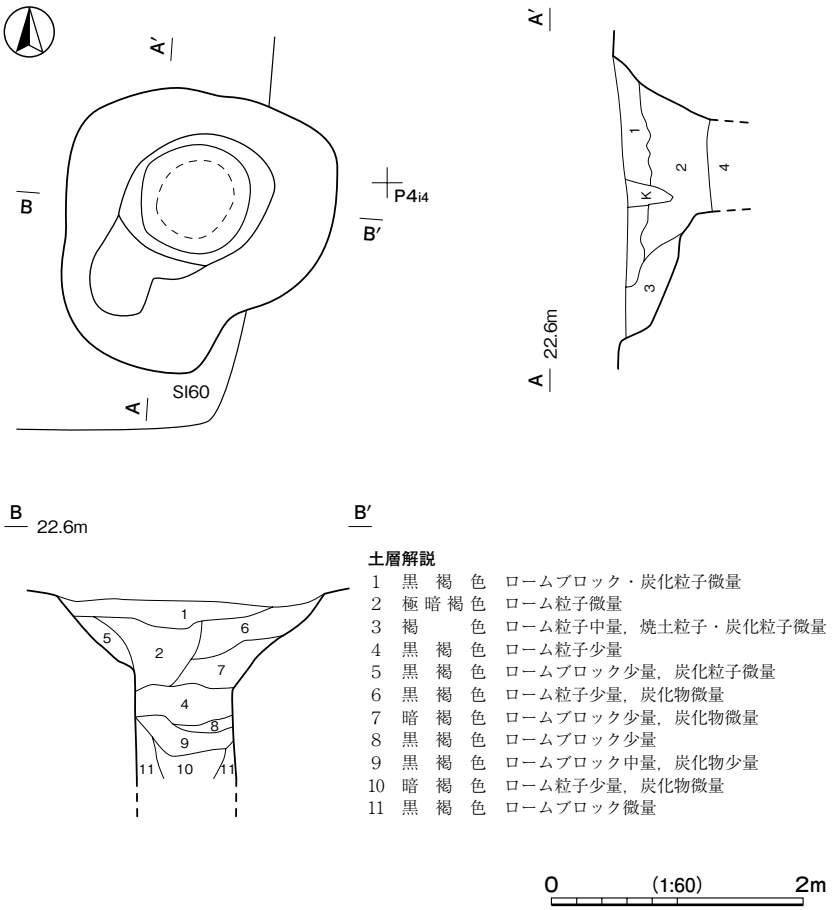
重複関係　第 60 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　確認面は長径 2.32 ｍ，短径 2.14 ｍの不整円形である。確認面から深さ 60㎝までは漏斗状に掘り込まれ，それより下部は長径 0.88 ｍ，短径 0.85 ｍの円筒状に掘り込まれている。確認面から 142㎝ほど掘り下げた段階で，崩落が想定されたため，以下の調査を断念した。

覆土　観察できた部分は 11 層に分層できる。ロームブロックが含まれ，不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

遺物出土状況　土師器片 12 点（坏４，椀１，甕７），須恵器片２点（坏，甕），灰釉陶器片１点（壺），土師質土器片３点（小皿１，内耳鍋２），土製品１点（鋳型）が出土している。１・２は覆土上層から，３は覆土下層から出土しているが，近接する第４号鍛冶工房跡（ＳＸ５）で使用されたものが埋め戻しの際に混入したものと考えられる。

所見　時期は，出土土器から 16 世紀中葉から後葉と考えられる。



第 314 図　第８号井戸跡実測図

第 315 図　第８号井戸跡出土遺物実測図

表 213　第８号井戸跡出土遺物観察表（第 315 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師質土器	内耳鍋	－	4.8	－	長石・石英・雲母・細礫	明褐	普通	ロクロ成形　体部外・内面小口状工具によるナデ　体部外面煤付着	覆土上層	20%
2	土師質土器	小皿	－	(2.0)	[6.8]	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	覆土上層	20%
3	土製品	鋳型	[29.2]	(12.2)	[25.6]	長石・石英・雲母・細礫	赤褐	普通	還元炎の被熱　外面中央部鉄流し込みのくぼみ有	覆土下層	40% PL47

第９号井戸跡（第 316 図　PL29）

位置　調査区南東部のＰ４g8 区，標高 21.0 ｍほどの緩斜面地に位置している。

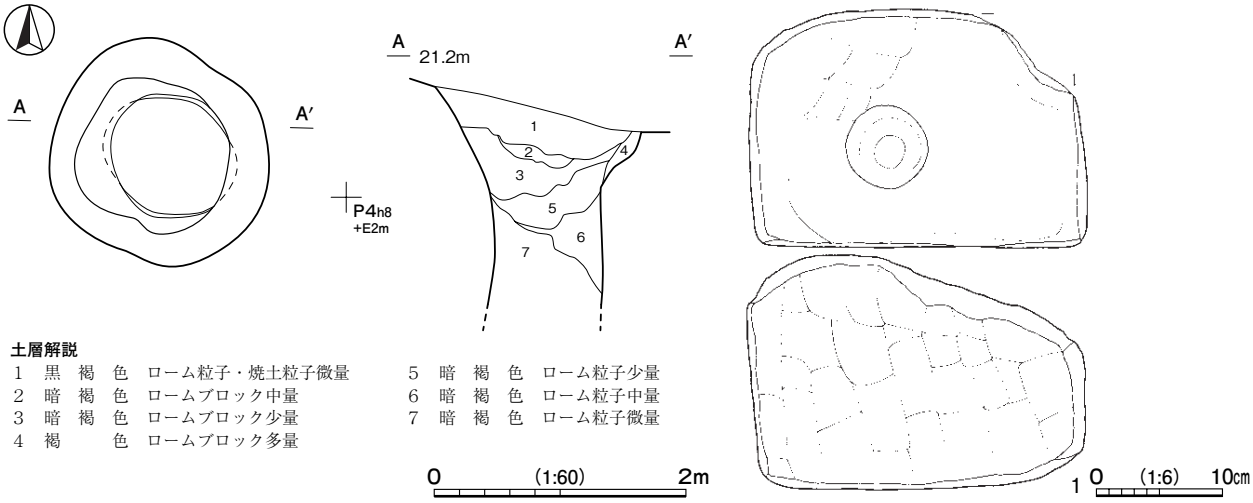
重複関係　第 40 号溝跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　確認面は長径 1.85 ｍ，短径 1.77 ｍの円形である。確認面から深さ 86㎝までは，漏斗状に掘り込まれ，それより下部は長径 1.02 ｍ，短径 0.95 ｍで円筒状に掘り込まれている。確認面から 150㎝ほど掘り下げた段階で，崩落が想定されたため，以下の調査を断念した。

覆土　７層に分層できる。ロームブロックが含まれ，不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

遺物出土状況　石製品２点（宝篋印塔，不明石製品）が出土している。１は覆土下層から，不明石製品は覆土中からの出土で，いずれも井戸の埋め戻し時に投棄されたものと考えられる。

所見　五輪塔の建造が広まった室町時代が廃絶時期のため，使用時期はそれ以前と考えられる。



土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　褐　　色　ロームブロック多量
5　暗　褐　色　ローム粒子少量
6　暗　褐　色　ローム粒子中量
7　暗　褐　色　ローム粒子微量

第 316 図　第９号井戸跡・出土遺物実測図

表 214　第９号井戸跡出土遺物観察表（第 316 図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	材　質	特　徴	出土位置	備　考
1	宝篋印塔	27.0	19.0	18.5	15.2	花崗岩	基礎部或いは塔身部』上面に窪みあり	覆土下層	

表 215　室町・江戸時代の井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
SE 8	P 4 i3	−	不整円形	2.32 × 2.14	(142)	不明	漏斗状	人為	土師器 12，須恵器 4，灰釉陶器 1，土師質土器 3，鋳型 1	SI60 →本跡
SE 9	P 4 g8	−	円形	1.85 × 1.77	(150)	不明	ほぼ直立	人為	宝篋印塔 1，不明石製品 1	SD40 重複

(4)　墓坑

第 245 号土坑（第 317 図）

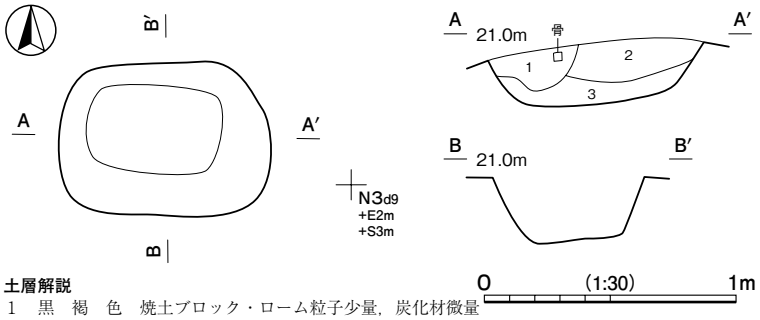
位置　調査区北部のＮ 3 d9 区，標高 21.0 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長軸 0.83 m，短軸 0.60 mの隅丸長方形で，長軸方向はＮ − 4° − Ｗである。深さ 25cmで，壁は外傾している。底面は平坦である。

覆土　３層に分層できる。焼土ブロックや炭化材が含まれていることから，埋葬時に埋め戻されている。

遺物出土状況　人骨片が第１・２層から出土しているが，細片であることから部位や埋葬状況は不明である。遺物は，土師器片４点（甕）が覆土中から出土している。いずれも埋め戻し時の混入と考えられる。

所見　時期は，遺構に伴う土器が出土していないため，判断できない。



土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化材微量
2　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
3　極 暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子微量

第 317 図　第 245 号土坑実測図

第 255 号土坑（第 318 図　PL29）

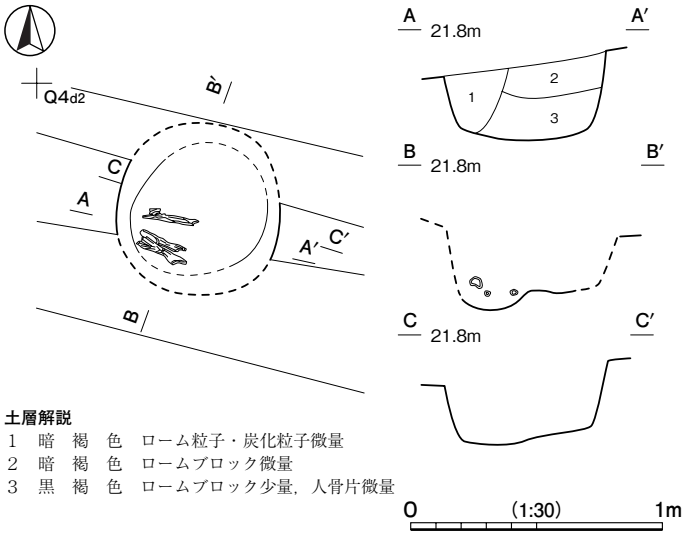
位置　調査区南部のＱ 4 d2 区，標高 21.0 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　北側と南側が撹乱を受けており，短径 1.30 m，長径 1.38 mしか確認できなかったが円形と考えられる。深さ 28cmで，壁は外傾しており，底面は平坦である。

覆土　３層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから，埋め戻されている。

遺物出土状況　上腕骨$_{カ}$や橈骨$_{カ}$，尺骨$_{カ}$が南西部の覆土下層から並んで出土しているが，埋葬状況は不明である。

所見　時期は，遺構に伴う土器が出土していないため，判断できない。



土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック微量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量，人骨片微量

第 318 図　第 255 号土坑実測図

第 264 号土坑（第 319 図　PL30）

位置　調査区南部のＱ 3 c0 区，標高 22.4 mほどの緩斜面部に位置している。

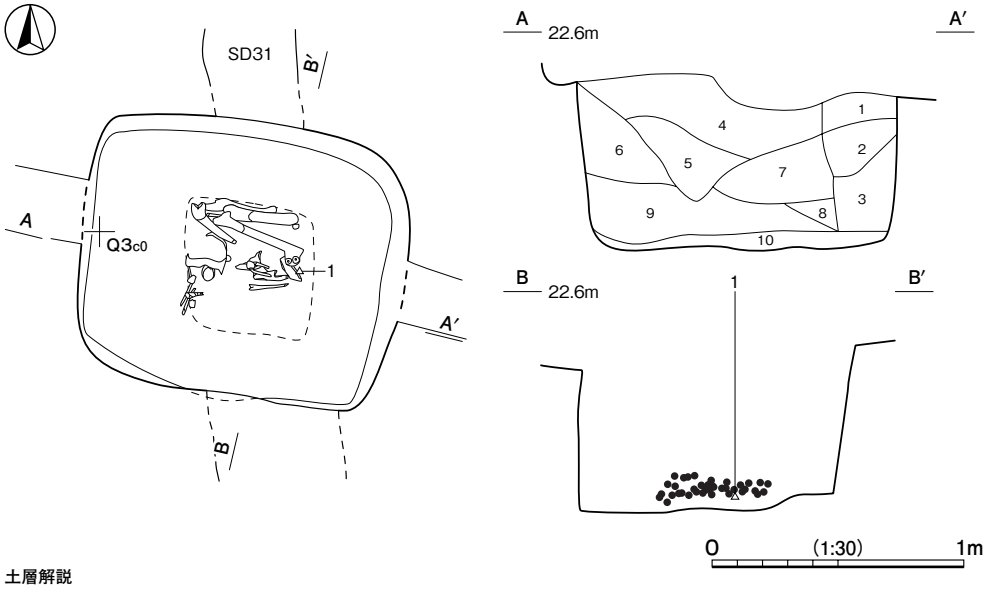
重複関係　第 55 号竪穴建物跡を掘り込み，第 31 号溝に掘り込まれている。

規模と形状　長軸 1.27 m，短軸 1.08 mの長方形で，長軸方向はＮ − 77° − Ｗである。深さ 57cmで，壁は直立している。底面は平坦である。

覆土　10層に分層できる。ロームブロックを含み，不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

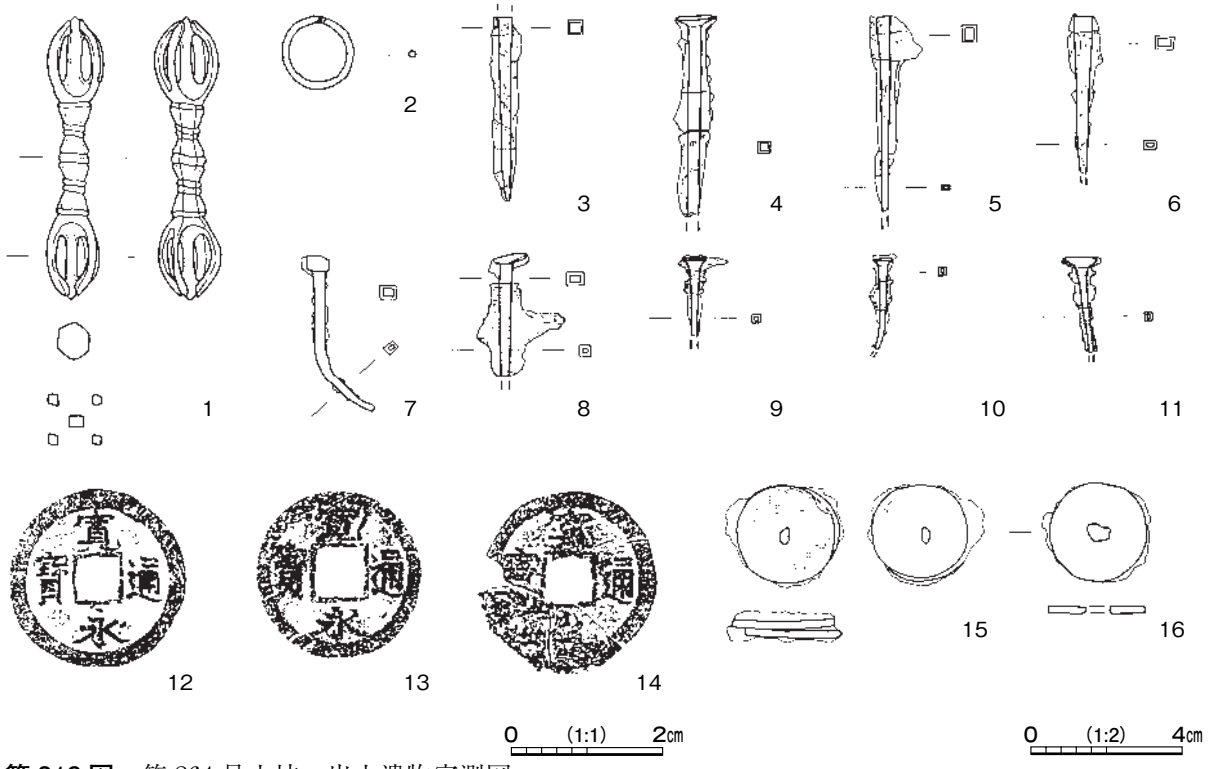
埋葬及び遺物出土状況　頭骨や大腿骨，歯などが中央部の床面近くから出土している。土坑底面に棺の押圧痕があるため，座棺で埋葬されたと考えられる。出土した人骨は，頭骨，歯，頸椎，胸骨，肋骨，脊椎，上腕骨，橈骨，尺骨，骨盤，大腿骨，腓骨，脛骨，手指骨など全身の骨が45点出土している。被葬者の性別や年齢などは不明である。出土遺物は，土師器片１点（甕），金属製品３点（環状銅製品，五鈷杵，釘），銭貨５点（寛永通宝３，不明鉄銭２）である。金属製品はいずれも覆土下層から出土している。土師器片は埋め戻し時の混入，釘以外の金属製品及び銭貨は，副葬品と考えられる。

所見　時期は，出土遺物から17世紀後葉以降と考えられる。



土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック･炭化粒子微量（４層より締まり強い）
3　灰　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
5　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
6　灰　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
7　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化物少量，焼土粒子微量
8　黒　褐　色　ロームブロック微量
9　褐　　色　ローム粒子多量，人骨片少量
10　暗　褐　色　ロームブロック・人骨片少量



第319図　第264号土坑・出土遺物実測図

表 216　第 264 号土坑（墓坑）出土遺物観察表（第 319 図）

番号	器　種	長さ（径）	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
1	五鈷杵	7.5	1.5 1.8	20.49	銅	鋳造　鋳型の合わせ残存　鬼目若干の隆起　紐二線　蓮弁縦筋のみ 脇鈷と中鈷の接続部は削りによる成形	覆土下層	PL57
2	環状 銅製品	1.9	0.2	0.64	銅	一部に塗金が残る　断面円形	覆土下層	PL57

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
3	釘	(4.8)	0.4 0.8	0.35	1.59	鉄	断面方形　周囲に木質残存	覆土中	PL56
4	釘	(5.3)	1.1	0.3	1.82	鉄	頭部残存　断面方形　周囲に木質残存	覆土中	PL56
5	釘	(5.2)	0.4 1.1	0.1 ～ 0.5	1.77	鉄	断面長方形　周囲に木質残存	覆土中	PL56
6	釘	(4.2)	0.4	0.2 ～ 0.3	1.53	鉄	断面長方形　周囲に木質残存	覆土中	
7	釘	(4.1)	0.6	0.2 ～ 0.3	1.45	鉄	頭部残存　断面長方形	覆土中	PL56
8	釘	(3.2)	0.3	0.2 ～ 0.3	2.13	鉄	笠釘状　頭部折れ曲がる　断面長方形　周囲に木質残存	覆土中	
9	釘	(2.1)	0.7 ～ 1.4	0.2	0.58	鉄	頭部残存　断面方形　周囲に木質残存	覆土中	
10	釘	(2.4)	0.5 ～ 0.6	0.2	0.44	鉄	頭部残存　断面方形	覆土中	
11	釘	(2.6)	0.8	0.2	0.57	鉄	頭部残存　断面方形　周囲に木質残存	覆土中	

番号	銭　種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋳年	特　　徴	出土位置	備　考
12	寛永通宝	2.4	0.5	0.1	3.83	銅	1668	新寛永	覆土下層	PL56
13	寛永通宝	2.2	0.6	0.1	2.56	銅	1668	新寛永	覆土下層	PL56
14	寛永通宝	2.3	0.6	0.1	2.18	銅	1668	新寛永ヵ	覆土下層	PL56
15	不明	2.6	0.4	0.4	7.63	鉄	1739	錆で判読不能　大きさから鉄銭の新寛永ヵ ２枚が付着している	覆土下層	PL56
16	不明	2.6	0.6	0.2	3.45	鉄	1739	錆が著しく判読不能　大きさから鉄銭の新寛永ヵ	覆土下層	PL56

(5)　土坑

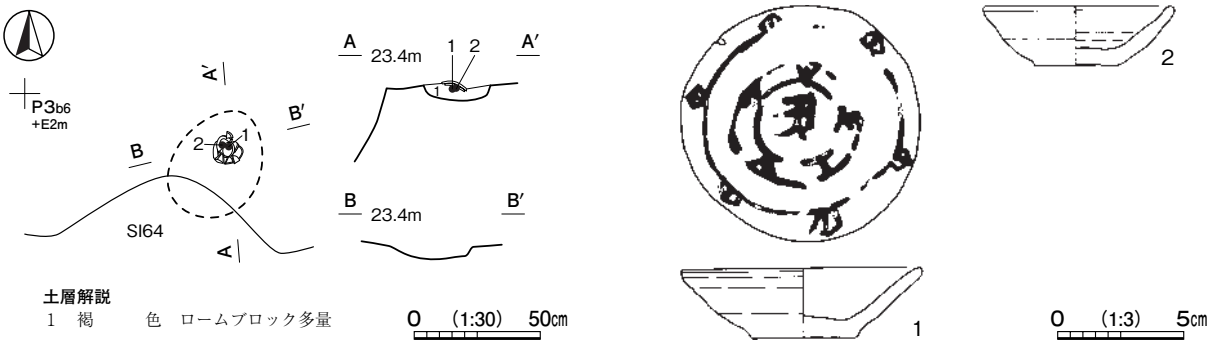
当期の土坑は 141 基を確認した。ただし，当遺跡は重複が著しいことから，遺物が混在した状態で出土するものが多いことと，時期判断が可能な遺物が出土してないことから，時期判断が困難である。よって，出土遺物と土坑の形状や堆積状況，重複関係，遺構の位置などから時期判断を行った。以下で特筆すべき３基について説明し，ほかは実測図と計測表を掲載する。なお，第 362・367・368 号土坑は第 39 号溝跡による方形区画内の地鎮に関連する土坑と考えられる。

第 362 号土坑（第 320 図）

位置　調査区中央部のＰ３b6 区，標高 23.2 ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第 64 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長径0.44 m，短径0.34 ｍの卵形で，長径方向はＮ－28°－Ｗである。深さは４㎝で，壁は緩斜である。底面は平坦である。



第 320 図　第 362 号土坑・出土遺物実測図

覆土　単一層である。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

遺物出土状況　土師質土器片２点（小皿）が出土している。１と２は，覆土上層から逆位で２枚が重なって出土している。１は，土師質小皿に仏法の法具である輪宝が墨書されており，第 39 号溝による長方形の区画の地鎮のために四方のうち北西隅に埋納された可能性がある。

所見　時期は，出土土器から 16 世紀中葉から後葉と想定できる。

表 217　第 362 号土坑出土遺物観察表（第 320 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師質土器	小皿	9.4	2.8	4.2	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　内面に輪宝墨書　文字はア字カ	覆土上層	100% PL46
2	土師質土器	小皿	［7.3］	2.3	3.2	長石・石英・雲母	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	覆土上層	60% PL46

第 367 号土坑（第 321 図　PL30）

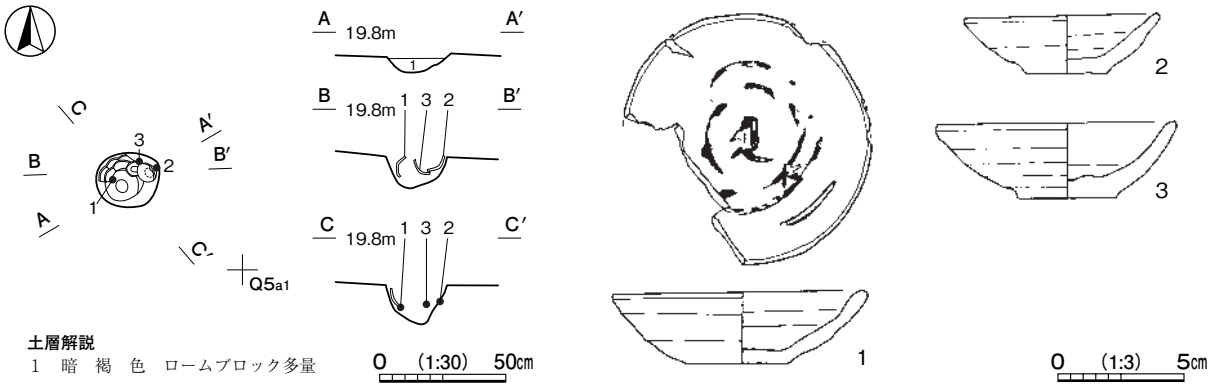
位置　調査区南東部のＰ４j0 区，標高 19.6 ｍほどの緩斜面部に位置している。

規模と形状　長径 0.26 ｍ，短径 0.23 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 57°－Ｗである。深さは 15㎝で，壁は外傾しており，底面は皿状である。

覆土　単一層である。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

遺物出土状況　土師質土器片３点（小皿）が出土している。１は，輪宝墨書土器で，覆土上層から横位で出土しており，第 39 号溝による長方形の区画の地鎮のために四方のうち南東隅に埋納された可能性がある。２・３は覆土上層から斜位で出土している。

所見　時期は，出土土器から 16 世紀中葉から後葉と考えられる。



第 321 図　第 367 号土坑・出土遺物実測図

表 218　第 367 号土坑出土遺物観察表（第 321 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師質土器	小皿	9.9	2.9	4.1	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　内面に輪宝墨書　文字はア字カ	覆土上層	80% PL46
2	土師質土器	小皿	7.5	2.3	3.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	覆土上層	100% PL46
3	土師質土器	小皿	9.2	3.0	3.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	覆土上層	100% PL46

第 368 号土坑（第 322 図　PL30）

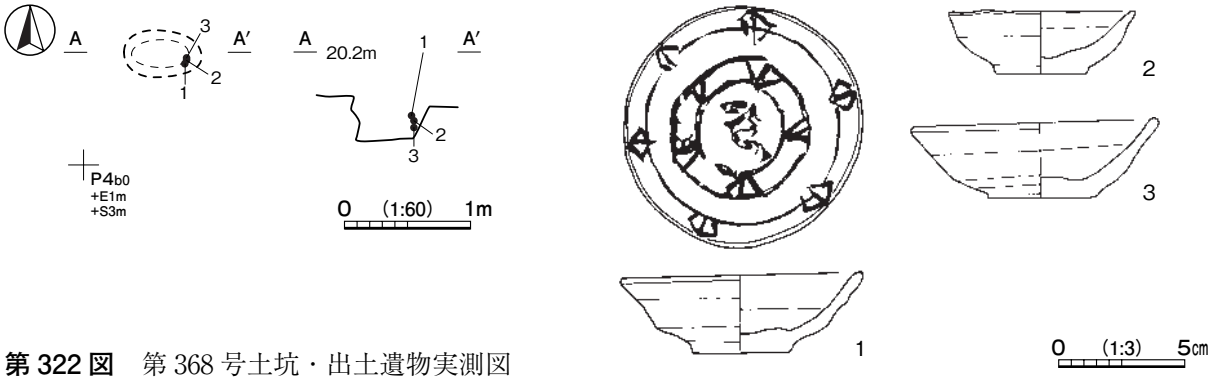
位置　調査区東部のＰ４b0 区，標高 19.8 ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第 79 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長径 0.62 ｍ，短径 0.43 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 83°－Ｗである。深さは 35㎝で，壁は外傾しており，底面は皿状である。

遺物出土状況　土師質土器片３点（小皿）が出土している。１は輪宝墨書土器であり，覆土上層から横位で出土しており，地鎮のために四方のうち北東隅に埋納されたものと考えられる。２と３は覆土中層から横位で重なって出土している。

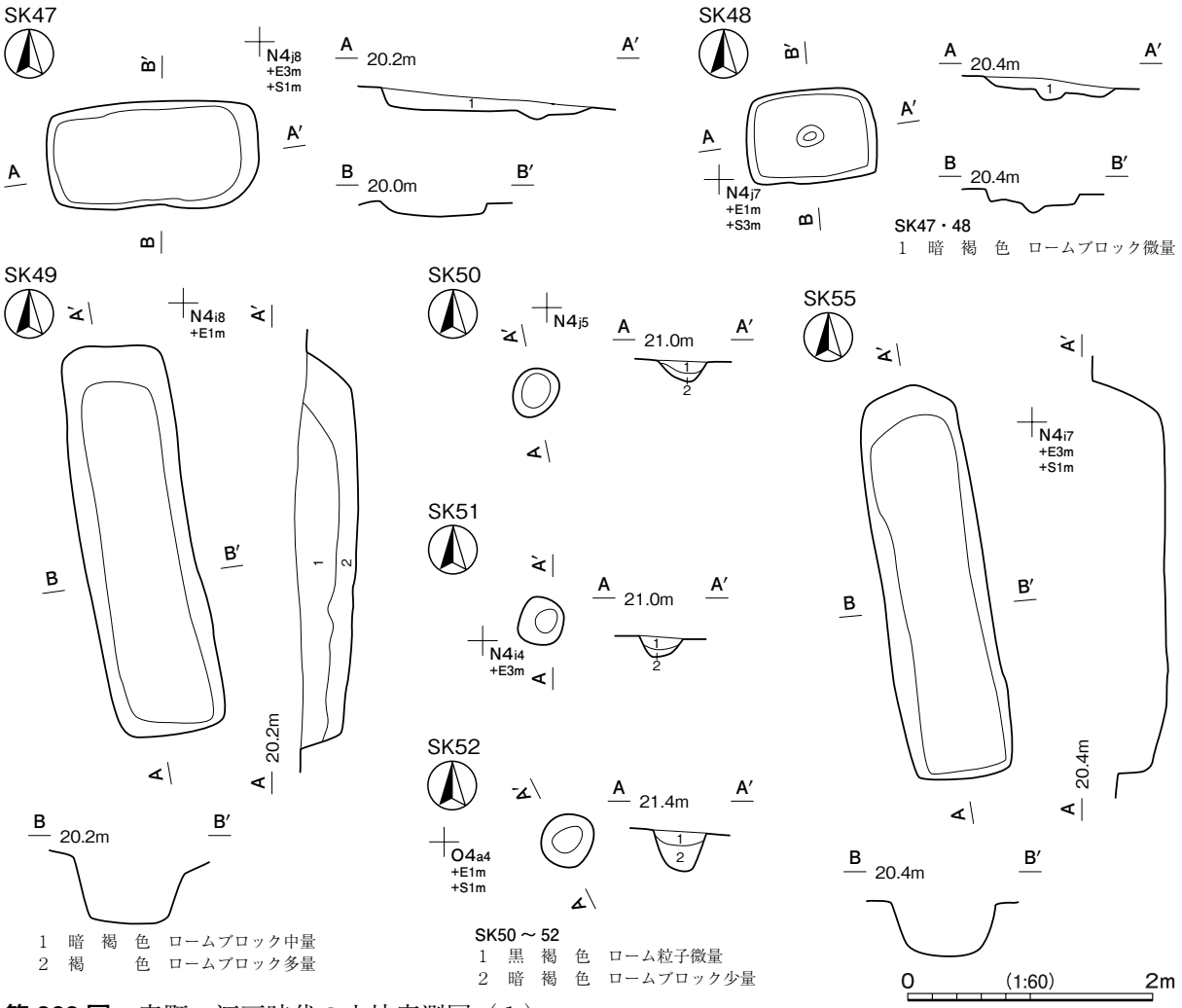
所見　時期は，出土土器から 16 世紀中葉から後葉と考えられる。



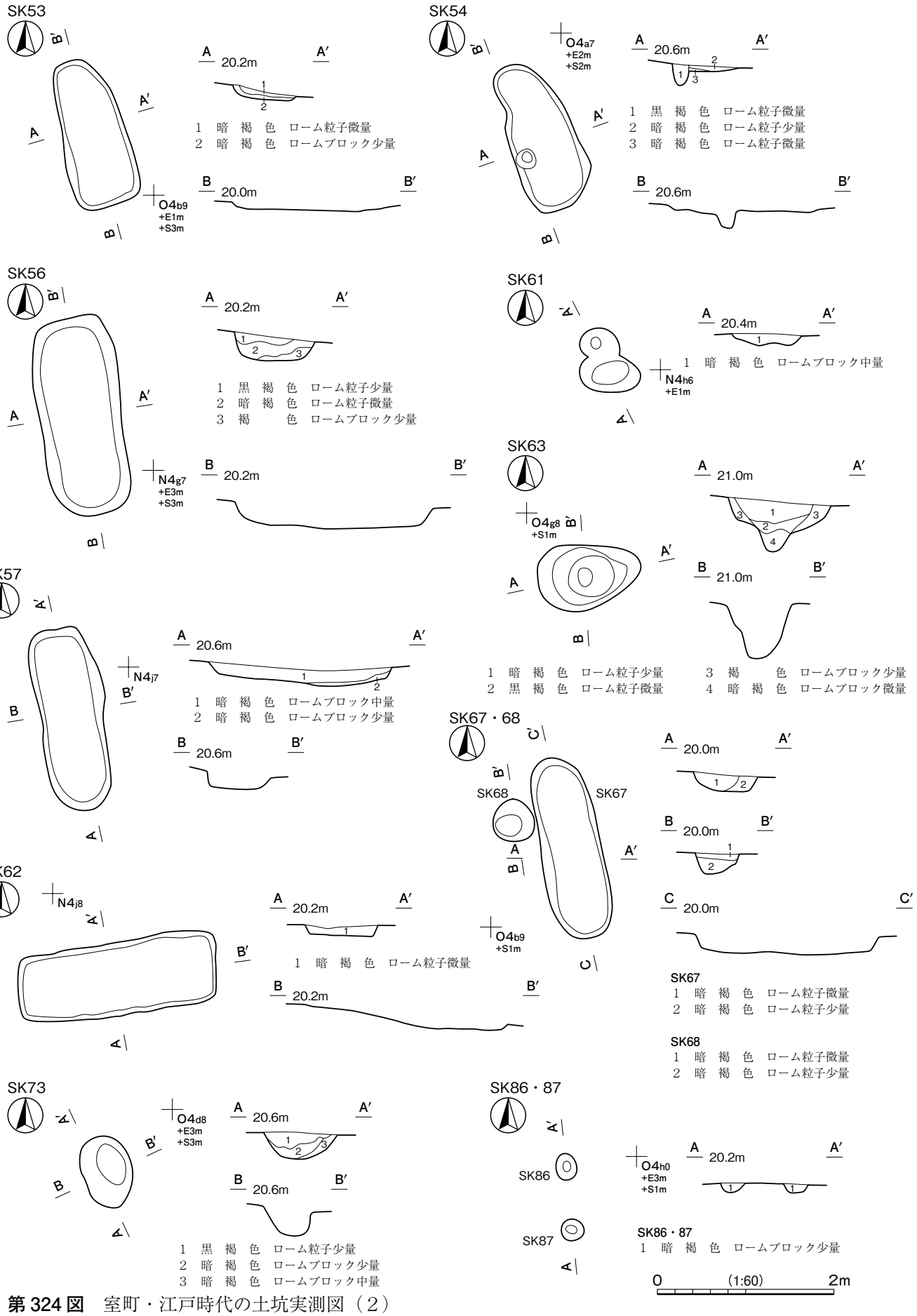
第 322 図　第 368 号土坑・出土遺物実測図

表 219　第 368 号土坑出土遺物観察表（第 322 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	小皿	9.2	3.2	3.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　内面に輪宝墨書　文字はア字カ	覆土上層	100% PL46
2	土師質土器	小皿	7.2	2.5	3.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り後線状の圧痕	覆土上層	100% PL46
3	土師質土器	小皿	9.5	3.1	4.2	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　焼き歪み	覆土上層	100% PL46

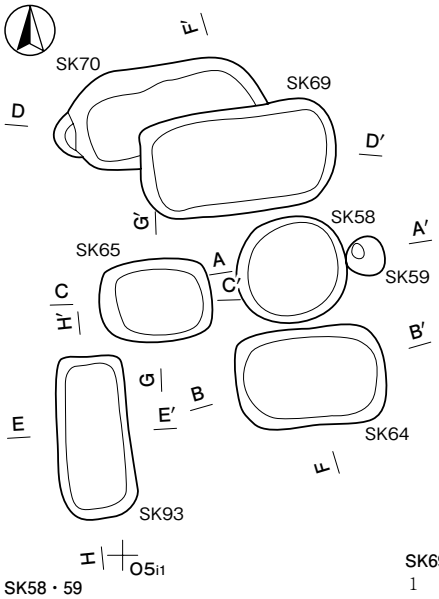


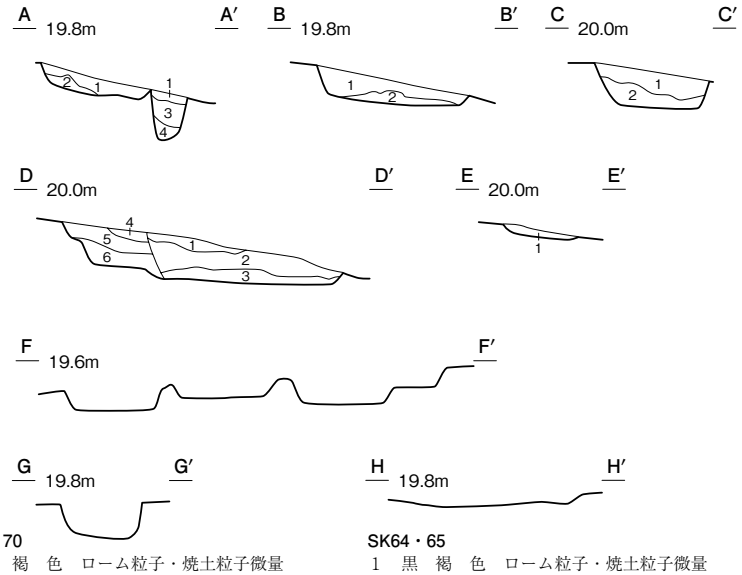
第 323 図　室町・江戸時代の土坑実測図（１）



第 324 図　室町・江戸時代の土坑実測図（2）

SK58・59・64・65・69・70・93





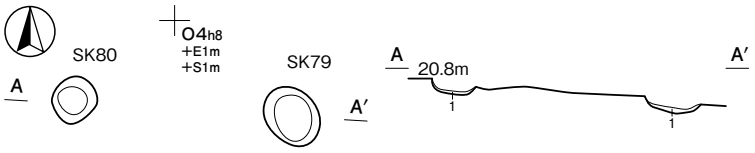
SK58・59
1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量
3 黒 褐 色 ローム粒子微量
4 黒 褐 色 ローム粒子微量（3より暗）

SK69・70
1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量
3 黒 色 ローム粒子微量
4 黒 褐 色 ロームブロック微量
5 黒 褐 色 ロームブロック少量
6 暗 褐 色 ロームブロック中量

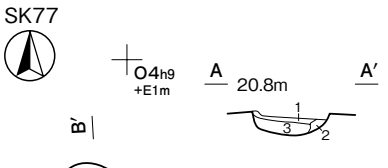
SK64・65
1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量

SK93
1 黒 褐 色 ロームブロック中量

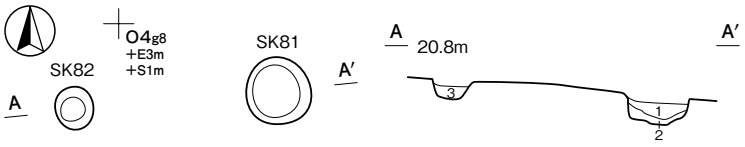
SK79・80

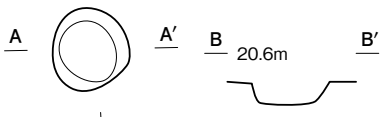


SK77



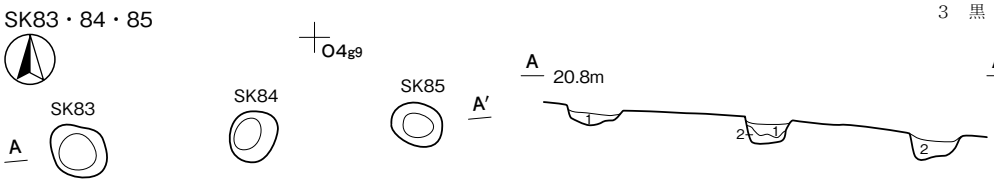
SK81・82



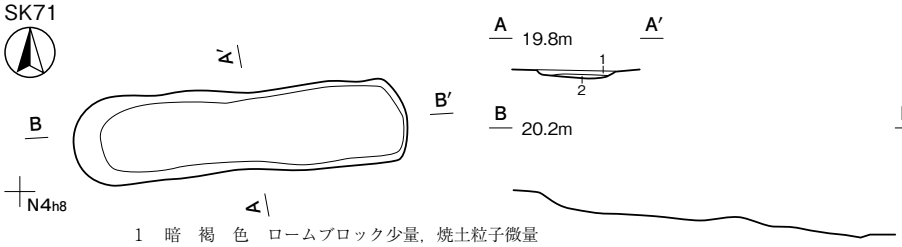


SK77・79～85
1 暗 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量
3 黒 褐 色 ロームブロック少量

SK83・84・85

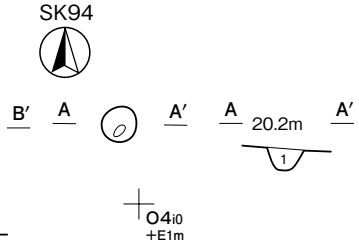


SK71



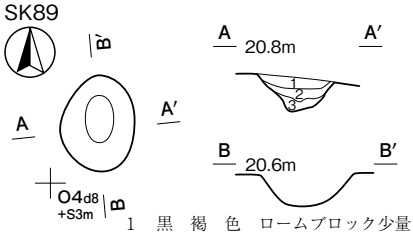
1 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
2 褐 色 ロームブロック少量

SK94



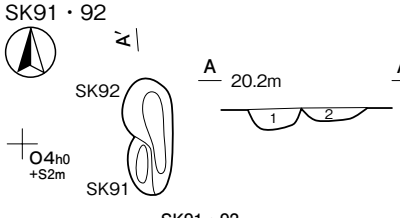
1 黒 褐 色 ローム粒子微量

SK89



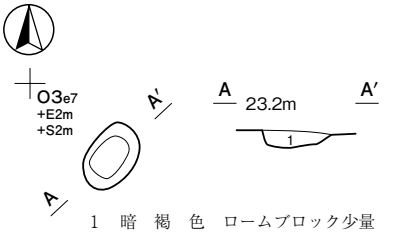
1 黒 褐 色 ロームブロック少量
2 褐 色 ロームブロック中量
3 暗 褐 色 ロームブロック少量

SK91・92



SK91・92
1 黒 褐 色 ローム粒子少量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK177

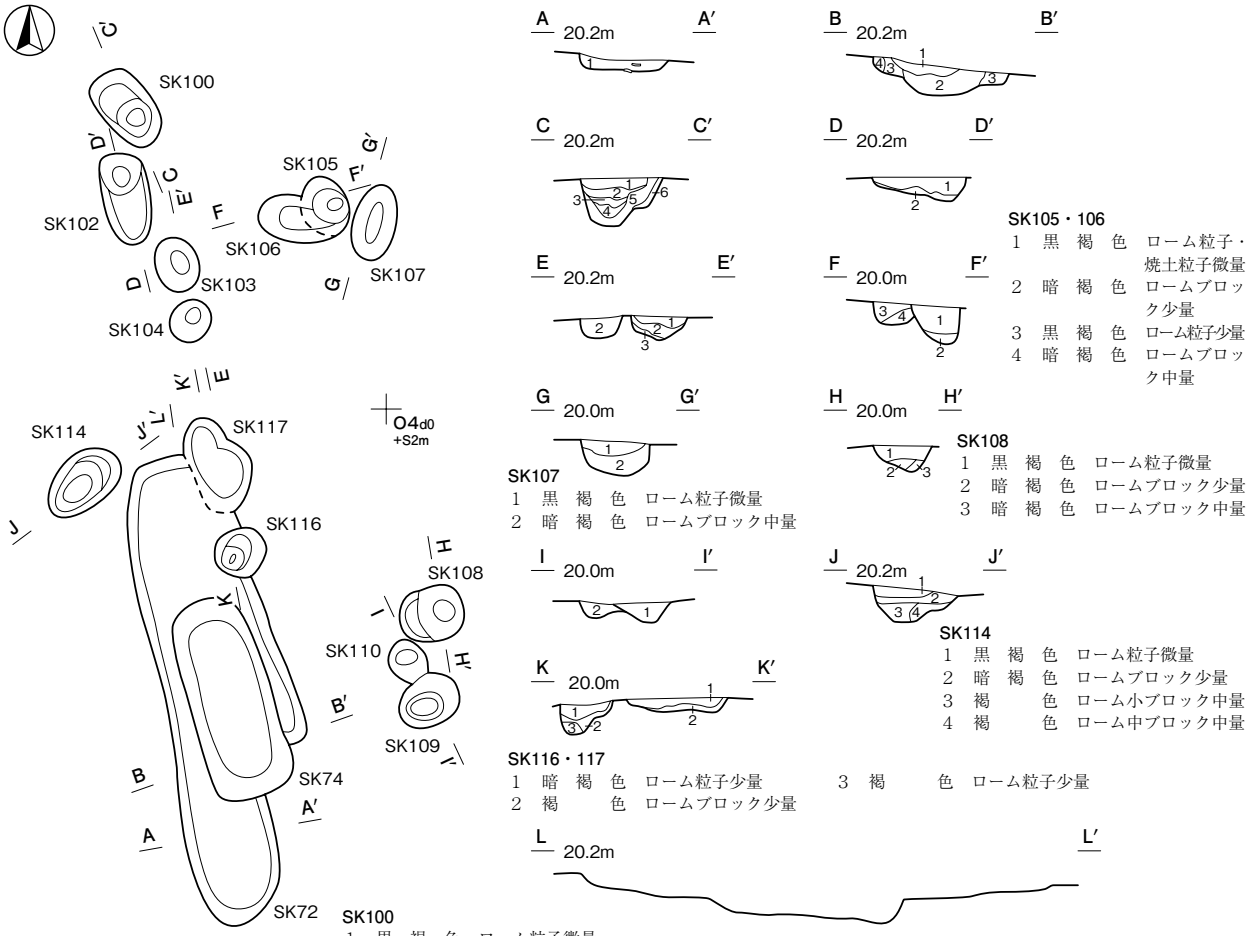


1 暗 褐 色 ロームブロック少量

0 (1:60) 2m

第 325 図 室町・江戸時代の土坑実測図（3）

SK72・74・100・102～110・114・116・117



SK105・106
1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量
3 黒 褐 色 ローム粒子少量
4 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK107
1 黒 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK108
1 黒 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量
3 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK114
1 黒 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量
3 褐 色 ローム小ブロック中量
4 褐 色 ローム中ブロック中量

SK116・117
1 暗 褐 色 ローム粒子少量
2 褐 色 ロームブロック少量
3 褐 色 ローム粒子少量

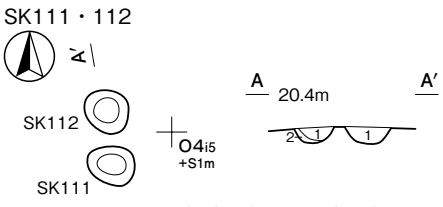
SK72・74
1 暗 褐 色 ローム小ブロック中量
2 黒 褐 色 ロームブロック少量
3 暗 褐 色 ローム中ブロック中量
4 褐 色 ロームブロック中量

SK100
1 黒 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量
3 黒 褐 色 ローム粒子微量
4 暗 褐 色 ロームブロック中量
5 褐 色 ロームブロック中量
6 褐 色 ロームブロック多量

SK102～104
1 暗 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量
3 褐 色 ロームブロック中量

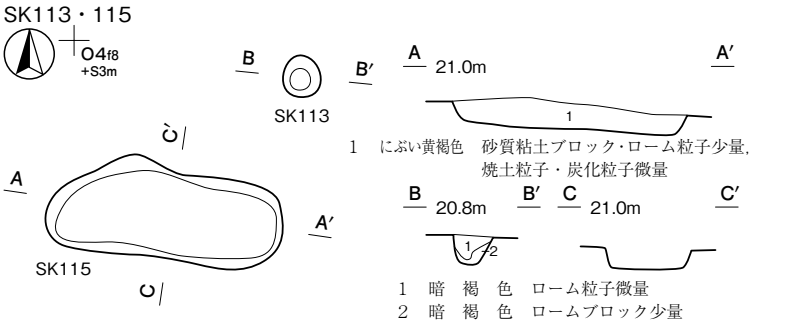
SK109・110
1 黒 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK111・112



1 暗 褐 色 ローム粒子少量
2 褐 色 ロームブロック中量

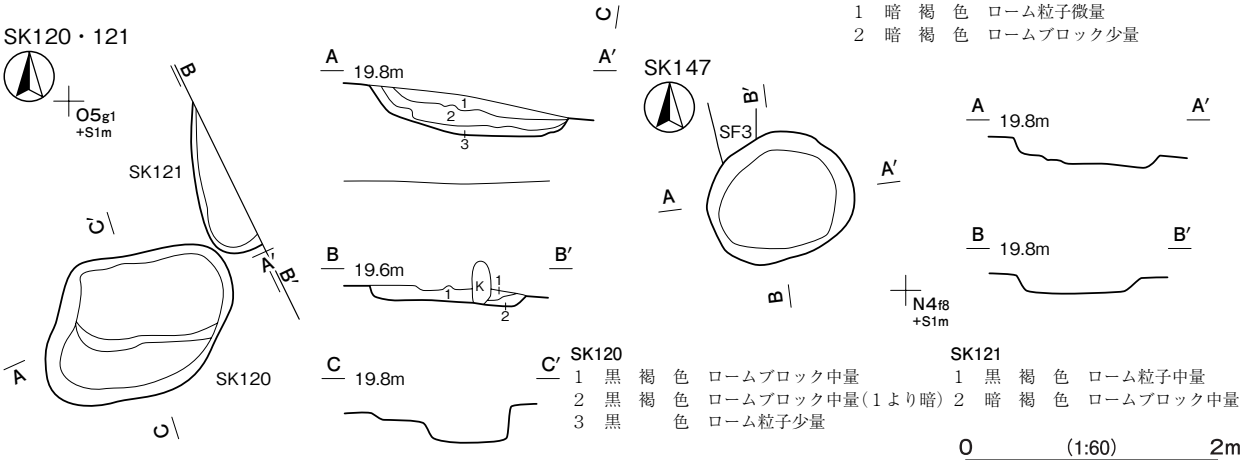
SK113・115



1 にぶい黄褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

1 暗 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量

SK120・121



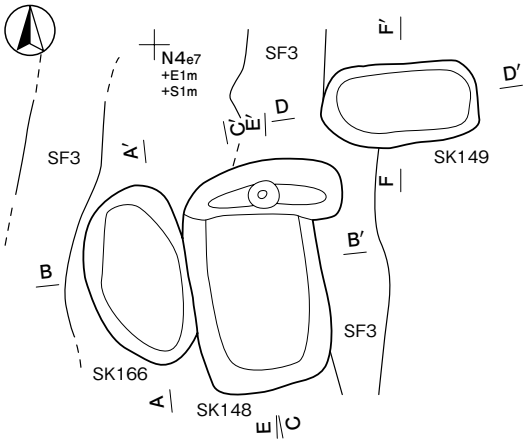
SK120
1 黒 褐 色 ロームブロック中量
2 黒 褐 色 ロームブロック中量(1より暗)
3 黒 色 ローム粒子少量

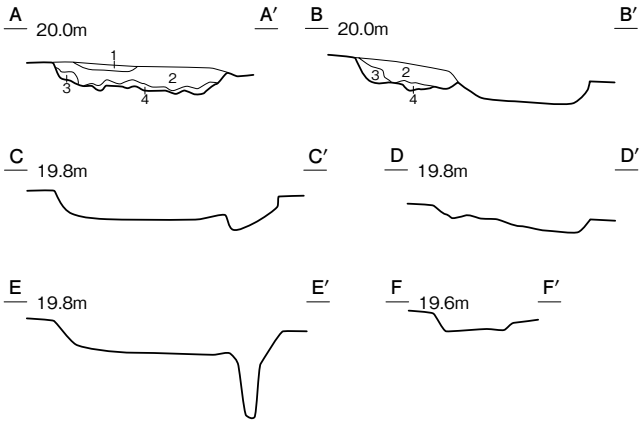
SK121
1 黒 褐 色 ローム粒子中量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量

0 (1:60) 2m

第 326 図 室町・江戸時代の土坑実測図（4）

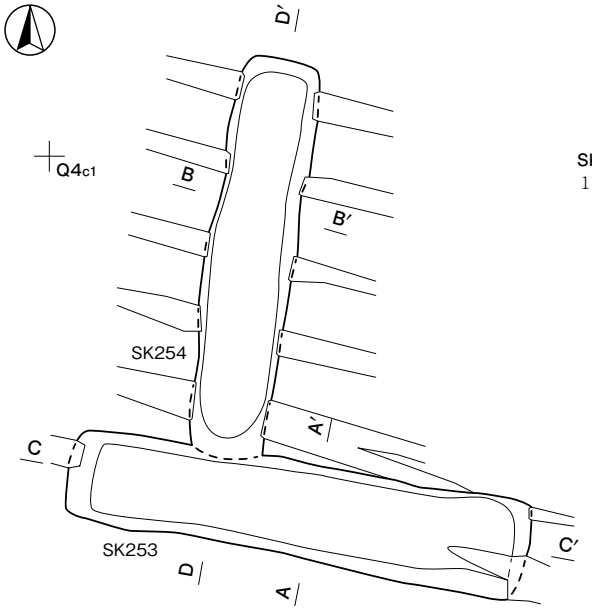
SK148・149・166

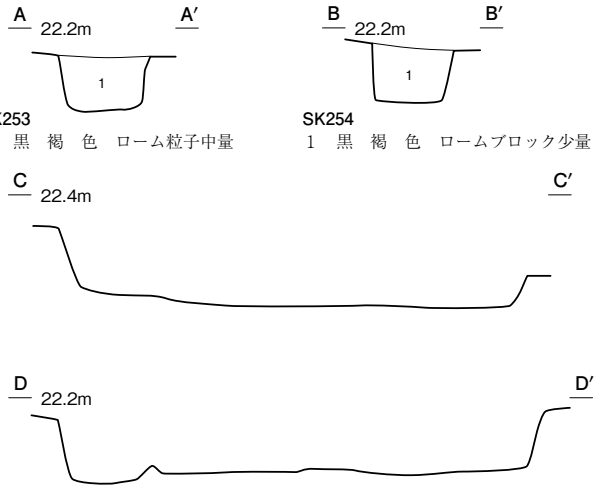




SK166
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・鉄滓微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，鉄滓微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　褐　　色　ロームブロック中量

SK253・254

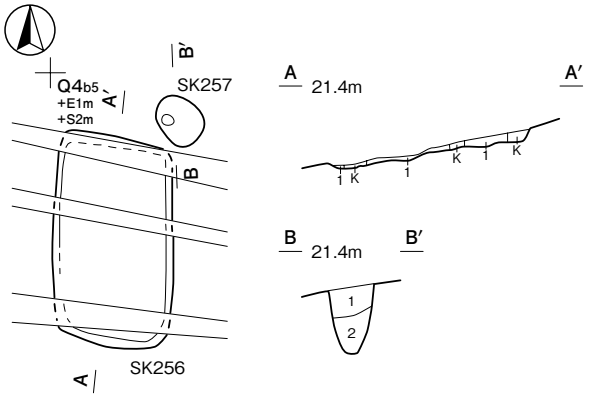




SK253
1　黒　褐　色　ローム粒子中量

SK254
1　黒　褐　色　ロームブロック少量

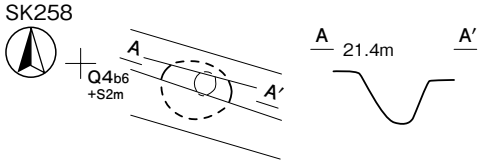
SK256・257



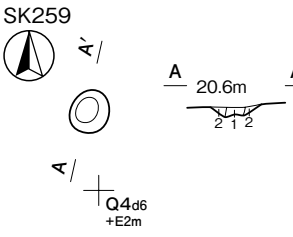
SK256
1　にぶい黄褐色　ローム粒子多量，黄褐色粘土ブロック少量

SK257
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック微量

SK258

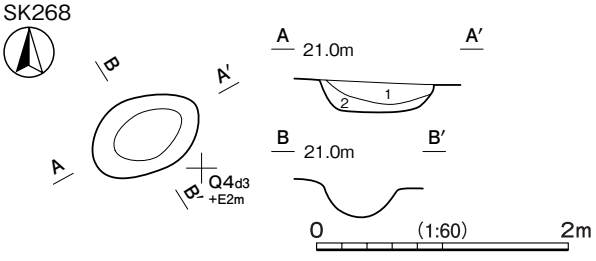


SK259



SK259
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　灰　褐　色　ローム粒子多量

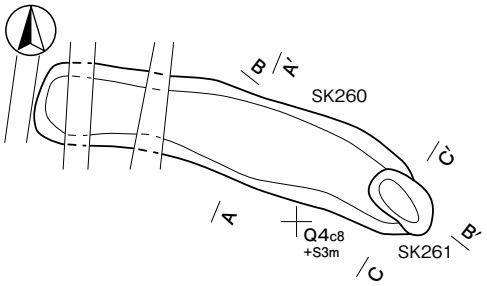
SK268

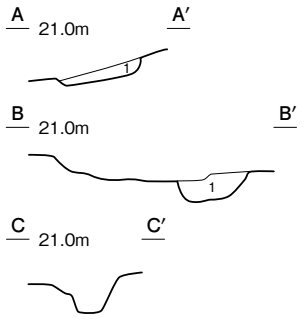


SK268
1　灰 黄 褐 色　ローム粒子中量，黄褐色粘土ブロック微量
2　にぶい黄褐色　ローム粒子多量，黄褐色粘土ブロック中量

第 327 図　室町・江戸時代の土坑実測図（5）

SK260・261

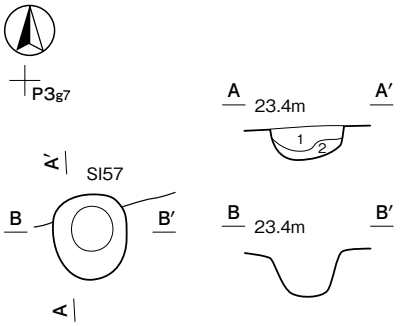




SK260
1 暗 褐 色 ロームブロック中量

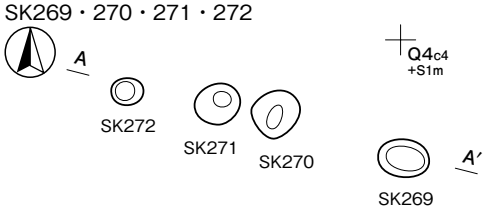
SK261
1 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量

SK274



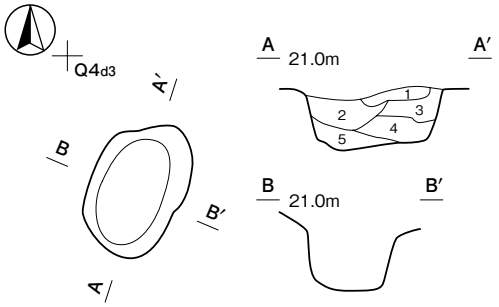
1 暗 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量

SK269・270・271・272



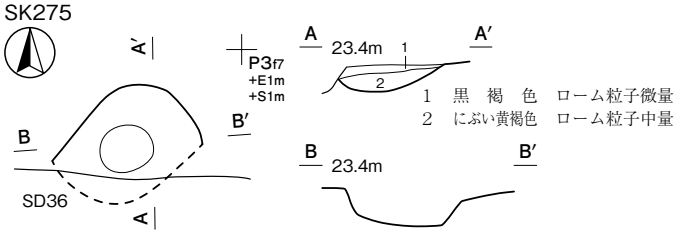
SK269 ～ 272
1 暗 褐 色 黄褐色粘土ブロック少量
焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 黄褐色粘土ブロック少量

SK267



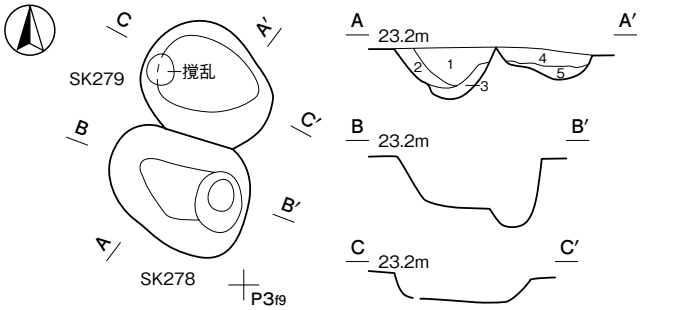
1 暗 褐 色 褐灰色粘土ブロック少量，炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
2 にぶい黄褐色 ローム粒子多量，黄褐色粘土ブロック少量
3 にぶい黄褐色 ローム粒子中量，褐灰色粘土ブロック少量，黄褐色粘土ブロック微量
4 灰 黄 褐 色 黄褐色粘土ブロック多量
5 褐 色 黄褐色粘土ブロック多量

SK275



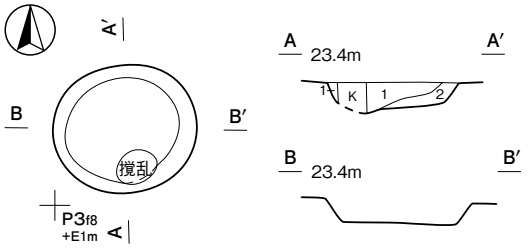
1 黒 褐 色 ローム粒子微量
2 にぶい黄褐色 ローム粒子中量

SK278・279



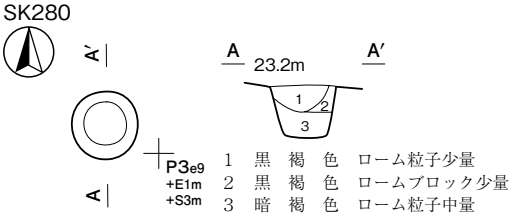
1 暗 褐 色 ローム粒子微量
2 灰 褐 色 ローム粒子中量
3 褐 色 ローム粒子少量，黒色粒子微量
4 黒 褐 色 ローム粒子微量
5 極暗褐色 ロームブロック少量

SK276



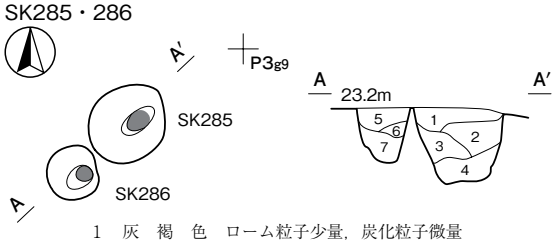
1 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土ブロック微量
2 暗 褐 色 ローム粒子中量

SK280



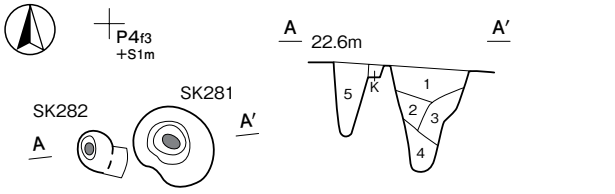
1 黒 褐 色 ローム粒子少量
2 黒 褐 色 ロームブロック少量
3 暗 褐 色 ローム粒子中量

SK285・286



1 灰 褐 色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
2 褐 色 ローム粒子少量
3 にぶい褐色 ローム粒子中量，炭化粒子微量
4 暗 褐 色 ローム粒子中量
5 灰 褐 色 ローム粒子少量
6 黒 褐 色 ローム粒子微量
7 にぶい褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量

SK281・282

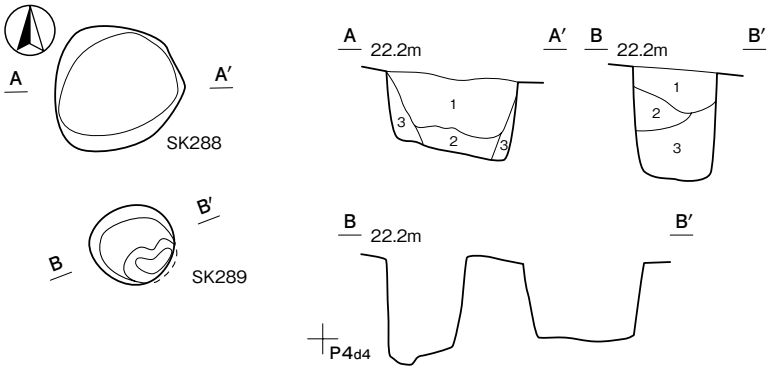


1 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ロームブロック微量
3 暗 褐 色 ロームブロック微量
4 黒 褐 色 ローム粒子微量
5 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

0 (1:60) 2m

第 328 図 室町・江戸時代の土坑実測図（6）

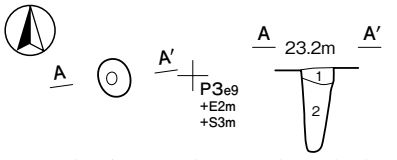
SK288・289



SK288
1 にぶい黄褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量
3 灰 黄 褐 色 ローム粒子中量

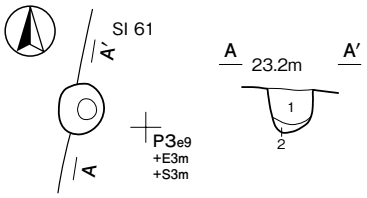
SK289
1 灰 黄 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐 色 炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
3 黒 褐 色 ロームブロック微量

SK292



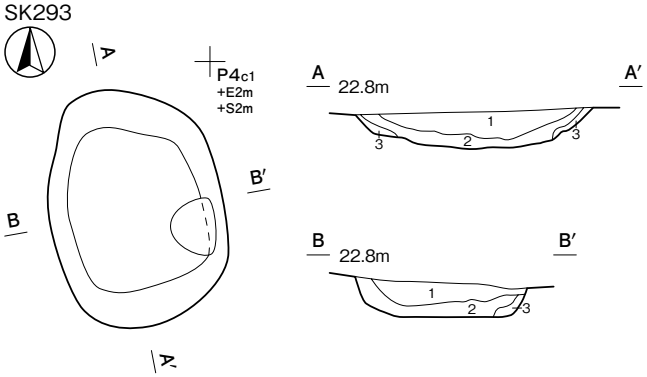
1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 灰 褐 色 ローム粒子中量

SK298



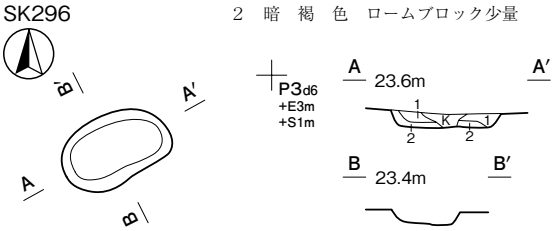
1 黒 褐 色 ローム粒子･焼土粒子･炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量

SK293



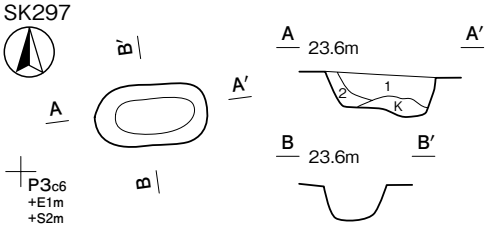
1 暗 褐 色 灰白色粘土ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 灰白色粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
3 灰 黄 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子微量

SK296



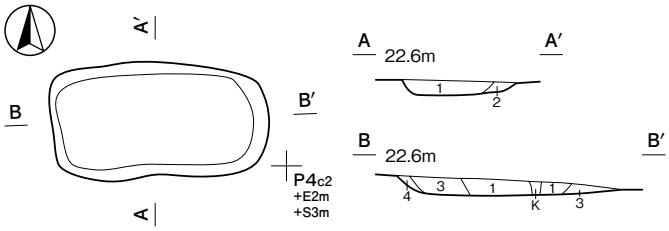
1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK297



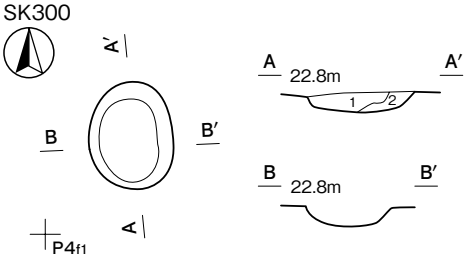
1 暗 褐 色 ロームブロック中量
2 黒 褐 色 ローム粒子中量

SK294



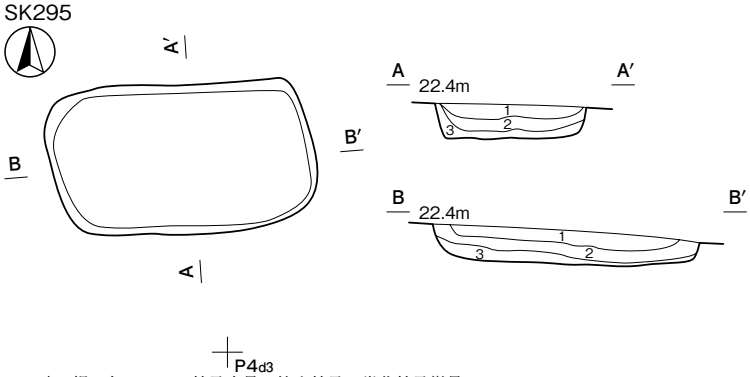
1 黒 褐 色 ロームブロック微量
2 灰 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
4 褐 色 ローム粒子多量

SK300



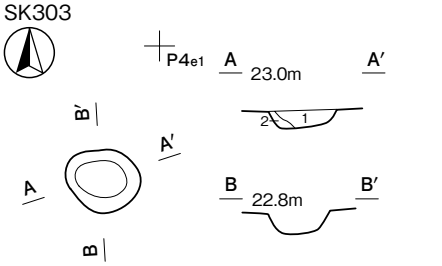
1 黒 褐 色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK295



1 暗 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子中量，炭化物微量
3 灰 黄 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子微量

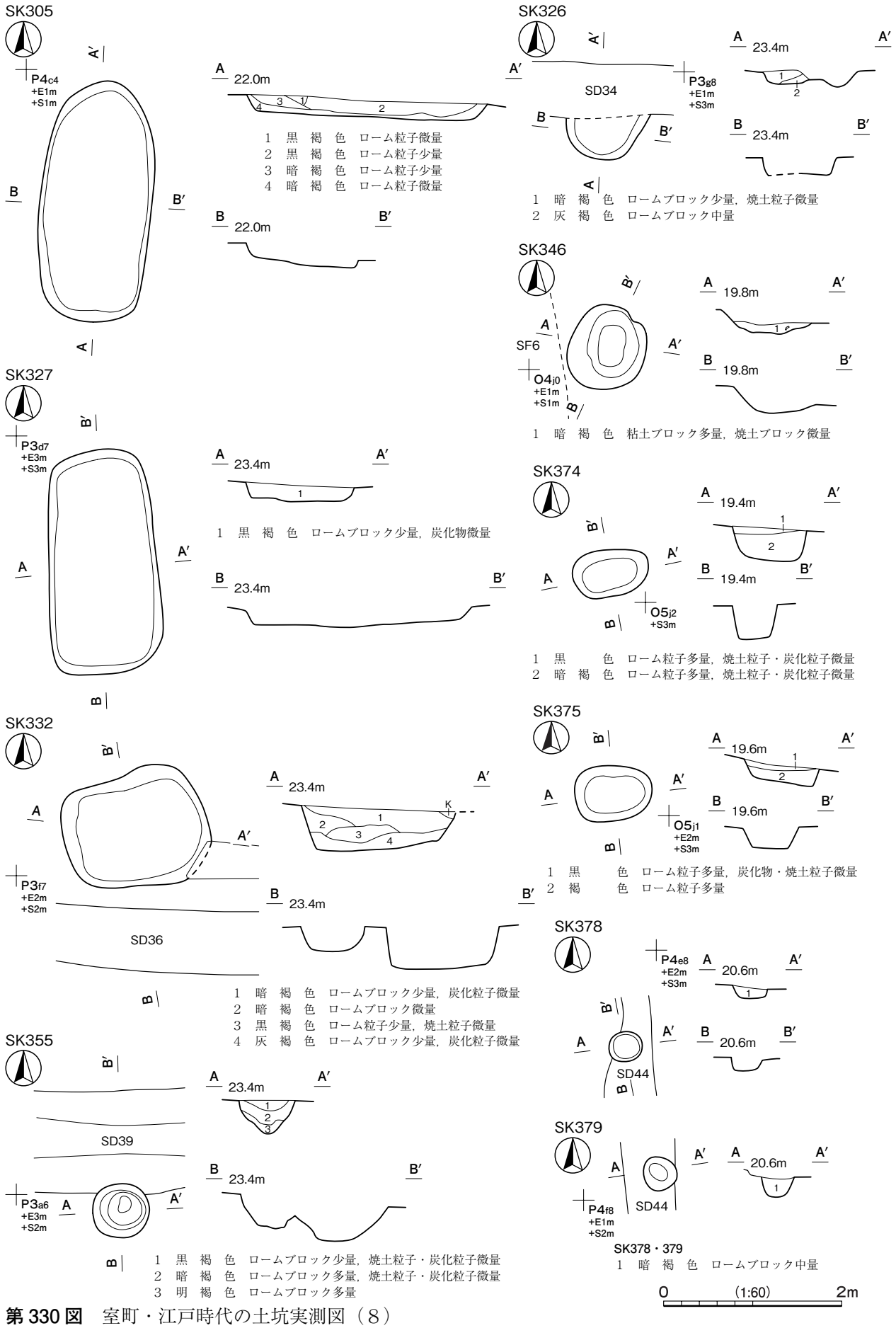
SK303



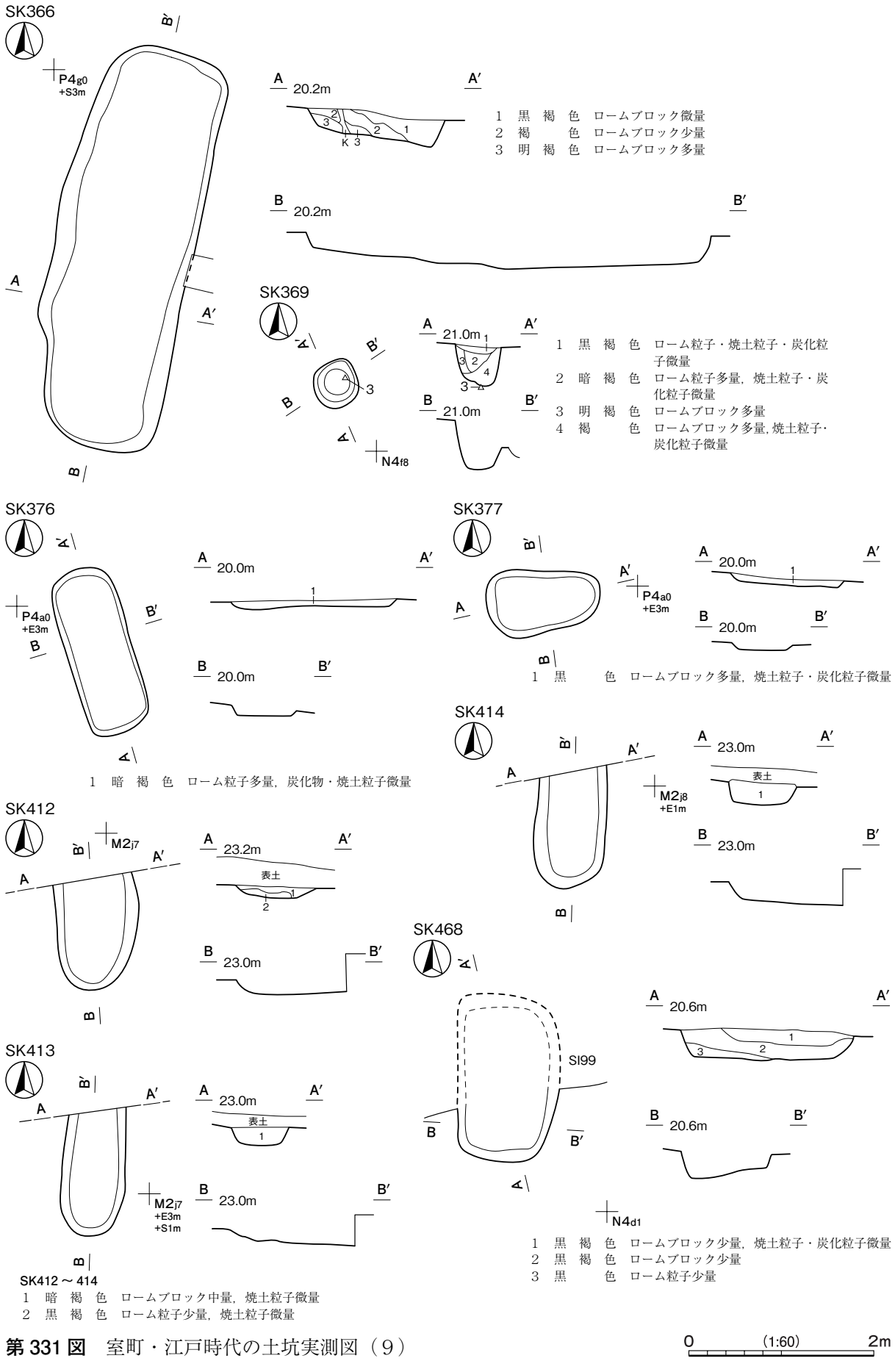
1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

0 (1:60) 2m

第 329 図 室町・江戸時代の土坑実測図（7）

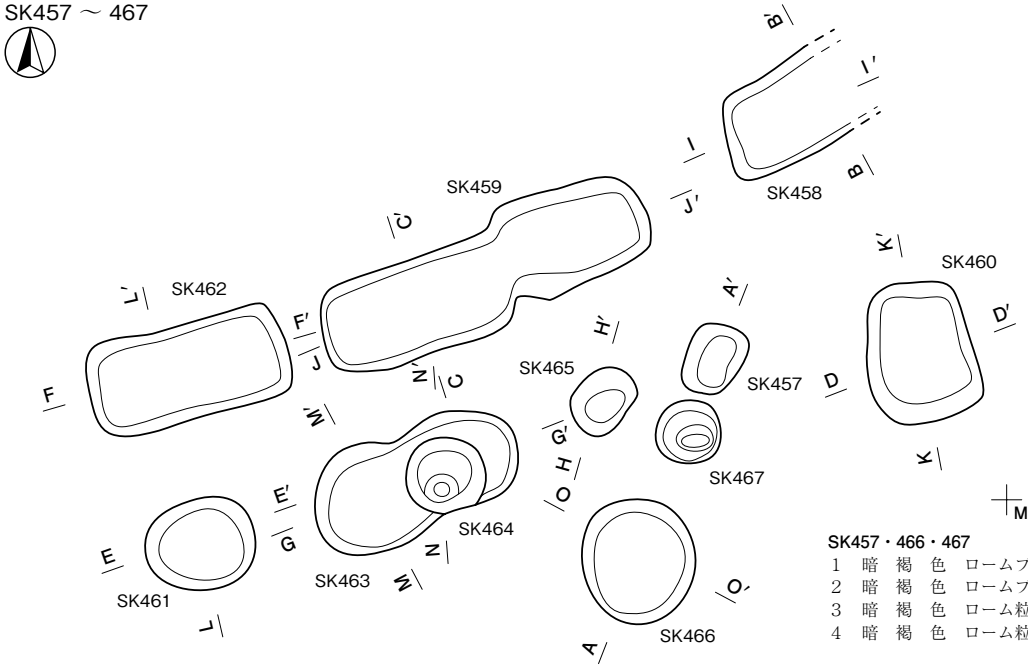


第 330 図　室町・江戸時代の土坑実測図（8）

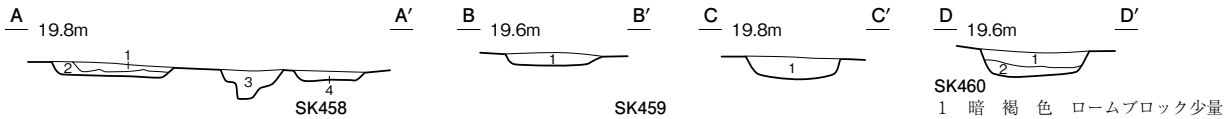


第 331 図　室町・江戸時代の土坑実測図（9）

SK457 ～ 467



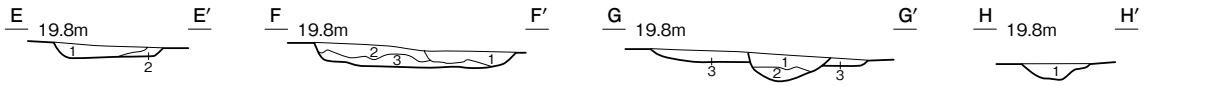
SK457・466・467
1 暗 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ロームブロック多量
3 暗 褐 色 ローム粒子微量
4 暗 褐 色 ローム粒子少量



SK458
1 黒 褐 色 ロームブロック少量

SK459
1 暗 褐 色 ロームブロック中量

SK460
1 暗 褐 色 ロームブロック少量
2 暗 褐 色 ローム粒子微量

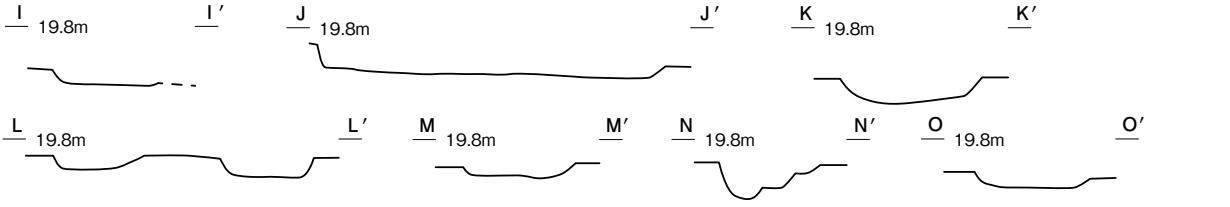


SK461
1 暗 褐 色 ローム粒子少量
2 暗 褐 色 ロームブロック多量

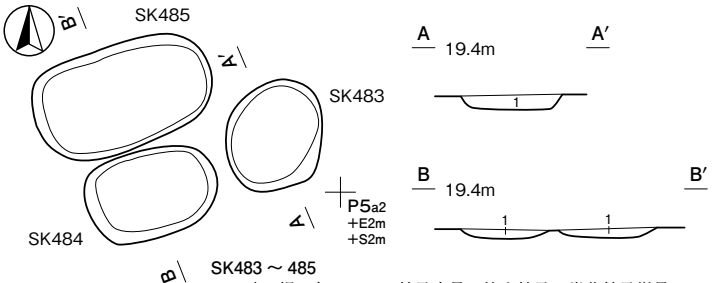
SK462
1 暗 褐 色 ローム粒子少量
2 暗 褐 色 ロームブロック少量
3 暗 褐 色 ローム粒子微量

SK463・464
1 暗 褐 色 ローム粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック中量
3 暗 褐 色 ローム粒子少量

SK465
1 暗 褐 色 ロームブロック中量

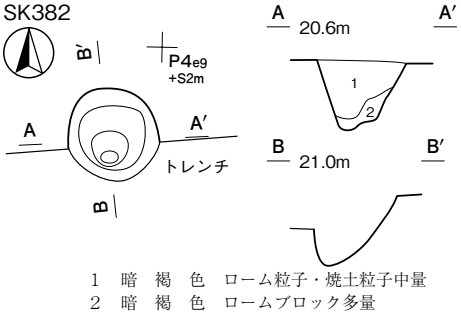


SK483・484・485



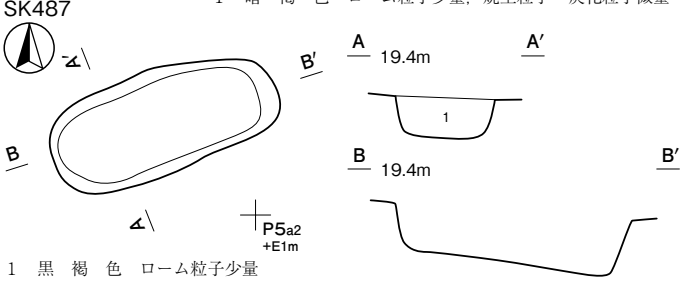
SK483 ～ 485
1 暗 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

SK382



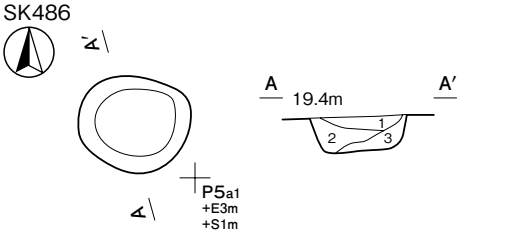
1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子中量
2 暗 褐 色 ロームブロック多量

SK487



1 黒 褐 色 ローム粒子少量

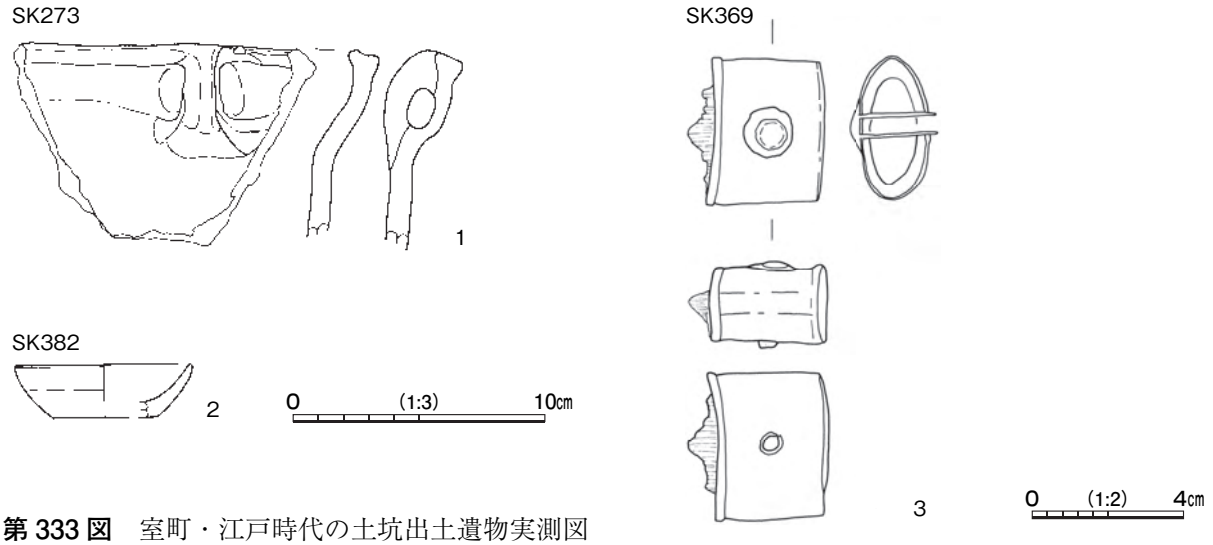
SK486



1 暗 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子微量
3 褐 色 ロームブロック少量

0 (1:60) 2m

第 332 図 室町・江戸時代の土坑実測図（10）



第 333 図　室町・江戸時代の土坑出土遺物実測図

表 220　室町・江戸時代の土坑出土遺物観察表（第 333 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
1	土師質土器	内耳鍋	－	(7.8)	－	長石・石英・雲母	褐	普通	口縁部耳部分	SK273	5％
2	土師質土器	小皿	[6.8]	2.1	[4.0]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SK382	10%

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
3	鞘尻金具	3.9	3.7	2.2	17.54	銅	傘釘状の鋲止め　内部に木質残存	SK369	

表 221　室町・江戸時代の土坑一覧表（墓坑含む）（1）

番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考 (旧→新)
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
47	N４j8	N－87°－E	長方形	17.2 × 0.89	9	平坦	外傾	自然	土師器３，須恵器１	SI10 →本跡
48	N４j7	N－83°－E	長方形	1.05 × 0.76	9	平坦 凹凸	外傾	自然	－	SI10 →本跡
49	N４i8	N－9°－W	長方形	3.20 × 0.94	47	平坦	外傾	人為	－	SI10 →本跡
50	N４j4	N－35°－E	楕円形	0.42 × 0.35	17	皿状	緩斜	自然	－	
51	N４h4	－	円形	0.40 × 0.40	20	皿状	外傾 緩斜	自然	－	
52	O４a4	－	円形	0.45 × 0.42	26	平坦	外傾	自然	土師器１，土師質土器１	
53	O４b9	N－15°－W	楕円形	1.70 × 0.73	10	平坦	緩斜	自然	土師器１	
54	O４a7	N－22°－W	楕円形	1.73 × 0.76	20	凹	緩斜	自然	土師器２，須恵器２	
55	N４i7	N－10°－W	長方形	3.24 × 0.89	43	平坦	ほぼ直立 外傾	自然	土師器３，須恵器１	SI10 →本跡
56	N４g7	N－6°－W	隅丸長方形	2.25 × 1.00	30	平坦	緩斜 外傾	自然	土師器８，須恵器１，土師質土器３，焼成粘土塊 17.1 g	
57	N４j6	N－16°－W	隅丸長方形	2.09 × 0.76	22	平坦	ほぼ直立 緩斜	人為	－	
58	O５h1	－	円形	0.98 × 0.88	12	平坦	緩斜	自然	土師器１，鉄塊系遺物 3.1 g，鉄滓 5.9 g	
59	O５h1	－	円形	0.32 × 0.31	38	皿状	ほぼ直立 外傾	自然	土師器２，土師質土器１	
61	N４g6	N－21°－W	不定形	0.78 × 0.59	16	平坦	緩斜	人為	－	
62	N４j8	N－81°－E	長方形	2.27 × 0.85	5	平坦	外傾	自然	－	SI10 →本跡
63	O４g8	N－81°－E	楕円形	1.18 × 0.75	60	皿状	外傾	人為	－	
64	O５h1	N－85°－E	隅丸長方形	1.20 × 0.77	18	平坦	外傾	自然	土師器５	
65	O５h1	N－85°－E	隅丸長方形	0.89 × 0.65	26	皿状	外傾	自然	土師器１，須恵器４	
67	O４b9	N－12°－W	楕円形	2.06 × 0.70	20	平坦	緩斜	自然	土師器５，須恵器１，土師質土器１	
68	O４a9	－	円形	0.50 × 0.45	23	皿状	外傾 ほぼ直立	自然	須恵器１，磁器１	
69	O５h1	N－80°－E	隅丸長方形	1.56 × 0.93	16	平坦	外傾	自然	土師器２	SK70 →本跡
70	O５h1	N－77°－E	［楕円形］	1.68 ×（0.54）	14	平坦	外傾	自然	土師質土器１，鉄滓 16.0 g	本跡→ SK69
71	N４g8	N－86°－E	隅丸長方形	2.65 × 0.68	23	平坦	緩斜	自然	－	
72	O４d9	N－9°－W	不整楕円形	3.76 × 0.98	18	平坦	緩斜	人為	－	SK116･117 重複，本跡→ SK74
73	O４d8	N－25°－W	楕円形	0.82 × 0.55	30	皿状	外傾	自然	土師器１，須恵器１	
74	O４e9	N－16°－W	長方形	1.63 × 0.68	20	平坦	緩斜	人為	土師器 20，土玉１，有孔円盤１	SK72 →本跡
77	O４h9	－	円形	0.63 × 0.61	20	平坦	ほぼ直立 緩斜	自然	土師器３	

表 222　室町・江戸時代の土坑一覧表（墓坑含む）（2）

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考（旧→新）
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
79	O 4 h8	N－39°－W	楕円形	0.51 × 0.40	11	平坦	直立 緩斜	自然	－	
80	O 4 h8	－	円形	0.35 × 0.34	10	平坦	外傾 緩斜	自然	－	
81	O 4 g9	－	円形	0.54 × 0.52	24	皿状	直立 緩斜	自然	土師器2	
82	O 4 g8	N－11°－W	楕円形	0.36 × 0.30	14	平坦	直立 外傾	自然	－	
83	O 4 g8	N－54°－W	楕円形	0.50 × 0.41	13	平坦	外傾 緩斜	自然	－	
84	O 4 g8	－	円形	0.40 × 0.39	19	平坦	直立 外傾	自然	－	
85	O 4 g9	N－64°－W	楕円形	0.41 × 0.33	17	平坦	外傾	自然	－	
86	O 4 h0	N－10°－W	楕円形	0.29 × 0.23	8	皿状	外傾	自然	金属製品1	
87	O 4 h0	－	円形	0.25 × 0.24	10	皿状	外傾	自然	土師器2	
89	O 4 d8	N－6°－E	楕円形	0.76 × 0.60	25	皿状	外傾	自然	－	
91	O 4 h0	N－2°－W	楕円形	0.42 × 0.18	15	皿状	外傾	自然	－	
92	O 4 h0	N－2°－W	楕円形	0.90 × 0.31	15	皿状	外傾	人為	－	
93	O 4 h0	N－3°－W	隅丸長方形	1.30 × 0.58	6	平坦	緩斜	自然	－	
94	O 4 h0	－	円形	0.29 × 0.27	16	皿状	緩斜 外傾	自然	土師器1，鉄塊系遺物 7.9 g	
100	O 4 c9	N－37°－W	楕円形	0.54 × 0.42	38	皿状	ほぼ直立	人為	－	
102	O 4 d9	N－11°－W	楕円形	0.75 × 0.38	26	皿状	直立	自然	土師器6，須恵器2，銭貨1	
103	O 4 d9	N－14°－W	楕円形	0.45 × 0.34	18	皿状	緩斜	自然	－	
104	O 4 d9	N－24°－E	楕円形	0.35 × 0.31	15	皿状	外傾	人為	－	
105	O 4 d9	N－17°－W	楕円形	0.48 × 0.39	28	皿状	直立 緩斜	自然	土師器1	SK106 →本跡
106	O 4 d9	N－84°－W	［楕円形］	（0.40）× 0.37	15	皿状	外傾	自然	陶器1	本跡→ SK105
107	O 4 d9	N－14°－E	楕円形	0.61 × 0.32	26	皿状	ほぼ直立	自然	－	
108	O 4 d0	N－81°－E	楕円形	0.53 × 0.46	20	皿状	外傾	自然	－	
109	O 4 e0	N－45°－E	楕円形	0.52 × 0.38	15	皿状	緩斜	自然	－	SK110 →本跡
110	O 4 d0	N－38°－W	［楕円形］	（0.34）× 0.28	12	皿状	緩斜	人為	－	本跡→ SK109
111	O 4 i4	N－74°－W	楕円形	0.40 × 0.31	11	皿状	外傾	自然	－	
112	O 4 i4	－	円形	0.35 × 0.35	13	皿状	外傾 緩斜	自然	－	
113	O 4 f8	N－2°－E	楕円形	0.34 × 0.30	21	皿状	ほぼ直立	自然	－	
114	O 4 d9	N－49°－E	楕円形	0.68 × 0.43	31	皿状	ほぼ直立	人為	－	
115	O 4 g8	N－84°－W	不整楕円形	1.87 × 0.80	15	平坦	外傾	自然	－	
116	O 4 d9	－	円形	0.43 × 0.39	22	皿状	緩斜 直立	自然	土師器4	SK72 重複
117	O 4 d9	N－41°－W	［不整楕円形］	0.72 ×（0.48）	8	平坦	緩斜	自然	土師器4	SK72 重複
120	O 5 g1	N－82°－E	長方形	1.46 × 1.13	27	平坦	直立	自然	土師器2，須恵器2，土師質土器1	
121	O 5 g1	－	［楕円形］	（1.21）×（0.34）	12	平坦	外傾	自然	－	
147	N 4 f7	N－60°－E	楕円形	1.17 × 0.98	13	平坦	外傾	－	土師質土器1	SF 3 →本跡
148	N 4 e7	N－7°－W	不整長方形	1.78 × 1.28	21・52	平坦	外傾	－	土師器5，須恵器2，土師質土器3，鉄塊系遺物 264.2 g，鉄滓 39.9 g，剥片1	SK166・SF 3 →本跡
149	N 4 e7	N－84°－E	楕円形	1.26 × 0.67	8	平坦	外傾	－	土師質土器1	SF 3 →本跡
166	N 4 e7	N－8°－W	［楕円形］	1.43 ×（0.82）	23	平坦	外傾	人為		SF 3 →本跡
177	O 3 e7	N－44°－E	楕円形	0.54 × 0.38	13	平坦	外傾	自然	土師器2，磁器1	
245	N 3 d9	N－4°－W	隅丸長方形	0.83 × 0.60	25	平坦	外傾	人為	土師器4	墓坑
253	Q 4 c1	N－83°－W	隅丸長方形	3.70 × 0.73	48	平坦	外傾	人為	土師器11，須恵器11，陶器2	本跡→ SK254
254	Q 4 c1	N－8°－E	隅丸長方形	3.20 × 0.72	50	平坦	外傾	人為	土師器13，須恵器10，鉄塊系遺物 45.0 g	SK253 →本跡
255	Q 4 d2	－	［円形］	（1.38）× 1.30	28	平坦	外傾	人為	人骨	墓坑
256	Q 4 b5	N－1°－E	長方形	1.68 × 0.93	8	凹凸	緩斜	人為	土師器1，須恵器1	SX 4 →本跡
257	Q 4 b5	N－30°－W	楕円形	0.43 × 0.32	62	皿状	直立 外傾	自然	－	SX 4 →本跡
258	Q 4 b6	N－69°－W	［楕円形］	0.58 ×（0.14）	39	皿状	外傾	－	－	
259	Q 4 c6	－	円形	0.34 × 0.31	7	平坦	外傾	人為	－	SX 4 →本跡
260	Q 4 c7	N－17°－E	［隅丸長方形］	（2.72）× 0.68	10	外傾	平坦	人為	縄文土器1	SX 4 →本跡 → SK261
261	Q 4 c8	N－45°－W	楕円形	0.60 × 0.35	20	外傾	平坦	自然	土師器1	SK260，SX 4 →本跡
264	Q 3 c0	N－17°－E	長方形	1.27 × 1.08	57	直立	平坦	人為	人骨，五鈷杵1，環状銅製品1，銭貨6	SI55 →本跡 → SD31 墓坑
265	P 4 i7	N－81°－W	長方形	0.79 × 0.45	31	平坦	ほぼ直立	人為	－	SI56 →本跡，SA 8－P 3重複 第 306 図
267	Q 4 d3	N－30°－E	楕円形	1.10 × 0.72	42	平坦	外傾	人為	－	SX 4 →本跡
268	Q 4 c3	N－62°－E	楕円形	0.93 × 0.61	25	皿状	外傾	人為	－	SX 4 →本跡
269	Q 4 c3	N－79°－W	楕円形	0.41 × 0.29	27	平坦	ほぼ直立	自然	土師質土器1	SX 4 →本跡
270	Q 4 c3	N－39°－E	楕円形	0.38 × 0.33	18	皿状	外傾	自然	－	SX 4 →本跡
271	Q 4 c3	－	円形	0.37 × 0.35	25	皿状	外傾	自然	－	SX 4 →本跡
272	Q 4 c3	N－83°－W	楕円形	0.25 × 0.22	12	皿状	外傾	自然	－	SX 4 →本跡
273	P 4 i7	N－69°－W	楕円形	1.11 × 0.76	6	平坦	緩斜	人為	土師質土器2	SI56 →本跡，SA 8 第 306 図
274	P 3 g7	N－16°－W	楕円形	0.69 × 0.51	34	皿状	直立 外傾	人為	土師器9	SI57 →本跡

表 223　室町・江戸時代の土坑一覧表（墓坑含む）（３）

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考（旧→新）
275	Ｐ３ｆ7	Ｎ－46°－Ｅ	長方形	0.89 × 0.75	18	平坦	直立 外傾	自然	土師器 14，須恵器２	SI57→本跡→SD36
276	Ｐ３ｅ8	Ｎ－87°－Ｗ	楕円形	1.15 × 1.02	18	平坦	外傾	自然	土師器 11，縄文土器１	
278	Ｐ３ｆ8	Ｎ－55°－Ｗ	不整楕円形	1.20 × 0.83	52	平坦 凹凸	外傾 直立	自然	土師器 13，鉄塊系遺物 45.0 ｇ	SK279→本跡
279	Ｐ３ｅ8	Ｎ－62°－Ｗ	不整楕円形	1.08 × 0.90	20	平坦	外傾 緩斜	自然	土師器６，須恵器１	本跡→SK278
280	Ｐ３ｅ9	－	円形	0.55 × 0.54	41	平坦	ほぼ直立	自然	－	
281	Ｐ４ｆ3	Ｎ－49°－Ｗ	楕円形	0.67 × 0.52	84	平坦	外傾 直立	人為	土師器７，須恵器１，土師質土器１，鉄塊系遺物 3.6 ｇ	
282	Ｐ４ｆ2	Ｎ－15°－Ｗ	楕円形	0.34 × 0.28	60	平坦	ほぼ直立	自然	土師器１，須恵器１	
285	Ｐ３ｇ8	Ｎ－43°－Ｅ	楕円形	0.68 × 0.59	55	平坦	ほぼ直立	人為	土師器３	
286	Ｐ３ｇ8	－	隅丸方形	0.43 × 0.40	43	平坦	直立 外傾	人為	土師器６	
288	Ｐ４ｃ3	－	円形	1.07 × 1.03	64	平坦	直立	人為	土師器 10，須恵器３	
289	Ｐ４ｃ3	－	円形	0.68 × 0.65	87	平坦	直立	人為	土師器５，土師質土器１	
292	Ｐ３ｅ9	Ｎ－11°－Ｗ	楕円形	0.28 × 0.25	62	平坦	直立	自然	－	
293	Ｐ４ｃ2	Ｎ－４°－Ｗ	楕円形	1.87 × 1.39	30	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器３，須恵器３	
294	Ｐ４ｃ1	Ｎ－88°－Ｅ	長方形	1.73 × 0.90	15	平坦	緩斜	自然	土師器３，須恵器１，縄文土器１	SB17 重複
295	Ｐ４ｃ2	Ｎ－85°－Ｅ	長方形	2.10 × 1.18	36	平坦	ほぼ直立	自然	土師器33，須恵器8，土師質土器1，縄文土器1，椀状滓311 ｇ，鉄滓173 ｇ	SB17 重複
296	Ｐ３ｄ6	Ｎ－64°－Ｅ	楕円形	0.88 × 0.55	10	平坦	外傾	自然	－	
297	Ｐ３ｃ6	Ｎ－83°－Ｅ	楕円形	0.90 × 0.48	27	皿状	外傾	人為	土師器２，陶器１	
298	Ｐ３ｅ9	Ｎ－７°－Ｅ	［方形］	［0.47］× 0.46	44	皿状	ほぼ直立	自然	－	SI61→本跡
300	Ｐ４ｅ1	Ｎ－５°－Ｅ	楕円形	0.85 × 0.68	22	皿状	緩斜	自然	土師器６，須恵器２	
303	Ｐ３ｅ0	Ｎ－13°－Ｅ	楕円形	0.61 × 0.50	17	緩斜	外傾	自然	椀状滓 57.7 ｇ	
305	Ｐ４ｃ4	Ｎ－５°－Ｅ	楕円形	2.70 × 1.23	15	平坦	外傾	自然	土師器 17，須恵器２，土師質土器２	
326	Ｐ３ｇ8	－	－	（0.94）×（0.46）	24	凹凸	外傾	人為	－	本跡→SD34
327	Ｐ３ｅ7	Ｎ－２°－Ｗ	隅丸長方形	2.52 × 1.21	20	平坦	外傾	人為	土師器 17，須恵器６，鉄滓 14.0 ｇ	
332	Ｐ３ｆ7	Ｎ－78°－Ｅ	隅丸長方形	1.60 × 1.33	80	平坦	ほぼ直立	人為	土師器35，須恵器２，土師質土器１，椀状滓 34.6 ｇ，鉄塊系遺物 52.4 ｇ	
346	Ｏ４ｊ0	Ｎ－24°－Ｅ	楕円形	0.97 × 0.85	18	平坦	緩斜	自然	－	SX2→本跡 SD26 重複
355	Ｐ３ａ7	－	円形	0.63 × 0.65	27	平坦	緩斜	人為	－	本跡→SD39
358	Ｐ４ｆ6	Ｎ－12°－Ｗ	［楕円形］	（0.05）×（0.42）	44	平坦	ほぼ直立		土師質土器３	SI66→本跡 第 55・56 図
362	Ｐ３ｂ6	Ｎ－28°－Ｅ	［楕円形］	［0.44］×［0.34］	4	平坦	緩斜	人為	土師質土器２	SI64→本跡
366	Ｐ４ｈ0	Ｎ－13°－Ｅ	隅丸長方形	4.38 × 1.50	35	平坦	外傾	人為	－	
367	Ｐ４ｊ0	Ｎ－57°－Ｅ	楕円形	0.26 × 0.23	15	皿状	外傾	人為	土師質土器３	
368	Ｐ４ｂ0	Ｎ－83°－Ｗ	［楕円形］	［0.62］×［0.43］	35	平坦	ほぼ直立	人為	土師質土器３	SI79→本跡 SI81 重複
369	Ｐ４ｅ7	－	［円形］	0.50 ×［0.50］	54	平坦	ほぼ直立	人為	鞘尻金具１	SI85 重複
374	Ｏ５ｊ1	Ｎ－76°－Ｅ	楕円形	0.85 × 0.53	37	平坦	ほぼ直立	人為	土師器１，須恵器２，縄文土器１	
375	Ｏ５ｊ1	Ｎ－82°－Ｅ	楕円形	0.86 × 0.63	24	平坦	外傾	人為	須恵器１	
376	Ｐ４ａ0	Ｎ－17°－Ｗ	隅丸長方形	1.82 × 0.70	10	平坦	外傾	人為	土師器３，須恵器１，鉄塊系遺物 83.2 ｇ	
377	Ｐ４ａ0	Ｎ－84°－Ｅ	不整楕円形	1.21 × 0.68	6	平坦	外傾	人為	土師器１	
378	Ｐ４ｆ8	－	円形	0.37 × 0.35	12	平坦	直立 外傾	人為	－	SI85→本跡→SD44
379	Ｐ４ｆ8	－	円形	0.39 × 0.37	22	皿状	外傾	人為	－	SI85→本跡→SD44
382	Ｐ４ｅ8	－	［円形］	［0.74］× 0.72	55	皿状	緩斜	人為	土師器８，土師質１	SI85 重複
412	Ｍ２ｊ7	Ｎ－４°－Ｅ	［楕円形］	（1.22）× 0.86	15	平坦	外傾	人為	－	
413	Ｍ２ｊ7	Ｎ－４°－Ｅ	［楕円形］	（1.33）× 0.68	15	平坦	緩斜	人為	土師器 11，須恵器１，土師質土器１	
414	Ｍ２ｊ8	Ｎ－５°－Ｅ	［楕円形］	（1.25）× 0.77	24	平坦	外傾	人為	土師器４，須恵器２	
457	Ｍ４ｇ3	Ｎ－22°－Ｅ	隅丸長方形	0.57 × 0.45	13	皿状	緩斜	自然	－	
458	Ｍ４ｇ3	Ｎ－62°－Ｅ	［隅丸長方形］	（0.92）× 0.74	10	平坦	外傾	自然	－	
459	Ｍ４ｇ2	Ｎ－69°－Ｅ	隅丸長方形	2.74 × 0.77	18	平坦	外傾	人為	縄文土器１，鉄滓 41.9 ｇ	
460	Ｍ４ｇ3	Ｎ－11°－Ｗ	隅丸長方形	1.11 × 0.84	20	皿状	外傾	自然	－	
461	Ｍ４ｈ2	Ｎ－72°－Ｅ	楕円形	0.87 × 0.73	10	平坦	緩斜	自然	－	
462	Ｍ４ｇ2	Ｎ－75°－Ｅ	隅丸長方形	1.61 × 0.73	14	平坦	外傾	自然	－	
463	Ｍ４ｇ2	Ｎ－65°－Ｅ	不整楕円形	1.72 × 0.78	10	平坦	緩斜	自然	－	本跡→SK464
464	Ｍ４ｇ2	－	円形	0.65 × 0.60	28	凹凸	外傾 緩斜	人為	－	SK463→本跡
465	Ｍ４ｇ3	Ｎ－37°－Ｅ	楕円形	0.57 × 0.43	14	皿状	外傾	自然	－	
466	Ｍ４ｈ3	－	円形	0.98 × 0.90	10	平坦	緩斜	自然	－	
467	Ｍ４ｇ3	－	円形	0.53 × 0.50	22	皿状	緩斜	自然	－	
468	Ｎ３ｃ0	Ｎ－４°－Ｅ	［隅丸長方形］	［1.79］×［1.10］	30	平坦	直立		－	SI99→本跡
483	Ｐ５ａ2	Ｎ－31°－Ｅ	楕円形	0.92 × 0.78	10	平坦	外傾	自然	土師器４，鉄塊系遺物 17.4 ｇ	
484	Ｐ５ａ2	Ｎ－45°－Ｅ	隅丸長方形	1.05 × 0.71	6	皿状	緩斜	自然	土師器１，鉄塊系遺物 7.3 ｇ	
485	Ｐ５ａ2	Ｎ－70°－Ｅ	楕円形	1.44 × 0.82	7	皿状	緩斜	自然	－	
486	Ｐ５ａ1	Ｎ－78°－Ｗ	楕円形	0.87 × 0.75	26	平坦	外傾	人為	－	
487	Ｏ５ｊ2	Ｎ－71°－Ｅ	楕円形	1.85 × 0.82	44	平坦	直立	自然	－	

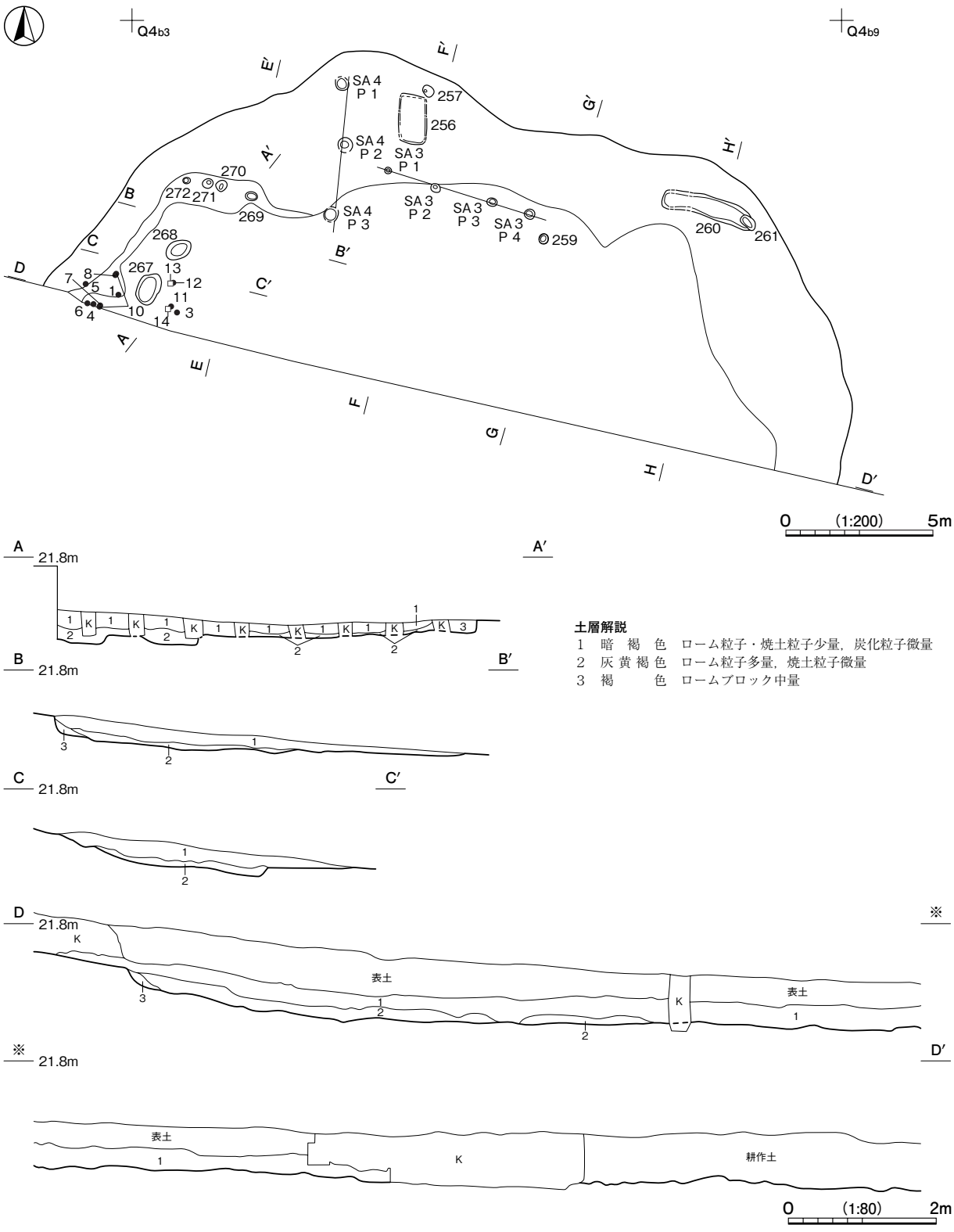
(6) 段切状遺構

第1号段切状遺構（第334・335図　PL30）

位置　調査区南部のQ4b2～Q4b9区，標高20.8～21.2mほどの斜面部に位置している。

重複関係　第256・257・259・260・261・267～272号土坑，第3・4号柱穴列に掘り込まれている。

規模と構造　南側は調査区域外に延びており，東側も耕作による撹乱を受けているため，東西径27.5m，南

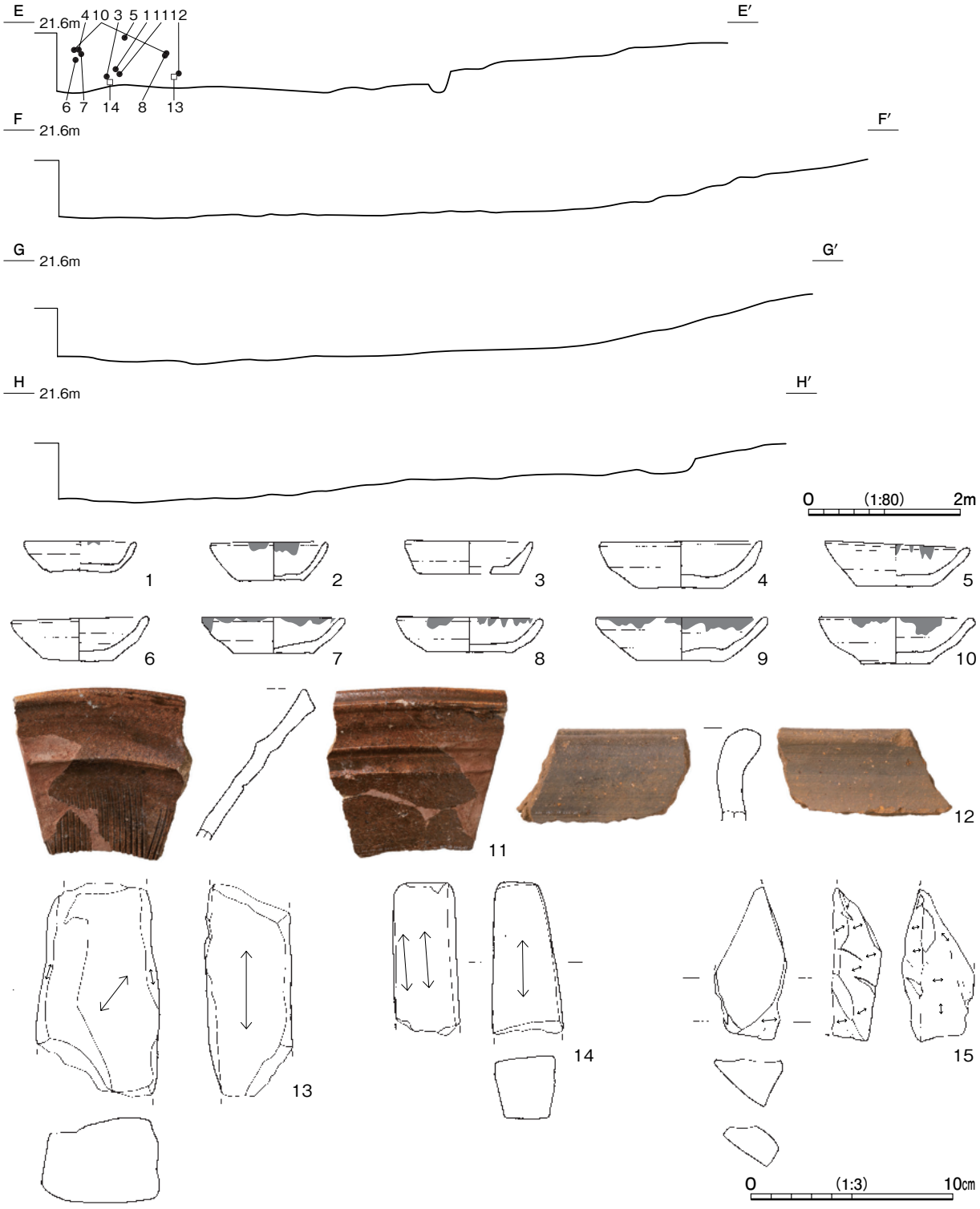


第334図　第1号段切状遺構実測図

北径 10.8 m しか確認できなかった。形状は半円形を呈している。深さ６～ 20㎝で，底面は平坦である。調査区南側に向かって緩やかに傾斜している斜面地を掘削して，平坦面を作り出している。

構築土　３層に分層できる。ロームブロックが含まれているため，第３層は埋め戻されている。第１・２層は，レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

遺物出土状況　縄文土器片１点，土師器片 29 点，須恵器片 10 点，土師質土器片 29 点（小皿 21，内耳鍋８），陶器片 18 点（皿１，擂鉢１，壺２，甕 14），磁器片１点（碗），石器･石製品 17 点（砥石５，五輪塔６，磨石ヵ１，



第 335 図　第１号段切状遺構・出土遺物実測図

礫５），椀状滓 229.2 ｇ，流動滓 14.3 ｇが出土している。１は覆土上層から，３･11 ～ 13･15 は覆土中層から，14 は覆土下層から出土している。それ以外の遺物は表土から出土しており，多くの遺物は流れ込んだものと考えられる。

所見　埋め戻された時期が，出土土器から 19 世紀前葉と考えられる。そのため，利用されていたのは 19 世紀前葉以前である。緩斜面を掘削して平坦面を作り出したと考えられる。平坦面上に遺構の痕跡を確認できなかった。北側斜面に当たるため，平坦面に存在したであるはずの建物の裏手に当たると考えられる。掘り込みによって形成された斜面と平坦面の境に第３号柱穴列が存在している。さらに，第 269 ～ 272 号土坑も同様に境界線上に直線状に並んでいるため，境界としての柵が設けられていた可能性がある。また，緩斜面を背負っている場所のため，土留めが設けられていた可能性もある。

表 224　第１号段切状遺構出土遺物観察表（第 335 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師質土器	小皿	5.3	1.5	3.0	長石・石英・雲母・細礫	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　灯明皿として使用	覆土上層	
2	土師質土器	小皿	5.7	1.9	3.2	長石・石英・雲母	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　灯明皿として使用	覆土中層	
3	土師質土器	小皿	6.1	1.6	(4.9)	長石	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　底部に貫通孔	覆土上層	
4	土師質土器	小皿	7.9	2.3	4.2	長石	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　外面に煤	表土中	
5	土師質土器	小皿	6.9	2.0	3.8	長石	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　口縁部内面に油煙	表土中	
6	土師質土器	小皿	6.7	2.2	3.4	長石	黄灰	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	表土中	
7	土師質土器	小皿	(7.0)	1.7	(3.9)	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り後一方向のヘラ削り　口縁部外・内面に油煙	表土中	
8	土師質土器	小皿	(7.2)	1.7	(4.2)	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り後一方向のヘラ削り　口縁部外・内面に油煙	表土中	
9	土師質土器	小皿	[8.4]	2.2	4.2	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　口縁部外・内面に油煙	表土中	
10	土師質土器	小皿	7.7	2.3	3.4	長石・雲母	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　口縁部外・内面に油煙	表土中	

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文　様　の　特　徴	釉　薬	産　地	出土位置	備　考
11	陶器	擂鉢	－	(7.4)	－	長石・淡黄　暗褐	ロクロ成形　口縁部折縁形　外帯狭　櫛目 16 本１単位	錆釉	瀬戸・美濃系	覆土中層	19 世紀 登窯期 第３段階
12	陶器	広口壺	－	4.5	－	長石・石英・細礫・褐灰	紐作り　口縁部外・内面横位のナデ　口縁部折り返し部若干の隙間	－	常滑	覆土中層	第３段階 ９期（1400 ～ 1450 年）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
13	砥石	(10.5)	6.1	4.2	411.8	雲母片岩	表・側面の３面の砥面	覆土中層	
14	砥石	(7.1)	3.4	3.2	123.7	凝灰岩	下端の欠損部以外全て砥面	覆土下層	PL47
15	砥石	(7.5)	3.5	2.4	50.99	凝灰岩	砥面３面　刃物痕	覆土中層	
16	磨石ヵ	(8.0)	(6.5)	(3.9)	337..4	安山岩	4 面に摩耗痕あり	覆土下層	観察表のみ
17	砥石	(5.9)	(7.1)	(2.7)	337..2	雲母片岩	砥面１面のみ	覆土中層	観察表のみ
18	五輪塔	(14.3)	(9.7)	(8.9)	1590.6	花崗岩	風化が著しく，元の形状は不明　表面脆い	覆土中層	観察表のみ
19	五輪塔	(10.5)	(4.9)	(4.9)	297.6	花崗岩	風化が著しく，元の形状は不明　表面脆い	覆土中層	観察表のみ
20	五輪塔	(9.2)	(7.6)	(5.5)	1999.3	花崗岩	風化が著しく，元の形状は不明　表面脆い	覆土中層	観察表のみ
21	五輪塔	(7.0)	(5.5)	(2.6)	567.5	花崗岩	風化が著しく，元の形状は不明　表面脆い	覆土中層	観察表のみ
22	五輪塔	(7.5)	(5.2)	(4.8)	304.9	花崗岩	風化が著しく，元の形状は不明　表面脆い	覆土中層	観察表のみ

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土・色調	特　　徴	出土位置	備　考
23	瓦	(3.0)	(3.3)	1.2	18.65	長石・石英・雲母・灰	破片のため形状不明　表裏面雲母　18 世紀代ヵ	覆土中	観察表のみ

(7) 柱穴列

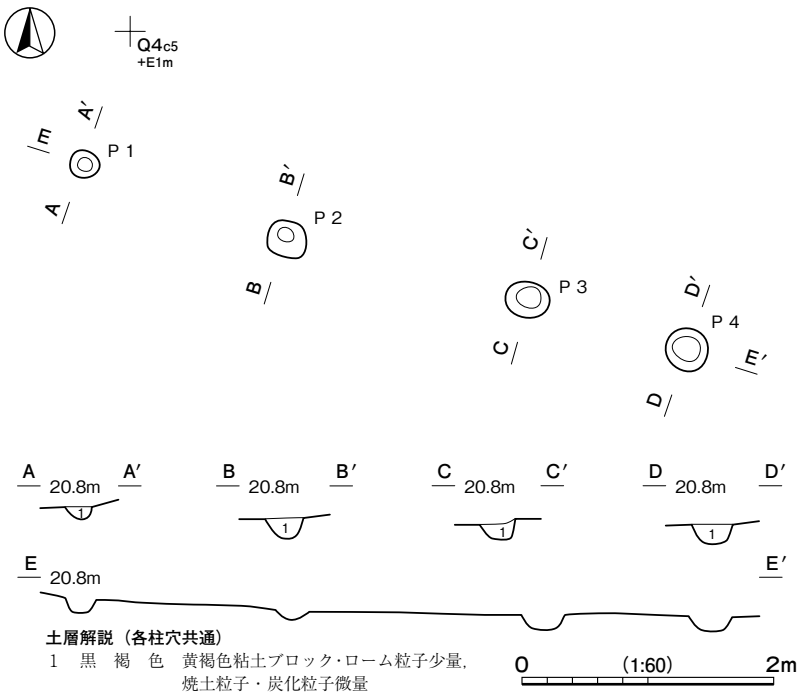
第３号柱穴列（第 336 図）

位置　調査区南部のＱ４c5 ～Ｑ４c6 区，標高 20.5 ～ 20.7 ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第１号段切状遺構を掘り込んでいる。

規模と形状　北東から南西 5.02 ｍの間に配列された柱穴４か所を確認した。配列方向はＮ－ 73°－ Ｗである。柱間寸法は 1.03 ～ 1.95 ｍ（３～６尺）で，柱筋はほぼ揃っている。

柱穴　４か所。平面形は円形または楕円形で，長径 24 ～ 39㎝，短径 23 ～ 35㎝である。深さは５～ 11㎝で，掘方の壁は外傾している。第１層は，粘土ブロックが含まれているため，埋め戻されている。



第 336 図　第３号柱穴列実測図

所見　遺物は出土していないが，第１号段切状遺構の平坦面を掘り込んでいるため，時期は段切状遺構が埋め戻された 19 世紀前葉よりも前であり，段切状遺構に伴う遺構と考えられる。本跡は，掘り込みによって形成された斜面と平坦面の境に存在しているため，境界の柵が設けられていたと想定される。また，段切状遺構の緩斜面を背負っているので土留めの可能性もある。

表 225　第３号柱穴列ピット一覧表

番号	位 置	形状	規模 長軸×短軸（m）	深さ
Ｐ１	Ｑ４c5	円形	0.24 × 0.23	9
Ｐ２	Ｑ４c5	円形	0.31 × 0.30	5
Ｐ３	Ｑ４c6	楕円形	0.39 × 0.29	9
Ｐ４	Ｑ４c6	円形	0.35 × 0.35	11

第４号柱穴列（第 337 図）

位置　調査区南部のＱ４b4 ～Ｑ４c4 区，標高 20.7 ～ 21.3 ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第１号段切状遺構を掘り込んでいる。

規模と形状　北から南 4.45 ｍの間に配列された柱穴３か所を確認した。配列方向はＮ－５°－Ｅである。柱間寸法は 2.10 ～ 2.40 ｍ（７～８尺）である。柱筋はＰ２のみ少し外れるが，ほぼ揃っている。

柱穴　３か所。平面形は円形で，長径 45 ～ 52㎝，短径 44 ～ 50㎝である。深さは 36 ～ 61㎝で，掘方の壁はほぼ直立である。ロームブロックや粘土ブロックが含まれているため，埋め戻されている。第１～４層は全て柱材抜き取り後の覆土である。底面に柱の当たりが確認できる。

所見　遺物は出土していないが，第１号段切状遺構で作り出した緩斜面を掘り込んでいるため，段切り状遺構が埋め戻された 19 世紀前葉以前で，段切状遺構に伴う遺構と考えられる。本跡は，掘り込みによって形成された北側斜面部に位置している。通路脇の境界の柵や手摺りが設けられていたと考えられる。また，第 257・258 号土坑も本跡と同じような深さのため，柵が東西方向にさらに延びていた可能性がある。

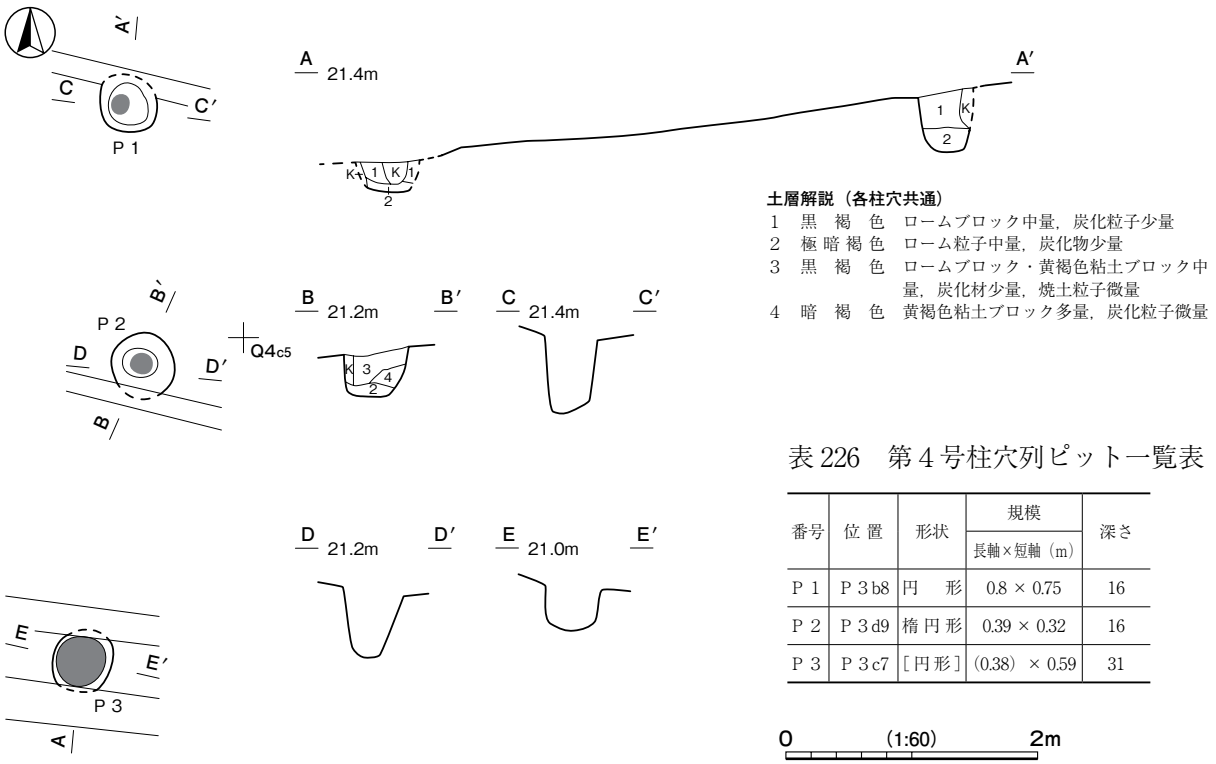


表 226　第４号柱穴列ピット一覧表

番号	位 置	形状	規模 長軸×短軸（m）	深さ
P 1	P 3 b8	円　形	0.8 × 0.75	16
P 2	P 3 d9	楕 円 形	0.39 × 0.32	16
P 3	P 3 c7	［円形］	(0.38) × 0.59	31

第 337 図　第４号柱穴列実測図

(8) 溝跡

当時代の溝跡 25 条を確認した。特徴的な溝跡７条以外の溝跡については，実測図（第 338 図～第 351 図）及び一覧表のみ記載をする。

第 32 号溝跡（第 338 ～ 343・348・349 図　PL31）

位置　調査区南部のＰ３i7 ～Ｑ５a3 区，標高 23.0 ｍほどの緩斜面部に位置している。

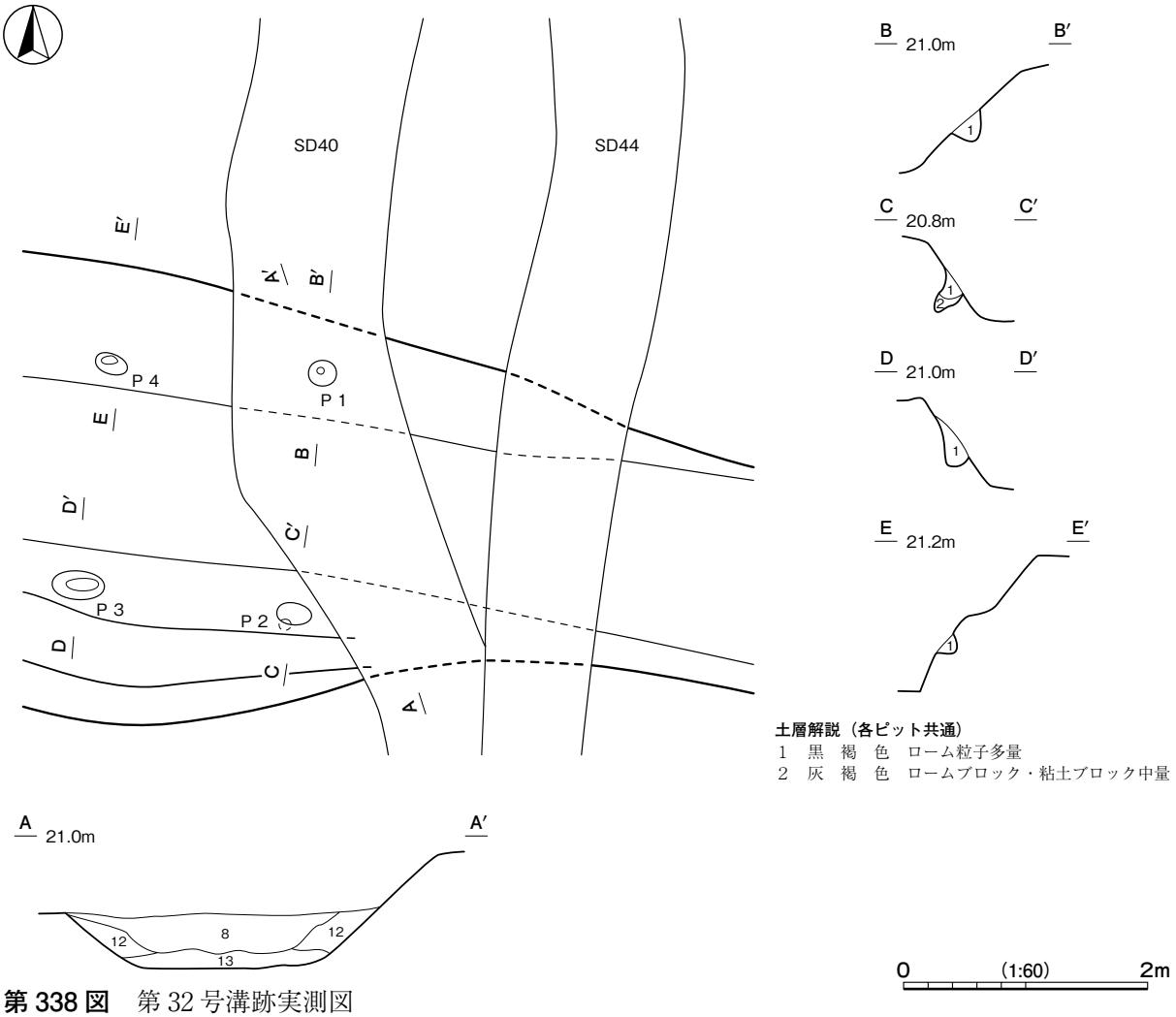
重複関係　第 69・70 号竪穴建物跡，第 37・45・46 号溝跡を掘り込み，第 33・40・44 号溝に掘り込まれている。第５号道路の下位で確認した。

規模と形状　西・東側が調査区域外に延びているため，長さは 66.85 ｍしか確認できなかった。Ｐ３i7 区から東方向（Ｎ － 95° － Ｅ）に，直線状に延びている。上幅 186 ～ 240㎝，下幅 98 ～ 160㎝，確認面からの深さ 98 ㎝で，断面形は逆台形である。底面は平坦で，壁は外傾している。底面は，西端部から東端部に向かって緩やかに下っている。また，第 40 号溝との交点付近で４か所のピットを確認した。

覆土　16 層に分層できる。ロームブロック，粘土ブロックが含まれ，不規則な堆積をしていることから埋め戻されている。

遺物出土状況　縄文土器片６点，土師器片 942 点，須恵器片 240 点，灰釉陶器３点，土師質土器片 106 点（小皿 48，内耳鍋 53，火鉢２，擂鉢３），陶器片 15 点（擂鉢３，花瓶１，壺１，甕 10），土製品４点（支脚２，紡錘車２），石器・石製品９点（ナイフ形石器１，剥片２，打製石斧１，砥石３，紡錘車１，五輪塔１），礫２点，金属製品３点（刀子１，鉄鏃ヵ１，不明鉄製品１），椀状滓 2010.7 ｇ，流動滓 27.9 ｇ，鉄塊系遺物 1194.4 ｇ，鉄滓 961.7 ｇが出土している。22 は本跡の上面にある第５号道路跡の構築土から，８・９は覆土上層から，11・18・19・23・24 は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から 15 世紀後葉と考えられる。第 40 号溝との交点付近のピットは，覆土が同質であ



第 338 図　第 32 号溝跡実測図

ること，同じ軸で並んでいることから，本溝に架けられた橋の橋脚の痕跡と考えられる。また，第 1 層は第 5 号道路跡の当初の路面および構築土と考えられる。本跡は区画の溝として長期間利用されていたと考えられる。第 39 号溝が区画溝として機能した 16 世紀後葉にも浅くなって機能していた可能性がある。

第 33 号溝跡（第 339 ～ 343・348 図　PL31）

位置　調査区南部のＰ 3i7 ～Ｑ 4 a8 区，標高 23.0 ｍほどの緩斜面部に位置している。

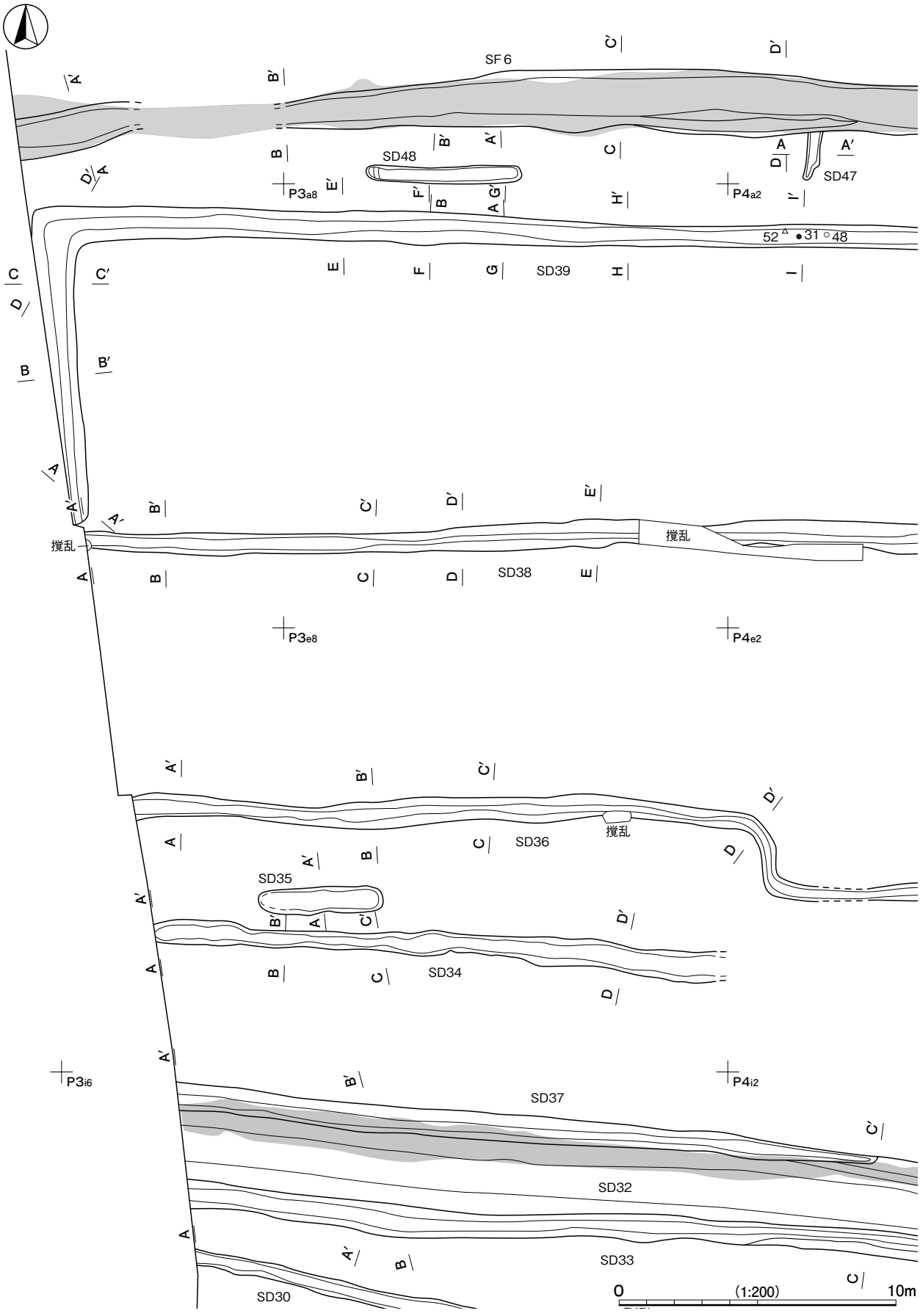
重複関係　第 70 号竪穴建物跡，第 32 号溝跡を掘り込み，第 40・44 号溝に掘り込まれている。

規模と形状　西・東側は調査区域外に延びているため，長さは 44.23 ｍしか確認できなかった。Ｐ 3i7 区から東方向（Ｎ － 95° － Ｅ）に，直線状に延びている。上幅 50 ～ 180㎝，下幅 16 ～ 56㎝，確認面からの深さ 35㎝で，断面形はＵ字状である。底面は平坦で，壁は外傾している。底面は，西端部から東端部に向かって緩やかに下っている。

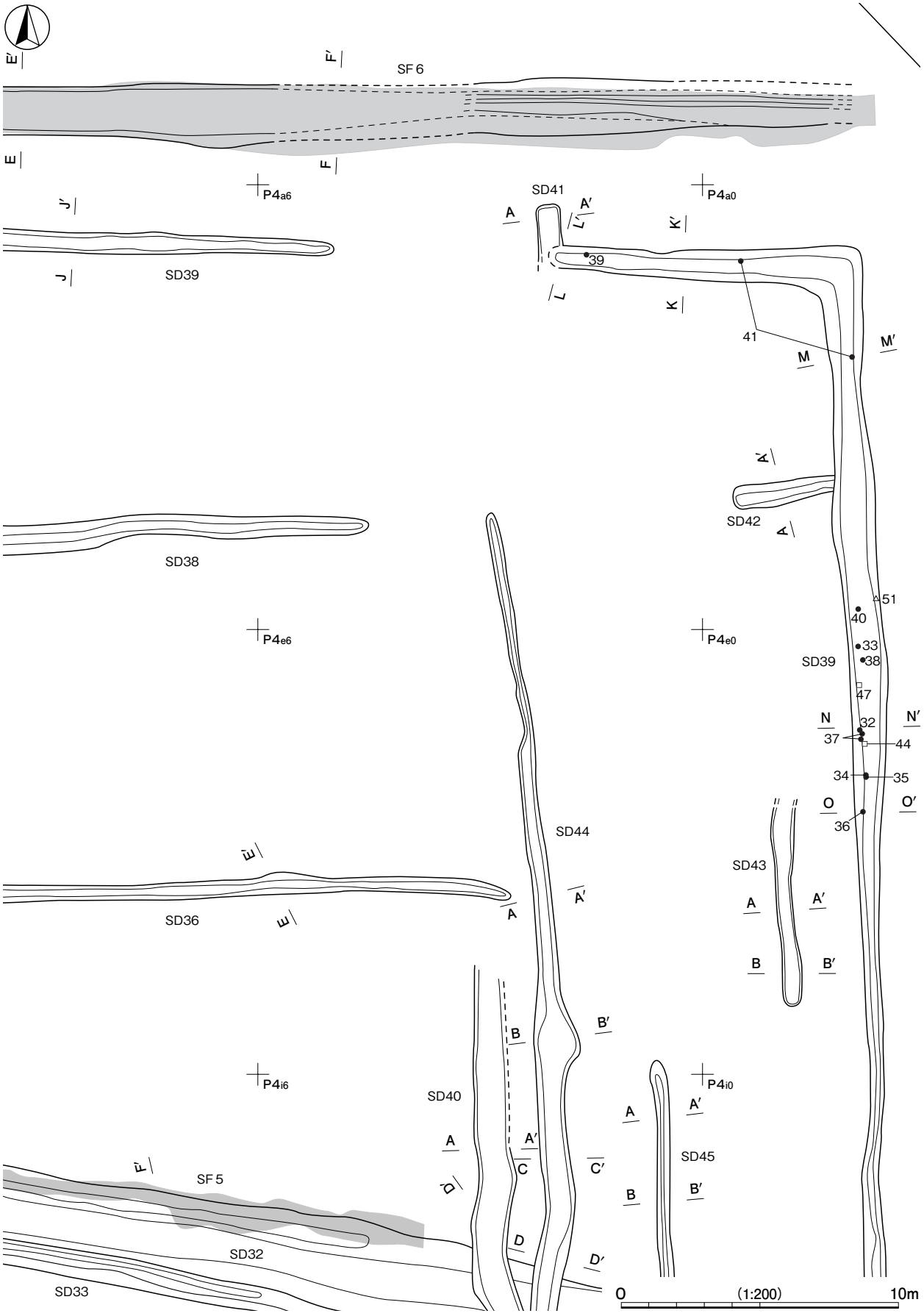
覆土　4 層に分層できる。ロームブロックを含んでいるため，埋め戻されている。

遺物出土状況　土師器片 26 点，須恵器片 3 点，土師質土器片 4 点（小皿 3，高台付小皿 1），鉄塊系遺物 69.8 ｇ，鉄滓 49.9 ｇが出土している。

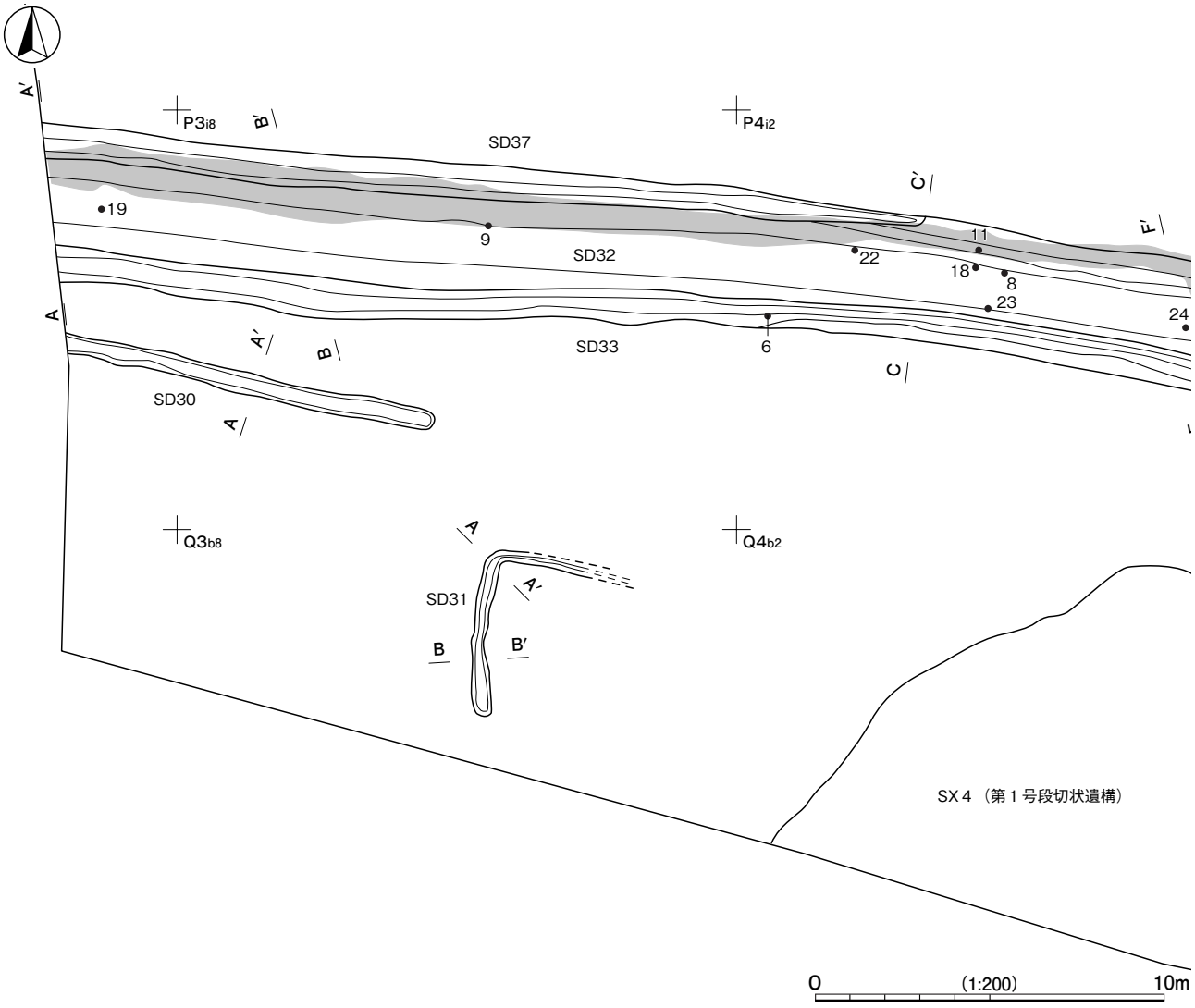
所見　出土遺物と重複関係から時期は 17 世紀前葉以降と考えられる。性格は，重複している第 32 号溝跡の上位にある第 5 号道路の側溝として機能していた可能性がある。



第 339 図　第 30 ～ 48 号溝跡，第 5 ・ 6 号道路跡，第 1 号段切状遺構実測図（1）



第 340 図　第 30 ～ 48 号溝跡，第 5 ・ 6 号道路跡，第 1 号段切状遺構実測図（2）



第 341 図　第 30 ～ 48 号溝跡，第５・６号道路跡，第１号段切状遺構実測図（３）

第 37 号溝跡（第 339・341・343 図　PL31）

位置　調査区南部のＰ３i7 ～Ｐ４i3 区，標高 23.0 ｍほどの緩斜面部に位置している。

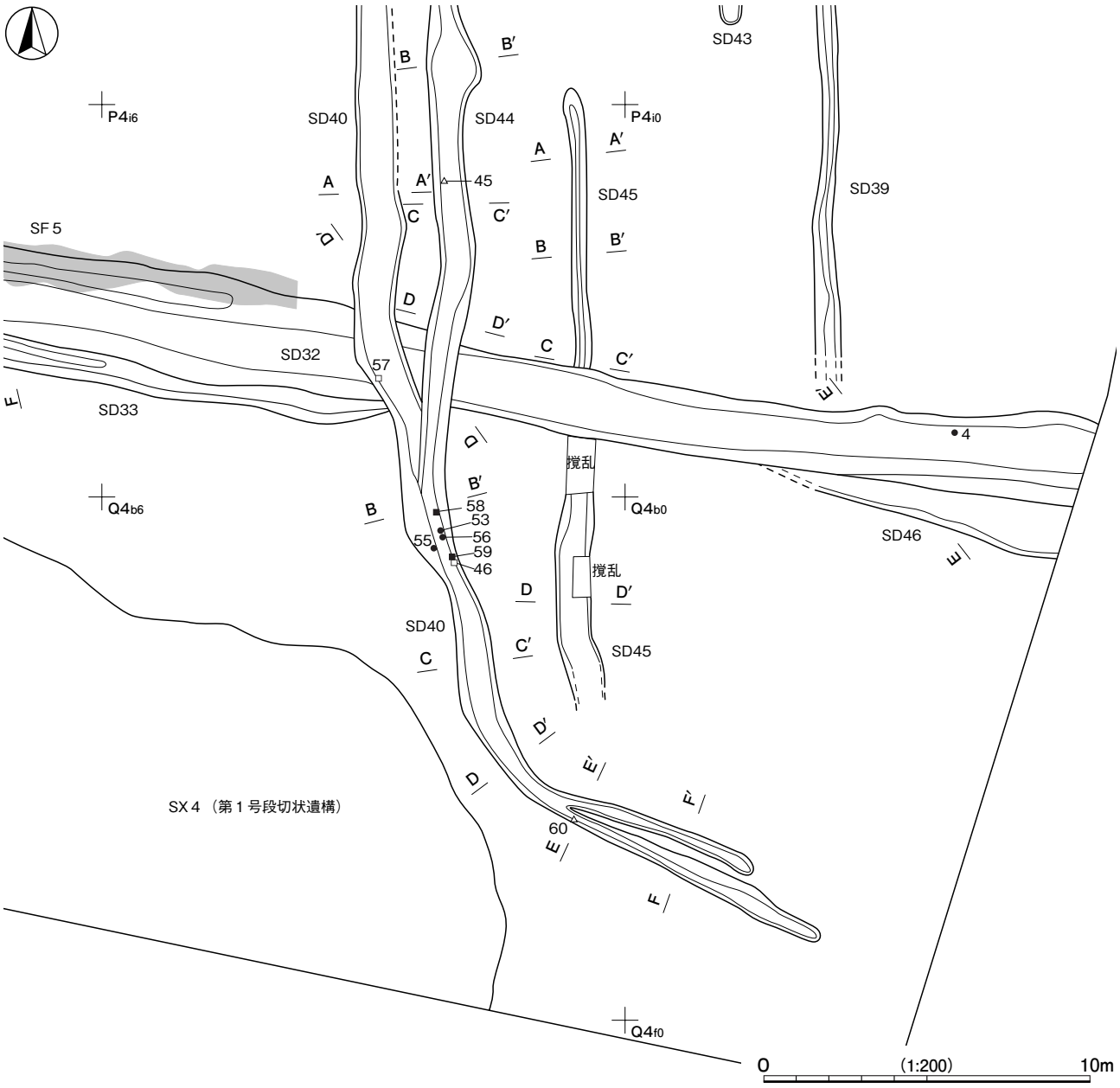
重複関係　第 59・69・70 号竪穴建物跡を掘り込み，第 32 号溝に掘り込まれている。第５号道路の下位で確認した。

規模と形状　西側は調査区域外に延びているため，長さは 24.98 ｍしか確認できなかった。Ｐ３i7 区から東方向（Ｎ － 94° － Ｅ）に，直線状に延びている。上幅 34 ～ 98㎝，下幅 14 ～ 42㎝，確認面からの深さ 50㎝で，断面形はＵ字状である。底面は平坦で，壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は，西側から東端部に向かって緩やかに下っている。

覆土　３層に分層できる。ロームブロックが含まれているため，埋め戻されている。

遺物出土状況　土師器片 48 点，須恵器片４点，磁器片１点（皿），鉄塊系遺物 2.0 ｇ，鉄滓 14.8 ｇが出土している。土師器片，須恵器片，鉄滓等は埋め戻し時の混入，磁器片は第５号道路に伴う遺物と考えられる。

所見　時期は出土土器から決定できないが，重複関係から 15 世紀中葉以前と考えられる。



第 342 図　第 30 ～ 48 号溝跡，第 5 ・ 6 号道路跡，第 1 号段切状遺構実測図（4）

第 38 号溝跡（第 339・340・344 図）

位置　調査区南部のＰ 3d6 ～Ｐ 4 d6 区，標高 22.7 ～ 23.4 ｍほどの緩斜面部に位置している。

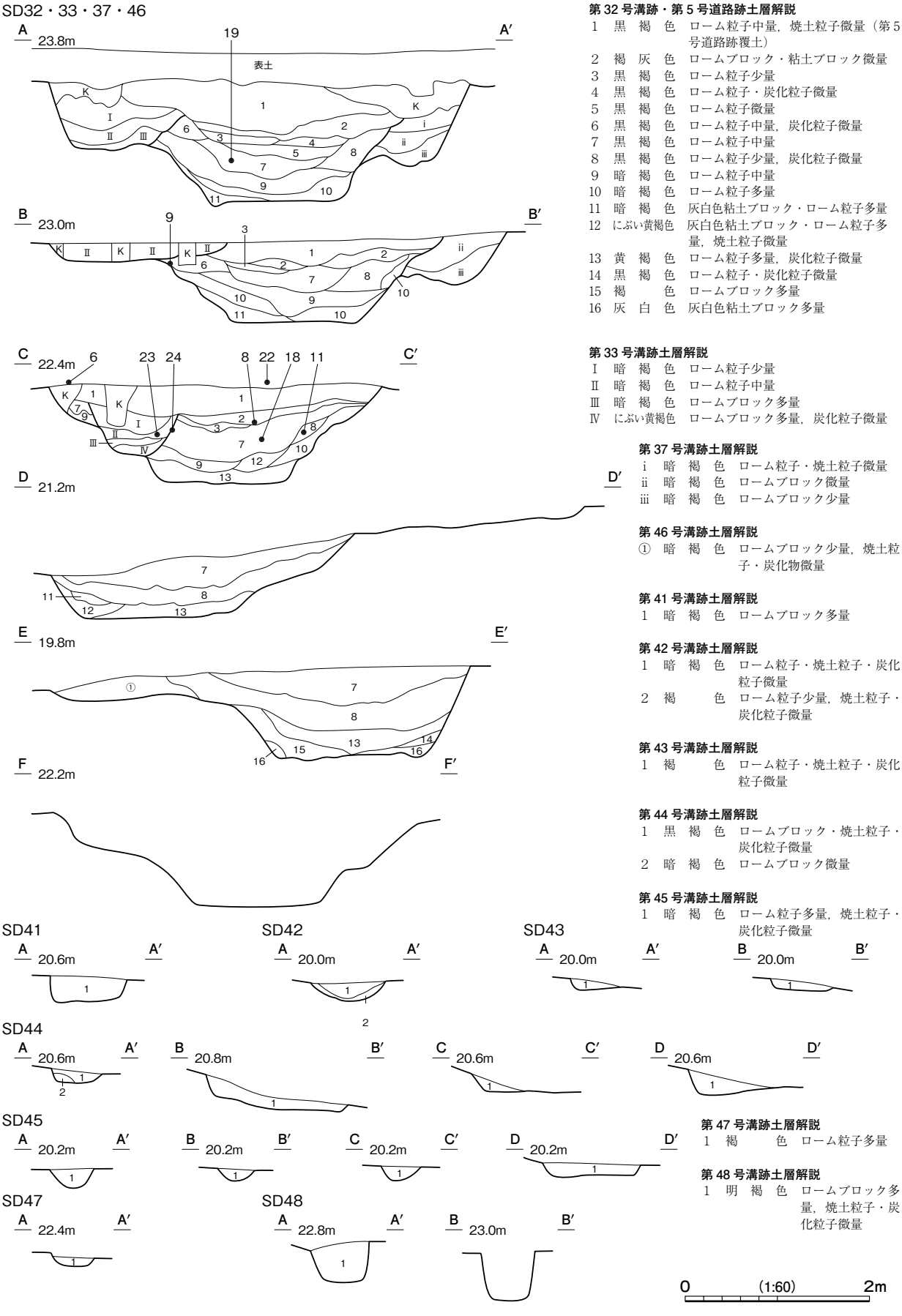
重複関係　第 77 号竪穴建物跡，第 14･17 号掘立柱建物跡，第 2 号地下式坑，第 336 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　西側が調査区域外に延びているため，長さは 43.24 ｍしか確認できなかった。Ｐ 3d6 区から東方向（N － 88° － E）に，直線状に延びている。上幅 62 ～ 103㎝，下幅 14 ～ 45㎝，確認面からの深さ 13 ～ 19㎝で，断面形はＵ字状である。底面はほぼ平坦で，壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は，西側から東端部に向かって向かって緩やかに下っている。

覆土　2 層に分層できる。ロームブロックが含まれているため，埋め戻されている。

遺物出土状況　土師器片 93 点，須恵器片 11 点，椀状滓 52.4 ｇ，鉄滓 57.4 ｇが出土している。土師器，須恵器，椀状滓などは埋め戻しに伴う混入と考えられる。

所見　時期は，出土土器から決定できないが，重複関係より 16 世紀中葉から後葉と考えられる。



第 32 号溝跡・第 5 号道路跡土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子微量（第 5 号道路跡覆土）
2 褐 灰 色 ロームブロック・粘土ブロック微量
3 黒 褐 色 ローム粒子少量
4 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
5 黒 褐 色 ローム粒子微量
6 黒 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子微量
7 黒 褐 色 ローム粒子中量
8 黒 褐 色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
9 暗 褐 色 ローム粒子中量
10 暗 褐 色 ローム粒子多量
11 暗 褐 色 灰白色粘土ブロック・ローム粒子多量
12 にぶい黄褐色 灰白色粘土ブロック・ローム粒子多量，焼土粒子微量
13 黄 褐 色 ローム粒子多量，炭化粒子微量
14 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
15 褐 色 ロームブロック多量
16 灰 白 色 灰白色粘土ブロック多量

第 33 号溝跡土層解説

Ⅰ 暗 褐 色 ローム粒子少量
Ⅱ 暗 褐 色 ローム粒子中量
Ⅲ 暗 褐 色 ロームブロック多量
Ⅳ にぶい黄褐色 ロームブロック多量，炭化粒子微量

第 37 号溝跡土層解説

ⅰ 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量
ⅱ 暗 褐 色 ロームブロック微量
ⅲ 暗 褐 色 ロームブロック少量

第 46 号溝跡土層解説

① 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量

第 41 号溝跡土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック多量

第 42 号溝跡土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 43 号溝跡土層解説

1 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

第 44 号溝跡土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐 色 ロームブロック微量

第 45 号溝跡土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量

第 47 号溝跡土層解説

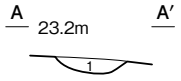
1 褐 色 ローム粒子多量

第 48 号溝跡土層解説

1 明 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

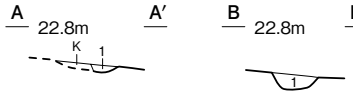
第 343 図 第 32・33・37・41 ～ 48 号溝跡実測図

SD30



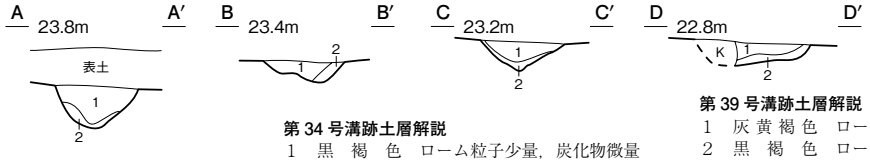
第 30 号溝跡土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

SD31



第 31 号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量

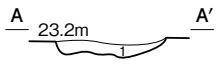
SD34



第 34 号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化物微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量

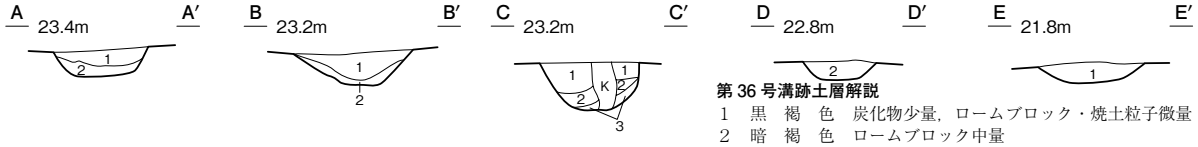
第 39 号溝跡土層解説
1　灰黄褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　黒　褐　色　ローム粒子微量
5　灰　褐　色　ローム粒子少量
6　暗　褐　色　ローム粒子少量
7　極暗褐色　ローム粒子少量
8　褐　　色　ロームブロック多量
9　黒　褐　色　ロームブロック少量

SD35



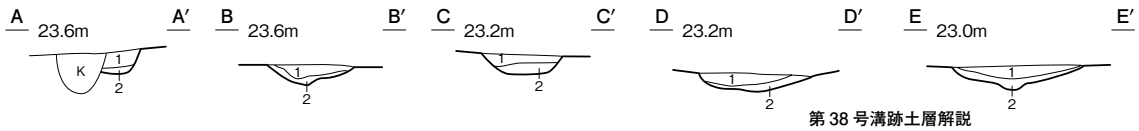
第 35 号溝跡土層解説
1　灰　褐　色　ロームブロック少量

SD36



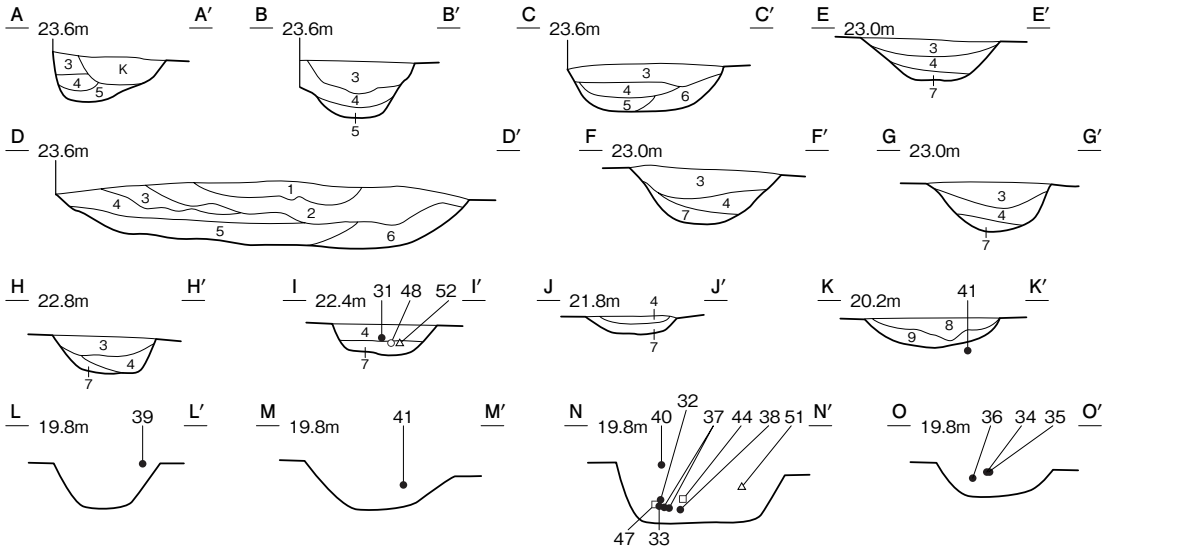
第 36 号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　炭化物少量，ロームブロック・焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック中量

SD38

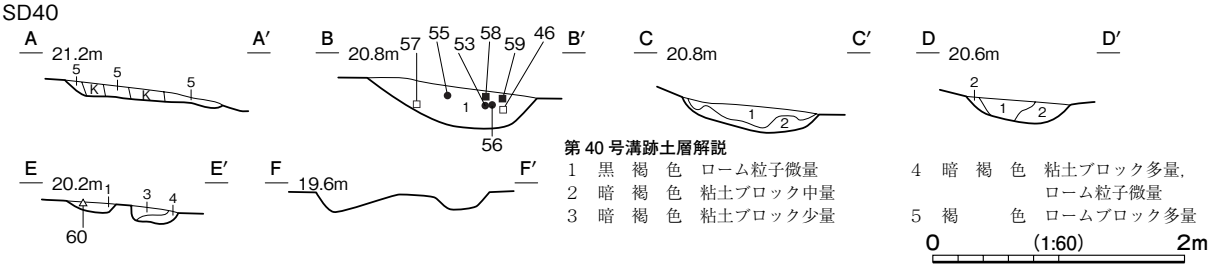


第 38 号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

SD39



SD40



第 40 号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　粘土ブロック中量
3　暗　褐　色　粘土ブロック少量
4　暗　褐　色　粘土ブロック多量，ローム粒子微量
5　褐　　色　ロームブロック多量

0　(1:60)　2m

第 344 図　第 30・31・34 ～ 36・38 ～ 40 号溝跡実測図

第 39 号溝跡（第 339・340・342・344・349・350 図　PL31）

位置　調査区中央部のＰ３d6 ～Ｐ４a6 区及びＰ４a8 ～Ｑ５a1 区の標高 20.0 ～ 23.4 ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第 64・73・74・78・79・81 ～ 83 号竪穴建物跡，第 13 号掘立柱建物跡，第 31 号方形竪穴状遺構，第 355・384 号土坑を掘り込み，第 41 号溝に掘り込まれている。また，第 42 号溝跡とも重複しているが新旧関係は不明である。

規模と形状　確認できた溝跡は西側のＳＤ 39 Ａと東側のＳＤ 39 Ｂに分けられる。ＳＤ 39 Ａの西側は調査区域外に延びているため，長さは 55.32 ｍしか確認できなかった。Ｐ３d6 ～Ｐ３a5 区まで北方向（Ｎ － 4° － Ｗ）へ直線状に，Ｐ３a5 区で屈曲してＰ４a6 区まで東方向(Ｎ － 91° － Ｅ)にＬ字状に延びている。上幅 53 ～ 118㎝，下幅 26 ～ 58㎝，確認面からの深さ 14 ～ 43㎝で，断面形はＵ字状である。ＳＤ 39 Ｂは南側を確認できなかった部分があり，長さは 48.75 ｍに留まった。Ｐ４a8 ～Ｐ５a1 区まで東方向（Ｎ － 92° － Ｅ）に直線状に，Ｐ５a1 区で屈曲して南方向（Ｎ － 3° － Ｗ）にＬ字状に延びている。底面はほぼ平坦で，壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面はＳＤ 39 Ａが西側から東側に，ＳＤ 39 Ｂが南側から北側に向かい緩やかに下っている。

覆土　ＳＤ 39 Ａが７層，ＳＤ 39 Ｂが２層に分層でき，ロームブロックが含まれているため，埋め戻されている。

遺物出土状況　縄文土器片４点，土師器片 1,107 点，須恵器片 352 点，灰釉陶器片３点，土師質土器片 62 点（小皿 25，内耳鍋 36，擂鉢１），瓦質土器片１点（甕），陶器片８点（皿１，瓶類１，甕６），土製品４点（土玉１，支脚２，不明土製品１），石器・石製品６点（剥片１，砥石３，石製模造品（剣形）１，五輪塔１），礫４点，金属製品３点（刀子，鉄斧，釘），椀状滓 2464.4 ｇ，鉄塊系遺物 353.8 ｇ，鉄滓 624.0 ｇが出土している。30・34 ～ 36・38 ～ 41・51 が覆土上層から，31 ～ 33・37・42・44・47・52 が覆土中層から下層で出土している。

所見　時期は，出土土器から 16 世紀後葉と考えられる。性格は区画溝と考えられる。また，本跡の屈曲部に近接した第 362・367・368 号土坑から，それぞれ 16 世紀中葉から後葉の輪宝墨書土器が出土しており，それらの土坑と本跡の関連性がうかがえる。

第 40 号溝跡（第 340・342・344・350・351 図）

位置　調査区南部のＰ４h7 ～Ｑ５e1 区，標高 19.4 ～ 20.3 ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第 32・44 号溝跡を掘り込んでいる。第９号井戸跡とも重複しているが新旧関係は不明である。

規模と形状　北側が第９号井戸跡と重複をしており，長さ 35.12 ｍしか確認できなかった。Ｐ４h7 区から南方向（Ｎ － 4° － Ｗ）に直線状に延び，Ｑ４a8 区から湾曲して，Ｑ４d9 区で屈曲し南東方向（Ｎ － 120° － Ｅ）にＬ字状に延びている。また，Ｑ４d9 区で二股に分岐している。上幅 28 ～ 139㎝，下幅 10 ～ 108㎝，確認面からの深さ６～ 32㎝で，断面形はＵ字状である。底面はほぼ平坦で，壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は，北側から屈曲部を経て，南東端部に向かって緩やかに下っている。

覆土　５層に分層できる。ロームブロック，粘土ブロックが含まれているため，埋め戻している

遺物出土状況　土師器片 29 点，須恵器片 17 点，土師質土器片４点（内耳鍋３，火鉢１），陶器片４点（小坏１，擂鉢１，甕２），磁器片１点（碗），石器・石製品６点（剥片１，砥石１，砥石ヵ１，宝篋印塔１，礫２），金属製品２点（鎌１，不明鉄製品１），椀状滓 50.0 ｇ，鉄滓 18.6 ｇ，瓦片２点（器種不明）が出土している。46・53・56・58・59・60 は覆土上層から，57 は覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から 18 世紀前葉と考えられる。性格は不明である。

第 44 号溝跡（第 340・342・343 図）

位置　調査区南部のＰ 4 c8 ～Ｑ 4 a8 区，標高 20.2 ～ 20.7 ｍほどの緩斜面部に位置している。

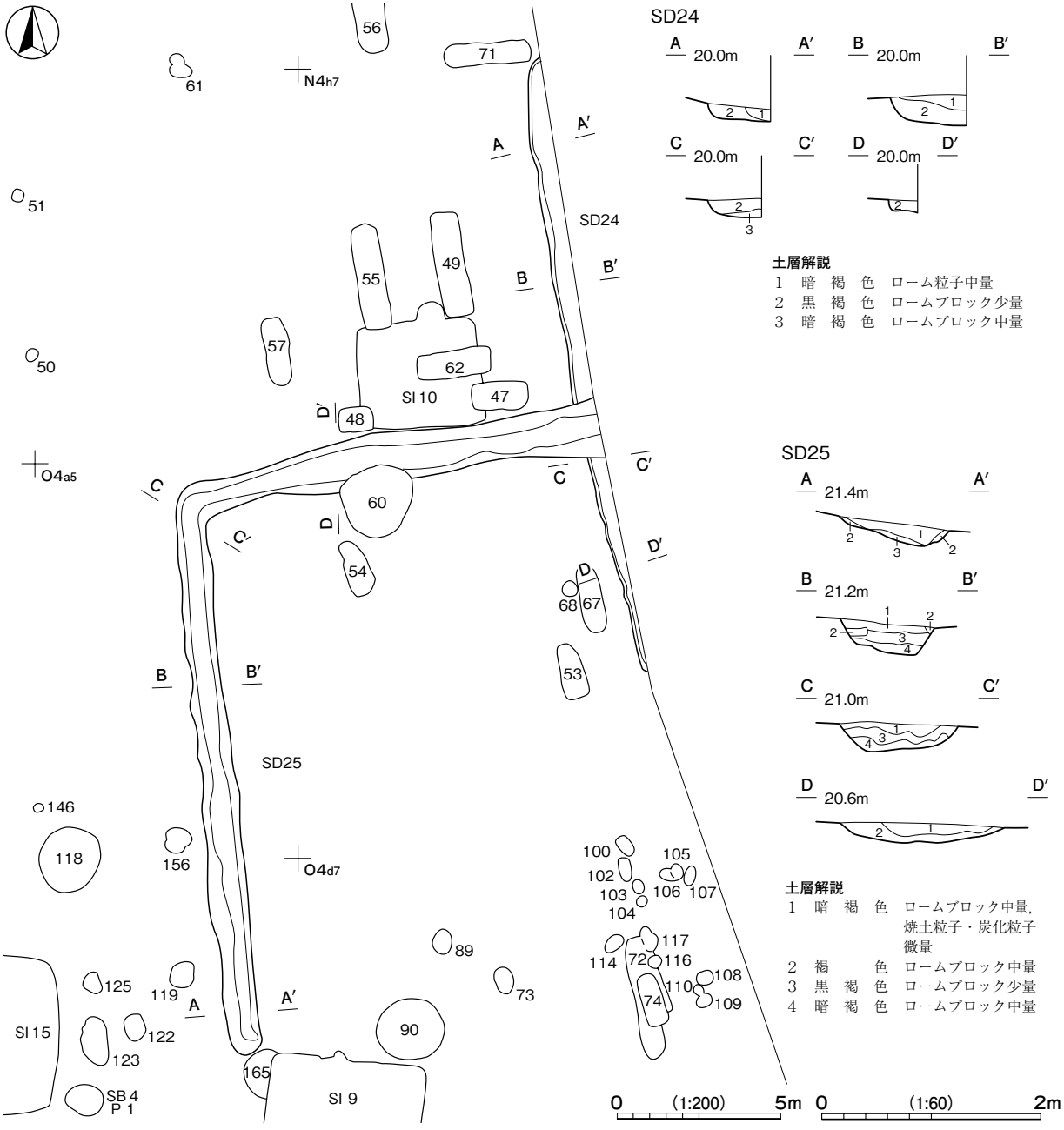
重複関係　第 85 号竪穴建物跡，第 32 号溝跡，第 378･379 号土坑を掘り込み，第 40 号溝に掘り込まれている。

規模と形状　南側を他の遺構に掘り込まれているため，長さは 32 ｍしか確認できなかった。Ｐ 4 c8 区から南方向（Ｎ － 174° － Ｅ）に，直線状に延びている。上幅 18 ～ 157㎝，下幅８～ 132㎝，確認面からの深さ８～ 22㎝で，断面形はＵ字状である。底面は平坦で，壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。標高差はあまりないが，底面が南側に向かって緩やかに下っている。

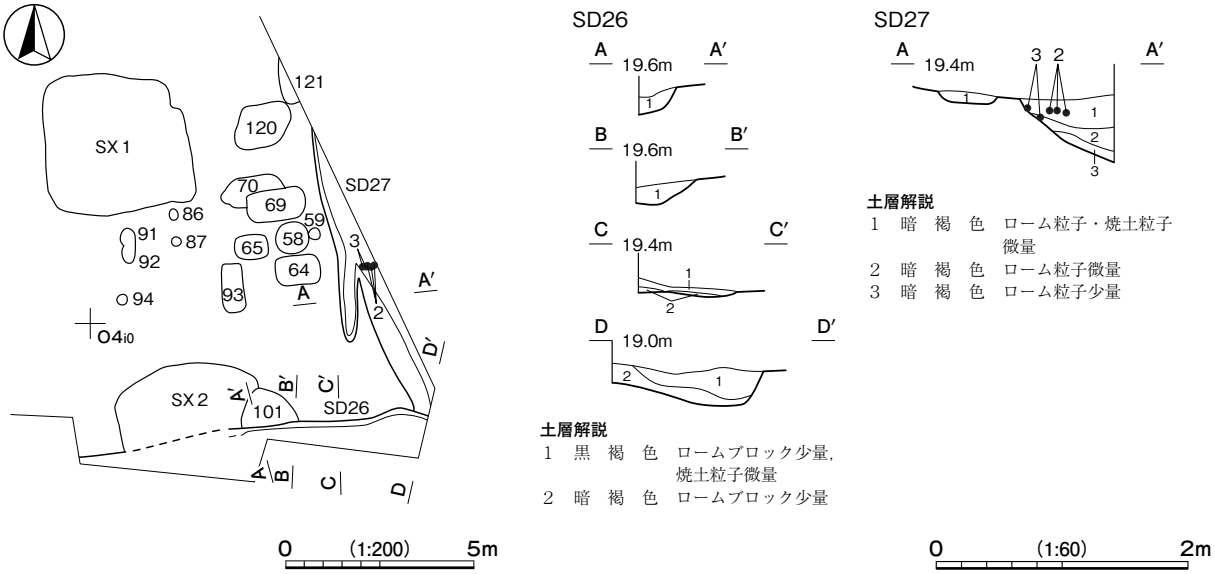
覆土　２層に分層できる。ロームブロックが含まれているため，埋め戻されている。

遺物出土状況　土師器片 14 点，須恵器片１点，土師質土器片１点（内耳鍋），礫１点，金属製品２点（釘ヵ１，煙管１），椀状滓 161.7 ｇ，鉄滓 26.5 ｇが出土している。45 は覆土下層から出土している。

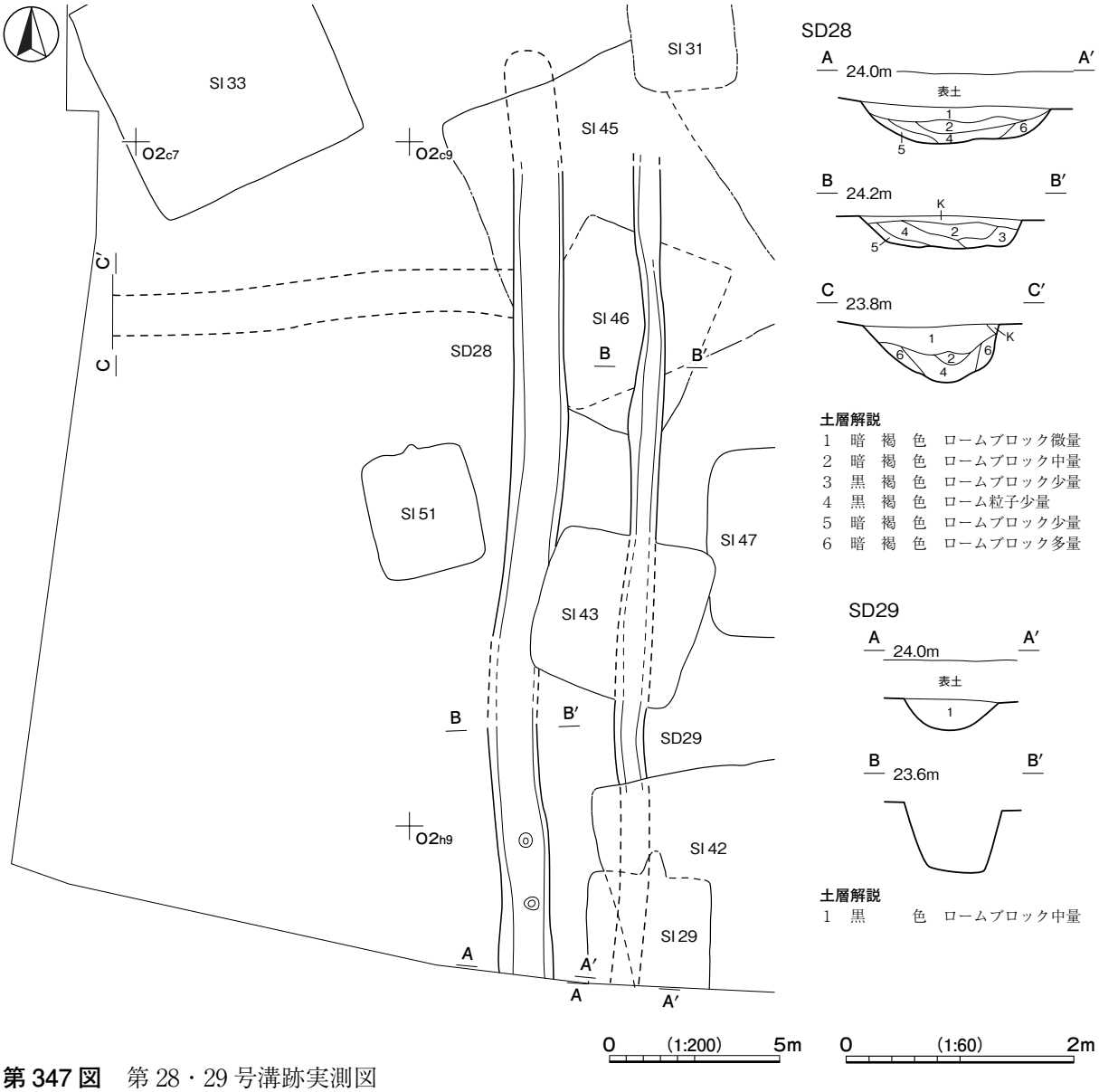
所見　時期は，出土土器から 17 世紀代と考えられる。性格は不明である。



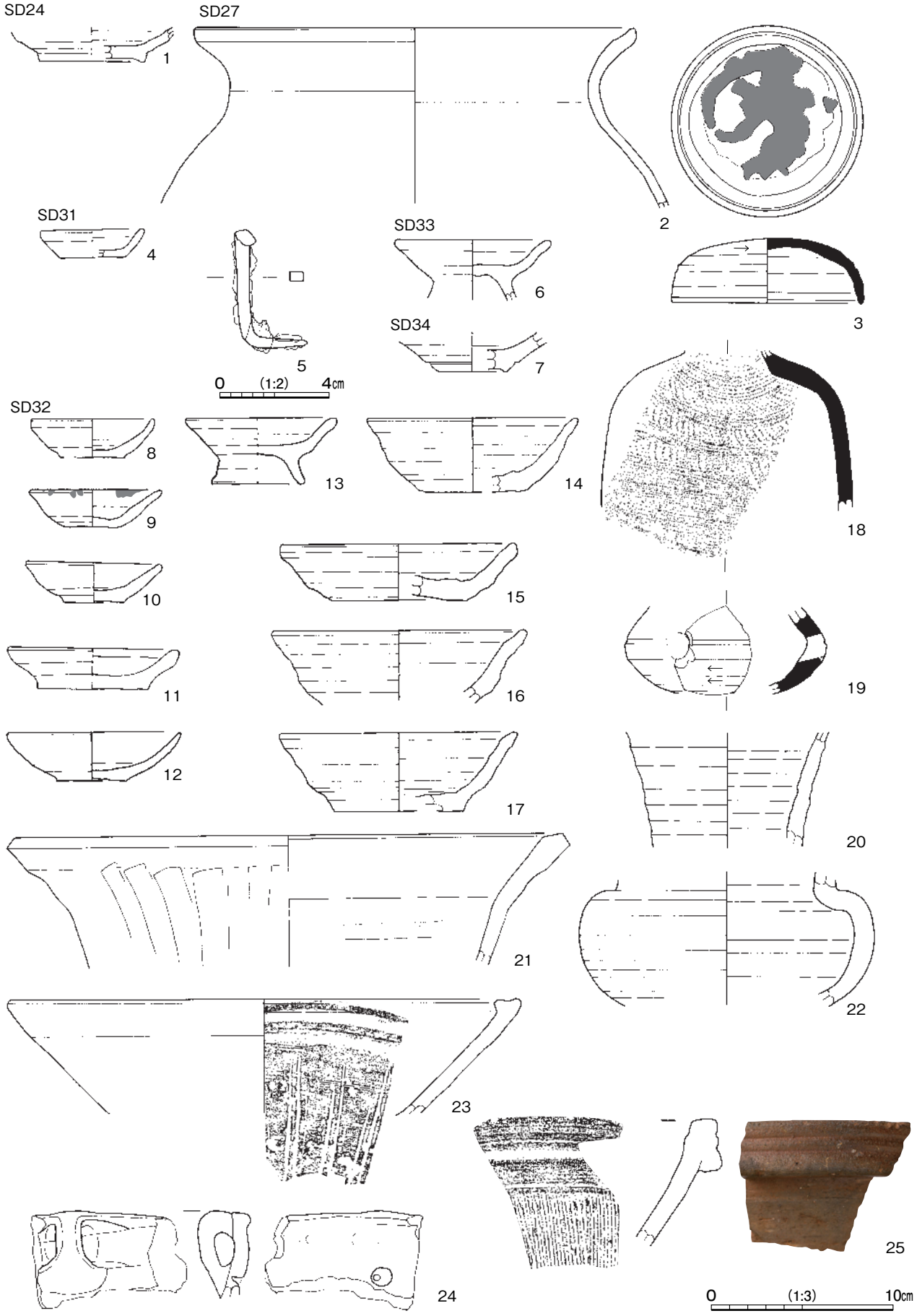
第 345 図　第 24・25 号溝跡実測図



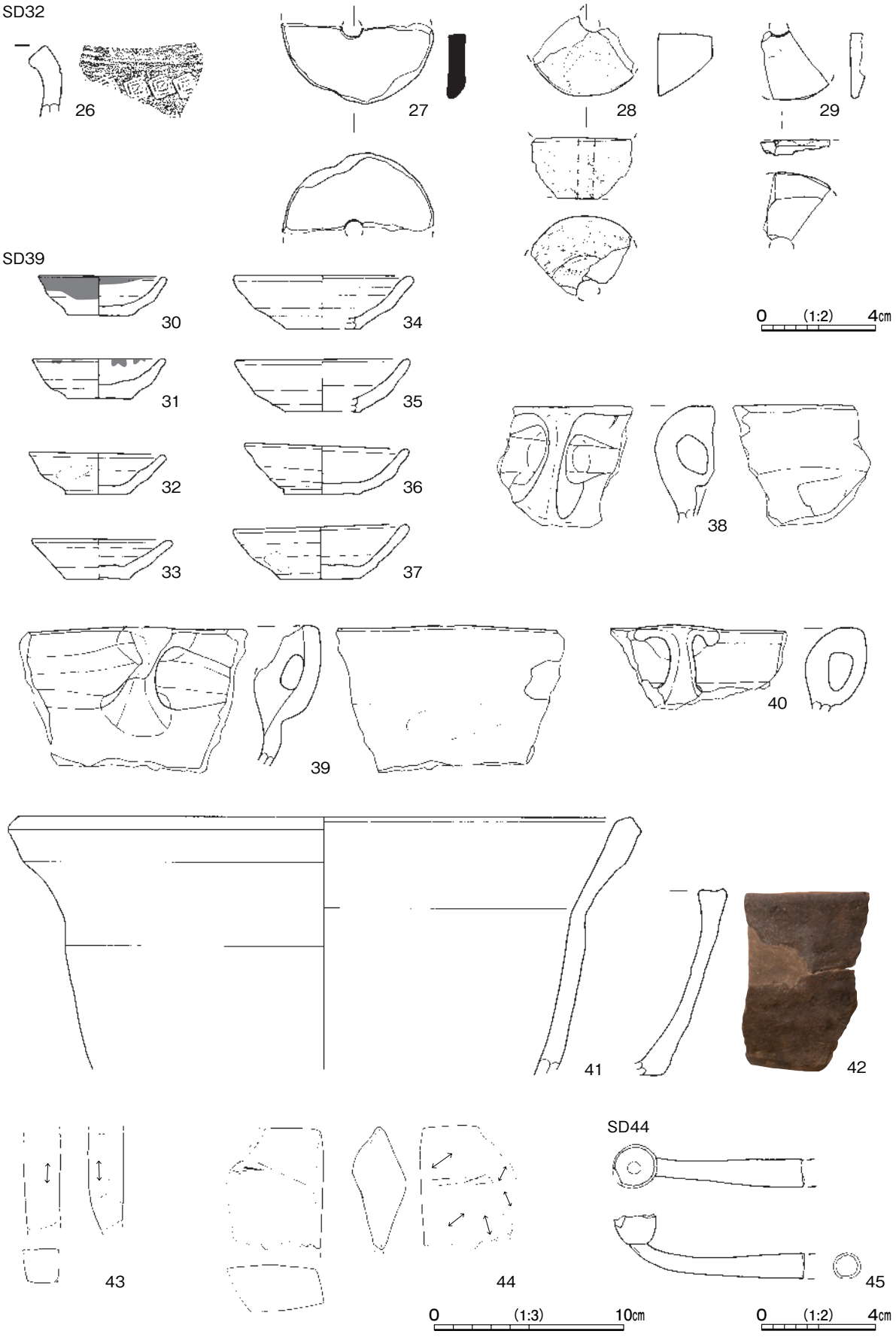
第 346 図　第 26・27 号溝跡実測図



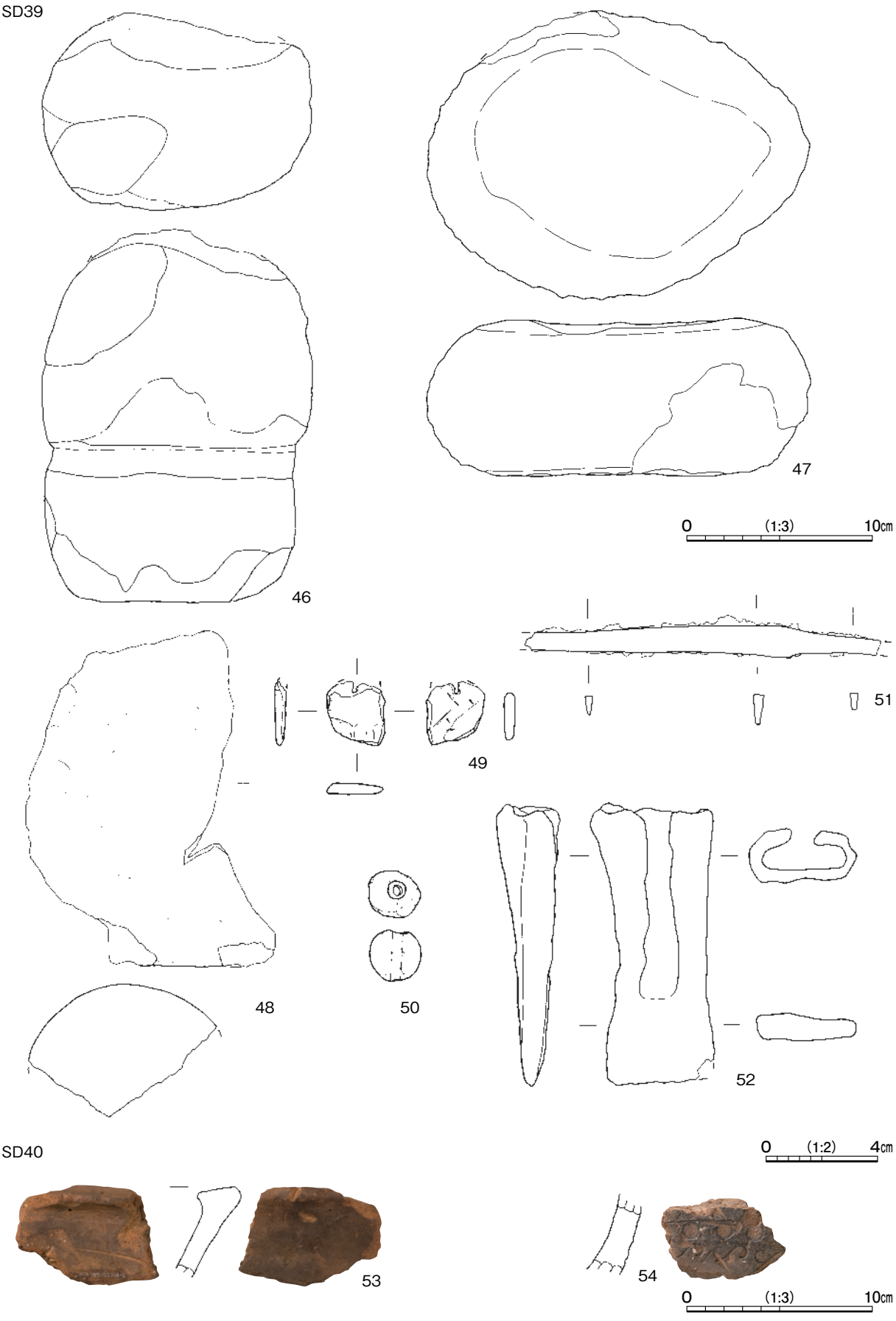
第 347 図　第 28・29 号溝跡実測図



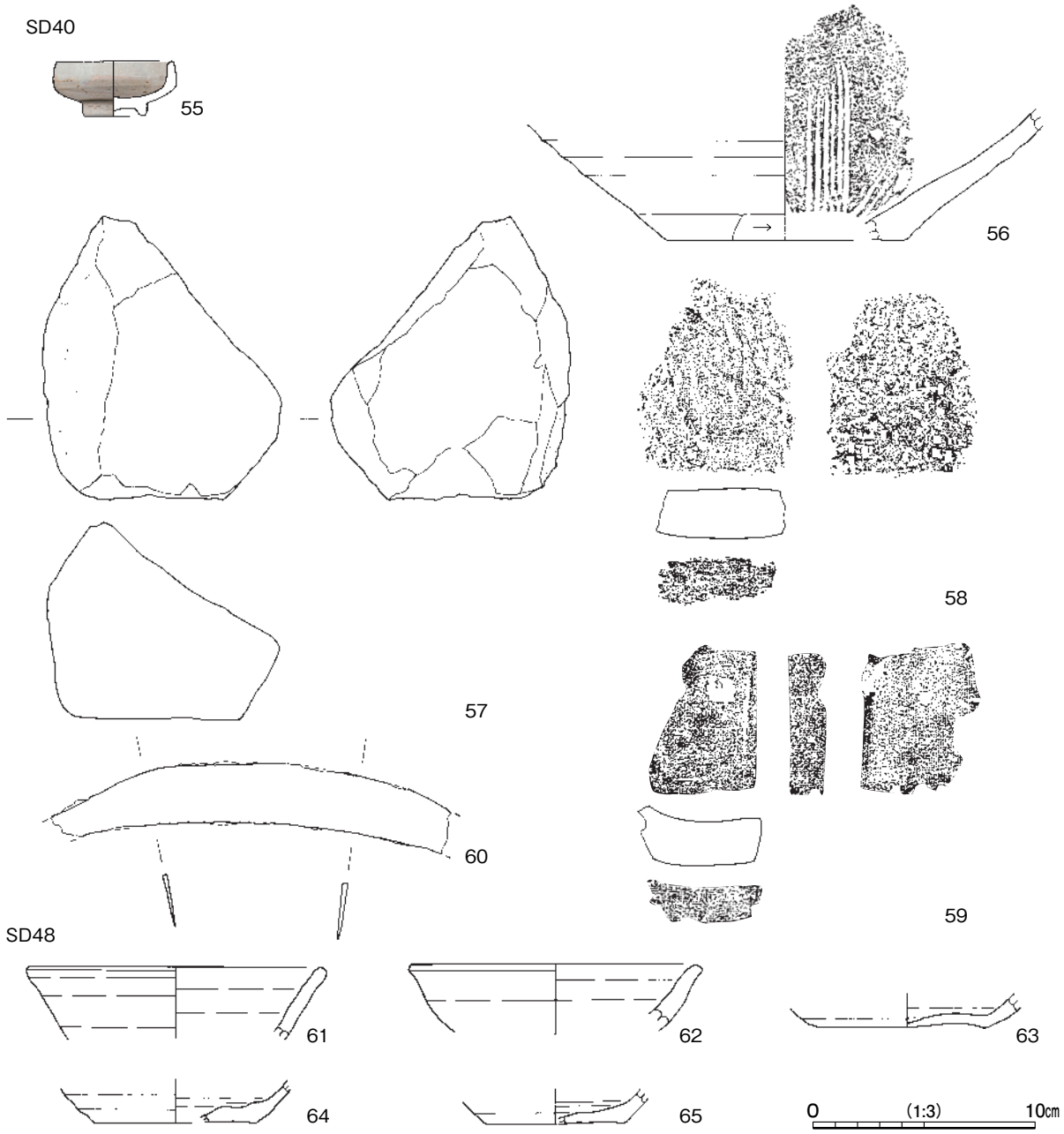
第 348 図　室町･江戸時代の溝跡出土遺物実測図（1）



第 349 図　室町･江戸時代の溝跡出土遺物実測図（２）



第 350 図　室町・江戸時代の溝跡出土遺物実測図（3）



第 351 図　室町･江戸時代の溝跡出土遺物実測図（４）

表 227　室町・江戸時代の溝跡出土遺物観察表（１）（第 347 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師質土器	小皿	－	(1.9)	[5.7]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD24	30%
2	土師器	甕	[24.0]	(9.7)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横位のナデ　体部外・内面ヘラナデ	SD27	10% PL51
3	須恵器	蓋	10.4	3.6	－	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	天井部回転ヘラ削り　硯に転用　墨痕あり	SD27	95%
4	土師質土器	小皿	[5.4]	1.5	[3.5]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD31	25% PL46
6	土師質土器	小皿	8.2	(3.3)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	ロクロ成形	SD33	60% PL47
8	土師質土器	小皿	[6.8]	2.1	3.4	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD32	60% PL47
9	土師質土器	小皿	7.1	2.1	3.0	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　口縁部に油煙	SD32	100% PL47
10	土師質土器	小皿	7.1	2.2	3.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD32	90% PL47

表 228　室町・江戸時代の溝跡出土遺物観察表（２）（第 348 ～ 351 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
11	土師質土器	小皿	9.2	2.3	6.0	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD32	95% 14世紀～15世紀 PL47
12	土師質土器	小皿	[9.3]	2.6	3.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD32	35%
13	土師質土器	小皿	[8.2]	3.6	5.0	長石・石英	灰褐	普通	ロクロ成形	SD32	70% PL47
14	土師質土器	小皿	[11.4]	4.1	[6.0]	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD32	20%
15	土師質土器	小皿	[12.6]	3.2	[7.4]	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD32	40%
16	土師質土器	小皿	[13.7]	(4.0)	－	長石・石英	黄橙	普通	ロクロ成形	SD32	15%
17	土師質土器	小皿	[13.0]	4.3	[7.0]	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD32	20%
18	須恵器	壺	－	(8.7)	－	長石・石英	灰	普通	外面カキ目　刺突文　内面ナデ	SD32	15% PL46
19	須恵器	甕	－	(4.7)	－	長石	黄灰	普通	底部ヘラ削り　上面に自然釉	SD32	５％東海系ヵ PL51
21	土師質土器	内耳鍋	[30.0]	(7.2)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外・内面ハケ目状のナデ	SD32	10% PL51
23	土師質土器	擂鉢	[28.0]	(6.4)	－	長石・石英・雲母・針状鉱物	明赤褐	普通	ロクロ成形　櫛目２本１単位　無施釉	SD32	５％在地
24	土師質土器	内耳鍋	－	(4.8)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	外・内面ナデ調整	SD32	５％
26	土師質土器	火鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	丸胴形　ロクロ成形　口縁部ナデ　型押し文様　体部外面雷文	SD32	5%在地
30	土師質土器	小皿	6.7	2.0	3.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　口縁部に油煙	SD39	90% PL47
31	土師質土器	小皿	6.9	2.0	3.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　口縁部に油煙	SD39	100% PL47
32	土師質土器	小皿	7.0	2.2	3.3	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　体部に指頭ナデ	SD39	100% PL47
33	土師質土器	小皿	7.2	2.1	3.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD39	100% PL47
34	土師質土器	小皿	[9.0]	2.7	[3.9]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD39	55%
35	土師質土器	小皿	[9.0]	2.7	[4.0]	長石・石英・雲母	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　口縁部外・内面に油煙	SD39	30%
36	土師質土器	小皿	8.2	2.7	4.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SD39	100% PL47
37	土師質土器	小皿	9.2	2.8	4.3	長石・石英・雲母	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　体部に指頭痕	SD39	98% PL47
38	土師質土器	内耳鍋	－	(6.4)	－	長石・石英・雲母・針状鉱物	にぶい橙	普通	外面に内耳接合によるくぼみ	SD39	５％
39	土師質土器	内耳鍋	－	(7.3)	－	長石・石英・雲母・細礫	にぶい橙	普通	ナデ整形	SD39	10%
40	土師質土器	内耳鍋	－	(4.4)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ナデ整形	SD39	５％
41	土師質土器	内耳鍋	[32.2]	(13.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	外面ナデ　内面小口状のヘラによるナデ	SD39	10%
42	土師質土器	内耳鍋	－	(9.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	外・内面ナデ整形	SD39	５％
53	土師質土器	内耳鍋	－	(4.8)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	外・内面ナデ整形	SD40	５％
54	土師質土器	火鉢	－	(4.3)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	ロクロ成形　型押文様（陰刻）体部外面沈線文による区画　上段四方襷文ヵ　中断列点文　下段横Ｓ字陰刻文散らし	SD40	５％
61	土師器	坏	[13.0]	(3.3)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ	SD48	５％
62	土師器	小皿	[13.0]	(2.9)	－	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ	SD48	５％
63	土師器	坏	－	(1.5)	7.5	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	SD48	25%
64	土師器	坏	－	(1.9)	[7.0]	長石・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	SD48	20%
65	土師器	坏	－	(1.5)	[6.0]	長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	SD48	10%

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土・色　調	文　様　の　特　徴	釉　薬	産　地	出土位置	備　考
7	陶器	平碗ヵ	－	(2.1)	[3.6]	長石　にぶい黄橙	ロクロ成形　腰部から高台にかけて無釉　削り高台	灰釉	瀬戸・美濃系	SD34	10% 15 世紀後葉
20	陶器	花瓶	－	(6.2)	－	長石・石英　にぶい黄橙	ロクロ成形　尊式花瓶ヵ	灰釉	古瀬戸	SD32	10% 15 世紀後葉
22	陶器	壺	－	(7.3)	－	長石　橙	ロクロ成形　肩衝形	錆釉	瀬戸・美濃系	SD32	10% PL51
25	陶器	擂鉢	－	(7.0)	－	長石　灰褐	口縁部外帯３段　口縁部内凸帯小　櫛目 10 本１単位ヵ	－	明石・堺系	SD32	５％ 19 世紀前葉
55	陶器	小坏	[5.5]	2.4	2.8	長石　灰白	ロクロ成形　腰折形　削り高台　腰部から高台にかけて無釉	灰釉	瀬戸・美濃系	SD40	50% 15 世紀末～ 16 世紀中葉
56	陶器	擂鉢	－	(5.9)	[11.0]	長石・石英　にぶい赤褐	ロクロ成形　底部糸切り　外面下端ヘラ削り　内面櫛目６本１単位	錆釉	瀬戸・美濃系	SD40	５％ 17 世紀末～ 18 世紀初頭

番号	器　種	最小径	最大径	高さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
27	紡錘車	－	(5.3)	厚さ 0.6	8.68	長石・石英・雲母	にぶい橙	須恵器坏底部の転用	SD32	
28	紡錘車	[2.0]	[4.4]	2.1	14.43	長石・石英	にぶい橙	表・裏・側面に細かな磨き	SD32	
48	支脚	(4.8)	(10.4)	(12.1)	321.77	長石・石英	にぶい橙	指頭によるナデ成形	SD39	

表 229　室町・江戸時代の溝跡出土遺物観察表（３）（第 348 ～ 351 図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
50	土玉	径 1.7 ～ 1.8	－	1.8	5.27	長石	にぶい橙	指頭によるナデ成形　孔径 0.3cm	SD39	
66	支脚	(3.9)	(3.5)	(2.3)	23.49	長石・石英	にぶい黄褐	指頭によるナデ成形	SD32	観察表のみ
67	支脚	(2.7)	(3.8)	(1.4)	16.74	長石・石英・雲母	にぶい橙	外面に研磨痕　被熱による変色	SD32	観察表のみ
68	支脚	(6.0)	(3.0)	(6.0)	37.62	長石・石英・雲母	橙	指頭によるナデ成形	SD39	観察表のみ
69	不明	(3.1)	(3.3)	(2.1)	15.88	長石	赤褐	破砕片のため，形状不明　支脚ヵ	SD39	観察表のみ

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
29	紡錘車	径（2.4）	－	(0.5)	3.47	粘板岩	研磨による整形	SD32	
43	砥石	(5.1)	1.9	1.8	28.88	凝灰岩	表裏・側面研磨	SD39	
44	砥石	(6.5)	(5.1)	(2.8)	83.09	凝灰岩	全面砥面　側面に磨り切り痕　被熱　煤付着	SD39	
46	宝篋印塔	(20.1)	14.5	(10.6)	3884.6	花崗岩	相輪　頂部欠損　宝珠と九輪のくびれ部が浅い溝状	SD40	PL47
47	五輪塔	15.5	20.6	8.4	3127.0	花崗岩	風輪ヵ　やや平たい	SD39	PL47
49	石製模造品	(2.3)	2.1	0.4	2.79	緑色片岩	剣形　上下端欠損	SD39	PL52
57	砥石	12.7	10.7	8.9	1396.8	細粒花崗岩	周縁を敲打して成形　表・裏面に砥面　五輪塔の転用ヵ	SD40	
70	砥石	(2.9)	(1.4)	3.5	50.21	砂岩	表面と一側面が砥面	SD32	観察表のみ
71	砥石	(3.6)	(2.6)	(3.1)	93.09	砂岩	表面が砥面	SD32	観察表のみ
72	砥石	(1.9)	(1.2)	(1.2)	6.35	凝灰岩	表面と一側面が砥面	SD32	観察表のみ
73	五輪塔	(10.4)	(8.4)	(2.7)	481.0	花崗岩	風化が著しく，元の形状不明　表面脆い	SD32	観察表のみ
74	砥石	(6.1)	(4.7)	(3.8)	158.3	砂岩	表面と両側面が砥面　被熱	SD39	観察表のみ

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
5	釘	4.3	2.2	0.35	4.01	鉄	頭部残存　傘釘状で先端部屈曲　木質付着　断面長方形	SD31	PL57
45	煙管	(6.7)	1.5	2.2	5.68	銅	雁首部	SD44	PL57
51	刀子	(12.8)	1.2	0.3 ～ 0.5	14.44	鉄	刃部～茎部分　両端部欠損	SD39	PL57
52	鉄斧	10.2	4.4	2.3	122.47	鉄	袋状　先端部の一部分が欠ける	SD39	PL57
60	鎌	(17.8)	(4.0)	0.2	34.68	鉄	線状の使用痕ヵ	SD40	PL57
75	釘	(3.9)	0.6	0.6	6.10	鉄	頭部残存　断面方形　先端部欠損	SD26	観察表のみ
76	釘	(3.0)	0.7 1.0	0.6	2.80	鉄	頭部残存　断面方形　先端部欠損	SD28	観察表のみ
77	刀子	(5.4)	0.6 ～ 0.8	0.5	5.17	鉄	刀身と茎部を欠損	SD32	観察表のみ
78	鉄鏃ヵ	(7.1)	0.5 ～ 1.1	0.9	17.35	鉄	鏃身部柳葉状一部欠損　茎部端部欠損	SD32	観察表のみ
79	不明	(3.2)	1.1 ～ 1.4	0.4	4.86	鉄	板状鉄材二枚貼り合わせ　先端部折り曲げによる欠損	SD32	観察表のみ
80	釘	(4.3)	0.4 ～ 0.5	0.5 ～ 0.6	3.34	鉄	頭部欠損　断面方形　先端部屈曲	SD39	観察表のみ
81	不明	(3.3)	1.1 ～ 1.3	0.2	2.46	鉄	薄い板状鉄材　刀子の刀身部の可能性あり	SD40	観察表のみ
82	釘カ	(3.5)	0.5 ～ 0.6	0.5	5.60	鉄	両端部欠損　断面方形	SD44	観察表のみ

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土・色調	特　　徴	出土位置	備　考
58	平瓦	(7.2)	(5.0)	(2.0)	139.53	長石・石英・雲母 灰	外面格子目状叩き　内面布目圧痕	SD40	
59	桟瓦ヵ	(6.5)	(5.0)	(2.7)	94.57	長石・雲母 灰	表裏面雲母　18 世紀代　桟瓦ヵ	SD40	
83	瓦	(2.1)	(1.6)	(3.2)	17.42	長石・石英 灰	表面雲母　18 世紀代　桟瓦ヵ	SD25	観察表のみ
84	瓦	(1.0)	(1.7)	(1.8)	5.05	長石・石英 黄灰	破砕片のため，形状不明	SD43	観察表のみ

表 230　室町・江戸時代の溝跡一覧表（１）

番号	位　置	方　向	平面形	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備　考 （旧→新）
				長さ（m）	上幅（m）	下幅（m）	深さ					
24	N4g8 ～ O4b9	N － 10° － W	直線状	(18.67)	(0.07～0.69)	(0.04～0.53)	8 ～ 27	U字状	外傾	自然 人為	土師器 11，須恵器 7，土師質土器 1，鉄塊系遺物 32.7g	本跡→ SD25
25	N4g9 ～ O4e6	N － 6° － W N － 102° － E	L字状	(29.42)	0.84 ～ 1.64	0.28 ～ 0.90	6 ～ 26	U字状	緩斜	人為	土師器 52，須恵器 24，陶器 5，磁器 1，椀状滓 246.7 g	SK60(陥し穴)，SD24 →本跡

表 231　室町・江戸時代の溝跡一覧表（２）

番号	位　置	方　向	平面形	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備　考（旧→新）
				長さ（m）	上幅（m）	下幅（m）	深さ					
26	O 5 i1 ～ O 5 i2	N － 93° － W	直線状	(5.23)	(0.24～1.30)	0.20 ～ 1.14	4 ～ 30	U字状	緩斜 外傾	人為	土師器 50，須恵器 36，釘 1，椀状滓 78.3 g，鉄塊系遺物 392.7 g，鉄滓 239.2 g	SI20，SK101，SX 2→本跡 SD27 重複
27	O 5 g1 ～ O 5 i2	N － 23° － W	直線状	(8.22)	0.44 ～(1.16)	0.26 ～(0.98)	7 ～ (51)	浅い U字状	外傾	人為	土師器 47，須恵器 12，椀状滓 67.8 g，鉄塊系遺物 94.4 g，鉄滓 39.0 g	SD26 重複
28	O2b9 ～ O2 i9 O2d6 ～ O2d9	N － 2° － W (N － 95° － W)	直線状 (直線状)	(23.56) (11.78)	1.36 ～ 1.58 [1.30]	0.92 ～ 1.23 －	25 ～ 30 50	U字状	外傾	人為	土師器 72，須恵器 27，磁器 1，剥片 1	SI43・45・46 →本跡
29	O2c0 ～ O2i0	N － 4° － E	直線状	(23.98)	0.51 ～ 0.95	0.20 ～ 0.49	28	U字状	外傾	人為	土師器 9，須恵器 3	SI29・42・43・45・46 →本跡
30	P3j7 ～ Q3a9	N － 101° － E	直線状	(10.67)	0.40 ～ 0.66	0.21 ～ 0.40	12 ～ 60	U字状	緩斜 ほぼ直立	人為	土師器 1，土師質土器 3，鉄滓 87.3 g	
31	Q3b0 ～ Q3c0	N － 11° － E N － 95° － E	L字状	(7.15)	0.30 ～ 0.52	0.05 ～ 0.28	6 ～ 12	U字状	緩斜 外傾	人為	土師器 2，須恵器 2，土師質土器 1，釘 1	SI55・264 →本跡
32	P3i7 ～ Q5a3	N － 95° － E	直線状	(66.85)	1.86 ～ 2.70	0.98 ～ 1.60	98	逆台形	外傾	人為	土師器 942，須恵器 240，灰釉陶器 3，土師質土器 106，土製紡錘車 2，石製紡錘車 1，砥石 3，五輪塔 1，刀子 1，鉄鏃ヵ 1，椀状滓 2010.7 g，流動滓 27.9 g，鉄塊系遺物 1194.4 g，鉄滓 961.7 g	SI69・70，SD37・45・46 →本跡→ SD33・40・44，SF 5
33	P3i7 ～ Q4a8	N － 95° － E	直線状	(44.23)	(0.50～1.80)	(0.16～0.56)	35	U字状	外傾	人為	土師器 26，須恵器 3，土師質土器 4，鉄塊系遺物 69.8 g，鉄滓 49.9 g	SI70 → SD32 → 本跡→ SD40・44，
34	P3g6 ～ P4h1	N － 93° － E	直線状	(20.30)	0.57 ～ 1.10	0.21 ～ 0.71	23	U字状	緩斜	人為	土師器 8，須恵器 3，土師質土器 2，陶器 1，椀状滓 56.2 g	SK326 →本跡
35	P3g7 ～ P3g8	N － 89° － E	直線状	4.48	0.75 ～ 0.98	0.56 ～ 0.71	9	U字状	緩斜	人為	土師器 3，須恵器 1，土師質土器 1	
36	P3f6 ～ P4g8	N － 91° － E N － 6° － W	直線状	(48.00)	0.50 ～ 1.01	0.11 ～ 0.51	10 ～ 39	U字状	緩斜 ほぼ直立	人為	土師器 78，須恵器 9，縄文土器 3，椀状滓 112.2 g，鉄塊系遺物 4.1 g，鉄滓 14.1 g，粘土塊 18 g	SI57・61・66・68，SK275 →本跡
37	P3i7 ～ P4i3	N － 94° － E	直線状	(24.98)	(0.34～0.98)	(0.14～0.42)	50	U字状	緩斜	人為	土師器 48，須恵器 4，磁器 1，鉄塊系遺物 2.0 g，鉄滓 14.8 g	SI59・69・70 →本跡 → SD32・SF 5
38	P3d6 ～ P4d6	N － 88° － E	直線状	(43.24)	0.62 ～ 1.03	0.14 ～ 0.45	13 ～ 19	U字状	緩斜	人為	土師器 93，須恵器 11，椀状滓 52.4 g，鉄滓 57.4 g	SI77，SB14・17，SK336，UP 2→本跡
39	P3d6 ～ P4a6 P4a8 ～ Q5a1	N － 4° － W N － 91° － E N － 92° － E N － 3° － W	L字状 L字状	(55.32) (48.75)	0.53 ～ 1.18 0.40 ～ 1.56	0.26 ～ 0.58 0.10 ～ 0.93	14 ～ 43 26	U字状	緩斜 外傾 緩斜	人為	土師器 1107，須恵器 352，灰釉陶器 3，土師質土器 62，陶器 8，支脚 2，土玉 1，砥石 3，五輪塔 1，石製模造品（剣形）1，釘 1，刀子 1，鉄斧 1，椀状滓 2464.4 g，鉄塊系遺物 353.8 g，鉄滓 624.0 g	SI64・73・74・78・79・81 ～ 83，HT31，SK355・384 →本跡→ SD41　SD42 重複
40	P4h7 ～ Q5e1	N － 4° － W N － 120° － E	L字状	(35.12)	0.28 ～ 1.39	0.10 ～ 1.08	6 ～ 32	U字状	緩斜	人為	土師器 29，須恵器 17，土師質土器 4，陶器 4，磁器 1，砥石 1，宝篋印塔 1，剥片 1，鎌 1，不明鉄製品 1，椀状滓 50 g，鉄滓 18.6 g，瓦 2	SD32・44 →本跡 SE 9 重複
41	P 4 a8	N － 4° － W	直線状	(2.12)	0.83 ～ 0.87	0.68 ～ 0.73	25	U字状	ほぼ直立	人為	－	SI78，SD39 →本跡
42	P4c0 ～ P5c1	N － 78° － E	直線状	(3.67)	0.60 ～ 0.86	0.23 ～ 0.39	19	U字状	緩斜	人為	土師器 16，須恵器 1，土師質土器 3，陶器 2，磁器 2，鉄塊系遺物 32.7 g，鉄滓 14.1 g	SD39 重複
43	P4f0 ～ P4h0	N － 4° － W	直線状	(7.12)	0.50 ～ 0.81	0.35 ～ 0.66	10	U字状	緩斜	自然	土師器 1，瓦 1	SI83A・B →本跡
44	P4c8 ～ Q4a8	N － 174° － E	直線状	(32.08)	0.18 ～ 1.57	0.08 ～ 1.32	8 ～ 22	U字状	緩斜	人為	土師器 14，須恵器 1，土師質土器 1，釘 1，埋管 1，椀状滓 161.7 g，鉄滓 26.5 g	SI85，SD32，SK378・379 →本跡→ SD40
45	P4h9 ～ Q4c9	N － 2° － W	直線状	(18.64)	0.38 ～ 1.06	0.10 ～ 0.92	10 ～ 20	U字状	緩斜	人為	椀状滓 94.0 g	本跡→ SD32
46	Q5a1 ～ Q5b2	N － 101° － W	直線状	(9.12)	(0.60～1.64)	(0.54～1.52)	46	逆台形	外傾	人為	－	本跡→ SD32
47	O 4 j2	N － 10° － E	直線状	(0.74)	0.32 ～ 0.56	0.10 ～ 0.33	10	U字状	緩斜	自然	－	本跡→ SF 6
48	O3j8 ～ O3j0	N － 88° － E	直線状	5.58	0.52 ～ 0.65	0.34 ～ 0.50	44	U字状	外傾	人為	土師器 38，須恵器 4，陶器 2	SK340 より変更 SI81，SK339 →本跡 SB13 重複

(9)　道路跡

第３号道路跡（第 352 図）

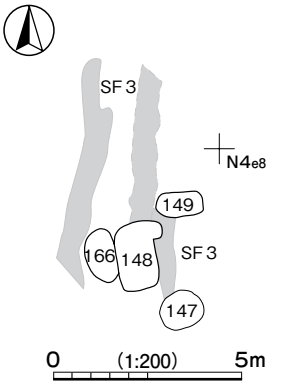
位置　調査区北部の N 4 e6 ～ N 4 e7 区，標高 19.4 ～ 19.7 mほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第 147 ～ 149・166 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　確認できた長さは 5.72 mで，幅は 185 ～ 292cmである。N 4 e7 区から北方向（N － 0°）に直線状に延びている。路面は平坦で，両端が硬化しており，南側から北側に向かって緩やかに下っている。

覆土・構築土　遺構確認面で硬化面をとらえたため，覆土は確認できなかった。構築土は，埋土でローム粒子を含んだ暗褐色土で締まりがある。

所見　遺物が出土しておらず時期決定は難しいが，重複関係から 15 世紀代と



第 352 図　第３号道路跡実測図

考えられる。また，第166号土坑の底面の凹凸は，第３号道路跡の波板状凹凸面と考えられる。そのため，本跡と重複している土坑は，道路の修復痕の可能性がある。

第５号道路跡（第339～342図　PL31）

位置　調査区南部のＰ３i7～Ｐ４j7区，標高21.9～22.8ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第32・37号溝跡の上面で確認した。

規模と形状　西側が調査区域外に延びているため，確認できた長さは40.93ｍで，幅は50～157㎝である。Ｐ３i7区から東方向（Ｎ－93°－Ｅ）に直線状に延びている。路面はほぼ平坦で，西側から東側に向かって緩やかに下っている。

覆土・構築土　遺構確認面で硬化面をとらえたため，覆土は確認できなかった。構築土は，埋土で層厚28～56㎝である。ローム粒子を含んだ黒褐色土の単一層で，締まりがある。

遺物出土状況　土師器片32点，須恵器片９点，縄文土器片１点，椀状滓54.0ｇ，鉄塊系遺物12.3ｇ，鉄滓16.7ｇが出土している。

所見　時期は，重複関係から17世紀前葉以降と考えられる。当初の路面は，第１層の下部と考えられ，第33号溝跡は本跡に付随したと考えられる。

第６号道路跡（第339・340・353・354図　PL31）

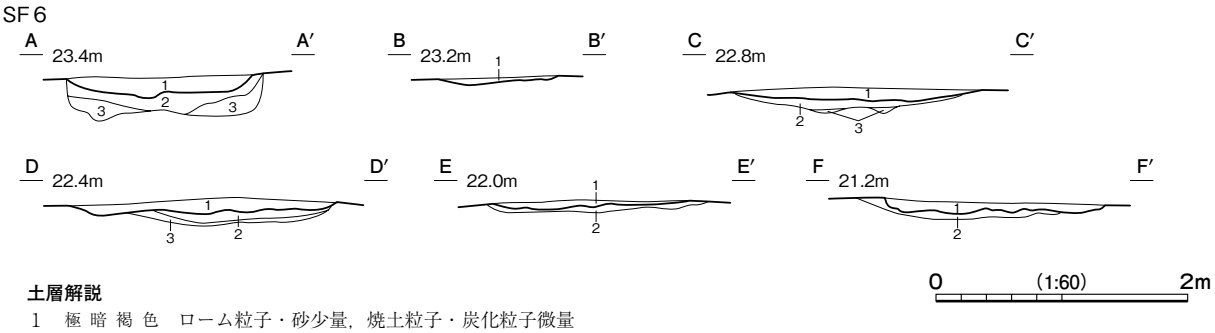
位置　調査区中央部のＯ３j5～Ｏ５j1区，標高21.1～23.2ｍほどの緩斜面部に位置している。

重複関係　第20・24・74～76号竪穴建物跡，第13号掘立柱建物跡，第47号溝跡，第338・363・380・381・397号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　西側が調査区域外に延びているため，確認できた長さは61.52ｍで，幅は98～236㎝である。Ｏ３j5区から東方向（Ｎ－89°－Ｅ）に直線状に延びている。路面はほぼ平坦で，西側から東側に向かって緩やかに下っている。

覆土･構築土　遺構確認面で硬化面をとらえたため，覆土は確認できなかった。構築土は，３層に分層できる。第１層は路面であり，層厚４～20㎝で締まりがある。第２・３層は掘方の埋土である。

遺物出土状況　土師器片514点，須恵器片223点，灰釉陶器片２点，(皿)，土師質土器片13点(小皿８，内耳鍋４，

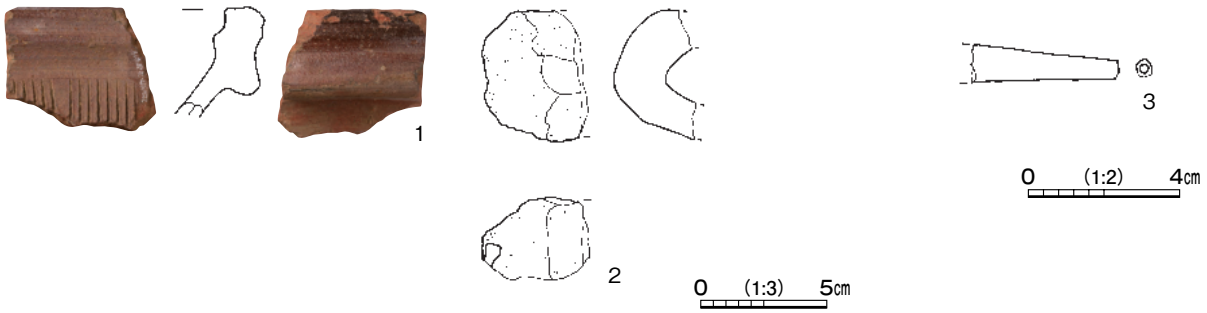


土層解説
１　極暗褐色　ローム粒子・砂少量，焼土粒子・炭化粒子微量
２　黒　褐　色　ローム粒子少量
３　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

第353図　第６号道路跡実測図

内耳鍋砥石転用１），陶器片 33 点（碗８，皿１，蓋１，擂鉢５，鉢５，仏飯器１，瓶類８，甕４），磁器片 20 点（碗 19，瓶類１），縄文土器片４点，土製品３点（羽口），石器２点（剥片），金属製品 11 点（鉄鏃ヵ１，釘３，煙管１，不明鉄製品６），瓦片５点（桟瓦２，形状不明３），椀状滓 661.9 ｇ，鉄塊系遺物 249.4 ｇ，鉄滓 232.3 ｇが出土している。３は，覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から 19 世紀代と考えられる。本跡の東端部北側に第 26 号溝跡が存在しており，本跡と走行方向がほぼ一致している。そのため，付近に硬化面を確認できなかったが，第 26 号溝跡は本跡の側溝の可能性がある。



第 354 図　第６号道路跡出土遺物実測図

表 232　第６号道路跡出土遺物観察表（第 354 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文　様　の　特　徴	釉　薬	産　地	出土位置	備　考
1	陶器	擂鉢	－	(4.2)	－	長石・石英　にぶい赤褐	口縁外帯３段　口縁内凸帯小　櫛目８本１単位	－	明石・堺系	構築土中	５％ 19 世紀前葉

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	時　期
4	瓦	桟瓦	長石・石英・雲母	灰	表裏面・側面雲母　側面面取り	構築土下層	観察表のみ 18 世紀代

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
2	羽口	(4.2)	(5.1)	(3.2)	51.09	長石・石英・雲母	にぶい橙	先端部ガラス化　発泡	構築土中	
5	羽口	(2.8)	(3.1)	(1.5)	(17.28)	長石・石英・雲母	にぶい橙	内面被熱による赤変　外面煤付着	構築土中	観察表のみ

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
3	煙管	(3.8)	1.0	－	2.67	銅	吸口	構築土下層	PL57
6	鉄鏃	(4.1)	0.7	0.5	(4.38)	鉄	茎部断面方形　鏃身部欠損	構築土中	観察表のみ
7	釘	(2.3)	0.4	0.4	(0.92)	鉄	両端部欠損　断面方形	構築土中	観察表のみ
8	釘	(5.8)	0.4	0.4	(4.63)	鉄	頭部残存　先端部欠損　断面方形	構築土中	観察表のみ
9	釘	5.2	0.4 ～ 0.8	0.4	(4.73)	鉄	頭部残存　平頭釘　断面円形	構築土中	観察表のみ
10	不明鉄製品	(12.1)	0.8	0.3	(16.82)	鉄	両端部欠損　断面長方形　湾曲している　馬具の一部ヵ	構築土上層	観察表のみ
11	不明鉄製品	(5.1)	1.2 ～ 2.3	0.3	(14.95)	鉄	鋲が残存　鉄板の一部ヵ	構築土中	観察表のみ
12	不明鉄製品	(3.1)	1.8 ～ 3.0	0.7	(28.09)	鉄	板状　欠損のため，元の形状不明	構築土中	観察表のみ

表 233　室町・江戸時代の道路跡一覧表（１）

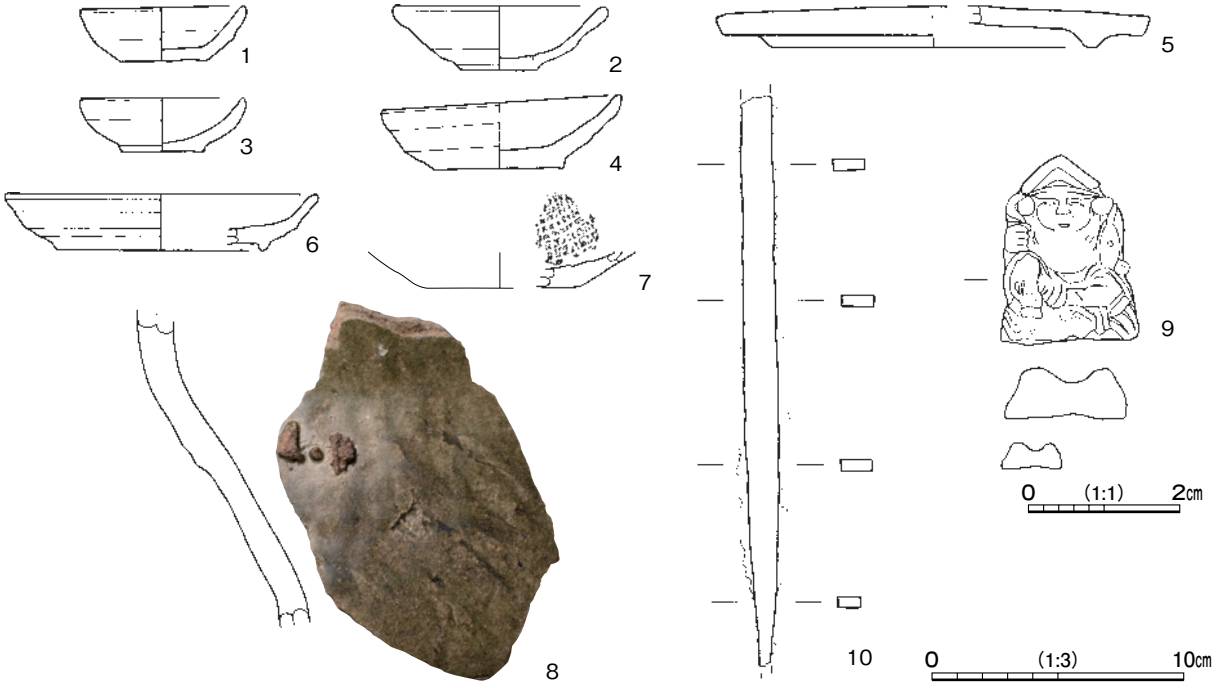
番号	位　置	方　向	平面形	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備　考 （旧→新）
				長さ（m）	上幅（m）	下幅（m）	深さ					
3	N 4d6 ～ N 4e7	N － 0° － E	直線状	(5.72)	1.85 ～ 2.92	－	－	－	－	－	－	本跡 → SK147 ～ 149・166
5	P 3i7 ～ P 4j7	N － 93° － E	直線状	(40.93)	0.50 ～ 1.57	－	10 ～ 55	逆台形	外傾	－	土師器 32，須恵器９，椀状滓 54.0 ｇ，鉄塊系遺物 12.3 ｇ，鉄滓 16.7 ｇ	SD32・37→本跡

表 234　室町・江戸時代の道路跡一覧表（２）

番号	位　置	方　向	平面形	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備　考（旧→新）
				長さ（m）	上幅（m）	下幅（m）	深さ					
6	O 3 j5 ～ O 5 j1	N － 89° － E	直線状	（61.52）	0.98 ～ 2.36	0.66 ～ 1.18	4 ～ 20	皿状	緩斜	－	土師器 514，須恵器 223，灰釉陶器 2，土師質土器 13，陶器 33，磁器 20，羽口 3，鉄鎌ヵ 1，剥片 2，釘 3，煙管 1，桟瓦 2，椀状滓 661.9 g，鉄塊系遺物 249.4 g，鉄滓 232.3 g	SI20・24・74 ～ 76，SB13，SD47，SK338・380・381・397 →本跡

⑽　遺構外出土遺物

遺構に帰属しない当時期の遺物について，実測図と観察表を示す。なお，遺構に帰属しない遺物で，土製品や石器，金属製品などの時期が明らかではない遺物もここで報告する。また観察表は提示しないが，他に瓦片 23 点，鍛冶関連遺物（椀状滓 829.7 g，鉄塊系遺物 338.1 g，鉄滓 497.7 g）が出土している。瓦片はいずれも小片で，時期判断は困難である。



第 355 図　遺構外出土遺物実測図

表 235　室町・江戸時代の遺構外出土遺物観察表（１）（第 355 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	土師質土器	小皿	［6.4］	2.1	3.3	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り　内面に煤付着	SX4 付近	60%
2	土師質土器	小皿	［8.2］	2.5	3.0	長石・石英	橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り後ヘラ削り　内面に煤付着	SI86 付近	10%
3	土師質土器	小皿	［6.4］	2.1	3.4	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	28 年度調査区未報告部北側	30%
4	土師質土器	小皿	9.4	2.8	5.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形　底部回転糸切り	SI35 付近	95%
5	土師質土器	蓋ヵ	［17.2］	2.1	［12.8］	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	上面剥離	28 年度調査区未報告部北側	30%

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文　様　の　特　徴	釉　薬	産　地	出土位置	備　考
6	陶器	小皿	［12.2］	2.3	［8.0］	精緻　灰白	ロクロ成形　削り高台　丸形底広　見込鉄絵　高台内目痕	灰釉	瀬戸・美濃系	南部	20%
7	陶器	おろし皿	－	（1.4）	－	長石　にぶい黄橙	ロクロ成形　ベタ底　見込細かい格子目	灰釉	瀬戸・美濃系	南部	10%
8	陶器	甕	－	（12.5）	－	精緻　灰オリーブ	紐作り　胴部外面自然釉　内面ヘラ状の工具によるナデ	－	常滑	28 年度調査区未報告部北側	10%

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
9	芥子面	2.4	1.8	0.7	2.73	長石・石英・雲母	橙	型による成形　大黒天	北部西側	
11	羽口	（11.0）	径（8.7）	－	300.37	長石・石英	にぶい黄橙	先端部ガラス化　発泡	表採	観察表のみ
12	羽口	（12.5）	－	－	391.03	長石・石英・細礫	にぶい黄褐	先端部ガラス化　発泡　複数片に分割	P 5 c2	観察表のみ
13	羽口	（4.2）	（4.5）	0.8	39.12	長石・石英	明黄褐	中央孔確認　鉄付着	中央部西側	観察表のみ

表 236　室町・江戸時代の遺構外出土遺物観察表（２）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
14	羽口	(4.3)	(4.4)	0.9	26.97	長石・石英・細礫	橙	表面の一部のみ確認	中央部西側	観察表のみ
15	羽口	(4.3)	(4.6)	0.8	32.06	長石・石英	にぶい橙	中央孔確認	中央部	観察表のみ
16	羽口	(5.0)	(4.6)	1.5	40.84	長石・石英・細礫	褐灰	先端部　先端部ガラス化	中央部中央	観察表のみ
17	羽口	(3.0)	(3.4)	2.0	18.76	長石・石英	にぶい赤褐	表面の一部を確認	Ｐ５c2 区	観察表のみ
18	羽口	－	－	－	72.67	長石・石英	にぶい橙	10 点に分割　表面の一部のみ　還元　一部発泡	28 年度調査区未報告部北側	観察表のみ
19	羽口	－	－	－	99.02	長石・石英	明赤褐	７点に分割　中央孔確認	SI86 付近	観察表のみ
20	羽口	(7.0)	(12.2)	2.7	288.18	長石・石英	にぶい橙	中央孔確認　他４点あり	Ｐ５c2 区	観察表のみ
21	羽口	(4.5)	(4.3)	(2.2)	45.43	長石・石英	橙	中央孔確認　他１点あり	南部東側	観察表のみ
22	羽口	(5.7)	(5.2)	2.6	91.27	長石・石英	にぶい褐	中央孔確認　他１点あり	南部	観察表のみ
23	支脚	径（6.0）	－	(3.0)	134.24	長石・石英・細礫	明黄褐	円柱状の一部を確認	南部東側	観察表のみ

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
24	砥石	(3.2)	(2.4)	1.1	13.70	凝灰岩	表・裏面と一側面が砥面	中央部西側	観察表のみ
25	砥石	(4.1)	(3.2)	0.8	18.17	砂岩	表・裏面と一側面が砥面	中央部西側	観察表のみ
26	砥石	(3.4)	(3.2)	0.8	16.36	凝灰岩	表・裏面と一側面が砥面	中央部東側	観察表のみ
27	砥石	(4.8)	(2.8)	1.7	22.13	凝灰岩	表・裏面が砥面	中央部西側	観察表のみ
28	砥石	(3.6)	(3.2)	(1.0)	10.83	凝灰岩	表面と二側面が砥面	中央部西側	観察表のみ
29	硯	(6.0)	7.2	0.9	60.86	粘板岩	表・裏面とも海部を確認	28 年度調査区未報告部北側	観察表のみ
30	砥石	(4.7)	3.0	1.8	39.35	凝灰岩	下端の欠損部を除き全て砥面	南部中央	観察表のみ
31	砥石	(8.8)	3.6	1.8	108.97	凝灰岩	下端の欠損部を除き全て砥面　被熱	南部東側	観察表のみ
32	砥石	10.7	9.8	9.6	1111.1	雲母片岩	置き砥石　砥面５面確認	南部東側	観察表のみ
33	五輪塔カ	(12.8)	(11.5)	(5.8)	786.3	花崗岩	方形のコーナー部を確認	南部東側	観察表のみ
34	砥石	(5.2)	(2.7)	1.0	28.32	凝灰岩	表・裏面が砥面	南部西側	観察表のみ
35	砥石	(3.8)	(3.0)	1.0	16.45	凝灰岩	表・裏面と一側面が砥面	28 年度調査区未報告部北側	観察表のみ
36	砥石	3.0	4.0	3.3	51.93	凝灰岩	下端面を除き砥面	28 年度調査区未報告部南側	観察表のみ

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
10	不明	(22.6)	1.3	0.5	92.75	鉄	断面長方形で刃部の形成なし	南東部	PL57
37	鎌カ	(6.2)	(4.7)	0.3	36.39	鉄	錆で刃部不明瞭	中央部東側	観察表のみ
38	不明	(5.1)	(2.6)	0.6	69.29	鉄	断面長方形　貫通孔あり	中央部西側	観察表のみ
39	鎌カ	(4.0)	(2.9)	0.3	11.96	鉄	断面長方形で刃部の形成は不明瞭	中央部西側	観察表のみ
40	釘	(6.8)	(1.0)	0.5	9.19	鉄	先端部　断面長方形	中央部西側	観察表のみ
41	不明	(6.6)	(4.2)	0.3	27.44	鉄	半円状　刃部は未確認	中央部西側	観察表のみ
42	鎌カ	(6.1)	(4.7)	0.2	33.13	鉄	刃部不明瞭	中央部	観察表のみ
43	煙管	(4.6)	(1.0)	－	7.42	銅	雁首部	中央部東側	観察表のみ
44	煙管	(5.0)	(1.5)	－	7.10	銅	雁首部	中央部西側	観察表のみ
45	不明	2.3	2.4	0.1	1.00	銅	円形　薄く皿状の断面形	南部西側	観察表のみ
46	釘カ	(5.7)	0.5	0.5	7.47	鉄	先端部　断面方形	南部東側	観察表のみ
47	釘カ	(5.1)	0.6	0.5	6.14	鉄	断面長方形	南部東側	観察表のみ
48	刀子カ	(4.3)	1.4	0.3	5.77	鉄	刃部カ	Ｐ４e4 区	観察表のみ
49	刀子カ	(7.2)	(1.4)	(0.4)	18.50	鉄	刃部カ　錆化著しく表面剥離	南部西側	観察表のみ
50	煙管	(5.1)	(0.5)	－	2.12	銅	吸口部	南部	観察表のみ
51	釘	(9.2)	0.7	0.5	15.64	鉄	先端部残存　頭部は欠損カ	SI86 付近	観察表のみ
52	不明	(3.8)	(4.2)	0.4	8.75	鉄	円環状	28 年度調査区未報告部北側	観察表のみ
53	煙管	(1.7)	(1.3)	－	1.26	銅	雁首部	28 年度調査区未報告部南側	観察表のみ
54	釘	(3.9)	(0.5)	(0.5)	4.30	鉄	端部が湾曲　断面方形	28 年度調査区未報告部南側	観察表のみ
55	煙管	(7.8)	1.0	－	12.51	銅	吸口部　中に木質残存	28 年度調査区未報告部南側	観察表のみ
56	刀子カ	(6.6)	0.9	0.4	6.45	鉄	刃部～茎部分	SI107、SX11 付近	観察表のみ

第４節　総　　括

1　はじめに

島名本田遺跡は，平成 23 年度から調査を実施し，平成 31 年度までに断続的に６次の調査を行ってきた。調査面積は約 45,000㎡に及び，河内郡嶋名郷の中心的集落である島名熊の山遺跡の，谷を挟んだ西側の台地縁辺部を南北に調査していることになる。今回報告する地点は，遺跡の南部にあたり，旧石器時代から江戸時代までの遺構と遺物が確認できたが，中心となるのは古墳時代中期（５世紀）から平安時代（10 世紀）にかけての集落跡と，16 世紀後半以降の屋敷跡の一部で，島名熊の山遺跡と集落の消長を同じくする部分が多い。よってここでは，島名熊の山遺跡の様相と対比しながら，集落の変遷を概観し，当遺跡の特徴を明らかにしたい。前述したように当遺跡は北側に遺構の広がりが見られ，本来ならばすべての調査成果を報告した後に分析すべきものであるが，古代までの集落は今回報告する調査区が中心で，北側にはさほどの広がりを見せていないことを踏まえて，現段階の考察としたい。対照する島名熊の山遺跡については，調査が数次にわたり，かつ遺構が膨大であることから，最終的な集落全体の変遷や評価については未了の部分がある。しかしその中にあっても，集落の中心的な部分を網羅して優れた分析がなされた『第 190 集』[1]と『第 291 集』[2]，及び清水哲氏の「島名熊の山遺跡の集落研究のための前提作業」[3]を参照にする。

第 356 図　当遺跡と島名熊の山遺跡の位置関係
（茨城県教育財団『第 291 集』第 575 図の一部を抜粋・加筆）

『第 291 集』，及び清水哲氏の「島名熊の山遺跡の集落研究のための前提作

業」では，島名熊の山遺跡の所在する台地に入り込む谷津と建物群の分布から，A～F群の６つの「住居跡群」に分類されている。当遺跡をこれに照らし合わせれば，島名熊の山遺跡の位置する台地の西側に，南北に大きく入り込む「谷F」を挟んで，「住居跡群E」と対峙する位置になる。当遺跡の調査区域内の北東部と南東部に入り込む谷津は，この「谷F」から派生したものであろう。「住居跡群E」の建物群との直線的な距離は約80ｍである。

当遺跡の中心をなす古墳時代以降の集落跡の形成前夜の状況を概観すると，活動痕跡が確認できるのは後期旧石器時代で，下総編年Ⅱａ段階のナイフ形石器が２点出土している[4)]。縄文時代では，陥し穴が２基のほか，早期前半から後期中葉までの遺物が確認されている。陥し穴は長径が約２ｍの楕円形で，断面が逆台形状で底面が狭まる形状で，両者とも台地東側の斜面部に位置している。第60号土坑は谷の傾斜に長径方向が平行するように，第456号土坑は斜面の傾斜に直交するように位置しており，両者の間隔は約50ｍである。時期については，出土遺物がないため不明とせざるを得ない。縄文土器は調査区域全域から184点出土しており，特にまとまるような地点は確認できなかった。早期前半の稲荷台式から後期中葉の加曽利Ｂ２式までが確認でき，特に後期初頭から前葉が数量も多く，破片も大形のものが多い。古墳時代以降の多くの遺構の構築によって破壊されてしまっているが，本来的にはある程度の数の遺構が存在したものと考えられる。

縄文時代後期以降，弥生時代には遺構・遺物とも確認できない。次に当台地上での活動痕跡が認められるのは，本格的に集落が形成され始める５世紀前葉まで待たなければならない。

２　集落の変遷と出土遺物

⑴　古墳時代の遺構と出土遺物

今回の調査区では，４世紀代の遺構は確認できなかった。５世紀前葉は第49･53号竪穴建物跡の２棟で，調査区の中央やや西側と南西部に位置している。５世紀中葉では第45・57・66・68・81号竪穴建物跡の，５棟が確認されている。分布をみると前段階と同じ中央やや西側（第45号），南西部（第57・81号），南東部（66・68号）の３か所にまとまるように見える。このうち第45号竪穴建物跡は超大型，第66号竪穴建物跡は大型，第81号竪穴建物跡は中型で，それぞれ金属製品を保有する。特に第81号竪穴建物跡からは小型仿製鏡が出土しており，竪穴建物跡の大きさと保有する遺物に格差がある。

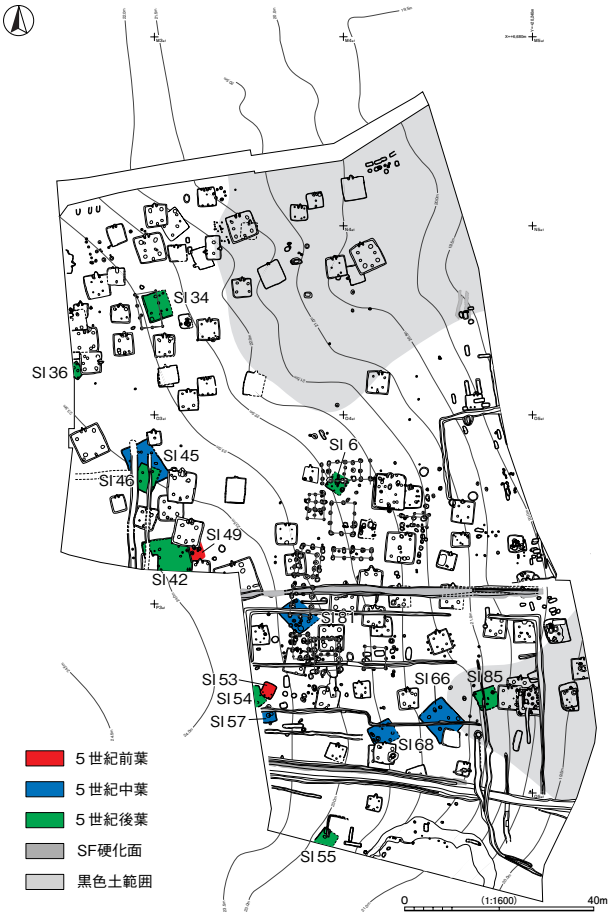
５世紀後葉は第６・34・36・42・46・54・85号竪穴建物跡の７棟が該当し，台地上に広く展開しており，群在する様子は見られない。主軸方向は北西方向を基調とするものと，北東方向を基調とするものがあり，この違いが細かな時期差を示している可能性がある。このうち超大型の第42号竪穴建物跡は，刀装具の一部である切羽や，耳環の可能性のある円環状の鉄製品，石製模造品２点，砥石２点などを有しており，当集落内で祭祀等を司る優位な存在と考えられる。

当期の土坑は，可能性のあるものを含めて18基確認できた。このうち５世紀中葉に比定できる第90・118号土坑は径約２ｍの円形で，特に第90号土坑は，土師器の甕が完形の状態で，横位に埋納されたように出土している。５世紀前葉の第133号土坑と５世紀中葉の第308号土坑は，いずれも長径１ｍほどの楕円形で，覆土中からほぼ完形に復元できる，複数個体の甕や高坏が破砕された状態で出土している。第190・453号土坑は，ピット状の小さな土坑から土師器の甕が破砕された状態で出土している。完形に近い遺物が出土する在り様は，屋外の貯蔵穴などの機能を類推させるが，土器の出土状況からは埋納とも遺棄とも捉えがたい。これらは台地上に広く分布しており，特にまとまるような部分はない。ただし第

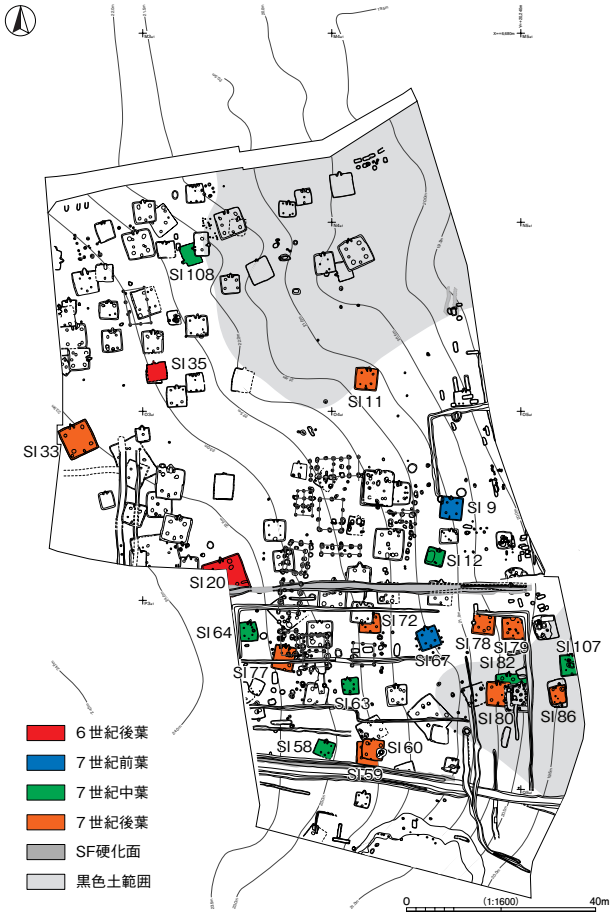
190・235 号土坑は隣接して同期の第 42・46 号竪穴建物跡が位置しており，これらの建物に付随する施設の可能性もある。

この時期の島名熊の山遺跡は，本格的に集落が展開する前段階で，台地の北東部から東部，及び当遺跡と谷を挟んだ対岸の E 群に散村的に展開しており，清水氏は「台地裾部の自然湧水を利用した谷水田を生業の基盤とし…（中略）小規模集団が移住を繰り返していた」と想定されている[5)]。当遺跡もその小規模集団の一つと捉えられよう。ただし第 81 号竪穴建物跡から小型仿製鏡が出土するなど，特異な一面を有する。県内で確認される古墳時代の鏡は 44 面で，当然のことながら古墳から出土するものが大半である[6)]。竪穴建物跡から出土した例は，古墳時代前期の取手市大山Ⅰ遺跡第 37 号住居跡から出土した重圏文鏡と，古墳時代中期の日立市原の内遺跡 6 号住居跡から出土した珠文鏡の 2 面しかない。大山Ⅰ遺跡は 4 世紀末の竪穴建物跡の床面から 8 cm ほど上位から，無造作に廃棄されたような状況で出土している[7)]。当遺跡の珠文鏡も第 81 号竪穴建物跡の西壁際の床面から，鏡面を上にして出土しており，埋納や遺棄されたような様子は確認できなかった。なお，当該期に属する古墳は周辺では確認できない。

6 世紀前葉から中葉の遺構は確認されておらず，集落の断絶期となっている。再び生活の痕跡が確認されるようになるのは 6 世紀後葉からで，島名熊の山遺跡もこの時期の遺構数が最も多い。6 世紀後葉は第 20・35 号竪穴建物跡の 2 棟で，遺構の空白域を挟んだ北部と南部に 1 棟ずつ確認されている。このうち第 20 号竪穴建物跡は，一辺 8 m を超える超大型の竪穴建物跡で，多くの遺物を有している。6 世紀後葉から 7 世紀前葉は第 9 ・67 号竪穴建物跡の 2 棟で，いずれも南部に位置している。第 67 号竪穴建物跡の周囲には第 5 号柱穴列が巡っており，壁外柱穴が確認できた例と考えられる。7 世紀前葉以降になると，



第 357 図　竪穴建物跡の時間的変遷（5 世紀代）



第 358 図　竪穴建物跡の時間的変遷（6 ・ 7 世紀代）

確認できる建物跡が増加する。７世紀前葉から中葉は第 12・58・63・64・82・107・108 号竪穴建物跡の７棟で，調査区の北部に位置する１棟（第 108 号）と，遺構の空白域を挟んだ南部に展開する６棟の，大きく二つのまとまりが捉えられる。南部の集団は，さらに台地上の南西部に位置する３棟（第 58･63･64 号）と，台地斜面部の南部に位置する３棟（第 12・82・107 号）に群別することも可能である。この時期には南部の谷津頭付近は，人が生活できる程度に安定した地表面となっていたようで，南東部の集団は谷の黒色土中にも遺構を構築している。北部の第 108 号竪穴建物跡は，当遺跡でも珍しい西壁に竈を有する竪穴建物跡で，砥石が２点出土している。南部の建物群は北東部に主軸方向があるものと，北西部に主軸方向があるものがある。規模は第 82 号竪穴建物跡がやや大きいものの，ほかはいずれも小～中型であり，特筆する遺物も有していない。このうち第 12 号竪穴建物跡は，床面に焼土ブロックと粘土ブロックを伴う長径 2.4 ｍの浅い土坑が確認され，何らかの工房の可能性も考えられる。

７世紀後葉は第 11･33･59･60･72･77 ～ 80･86 号竪穴建物跡の 10 棟が確認できる。遺構の空白域であっ

遺構名	時期	金属製品	土製品	石器・石製品	椀状滓	鉄塊系	鉄滓	備考
SI 49	５ｃ前葉							
53	５ｃ前葉	手鎌１					○	
45	５ｃ中葉	釘１	羽口１		○	○	○	
57	５ｃ中葉							
66	５ｃ中葉	手鎌１		砥石				
68	５ｃ中葉						○	
81	５ｃ中葉	小型仿製鏡１						
55	５ｃ中～後葉							
6	５ｃ後葉							
34	５ｃ後葉			紡錘車１				
36	５ｃ後葉							灰釉１※
42	５ｃ後葉	円環状１，切羽１，釘１	羽口１	砥石２，模造品３	○	○	○	墨書「□」２※
46	５ｃ後葉		紡錘車１					
54	５ｃ後葉					○		
85	５ｃ後葉			砥石１			○	
104	５ｃ代					○	○	
70	５ｃ代							
20	６ｃ後葉		羽口１			○	○	
35	６ｃ後葉			模造品（円盤）１				
9	６ｃ後～７ｃ前葉							
67	６ｃ後～７ｃ前葉		支脚１			○		
12	７ｃ前～中葉		支脚１		○		○	
64	７ｃ前～中葉					○		
107	７ｃ前～中葉		支脚１					
108	７ｃ前～中葉			砥石２		○	○	
58	７ｃ中葉					○	○	
63	７ｃ中葉						○	
82	７ｃ中葉			転用砥石１		○		
77	７ｃ中～後葉	飾り金具ヵ１	羽口１，支脚１	模造品１	○	○	○	
11	７ｃ後葉	鬥ヵ２，鉈尾１，刀子１	支脚１			○	○	灰釉１※
33	７ｃ後葉	鎌１，鑿１，釘ヵ１，不明１，煙管１※	紡錘車１，羽口１	紡錘車１，砥石１	○	○	○	
59	７ｃ後葉							
60	７ｃ後葉	鉸具（銅製）１						
72	７ｃ後葉				○			
78	７ｃ後葉	刀子２，鎌１，鉄鏃２					○	
79	７ｃ後葉		転用砥石３	砥石２				灰釉１※
80	７ｃ後葉	鉄鏃１						灰釉１※
86	７ｃ後葉	不明１	羽口７		○	○	○	
69	７ｃ代							
105	７世紀代						○	
38	８ｃ前葉以前							灰釉１※

表 237　竪穴建物跡の遺物保有状況（古墳時代）※は混入と考えられるもの

た北部に位置する２棟（第 11・33 号）と南西部に位置する３棟（第 60・72・77 号），南東部に位置する４棟（第 78 ～ 80・86 号）に群別でき，北部の２棟を除いて，主軸方向もほぼ北向きに統一される。規模も北部の第 33 号竪穴建物跡の大型を除いて，一辺５ｍ前後の中型で均質である。またこの段階から金属製品の保有率が高まり，第 72・77・79 号竪穴建物跡を除き金属製品が出土している。第 79 号竪穴建物跡からは金属製品は出土していないが，砥石２点と土師器甕の体部片を転用した砥石が３点出土していることから，金属製品を保有していた可能性が高い。第 11 号竪穴建物跡は鉄製鉈尾と閂と考えられる鉄製品が２点，刀子が１点出土しており，倉を管理するような立場の人物が想定される。第 60 号竪穴建物跡からも銅製の腰帯具（鉸具）が出土しており，在地有力者層の存在が伺える。第 33 号竪穴建物跡からは，鎌１点，鏨１点，釘ヵ１点の鉄製品と砥石１点，紡錘車２点，羽口１点が出土しており，紡錘車や鏨・羽口の鍛冶関連遺物などの手工業に関連する遺物が特筆される。椀状滓や鉄滓，鉄塊系遺物も多く出土していることから，この段階の鍛冶工房跡は未確認であるものの，鍛冶関連の手工業に従事した集団の可能性がある。

６世紀から７世紀代の島名熊の山遺跡は，台地全体に集落域が広がり，大規模な開発行為が行われた段階である。特に６世紀後葉から７世紀前葉に最も竪穴建物跡の軒数が多く，Ｅ群も台地上のみならず，東側の谷に向かう斜面部にも遺構が構築されている。７世紀中葉以降は竪穴建物跡が減少傾向に転じており，７世紀後葉には激減するようである。この段階に当遺跡では遺構数が増加する傾向があり，大きく見た場合，谷Ｆを挟んだ西側の台地上に集落域が広がったと捉えることもできる。島名熊の山遺跡では鉄滓の出土状況などから６世紀後葉以降の鉄生産の可能性が指摘されている。特にＥ群が最も集中した出土状況が確認できるという。当遺跡でも６世紀後葉以降の建物跡から一定量の鍛冶関連遺物が出土していることから，谷に面した斜面部を中心に鍛冶関連遺構が展開していた可能性がある。

⑵　奈良・平安時代の竪穴建物跡と出土遺物

７世紀後葉から８世紀前葉の竪穴建物跡は，第８・10・13・15・18・21・32・37・47・61・62・65・83・93・97・98・101・103・106 号竪穴建物跡の 19 棟で，最も多くの竪穴建物跡が確認できた時期である。遺構は空白部を挟んだ北部（第 32・37・93・97・98・101・103・106 号）と中央部（第８・10・13・15・16・18・21・47 号），南部（第 62・65・83 号）の，大きく３群に群別される。前段階までは分布が見られなかった中央部に，新たに竪穴建物が展開するようになる。北部は主軸方向と位置から，さらに北西部の第 32・37・93 号竪穴建物跡と，北東部の第 97・98・101・103・106 号竪穴建物跡に分けることもできる。北東部は第 106 号竪穴建物跡を除きいずれも一辺６ｍ前後の中～大型で，第 101 号竪穴建物跡からは鎌や刀子のほかに，鉄鏃や馬具（引手），小札４枚が出土している。また第 103 号竪穴建物跡からは，刀子や鉄鏃のほか，把手付中空円面硯が出土している。第 106 号竪穴建物跡は，当遺跡では少ない西壁に竈を有するもので，７世紀中葉にもほぼ同位置で，西竈を有する第 108 号竪穴建物跡が確認されている。形状から工房的な用途が想起され，伝統的に当地点で何らかの工房を操業していた可能性もある。北部の集団はこの第 101・103 号竪穴建物跡を中心に共同体が営まれたものと考えられる。中央部では第 13 号竪穴建物跡が大型の建物跡である。第 47 号竪穴建物跡は中型であるが，鎌や鉄鏃，鉄製の紡錘車を有し，第 13 号竪穴建物跡とともに，当集団の中心的な建物跡と考えられる。南部は建て替えを伴う大型の第 83 号竪穴建物跡が，金銅製の馬具や鉄鏃，刀子等を有し，当集団の中心的な建物跡と言える。第 62 号竪穴建物跡からは手鎌･刀子のほか，鏨と考えられる鉄製品と羽口，椀状滓などの鍛冶関連遺物が多く出土している。

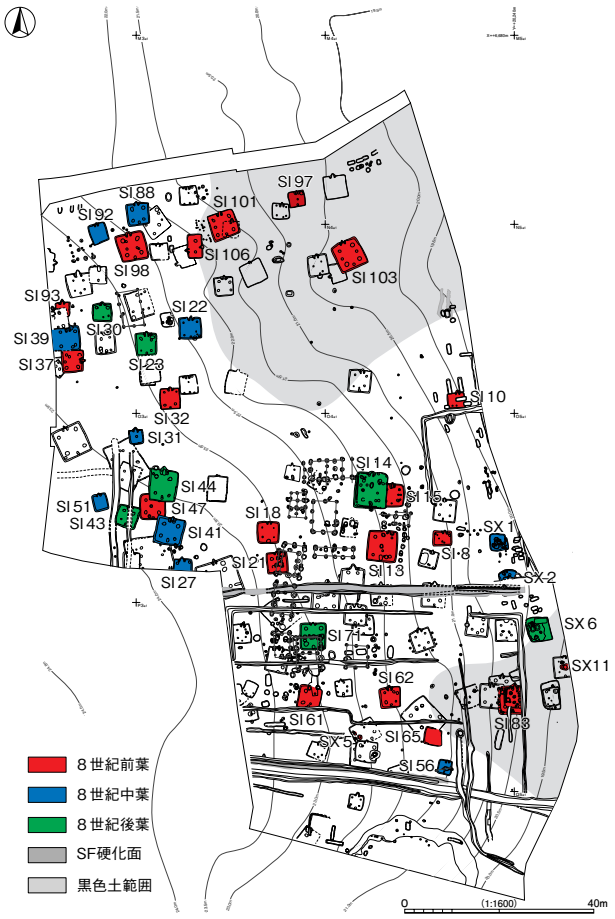
８世紀中葉は，第 22・27・31・39・41・51・56・88・92 号竪穴建物跡の９棟で，前段階に比べて大き

く数を減じる。分布では北部の一群（第 22・29・88・92 号），中央西部の一群（第 27・31・41・51 号），南部の一群（第 56・71 号）で，北部は引き続き居住が継続するが，南部は散漫となる。北部では中型の第 39 号竪穴建物跡が銅製の巡方や刀子・鉄鏃等を有しており，中心的な竪穴建物跡である。南部では前段階に建物跡が多く見られた中央付近には竪穴建物跡が確認できず，この地点には第８号掘立柱建物跡が構築され，後葉まで継続している。中央西部は中型の第 41 号竪穴建物跡が手鎌，刀子，釘ヵの金属製品を有する，中心的な建物跡である。南部では第 71 号竪穴建物跡が中型で，鋤先や鉄製紡錘車，鉄鏃のほか，火打金や金鉗，羽口など，鍛冶関連の遺物を有している。東部斜面部で第１・２号鍛冶工房跡が操業していることから，この操業に関連した人物の可能性がある。

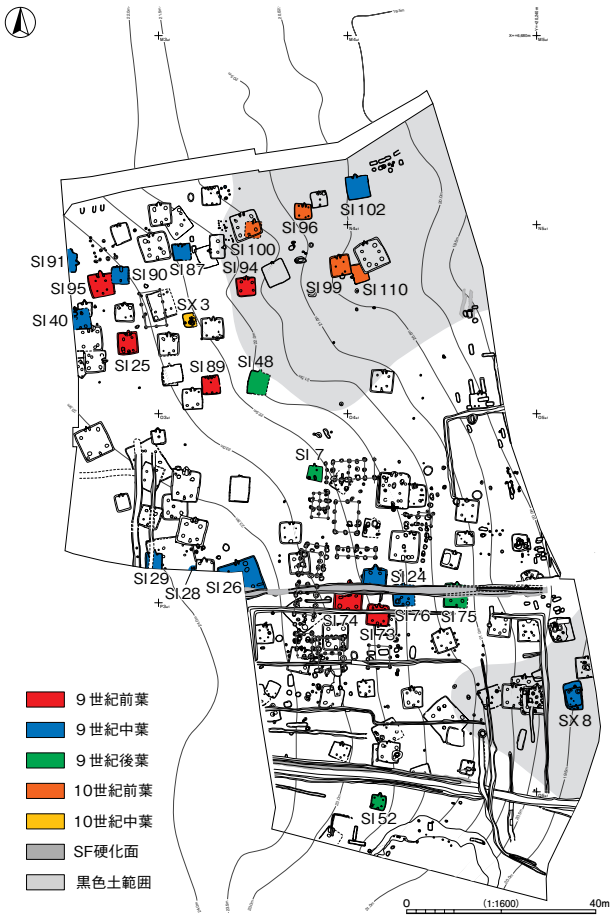
８世紀後葉は，第 14・23・30・43・44 号竪穴建物跡の５棟で，より散漫な分布となる。北部に中型の第 23・30 号竪穴建物跡が，中央西部には大型の第 44 号竪穴建物跡と中型の第 43 号竪穴建物跡が，中央東部には大型の第 14 号竪穴建物跡が分布する。第 14 号竪穴建物跡は，鎌１点，刀子３点，鉄鏃１点，釘２点のほか，鏨の可能性がある鉄製品，また須恵器坏を転用した硯が出土している。掘立柱建物跡や第５号鍛冶工房跡に隣接することから，鍛冶工房跡や倉の管理に関連する建物跡の可能性がある。

以上，当集落は７世紀後葉から８世紀前葉にかけて，最も隆盛を極める。それぞれ１棟の中心的建物跡と小形の２～３棟の竪穴建物跡がまとまりをもって分布する。この段階はほとんどの竪穴建物跡から金属製品と鍛冶関連滓が出土しており，当集落に居住する集団の鉄保有率は高い。８世紀後葉にはコの字状の配置が見られる倉庫群を有しており，一部公的な機能を有した部分もあろう。

８世紀代の段階の島名熊の山遺跡は，７世紀後葉に減少傾向にあった集落が再編成された時期であり，



第 359 図　竪穴建物跡の時間的変遷（８世紀代）



第 360 図　竪穴建物跡の時間的変遷（９・10 世紀代）

正方位にそった遺構配置や公的機能を備えたと考えられる倉庫群，また中央部には方形に巡る区画溝等も確認でき，在地官人の存在がうかがえる。一般的に律令期は，律令による編戸や班田収授法の口分田の班給により，それまで集落が営まれなかった地域に新たな開発集落が展開する時期とされる。当遺跡では島名熊の山遺跡と歩調を合わせるように，前段階までの共同体の一部を踏襲しつつも，新たに空白地帯だった地点を開発し，集落が形成されたものと考えられる。

９世紀以降は，竪穴建物跡の確認数が減少するが，空白部を挟んで大きく北部と南部の２群構成をとる点は，前段階を踏襲している。竪穴建物跡はおおよそ北向きで，一辺が４ｍ前後の小型のものがほとんどである。９世紀前葉は，北部の第 25・89・94・95 号竪穴建物跡の４棟と，空白部を挟んだ南部の第 73・74 号竪穴建物跡の２棟の，６棟である。北部の第 95 号竪穴建物跡と南部の第 74 号竪穴建物跡がやや大きく，金属製品も多く保有している。中葉になると建物跡は 10 棟とやや増加するが，中央の空白域を挟んで北部と南部に分布する様子は変わらない。北部の第 102 号竪穴建物跡と南部の第 24・61 号竪穴建物跡が中形で，保有する遺物からも中心的な建物跡と考えられる。特に第 102 号竪穴建物跡では，閂と考えられる鉄製品や，蛇紋岩で精緻に作られた腰帯具（丸鞆４点，巡方３点）を保有しており，倉を管理する在地官人的な人物の存在が想起される。第 91 号竪穴建物跡は東竈で，当遺跡ではこれのみである。９世紀後葉は，北部の第 48 号竪穴建物跡，南部の第７・52・75 号竪穴建物跡の４棟である。第 48・75 号竪穴建物跡が中型で，第 75 号竪穴建物跡は刀子や紡錘車，釘等を保有している。10 世紀に入ると北部にのみ分布するようになる。10 世紀前葉は第 96・100・110 号竪穴建物跡の３棟で，第 100 号竪穴建物跡は掘方が未確認のため不明であるが，第 96・110 号竪穴建物跡はいずれも小型である。10 世紀後葉は中型の第 99 号竪穴建物跡のみとなり，これ以降の竪穴建物跡は確認できなくなる。10 世紀の竪穴建物跡は，いずれも金属製品等を保有していないが，羽口や砥石，鍛冶関連滓を出土していることから，前段階から引き続き鍛冶の操業に関連した集団の建物跡の可能性がある。

島名熊の山遺跡では，９世紀後半以降公的な性格を有すると考えられる建物群や祭祀の場が廃絶する一方で，居宅と見られる庇付建物や施釉陶器の出土状況などから，一部の有力者層の台頭が顕在化する。居住域は台地東部から南東部が中心となり，10 世紀以降は掘立柱建物跡の消失や小形化，仏堂的な建物の出現など，集落景観の変化が見られる。嶋名郷域の他の集落が姿を消す中で，島名熊の山遺跡のみは徐々に衰退しながらも 11 世紀代まで営まれ続ける。当遺跡でも 10 世紀中葉以降の建物跡は確認できなくなり，後述するように土器焼成遺構と考えられる遺構が南部台地上で数基確認されているのみである。当地域は集落域としては認識されなくなり，荒廃地での土器生産などが細々と行われていた様子が伺える。

⑵　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は，８世紀前葉から９世紀中葉までの 15 棟が確認できた。８世紀前葉は第１号柱穴列とそれに組み合う可能性のある土坑群からなる建物跡が，８世紀中葉は第８・16 号掘立柱建物跡の２棟が該当する。第 16 号は掘立柱建物跡は，近接して大形の第 71 号竪穴建物跡が位置することから，この付属施設であった可能性もある。

８世紀後葉は４棟が該当する。第４号掘立柱建物跡は部分的で不明瞭であるが，南北棟の第６～８・16 号掘立柱建物跡，東西棟の第５号掘立柱建物跡があり，庇あるいは目隠し等の可能性がある施設を有する第 11 号掘立柱建物跡も当期となる可能性がある。南北棟は主軸方向がほぼ同じで，それらと主軸方向が直交するように，東西棟の第５・11 号掘立柱建物跡が配置され，コの字状を呈している。８世紀前葉と

遺構名	時期	金属製品	土製品	石器・石製品	椀状滓	鉄塊系	鉄滓	備考
SI 15	7ｃ後～8ｃ前葉					○		
21	7ｃ後～8ｃ前葉	鉄鏃2					○	
83	7ｃ後～8ｃ前葉	鉄鏃2，馬具（金銅）1，刀子1	勾玉1，砥石2		○	○	○	
101	7ｃ後～8ｃ前葉	引手1，鎌1，小札4，鉄鏃1，刀子1	羽口2		○	○	○	
8	8ｃ前葉	責金具1						
10	8ｃ前葉				○			
13	8ｃ前葉	刀子1	支脚3	砥石1		○	○	
18	8ｃ前葉	刀子1，釘$_{カ}$1	羽口1	砥石1			○	
32	8ｃ前葉			模造品2※				
37	8ｃ前葉	刀子1		模造品1※				灰釉1※
47	8ｃ前葉	鎌1，鉄鏃$_{カ}$1，紡錘車1			○	○	○	
61	8ｃ前葉	鑿1，刀子1，鎌2，釘1	羽口1	砥石2	○	○	○	鍛造剝片・粒状滓あり 灰釉※
62	8ｃ前葉	手鎌$_{カ}$1，刀子1，鑿$_{カ}$1	羽口1		○	○	○	灰釉1※
65	8ｃ前葉				○	○	○	
93	8ｃ前葉							
98	8ｃ前葉	刀子1，不明1	転用砥石1，支脚2			○	○	
103	8ｃ前葉	刀子2，鉄鏃2	支脚3，羽口5			○	○	灰釉1※
106	8ｃ前葉	小札1		砥石1	○	○	○	
22	8ｃ中葉	鎌$_{カ}$1	砥石1			○	○	
27	8ｃ中葉	釘$_{カ}$2	羽口1，支脚1	砥石1	○	○	○	
31	8ｃ中葉		支脚1	砥石1	○	○	○	
39	8ｃ中葉	刀子2，鉄鏃$_{カ}$1，巡方（銅）1		模造品1※		○	○	
41	8ｃ中葉	手鎌1，刀子1，釘$_{カ}$1	羽口4		○	○	○	灰釉1※
51	8ｃ中葉							
56	8ｃ中葉	刀子1						
88	8ｃ中葉		羽口2		○	○	○	
92	8ｃ中葉	不明1	支脚2				○	
14	8ｃ後葉	刀子3，鉄鏃1，不明1，鎌1，鑿$_{カ}$1，釘2		砥石1		○	○	
23	8ｃ後葉	鉄鏃$_{カ}$1，釘$_{カ}$1		砥石1	○			
30	8ｃ後葉	刀子1				○	○	
43	8ｃ後葉	不明1		模造品2※	○		○	
44	8ｃ後葉	鎌1，紡錘車3，刀子2，鋤先2，釘$_{カ}$1	支脚1，不明1	紡錘車1，模造品2※	○	○	○	炉壁材あり　灰釉※
71	8ｃ後葉	金鉗1，火打金1，鋤先1，鉄鏃1，紡錘車1	羽口1	模造品1※	○	○	○	
16	8ｃ代							
19	8ｃ代					○	○	
25	9ｃ前葉	刀子4，鎌1				○	○	
73	9ｃ前葉		羽口2				○	灰釉（瓶類1）
74	9ｃ前葉	刀子4，釘4，紡錘車1，鎌1	支脚4，羽口3，土玉1，紡錘車1		○		○	
89	9ｃ前葉							灰釉（瓶類2）
94	9ｃ前葉	刀子1，鎌1				○		灰釉（瓶類1）
95	9ｃ前葉	鉄鏃1，火打金1						灰釉（瓶類4）
87	9ｃ前～中葉					○	○	
24	9ｃ中葉	刀子2，釘$_{カ}$2		模造品1※	○	○	○	
26	9ｃ中葉		支脚2					
28	9ｃ中葉		支脚2	転用砥石1				
29	9ｃ中葉	責金具1，釘$_{カ}$2	支脚1		○	○	○	灰釉（碗，瓶類3）
40	9ｃ中葉	刀子1，釘1，鉄鏃$_{カ}$1，閂$_{カ}$1					○	灰釉（瓶類3）
76	9ｃ中葉	鑿$_{カ}$1						
90	9ｃ中葉					○	○	
91	9ｃ中葉							
97	8ｃ前葉	鉄鏃1			○	○	○	
102	9ｃ中葉	鉄鏃1，閂$_{カ}$1，釘$_{カ}$1		砥石3，丸鞆4，巡方3		○	○	
7	9ｃ中～後葉							
48	9ｃ後葉							灰釉（瓶類1）
52	9ｃ後葉	釘1				○	○	
75	9ｃ後葉	紡錘車2，刀子2，釘$_{カ}$1			○	○		
17	9ｃ代					○	○	
96	10ｃ前葉				○	○	○	
110	10ｃ前葉		羽口1				○	
100	10ｃ前葉		羽口1		○	○	○	灰釉（瓶類1）
99	10ｃ後葉		支脚$_{カ}$1，羽口1	砥石1	○	○	○	

表238　竪穴建物跡の遺物保有状況（奈良・平安時代）※は混入と考えられるもの

した第１号柱穴列とそれに組み合う土坑群からなる３×２間の南北棟の１棟も，８世紀前葉の第13号竪穴建物跡を掘り込んでいること，８世紀後葉段階の掘立柱建物跡とほぼ軸を同じくすることなどからすると，これも含めて当期の遺構とすることも可能である。この掘立柱建物跡の位置する地点は，８世紀中・後葉の竪穴建物跡は確認できない。第７号掘立柱建物跡を除きいずれも側柱建物で，形態や配置などから，頴稲や殻稲などを保管する公的な機能を備えた倉庫などの建物群と考えられる。

９世紀段階はより南部に展開する。９世紀前葉は南北棟の第14号掘立柱建物跡が，９世紀中葉は同じく南北棟の第12･13･15号掘立柱建物跡が該当する。第12･13号掘立柱建物跡は主軸方向をやや東に振っており，前段階の第６号掘立柱建物跡に近い。また同じ南部に属する同時期の第７・24・61号竪穴建物跡とは，主軸方向をほぼ同じくしており，有機的な関係も示唆される。第14・15号掘立柱建物跡は，主軸方向が他と異なり，８世紀中葉とした第16号掘立柱建物跡とほぼ同軸で，若干東に振れている。近接する第76号竪穴建物跡，やや離れるが同じ南部の第29号竪穴建物跡とほぼ同軸である。この軸方向の違いが，同じ段階の中の細かな時間差を示しているのか，建物の機能や管理集団の違いを示しているのかは明らかではないが，前段階から継続してこの地点に，倉庫などの建物群が建設されている点が確認できる。

８世紀以降に生活痕跡が確認されるようになる北部には，第９号掘立柱建物跡以外確認できない。第９号掘立柱建物跡は詳細な時期が不明であり，南部の建物跡に比べて，柱穴の径が小さく柱筋がずれているなどの違いがある。あるいは後代の時期の可能性もあり，北部では掘立柱建物跡が展開しなかった可能性もある。また調査区の北西部に位置する土坑群は，小屋組みを確認するまでには至らなかったが，形状から柱穴となる可能性もあり，確認した以外にも掘立柱建物跡が存在する可能性もある。

⑶　鍛冶工房跡

鍛冶工房跡は，８世紀前葉から10世紀中葉までの，８基を確認した。８世紀前葉の第４号鍛冶工房跡は，南部の台地上に位置する。炉跡と土坑のみの確認のため，竪穴構造は不明である。これに対し８世紀中葉の第１・２号鍛冶工房跡，後葉の第５号鍛冶工房跡，詳細な時期は不明であるが，形態から８世紀代と考えられる第８号鍛冶工房跡は，調査区東部の，谷に面する台地斜面部に位置している。４～５ｍの方形あるいは長方形の掘方で，炉と炉の前面の作業用の土坑を有する構造を基本とする。また作業用土坑の坑底に小ピットを有するものがある。各工房跡では炉跡や土坑が複数確認され，さらに重複関係が確認できることから，作り替えを繰り返し長期にわたって操業していた様子が捉えられる。炉や土坑内から出土した鉄滓の成分分析の結果，第１号鍛冶工房は精錬鍛冶を，第２号鍛冶工房跡では主に砂鉄を原料とした精錬鍛冶と鍛錬鍛冶を，第５号鍛冶工房跡では精錬鍛冶の操業が指摘されている。またいずれの鍛冶工房跡からも多量の鍛造剥片や粒状滓が出土しており，精錬鍛冶と合わせて鍛錬鍛冶が行われていた状況が確認できた。第１号鍛冶工房跡では炉からやや離れた土坑３・４周辺で特に多く，第５号鍛冶工房跡では炉６と作業土坑２及び炉１周辺から鍛造剥片・粒状滓が多く出土しており，作業工程による場の使い分けも想定される（pp.355・357，第360・362図）。

９・10世紀代は，９世紀中葉の第６号鍛冶工房跡，９世紀後葉から10世紀代の第７号鍛冶工房跡，10世紀中葉の第３号鍛冶工房跡があり，各期に１基のみで操業するようになり，前段階に比べて規模が縮小している。９世紀中葉は，南東部の斜面部に第６号鍛冶工房跡が，北部の北から入り込む谷に面して第７号鍛冶工房跡がある。第６号鍛冶工房跡は，第86号竪穴建物跡と重複しているが，第86号竪穴建物跡を先に調査してしまったために，新旧関係が確認できなかった。出土した遺物から第86号竪穴建物跡が古

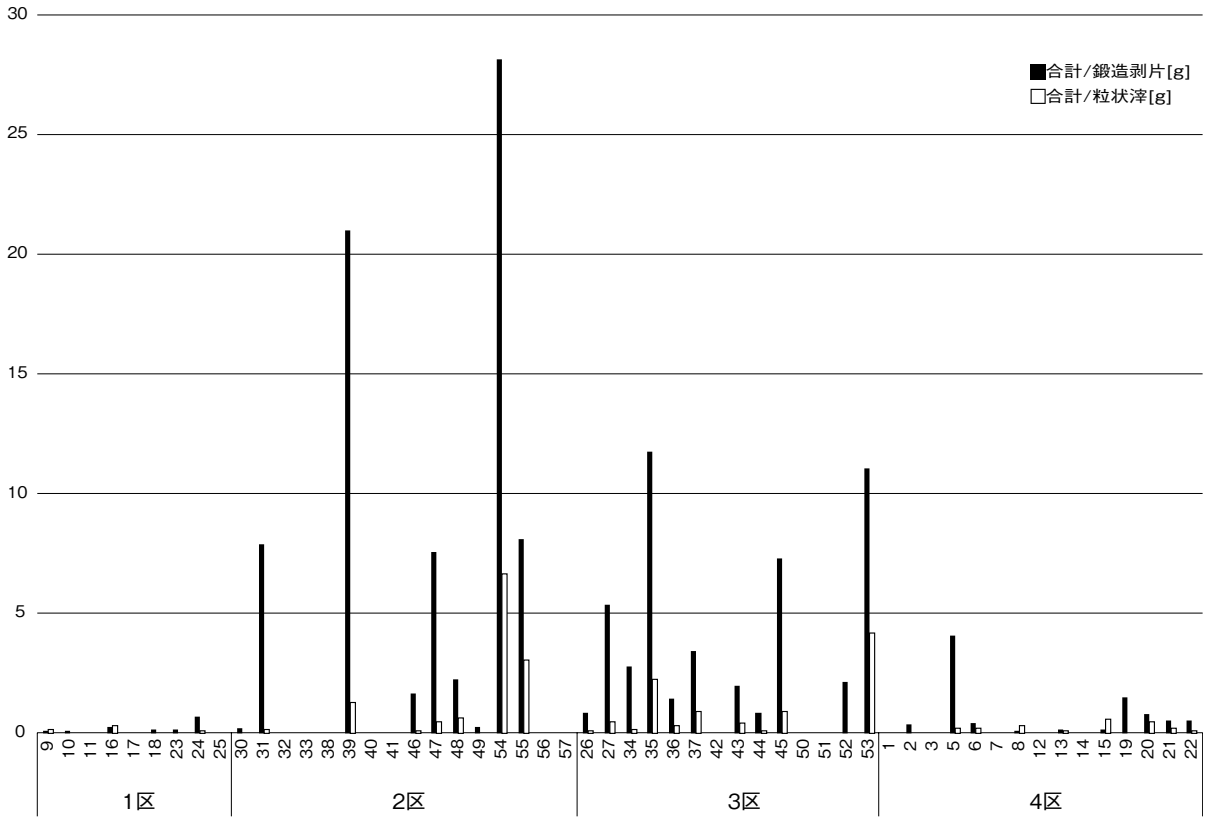
いとしたが，第 86 号竪穴建物跡の覆土中からも羽口が７点のほか，椀状滓６点や多量の流動滓，鉄塊系遺物，不定形滓が出土しており，本跡が鍛冶工房の一部であった可能性が高い。炉と作業用土坑のセットが１か所確認されており，炉と土坑内から出土した滓を分析したところ，鍛錬鍛冶滓であると推定され，本跡は鍛錬鍛冶を操業した工房跡と推定される。第７号鍛冶工房跡は炉と土坑のセットが２か所確認されているのみで，掘方は確認されていない。不定形滓や鉄塊系遺物のほかに，鍛造剥片や粒状滓も出土しており，鍛錬鍛冶も行われていた可能性が高い。第３号鍛冶工房跡は，掘方と炉，２基の作業用土坑が確認された。炉と土坑内から出土した滓を成分分析したところ，銑鉄から鋼にするための酸化・脱炭操業中の産物であることが確認され，精錬鍛冶を操業した工房であることが推定された。また金床石や鞴羽口の出土や，粒状滓や不定形滓，鍛造剝片などが多量に出土していることから，鍛錬鍛冶も併せて行われていた可能性が高い。特に作り替えの際に埋め戻された作業土坑１付近からの出土が目立つ（pp.356, 第 361 図）。なお 10 世紀中葉以降の鍛冶工房跡は，当遺跡では確認できない。

以上，８世紀から 10 世紀にかけて，当遺跡では南部の低地部と北部の低地部を中心に，鍛冶工房が操業した様子が捉えられた。各工房跡のみならず，当遺跡の遺構の覆土中からも多量の椀状滓や不定形滓，鉄塊系遺物が出土しており，今回の調査区域外の低地部分にも，鍛冶関連の遺構が存在する可能性は高い。

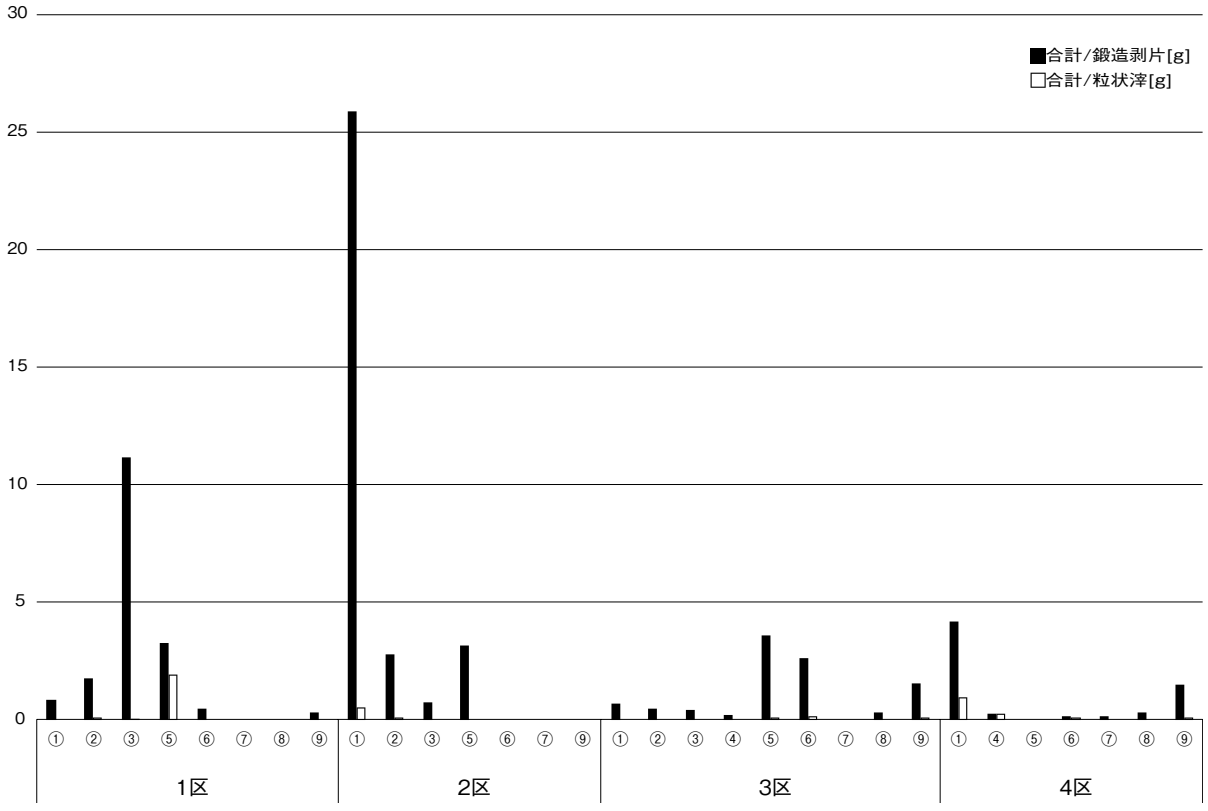
島名熊の山遺跡でも全域の遺構覆土中から鉄滓や羽口が出土しているが，その時期は６世紀後葉から 11 世紀前葉に及んでいる。しかし鍛冶関連遺構は北部Ｃ群の谷Ｈに隣接する地点に９世紀代の第１号鍛冶工房跡が，同じくＣ群の谷Ｃの谷頭近くに鍛冶工房跡の可能性のある第 918 号竪穴建物跡が，当遺跡と谷を挟んで対面するＥ群の，谷Ｃの中に９世紀後葉の第 4119・4120・4125・4127 号土坑があるのみで，鉄滓の出土量や金属製品の保有状況と比べると，あまりに少ない感が否めない。第１号鍛冶工房跡は，炉と作業用土坑がセットになったもので，当遺跡の様相と類似する。第 4119・4120・4125・4127 号土坑は形状と鉄滓等の出土状況から，排滓を廃棄した土坑と考えられる。調査区域外の，未確認の遺構の存在も考慮しなければならないが，律令期の集落が再編された８世紀代に，伝統的に集落が営まれた台地の外郭域の谷際に，当遺跡のような新たに鍛冶操業を主体的に行うムラが構築されたと考えることもできよう。

(4) 焼成遺構

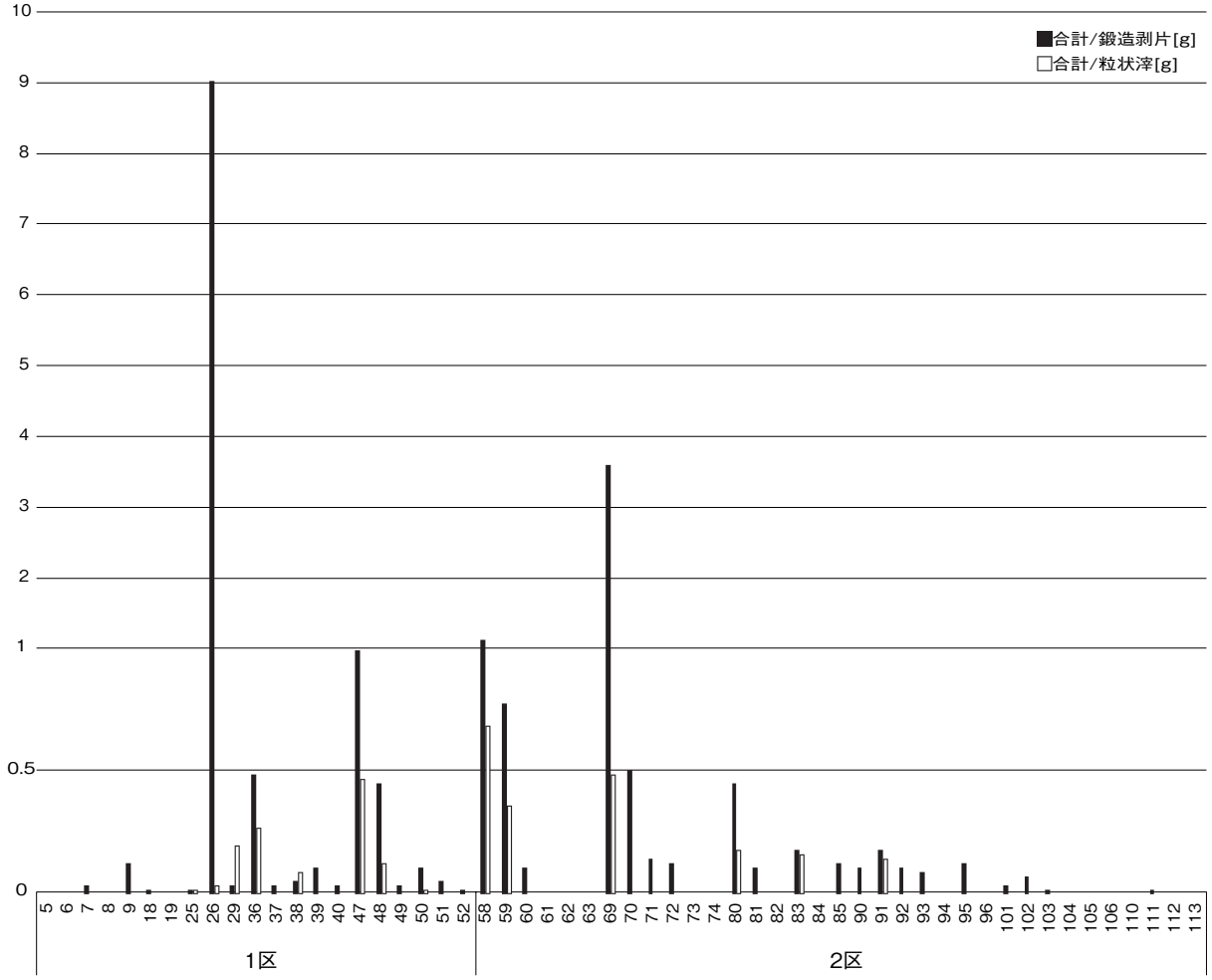
当遺跡では，焼成遺構が８か所確認できた。このうち建物跡の炉跡と考えられる炉１と，鍛冶工房跡の可能性もある第 471・473・474・478 号土坑以外の，類似する特徴を有する３基について概観したい。第 138・339・356 の３基は，いずれも南部の台地上から斜面部にかけて確認された遺構で，第 356 号土坑は 10 世紀前葉，第 138 号土坑は 11 世紀前葉，第 339 号土坑は 11 世紀後葉で，当遺跡の集落が断絶する段階にあたる。これらは底面近くから焼土や炭化材が出土したこと，底面が被熱により赤変していること，焼き歪みがあったり使用の認められない土器類が多量に出土することなどから，土器焼成遺構と考えられる。第 356 号土坑は土器の表裏面に磨き調整がなされる土師器で，黒色処理は認められるものの，部分的であり，黒色処理の失敗品が残されたものであろう。出土器種はいずれの土坑も坏や小皿にほぼ限定される。望月精司氏の分類の，円形を基調とし，緩やかに壁が立ち上がる形状で，主に床面のみが被熱するＢ類焼成坑に類似する[8)]。この形態は関東地方を中心に多く確認できるという。島名熊の山遺跡でも焼成遺構が 11 基確認されている。時期は 10 ～ 11 世紀代で，Ｅ群中央部の台地上から台地縁辺部にかけて分布している。悉皆的に確認したわけではないが，県内ではこのほかに鹿嶋市厨台遺跡などで同様の遺構が確認されている[9)]。いずれも 10 世紀以降の律令体制が崩壊する時期に当たり，遺物の面でも，小皿が主体

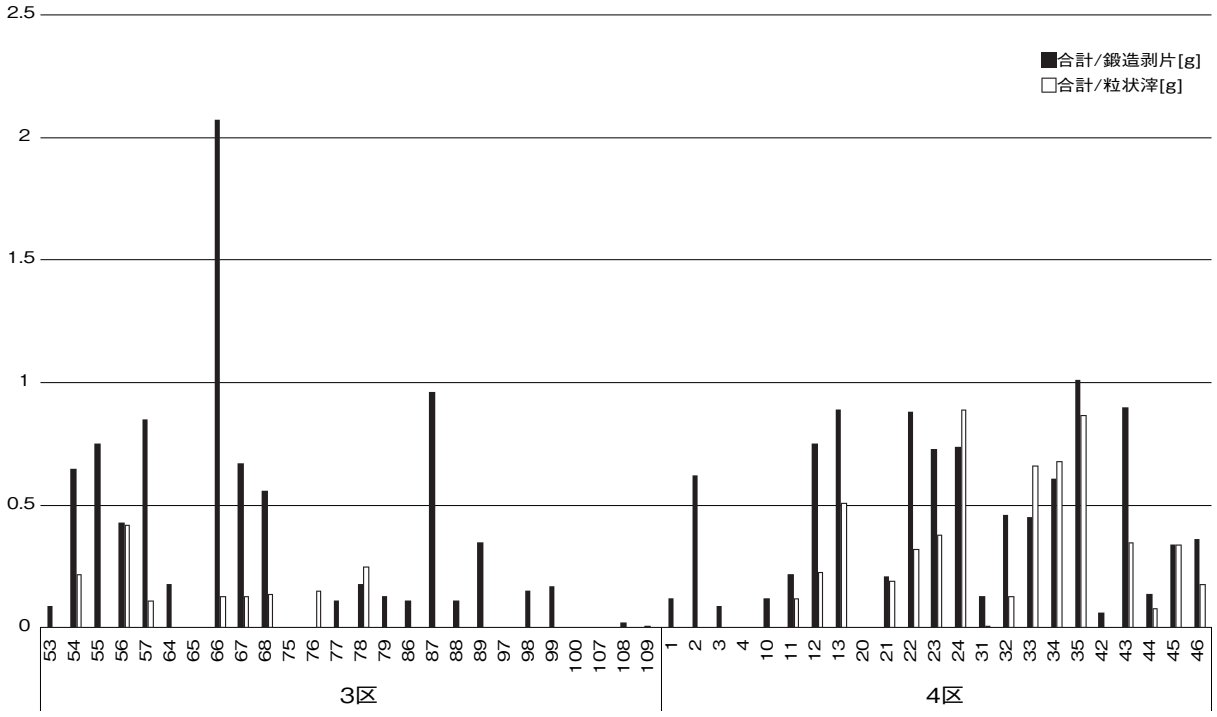


第 361 図　第１号鍛冶工房跡鍛造剥片・粒状滓出土量グラフ



第 362 図　第３号鍛冶工房跡鍛造剥片・粒状滓出土量グラフ





第 363 図　第５号鍛冶工房跡鍛造剥片・粒状滓出土量グラフ

となる中世的な器種組成に変化する過渡的な段階とも捉えられる。土師器の流通や生産体制については不明な部分が多いが，縮小した集落に付随しての家内制手工業的な生産体制を想定することもできよう。

(5) 文字関連資料から見る島名熊の山遺跡との関係

当遺跡から出土した遺物の中で，文字資料はさほど多くはない。墨書土器は遺跡内出土の総数で27点で，そのほとんどが，須恵器片に文字の一部分が確認できる程度である。文字として認識できるものでは，「前」（第41号竪穴建物跡出土須恵器坏底部･朱墨･８世紀中葉），「禾」２点（第14号竪穴建物跡出土須恵器底部･８世紀後葉／第95号竪穴建物跡出土須恵器坏底部・９世紀前葉），「淡水」４点（第25号竪穴建物跡出土須恵器底部・９世紀前葉／第24号竪穴建物跡出土須恵器底部１点，高台付坏底部１点・９世紀中葉／第６号掘立柱建物跡出土須恵器坏底部・８世紀後葉），「川」２点（第73号竪穴建物跡出土須恵器坏底部・９世紀前葉／第26号竪穴建物跡出土土師器坏体部・９世紀中葉），「毎水」（第26号竪穴建物跡出土土師器坏底部・９世紀中葉），「多」３点（第95号竪穴建物跡出土須恵器坏内底面・９世紀前葉／第29号竪穴建物跡出土土師器坏体部１，坏底部１・９世紀中葉）などである。調査面積の違いもあるが，島名熊の山遺跡に比べると非常に少数である。この「川」は島名熊の山遺跡でもＤ群の建物跡から７点，南部のＤ区東斜面で谷頭付近に作られた井戸群から約100点が出土しており，墨書土器の中で高い割合を示している。清水哲氏は報告書の中で，「川」を生業とする集団の標識的文字と考えられており，当遺跡から出土した建物跡の居住者についての生業や島名居住集団との関係性が伺える[10]。また「前」「多」も，島名熊の山遺跡では「田前」「多前」が49点出土しており，当遺跡で確認された文字もこの一部と考えてよいだろう。やはり生業に関係した標識文字と考えられる。当遺跡で見られた「淡水」「毎水」は，島名熊の山遺跡では確認できない。「毎」はさんずいが省略されているが「海水」を指すものと考えられる。いずれにせよ「川」と同様，「水」と関係する生業集団の標識文字であり，島名熊の山遺跡の集団との関係性が示唆される。硯は円面硯１点（第24号竪穴建物跡・９世紀中葉），円面硯ヵ１点（第62号竪穴建物跡・８世紀前葉），把手付中空円面硯１点（第103号竪穴建物跡・８世紀前葉）のほか，転用硯５点がある。把手付中空円面硯は，内部が中空の携帯用硯で，東海以西で出土することが多いとはいえ，2002年の菊井佳弥氏の集成では38例[11]，2005年の田中広明氏の集成では，上野国で７点，武蔵国で４点，上総国で１点と希少である[12]。県内では「鹿嶋郷長」の墨書が出土した，鹿嶋市厨台遺跡SB308から出土しており，その用途と合わせ政治的な色合いが強い遺物ともいえる。これが律令期に新たに進出した北部地区の，中心的な建物と考えられる第103号竪穴建物跡から出土したことは示唆的である。そのほか文字ではないが，ヘラ記号「×」が３点，刻書「×」が１点ある。（江原美奈子）

(6) 中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構は，調査区南部の台地上と，東部の斜面部で主に確認されている。遺物の出土が少ないため時期比定が困難な部分もあるが，地下式坑や溝跡などの主要な遺構は16世紀前葉から後葉の間に構築されており，溝や隅丸長方形の形状を呈する土坑は地形の傾斜に沿って長軸方向をやや西に振るか，それに直交する方向に振れている。この調査区南部と東部に中・近世の遺構が集中する要因として，谷を挟んで存在する島名熊の山遺跡16区及びその北側に位置する妙徳寺の存在が関係している可能性がある。

中世の遺構の中で，特筆すべき遺構は，第39号溝跡と第362・367・368号土坑である。調査区南部に位置するこの溝跡と15世紀後葉から存在する第32号溝跡によって，南北約40ｍ，東西約60ｍの方形区

画が形成されている。第 39 号溝の時期は，出土した土師質土器の小皿や内耳鍋から，16 世紀後葉と考えられる。方形区画の北西にあたる場所には第 362 号土坑が確認でき，輪宝墨書土器が出土した。また，北東には第 368 号土坑，南西には第 367 号土坑を確認し，それぞれから第 362 号土坑と同様に輪宝墨書土器が出土している。第 362 号土坑では，表土直下に土師質土器が露出しているのを確認した。２枚が逆位で重なり合った状態で出土しており，このうちの上部の１枚の内面に輪宝墨書を確認した。第 367 号土坑からは，表土直下で土師質土器小皿の口縁部を確認した。３枚が縦位及び斜位の状態で，内面を上に向けるように出土し，そのうちの１枚が輪宝墨書である。第 368 号土坑は，第 79 号竪穴建物跡の調査時に確認した。３枚が縦位で，そのうちの２枚は重なるように，１枚はやや離れて出土している。輪宝墨書土器はこのうちのやや離れた１枚である。いずれの輪宝墨書土器もよく似た文様構成で，中央部の轂の部分に一重円とその中央部に種字の「ア」が記されている。本来，八鋒輪宝の構図であると考えられるが，当遺跡のものは六鋒であり，その鋒の部分も省略が見られる。鋒の部分は五角形で，輞は二重円のみ，輻の部分は放射状である[13)]。文様的には本来の金属製輪宝の構図からは簡略化されているが，形態などから 16 世紀中葉から後葉と考えられる。この点で，溝跡と輪宝墨書土器の時期は符合している。

輪宝墨書土器は，地鎮に伴う土器とされており，その役割として，四方・中央に点じて結界内を護持するものと言われている。また，輪宝墨書土器が埋納された建造物は，中世段階では城館，神社，寺院などの中の重要な施設であり，近世では屋敷地などの地鎮に使用されていたとされている。

本調査でも，第 39 号溝によって形成された方形区画の北西・北東・南東部隅に輪宝墨書土器が埋納されていた。そのため，この区画内に本来ならば，重要な建造物があるはずだが，その痕跡を確認することができなかった。また，谷を挟んだ島名熊の山遺跡 16 区に 15 世紀後半の方形区画が確認されている。本跡と同様に内部施設は見つかっていない。あるいは何らかの結界のために，土地を区画し，地鎮行為を行ったのかもしれない。島名熊の山遺跡の方形区画は，妙徳寺の南側前方に位置しているため，寺院との関係が深い施設と考えられている。本跡の方形区画も妙徳寺の裏鬼門に当たる方角になっており，寺院と関係のある施設が存在した可能性があるが，関係性を伺うことができる遺構や遺物を確認することはできなかった。（永井敦）

3　おわりに

ここまで時期ごとの集落変遷を確認し，島名熊の山遺跡の在り方と比較した。当遺跡で集落が営まれるのは５世紀に入ってからで，数棟が単位をなして，谷に面する台地縁辺部全体に散在している。大集落が営まれているわけではないが，中には小型仿製鏡を保有する竪穴建物跡がある。小型仿製鏡は，祭祀具の一つとしての位置付けのほかに，大和王権が周辺地域との結びつきをより強固なものにし，より広範囲の勢力を取り込むために利用したものとの意見がある[14)]。よって当遺跡にも，在地首長層に連なるような集団の居住も推測される。

この地に竪穴建物跡の棟数が増えるのは，６世紀前～中葉の断絶期を挟んで７世紀後葉から８世紀前葉で，中央部の遺構空白域を挟んで北部と南部の大きく２群に遺構が展開するようになる。こうした遺構の増加は，島名熊の山遺跡と対応する動きであり，特に８世紀前葉の拡大は，律令期の班田収授法による口分田の班給や，墾田永年私財法の執行による開拓・開発地が拡大する時期と軌を一にするもので，島名熊の山遺跡に連なる一集団が谷を挟んだ対岸の台地上にも開発の場を広げたことが考えられる。当遺跡の未報告区域を挟んだ北側，島名熊の山遺跡とは谷Ａを挟んで住居跡Ａ群と対峙する島名中代遺跡も，８世紀中葉に竪穴建物跡，掘立柱建物跡とも増加し，当遺跡と同様に開拓集落の様相が確認できる[15)]。８世紀中葉から９世紀中葉に

は当遺跡では鍛冶工房が操業されており，一つの工房内では複数の炉跡が構築され，継続的な鍛冶操業が確認できる。島名熊の山遺跡でも鉄滓は多く出土するものの鍛冶工房跡は２棟と少なく，遺跡内での消費を賄えるとは思えない。当遺跡の居住集団は，鍛冶操業を主な生業（なりわい）として，島名熊の山遺跡をはじめとする嶋名郷の集落に供給し，集落を拡大したと考えられる。またこの時期には一部公的な機能も類推される掘立柱建物跡が群在し，把手付中空円面硯や蛇紋岩製の腰帯具などの遺物から，在庁官人クラスの人物の存在がうかがえる。

９世紀中葉以降は遺構数が減少し，10 世紀後葉以降は遺構が確認できなくなる。再び遺構が確認されるようになるのは 16 世紀に入ってからで，台地の南部に方形区画が形成されるようになる。区画内に建物跡等は確認できず，井戸跡や地下式坑，土坑などが確認されるのみである。このような区画は，島名熊の山遺跡でも確認されており，13 世紀末葉に開祖される妙徳寺との関係が示唆されている。13 世紀後葉には島名前野東遺跡に中門廊的施設を持つ方形居館跡（西館）がつくられ，14 世紀前葉まで田中荘の経営を行っていたことが判明している。今回の調査では館跡等は確認できなかったが，当遺跡では今回の報告区の北側で，中世の屋敷跡と考えられる遺構群が多数確認されていることから，中世の様相の把握については今後の報告に委ねたい。（江原美奈子）

註

1）稲田義弘 『島名熊の山遺跡　島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』茨城県教育財団文化財調査報告第 190 集　2002 年３月

2）齋藤真弥・酒井雄一・渡邉浩実・松本直人・齋藤貴史・清水哲『島名熊の山遺跡　島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XV』茨城県教育財団文化財調査報告第 291 集　2008 年３月

3）清水哲「島名熊の山遺跡の集落研究のための前提作業」『年報 26　平成 18 年度』財団法人茨城県教育財団　2007 年３月
清水哲「拠点集落の消長－常陸国河内郡嶋名郷－」『古代の開発と地域の力』高志書院　2014 年５月

4）茨城県考古学協会・ひたちなか市教育委員会『茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－』2002 年 12 月

5）註３）に同じ

6）小山映一「茨城県古鏡集成－県内における出土鏡・伝世鏡の現状－」『茨城県立歴史館報』29　茨城県立歴史館　2002 年3月
茨城県教育財団 『鏡よ　鏡　鏡さん－発掘された茨城の鏡－』全国生涯学習フェスティバル「まなびピアいばらき 2006」リーフレット　2006 年 10 月

7）駒澤悦郎『大山Ｉ遺跡２』茨城県教育財団文化財調査報告第 185 集　2002 年３月

8）望月精司「土器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編　1997 年５月　真陽社

9）青木幸一　柿沼修平『鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告Ⅶ－一般国道 51 号鹿島バイパス－』茨城県鹿島町遺跡保護調査会　1991 年３月

10）清水哲『島名熊の山遺跡　島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIX』茨城県教育財団文化財調査報告第 380 集　2013 年３月

11）菊井佳弥「中空円面硯小考」『大阪文化財論集Ⅱ－財団法人　大阪府文化財センター設立 30 周年記念論集－』2002 年 11 月

12）田中広明「東国の地方官衙・集落と陶硯」『古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸国河内郡を中心として－』茨城県考古学協会　2005 年２月

13）池田敏宏「輪宝墨書土器に関する基礎的考察－墨書輪宝文様の検討－」『研究紀要』第 17 号　財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター　2009 年３月　なお，当遺跡の輪宝墨書土器をはじめとする土器群については，池田敏宏氏（とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター），中村岳彦氏（技研コンサル株式会社），高橋実果氏（株式会社コクドリサーチ）にご教示いただいた。

14）脇山佳奈「小型仿製鏡をめぐる考古学的研究」広島大学大学院文学研究科　2014 年９月

15）塙厚宜『島名中代遺跡　島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXVI』茨城県教育財団文化財調査報告第 438 集　2019 年３月

写　真　図　版

平成27年度調査区全景

平成28年度調査区全景

PL2

調査区全景（平成27年度・28年度合成）

第７号竪穴建物跡，第 144・164 土坑

第８号竪穴建物跡 遺物出土状況

第８号竪穴建物跡

第９号竪穴建物跡

第 10 号竪穴建物跡

第 10 号竪穴建物跡 竈

第 11 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 11 号竪穴建物跡

PL4

第 12 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 12 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 12 号竪穴建物跡

第 14 号竪穴建物跡

第 14 号竪穴建物跡 掘方

第 15 号竪穴建物跡 P2 遺物出土状況

第 15 号竪穴建物跡

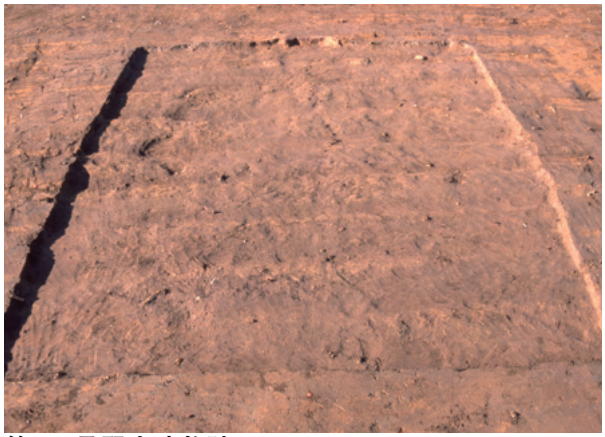
第 17 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 17 号竪穴建物跡

第 18 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 18 号竪穴建物跡

第 18 号竪穴建物跡 竈



第 19 号竪穴建物跡

第 20 号竪穴建物跡 P1 遺物出土状況

第 20 号竪穴建物跡 竈

第 21 号竪穴建物跡

第 21 号竪穴建物跡 竈

第 22 号竪穴建物跡

第 22 号竪穴建物跡 竈

第 23 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 23 号竪穴建物跡

第 23 号竪穴建物跡 竈

第 24 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 24 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 24 号竪穴建物跡

第 25 号竪穴建物跡 遺物出土状況（1）

第 25 号竪穴建物跡 遺物出土状況（2）

第 25 号竪穴建物跡

第 25 号竪穴建物跡 竈

第 26 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 27 号竪穴建物跡 遺物出土状況（1）

第 27 号竪穴建物跡 遺物出土状況（2）

第 27 号竪穴建物跡

第 27 号竪穴建物跡 竈

第 28 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 28 号竪穴建物跡 竈掘方遺物出土状況

第 29 号竪穴建物跡

第 29 号竪穴建物跡 竈

第 30 号竪穴建物跡 遺物出土状況

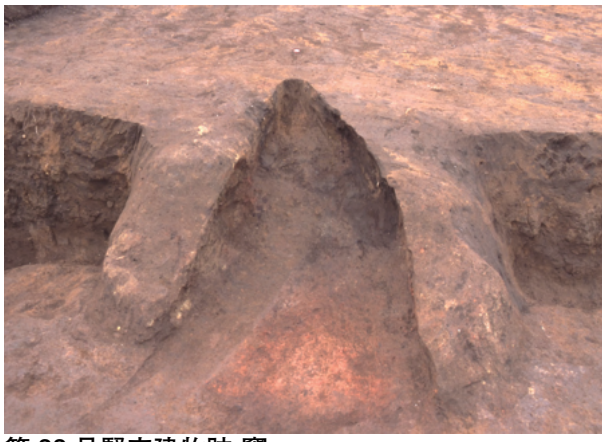
第 30 号竪穴建物跡 竈立ち割り出土状況

第 31 号竪穴建物跡

第 32 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 32 号竪穴建物跡

第 33 号竪穴建物跡



第 33 号竪穴建物跡 竈

第 34 号竪穴建物跡 遺物出土状況（1）

第 34 号竪穴建物跡 遺物出土状況（2）

第 34 号竪穴建物跡

第 35 号竪穴建物跡

第 37 号竪穴建物跡

第 39 号竪穴建物跡

第 40 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 40 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況（1）

第 40 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況（2）

第 40 号竪穴建物跡

第 41 号竪穴建物跡

第 41 号竪穴建物跡 竈

第 42 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 42 号竪穴建物跡

第 43 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 43 号竪穴建物跡

第 44 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 44 号竪穴建物跡

第 44 号竪穴建物跡 竈

第 45 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 47 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 47 号竪穴建物跡

第 51 号竪穴建物跡

第 52 号竪穴建物跡

第 53 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 53 号竪穴建物跡

第 54 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 54 号竪穴建物跡

第 54 号竪穴建物跡 炉

第 56 号竪穴建物跡

第 56 号竪穴建物跡 竈

第 57 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 57 号竪穴建物跡

第 58 号竪穴建物跡

第 58 号竪穴建物跡 竈

PL14

第 59・60 号竪穴建物跡

第 61 号竪穴建物跡

第 62 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 62 号竪穴建物跡

第 62 号竪穴建物跡 竈

第 63 号竪穴建物跡

第 63 号竪穴建物跡 竈

第 64 号竪穴建物跡

第 64 号竪穴建物跡 竈

第 66 号竪穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況

第 66 号竪穴建物跡

第 67 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 67 号竪穴建物跡

第 67 号竪穴建物跡 竈

第 70 号竪穴建物跡

第 72 号竪穴建物跡

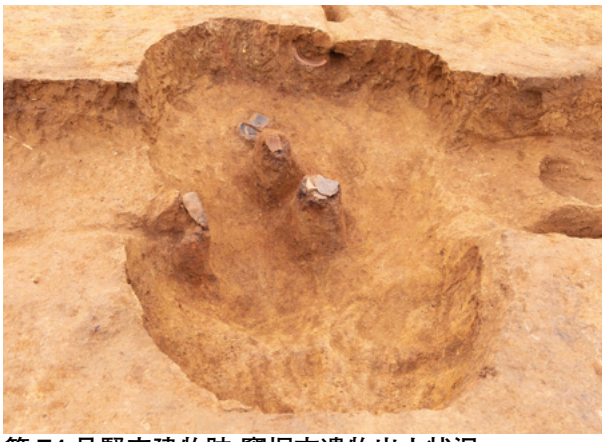
第 73 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 73 号竪穴建物跡

第 74 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 74 号竪穴建物跡

第 74 号竪穴建物跡 竈



第 74 号竪穴建物跡 竈掘方遺物出土状況

第 75 号竪穴建物跡

第 77 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 77 号竪穴建物跡

第 77 号竪穴建物跡 竈

第 78 号竪穴建物跡

第 79 号竪穴建物跡

第 80 号竪穴建物跡

第 80 号竪穴建物跡 竈

第 81 号竪穴建物跡　遺物出土状況

第 81 号竪穴建物跡　貯蔵穴遺物出土状況

第 82 号竪穴建物跡

第 82 号竪穴建物跡 竈

第 83 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 83 号竪穴建物跡

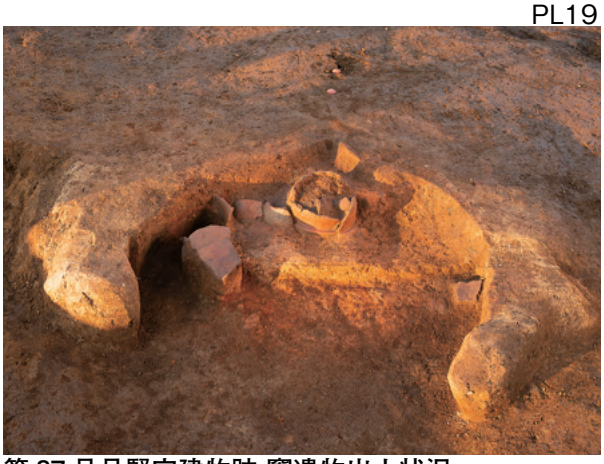
第 83 号竪穴建物跡 竈

第 85 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 85 号竪穴建物跡

第 86 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 86 号竪穴建物跡


第 87 号号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 87 号竪穴建物跡

第 87 号竪穴建物跡 竈

第 88 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 88 号竪穴建物跡

第 89 号竪穴建物跡

第 89 号竪穴建物跡 竈

PL20

第 90 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 90 号竪穴建物跡

第 90 号竪穴建物跡 竈

第 91 号竪穴建物跡

第 92 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 92 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 92 号竪穴建物跡

第 93 号竪穴建物跡

第 93 号竪穴建物跡 竈

第 94 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 94 号竪穴建物跡

第 94 号竪穴建物跡 竈

第 95 号竪穴建物跡 遺物出土状況

第 95 号竪穴建物跡

第 96 号竪穴建物跡 遺物出土状況（1）

第 96 号竪穴建物跡 遺物出土状況（2）

PL22

第 96 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 96 号竪穴建物跡

第 96 号竪穴建物跡 竈

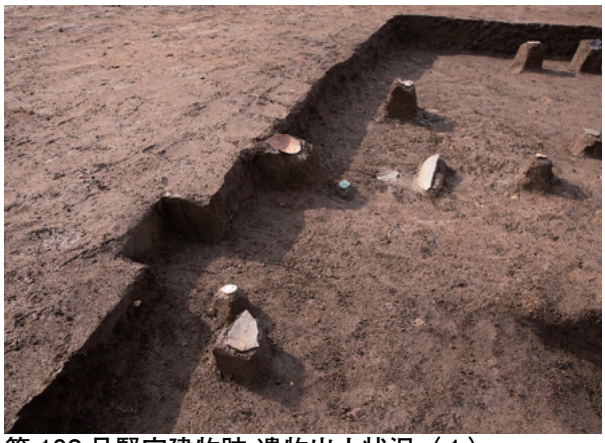
第 97 号竪穴建物跡

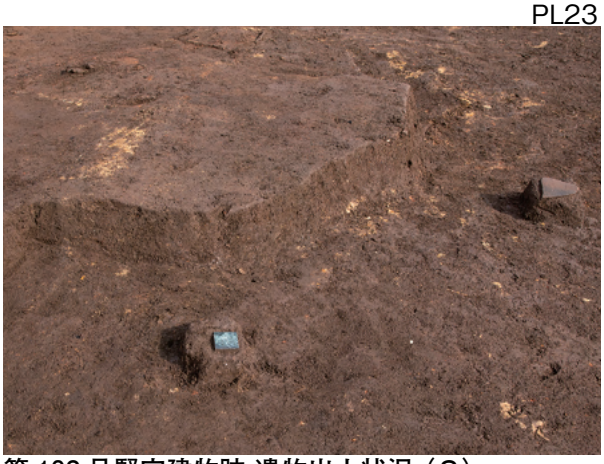
第 98 号竪穴建物跡

第 99 号竪穴建物跡

第 99 号竪穴建物跡 竈

第 101 号竪穴建物跡


第 102 号竪穴建物跡 遺物出土状況（1）


第 102 号竪穴建物跡 遺物出土状況（2）

第 102 号竪穴建物跡 遺物出土状況（3）

第 102 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 102 号竪穴建物跡

第 103 号竪穴建物跡 遺物出土状況（1）

第 103 号竪穴建物跡 遺物出土状況（2）

第 103 号竪穴建物跡 竈遺物出土状況

第 103 号竪穴建物跡

第 106 号竪穴建物跡

第 106 号竪穴建物跡 竈

第３・４号掘立柱建物跡

第５号掘立柱建物跡

第６号掘立柱建物跡 P1 遺物出土状況

第６・12 号掘立柱建物跡

第７号掘立柱建物跡

第８号掘立柱建物跡

第９号掘立柱建物跡

第 11 掘立柱建物跡

第 13 号掘立柱建物跡 P1 遺物出土状況

第 13 号掘立柱建物跡

第 14 号掘立柱建物跡

第 15 号掘立柱建物跡

第 16 号掘立柱建物跡

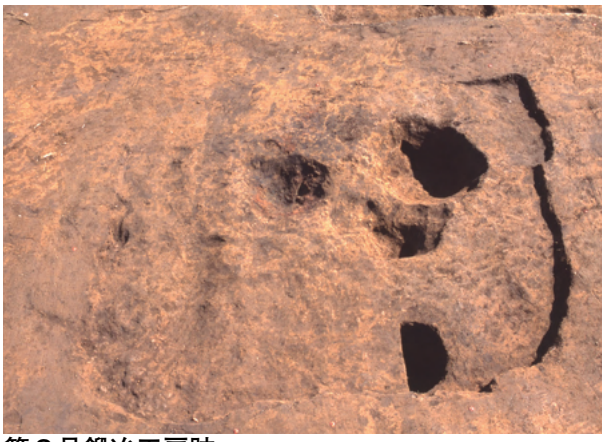
第１号鍛冶工房跡

第１号鍛冶工房跡 炉

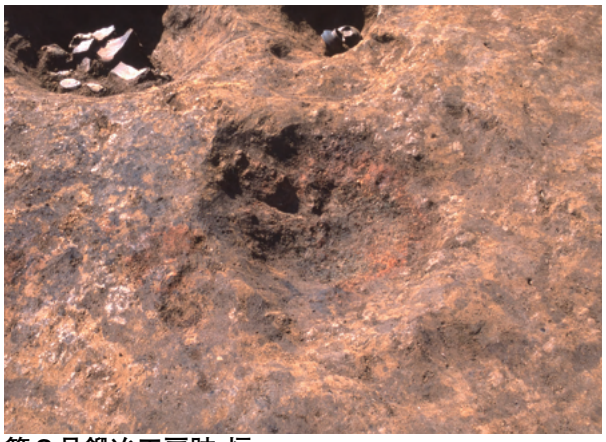
第２号鍛冶工房跡 遺物出土状況

第２号鍛冶工房跡

第３号鍛冶工房跡 土坑１・２遺物出土状況



第３号鍛冶工房跡



第３号鍛冶工房跡 炉

第４号鍛冶工房跡 遺物出土状況

第４号鍛冶工房跡

第４号鍛冶工房跡 炉１

第５号鍛冶工房跡 遺物出土状況

第５号鍛冶工房跡　土坑内遺物出土状況

第５号鍛冶工房跡 炉２遺物出土状況

第５号鍛冶工房跡

第６号鍛冶工房跡 遺物出土状況

第６号鍛冶工房跡

第７号鍛冶工房跡 炉１

第７号鍛冶工房跡 炉２

第 138 号土坑（焼成遺構）遺物出土状況

第 138 号土坑（焼成遺構）焼土範囲

第 339 号土坑（焼成遺構）遺物出土状況

第 356 号土坑（焼成遺構）遺物出土状況

第 60 号土坑（陥し穴）

第 90 号土坑 遺物出土状況

第 118 号土坑 遺物出土状況

第 133 号土坑 遺物出土状況

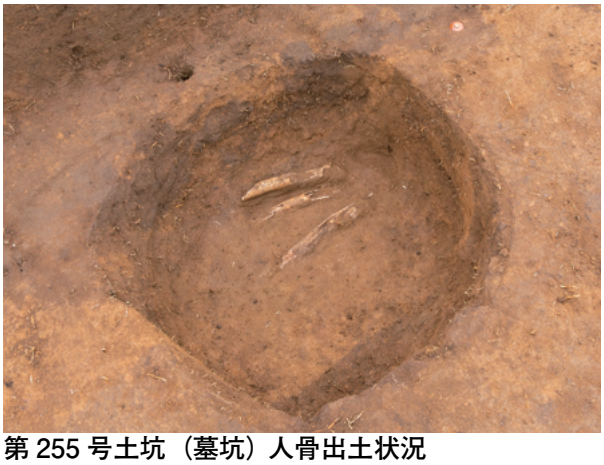
第 453 号土坑 遺物出土状況

第５号柱穴列

第２号地下式坑

第８号井戸跡

第９号井戸跡



第 255 号土坑（墓坑）人骨出土状況

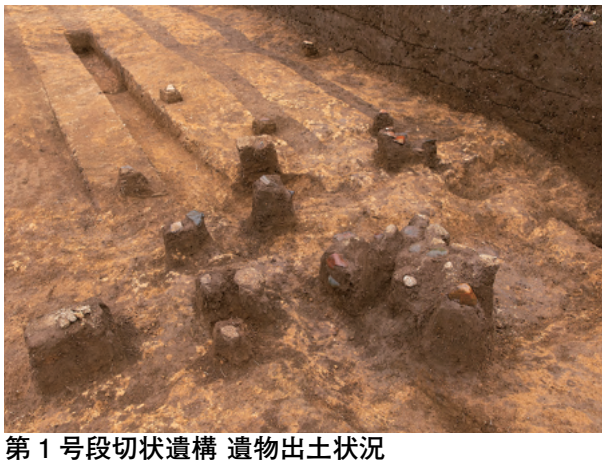
PL30

第 264 号土坑（墓坑）遺物出土状況

第 264 号土坑（墓坑）人骨出土状況

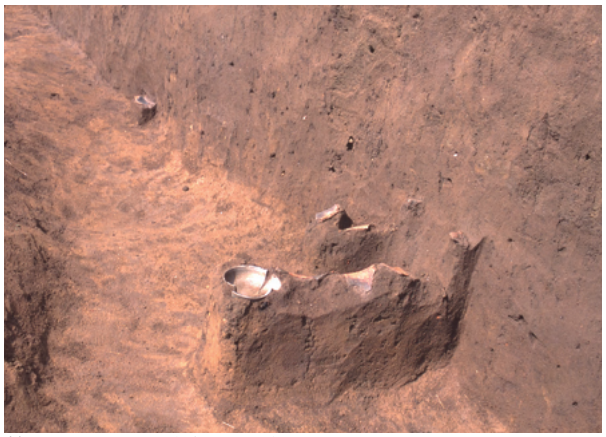
第 367 号土坑 遺物出土状況

第 368 号土坑 遺物出土状況



第 1 号段切状遺構 遺物出土状況

第 1 号段切状遺構



第 27 号溝跡 遺物出土状

第 28 号溝跡

第 29 号溝跡

第 32・33・37 号溝跡

第 34 号溝跡

第 36 号溝跡

第 39 号溝跡 遺物出土状況

第 39 号溝跡

第５号道路跡

第６号道路跡

PL32

第８・10～13号竪穴建物跡出土土器

SI 13-5

SI 13-14

SI 14-9

SI 14-4

SI 14-7

SI 14-16

SI 14-14

SI 14-8

SI 15-1

SI 15-6

SI 15-5

SI 15-7

SI 15-8

SI 18-1

SI 15-9

SI 18-4

SI 18-5

SI 18-6

SI 20-1

SI 20-9

SI 22-1

SI 20-3

SI 22-3

第13～15・18・20・22号竪穴建物跡出土土器

PL34

第20・23・24号竪穴建物跡出土土器

SI 24-25

SI 24-28

SI 24-26

SI 24-27

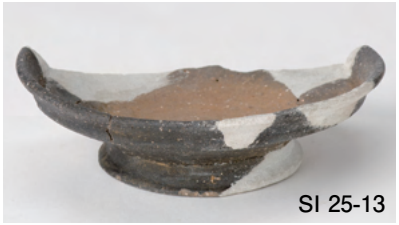
SI 25-3

SI 25-5

SI 25-7

SI 25-8

SI 25-9


SI 25-13

SI 25-14

SI 26-2

SI 27-2

SI 26-1

SI 27-6

SI 27-7

第24～27号竪穴建物跡出土土器

PL36

第28～30・32～34・36・37・39号竪穴建物跡出土土器

SI 39-3

SI 39-6

SI 39-8

SI 40-4

SI 40-1

SI 40-7

SI 40-3

SI 41-7

SI 41-8

SI 41-1

SI 41-3

SI 41-19

SI 41-9

SI 42-1

SI 42-6

SI 42-10

SI 42-2

SI 43-5

SI 44-1

SI 44-2

SI 44-6

SI 45-1

SI 45-2

第39～45号竪穴建物跡出土土器

PL38

第45・47～49・54～60・62・64・66号竪穴建物跡出土土器

SI 66-3

SI 66-4

SI 66-5

SI 67-4

SI 71-3

SI 71-9

SI 71-4

SI 73-1

SI 73-2

SI 73-7

SI 74-4

SI 72-5

SI 74-3

SI 74-19

SI 74-8

SI 75-1

SI 74-6

SI 75-4

SI 75-9

第66・67・71～75号竪穴建物跡出土土器

PL40

SI 77-1

SI 77-5

SI 77-6

SI 77-9

SI 77-8

SI 77-11

SI 78-1

SI 79-2

SI 78-8

SI 79-4

SI 79-3

SI 79-5

SI 80-3

SI 80-4

SI 81-4

SI 81-3

SI 81-6

SI 83-1

SI 83-5

第77～81・83号竪穴建物跡出土土器

第83・85～95号竪穴建物跡出土土器

PL42

第95～98・100号竪穴建物跡出土土器

SI 100-6

SI 101-2

SI 101-7

SI 101-3

SI 102-1

SI 102-2

SI 102-3

SI 102-7

SI 102-8

SI 103-1

SI 103-13

SI 103-17

SI 103-19

SI 103-21

SI 106-2

SI 108-2

SB5-2

SB6-3

第100～103・106・108号竪穴建物跡，第５・６号掘立柱建物跡出土土器

PL44

第６・11～13号掘立柱建物跡，第１～６号鍛治工房跡，第90号土坑出土土器

SK90-1

SK90-2

SK118-3

SK118-2

SK133-1

SK133-5

SK133-6

SK308-1

SK308-2

SK138-1

SK138-3

SK138-10

SK138-11

SK138-9

SK138-8

第90・118・133・138・308号土坑出土土器

PL46

SK339-1

SK339-2

SK339-3

SK339-4

SK339-5

SK339-12

SK339-10

SK356-1

SK356-2

SK362-2

SK367-2

SK367-3

SK358-8

SK362-1

SK367-1

SK368-2

SK368-3

SD31-4

SK368-1

SK287

SK287

SD32-18

SD32-15

SD27-3

第339・356・358・362・367・368号土坑，第27・31・32号溝跡出土土器，第287号土坑出土鉄滓

SD32-8

SD32-10

SD32-11

SD32-9

SD32-13

SD33-6

SD39-30

SD39-31

SD39-32

SD39-33

SD39-36

SD39-37

SD40-46

SD39-47

SE8-3

SI 12-6

SI 13-20

SI 44-15

SI 67-5

SI 77-12

SX1-9

SX1-12

SX1-14

SX2-11

SX1-15

SX3-16

SX4-14

第32・33・39号溝跡出土土器，第８号井戸跡出土鋳型，第12・13・44・67・77号竪穴建物跡，第１・２号鍛冶工房跡出土土製品，第39・40号溝跡，第１号段切状遺構出土石器，第１・３号鍛冶工房跡出土鉄滓

PL48

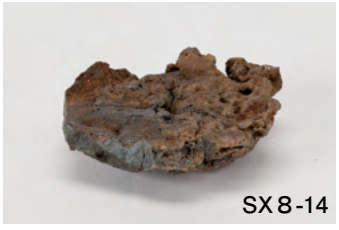
SX6-6

SX6-7

SX6-26

SX6-22

SX8-3


SX8-14

SX11-3

SI 13-21

SI 18-7

SI 22-9

SI 99-1

SI 83-15

SI 8-4

SI 9-2

SI 10-1

SI 14-18

SI 20-6

SI 10-7

SI 13-11

SI 20-8

SI 23-6

SI 21-4

第８～10・13・14・20・21・23号竪穴建物跡出土土器，第５・６号鍛冶工房跡土製品，第13・18・22・83・99号竪穴建物跡出土石器，第５・６・８号鍛冶工房跡出土鉄滓

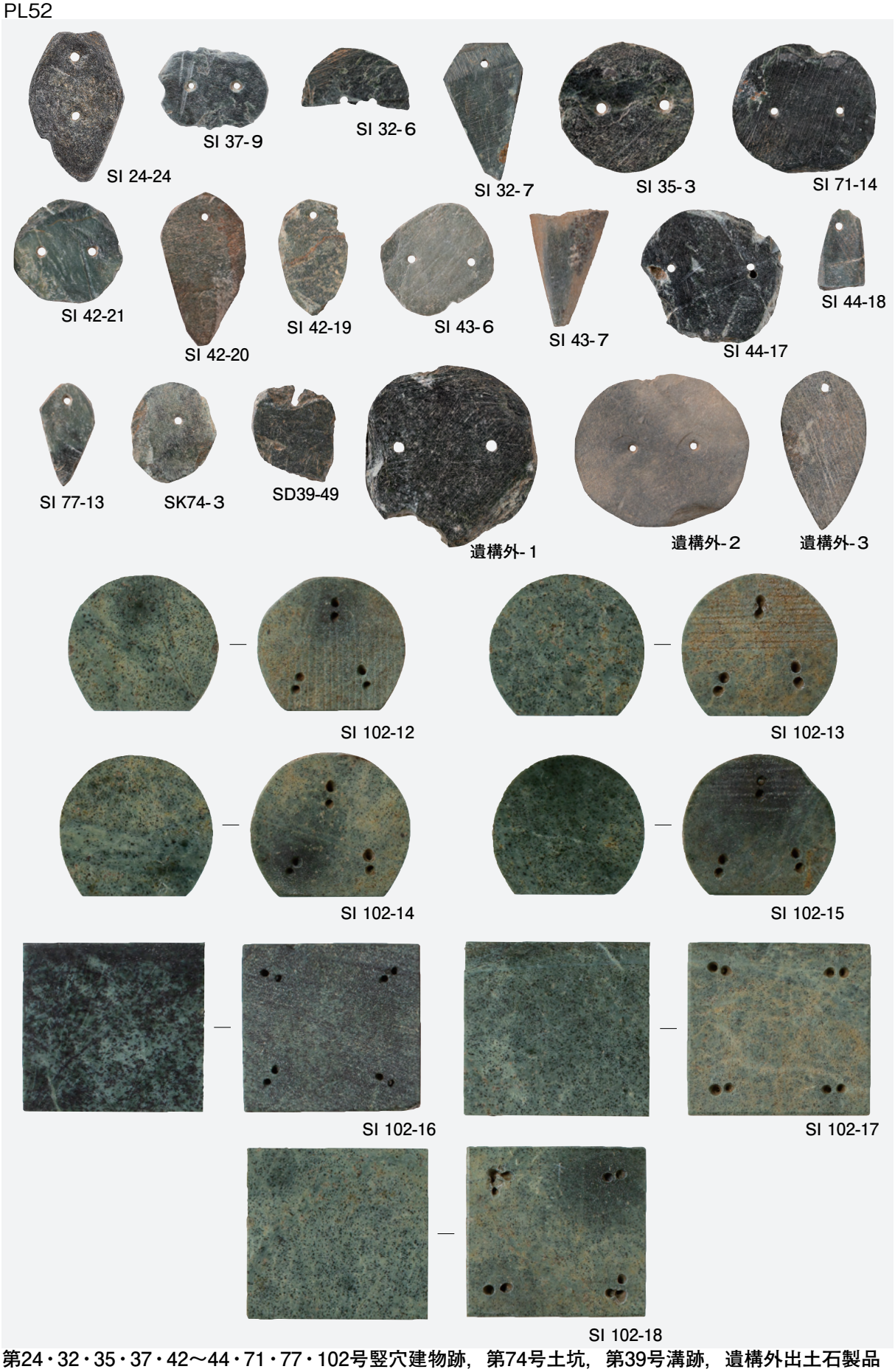
第24・25・29・33・39・41・44・47・52・59～62号竪穴建物跡出土土器

PL50

第64～66・68・73～75・79・89・90号竪穴建物跡出土土器

第90・91・95・98・100号竪穴建物跡，第５・７掘立柱建物跡，第５号鍛治工房跡，第453号土坑，第27・32号溝跡出土土器

PL52



第24・32・35・37・42～44・71・77・102号竪穴建物跡，第74号土坑，第39号溝跡，遺構外出土石製品

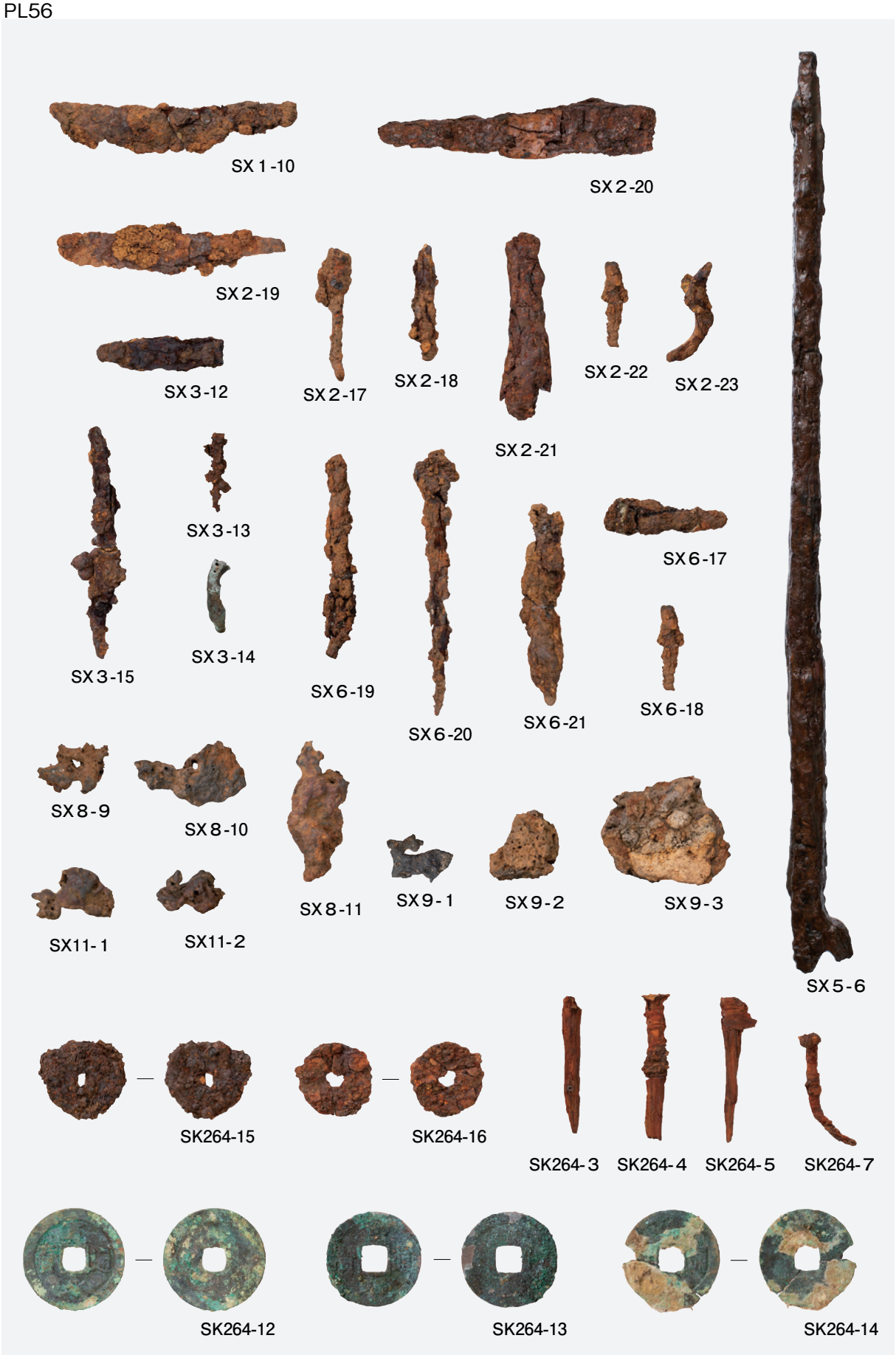
第33号竪穴建物跡土製品，第33・34・44・83号竪穴建物跡，第５号鍛冶工房跡石製品，第８・11・13・14・18・21・24・25・29・30・33・39号竪穴建物跡出土金属製品

PL54

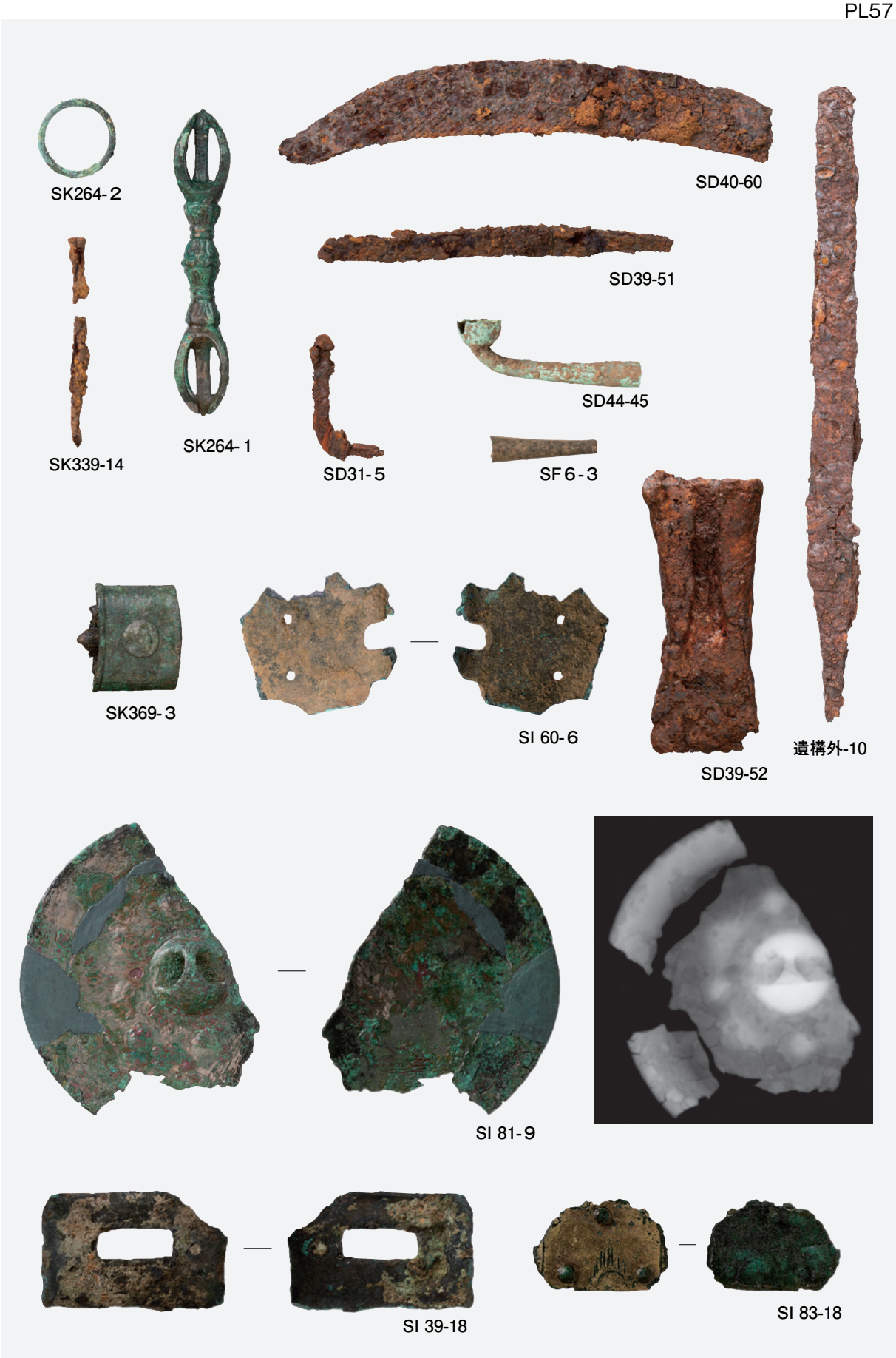
第40～42・44・52・53・56・61・62・71・74・75・78・80号竪穴建物跡出土金属製品

第83・92・94・95・97・98・101～103・106号竪穴建物跡，第４・８号掘立柱建物跡出土金属製品

PL56



第１～８号鍛冶工房跡，第264号土坑出土金属製品・鉄滓・銭貨



第39・60・81・83号竪穴建物跡，第264・339・369号土坑，第31・39・40・44号溝跡，第６号道路跡，遺構外出土金属製品

PL58

旧石器，縄文時代出土遺物

抄　　録

ふりがな	しまなほんでんいせき
書　　名	島名本田遺跡
副 書 名	島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXⅧ
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第 454 集
著 者 名	江原美奈子　内堀団　永井敦　天野早苗　パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団
所 在 地	〒 310 － 0911　茨城県水戸市見和１丁目 356 番地の２　　ＴＥＬ 029 － 225 － 6587
発 行 日	2021（令和３）年１月 29 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
島名本田遺跡	茨城県つくば市 島名字薬師台 1716 番地ほか	08220 － 387	36 度 03 分 37 秒	140 度 03 分 11 秒	20 ～ 24 m	20150601 ～ 20151031 20160601 ～ 20170331	3,841 ㎡ 8,011 ㎡	島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
島名本田遺跡	その他	旧石器 縄文	陥し穴　２基	石器（ナイフ形石器，有舌尖頭器・スクレイパー・石核・剥片） 縄文土器（深鉢），石器（石鏃・打製石斧）	５世紀中葉の第 81 号竪穴建物跡から，小型仿製鏡が出土 ８世紀前葉の第 103 号竪穴建物跡から，把手付中空円面硯が出土
	集落跡	古墳	竪穴建物跡　41 棟 土坑　33 基	土師器（坏・椀・坩・高坏・鉢・壺・甕・小型甕・甑），須恵器（坏・蓋・短頸壷・横瓶・甕），土製品（支脚・紡錘車），石器・石製品（砥石・紡錘車・勾玉・石製模造品），金属製品（刀子・鉄鏃・鎌・手鎌・鉄斧・鑿・小型仿製鏡）	
		奈良・平安	竪穴建物跡　61 棟 掘立柱建物跡　14 棟 鍛冶工房跡　８棟 焼成遺構　８基 土坑　158 基 柱穴列　４条 ピット群　２か所	土師器（坏・椀・高台付坏・小皿・高台付小皿・甕・甑），須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・鉢・捏鉢・円面硯・把手付中空円面硯・短頸壷・長頸瓶・甕・甑），灰釉陶器（皿・瓶類），土製品（土玉・土錘・支脚・紡錘車・羽口・置き竈），石器・石製品（砥石・腰帯具），金属製品（刀子・鉄鏃・鎌・手鎌・鋤先・紡錘車・釘・閂・馬具・小札・火打金・金鉗・腰帯具・鉄滓）	
	屋敷跡	室町・江戸	方形竪穴遺構　１棟 地下式坑　１基 井戸跡　２基 墓坑　３基 土坑　141 基 溝跡　25 条 道路跡　３条 段切状遺構　１か所 柱穴列　2条	土師質土器（小皿・内耳鍋・擂鉢・火鉢・蓋ヵ），陶器（小坏・碗・皿・おろし皿・擂鉢・壺・花瓶・甕），磁器（碗・皿），土製品（鋳型・芥子面），石製品（五輪塔・宝篋印塔），瓦（平瓦），金属製品（煙管），銭貨（永楽通寶・寛永通宝）	

要　　約	古墳時代中期から平安時代を中心とした集落跡と，16 世紀後半以降の屋敷跡の一部を確認した。８世紀前葉から 10 世紀中葉の鍛冶工房跡が８基確認され，複数の炉や作業用土坑が重複し，多量に出土した鉄滓の成分分析から，継続的に精錬鍛冶と鍛錬鍛冶を操業していたことが明らかとなった。嶋名郷の中心的な集落である島名熊の山遺跡とは，集落の消長を共にする部分が多く，嶋名郷の発展を鉄生産で支えた集落と考えられる。

印　刷　仕　様

編　　集	ＯＳ	Microsoft Windows 10 Pro
	編集	Adobe InDesign CC 2020
	図版作成	Adobe Illustrator CC 2020
	写真調整	Adobe Photoshop CC 2020
	Scanning	EPSON DS－G20000
使用Font	OpenType	リュウミンPro L－KL，太ゴB101 Pro Bold
		中ゴシックBBB Pro Medium
写　　真	線数	カラー210線以上
印　　刷	印刷所へは，Adobe InDesign CC 2020でデータ入稿	

茨城県教育財団文化財調査報告第454集

つくば市

島 名 本 田 遺 跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXVII
下巻

令和３（2021）年　１月29日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587
ＨＰ　http：//www.ibaraki-maibun.org

印刷　株式会社あけぼの印刷社
〒310－0804　水戸市白梅１丁目２番11号
TEL　029－227－5505

付図　島名本田遺跡遺構全体図（茨城県教育財団文化財調査報告第454集）